

仮面ライダー電王LYRICAL

皆大好

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『幽霊列車騒動』から一週間後。

野上良太郎は持ち前の不運にも負けずに日々を過ごしていた。

そんな彼の前にデンライナーが現れる。そして、今回の行き先は別世界と告げられる。

本来繋がるはずがなかった二つの世界の時間が繋がる時、良太郎達の新たな物語が始まる。

この小説は私のサイト『終着駅みなひろターミナル』にも掲載しております。

目次

別世界 魔導師との出会い

- | | | |
|--------------|-----------------------|-----|
| 第一話 | 「新たな針路は別世界」 | 1 |
| 第二話 | 「俺、別世界でも参上!!」 | 12 |
| 第三話 | 「電王と魔導師と使い魔と」 | 24 |
| 第四話 | 「食べ歩きと一日の終わり」 | 38 |
| 第五話 | 「チームデンライナー 集結」 | 50 |
| 第六話 | 「電王メンバースクラブでD・M・C」 | 62 |
| ジュエルシード争奪戦勃発 | | |
| 第七話 | 「蹴るけどいいよね? 答えは聞いてない!」 | 74 |
| 第八話 | 「トラブルは油断と共に」 | 87 |
| 第九話 | 「反省は次のステップに」 | 104 |
| 第十話 | 「動き出す黒き魔導師」 | 115 |
| 第十一話 | 「一寸先はジュエルシード?」 | 126 |
| 第十二話 | 「ファーストコンタクトと決断」 | 139 |

海鳴温泉

- | | | |
|------|-------------------|-----|
| 第十三話 | 「探し場所は海鳴温泉」 | 152 |
| 第十四話 | 「イマジンと魔導師の息抜き」 | 163 |
| 第十五話 | 「激化のヒキガネ」 | 174 |
| 第十六話 | 「激化するスベテ」 | 186 |
| 第十七話 | 「子供を泣かす奴は俺が泣かす!!」 | 204 |

海鳴市激闘

- | | | |
|------|---------------------------|-----|
| 第十八話 | 「想イ絡マリ」 | 220 |
| 第十九話 | 「海鳴の夜は盛大に」 | 231 |
| 第二十話 | 「オマエ倒すよ? いいよね? 答えは聞いてない!」 | |

第四十話 「空間を抜けると、そこはターミナル」	564
第四十一話 「ラストライブ D・M・C」	583
最終話 「再会の駅名は未来」	602
後日談 「進む者達」	616

別世界 魔導師との出会い

第一話 「新たなる針路は別世界」

時の列車『デンライナー』

次の停車駅は、過去か未来かそれとも……
別世界の過去か？

*

「死郎率いる怨霊達が起こした『幽霊列車事件』が解決してから一週間が経過した。

モニュメント・バレーを思わせる荒野『時の空間』をデンライナーは速度を速めることも緩めることもなく、レールを自動的に敷設、撤去という工程を繰り返しながら走っていた。

デンライナー食堂車も変わり映えすることなく、相変わらずの面々がそれぞれ行動していた。

食堂車にいる面々にコーヒーを淹れているナオミ。

そのナオミが作ったチャーハンに自前の旗を立てて、落とさずに食べることに異常なまでに拘るデンライナーのオーナー。

そんなオーナーとイマジン討伐という目的のために契約を交わした少女——コハナはナオミの手伝いをしていた。

そして、絶対に人間には見えない四人がいた。

「よおーし、今度はこれだつとー！」

そう言いながら赤一色で桃太郎に登場する鬼の容姿を持ったイマジン——モモタロスが、青一色で海亀のイメージが具現化されたイマジン——ウラタロスが広げているトランプの一枚を抜き取る。

「ふふん取ったね。センパイ」

「あん？」

ウラタロスが笑みを浮かべている。それはしてやったり、というよ
うな笑みだ。

モモタロスは自分が抜き取ったトランプを見る。

「げっ」

ジョーカー、つまりババだった。

「やーい、モモタロス。ババ引いたー」

モモタロスがババを引いたのがわかると、紫色でドラゴンのような容姿をしているイマジン——リュウタロスがやし立てる。

「うるせえー！小僧！」

モモタロスは怒鳴るがいつものことなので誰も特に気にする様子もなく、ババ抜きは進行している。

「カメの字、早よ俺の引かんかい」

ウラタロスに自分の手札を引くように促しているのは黄金で、がっしりした体型をしたイマジン——キンタロスだ。

「あ、ゴメンね。キンちゃん」

キンタロスの手札から一枚抜き、自分の手札と同じ数字があったのでトランプが重なっている山に捨てる。

「クマちゃん、クマちゃん。早く、引いてよー」

リュウタロスはそう言って、キンタロスに手札を引くように急かす。

「おお、悪いな。リュウタ」

キンタロスは引いて、数字が揃ったので山に捨てる。

「おい、小僧。次はオメエが俺のを引く番だぜ」

モモタロスははずすいっと、手札をリュウタロスに向ける。

「ふふーん。絶対にババは引かないもんねーっ」と

そう言いながら、リュウタロスが引いたものかというと、

「げっ」

ババだった。

「モモタロスに引かされたー」

リュウタロスはそれが屈辱なのか喚く。

「どういう意味だ!?小僧」

それから先のババ抜きは誰かが勝ち抜けたとかはなく、ただババがあっちにいたり、こっちにいたりとした何の進展もない状態になっていた。

四人とも既に飽きがきたのか、最初ほどの覇気はなかった。

そんな中ウラタロスは、とある人物の事を思い出していた。

野上幸太郎

のがみこうたろう
。

野上良太郎

のがみりようたろう

の孫で仮面ライダーNEW電王に変身し、テディという青鬼をモデルにしたイマジンと契約を交わした青年だ。

「ねえ、センパイ」

ウラタロスは退屈しのぎの話題になると思い、切り出した。

「何だよ？カメ」

「幸太郎は良太郎の孫だって言ってたよね？」

それは確認するかの口調だ。そう言いながらも手札をモモタロスに突きつける。

「ああ、そう言ってたな」

一枚引く。数が揃ったので山に捨てる。

「それがどないかしたんか？カメの字」

ウラタロスはキンタロスの手札から一枚抜く。

「ん？ちよつと考えたんだけどさ。良太郎の奥さんになる人ってどんな人かなってさ」

「カミさんと幸太郎がどう関係あるんだよ？カメ」

すでに四人ともランプそっちのけになっていた。

「センパイやリユウタにわかりやすく言うけどさ。良太郎が結婚しない限り、幸太郎は絶対に生まれないよね？」

良太郎の子供が幸太郎の親なのだから当然といえば当然だ。

「ああ、そうだな」

「うん、そうだね」

ウラタロスは続ける。

「でも、良太郎の周りってあんまり女の子がいないからさ。どんな人と結婚するのかなって思っちゃってさ」

「確かにカメの字の言う通りかもしれないな」

「オメエもかよ。クマ」

「モモの字、おまえ良太郎が女と何かしとるの見た事あるか？」

キンタロスの指摘にモモタロスは思考をフルに回転させている。リユウタロスもモモタロスの真似をしていた。

「……そういや、ねえな」

「あ、でも僕、良太郎が女の人とご飯食べてるの見た事あるよ！」

リユウタロスが自信満々に言う。

「リユウタ。一応言っておくけどさ、愛理

あいら

さんはナシだよ」

「カメちゃんの意地悪ー！」

凶星だったため、リユウタロスはウラタロスに文句を言う。

ちなみに愛理とは、良太郎の姉の野上愛理のことだ。

「オツサンに訊きや早えじゃねえか」

モモタロスはオーナーに聞いたほうがいいのではないかという案を出した。

「確かにそうだね。センパイ冴えてるう」

「モモの字、ええアイデアやけどどないしたんや？」

「モモタロス。頭打った？」

三者三様で冴えたアイデアを出したモモタロスを誉めてるのか、貶しているのかわからないコメントを出す。

「……………おまえら」

ここでキレて三人を殴り飛ばそうかと考えていたが、それはいつでも出来るので今の最優先事項を実行することにした。

「なあ、オツサン。アンタ知ってんだろ？」

手札をテーブルに置いて、モモタロスは旗付きチャーハンを食べているオーナーに詰め寄る。

残りの三人はお開きだと感じたため、トランプを片付け始めていた。

「ちよつとモモ！もうちよつと訊き方つてもものがあるでしょ！」

ナオミの手伝いをしていたコハナが注意する。

「うるせえ！オマエだつて気になつてゐるんだろがコハナクソ女！げふっ」

コハナがモモタロスの腹に正拳を食らわした。
毎度のこととはいえ、痛いものは痛い。

モモタロスが腹を抱えて、痛みを堪えている頃にはオーナーはチャーハンを食べ終え、自前のステッキを持って、皆がいる場所から中央になる場所に立った。

「確かに、幸太郎君とテディ君を連れてきたのは私ですからねえ。その経緯で良太郎君が誰と結婚するのもかも知っていますよお」

その一言で皆がオーナーを囲むようにして集まった。

オーナーは少々、自分を囲んでいる皆の異常な視線に気圧されながらも続ける。

「ただし、この一件はかあなありいデリケートなものですからねえ。軽はずみに言つて、幸太郎君の存在を消滅させてしまう可能性もありますので、今、名前は言えないんですよ」

「なあんだよ。期待させやがつて」

モモタロスはガツカリする。

「まあまあセンパイ」

ウラタロスが宥める。

「まっ、知る楽しみが出来ただけ良しとしようや」

キンタロスは前向きに受け止めることにした。

「どんな人かなあ。お姉ちゃんみたいな人だったらいいなあ」

リュウタロスはスケッチブックを取り出して、想像を描き始めていた。

「オーナー、良太郎ちゃんの奥さんになる人ってどんな人なんですかあ？」

ナオミはコーヒーを淹れながらオーナーに別視点で尋ねる。

コハナも興味津々の表情をしていた。

「そうですねえ」

オーナーは『時間』に影響を受けない程度で説明できる言葉を探す。「強くもあり、優しくもあり、可愛さもある。そんな女性ですかねえ」

その答えにナオミとコハナが良太郎の妻となる人物により一層の興味が湧いた事は言うまでもないことだ。

*

「うん、今日はそんなに酷い目に遭わなかったかな」

道路の脇道を自転車で走っている青年が、本日の自分に起きたことを思い返して、そう評価した。

といっても、自転車で電柱にぶつかったり、車に撥ねられそうになったりと、常人からしたら十分に酷い目のだが、不運が当たり前のこの青年にとっては、この程度のこととは日常茶飯事なので、落ち込んだりするほどのものではないらしい。

野上良太郎

のがみりようたろう

それが彼の名前であり、仮面ライダー電王（以後：電王）としてデコンライナーにいる面々とともに『時間』に関する様々なトラブルを解決した実績がある青年だ。

当初は気弱で、何事に対してもあまり自信のなかった彼だったが、電王として戦っていく内に肉体的にも精神的にも成長し、今では気弱な部分は人を想う優しさとなり、どんな困難にも堂々と立ち向かい、いかなる真実からも目を逸らさない勇気を持つ青年となった。

ペダルをこぐ回数を増やしながら、姉の愛理が経営している『ミルクデイツパー』へと向かっていく。

やがて、看板に書かれている文字がはつきりと見え始めている距離に到達した頃だ。

良太郎にとっては懐かしいミュージックホーンが後方から聴こえ始めた。

後ろを見ると、空間が揺らぎ、そこからデコンライナーが走ってきた。常人がその光景を見たら驚いて腰抜かすが、良太郎にとってそれはごく当たり前の感覚に近いので、大して驚きはなかった。

（また、何か事件でもあったのかな）

と考える余裕があるくらいだ。

デンライナーは良太郎の前で停車し、ドアが開く。

開いたドアから出てきたのはナオミで、いつもの笑顔で良太郎を迎えた。

「良太郎ちゃん、お久しぶりでーす」

「どうも、ナオミさん」

良太郎は特に慌てることもなく、自転車を『ミルクデイツパー』入口前に置き、盗難防止の為に鍵とチェーンロックをしてからデンライナーに乗った。

デンライナー食堂車に入ると、イマジン四人とコハナの姿はなく、そこにはオーナー一人が一人前とは思えないほどの量のチャーハンを前にして待ち構えていた。

「お久しぶりですねえ。良太郎君」

「ど、どうも。お久しぶりです」

良太郎は軽く会釈する。

「ところで、良太郎君。お昼は済みましたかあ？」

「いえ、まだです」

「そうですか。ならば一緒にどうです？」

「えと、それって……」

オーナーの目の前にある巨大チャーハンと一緒に食べるということだ。

「申し訳ありませんが、私のワガママにすこおしだけお付き合ひ願いませんかあ」

「はあ」

良太郎はオーナーの対面に座る。

「はい、良太郎ちゃん」

ナオミは良太郎にスプーンを渡す。

「あ、ありがとう。ナオミさん」

良太郎はスプーンを受け取り、チャーハンの山に挿そうとした時だ。

「そおのまえにい、良太郎君。本題に入りましょう」

そう言うと、オーナーは懐に手をつつまみ、何かを取り出した。

その物体は青い石だった。

神秘的な輝きを持ち、宝石愛好家などなら誰もが手にしたがるほどの美しさを持つていた。

「それは、一体？」

良太郎が尋ねると、オーナーはテーブルに置く。

手にとって見てみるということだと判断した良太郎は、手にして見てみる。

正面から上からも下からも斜めからも見てみるが、ただの青い石にしか見えなかった。

「何なんですか？この石」

「わかりません。ただ、この石が我々の『時間』に大きな影響を及ぼすかもしれないとターミナルの駅長は言っていましたねえ」

「は、はあ」

オーナーは続ける。

「それに、この石は我々の世界には存在しないものなんですよ」「え？」

良太郎は手にしていた青い石をもう一度見る。

「どうも別の世界のものでしてねえ」

「じゃあ、どうやって僕たちの世界に来たんですか？」

良太郎の疑問にオーナーはというと、

「時の空間

（こゝ）

で拾ったものですから、恐らく別世界の時の空間から流れてきたものかもしれないねえ。本来、このようなものが時の空間

（こゝ）

にあるはずないんですけどねえ」

あるはずないものがあるということとはそれだけ異常な代物だといふことは良太郎にも理解できた。

「もしかして、僕達が今向かっている所って……」

「そうです。その石、仮の名として『ブルーストーン』としておきましよう。ブルーストーンがあった世界に向かっています」

オーナーの答えに良太郎は疑問が浮かんだ。

デンライナーは現在、過去、未来に運行可能ないわゆるタイムマシンだ。別世界、いわば並行世界に運行可能だとは思えないからだ。

「あの、オーナー」

良太郎がどのようにしてデンライナーで別世界に行こうとしているのか尋ねる。

「良太郎君の考えているとおりですよ。デンライナーでは別世界に行くことは不可能です」

良太郎はなら、どうやってともう一度尋ねる。

「まずは、我々の世界の十年前の『時間』に行きます。そして、我々の世界の時の空間と別世界の時の空間を繋いでいる『橋』を渡って別世界に行くというわけです。どんな世界にも『時間』は存在しますからねえ。『時間』が存在していれば時の空間も存在しますわけですからこのような荒技ができるわけです」

オーナーの説明に良太郎は概ね理解した。

「もしかして、モモタロス達は？」

「ええ、先程説明した方法でモモタロス君達は一足先に別世界に行ってもらいました。ブルーストーンの事を何かつかんだかもしれませんねえ」

「そうですか」

「では、良太郎君。いただきますでしょうか？」

オーナーは眼前のチャーハンにスプーンを挿した。

良太郎も「いただきます」と言ってから、チャーハンにスプーンを挿した。

*

夜。

満月が我が物顔で空に佇んでいる中を二人の少女が夜空を飛翔していた。

一人は金髪で黒いマントのようなものを羽織り、右手には鎌のような杖を持っている外見年齢は十歳にも満たない少女。

もうひとりは金髪少女よりは年上で自分のスタイルを強調してい

る衣装を纏った少女だ。趣味なのかどうかはわからないが、獣のような耳と尻尾がある。

「ジユエルシードの反応はこのあたりで感じたんだけど……」

金髪少女は目を閉じ、もう一度意識を集中し始める。

「それらしいものは見当たらないねえ」

獣耳少女は金髪少女の言葉を信じているらしく、肉眼でその『ジユエルシード』と金髪少女が呼称した物を探そうとしている。

「ダメ。誰かが回収したのかも……この辺りにはもう感じられない」

金髪少女は閉じていた瞼を開き、否定を表すように首を横に振ってからキョロキョロしている少女にそう告げた。

「……そうかい」

獣耳少女はがつくりと肩を下ろした。

「それで、フェイト。どうするんだい？今日はもう切り上げるかい？」

「……そうだね。帰ろうアルフ」

フェイトと呼ばれた金髪少女はアルフと呼んだ獣耳少女に本日の探索の打ち切りを告げた。

二人が住居であるマンションに帰ろうと進路を切り替えようとした時だ。

空間が揺らぎはじめ、穴のようなものができた。

そこから線路が敷設されていき、そして、列車が当然のように敷設された線路の上を走ってきた。

「!?」

「!?」

フェイトとアルフもその光景を見て、ポカンとするしかなかった。

だが、そのままポカンとしたままではいけないと先に感じ取ったのはフェイトだ。

列車の線路は確実に自分達がいる位置に向かっている。

このままでは自分達は列車に確実に撥ね飛ばされる。

隣でまだポカンとしているアルフの肩を掴んで揺らす。

「アルフ、アルフ。このままじゃ私達、あの列車に撥ねられちゃうよ」

「え、ああ、うん。ごめんよフェイト。いきなり非常識なもの見ちまつたからさ」

フェイトとアルフはこの世界に来る際にそれなりの知識をもってから来ている。それでも、空をまるで、陸地のように走っている列車というのは非常識なものなのだろう。

列車がフェイト達のいる位置に近付いた時だ。

線路がフェイト達を避けるようにして敷設されていき、列車は何事も問題なく走っていった。

「!!」

列車が自分達を避けて通り過ぎようとしていた瞬間、フェイトはジュエルシードの反応を感じた。

フェイトは列車に顔を向ける。

今から全速力で追いかければ十分に追いつける距離だった。

「フェイト?」

「アルフ、あの列車からジュエルシードの反応を感じたから追いかけるよ」

「あいよ」

二人の夜はまだ終わらない。

少女はまだ知らない。この行動が後々、自分の『時間』に多大な影響を及ぼすことになることを。

第二話 「俺、別世界でも参上!!」

満月が妖しく光を魅せている夜。

金髪で黒いマントを羽織り、右手に鎌のような杖を持った少女――
フェイト・テスタロッサは、獣耳で尻尾を生やしている少女――
アルフと共に、先程自分達を通り過ぎた非常識な列車を追いかけていた。

夜空を鳥のように飛んで追いかけている自分達もこの世界の人間達からしたら立派な非常識なのだが。

「ねえ、フェイト」

「どうしたの？アルフ」

アルフは腕を組んで、考えていた事を声に出すことにした。

「あたしらのこの世界の知識つてさ。やっぱり古いのかな？」

アルフがこのようなことを言うのは、間違いなく先程の非常識な列車を見たからだろうとフェイトは推測した。

実際、自分も少しだけアルフと同じように考えていたからだ。

「……アレは違うと思うよ。アルフ」

とフェイトは自分に言い聞かせるようにしてアルフに言った。

「!!、ジュエルシードの気配がさつきから同じ場所で留まってる？」

「どういうことだい？フェイト」

「多分だけど、あの列車が何処かで停車してるんだと思う」

フェイトは速度を緩めずに自らの仮説をアルフに話した。

「何処かって何処なんだい!?!フェイト」

フェイトは目を閉じて、ジュエルシードの気配を探り、右手の杖でその場所を指差す。

高層ビルだ。

「あのビルから全く動いていない。あそこにあるよ。急ごうアルフ！」

「あいよー」

二人は飛行速度を更に上げた。

二人がその高層ビルに到着した時には、その列車は現れた時と同じ

ように空間の揺らぎでできた穴に向かって、線路を敷設しながら直進していき、空間の揺らぎがなくなると同時にその姿を完全に消してしまった。

「あー!!くそっ!一足遅かったってわけかい!!」

アルフは心底悔しそうに空中であるにも関わらず、地団駄を踏んだ。

対してフェイトはというと、

「……………動いていない?」

フェイトは今の状況をもう一度整理する。

あの列車からジュエルシードの気配は確かにした。

列車は何処かに消えたというのに、高層ビルからは気配が続いたままだ。

それはつまり、ジュエルシードはあの列車の中に転がっていたり、車体にめり込んでいたりするのではなく、列車に乗っている誰かが持っているという事になる。

そして、列車は消えてもジュエルシードの気配は依然あの高層ビルからするという事は……………

高層ビルにはジュエルシードを持った誰かがいて、列車はその誰かを高層ビルで降ろすために停車していたことになる。

そこまでわかると、フェイトは次に自分が取るべき行動に出た。

ゆっくりとだが、高層ビルに近付いていく。

「あ、ちよつと待つとくれよ。フェイトー」

アルフもゆっくりとだが、フェイトの後を追う。

高層ビル屋上の全容が肉眼で捉えることができる距離まで来た。

「……………人?」

「人だねえ」

屋上には人が一人いた。

「……………あの人からジュエルシードの気配がする」

「ホントかい?」

アルフは確認するかのように尋ね、フェイトは首を縦に振る。

「アルフ」

「あいよー」

フェイトは杖——バルディツシユを握る力を強め、アルフは指をパキポキ鳴らしながら屋上にいる人物からジュエルシードを奪うタイミングを窺うことにした。

(ごめんなさい)

という謝罪の気持ちを秘めて。

*

「それでは、良太郎君。宜しくお願いしますよお」

「良太郎ちゃん。頑張ってくださいー！」

とオーナーとナオミに見送られてから、野上良太郎はデンライナーから降りた。

降りた場所は高層ビルの屋上で、デンライナーは良太郎が降りるとドアが閉まり、線路を敷設しながら揺らいだ空間に直進していった。

デンライナーを見送ると、良太郎はズボンと上着のポケットの中に入っている二つのものを取り出した。

ひとつは財布で、この世界でのお金が入っている。何をするにしても先立つものは必要だという、オーナーの粹なおはからいだ。ちなみに財布の中には百万円入っていたりする。

もうひとつは、今回この世界のこの時間に来る原因となった青い石——ブルーストーンだ。

それ以外に持ってきている物といえば赤色の携帯電話——ケータロスと、黒色のパス——ライダーパス（以後：パス）だ。どちらもこれからの行動、というよりも時の運行などでは必ず必要になる必需品だ。

ブルーストーンを上着の胸ポケットに、財布をズボンのポケットに入れてから良太郎は今からのことを考えていた。

周囲をまず見回す。

満月の輝く夜で、夜なのに空には曇り空の時と違う明るさがある。ビルの下を恐る恐る見る。高所恐怖症ではないが、夜ということも相成って恐怖心がひよつこりと顔を出しているので、そんな動きしかとれなかった。

夜といっても殆ど深夜といつてもいいくらいの時間帯なので、自動車などは全く走っていないかった。

「とにかく、モモタロス達と合流しなくっちゃ」

まずは、先にこの世界に来ているモモタロス達と合流することを考えた。先に来ている以上、自分よりこの世界やブルーストーンの事を知っているかもしれないという考えだ。

ケータロスを取り出し、モモタロス達に連絡しようとした時だ。

ケータロスが専用の着メロを鳴らし出した。

良太郎は通話ボタンを押して、耳にあてる。

「もしもし」

とお決まりのことを言うと、

『良太郎。俺だ俺！』

と聞き覚えのある声だった。

「モモタロス」

良太郎は声の主の名を口にするこゝろで、心の中で安心感が生まれた。その証拠に笑みを浮かべている。

『オマエもこっちに着いたのか？』

「うん、さつきね。それよりモモタロス達は今何処にいるの？」

『ん、ああ。俺達はな。翠屋っていう喫茶店にいるんだ。っておい、クマ！そのケーキは俺のだろうが!! って小僧！テメエも人の分取ろうとすんじやねえ!!』

それからすぐにモモタロスの声がしなくなり、通話が切れた。

キンタロスとリュウタロスから自分の取り分となるケーキを死守するために通話を切ったのか、それともコハナに「うるさい!!」と言われて腹を殴られて痛みのあまりに声が出なくなり、通話が切れたのだろうかと良太郎は想像し、失笑した。

それからまた数秒後にケータロスが鳴った。

「モモタロス？」

と先に声を発した良太郎。

相手はというと、

『あー、悪い。俺だ』

モモタロスだった。

「ハナさんに殴られた？」

『……あのコハナクソ女め』

とコハナに対して、恨み言のような声を漏らした。

「……やっぱり殴られたんだ」

『うるせえ。そうだ良太郎。オマエに言っておかなきゃならねえことがあるんだ』

「言っておかなきゃならないこと？」

苦笑を浮かべていた良太郎の表情が真剣なものになる。

『ああ、オーナーのオツサンから青い石ころ貰ってねえか？』

良太郎は上着の胸ポケットからブルーストーンを取り出す。

「うん。貰ってるよ」

『その本当の名はジュエルシードだよ。どうやら持ち主の願いを叶えてくれる石ころらしいぜ』

良太郎の頭の中ではブルーストーンという名称は消去され、ジュエルシードという名称に書き換えられた。

「誰から聞いたの？」

『ユーノとかいうしゃべる変なネズミじゃなくてイタチでもなくて、ええと確かフェレットにだ』

「この世界じゃ動物が言葉を話すの？」

『いんや、コイツだけじゃねえのか。小僧なんて飼い主のなのとは一緒に猫かわいがりだぜ』

「そうなんだ」

良太郎はリュウタロスがそのフェレットを可愛がっている姿を想像して真剣な表情からまた笑みを浮かべる。

『んじや、翠屋で会おうぜ良太郎。まだ、話すことはあるしよ』

「うん、わかった。それじゃねモモタロス」

通話が切れて、良太郎はケータロス折り畳んでズボンのポケットに入れた。

「さてと、とにかくここから動こう。何か嫌な予感がしてきたし……」

野上良太郎には不運の他に、もうひとつ天から与えられし才能がある。

それは、悪い事限定の第六感で、今までこの第六感がはずれたことは一度もない。

そして、この予感を感じる時の殆どがとんでもなく厄介なことの前触れだったりする。

一番代表的なものといえば、モモタロスと初めて出会ったときだろう。

あの時もこんな予感がしたことは今でも憶えている。

確かに厄介事に巻き込まれた事は事実だが、それだけではなかった。

それ以上に得たものもあるからだ。

苦楽を共にできる最高の仲間と、自分の周囲に起こった出来事の『真実』だ。

この二つを得た時はこの第六感も悪くないな、と考えたこともあった。

それからは「嫌な予感」と口には出しても、否定的に考えることはなくなった。

訪れたなら訪れたで、それを受け止めて場合によっては徹底的に戦う覚悟ができたからだろう。

もちろん、今から何か厄介なことが起きても戦う覚悟は出来ている。

目を閉じ、深呼吸をしてから非常階段に向かう。

今日はどこかの安ホテルで一泊過ごし、明日の朝にモモタロス達がいる翠屋に向かおうと良太郎は考えていた。

距離にして十メートル程の距離になった時、満月の空から良太郎の前に何かが降りてきた。

*

フェイトとアルフはジュエルシード所持者である青年の前に立ち塞がった。

フェイトは青年を一瞥する。

身長は自分はもちろんのことアルフよりも高く、顔立ちも端正な部類に入り、全体的には優しそうな雰囲気がある人だと感じた。

(この人にはいろいろと聞きたいことがあるけど……)

フェイトは青年を前にして自らの知的好奇心を満たしたかったが、優先すべきことを忘れてはいない。

バルディッシュユから黄金色をした鎌のような刃を出現させて、バルディッシュユサイズモードにする。

隣にいるアルフも拳を作って構えを取る。

青年は状況を呑みこめているような呑みこめていないような表情をしていた。

はつきりいえば表情から何を考えているかを読み取ることは出来ない。

(ごめんなさい)

心の中で二度目の謝罪する。

自分達がこれから行うことは完全に強盗だ。

目の前の青年を気絶させてジュエルシードを奪うのだから、それ以外に言いようはない。

(ごめんなさい)

フェイトは小さな声だが、青年に謝罪の言葉を告げるとそのままバルディッシュユを構え、青年に向かって駆け出した。

(ごめんなさい)

目の前にいる金髪少女がそう小声で言ったような気がした。

「え？」

正確に聞き取れたわけではないので、良太郎は聞き返そうとした。

だが、金髪少女から来たものは台詞ではなく黄金色をした鎌による攻撃だった。

良太郎は咄嗟の判断で後方にリズムカルなステップで下がる。

コンクリートの地面は穿たれていて、穴が開いていた。

(避けてなかったら僕の頭、こんなになってたんだ)

穴を見て、良太郎は一瞬青ざめるがすぐに気持ちを切り替える。

金髪少女は振り下ろした鎌をもう一度構え直す。

そして、また良太郎に狙いをつけて駆け出す。
首元を狙ってきたの攻撃は瞬時にしゃがんで避ける。

「ちよ、ちよつとおー！」

そのままだと確実に上段からは格好の的なので、すぐさま態勢を整えて金髪少女に背を向けて間合いを開けることにした。

全力で走りながら少女を見る。

この世界に来て早々、何故自分が襲われるのか見当がつかなかった。

だが、金髪少女は自分を狙っている。

良太郎は自分が誰かに恨みを買っているのではないかと考えたが、すぐに取り消すことにした。

理由としてはまずこの世界で自分は恨みを買うほど何もしていないからだ。来てまだ一時間も経っていない上にこの世界の住人とトラブルを起こしてもいないのだから当然といえば当然だ。

では、なぜこの金髪少女は自分に襲い掛かってくるのだろうか。怨恨ではなく物取りだと仮説を立てる。

物取りを前提に考えると、彼女がこのような行動を起こすほど欲しがっている物を自分は知らず知らずの内に持っているのではと考えることができる。

良太郎は現在、所持している品を思い浮かべる。

財布（オーナーから貰ったもの）

パス。

ケータロス。

そして、ジュエルシードの四つだ。

その中で、現在自分に攻撃を仕掛けてくる金髪少女と先程から一向に戦闘に参加しようとしないうちもう一人の獣耳少女が欲しがるように物を想像する。

パスとケータロスは真つ先に違う。

この二つは使う場面が限られているため、強盗をしてまで手に入れるほどの価値はない。

財布も、違うだろう。

これは過去に何度も経験しているから間違いない。
で恐喝をする人間は皆、共通して下卑た笑みを浮かべて無駄に凄むものだからだ。

金髪少女はその二つを使わずに、自分に襲い掛かってきたから違うと断言できた。

三つが違うとなれば、残り一つこそが彼女が強盗まがい《こう》までして欲しがるものだ。

良太郎はジェルシードが入っている上着の胸ポケットを押さえる。
そして金髪少女を見ようとするが、正面にはいなかった。

「それを渡してください」

背後から声がしたので、振り向くと宙を浮いている金髪少女がいた。

彼女の瞳と自分の瞳が合った。

綺麗な瞳だと思った。だが、同時に何か影があるようにも思えた。
押さえていた胸ポケットから手を離し、ゆっくりと下がる。

だが、後ろには獣耳少女が腕を組んでいた。

(完全に挟み撃ち、だよね……)

前門の金髪少女に後門の獣耳少女だ。

「あのさあ、アンタ」

後ろの獣耳少女が声をかけてきた。

「渡してくんないかなあ。痛い思いしたくないでしょ？」

獣耳少女は愛想を振りまいて脅してきた。

良太郎の背中に悪寒が走った。

ジュエルシードを渡せば、この場は万事解決になるだろう。

しかし、それでいい筈がない。自分はまだ、この石の事を何一つ知らないのだ。

今助かりたいために渡してしまえば必ず後悔する。

「悪いけど、渡せない」

良太郎は、静かに、だが意思を込めて金髪少女と獣耳少女に言った。

「……アルフ」

金髪少女は獣耳少女に戦闘に参加するようにアイコンタクトをす

る。

「あいよ。フェイト」

アルフと呼ばれた獣耳少女はフェイトと呼んだ金髪少女のアイコンタクトを受けて頷いた。

良太郎は二人を交互に一瞥する。

二人の動くそぶりのようなものが見えない。

だが、二人の意図のようなものは何となくわかる。

自分が逃げの素振りを見せたら確実に挟み撃ちで仕掛けてくるだろう。

完全に八方塞だと良太郎が感じた時だ。

ケータロスが着メロを鳴らし出した。

フェイトとアルフは静かな中でいきなり出したメロディーに緊張の糸が切れかけた。

二人の意識が自分に向いていないとわかると良太郎はケータロスを取り出して開き、コールボタンを押す。

『よお、良太郎。俺だ俺』

モモタロスだった。

「どうしたの？モモタロス。今、僕ちよつと立て込んでるんだけど……」

『いやあ、翠屋の場所教えてなかったからよ。教えとこうと思ったんだけど、今オマエ何処にいるんだよ？』

「さつきと同じ所なんだけど……」

良太郎は苦笑いを浮かべて答える。

『はあっ!?オマエ何やってんだよ!?』

「だからちよつと立て込んでるんだって、さつき言ったじゃん」

モモタロスが呆れている事は声色でわかった。

『んでよ、その立て込んでる事ってのはおまえ一人で何とかなんのかわかんないよ……』

モモタロスは電話越したが、自分の安否を気遣ってくれた。

恐らく、自分が戦闘に巻き込まれていることもおおよそ予想しているのかもしれない。

「できるなら、一人で何とかしたいけどね。でも……」
『でも、何だよ?』

「戦うしかないと思う」

『……俺はいつでも準備いいぜ。良太郎』

そう言つて、通話が切れた。

良太郎は意識を集中する。

自らの内に存在するエネルギーの一つである『チャクラ』を利用して、あるものを実体化させる。

良太郎の腰に出現したのは銀色のベルト——デンオウベルトだ。完全に巻けている状態ではないのできちんと巻く。カチリという音がした。

ポケットからパスを取り出した。

もう一度、フェイトとアルフを見る。

二人共、緊張の糸をもう一度張りなおしたようだ。

「モモタロス、行くよ」

良太郎は真剣な表情で、ここにはいないイメージに同意を求める。

「おうー」

と威勢の良い声が聞こえた気がした。

デンオウベルトのターミナルバツクルのそばにある四色のフォームスイッチの赤色を押す。

専用のミュージックホーンが流れ出す。

「変身!!」

叫ぶと同時に、良太郎はパスをデンオウベルトのターミナルバツクルにセタツチ（セット&タッチの略）した。

「ソードフォーム」とデンオウベルトが音声を発すると同時に姿が変わり、黒を基本とした電王プラットフォーム（以後・プラット電王）に変身する。

その直後に、プラット電王の上半身の周りにオーラアーマーというイメージのオーラやフリーエネルギーで構成された鎧が宙に現れ、一周した後それぞれの部位に装着される。

最後に果物の桃をモデルとした仮面——電仮面が眼前に走り、仮

面の形になっていく。

自らを右親指を立てて指し、そして左手を前に右手を後ろにして歌舞伎役者のような大仰なポーズを取ってから電王ソードフォーム（以後：ソード電王）は荒々しく自信を持って、吼える。

「俺、別世界でも参上!!」
と。

第三話 「電王と魔導師と使い魔と」

夏が近づく夜、風は殆ど吹かない、それなのにフェイト・テスタロツサは全身で強風を感じた。

それは相棒のアルフも一緒だろう。

その証拠にアルフの表情は先程の余裕を持ったものとは違い、険しいものになっている。

自分達を感じたそれは正確には風ではない。

これから自分が戦うことになる謎の人物が放ったオーラのような物だとフェイトは分析した。

思わず片目を閉じ、身構える——防御の姿勢を取ってしまう程の凄まじさだ。

(この人、強い！)

フェイトは本能でそれを感じた。

謎の人物を自らが持つている情報で分析するために凝視する。

まず、全体から魔力を感じないので、魔導師ではないと判断できる。バリアジャケットのような衣装は恐らく、攻撃力や防御力といった戦闘で必要とされる能力を引き上げるものだろうと考えることが可能だ。

だが、ひとつだけわからないことがある。

変身前と変身後の人格だ。

少なくとも変身前の青年の印象は派手なことを好まないと受け取れた。

だが、変身した後は派手好きで目立ちたがりという印象が感じられた。

変身しただけで人格が変わる？

フェイトが今まで培った知識にはなかった事象だ。

相手の分析を終え、自分の今に至るまでの行動を省みる。

銀色のベルトが現れるまではよかった。

だが、「変身!!」と叫ぶ前に攻撃する機会があったので、しておけば

よかったかもと今更になって思った。

やろうと思えば出来た。目の前にいる人物は自分とは何の関わりのない人間だから。

この人とはここでジュエルシードを奪ってしまえばそれだけで終わるのだから。

やろうと思えば出来たはずなのに！

フェイトは自らの行いを省みてから毒づいた。

しかし、すぐに気持ちを切り替える。

「貴方は、誰ですか？」

フェイトは目付きを鋭くし、バルディツシユを構えてから歌舞伎のようなポーズを取っている謎の人物に尋ねた。

謎の人物はポーズを崩す。

「あん？オマエ、俺のこと知らねえのかよ!?!」

『知らないから聞いてるんだよ。きつと』

謎の人物の中から先程の青年の声がした。

フェイトとアルフは内心驚いたが、ここで相手のペースに巻き込まれるわけにはいかないので、表情を変えないように努める。

「ああ、そっか。こっちの世界じゃこれが初めてだもんな」

(初めて?こっちの世界?)

謎の人物はそれをごく当たり前のようになっているが、フェイトには聞きなれないものだ。

(もしかしてこの人、時空管理局の人?)

フェイトがそんな推理を展開すると、アルフには警戒を緩めないように念話で指示する。

アルフは首を縦に振る。

謎の人物はフェイトとアルフを交互に見てから高らかに、叫んだ。

「いいかオマエら?一度しか言わねえからよおーく聞いとけよ。俺は電王だ!よおーく憶えとけ!」

謎の人物——電王は右腕を軽く回してから、両腰に携行している黒い物体に手を触れ出した。

(この人が管理局の人だろうか関係ない。わたしはいや、わたし達は

ジュエルシールドを手に入れるだけ……」

フェイトとアルフは電王が何をするかよりも、自分が何をすべきかということに意識を切り換えた。

ソード電王が自らを名乗り終わると、いつものクセともいべきの右腕を軽く振り回す仕種をした。

その後、両腰に携行している黒い物体に手をつけ始める。

黒い物体——オーラアーマーの一種でデンメタルという金属で構成された電王専用の武器、デンガツシヤーだ。

左腰に携行しているデンガツシヤーのパーツをホルスターから抜き取る。

抜き取ると同時に、デンガツシヤーはガチャンコンともカシャンコンとも聞こえるような音を鳴らし出す。

抜き取った二つを横連結させ、前方に放り投げた。

右腰に携行しているデンガツシヤーホルスターから抜き取って左右に持つ。

後は、先程投げたデンガツシヤーに上下に連結させれば完成となる。

だが、それを相手が見過ごすわけがない。

アルフは間合いをじりじりと詰め寄ってくる。

今の状態を隙だらけと見越し、こちらが妙な行動を取れば仕掛けるための準備といったところだろう。

フェイトは先程の位置から動いていない。しかし、鋭くこちらを見据えている。

隙あらば狙う、といった目論見かもしれない。

相手の出方を大まかに理解したに在る良太郎は深層意識の中から相棒に言おうとする。

『モモタロス』

「わーってるー！」

モモタロスは相棒が何を言おうとしているのかは理解しているのですがすぐに返事で返す。

ソード電王はもう一度フェイトとアルフを一瞥する。

戦う順番を決めてから、先程放り投げたデンガツシャーのパーツまで、残りのパーツを握った右手を前に突き出すというような体勢で駆け出す。

釣られるようにアルフも追いかけるが、その距離は縮まらず、開くだけだった。

宙に浮いているデンガツシャーと右手に握っているデンガツシャーのパーツは距離にして数センチ離れている所で、磁石のように吸い寄せられるように連結される。

そして、左手に持つている残りのパーツを上部に縦連結させることで完了した。

デンガツシャー先端からオーラで構成された剣——オーラソードが出現すると同時に、デンガツシャーそのものが今までの『玩具』ではなく、『武器』としての大きさになっていく。

そして、振り向いてからデンガツシャーソードモードを左手に持ち換えてから指し棒のように向けて標的二人に宣言した。

「さーて、これも別世界こっちに来てから初めてだから言っておくぜ。いいか？俺に前振りはねえ。最初から最後までクライマックスだからな！！」

言い終わると同時にデンガツシャーソードモードを左手から右手に持ち換えてから構えて、自分を追いかけていたアルフに向かって駆け出した。

「行くぜー！行くぜー！行くぜえー！」

勢いよく袈裟斬りを仕掛ける。

「甘いよっ!!」

アルフは咄嗟に左に避ける。

「オメエがな」

しかし、ソード電王はそれを予期していたのかすぐさまアルフの位置を確認すると、左に体重をかけて左肘で腹部を狙った。

「な、何だ………て」

運良く鳩尾に当たったらしく、アルフは完全に動きを停止した。

その場で前のめりになって倒れていく。

生身の人間の肘打ちなら多分倒れないだろう。

しかし、プラット電王に変身した時点で身体能力は生身の人間よりも高くなっている。

更に、モモタロスが憑依したソード電王なら尚、向上している。いくら彼女が強くても、数分は痛みが全身を支配しているだろう。

ソード電王は残りの標的を見据える。

「残りはオメエ一人だけ。コイツは死んでねえしとつとと帰んな」

ソード電王はアルフを指差しながら、フェイトに警告する。

電王が相手の命を奪うのは原則として、二種類しかない。

イマジンと『時間』を悪用しようとしている仮面ライダーだけだ。

言ってしまうえば、どんなに悪党でも電王は人間を殺害したりしないのだ。

今、敵対しているのはイマジンでも仮面ライダーでもない。

人間だ。どんなに強かろうと人間なら殺そうとは思っていない。

「…………それは、出来ません」

フェイトはバルディッシュを構えてソード電王に向かっていく。

足を使って間合いを詰めるのではなく、弾丸が射出されるような勢いで。

「つたく、しょうがねえな」

ソード電王は、やれやれという仕種を取ってからバルディッシュの鎌をデンガツシャーのオーラソードで受け止める。

「へっ。ガキのクセに結構やるじゃねえか。でもなー！」

いつもならイマジンの腹に蹴りを入れて間合いを強引に作ってから、自分から間合いを詰めて乱撃を繰り返すという手口を使うことが出来ない。

バルディッシュの胴に蹴りを入れて、フェイトごと後方に下げる。

「ぐっ」

一撃が重いのかフェイトはそんな声をあげながら後方に吹っ飛んだ。

しかし、倒れることなく、バック宙をして態勢を整えた。

「こいつ……………」

ソード電王はフェイトの後方への吹っ飛び方が気に入らなかった。今の蹴りであそこまで飛ぶ筈がないことは蹴った本人がわかっている。

フェイトはこちらの蹴りにあわせて自ら飛んだのだということ。ダメージ軽減というより恐らく自分の攻撃の一手ターンのためだろう。フェイトはバルディッツシュを構えている。

しかし、その構えは今まで見てきた構えとは異なっていた。全体から醸し出す雰囲気から何か奥ひっそりの手のように思えた。

「バルディッツシュ！」

『アークセイバー』

バルディッツシュがそう電子音で言い放つと、フェイトはバルディッツシュをフルスイングした。

三日月形の刃がくるくると回転しながらもソード電王を狙って、向かっていく。

「!!」

そして、直撃した。

ソード電王がいた場所を中心に爆煙が起こる。

「やった?」

「いんや、まだ倒せてねえよ」

爆煙を掻き分けながらソード電王が出てきた。

しかも無傷で。

「そ、そんな。アークセイバー今は確実に貴方を捕らえたはず……」

「ああ、確かに。でも、俺はこの通りピンピンしてるぜ」

確かにアークセイバーは直撃コースでソード電王をとらえていた。しかし、直撃寸前でデンガツシャーソードモードを上段に構えて、アークセイバーを真つ二つに両断したのだ。

あの爆煙はいわば直撃によって起こった爆発ではなく、アークセイバーを両断した際に生じたものだ。

「そっちが取っておき取ひっさつっておきなら、こっちも取ひっさつっておきだぜー!」

ソード電王はデンガツシャーを左手に持ち換えており、右手には変身の際に使用したパスが握られていた。

パスをデンオウベルトのターミナルバツクルにセタッチする。

『フルチャージ』

と電子音声が響き、ターミナルバツクルからデンガツシヤーにフリーエネルギーが伝導されていく。

フリーエネルギーはやがてオーラソードにまで伝わり、後はソード電王の使用意思を待っただけの状態となった。

「見せてやるぜ。俺の必殺技。パート2!!」

そう言うと、オーラソードからデンガツシヤーから離れる。

離れたオーラソードはデンガツシヤーでコントロールできる。

まず右斜めからフェイトに向かって飛んでいく。

フェイトに当たるスレスレの距離だ。

次にデンガツシヤーを左に薙ぐ。

オーラソードもそれに従って地面をえぐりながら移動していく。

これもまたスレスレの距離だ。

最後にデンガツシヤーを上段から下段に振り下ろす。地面は穿たれた。

もちろん、これもスレスレだ。

一通り終わると、オーラソードはデンガツシヤーに吸い寄せられるように戻っていく。

「……………次は外さねえぞ」

ソード電王が凄む。

フェイトはそれでもバルディッシュをサイズモードにして戦うつもりだ。

先程と同じように足で駆けるのではなく、空を翔けるようにして間合いを詰めてくる。

「この、バカ野郎があ!!」

フェイトとの距離がゼロになった時にソード電王は左手刀で軽くフェイトに喰らわせ、意識を奪った。

*

二人の少女との戦闘はソード電王が勝利し、姿は電王から野上良太郎に戻っていた。

先程の戦闘の疲労感からか、動こうという気概がもてなかった。それに、気を失っている二人の少女をこのままにしておくわけにはいかなないので、とりあえず目が覚めるまでここに留まることにしたのだ。

「この人達もこれを狙ってるんだ……」

上着の胸ポケットからジュエルシードを取り出す。

綺麗な石という印象しかもてない。

これが自分達の『時間』そして世界を滅ぼすとはとても思えなかった。

ジュエルシードを握りしめて胸ポケットにしまいこむ。

ケータロスが鳴った。

音声ボリユームを下げておけばよかったと、後悔しながらも良太郎はすぐさまコールボタンを押す。

『もしもし、良太郎。僕だよ』

一人称が『僕』と言った時点で、相手がモモタロスとキンタロスではない事だけはわかった。

『僕』を使ってどこかインテリじみた声の持ち主は一人しかいなかった。

「ウラタロス？」

『正解』

「どうしたの？かけてくるなんて珍しいね」

『ん？いやさっきの戦闘の後はどうなってるのか気になってね』

「僕を襲った二人はまだ気を失ったままだよ」

『良太郎、センパイってもしかして女の子相手に手加減ナシで戦ったの？』

良太郎は首を横に振りながら答える。

「ううん、モモタロスはちゃんと手加減してたよ。それでも相手は闘い慣れしてたけどね」

気を失っている二人を凝視する。

『ふうん、闘い慣れしている二人の女の子か。とにかくさ。早く翠屋においでよ。ここは綺麗所がたくさんいるし、ね。って痛いよセンパ

イ。これナンパの企みじゃないから!!』

ウラタロスがモモタロスに頭を叩かれたようだ。

『うるせえ!!オマエ良太郎の身体借りて、なのはの姉ちゃん口説くつもりなんだろうが!!』

『あーもう、うるさいなあ。眠れんやろが!』

『みんな!うるさあーい!』

モモタロスが怒鳴ったせいで眠っていたはずのキンタロスとリュウタロスが起きて抗議していた。

後は、恒例の喧嘩になるなど良太郎はケータロス越しに予測していた。

『あんだ達!!黙りなさい!!』

コハナの声がし、その後四人の声はしなくなった。

恐らく全員を鎮めたのだろう。

通話は切れてしまった。

その直後、ケータロスがまた鳴った。

またもボリウム下げとけばよかったと後悔しながらもコールボタンを押す。

『あ、良太郎。ハナだけど』

「ハナさん」

コハナだった。

『あのバカ達の事はわたしに任せていいから安心して。それよりも明日翠屋に来るんでしょ?』

「うん。今日はもう遅いし、今から行っても迷惑になるからね」

『そ。わかった。それじゃ明日ね良太郎。おやすみ』

「おやすみ。ハナさん」

随分とまともな会話をしたな、と思いながら通話が切れた。

ケータロスをポケットの中に納める。

「ん、ううん」

という声があったので向いてみると金髪少女が起き上がっていた。

良太郎はよろよろとしながらも起き上がり、こちらに向かってこようとする金髪少女——フェイトのそばまで歩み寄る。

そして、その場で崩れ落ちようとするフェイトを抱きとめた。

「ごめんね。その、怪我はない?」

良太郎はフェイトの容態を気にする。

「だ、大丈夫です」

「そう。よかった」

良太郎が安堵の息を漏らし、笑みを浮かべる。

抱きとめていたフェイトを地面に座らせた。

良太郎もフェイトの横に座った。正直、立ちっぱなしは疲れるからだ。

フェイトは座っているとはいえ、良太郎とは身長差があるため見上げるかたちで見つめる。

「……あの、あなたは誰?」

「僕は良太郎。野上良太郎。君は?」

フェイトはどうしようか悩んだ。

名乗るべきかだんまりを決め込むべきかを。

しかし、相手に名乗るように促したのに自分は名乗らないというのはあまりに礼儀に欠ける。

「フェイト。フェイト・テストロッサ」

名乗ることにした。

フェイトは相棒であるアルフが気にかかった。

前のめりになって倒れていた。

「大丈夫。すぐに目を覚ますと思うよ」

「よかった」

フェイトは良太郎の一言に安堵の息を漏らした。

もう一度良太郎を見る。

先程、戦闘で見せた荒々しさのようなものがあるかない。

もしかしたら交渉できるかもしれない。

荒々しい方が彼の素の性格ならば無理だが、こちらが素ならば可能だ。

「あ、あの……」

「どうしたの?」

「そ、その……」

良太郎はフェイトが何か言おうとしているのはわかるが、自分から急かすようなことを言うつもりはない。

「ジュエルシードをわたしに、その……」

フェイトは最後の言葉を今ある勇気を振り絞って言う。

「貴方の持っているジュエルシードをわたしに下さい！」

良太郎は上着に入っているジュエルシードを取り出す。

「これを？」

フェイトは良太郎の手の平に乗っているジュエルシードを見ている。

いや、魅せられているというような表情だ。

「聞いていいかな？君はこのジュエルシードをどのくらい知っているの？」

「え？」

「僕はこの石が僕がいる『時間』や世界に大きな影響を及ぼすものだったことと、持ち主の願いが叶う石だということしか知らないんだ」

「……ごめんなさい。わたしも持ち主の願いが叶う石としか教えられていない。それと、わたし達には必要なものだという事しか……」

フェイトからジュエルシードに関する情報はこれ以上、引き出すことは出来ないと言った良太郎は判断した。

「そうなんだ」

良太郎はジュエルシードをしまわれない。それどころかそのままフェイトに向けたままだ。

フェイトはそんな良太郎の態度に怪訝な表情を浮かべる。

「あの、もしかして……」

「必要なんでしょう？僕がこの世界にジュエルシードを持つてきた時点で、僕達の『時間』と世界はこの石の脅威に怯えることはなくなっているからね。僕が持つててももう意味はないんだ」

確かにそうだ。良太郎が今、この石を持つていても何の意味もない。

「でも、わたしは……」

「強盗まがいまでして欲しかったものなんですよ？」

良太郎は先程のことを責める気はない。むしろ、そこまでしてジュエルシードを手に入れようとしているフェイトが不憫に思えた。

フェイトは良太郎の手の平に乗っているジュエルシードから目を離し、良太郎を見る。

「あの、本当にいいの？」

「ひとつだけ条件があるけどいい？」

良太郎は人さし指を立ててフェイトに言う。

「な、何?！」

フェイトの瞳の色に恐れの色が見えた。

(ああ、怯えちゃってる。当然といえば当然、かな)

フェイトを不安がらせないためにも良太郎は条件を告げた。

「この石を悪用しないこと。守れる？」

「え?それだけ?」

「うん」

「本当に?その……他に要求したりしないの？」

「しないよ」

「本当に?」

「うん。それで、守れる?守れるなら渡すよ」

良太郎はフェイトに念を押すようにもう一度尋ねる。

「守る!守るよ!絶対に守る!」

フェイトの瞳には口約束では絶対に出来ない決意の焰のようなものが灯っていた。

「はい」

良太郎はフェイトにジュエルシードを渡した。

「えと、その……ありがとう」

フェイトは立ち上がり、良太郎に頭を下げると、バルディッシュの水晶部分にジュエルシードを取り込んだ。

「う、うーん。フェイトお、無事かい?」

先程まで気を失っていたアルフが覚醒し、腹部を押さえながらも

フェイトと良太郎がいる所まで歩み寄る。

フェイトはアルフの身体を支えるために、彼女のそばまで駆け寄る。

「アルフ、大丈夫?」

「う、うん。まだちよつと痛いけど大丈夫さ。それよりフェイト、アイツからジュエルシードを奪えたのかい?」

フェイトは首を横に振る。

「ううん」

それが合図となったのかアルフはこちらに歩み寄ろうとしている良太郎を睨みつける。

「ア、アルフ。ダメだよ。奪うことは出来なかったけど、貰うことは出来たんだから」

「へ?フェイト、もう一回言つて」

「だから、奪うことは出来なかったけど貰うことは出来たんだ」

「それって事は何かい?あの男はフェイトにジュエルシードをあげたつてのかい?」

「うん」

アルフは良太郎のそばまで歩み寄った。

「ねえ、アンタ」

「な、なに?」

アルフに凄まじくされているのか弱気の虫が少し出ている良太郎。

「あたしらとしてはこの上なく嬉しいんだけどさ。何か企んでるんだつたら今ここで、ガブリつといくよ?」

「何も企んでなんかいないよ。ただ、僕が持つてるよりも……」
フェイトをちらりと見る。

「フェイトちゃんを持つてる方がいいと思つたから、かな」

それが良太郎の嘘偽りないことだつた。

「アンタ、イイ奴!!」

とアルフは良太郎を称賛した。

この人なりの誉め方なのかな、と良太郎は受け止めた。
「あつ」

何もかもが無事に片付いたと思ったとき、良太郎は重大なことを思い出した。

今日どこで一泊過ごすか、だ。

ケータロスを開いて時刻を見る。完全な深夜だ。

オマケに戦闘の後なのかカプセルホテルなどを探す意欲はなかった。

「あの、どうしたの？」

「言っておくけど、ジュエルシードは返さないよ」

「いや、そうじゃなくて、その……今日泊まるどころどうしようかと思って、ね」

苦笑いを浮かべる良太郎。

「あの、もしもだけど、よかつたら私達の家泊まりませんか？」

フェイトが天使に見えた良太郎だった。

第四話 「食べ歩きと一日の終わり」

人が神や天使に見えるときというものは大抵自分が追い詰められている時に限る。

野上良太郎が今まで、自身が体験した中で導き出した答えだ。

先程まで敵として戦っていた少女の申し出は良太郎にその事を思い出させるほど衝撃的なものだ。

しかし、簡単にその申し出を受けるわけにはいかない。

何故ならば、相手は女の子。

そして、自分は男だ。

間違いが起こる筈ないと良太郎は断言できるが、それでも、ということもある。

「ご両親は僕を泊める事を許してくれるかな？」

と、とりあえずお決まりの質問をする。

「わたしとアルフしか住んでないから大丈夫」

あつさりと返された。

「フェイトちゃんはそれでいいとしても、えと、そのアルフさんは……どうなのかな？」

良太郎はアルフを見る。

「ん？あかし」

自分を指差すアルフ。

「別にいいんじゃない？アンタがあたしらに変なことをするようなヤツには見えないしね」

どうやら彼女の中で自分はそれなりに信用されているらしい。

「でも……」

それでも良太郎は申し出を受け入れを渋ってしまう。

「良太郎、他にアテがあるの？それともイヤなの？」

フェイトが上目でどこか悲しい表情で良太郎を見つめてくる。

良太郎としてはそれだけで何か自分がやましいことをしたのでは、と思ってしまう。

「フェイトとあたしがいいって言ってんだからさ。ありがたく受けな

よ」

アルフが良太郎に覚悟を決めるように促す。

良太郎はフェイトとアルフを見る。

二人は善意もしくは先程の贖罪で申し出ているかもしれない。

善意なら受けないと無礼だと考える。

贖罪ならお門違いだと考えてしまう。自分は先程のことで罰を下す気などないからだ。

良太郎は二人のもてなしを善意だと思うことにした。

「それじゃお言葉に甘えて、お世話になります」

良太郎は二人に頭を軽く下げた。

非常階段がカンカンと音を鳴らしながら、揺れている。

三人の人間が現在使用しているからだ。

良太郎、フェイト、アルフだ。

ちなみに降りている順番はアルフ、フェイト、良太郎になっている。

この順番を提示したのは良太郎でそこには男ならではの諸々の事情がある。

ただし、それは女性に明確に説明することは出来ない事情だが。

良太郎はフェイトの服装が先ほどと違うことに気付き、訊ねてみることにした。

「さっきの服つてもしかして戦闘服みたいなものなの？」

前で階段を下っているフェイトが良太郎に顔を向ける。

「え？」

「いや、今と違うから」

「バリアジャケットって言うんだけど……知らないよ、ね？」

「うん。やっぱり戦闘服って思っているのかな？」

「いいと思うよ」

フェイトも魔法の事を知らない良太郎にどう説明しようか悩んだが、良太郎の解釈は大まかには正解と思ったのでそれで通すように言った。

「二人ともー。早く来なよー」

先頭で非常階段を降り終えたアルフが促してきた。

「行こう。良太郎」

「そうだね」

良太郎とフェイトが非常階段を降り終えたのはそれから十分後だった。

非常階段を降り終えて良太郎は地に足をつけた。

やっと大地に立ったという気分になった。

そんな余韻に少々浸っている良太郎にアルフが声をかけた。

「ねえ。良太郎」

「なに？アルフさん」

「アンタが乗ってたあの非常識な乗り物って何なのさ？」

「ア、アルフ！非常識だなんて失礼だよ。良太郎の世界では当たり前のことかもしれないのに……」

フェイトは相棒のあまりの物言いを注意する。

「ううん、アルフさんの言う通りだよ。あとフェイトちゃん。僕の世界でもアレは非常識の部類に入るから気にしないでいいからね」

良太郎は苦笑いを浮かべながらもアルフの質問に答えようとする。

「あの列車はデンライナーっていつて、ええと、『時間』を運行するこ
とが出来るんだ」

「タイムマシンみたいなもの？」

フェイトが自分が保有する知識でデンライナーの解釈を良太郎に
ぶつけてみた。

「そうだね。うん、それが一番適当な解釈だよ」

自分の解釈が正鵠を射ているとわかったフェイトは驚きを隠せな
かった。

「それって凄いよ！ね？アルフ」

良太郎は驚きの表情を浮かべているフェイトを見て驚いた。

（こんな顔も出来るんだ）
と。

「そうだよ！時空管理局でもそんなもの所持しているなんて聞いたこ
とないしね」

「時空管理局？」

良太郎が聞き慣れない言葉を二人に尋ねる。

「次元世界を管理、維持するための組織、かな」

フェイトが良太郎にわかりやすく説明する。

(警察みたいなものかな)

と、口には出さずに勝手に解釈することにしようとした時だ。

「あっ」

ぐぎゅるるうと良太郎の腹の虫が鳴った。

「そういえばお昼に食べたつきり、何にも食べてないや」

腹をさする良太郎。

「凄く鳴ってたね」

フェイトが笑みを浮かべる。

だが、どこかその場の雰囲気と和ませる為に作られた笑みに感じた。

心の底から笑っているように思えないと良太郎が感じた直後。

ぐぎゅるるるうと別の所から聞こえ出した。

音の出所を良太郎とフェイトは目で追う。

アルフだった。

「あは、あはははは。あたしもさつき戦ったからさ。その………
ね」

「アルフ………もう」

フェイトは相棒に呆れ、一步右足を踏み出そうとする。

ぐぎゅるるるるるるるうとこの中で一番豪快な音が鳴った。

出所はわざわざ探らなくてもわかることだった。

「あの………聞こえた?」

腹の虫を鳴らした少女は顔を真っ赤にして青年と相棒に確認するように訊く。

「あー、凄いな音だった、ね」

青年は苦笑しながらも何かフォローになる言葉を捜そうとする。

「あは、あははは。そ、そうだね」

相棒は笑うしかないという選択肢を取った。

「………意地悪」

少女は顔を真っ赤にしてぼそりと呟いて歩く速度を速めた。

「フェイトちゃん？」

「ちよつと待つとくれよ。フェイトー」

二人はちよつと拗ねた少女の背中を追いかけた。

*

「とにかく、喫茶店でもレストランでもいいから何か食べれる所を探そう」

良太郎は、空腹に対しての打開策として二人に進言する。

「そうだね」

フェイトも機嫌を直したのか、良太郎の言葉に耳を傾ける。

「とはいっても、あたし達もこの辺りの地理を知ってるわけじゃないしねえ。自分の家の周りくらいしか知らないよねえ」

「うん」

アルフの一言にフェイトは首を縦に振る。

「え？ そうなの？」

良太郎は二人がここで住んでいるものばかりと思っていた。

「それにこの辺りを歩いたのも初めてといえれば初めて、かな。家までの道は知ってるけど他の所は知らないんだ」

フェイトは周辺を見回しながら言った。

「それ、本当？」

「うん」

良太郎の歩みが停まる。

二人の私生活等に疑惑の目を向けてしまう。

妙な推測までしてしまう。

もしかしてこの二人も僕と同じで別の世界から来たのか、と。

ジュエルシードを集めるといふ目的の為にたった二人でこの見知らぬ場に来たのでは、と。

だが、そんなことを問うても二人がはぐらかす可能性はあるし、好奇心を満たすためだけに他者のプライバシーを侵していい筈がない。

良太郎は今の事に頭を切り替える。

二人は自宅までの道のりを、迷いなく進めている。

「良太郎、どうしたの？」

「早く来なよー」

フェイトは心配し、アルフは早く来る様に促している。

「ごめんごめん。置いてかないでよー」

良太郎は右手で謝罪のポーズを取りながら二人のもとに駆けた。

それから十分ぐらいが経過し、フェイト達の自宅に向かう中で一軒のコンビニを発見した。

三人はドアの前に立つ。

入口は手動ドアなため、真正面に立っていても開閉はしない。

「お腹空いたね」

「・・・うん」

「戦ったもんねー」

三人とも既に食欲という魔物に憑かれている。

通りすぐすという選択肢はない。

だが、何故か入ろうとしない。

正確には良太郎は入りたいのだが、フェイトとアルフが入ろうとしないのだ。

「二人とも、どうしたの？後ろに人が来たら迷惑になるから早く入ろうよ」

良太郎が促すが、二人の足は先程とは打って変わって岩のように重くなっている。

「良太郎、その・・・」

「あたしたちさ・・・」

二人が何を言おうとしているのか何となく理解できたので自分から声を出した。

「お金持ってきてないんでしょ？」

「・・・うん」

「あははは・・・」

フェイトは申し訳なきような顔をし、アルフは笑って誤魔化そうとしている。

「大丈夫、僕が奢るからさ。食べたい物は遠慮せずに選んでいいよ」

「でも、それじゃ……」

「そうだよ。いくら何でも悪いよ良太郎」

良太郎が奢るといった直後、二人ともしおらしくなってしまう。

「どうやら、人にたかるといった行為に慣れていないらしい。」

「僕がいいって言ってるんだから、素直に厚意に甘えたほうがいいよ、ね？」

アルフが自分を泊める際に言った台詞を今度は良太郎が自分なりにアレンジを加えて言った。

「……うん、それじゃ」

「お言葉に甘えて……」

こうして三人はコンビニの中に入って行った。

コンビニの中に入ると、フェイトとアルフはそれぞれ欲しい物を予め目星をつけていたらしく、他の物には目もくれずに向かつて行った。

「さてと、僕は何を買おうかな、と」

「買い物カゴを手にする。」

オーナーから百万円も貰っているのでコンビニに置いてある商品で買えない物はひとつもない。

だが、深夜であるため目玉商品のようなものは殆ど陳列されていない。

空腹を満たすとしたら、陳列されている比較的ハズレに近い弁当やお菓子かカップ麺かおにぎり系かパン系もしくはレジ前に置かれているフライドチキン系しかない。

「買い物カゴを見てみると、菓子パンひとつと牛乳ひとつにレンジでチンすると温かく食べることの出来るハンバーガーが十個ほど入っていた。」

（誰が何を食べるのかすぐにわかつちやうね）

良太郎はフェイトのそばまで歩み寄る。

「フェイトは弁当コーナーである商品を見上げていた。」

「何か欲しいものあった？」

「ひゃっ！りよ、良太郎。な、なに？」

フェイトはいきなり声をかけられて驚いたが、すぐに平静を取り戻す。

「ずっと見上げてたからさ。何か欲しいものでもあるのかなって思ってたさ」

「ううん、ないよ。本当だよ！良太郎」

ムキになって否定しているのが益々怪しく感じた良太郎はフェイトが見つめていた商品を見る。

洋風ハンバーグ弁当だった。

目玉商品の最後の一品だ。

良太郎は最後の一品を迷いなく取る。

フェイトが残念そうな顔を一瞬したが、すぐに驚きの表情になった。

良太郎がそれをフェイトに渡したのだ。

「え？」

「入る前に言ったよな？遠慮しなくていいって」

「でも……」

良太郎は笑みを浮かべフェイトの頭にポンと手を置き、優しく撫でる。

「フェイトちゃん。もっとワガママになっていいんだよ」

「う、うん。ありがとう。良太郎」

フェイトは顔を俯き、頬を赤く染めながらも洋風ハンバーグ弁当を受け取った。

その後、フェイトはスティック系のお菓子を数箱、カゴの中に放り込んだ。

ワガママと呼ぶにはまだまだ可愛い部類だが。

良太郎が買い物カゴをレジ場に立っている店員に渡して精算してもらおう。

オーナーから貰った財布を取り出し、その中に入っている一万円札を一枚渡す。

おつりとしてジャラ銭数枚に千円札数枚を受け取った。

「ありがとうございましたー」

と店員の声を聞きながら三人はコンビニから出た。三人の周囲には様々な匂いが立ち込めており、皆それぞれ先程購入した食べ物を堪能していた。

「うん。おいひい」

とアルフはハンバーガーを豪快に食べている。既にもう五個目だ。フェイトは一番最初に買った菓子パンを食べながら牛乳を飲んでる。

アルフのように顔には現れていないが、堪能していると思われる。ちなみに良太郎は歩きながら食べるものは一切購入していない。

「あそこで食べよう」

と良太郎はバス停留所を指す。ちょうどベンチもあり、ゴミ箱もある。買った物をすべて消化するにはもってこいの場所だろう。

なにせ、弁当を歩きながら食べることは出来ないからだ。

良太郎が買ったのも弁当だ。

ベンチに座り、良太郎は袋の中に入っている二つある弁当のうちハンバーグ弁当をフェイトに、アルフにはハンバーガーが五個入っている袋を渡した。ちなみにスティック菓子は弁当が入っている牛乳が入っている袋に入っており、フェイトが持っている。

「いただきます」

良太郎とフェイトが食物に対する感謝の儀式を行う。

良太郎は自分が選んだカルビ弁当の蓋を開け、食べ始めた。

カルビにタレがよくかかっているご飯とマッチしている。

フェイトもハンバーグ弁当に手をつけ始める。

それかからしばらくして先程まで豪快に食べていたアルフがぼかんと口を開けている。

二人とも容姿に反して凄まじい勢いで食べているのだ。

味わって食べているのか、ただ単に胃袋の中に放り込んでいただけなのか傍から見るとわからない。

そして、

「「ごちそうさまでした」」

二人は同時に手を合わせた。

「アンタ達、それ狙ってやってる？」

「え？」

「アルフ？」

「いや、何でもないよ。同じタイミングで食べ始めて食べ終わるなんてさ、まるでひとつの芸みたいだと思っただけだよ」

アルフの言っていることを今ひとつ理解できない二人だった。

夜食が終り、また目的地に向かう一行はただひたすら歩いていた。

「良太郎はさ……」

先程まで皆黙って歩いていたが、フェイトが沈黙を破った。

「ん？なに」

「一体何者なの？」

「え？僕、うーん説明が難しいね」

良太郎は頬を指で掻きながら、どう説明したらいいか考えあぐねていた。

「いーじゃん。教えなよー」

とアルフも良太郎の素性に興味を持ったのか教えるようにせがむ。

「そうだなあ。僕はまず、この世界とは別の世界から来ているんだ。

そして……」

二人は自らの聴覚を良太郎の次の言葉を聞き漏らさぬように研ぎ澄まします。

「元いた世界のこの『時間』から更に十年後の『時間』から来たんだ」
「……」

「あー、ややこしいなー」

フェイトは考え込み、アルフは考えることを放棄した。

「あ、良太郎着いたよ」

しばし考えていたフェイトだったが、見知った場所に着くととりあえず後日考えることにした。

「……」

良太郎は二人の生活拠点となるマンションを見上げている。

高級なマンションでもではないが自分が住めるような場所ではない。

フェイトちゃんのお前はきつと高給取りなんだな、と良太郎の頭によぎった。

三人はマンションの中に入って行く。
エレベーターに乗り、チンと鳴ってから扉が開く。

そこがフェイト達が生活している部屋がある階層なんだろう。

フェイトは上着のポケットからカードキーを取り出して、ドアに通す。

ガチャリと音が鳴りドアを開ける。

「どうぞ」

フェイトは良太郎に中に入るように促す。

「お邪魔します」

中に入って見回す良太郎。

室内は広い。だが、どこか寂しげな雰囲気を感じた。

生活感のようなものがまるで感じないのだ。寝る起きる食べるの最低限のことのための空間ともとれる。

部屋というには入れ物のようにも思えた。

「フェイトー。シャワー浴びるけど一緒にどう？」

アルフがすでにバスルームに入っているらしく、フェイトを誘う。

「うん、わかった。今行くよ。アルフ」

そう言つてフェイトもシャワールームに向かった。

「良太郎」

「なに？フェイトちゃん」

「良太郎はそんなことをする人じゃないと思うけど……」

フェイトが何を言おうとしているのか良太郎には理解できた。

「わかっている。早く行つておいでよ。アルフさん、待つてるよ」

「……うん」

フェイトは何故かわからないが、良太郎の返答に不満を抱き、パジャマを持つてシャワールームに向かった。

フェイトの姿がなくなると良太郎はケータロスに財布にパスをソファのそばにあるテーブルに置いて自身は寝転がった。

(今日はほんといういろいろあったな)

と思い、

(でも、何とかなつてよかつた)

と思いながらシミひとつない天井を見上げた。

フエイト達がシャワールームから出てきたのはそれから三十分後
だつた。

その時には良太郎は熟睡していた。

明日もまた無事に過ごせたらいいな、と願いながら。

第五話 「チームデンライナー 集結」

静かなりビングの中で突如、ケータロスが鳴り始めた。ボリユームはさほど大きくなく、だが、眠っている人間が目覚ますにはちょうどよいくらいだ。

野上良太郎が別世界に来て初めての朝が来たのだ。

「う……うん」

良太郎は眠気と格闘しながら起き上がり、寝ぼけ眼を凝らしながらもケータロスを手にして、アラームを停めた。

時刻は午前六時。

この部屋の主は起床していない。

良太郎は安堵の息を吐いてから掛け布団を身体から払う。

(あれ?)

先程払った掛け布団を掴む。

昨日この部屋で自分が何をしたのかを思い出す。

ソファのそばにあるテーブルに財布とパスとケータロスを置いて、そのままソファで寝転がって熟睡した。

その時には掛け布団はなかった。

寝ぼけ状態の頭脳でフルに働かせる。

この部屋にいるのは三人。

自分が熟睡した時には掛け布団はかかっていたいなかった。

自分が寝ぼけながらも掛け布団を入手したという説はありえなさ過ぎるのでボツとなる。

モモタロス達が憑依して持ってきた説もあるが、自分が睡眠中にイマジンが憑依して行動を起こし、その後を生じるけだるさのようなものがなかったので、ボツになる。

しかし、現に掛け布団はかかっていた。

そこから導き出される答えはひとつ。

フェイトかアルフがかけてくれた、ということになる。

(ありがとう。フェイトちゃん、アルフさん)

どちらがかけてくれたのかわからないので二人に心の中で礼を言

うことにした。

「さてと、泊めてくれたお礼として朝ご飯くらいは作らないとね」

そう言つて、良太郎はキッチンに向かう。

冷蔵庫を開けると、卵と牛乳と食パンとその他諸々と何故かドッグフードの缶詰が数個入っているだけだった。

冷凍室を開けてみると、冷凍食品がギッシリと入っていた。

（朝はパンで済ませて、昼か夕方は冷凍食品で済ませるつもりなんだ……）

良太郎は二人の食生活に少々嘆きたくなった。

といつても、自分も料理は人並みにできるだけで、『達人』とか『鉄人』などと呼ばれるほどの腕はない。

あまりに限られた食材を有効に活用できるほど達者ではないのだ。

食パンはトースターで焼けばいい。マーガリンとイチゴジャムがあつたのでそれを好みに合わせて塗ればいい。

パンだけではたりないので、卵を目玉焼きにする。

米があれば卵焼きも可だが、炊飯ジャーの中には白米は入つていなかったなので、目玉焼きにすることにした。

スクランブルエッグという手もあつたのだが、どうも上手く出来た試しがないのでやめた。

（起きてたら焼き加減とか焼き方とか聞けたんだけどね）

良太郎は卵をフライパンの上に落とし、自分の好みで焼くことにした。

（何だろう？何かいい匂いがする）

先程まで熟睡していたフェイト・テスタロツサは鼻腔をくすぐられる。

寝起きがよいので、眠気と格闘するようなことはいまだかつてない。

眼をこすり、ベッドのそばで眠っている犬か狼かわからない生物を揺する。

「アルフ、アルフ。朝だよ」

「うーん」

狼（仮）は起き上がったから伸びをする。

狼（仮）は起き上がると、少女の姿——アルフになった。

「おはよフェイト。あれ？何かいい匂いがするけどなに？」

「多分、良太郎だと思う」

「良太郎が？」

フェイトはパジャマから私服に着替えてリビングに向かった。

二人がリビングについていた頃には良太郎がテーブルに三人分の朝食を置いていた。

「おはよう。フェイトちゃん、アルフさん」

「良太郎、これは？」

「一晩泊めてもらったからね。そのお礼、かな」

「そんな………気にしなくていいのに」

フェイトは申し訳なさそうな顔になる。

「僕が好きでやったことだから気にしないでいいよ。さあ早く食べよう。冷めちゃうよ？」

「う、うん」

フェイトはテーブルに近寄り、椅子に座る。

「さあて、食べるぞお」

アルフはその場を盛り上げるようにわざと陽気な声を挙げ、椅子に座った。

「パンはマーガリンかジャムか好きなの使って。それと、目玉焼きは僕の好みで焼いたから勘弁してね」

良太郎の軽い解説を聞きながらもフェイトはパンと目玉焼きを見る。

フェイトはパンにはマーガリンを塗り、目玉焼きには塩をかけた。

アルフはパンにはジャムを、目玉焼きはケチャップをかけた。

良太郎はパンにはマーガリンを、目玉焼きは醤油をかけていた。

全員が合掌する。そして、

「いただきます」

食物に対しての感謝を述べてから朝食を食べ始めた。

フェイトは目玉焼きを一口食べる。

特別美味しいというわけではないが、とんでもなく不味いわけでもない。でも、自分が作ったものでは出せない味がした。

とても、温かく安らぐ味だった。

隣で食べている良太郎を見る。

自分が作ったものなのかどこか品評しているかのような表情をしながら食べている。

恐らく、まだ改善したほうがいいのではとか考えているのだろう。

対面のアルフは黄身を潰して、啜っていた。パンは既に食べ終えたらしく影も形もない。

次にマーガリンを塗ったパンを一齧りする。

こんがり焼けたいい匂いが鼻腔を刺激する。

目玉焼き同様、自分が作った際にはない味がする。

(何だろ。すごく安心する)

そんなことを思いながら、フェイトは朝食を食べた。

ちなみに、食べ終えた順番としてはアルフ、フェイト、良太郎だったりする。

「「ごちそうさまでした」」

と食物に対しての礼を述べてからフェイトは皿を片付けようとするが、良太郎に遮られた。

「いいよ。僕がやるからフェイトちゃん達は寛いでて」

フェイトは良太郎は退かない時には退かない性格の持ち主だと理解したので、何も言わず冷蔵庫の中に入っている牛乳を取り出してコップに注いでから飲み始めた。

アルフはソファで思いつきりふんぞり返っていた。

皿を片付け終えた良太郎は、ソファに座る。

「フェイトちゃん」

「ん、なに？良太郎」

フェイトは良太郎が何か頼み事をしてくると予感がした。

不当な頼みをするような人物ではないということは昨日と今日だけでもわかる。

「実はね、この街の地図を貸してほしいんだけど、持ってる？」

「地図？」

「うん、翠屋って所に行きたいんだ。そこに僕の仲間がいるんだ」
「…………へえ、そうなんだ」

フェイト自身、何故良太郎が仲間の元に行くと言った瞬間に嫌な気持ちになり、低い声が出たのかわからなかった。

「地図持ってくるね」

フェイトはそう言っただけで地図が入っている引き出しを探し始めた。

「アンタ、フェイトを怒らせるようなことでもしたのかい？」

「え？」

「さっきフェイトの声がいつもより低かったんだ。あんな声出すのは怒った時だけだからね」

アルフがフェイトに聞こえないようにそっと良太郎に耳打ちする。

「怒らせることはしてないよ。アルフさんだって聞いてたでしょ？」

「まあね。アンタは仲間がいる場所に行くために地図を貸してほし
いって言ったただけだもんねえ」

「うーん。何でだろ？」

良太郎には本当に心当たりがないことだ。

「良太郎、はい地図」

フェイトは地図を良太郎に渡した。

「ありがとう」

そう言いながら地図を広げる。

地図には大まかに住所と番地と地図記号がいくつか記載されており、
翠屋と記載されていた。

「よかった。これで何とか迷わずに行けるよ。ありがとう」

地図を畳んでソファから立ち上がり、ズボンのポケットに入れて
フェイトに礼を言う。

「う、うん」

フェイトは良太郎と目を合わせずに頷いた。

それから三十分後。

良太郎は玄関で靴を履いていた。

フェイトとアルフは見送ってくれるのか玄関までいてくれた。

「じゃあ行ってくるね。泊めてくれてありがとう」

靴を履き終えた良太郎は右手でドアノブを掴みながらもフェイト達を見る。

「う、うん。こっちこそ、ご飯作ってくれてありがとう」

「ご飯美味しかったよ。良太郎」

フェイトとアルフも朝食を作ってくれた礼を言う。

「あ、あの……良太郎」

フェイトが良太郎を呼び止める。

「どうしたの？」

「ううん、何でもないよ。行ってらっしゃい」

「うん、行ってきます」

良太郎はドアノブを回して、ドアを開いて外に出た。

ボタンとドアが閉じて、ガチャリとオートロックが働く音がした。

良太郎はドアを見つめる。

一瞬フェイトの表情が気になったが、翠屋に向かうことにした。

*

蒼天と呼ぶに相応しい空、太陽が己が宿命の如く燦燦と照りつけていた。

途中ドブ川に落ちそうになったり、居眠り運転をしているトラック&タクシーに撥ねられそうになったり、ガラの悪そうな悪ガキに因縁を吹っかけられそうになりながらも、翠屋を視界にとらえることができる距離まで辿り着くことが出来た。

朝に出たのに既に昼前になっていた。

「ふう、ちよつと時間かかったけどやつと着いた」

広げていた地図を畳んでポケットの中に突っ込んで、翠屋の入口前に着き、入った。

そこには店内で対峙するように睨み合っている赤色と紫色のイマジンがいた。

モモタロスとリュウタロスである。

「……小僧テメエ、よくも俺のプリンを食いやがったな」

「モモタロスの名前なんてどこにも書いてなかったよー」

リュウタロスが食べたプリンの空容器をくまなく見回している。

「……ほお、俺はオマエがプリンを一個食ってから更に俺の手元にあったプリンを食ったように見えたんだけどよお」

「あれー、僕目が悪くなったのかなー。そうだったんだー」

リュウタロスの目は泳いでいた。モモタロスがそこまで見ていたとは思わなかったのだ。

モモタロスがリュウタロスに手を出そうとした時だ。

良太郎がそろそろ止めに入ろうとした時だ。

ひとつの小柄な影が二人の間合いに入り込み、素早く一発ずつ攻撃を加えた。

「オ、オマ……エよお」

「ハ、ハナちゃ……ん」

赤と紫のイマジンはその場で崩れ落ちた。

「センパイ。大人気ないって……」

「リュウタ、大丈夫か？しつかりせい」

青色と金色のイマジンがその場で崩れ落ちている二人をズルズルとその場から引きずっていった。

「あ、良太郎。やっと来たんだ」

見知った小柄の少女——コハナが嬉しそうな表情で浮かべながら良太郎に歩み寄ってきた。

「相変わらず、だね」

良太郎は苦笑しながら仲間達に出会えたことを素直に喜んだ。

「あらハナちゃん。その人がお友達？」

厨房らしきところから一人の女性が笑顔で出てきた。

「は、はい」

「初めまして、仲間がお世話になっています。野上良太郎です」

良太郎は女性に仲間の面倒をみてくれた礼と自己紹介を込めて頭を下げた。

「いえいえ、こちらこそ。高町桃子です」

「いえ、そんなこちらこそ……」

良太郎は再び頭を下げ始める。

桃子もまた下げる。

このままではキリがないのでコハナが停めに入る。

「良太郎も桃子さんも、その、キリがないから」

「あっ」

コハナが停めに入らなければずっとやっていたらろう。

二人揃って笑ってしまう。

「桃子、モモタロス君達の友達が来たんだ。立ちっぱなしにするのは失礼だ。席に案内したらどうだ？」

カウンターからいきなり人のよさそうな、だが一部の隙も感じさせない長身の男が現れ、桃子にそう促した。

「あっ、そうね。ごめんなさいね。気付かなくて。ええと、良太郎君でいいかしら？」

桃子は良太郎を近くの席に座らせると、彼の呼び方に確認を取るようなかたちで訊いた。

「は、はい。それで構いません」

良太郎も特にその呼び方で問題ないので了承した。

それから数分して長身の男がコーヒーを持ってきてくれた。

「私は翠屋の店長で高町士郎だ。よろしく、良太郎君」

「は、はい。こちらこそ、そのモモタロス達、皆さんに迷惑かけてません？」

名前は覚えられていると判断したので良太郎は軽く頭を下げるだけにした。

そして、一泊とはいえないマジン達がこの店、あるいは士郎達に迷惑をかけていないか訊ねる。

苦情を受ける覚悟は既に出ていたりする。

「良太郎君、君はモモタロス君達がここで一泊過ごしたと思っているのかい？」

「違うんですか？」

「ははははははは、違うよ。ここはあくまで店であって、家じゃないんだ。昨日は我が家の道場で一泊してるから安心していいよ」

「そう、だったんですか」

「それと、彼らには助かってるよ。昨日は桃子の新作ケーキの試食会で私達では食べきれなくてね。彼らは凄い勢いで食べてたよ。しかも奪い合いまでしてね。これには私も桃子も子供達も驚くしかなかったな。試食会であんな後景を見たのは初めてだ」

「はは、そうですか」

良太郎には士郎の概要だけでイマジン達がどんなことをしたのかはつきりとわかった。

もう笑うしかないと選択した。

「それと、モモタロス君に君をここに来るように言ったのは私なんだ。ここなら君達の集場所にはもってこいかも、と思ってるね」

「そうですか。どうもありがとうございます」

良太郎は士郎の気遣いに感謝して頭を下げた。

モモタロスとリュウタロスが意識をハッキリさせたのはそれから五分くらい経過してからのことだ。

「おうーやつと来やがったか。良太郎！」

モモタロスは嬉しそうに良太郎の背中をバンバン叩きながら隣に座る。

手には先程食べ損ねたプリンがある。

「センパイ、叩き過ぎ」

モモタロスを宥める青色のイマジン——ウラタロスも良太郎に会えたことが嬉しいのか声色がいつもと違う。

「良太郎、待ったでえ」

金色のイマジン——キンタロスは良太郎と対面に座り、お決まりの腕を組んでの堂々とした姿勢で座る。

その声色は他の二人同様、喜びが入っている。

「はははは、良太郎いらっしやいー」

リュウタロスもキンタロス同様、良太郎の対面に座って両腕を掴んで上下に振って喜んでいる。

「リュウタロス、痛いつて」

抗議するものの仲間と出会えた嬉しさからか表情は笑みを浮かべていた。

皆の再会を喜んでばかりもいられない。

今までの報告とこれからの対策を練らなければならぬのだ。

「これからのことを話すならよ、良太郎。もうちょっと待ってくんねえか」

「?、どうしたの?モモタロス」

「センパイ、もしかして……」

「もうそろそろ学校から帰ってくるしなあ」

「なのはちゃんとフェレット君だね」

良太郎にはモモタロス達の意図がわからなかった。

だが、『なのは』と『フェレット』という単語を聞くのは二回目であり、これからの事を話すには必要な存在だということにはわかった。

「ただいまあ」

とドアが開き、元気一杯と形容してもいいハツラツな声が出た。

良太郎は声が出る方向に顔を向ける。

そこには右肩にフェレットを乗せ、桃子と同じ髪の色をした少女がいた。

服装は白をメインとした清楚な印象を持たせる服で、私服ではなく学校の制服だ。

「おかえり、なのは」

と桃子は笑顔で娘を迎え、

「おかえり。お腹空いてるだろう?」

と土郎も温かい眼差しを娘に向けて迎え入れた。

「うん!あと、ユーノ君のもね」

と頷き、少女は土郎に自分の肩に乗っているフェレットの分も忘れないようにと催促した。

「わかったわかった」

と土郎は笑顔で応じる。

少女は良太郎達のいる席に向かう。

「モモタロスさん、ウラタロスさん、キンタロスさん、リュウタロス君、ハナさん、ただいまあ」

と皆に笑顔を向ける。

「よっ！」

とモモタロスは軽く手を挙げ、

「おかえり」

とウラタロスも軽く手を挙げるが、モモよりはちとキザに、

「おかえり、道中何もなくて何よりや」

とキンタロスは少女が無事に帰ってきていることに素直に喜び、

「おかえりー。なのはちゃん、フェレット君」

とリュウタロスはなのはの肩に乗っているフェレットの鼻を指でつつく。

「キュキュウー」

とフェレットが鳴いた。

少女とフェレットは良太郎を見る。

良太郎も少女とフェレットを見る。

先に少女が口を開いた。

「は、初めまして。わ、わたし高町なのはです！」

と自己紹介してきた。

「仲間を助けてくれてありがとう。僕は野上良太郎」

良太郎も席から立ち、なのはに感謝と自己紹介を踏まえた挨拶をした。

「なのは、昼ご飯だぞお」

と士郎が昼食を持ってきてくれた。

なのはが昼食を食べている間に良太郎はコハナにどのようなしてなのはと出会ったのか訊くことにした。

「私達がこつちの世界に来た時はもう夜で、ジュエルシードの事を知ってる人間は翌日からってことで野宿を決め込んでた時のことよ」

モモ、ウラ、キン、リュウ、コハナの五人ならば野宿した所でチンピラや悪ガキが襲い掛かってくることもないだろう。仮に襲ってきたとしても返り討ちにすることが出来るから、良太郎は心配はしていない。

コハナは続ける。

「その時にね。人の悲鳴が聞こえたから私達、寝る前にそこに向かっ

たのよ。そこでバケモノと戦ってるのはちゃんと知り合ってたってわけ」

「そうだったんだ。そのバケモノはどうしたの？」

「なのはちやんがレイジングハートっていう武器を使って倒したわよ。でも、驚いたのはその後、なのはちやん。それがデビュー戦だったんだからビックリよねえ」

「へえ。凄いなあ」

良太郎は素直に感心する。

「それでなのはちやんがジュエルシードを回収していたのを見ちやつたからその事を聞いたらユーノっていうあのフェレットが教えてくれたのよ」

「なるほどね。でも、どうやって高町家に泊まる事が出来たの？あの人達、どうみても常識人だし、その、モモタロス達の姿を見たら普通反対すると思うけど……」

良太郎がそう考えるのも当然だろう。

得体の知れない生物を受け入れるのはその人間がどんなものにも物怖じしない豪傑か非常識人が神様くらいだろう。

「それなら大丈夫。上手く誤魔化したから」

「どうやって？」

「バンドマンの衣装って言ったらあつさり受け入れてくれたから」

「どう見てもデスメタル、だよな？」

「……まあね」

良太郎は苦笑するしかなかった。

コハナはこれから咄嗟についてしまった嘘を誠にしなければならぬないので頭を抱えていた。

第六話 「電王メンバーズクラブでD・M・C」

青色のペンキを思いっきりキャンバスにかけたらこんな風になるのかと考えてしまうほどの蒼い空。

昼食を食べ終えた高町なのは先頭に、野上良太郎はイマジン達が一番後ろで懊悩しているコハナが一泊過ごした宿、つまり『高町家』に向かっていた。

「翠屋から結構あるんだね」

「そうですね。言われてみると結構距離ありますね」

なのはは右肩に乗っかっているフレットと戯れながらも良太郎と対話している。

「あの、なのはちゃん」

「はい？どうしたんですか？良太郎さん」

良太郎は後ろでバカやっているイマジン達に聞こえないように注意を払いながら、なのはに訊ねる。

「モモタロス達、迷惑かけてない？」

なのはの父——高町士郎は感謝しているといっていたが、それを鵜呑みにはできなかった。

もしかしたら、こちらを氣遣って言った台詞かもと、良太郎の頭によぎったのだ。

それにこの手のことは、大人よりも子供の方が正確にそして、何の迷いもなく真実を打ち明けてくれるものだ。

なのはは左人さし指を頬に当てる。昨日の事を思い出そうとしているのかもしれない。

「うーん。迷惑って程じゃないですけど、道場から凄いいびきが聞こえてきました」

いびきの発信源は良太郎にはすぐにわかった。

「それと昨日お姉ちゃんが口説かれそうになりました。あとお母さんもです」

そんなことをする奴は一人しかいない。

「今日の朝は朝ご飯のおかずを取られた取られなかったでお兄ちゃん

と喧嘩してました」

朝食のおかずで本気で喧嘩する奴は一人しかいない。

「これも今日のことですけど、庭でお父さんが半分寝ているかのよう
な状態でダンスしていました」

人を操って踊る奴は一人しかいない。

「……………本当にごめんなさい」

良太郎はイマジン達の所業を謝罪した。

言い訳のしようがない。

「あ、そ、そんな、そこまで気にしなくてもいいですよ！お父さん達も
驚いてましたけど、最近のバンドマンさんは日常生活から常識外れな
ことをするんだとハナさんが言ったら信じてくれましたし……………」
「信じたの!?!しかもその嘘でよく通せたね!?!」

驚いた上にツツコンでしまった良太郎。

頭を抱えているコハナを一瞥したため息をつく。

「あ、着きましたよ良太郎さん」

なのはの足が停まり、良太郎に向けて中に入るように促す案内人の
ような仕種をする。

青空に君臨する太陽に負けない笑顔で。

「ようこそ。高町家へ」

高町家の道場に良太郎、イマジン四人、そしてフェレットのユーノ
がを寛く姿勢を取っていた。

良太郎は普通にあぐらで座っている。

モモタロスは壁にもたれて座っている。

ウラタロスは何処から持ってきたのかパイプ椅子を用意して座っ
ている。

キンタロスは腕を組んであぐらで座っているが、実は寝ている。

リュウタロスは寝そべって愛用のスケッチブックを取り出して、愛
用のクレヨンを取り出した。

フェレットはリュウタロスのスケッチのモデルになっている

なのはとコハナは現在、お菓子とお茶を準備している。

なのはがお菓子を、コハナがお茶を人数分持ってきた。

「さて、そんじや始めっぞ」

モモタロスの一言を合図にそれぞれ勝手な行動を取っていたイマジン達が皆集まり円陣になっている。

「まず、良太郎さんにお話しておかなければならないことがあります」
フェレット——ユーノが口を開いた。

良太郎はユーノの声を初めて聞いた。

声変わりのしていない若い男の声、年齢にしてフェイトやなのはくらいだと推測する。

「ジユエルシールドは持ち主の願いを叶えてくれるというものなんです
が、ご存知ですか？」

ユーノは良太郎がジユエルシールドの効力を知らないものだと前提して話している。

「うん。昨日、モモタロスから教えてもらったよ」

「そうですか。それなら話が早くて助かります。実はその発動に問題があるんです」

「発動に？」

「そうです。ジユエルシールドはその効力を発動する時が一番不安定で、持ち主の願いを歪曲させて叶えてしまったり、発動の際に周囲に危害を加えたりと、とても危険な石なんです」

イマジンみたいな石だと良太郎は解釈した。

「んでよ良太郎。オマエ、石コロをオーナーのオッサンから一個貰ってたよな？早く出せよ」

モモタロスが良太郎を促す。

「センパイ、それじゃカツアゲと変わんないよ。良太郎、今のところジユエルシールドの持ち主はユーノになってるんだ。持ってるんだっ
たら渡してほしいんだよね」

ウラタロスが呆れながらも、フオローを忘れない。

(どうしよう……)

どうやらイマジン達十コハナは自分が現在でも持っているものだ
と思っているらしい。

(フェイトちゃんにあげちゃったし、今更返してともいえないしなあ)

フエイトにそれを言うことはできない。

「僕、持ってないよ」

正直に告白した。

「持ってないって、どういうことだよ!? 良太郎、落としちゃったのか!?!」

モモタロスが良太郎に詰め寄る。もちろん、胸倉も掴んでいる。

「く、苦しいよ……と、とにかく離してモモタロス」

胸倉を掴んでいるモモタロスの手をパンパンと良太郎はフリーになっっている自分の両手で叩く。

「センパイ! 良太郎ギブしてるって!」

ウラタロスがモモタロスを止めようとする。

「モモタロスさん! 良太郎さんの顔色がどんどん青くなってます!」

ユーノが二足歩行でモモタロスの足にしがみつくと。

「は、早く離して下さい! このままじゃ良太郎さん死んじゃいます!!」

なのはもモモタロスの腰辺りにしがみついて静止しようとする。

「バカモモ!!」

コハナが拳をつくって力を込めようとした時だ。

「モモの字、とにかく手え離さんかい! 良太郎も喋るに喋れへんやろ!」

キンタロスが背後からモモタロスを掴んで良太郎からひっぺがす。

モモタロスが後ろに転がったが誰も心配しない。

「良太郎大丈夫? もう! モモタロスのバカあ!」

とリュウタロスが良太郎の側に寄って心配すると同時にモモタロスに罵声を浴びせた。

「それで持ってないってどういう事なのさ? 良太郎」

ウラタロスが訊ねる。

「うん、実はね。モモタロス、昨日の事覚えてる?」

「昨日の事だあ?」

いきなり話題を振られたモモタロスは起き上がって昨日の事を思い出そうとする。

「そーいや昨日はオマエ、変な女二人組に襲われたんじゃねえか?」

モモタロスは最後辺りには自信がないのかちよつと口調が弱かった。

「まさか良太郎……」

ウラタロスは仮説を声に出した。

「もしかしてその二人に盗られたの？」

「盗られてねえよ。俺がその二人気絶させたんだからな」

ウラタロスの仮説を否定したのはモモタロスだ。

彼はあの時、フェイトとアルフと戦い、きちんと勝利まで収めているのだから強盗説を否定する際に、これほど説得力がある人物(?)はいない。

「モモタロスの言う通りだよ。僕はあの二人にジュエルシードを盗られてない」

「じゃあ、どうしてないのさ？」

「そやそや。強盗にも遭ってないけど、手元にはない。良太郎どういうこつちや？」

「どういうこつちや？」

ウラタロスが更に訊ね、キンタロスが同意し、リュウタロスはキンタロスの口真似をして訊ねていた。

なのは、ユーノ、コハナは良太郎が答えを告げるまで黙って待つているつもりなのだろう。

「あげたんだ」

「誰にですか？」

そう聞いてきたのはユーノだ。

「まさか良太郎、オマエ……」

「嘘でしょ!?ソレしたらいくらお人よしでも度を越えてるつて……」

「カメの字の言う通りや。塩を送るにも限度があるで」

「あるでー」

良太郎がジュエルシードを自分の意思で誰に渡したのかはリュウタロスを除く三人は理解した。

「僕を襲ってきた二人に、ね」

良太郎の発した答えにイマジン達十コハナは「やっぱり」という表情をした。

「……………そう、ですか」

良太郎の答えにユーノは沈んだ。

「ユ、ユーノ君」

「ユーノ、その、ごめんね」

なのはは落ち込むユーノになんと声をかけたらいいのかわからない。

コハナは良太郎のしでかしたことを詫げる。

「あ……………その、ごめんね」

良太郎は所有者（仮）に謝った。

「僕の方こそすみません。焦りすぎてたみたいですよ」

ユーノはそんな良太郎を責めなかった。

いや、正確にいうなら責められなかったのだ。

良太郎はこちらでの知識は皆無に等しいし、こちら側の事情も知らない。

そんな状態の人間に、こちら側の常識をぶつけてることは八つ当たり等に等しいからだ。

ジュエルシードを入手し損ねたのは痛いですが、同時に収穫もあった。

それは、自分以外にもジュエルシードの価値を知っている者がいるということだ。

その人物の名前と所在を聞いてみたいところだが、多分、口を割りそうにないと判断したのでそれ以上は聞かなかった。

良太郎はユーノがこの中でジュエルシードに関することを精通しているとみたので、今気付いたことを訊ねてみることにした。

「そういうえばユーノ達はジュエルシードをいくつ持つてるの？」

ジュエルシードが世界にひとつしかないものではないということ
はモモタロス達が一個所持していたことやフェイトやユーノの態度
を見ればすぐにわかることだ。

「モモタロスさん達がくれた一個と合わせて三個です。やっと七分の一が集まったってところですよ」

三個で七分の一ということとは全部で二十一個ということになる。

(フェイトちゃんも二十一個集めるつもりなんだろうな)

そうになると、なのは達とぶつかる可能性は大だろう。

出来る限りならそんな事にはなつてほしくないと言太郎は願うばかりだ。

「んでよ、良太郎。これからどうすんだよ？」

モモタロスが良太郎に今後の事を尋ねてきた。

「え？」

先程まで真剣に胸中で願っていた良太郎にはモモタロスが何を訊ねてきたのかわからなかった。

「え？じゃねえよ。これからは高町家高町家に住むんだろ？」

正確には寝泊りするの道場だが。

仲間達と共に行動するのならば高町家で寝食を過ごすことはもつともベストだ。

しかし、良太郎はそれを口に出すことをためらった。

脳裏によぎつたのは今朝、玄関で見送ったフェイトの表情だ。

とても寂しそうな表情をしていた。

それに自分はフェイトの笑顔を見たことがない。

なのはと同じ年代の少女があんな暗い表情ばかりしていいはずがない。

(僕がやるべき事、僕がやりたいと思っっている事)

そう自問自答する。

答えはもう出ていた。

「僕はここには行かない」

「」「」「え？」「」「」

全員がその答えに驚いた。

「僕は昨日いた所に戻るよ」

良太郎はそんなことも気にせず続ける。

「良太郎、おまえ本気かよ？」

「うん」

モモタロスの問いに良太郎は力強く頷く。

その瞳に迷いはない。

「わーっつたよ。好きにしやがれっつんだ」

モモタロスは折れた。

これ以上言った所で良太郎の意思は決して曲がらないと判断したからだ。

「センパイ、いいの？」

「そうやでモモの字。良太郎が昨日厄介になったところをわかって言っつるんか？」

「良太郎と一緒にじゃなくて寂しくないの？モモタロスは」

ウラ、キン、リュウは異議を申し立てる。

「テメエら、良太郎のツラ見てみるよ？そんなこと言わせないっつツラしてるぜ」

モモタロスの言葉を信じるわけではないが、三人は確認の際に良太郎の顔を見る。

「……………」

「……………」

「……………良太郎」

ウラタロスとキンタロスは何も言わなくなり、リュウタロスは納得したが寂しいので良太郎の名を呟いてしまう。

コハナは何も言わない。

いや、言うつもりがない。良太郎が無事にそれをやり遂げて、こちらに戻ってくると信じているからだ。

こんな心境に立てたのは彼女にとって非常に不本意ではあるが、彼女が一番殴ったり蹴飛ばしたりしたイメージだったりする。

「あ、あの、そろそろお開きにしましょうか？」

なのはが切り出した。

これ以上は進展がないと判断したのか、それとも場の雰囲気を変えて明るい話題に持ち込もうとしたのかはわからない。

「そ、そうだね。良太郎さん。その、頑張ってください」

なのはの提案に便乗したユーノが月並みな応援を良太郎に送った。
「う、うん。ありがとうユーノ」

それから一時間ほど、雑談等をした。

良太郎が高町家から離れたのはそれから更に十五分後のことだ。

フェイト・テスタロッサはソファの上で体育座りをして時折、玄関を見つめていた。

淡い期待なのかもしれない。

知り合って半日しか経っていない人物がもう一度戻ってくるなんて。

自分だったらどうするだろう。

仲間のいる所に向かってそのままそこで過ごすだろう。

安心するから。

「フェイト……」

アルフはなんと声をかけたらいいのかわからないので、名前しか口に出せなかった。

「だ、大丈夫だよアルフ。良太郎は離れ離れになった仲間の元に行けたんだからさ、むしろ喜ばないと……」

フェイトはいかにも「自分は大丈夫」というような台詞を言うが、表情はそれに反して一層沈んでいた。

ピンポンとインターフォンが鳴った。

自分達はまだ住んで一月も経過していないので集金等ではないはずだ。

しかし、出る気になれないので居留守を使うことにした。

その後、インターフォンが鳴らなくなり、ドンドンとドアを叩く音が鳴り始めた。

「あー、もう……うるさいねえ!!」

先にキレたのはアルフだった。

指を鳴らしながら、玄関に向かっていく。

「アルフ、待って。わたしが行くよ」

先程まで体育座りをしていたフェイトが立ち上がり、ドアノブを回そうとしているアルフを停めた。

アルフはドアノブから手を離し、フェイトに代わる。

フェイトがドアノブを回すと、そこには一人の青年が何か洋菓子が

入っているとされる紙箱を片手に持って立っていた。

「りよ、良太郎？ど、どうして？」

フェイトは訊ねてしまう。

仲間の下に行き、今後はそこを拠点とするからここに帰ってくる筈がないと思っていた。

「そ、そうだよ。アンタ仲間の所に戻った筈じゃ……」

「え、うん。会ってきたよ」

「じゃあ、どうしてここに帰ってきたの!？」

フェイトの心の中で「何故帰ってきた」という疑問と「よかった。帰ってきてくれた」ことの二つが少々ないまぜになっていたりする。

「帰ってきちゃいけない理由ってある？」

良太郎が聞き返してきた。

「そ、それは……」

フェイトとしてもどう言い返したらいいのかわからない。

「それよりも入っていいでしょ？お土産もあるし」

良太郎は持っている紙箱をフェイトに突きつける。

アルフは紙箱の中身が食べ物と判断すると良太郎の手から引っ手繰った。

「う、うん。その、お、おお、おかえり良太郎」

自分でも信じられないくらい緊張している。

日頃言いなれていない言葉なのか上手く言えなかった。

「ただいま。フェイトちゃん」

良太郎は笑顔で言った。

*

夜、雨雲もなく昨日と同じように月が我が物顔で漆黒の空に君臨している頃。

赤色、青色、金色、紫色の仮装(?)をした四人と明らかに小学生くらいの少女が閉店した翠屋の前で何がしかの準備をしていた。

「おいカメ、俺達は何でこんなことやってんだよ？」

モモタロスがコハナから渡された紙の内容を憶えようとしていた。

「しょうがないじゃない。僕達一応、バンドマンって事になってるん

だからさ」

ウラタロスはモモタロスの質問に答えながらも紙の自分が割り当てられている内容を記憶している。

「あー、憶えるのは苦手やけどやらなアカンやろ?」

キンタロスも睡魔と闘いながらも憶えようとしている。

「うー、難しいよー。長すぎるよー」

リュウタロスはギブアップ手前になっていた。

「アンタ達、憶えた?今から五分後に始めるわよ!」

音楽機材を準備していたコハナがイマジン四人組の前に立つ。もちろん、腰に手を当てることも忘れない。

「無茶言うなよ!後五分でこんなモン憶えられるかよ!」

「センパイじゃないけど、それはキツすぎるって!」

「ハナ、もう少しだけ伸ばしてくれんか?頼むわ」

「ハナちゃん。お願い!」

そんなイマジン達の訴えをコハナはというと、

「………何か文句でも?」

低い声で睨みつける。

それだけでイマジン達は沈黙して自らの作業に没頭した。

五分が経過した。

「僕達、歌うんだよね?センパイ」

ウラタロスが隣にいるモモタロスに確認するように訊ねる。

モモタロスは何も言わない。

「カメの字、ここで歌わな俺ら確実にゴクツブシやで」

キンタロスがウラタロスに覚悟を決めるように諭す。

「追い出されるのはヤダー!!」

キンタロスの言葉に覚悟を決めたのはリュウタロスだった。

彼の頭の中にはゴクツブシになるということとは高町家に追い出されるという図式が出来上がっているようだ。

「だったらシメていくぜ!!テメェら!!」

今まで黙っていたモモタロスが獣の咆哮の如く声を挙げた。

コハナが音楽機材の電源をオンにする。

低い感じの音楽が流れだし、やがて高くなると四人同時に声を出した。

本格的になると、今まで我関せずを決め込んでいた一般人たちがわらわらと集まりだした。

塾帰りの小、中、高の学生や会社帰りのサラリーマンやバイト帰りのフリーターに所構わずイチャイチャしまくっているカップルなどがわんさかと集まってきた。

皆、日頃の鬱憤を晴らすかの如く盛大に猛っていた。

「な、何か凄いことになってる……」

コハナは予想外の出来事に驚いていた。

歌っているイマジン達も完全にノリノリだった。

これなら結構稼げるかもと、コハナは自信を持ち始めた。

後にコハナの嘘から始まったイマジン達のバンドチームは「D・M・C（電王メンバーズクラブ）」と命名され、海鳴市のインディーズバンド業界を大きく騒がせるまでの集団になるのだが、そんなことは歌っている面々にはどうでもいいことだったりする。

この一回の演奏でギャララーが投げ込んでくれたお金の総額は三万二千元と結構なものだった。

ジュエルシード争奪戦勃発

第七話 「蹴るけどいいよね？答えは聞いてない！」

その球体は空から降りてきた。

空からといっても、正確には本来はありえないのだが、空に切れ目が走り、割れてそこから出てきたのだが。

球体といってもボールのようなものでなく、光で構成されたものだ。

それは何かを探そうにして行動を開始した。

「う……うん、朝だ」

野上良太郎は目覚し時計代わりに使用とされていたケータロス停下来めて、ベッド代わりに使っているソファから起き上がる。

別世界に来てからもう一週間が経過していた。

フェイト・テスタロッサが所持するジュエルシードは一個。

対して、コハナから得た情報では高町なのは既に六個所有している。

あれから日はさほど経っていないのに更に三個も回収したと聞かされたとき良太郎は驚いた。

「二十一個のジュエルシード……か」

良太郎はなのはが魔導師であることや、ジュエルシードを集めていることなどは一切フェイトには教えていない。

教えればフェイトがどのような行動をとるかはすぐにわかる。

確実に自分の時と同じ事をするだろう。

「……嫌な石だね」

そう本音を呟いてからフェイトとアルフが寝ている寝室を覗む。

この一週間、フェイトから何故ジュエルシードを集めているのかは聞いていない。

自分の意思で集めていることなのか、それとも誰かの指示で集めているのか。

良太郎としてはこの二つの予想の内、フェイトは後者だと考えてい

る。

前者でないと考えている理由は彼女に意思のようなものが感じられなかったからだ。

どこか弱い、そうまるで糸で操られている人形のようなのだ。

「よしっ！」

良太郎は気持ちを切り替えるため、または気を引き締めるために両頬を叩く。

「朝ご飯を作ろう」

キッチンに向かって、三人分の朝食の準備に取り掛かった。

*

本日の高町家の朝はいつもと違っていた。

いつもは家に入るだけで妙な雰囲気、色で表現するならピンク色な雰囲気が漂っているのに、今日は色で表現するなら赤色な雰囲気が漂っていた。

イマジジン達は現在、この家を覆っている雰囲気をよく知っている。「戦い」が起る兆しとなる雰囲気だ。

この雰囲気の発信源は家長である高町士郎だったりする。

「オッス。なのは、ユーノ」

モモタロスは手を軽く挙げてなのはとフレットのユーノに挨拶し、

「なのはちゃん、美由希さん、桃子さん。おはよう」

ウラタロスは女性のみ名指しで挨拶し、

「なのは、ユーノ。おはようさん」

キンタロスは親指で首を捻ってから挨拶し、

「なのはちゃん、フレット君、みんな。おっはー」

リュウタロスは明るく挨拶し、

「おはようございます」

コハナは皆平等にということと特に臆することない挨拶をした。

「ん？いつもと空気違うよな、どうしたんだよ？なのは」

「え、ええと、今日はお父さんがコーチ兼監督をしているサッカーチームの試合があるんです」

「試合するの選手なのになんで監督が雰囲気出してさ？」

「……はは。お父さん、勝負事には熱くなる性格なんで……」
ウラタロスの問いになのはは苦笑しながらも答えてくれた。

勝負事に熱くなりやすい親を持つと苦労するのは子供なのだ。

「なのも苦労しとるんやな」

キンタロスにはポンとなのはの頭に手を乗つける。もちろん、力は極力抑えている。

「フレット君、おいでー」

リュウタロスは周囲のことなど気にせず、なののはの左肩に乗っているユーノを自分の方に来るようにアプローチしている。

「よっと」

ユーノはリュウタロスの手の平に乗っかり、そのまま頭上まで一気に駆け上る。

リュウタロスはそれだけで満足している。

なののはもそんな後景を見て思わず笑みを浮かべてしまう。

「なののはちゃん。おでかけ？」

「え、うん。今日はアリサちゃんとすずかちゃんと一緒にそのサッカーの試合を応援しようって約束してたの」

「アリサちゃん、すずかちゃんって友達？」

「うん。そうだよ」

「へー」

リュウタロスはどこか羨ましそうな声を出す。

「リュウタ君だって友達だよ」

なののははリュウタロスにのみ自分と同年代の口調で話している。

「え？僕も、友達でいいの？」

「もちろんだよ！」

「やったー!!」

リュウタロスは嬉しさのあまり、なののはの両手を掴んでぐるぐるとその場で回った。

「ひゃああああああ」

「落ちるう。酔っちゃううううう」

なのはとユーノの悲鳴は歓喜という沼にどっぷり浸かっているリユウタロスにはまるで聞こえていなかった。

海鳴市の交通の要となっていている橋の下に設けられたサッカーグラウンドには人が集まっていた。

細かく分けると大人が二人、子供が二十人以上、イマジンが四人、フェレット一匹となっている。

今から催されるイベントは子供がメインなのだから占める割合が多くて当然といえば当然だ。

レギュラーとして参加する子供達は両チームともウォーミングアップとしてグラウンドを駆け回っている。

補欠となったりマネージャーとなったりしている子供達はベンチを温めている。

その二つに該当しない子供達。いわゆる観客は三人しかいない。そして、なのはを除く観客であるアリサ・バニングスと月村すずかはサッカー選手そっちのけでなのはが連れてきた居候を物珍しそうに見ていた。

「本当にこれ衣装なの？」

アリサがモモタロスの肩や腕を触りながらなのはに訊ねる。

「どうみても本物にしか見えないわよね」

「な、何だよ!?!俺がそんなに珍しいのかよ!?!あ、コラ、触るんじやねえ!」

アリサはモモタロスの抗議を無視して、頭部の二本の突起物——角をむんずと掴む。

「うわー、すごい!本物みたい!!」

「コラ!金髪チビ!!強く掴むんじやねえ!痛えだろうが!」

モモタロスは本気でアリサを引き離そうとするが、ウラタロスとリユウタロスに押さえられる。

「センパイ、ここは気の済むまで触らせてあげるのが大人つてもんだよ」

「そーだよ。モモタロスー。大人にならなきやー」

リユウタロスはモモタロスの災難を楽しんでいるようにも思える。

「テメエら、後で覚えてろよー!!」

すずかは腕を組んで半分寝ているキンタロスにおそるおそると人差し指でつつく。

「ぐうおおおおおおお」

いびきが出た。

起きないと判断したすずかは今度は太腿部や肩なども触る。

「すごいよ。やっぱり本物みたい」

すずかも好奇心には勝てないのか起きないのいいことにベタベタと触りだした。

「にやははは．．．．．」

なのはは親友二人に「本物だよ」と言いたかったが、言ってしまおう自身が魔導師であることも告白しなければならぬのでただただ苦笑するしかなかった。

(なのは、止めなくていいの?)

ユーノが魔力によって自分以外の相手と交信する補助魔法「念話」を用いてなのはに問う。

(止めたら、今度はユーノ君がいじられるかもしれないよ)

親友二人は可愛いもの好きだ。物珍しいものがいじれないとわかると向く矛先は間違いなくユーノだろう。

(あ、あー．．．．．そうだね。ごめんなさい。モモタロスさん、キンタロスさん)

ユーノは保身のために二人のイメージをおさわり地獄に叩き落とすことにした。

心の中で謝りながら。

「さーて、応援席も温まったところでそろそろ始めますか?」

翠屋JFCコーチ兼監督である士郎は相手チーム監督に試合を始めるように同意を得ようとする。

相手チーム監督も首を縦に振る。

それぞれ、ウォーミングアップしていた選手達は各々の監督の前に集う。

各チームの監督はそれぞれ作戦を選手達に伝えていく。

選手は各ポジションに散らばっていく。

アリサやすずかもモモタロスとキンタロスを触るのをやめ、本来ここに来た目的を果たす心構えをする。

それはなのも同じだ。

サッカーという競技自体あまり知らないイマジン達やユーノは興味津々に瞳を輝かせている。

ホイッスルが鳴り、翠屋JFC側の先制で試合が始まる。

翠屋JFC側と相手側とでボールの奪い合いが行われる。

上手くボールを奪い取った翠屋JFC選手はそのままドリブルする。

そしてノーマークとなっている選手を見つけて、すぐさまパスを送る。

パスボールを受け取った翠屋JFC選手はゴールまでひたすら進む。

その間に、相手側の妨害もあったが、難なくかわしてボールを死守する。

そして、ゴールキーパーが捕り難い位置、もしくは身体が反応しにくい位置を狙ってボールを蹴る。

相手キーパーはボールの軌道を読み間違えたのか、先制点を許してしまった。

アリサやすずかをはじめ、ベンチにいる面々も先制点を捕った事を我がごとのように喜んでいる。

そんな盛り上がりの中、なののは静かに見ているイマジン達を見る。

大まかなルールが理解できてきているらしく、自分達もやりたいという雰囲気を出していた。

特にリュウタロスが。

リュウタロスはベンチから立ち、マネージャーと思しき女の子にボールを催促している。

マネージャーはリュウタロスの厳つい顔に当初怯んだが、声色が自分達と同じくらいだと感じたのか警戒心を解いて、快くボールを一個

貸してくれた。

「へへ、よーしー！」

リュウタロスは嬉しそうに、ボールを右太腿でてんと鞠のように弾ませる。

ボールの軌道が左寄りになると、左太腿で先ほどと同じようにてんと弾ませる。

わざと強く弾ませ、後ろに弧を描くようにぽーんと飛んでいくが、左かかとでバランスよく、弾ませる。

そして、もう一度前に戻すが、右寄りの軌道になったので右太腿で受け止めてまた弾ませ、三回くらいすると両手でキャッチした。

「「おおおおおー！」」

とイマジン三人は素直に拍手を送り、リュウタロスはそれに対してVサインで返す。

いつしかハーフタイムになっていたのか、選手達はベンチに戻っており、皆リュウタロスのプレーに見惚れていた。

「すごいすごい！やるじゃない！アンタ」

アリサはリュウタロスの背中を叩きたいのだが、身長差がありすぎるために腰を叩く。

「ほんとすごいよ。サッカーやってたの？」

「さすがの質問に皆の視線がリュウタロスに向けられる。」

常人ならそれだけで気圧されるのだが、彼はそんなことを気にせず何事もないように答える。

「え？今日初めてだよ。僕このボールに触るのも見るのも初めてだし」

それを聞いて翠屋JFC陣営は硬直した。

初めてであるなにボールを操れるの？とか。

紛れもなく天才だ、とか。

あの格好はコスプレなのか、とか。

身体は硬直しているが、思考は働いているのだ。

なお、この思考はリュウタロスが「変な格好をした人間」ということを前提として起こるもので、ここにいる面々が彼がイマジンという

人間ではない存在だと知っていれば考えずに済んだりする。

「ねえねえ、僕も参加したい!」

リュウタロスが士郎に向かって言った一言に真っ先に反応したのは、彼を除くイマジン達だ。

モモタロスは「あのバカ、でしやばつてんじゃねえ」とでも言いたげな表情を浮かべ、ウラタロスは「やつぱりそう来ると思った」と予想していたらしく、どう適当に言って参加を辞退させようかと考えを張り巡らせ、キンタロスは「無茶やでえ」と呆れていた。

三人の真っ先に思ったことは違えど、底にある思いは共通していた。

どうやってリュウタロスに試合参加を諦めさせるか、だ。

だが、リュウタロスには人の精神を一時的にコントロールするという裏技がある。

自分の望みが叶わない時には使うだろう。

そうなるはこちらではどうしようもないことだ。

イマジン達は監督を見る。

リュウタロスの意見を通そうか否かを考えているようだ。

「リュウタロス君」

士郎がリュウタロスを見る。

「なーにー? おじさん」

リュウタロスは無邪気に聞く。

「試合に出てみたいかい?」

「うん! 僕出てみたい!」

「君はサッカーを知ったのが今日だ。そんな君をいきなり後半フルで出すわけにはいかない。わかるね?」

「うーん、何で?」

わかっていた返答なので、ウラタロスがリュウタロスのそばまで歩み寄る。

「カメちゃん、どうしたの?」

「リュウタ、よく聞いて。士郎さん達は今日の試合に勝つためにたくさん練習してるんだ」

「ふんふん」

「そして、前半で一点取ってるから今のところ、こちらが勝ってる。でも取れるなら更に点を取って、相手と差を開けておきたいってのもわかる?」

「うん!」

「そのためにはそういう作戦があらかじめ練られているってのもわかる?」

「うーん、なんとなく」

熱心に聞いていたリュウタロスだが首を傾げる。

「ここでもし、サッカーの素人であるリュウタが入るとどうなる?」

リュウタロスは以前、自分の勝手な行動がどのような結果を招いたかを思い出す。

皆に迷惑をかけた。

最後は何とかなったが、あくまで結果オーライなだけだった。

そして、自分が後半入ったとしたらどうなるかを想像する。

もしかしたら、逆転負けになるかもしれない。

負けるということは練習してきた翠屋JFCの選手が悲しむ。

それだけではない。士郎も悲しみ、それは娘であるのはやその友達も悲しむということだ。

それは絶対に嫌だ。

「おじさん、僕それでも構わないよ」

「そうか。わかってくれたか。ありがとうリュウタロス君」

士郎は笑顔でリュウタロスの両肩をばんばんと叩いた。

「よし、皆集まってくれ。これからある作戦を立てるからしっかりと聞いてほしい」

その作戦にはリュウタロスも含まれていた。

後半。相手側からのキックオフで試合が始まる。

士郎は選手達を仁王立ちで見守る。

補欠二人はリュウタロスにトラップの仕方を教えていた。

リュウタロスは熱心に練習している。

応援者は三人から六人になった。

モモ、ウラ、キンも応援するようになったからだ。
相手側からの猛烈な攻めも翠屋JFCはひたすら防ぐ。
パスをカットしたり、シュートチャンスを与えなかったりと様々な
方法で。

しかし、それでもゴール付近まで接近を許してしまうが、キーパー
がきちんとシュートの軌道を読み取ってキャッチする。

そのプレーに観客席はというと、

「キーパー、すごい！」

「うん、ほんとー！」

とアリサとすずかは興奮気味になっており、

(今のがないすぶれー、なんだね。なのは)

(うん、今のがナイスプレーなんだよ。ユーノ君)

ユーノとなのはは念話で先程のキーパープレーを褒め称えていた。

「アイツ、根性あるじゃねえか」

「それだけじゃないよ。咄嗟で決断する勇気は大したもんさ」

「先行き楽しみやな。あのキーパーは」

イマジン達三人も彼らなりの言い方で褒めちぎっていた。

現在の所、一対〇と翠屋JFCがリードのままだ。

士郎は自身の腕時計を見る。

残り時間は十五分となっていた。

もし、相手側に点をとられると同点となり、延長戦まで持ち込まれる可能性は充分にある。

士郎はここで先程のハーフタイム時に計画していた作戦を実行する決断をした。

交代の指示を出す。

交代したのはフォワードの一人とリュウタロスだ。

「イエーイ!!」

グラウンドに立ったリュウタロスは無差別にVサインをしまくっていた。

「あ、あのリュウタロスさん」

翠屋JFCフォワードの一人が確認のためおそるおそるだが、リュ

ウタロスに近寄る。

どんなに性格が子供でも外見が外見なので怖がるのも無理はない。事実、相手チームもリュウタロスがグラウンドに立つと、皆どこか緊張している。

「監督の立てた作戦、覚えてますよね？」

「うん、僕は皆からボール貰ってひたすらシュートするっていう作戦でしょ」

「そうです。とにかくどんな距離からでもいいんでガンガン蹴ってください」

「うん！わかった！」

そして、試合は再開された。

翠屋JFCは相手側からボールを奪って、すぐにリュウタロスにパスする。

「それえ!!」

受け取ったボールを受け止めてから、迷いなくシュートする。

ボールは一直線にゴールに向かっていく。

だが、軌道がどんだん上に向かっていき、ゴールバーに当たって落ちた。

相手側は誰も声が出なかった。

速いがコントロールは悪い。

だが、破壊力は充分にある。その証拠にまだゴールバーはぐわんぐわんと激しく揺れている。

アレを身体を張って止めようとは思わないだろう。

相手側キーパーはボールを蹴って、味方に攻めるように指示する。

翠屋JFC陣営もそれに対して徹底抗戦の体勢を取る。

ボールを奪い、奪われの繰り返しを両チームは繰り返す。

その間、リュウタロスは自分のポジションでステップを踏んでいった。

ボールが来たらシュートをするというのが彼の仕事だ。ボールがこなければ彼は仕事をする事が出来ないということだ。

「皆、すごいなあ」

リュウタロスはしのぎを削っている面々を見て素直に称賛した。

「リュウタロスさん!!」

チームメイトの声と共にボールが飛んできた。

そのボールを胸で受け止め、シュート体勢に入る。

「よおーし!!今度こそ!!」

シュートする。

今度は一直線に進む。

だが、何の捻りもないただの真っ直ぐなのでキーパーとしては何の恐れもない。

「入っちゃえー!」

リュウタロスの想いに応えるようにボールはキーパーの腕の中で回転し続ける。

相手側キーパーの足がずると下がっていく。

やがて、ゴールラインを越えた。

つまり一点入ったということだ。

「入った。やったー!!僕のシュートが入ったー!!」

ここで試合終了のホイッスルが鳴った。

翠屋JFC前半一点 後半一点の計二点の勝利で終わった。

「皆、今日は練習通りにいけたぞ!!さあ勝ちどきとしてメシでも食うか!?!」

監督の提案に翠屋JFC面々は大喜びした。

もちろんイマジジン達も大喜びした。

参加者、補欠、応援者は全員で翠屋に向かった。

その中、補欠の一人が荷物を準備するのに手間取っていた。

「凄いなあ。あんなシュート、僕も出来たらなあ」

そんなことを呟く。

「やっぱり、レギュラーになりたいなあ」

本音が出た時だ。

光の球体が何処から物音も立てることもなく現れた。

そして、彼の中に入り込んだ。

彼の身体から砂がこぼれだし、それはやがて何かひとつの形を作っ

ていく。

その容姿はチーターだった。

完成した形は上半身が地面に、下半身が宙に浮いているという何とも異様なものだった。

そしてそれは彼にこう告げた。

「おまえの望みを言え。どんな望みも叶えてやろう。おまえが支払わなければならない代償はたったひとつ」と。

第八話 「トラブルは油断と共に」

高町桃子とコハナは現在、厨房で調理中だった。

といつても、主に料理を作っているのは桃子でコハナは完成した料理をテーブルに持っていただけだが。

なお、コハナの名誉のために言うと、彼女は決して料理の腕が壊滅的に悪いわけではない。

むしろ、それなりに良い方だ。

ただ、今回のようにスピーディにこなす域には達していないため、あえて運び役に回ったのだ。

翠屋は現在、翠屋JFCの貸切状態となっている。

なお、このJFCメンバーの食事代は全て高町士郎の給料から天引きされることになっていたりする。

イマジン達も食べれると喜んだのだが、コハナが睨みつけたために自腹を切るカタチになっていた。

「くっそお、あのコハナクソ女めえ！睨むことはねえだろうよ」

モモタロスはそう言いながら翠屋特製プリンを食べていた。

「センパイ、ヤケプリンは良くないよ」

ウラタロスは自腹をケチるためにコーヒーを飲み、好物をやケ食いつているモモタロスを宥める。

「ほっとけほっとけ。いつものことや」

キンタロスは特に何かしたわけではないのに、すでにパスタを三杯食っていた。

「だからって、何で僕までー」

試合に参加したりユウタロスも例外でなく、自腹だった。

それでも空腹には勝てないので、仕方なくケーキを頼んでいた。

「アンタ達、何か言った？」

コハナがイマジン達を睨んでいた。

「別に」

と声をそろえた。

「ん？何か臭うぜ」

モモタロスが鼻をクンクンする。

「喫茶店なんだから臭うのは当たり前だよ」

ウラタロスは二杯目のコーヒーを飲みながら、何を当たり前なことを言ってるのさ、というような表情を浮かべていた。

「モモの字、どないしたんや?」

キンタロスは何杯飲んでも無料の水を飲みまくっている。

「モモタロス、お医者さんに行ったら?」

ケーキを食べながら病院に行くように勧めるリュウタロス。

そもそもイマジンを診てくれる病院などあるのだろうか。

腹の中で「後でぶちのめす」と思いながらも、モモタロスは言うべきことを告げる。

「そうじゃねえよ。俺達以外のイマジンの匂いがするって言うてんだ」

その一言に今まで真面目に受け取らなかった三人の雰囲気が変わった。

「それマジ?」

「ああ、間違いねえ」

ウラタロスが念を押すように訊ねるがモモタロスの返答は変わらなかった。

「でも、何でイマジンが別世界におるんや?俺らと同じ方法でも使ってきたんか?」

「さあな。そこまではわかんねえよ」

深く考えることはモモタロスの分野ではないので、投げやりに答える。

「オーナーのおじさんに訊いてみたらいいんじゃない?」

リュウタロスがもつともなことを言っ水て水を飲み始めた。

「それでモモの字、その臭いは近いんか?」

キンタロスが臭いの源と自分達との距離がどのくらいなのか訊ねてくる。

「ああ、近いぜ」

モモタロスは自信を持って答えた。

「とんでもなく、な」

翠屋の床に撒かれている砂を見ながら。

高町なのはとユーノ・スクライアは翠屋店内でなく外にいた。

そこでユーノはアリサ・バニングスと月村すずかにいじられていた。

なのはに念話で動物らしい仕種をしたほうがいいという指示を受け、「お手」と言われれば右前脚を出すなどをしていた。

そんな仕種を見てアリサとすずかはユーノの頭を撫でるが、なのはは念話で、

(ごめんね、ユーノ君)

と謝るしか出来なかった。

やっているユーノも正直辛かった。

何か自分の中で大切なものが消えていく感じがした。

「もう辞めたいんだけど」とフェレット語(キューキューという)で言ってみても動物は人間の言葉を理解できても話すことが出来ないと思っっているのはの親友二人にはその思いは届かない。

翠屋入口には翠屋JFCメンバーが食事を終えて、外に出ていた。

士郎が今後のチームの抱負と目的をメンバーに告げると、解散した。

なのはは何気なく、翠屋JFCメンバー達に視線を向ける。

キーパーを務めていた少年が自分のスポーツバッグから何かを取り出した。

とてもとても見覚えのある物だった。

それを自分のジャージのポケットの中に放り込む。

マネージャーを努めていた女の子が歩み寄り、共に労いの言葉を掛け合っつてその場から離れていく。

(あれって……)

(どうしたの?なのは)

フェレットが心配そうになのはを見つめる。

念話は繋がっていたので、なのはの心境はダダ漏れだった。

(ううん、何でもない。何でもないよ。ユーノ君)

そんなはずはない。そう、そんなことがあるはずがない。

なのははそう自分に言い聞かせていた。

あれがジュエルシードであるはずがない、と。

そこは壁に落書きがあつたり、張り紙が破られて跡が無数残つていたりとお世辞にも華やかさが無い路地裏。

そんな陰気臭い場にはあまりに不釣り合いの少年がいた。

翠屋JFCで補欠になっていた少年だ。

しかし、彼は一人ではない。

目の前にいる何かと会話をしていた。

「サッカーとやらでレギュラーになりたいのか？」

上半身と下半身が逆転しているそれは対面の少年に確認するように尋ねる。

「は、は、はい」

少年は怯えながらも頷く。

当然といえば当然だろう。

昔、おとぎ話で読んだ願いを叶えてくれる存在、いわば「精霊」は人間に対して、結構友好的だったような気がする。

だが、目の前にいるそれは「精霊」と呼ぶにはあまりに愛嬌の欠片がない上に、愛想もない。

むしろ「怪人」と呼んだ方が適当に思えるほどの容姿だった。

「オマエの望み、しかと聞いた」

チーターの姿をした砂の塊に色がついていき、上下逆転していた身体は二足歩行する生物の本来の状態になっていく。

実体化したそれは身体全身を伸ばし、その場から跳躍しビルをたんとんと渡りながら離れた。

「どうやってレギュラーにするんだろ？」

補欠少年は愛想も愛嬌もない「精霊」がどのような方法で自分をレギュラーにするのか聞くのを忘れた。

*

テレビに映っているバラエティー番組の音声をBGMに青年一人、少女二人はあることを三人である作業をしていた。

それは遅めに摂った朝食（昼食ともいう）の皿の片付けだ。

野上良太郎は、食器を洗っており、

フェイト・テスタロツサは洗い終えた食器を布で拭き、

アルフは拭き終えた食器を棚にしまっていた。

「さすがに早く片付くね。ありがとうフェイトちゃん。アルフさん」

良太郎は蛇口を捻って水を止める。

「そんな、このくらい遠慮なく言っていよいよ。良太郎」

フェイトが自分も手伝うとアピールする。

「そうそう、美味いご飯作って、掃除なんかもやってくれてんだからさ。このくらい遠慮なく言いなってる」

アルフもどんと胸元を拳でドラのように叩く。

二人とも積極的に家事に参加したいようだ。

「う、うん。わかった。これからは遠慮なく言うよ」

二人の申し出をありがたく受け取り、笑みで返す良太郎。

フェイトとアルフは目と目で「やった！」とコンタクトを取った。

「さてと、今日の夕飯はと……」

冷蔵庫を開けて、夕食を考える。

ミネラルウォーターと牛乳がひとつにパンに塗るためのマーガリンとジャムしかなく、あとは何故かドッグフードの缶が数個置いてあるだけだ。

ハッキリ言って何も無いに等しかった。

「フェイトちゃん、アルフさん。夕飯は何が食べたい？」

良太郎が何も入っていない冷蔵庫を見ながら二人の要望を訊ねる。

「わたしは何でもいいよ」

「あたしも何でもいい！できれば肉が入っているとありがたい！」

二人の要望は両極端のものだった。

「僕の好きな好物でいい？」

折衷案を出すことにした。

「わたしはいいよ」

「あたしも異義なし」

「じゃ、決まりだね」

冷蔵庫を閉めた。

「それじゃ、買いに行かないとね

良太郎は財布をポケットに突っ込み、歩いて五分ほどの距離にあるスーパーに行く準備をする。

「買出し？わたしも行くのか？」

行こうか、などと言っているが「連れてって」というような雰囲気
がフェイトから醸し出されている。

アルフを見ると、「連れてってやりなよ」と目で訴えている。

「わかった。じゃあ、一緒に行こうかフェイトちゃん」

「ありがとう。良太郎」

フェイトは笑みを浮かべたが、やはりそれは場を取り繕うための笑
みだった。

歩行者信号で仲睦まじい二人が青信号になるのを待っていた。

翠屋JFCでキーパーを務めた選手とマネージャーだ。

二人は手を繋いで青信号になるまでの間、他愛のない会話をしてい
た。

昨日のこと。

学校でのこと。

今日のこと。

これからのこと。

様々だ。

少年は先程見つけた青い石の事を思い出した。

とても綺麗な石で、彼女にあげるつもりだった。

ポケットから取り出し、彼女に渡す。

少女の瞳が輝き、青い石を受け取る。

「ありがとう」

と、笑みを浮かべた。

少年はその笑みを見て、照れくさそうに頬を掻く。

二人にとっては幸せの時間だった。

ただし、青い石がまばゆいまでの光を放つまでの儂いものだが。

良太郎はフェイトと共にとあるスーパーで夕飯の買い物をしてい

た。

ショッピングカートを押しており、買い物カゴは上下二段とも使用している。

もちろん押しているのは良太郎で、フェイトは専ら食材を探す係だ。

「良太郎、今日は何するの？」

フェイトは良太郎が指示する食材を探しに行くだけで、彼が何を夕飯にしようとしているかはわかっていないようだ。

「今日はね、チャーハンだよ」

「チャーハン？どんなの？」

フェイトは知らないらしい。

良太郎は自分が知っている知識（偏りあり）で説明した。

「へえ、おいしそうだね」

という感想が返ってきた。

「結構、美味い不味がハッキリ出る料理だからね。気合入れて作らないとね」

そう言って良太郎は気合を入れるポーズを小さく作った。

ズボンのポケットから音楽が鳴り出す。

発信源はケータロスだ。

取り出して、通話する良太郎。

「もしもし」

『ああ、良太郎、僕だけど』

相手はウラタロスだ。

「どうしたの？」

『今ね、センパイの鼻を頼りにイマジンを追いかけているんだけどね』

良太郎が深刻な表情になる。

「イマジンが？どうして別世界（こ）にいるの？」

『それはわからないけど、良太郎今何してるの？』

良太郎はウラタロスと会話しながらも隣にいるフェイトを見る。

「家主と買い物してるけど」

『じゃあ、買い物が終わってからでいいから手伝える？』

ウラタロスの申し出を聞きながら良太郎はもう一度フェイトを見る。

「ちょっと待ってて」

ケータロスを耳から離し、フェイトに訊ねてみることにした。

「フェイトちゃん。僕、買い物終わってから少し用事に出かけるけどいい？」

フェイトは良太郎を見る。

先程見せた深刻な表情だ。

良太郎と共同生活をしてから一週間、こんな表情は見たことがない。

いや、違う。

一度だけある。

そう、初めて会った時、電王に変身する前に見せたのだ。

「良太郎、もしかして戦うの？」

フェイトは良太郎の用事の核となる部分だけ訊ねる。

「……」

良太郎は誤魔化さず首を縦に振るだけだ。

「うん」とも「そうだよ」とも一言も発さなかった。

「……気をつけてね。良太郎」

その一言を肯定と受け止めると、良太郎はケータロスを耳元に当てる。

「買った物を家に置いてからすぐそっちに向かうよ」

ケータロスを切つて、ポケットにしまいこむとレジに向かった。

モモタロスとウラタロスは翠屋に残った微かな臭いを辿りながら、イマジンを捜していた。

「くそー臭いを辿ってるから間違ってることはねえけどよ。相手が速過ぎるぜ、つたく……」

「しかし、イマジンがこの世界にもいるなんて驚きだよね」

走りながら、モモタロスは苛立ちを隠さずにウラタロスは別世界のイマジンの契約内容を予想していた。

「ねえセンパイ」

「あん？何だよカメ。今、臭いを集中して探ってるんだからくだねえこと言いやがるとぶっ飛ばすぞ」

「今回の契約者ってさ、もしかして……」

「とつつあん（高町士郎のこと）のチームのガキだろうな。翠屋にイマジン特有の砂がこぼれてたから間違いねえよ」

「じゃあ、内容はやっぱりレギュラーになりたい、とかかな？」

「そんなところじゃねえのか。多分な」

「こればかりは契約者に直に尋ねてみないとわからないことだ。」

「ん？センパイ、アレ見てよ」

路地裏前でウラタロスがあるものを発見した。

「イマジンか？カメ」

「違うよ。アレ」

そこにはその場には似つかわしくないジャージ姿の少年が何をするでもなく、ただ佇んでいた。

その仕種が何か不自然に感じた二人は少年のそばまで歩み寄る。

少年の目はどこか虚ろで正面に立っている自分達を見ているようには思えない。

試しにウラタロスは翠屋から出る際にコハナから渡された無記載状態《ブランク》のライダーチケット（以後：チケット）を少年に向ける。

二人はチケットの変化を凝視する。

しかし、チケットにはイマジンのイラストも年号・月・日も記載されなかった。

「何も変化するね」

「どうやら、まだコイツの望みを実行中ってところか」

無記載チケットにイマジンのイラスト、年号・月・日が記載されるのは契約者の望みを完了したときだ。

「早いとこ、やるしかないぜ。俺達は別世界じゃいつも通りってわけにはいかねえからな」

「もちろんだよ。センパイ」

路地裏から出ると、また臭いを頼りに搜索する二人。

何やら後ろから悲鳴のような驚きのような声が聞こえてくる。

「何だよ？さっきまで静かだったのに、急にうるさくなりやがって」
「変だね。一体、何が起こって……」

ウラタロスが後ろを向くと、何やら巨大な蛇のようなものがコンクリートの地面を抉りながらこちらに向かってきた。

「セ、センパイ！う、後ろ見て！後ろ！」

隣にいるモモタロスの肩を叩く。

「何だよ？つたくよ……おおおおおおおおおおおおおお」

茶色いウネウネした蛇のようなものがこちらに向かってくる。

「何だよ!?アレ!!」

「知らないよ！とにかくこっちに向かってくるから逃げようよ!!」

とても真正面から立ち向かっても勝てる気はしないので、二人はその場から離れるため走り出した。

とにかく全力で。

なのはがそれを感じた時、今まで自身を覆っていた眠気と支配していた気だるさは一瞬で吹っ飛んだ。

パジャマから私服姿に着替えて、ドタドタと階段を鳴らしながら降りていく。

途中、風呂場から父親の「一緒に風呂入るか？」という誘いがあったが、それを断る。

なお、断られた父親が若干へこんだことは娘は知らない。
外に出ると、二人は何がしかの異変を身体全身で感じた。

ユーノは肩から降りて自分で走り、現状を把握するために手頃な場所を探す。

「なのは、あそこのビルの屋上に行こう。街で何が起こったかを知るためには高い所から見たほうがいい」

「うん！」

ユーノが顔でクイクイっと目的地であるビルを指す。

ビルの屋上までひたすら走る。

息を荒げながらも非常階段を上る。

運動神経がそれほど立派ではないため、運動神経抜群な同世代と比

べると階段を上る速度は遅い。

しかし、それでもなのは全力で非常階段を駆け上る。カンカンカンとうるさい音を立てながら。

屋上まで駆け上ると、一休みするこなく街全体を見回す。

巨大な樹木が街全体を蹂躪していた。

アスファルトで舗装された道は抉れ、樹木の重量に耐えられない建造物はひしゃげたり、崩れたりしている。

一見するとファンタジックな風に見えるが、被害状況を見たらそんな風には考えられない。

なのははスカートのポケットからひとつの紅い珠を取り出す。

レイジングハートだ。

「レイジングハート、お願い！」

そう叫んでレイジングハートを天に向かって投げる。

特殊な空間に包まれ、なのはの衣装が私服から対魔法用衣装へと切り替わる。

その空間から解放されると、魔導師としてのなのはが出現した。衣装はどこか聖祥学園の制服を思わせるようなデザインとなっている。

右手には杖の姿をしたレイジングハートが握られている。

(やっぱり、あの子を持ったのはジュエルシードだった……)

あの時、自分が見たものは間違いではなかった。

即回収すればこんな大惨事にならずに済んだのに。

後悔が彼女を一時支配したが、なのはの目つきは鋭くなる。

「どうしてこんなことになったの？」

「発動者が人間だからだよ。人間の思いがジュエルシードの力を最大限に発揮させたんだ」

なのはの問いにユーノが即答した。

「こういうときはどうしたらいいの？ユーノ君」

「ええと、そうだね。まずはこの状況を作り出した核となっている発動者を見つけてるんだ」

「発動者を見つければいいんだね？」

「うん、そうだけどつて、あれは……」

ユーノはなのはに続きを話そうとすると、聞き覚えのある声がするのでふと下（地上）を見てみる。

そこには知っている赤と青の二人がいた。

「どうしたのユーノ君つて、あの二人は……」

モモタロスとウラタロスだった。現在、巨大樹木の根から全力で逃がっている。

「モモタロスさん！ウラタロスさん！」

なのはは二人に声をかける。

走っている二人は声のする方に顔を向ける。

「センパイ、あれ！」

「なのはとユーノじゃねえか！カメ、あのビルに向かうぞ！」

「オツケー、センパイ」

二人は走る方向を変えて、なのはとユーノがいるビルに向かった。

「……何これ？」

良太郎が荷物を家に置いて、外に出ると、先程までとは違う光景にただ呆然としていた。

「とにかく、イマジンを捜さない……」

自分のやるべき事を口に出して、行動する。

だが、モモタロスのように臭いを辿って探るなんて芸はできないので、目で捜すしかない。

ケータロスをポケットから取り出して開く。

『着信アリ』というメッセージは表示されていない。

良太郎は『6』を押してから通話ボタンを押す。

通話相手はウラタロスだ。

『もしもし、誰かな？』

とキザでおどけた感じの声が出た。

「ウラタロス、僕だけど」

『良太郎、今どこにいるの？』

「家主のマンションを出たところ。そっちは？」

『僕とセンパイは今、なのはちゃん達と一緒にビルの屋上にいるよ。』

場所はここだから来てね?』

そう言っただけで通話が切れた。

そして、ケータロスのディスプレイに海鳴市の地図が表示され、二つの点が点滅していた。

ここにモモタロスとウラタロスがいるのだろう。

自分の現在地から目的地まではさほど遠くない。

(別世界に来て一週間、暇があれば散策してたけど、こんなかたちで役立つなんてね)

良太郎は目的地の方角を睨む。

「みんな待ってて。今行くよ」

良太郎は駆け出した。

目的地であるビルの屋上に到着すると、海鳴市を蹂躪している怪物を見渡すことができた。

ひどい状況だ。

「この状況を説明できる人っている?」

怪物が何故出現したのかを尋ねる良太郎。

「ジュエルシードの力が最大限に発揮されたんです」

ユーノが簡潔に説明してくれた。

「……そうなんだ」

もう一度、良太郎は怪物を見る。

「良太郎さん」

ふと声がかかった。声のする方向に顔を向けると、魔導師姿のなのはがいた。

「なのはちゃんはジュエルシードの封印?」

「はい、これから発動者を捜すところなんです」

そう言いながら、なのはは真剣な表情で杖を怪物に向けている。

『エリアサーチ』

と杖が発すると、桜色の光が無数に飛散した。

「なのはも気合入ってるな。俺も負けてらんねえぜ」

そう言いながらモモタロスも怪物に向けて鼻をクンクンしている。

探索能力のない者達は結果が出るまで待つしかない。

良太郎もそんな一人だ。その横に肩にユーノを乗つけたウラタロスが歩み寄ってきた。

「イマジンの契約者ってわかってるの？」

「まあね。契約者は翠屋JFCの補欠君さ。そして、まだイマジンは契約を完了していない」

「イマジンが契約完了してないって何でわかるの？」

「契約者にね、チケットをかざしたんだけど変化がなかったんだよ」

良太郎はその一言ですべて理解した。

「なるほど、だからここにいて言い切れるんだね」

「そういうこと」

それから時間にして三分くらい経過したところだ。

「見つけた！」

「あそこにいるぜー！」

なのはとモモタロスがそれぞれの獲物を探索できた。

その場所はなんと同じところだった。

「なのはちゃん」

良太郎はある事を確認するためになのはに歩み寄る。

「どうしたんですか？良太郎さん」

「ジュエルシードの発動者のそばに何か怪人みたいなのいた？」

なのはは先程の探索の際に頭に直に入り込んだ映像のひとつを思い出す。

「あ、はい。いました。チーターの姿をした怪人でした」

「これで決まりだね。なのはちゃん」

「はい？」

「封印にはもしかしてタイムリミットってある？」

「え、ええとユーノ君」

「特にありませんけど、早いに越したことはないですよ」

良太郎となのはは後学のために、ユーノの言葉に真剣に耳を傾ける。

「僕達がイマジンを倒すかあの場所から離すまで封印って待ってもら

えるかな？」

良太郎の申し出になのはとユーノは疑問を浮かべる。

「どうしてですか？」

「これは多分推測なんだけど、そのジュエルシードの発動者のそばにイマジンを契約を果たすために必要な物、もしくは人がいると思うんだ」

「じゃあ、もしわたしが封印したら……」

「最悪の場合、無防備になったその人を襲うかもしれないね。皮肉なことにジュエルシードの力によつてその人はイマジンから守られるからね」

なのはは悩むことなく、決意を秘めた瞳を良太郎に向ける。

「わかりました。イマジンを倒すかあの場所から離れたら封印します」

「ありがとう、なのはちゃん」

良太郎も真剣な瞳で返す。手には自らのチャクラで具現化させたデノオウベルトが握られていた。

勢いよく腰に巻きつける。

「モモタロス、は……」

憑依相手候補その一は慣れないことをしたのかどこかグツタリしていた。

「ウラタロス、行くよ」

「じゃ、やりますか」

ウラタロスはその気になっている。

パスを取り出す。

なのはとユーノは良太郎の仕種を瞬きひとつせず、見ている。

「変身ー」

良太郎はそう叫ぶと同時にデノオウベルトのターミナルバックルにセタッチする。

良太郎から素体状態のプラット電王に変身する。

ターミナルバックル隣にあるフォームスイッチの青色を押す。

ソードフォームに変身する前に流れたミュージックフォームとは

違うものが流れた。

そしてもう一度、パスをセタッチする。

『ロッドフォーム』

機械音声がそう発すると、プラットフォーム電王の前に無数のオーラアーマーのパーツが出現した。

それらは一周すると、それぞれの部位に装着されていく。

ソード電王時に正面になっていたパーツは背に、後ろとなっていたパーツは左右に展開し、青色をメインとしたパーツとなり、正面に装着される。

頭部に出現し、眼前で停まった電仮面は海亀のような形をしており、アーマー同様青色だった。

変身が完了すると、その場でぐるりとターンした。

電王ロッドフォーム（以後：ロッド電王）の完成だ。

そして腰部にある専用ツール、デンガツシャーに触れる。

左パーツ二つを縦連結させてから、右パーツを先程連結させたパーツを覆うように上下に連結させる。

そしてフリーエネルギーが加わり、使用者と同等の長さまで伸びる。

「ふえええええええ。良太郎さんにウラタロスさんが乗り移った!？」

「こ、これがハナさんが言っていた電王!？」

なのははただただビックリし、ユーノはコハナが言っていたことを思い出した。

ロッド電王はそんな二人のことなど目もくれずに次の行動に移る。

空の一部が揺らぎロッド電王の専用車とも思わせるデンライナー

『イスルギ』が出現した。

「それじゃね。なのはちゃん、ユーノ」

そうウラタロスの声が発すると、イスルギに乗った。

車体後方に搭載されているカメ型メカ『レドーム』が分離して、イマジンのもとに向かった。

チーターイマジンが発動者である少女の隣にいる少年を狙っていた。

だが、自分の爪が通らないのでどうしようかと考えあぐねていた。頭上を影が覆った。

見上げると、青い円盤のようなものが浮いていた。

そして、中央に乗っている人物を睨みつける。

「貴様、何者だ？」

「僕の事を知らないなんて全くしやうがないな。僕は電王さ。覚えておいてね？あとさ……」

電王と名乗るソレはさらに続ける。あまり続きを聞きたくなくなったりするチーターイマジン。

しかし、次の一言は自分の神経を逆撫でするには十分だった。なぜなら、

「オマエ、僕に釣られてみる？」

なんて言ったのだから。

第九話 「反省は次のステップに」

怪植物の核となつているところにとある二人がいる。

ロッド電王とチーターイマジンだ。

現在、二人とも睨み合っている最中だ。

両者ともに人間のようにコロコロと表情が変わるわけではないので、側から見るとわからない。

ロッド電王は専用の飛行メカ『レドーム』から降りる。

降りてからデンガツシャードロッドモード（以後：Dロッド）の切先をチーターイマジンに向ける。

「悪いけど、後が立て込んでるんで早急に片付けさせてもらおうよ？」
「なあにい!?!」

チーターイマジンの声に怒りが混じった。

その証拠に両腕の爪が急激に伸び出す。

今の挑発じみた台詞で少しは本気になったのだろうとロッド電王は判断した。

Dロッドを手元に寄せると、右手でDロッドの中間部を持ち、後方を左手で持つという槍を構えるような型を取る。

そして、そのまま一直線に駆ける。

右手を離して、左手だけでチーターイマジンの鳩尾みぞおちを狙う。

突きが速かったらしく、避けられずにまともに喰らってしまう。

「げえふっ」

そんな声を挙げるが、次の攻撃に動きを切り替える。

Dロッドを寄せた後、空いている右手を左手よりさらに下部に持ち、横から右脇腹を狙う。

Dロッドはデンガツシャードモード（以後：Dソード）と違い、

『しなり』があるため、軌道が読み辛かったりする。

『斬る』ではなく、『叩きつける』という表現が相応しい攻撃だ。

「まだまだあー！次行くよー！」

さらに踏み込んで、Dロッドの向きを下部を前にして搦り上げるような動作を取り、アップパーカットの要領で顎を捕らえる。

「!#\$%&」

顎に直撃し、声にならない声を出すチーターイマジン。

このままやられっ放しというわけではないので、すぐさま先程伸張させた爪で攻撃を繰り返そうとする。

右、左、左、右と攻撃を繰り返すが、Dロッドで難なく防ぐ。

ある程度、距離が縮まると両者はどちらかが合図を取ったわけでもないのに後方へと下がる。

「そんなんじや僕は倒せないって」

ロッド電王は指をチツチツと鳴らす。

相手を逆上させて冷静さを欠き、動きを単調なものにさせる。それがロッド電王の戦闘スタイルだ。

「このお、なめやがってえ！」

ロッド電王の策通りに事は上手く進む。

「センパイより単純だね？まっ、僕にとってはありがたいからいいか」
(それ、モモタロスが聞いたら怒るよ?)

と、深層心理の中にいる良太郎が苦笑した。

Dロッドを先程と同じように構えてから直進する。

チーターイマジンはDロッドから繰り返される攻撃に警戒している。

「なるほどねえ」

動きから読み取ったロッド電王は裏をかくことにした。

Dロッドで攻撃すると、見せかけて飛び膝蹴りを顔面に喰らわせる。

「な、ななな……」

そのまま、あお向けになって倒れる。

「くっ…やりにくい相手だ」

チーターイマジンは起き上がりながら鼻元を押さえ、率直な感想を述べた。

じりじりと後方へと気取られないように下がっていく。

この場を離れて、別の翠屋JFCレギュラーを狩るのだろうとロッド電王は判断した。

イマジンならば目先の電王より契約完了を選ぶのは別に間違っていない。

「この場を離れて、契約重視？仕事熱心だねえ」
それを知ってて皮肉をぶつける。

「!!」

この一言でチーターイマジンは『下がって契約執行』という選択肢を捨てる。

「貴様！とことん俺をコケにしやがってえ」

伸張した両爪をクロスさせてから構える。

相手が本気になったと判断したロッド電王は右肩にもたれさせていたDロッドを構え直す。

両手ではなく、右手で持ったまま直進する。

同じ轍を踏むつもりはないらしく、素早く右側に避ける。

「後ろがから空きだ!!」

背後に回って後頭部を狙おうとするが、そこに後頭部まはなく、左右を見回す。

「甘いよー」

ロッド電王はどこかに瞬間移動したのではなく、その場に素早くしやがみこんでいた。

背後にいるチーターイマジンに向き直ると同時に、Dロッドで左ふくらはぎを叩く。

「ぐうっ」

中腰ですかさず、左脇腹に狙いをつけて叩きつける。

「があっ」

左ふくらはぎのダメージも残っている状態なので、更に効く。

「もうひとつ、おまけー」

と、左側頭部を狙って、思いっきり叩きつける。

左側頭部を押さえながら後方へとふらふらと下がる。

これは戦略的撤退をするための演技でなく、ダメージ蓄積によるものだ。

つまり弱まっているということだ。

「さてと、相手も弱ってきたので仕上げにかかるとしますか」
パスを取り出し、デンオウベルトのターミナルバツクルにセタツチする。

『フルチャージ』

ターミナルバツクルからフリーエネルギーで構築されたラインがDロッドの後方部に伝導される。

伝導されたフリーエネルギーは切先に向かって走っていく。

切先にフリーエネルギーが収束される。

ロッド電王はDロッドの切先を見て、完全に充填されたのを確認する。

そして、Dロッドを槍投げの構えを取り、チーターイマジンの心臓部に狙いをつける。

よろよろとしても心臓部を隠そうとしている。

自身を守るための本能による動きだろう。

(ふう、焦らない焦らないつと)

釣り師を自称する以上、『待つ』ことの大切さも知っている。

チーターイマジンの心臓部をカバーしている両の腕がわずかにだらりと下がった。

(今だー！)

腰を右に大きく捻り、前に出ている左足は力強く地面に踏ん張る。

「せやあああ!!」

Dロッドを標的に目掛けて投げた。

風も吹いていないので、ぶれることなく真っ直ぐに矢のように突っ走る。

心臓部に突き刺さると、体内に吸収されるようにチーターイマジンに入っていく。

Dロッドの姿が全てなくなると、青色のフリーエネルギーで構築された亀の甲羅のような網『オーラキャスト』が出現し、チーターイマジンの動きを封じる。

「ぐっぐうう……う、動けん。くそおおおお!!」

敗北を確信したチーターイマジンは悔しさを紛らわすように喚く

しかなかった。

「これで止め！」

ロッド電王は最後の一撃として、両足に力を込める。

そして、高く空中に跳躍して右足を前に突き出して、蹴りの体勢を取る。

狙いは『オーラキャスト』の中心部——チーターイマジンの心臓部だ。

オーラキャストとロッド電王は何がしかの糸ラインで繋がっているのだろうか、正確に標的に突き進んで行く。

「せりやああああああ」

と叫びながらロッド電王の蹴り足はオーラキャストの中心部を捉えた。

その瞬間にオーラキャストに亀裂が入り、粉々になる。

それはオーラキャストと繋がっているチーターイマジンも同じことが起こるということだ。

全身に亀裂が生じ、自身を構築する以上のフリーエネルギーが強引に入り込み、肉体を維持できなくなる。

そして、

「うおおああああああああ」

チーターイマジンが断末魔の叫びを発して爆発した。

爆煙が立ち込めるが、ロッド電王に傷はひとつもついていない。

「さてと、僕達のお仕事はこれで終わり、あとは……」

(なのはちゃん達の出番だね)

良太郎の意見にロッド電王は頷き、レドームを呼び寄せて飛び乗り、なのは達がいるビル屋上に向かった。

高町なのはとユーノ・スクライアは、怪植物の核となっている場所付近から爆煙が立っているのをきちんと両目で捉えた。

「ユーノ君、あれって……」

「良太郎さんとウラタロスさんがイマジンを倒したと思っていいと思うよ」

「あ、ユーノ君、あれ」

なのはが指差す方向にユーノは顔を向ける。

「良太郎さん達だ」

レドームに乗っているロッド電王だ。

ロッド電王はレドームから飛び降りて、なのは達の前に着地する。

「後はよろしくね。なのはちゃん、ユーノ」

そう言うと、ロッド電王はデンオウベルトを外す。

外すと同時に、青色のエネルギー体がウラタロスとなり、電王の形が崩れ、良太郎の姿に戻っていく。

「ここから先は魔導師の領域だね。モモタロス、大丈夫？」

良太郎はグツタリしているモモタロスを労う。

「おお、だいぶマシになったがな。まったく慣れねえことはするもんじゃねえぜ」

首をボキボキ鳴らすモモタロス。

「センパイ、なのはちゃんの邪魔になるからこっちおいでよ」

ウラタロスが、手で「おいでおいで」をする。

「せかすなよ、カメ」

愚痴りながらも歩みを止めないモモタロス。

「今すぐ封印するからねー」

レイジングハートを目標の方角にかざすなのは。

「この距離からじゃ無理だ！もつと接近しないと！」

なのはの行動にユーノは注意する。

「できるよ！大丈夫！」

自信と決意を秘めた瞳をユーノにぶつけるなのは。

「大丈夫だよね？レイジングハート」

確認するように手に持つ相棒に尋ねるのは。

『シーリングモード。セットアップ』

と応えるように自身の形状を変化させていくレイジングハート。杖から槍に近い先端になる。獲物を一突きできそうな鋭利さがある。

レイジングハートに桜色の両翼が展開される。

「行つて!!捕まえて!!」

レイジンググハート先端前に桜色の球体が発生し、放つ。
一直線にジユエルシードを捉える。

『スタンバイレディ?』

レイジンググハートがなのはに次の指示を促す。

「リリカルマジカル……」

なのはの詠唱に良太郎もモモタロスもウラタロスもそして、なのはの肩に乗っかっているユーノもただ、黙って見ている。

一言も発することが許されない儀式じみたものがその場の空気にはあつた。

「ジユエルシード、シリアル10!!」

ジユエルシードのナンバーを口に出すと、レイジンググハートの金色の先端は桜色に輝いていく。

魔力が完全に充填されたと感じたなのはは、詠唱から閉じていた両目を開き、決めの台詞を放つ。

「封印!!」

同時にレイジンググハートから桜色の光線が凄まじい勢いで放たれた。

その証拠になのはのツイントールは激しくなびき、肩に乗っかっていたユーノも落ちないようにしっかりとバリアジャケットに爪を立てて、しがみついている。

良太郎、モモ、ウラも飛び降り防止のフェンスにしがみついている。

光線は怪植物の核——ジユエルシードに向かっていく。

直撃すると、桜色の光は怪植物を全て包み込んだ。

すでに蒼く澄んだ空からオレンジ色の夕焼けになっていた。

レイジンググハートはジユエルシードを自身に収める。

「ありがとう、レイジンググハート」

なのはは感謝の言葉を告げた。

『グッバイ』

そう短く言うと、レイジンググハートは自身の形を崩していった。

同時になのはもバリアジャケットから私服姿に戻る。

(この子、魔導師になって一週間しか経ってないと聞いているけど経験

積みば凄い事になる)

良太郎はなのはの魔導師としての資質に戦慄を覚えた。自分も電王になって一年程だが、戦闘キャリアはそこそこ積んでいするため、他者の潜在的な資質を見抜く力が養われたのだ。

「……いっぱいみんなに迷惑かけちゃったね」

なのははジュエルシードを回収できたにも拘らず、浮かない声と表情をしていた。

「なのは……」

肩に乗っかっていたユーノはいつの間にか地にか地に足つけている。心配そうな表情で見上げるかたちでなのはを見ている。

どこか気まずい雰囲気や屋上にいる面々を支配していた。

なのはの独白は続く。

「……実はね、わたし、あの子が持ってたの気づいてたんだ」

ユーノ、良太郎、モモタロスは声にこそ出さないが、驚いていた。ウラタロスは反対に予想していたのか平静を保っていた。

「でも、気のせいだ何かの間違いだって思っただけで見てみぬ振りしてたの」

「なのは……」

隣にいるユーノはただ聞いている。

「そしたらこんな事になっちゃって……」

その場でしゃがみこんでしまった。

「なのは、元気出して。なのははちゃんとやってるよ。だから落ち込まないで!」

ユーノはその小さな身体で精一杯なのはを励ます。

「ユーノ君」

なのはの表情に少しだけ笑みが浮かぶ。

「失敗したと思ってるなら次は失敗しないようにすればいいんじゃないかな?」

良太郎がなのはの横、ユーノの逆側に座った。

「それに失敗したからこそわかったものだってあるでしょ?」

良太郎の一言になのはもユーノもはっとする。

「わたしは……」

「僕は……」

両者ともに互いの欠点を見つけたことができたようだ。

なのはとユーノが互いに決意を秘めた瞳を向け合う。

「ユーノ君、わたし、これからは自分の意思でジュエルシード集めをする。だからこれからも手伝ってくれる？」

「もちろんだよ！僕もなのはに負担をかけないように頑張るから困ったことがあつたら遠慮なく言つてよ。力になるからね！」

互いに笑みを浮かべた。

「さーと、話が終わつたんだから帰ろうぜ。腹減つちまつたよ」

「もうしょうがないなあ、センパイは。二人とも早く帰ろう？センパイが駄々をこねない内にさ？」

場の雰囲気明るくなつているのを感じ取つたモモタロスはわざととぼけたことを言う。

ウラタロスもモモタロスの意図を察しているため、苦笑混じりに言う。

なのはとユーノがどちらかが先にというわけではなく、笑い出す。

場の雰囲気が明るくなったことに満足した良太郎は立ち上がる。

「さてと、僕も夕飯の支度をしなきゃいけないから帰るよ」

「あ、良太郎さん、ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

なのはとユーノが同時に良太郎に頭を下げた。

「そこまでお礼を言われることはしてないよ。だから、二人とも頭上げて」

良太郎はなのはとユーノに頭を上げるように言う。

自分は立ち上がるきっかけを与えたにすぎないのだから。

*

高町家とは逆方向にフェイト達のマンションがある。

幸か不幸か、怪植物の影響はさほど及んではいなかった。

あくまで家やビルが破壊されていなかったというだけで、地面は完全に抉れていた。

向かいからよろよろと一人のジャージ姿をした少年が歩いている。

良太郎はその少年を一瞥する。

何がしかに取り憑かれたかのような表情をしていた。

ただ、単純に疲れたんだろうと思った良太郎はそれ以上は気にせずに歩き出した。

マンシヨンに着くと、エレベーターに乗り込み目的の階層のボタンを押す。

後から誰も入ってこない。

閉ボタンを押す、ゆっくりとではあるがドアが閉まる。

良太郎は壁に背を預ける。

「さすがにちよつと疲れた、かな」

慣れたとはいえ、電王になった後に来るこの感覚はいい感じがしない。

キンとエレベーターが停まり、ドアが開く。

フェイト達が住んでいる部屋前に立つ。

ドアノブを握ってから引く。

開いた。

「ただいまあ」

と、良太郎が言うのと住人であるフェイトとアルフが玄関まで走ってきた。

「お、おかえり。良太郎」

まだ言い慣れてないのか、フェイトはどもる。

「おかえり、良太郎」

アルフは真剣な表情をしていた。

「ただいま」

と、もう一度言うのと良太郎は靴を脱ぎ、入ろうとするがアルフに遮られた。

「良太郎、アンタさ。一体何と戦ってきたんだい？」

「え？」

「あたしはさ、アンタが悪いヤツじゃないってことはわかってる。でもさ、アンタ何か隠してないかい？」

「ア、アルフ。良太郎だって色々と事情があるんだし……」

フエイトは胸倉を掴みかねないアルフを止めようとする。

「フエイト、アンタは知りたくないのかい？良太郎が戦っているヤツの事を！」

「そ、それは……」

良太郎はフエイトを見る。

知りたいと顔は語っていた。

「わかったよ。話すから居間に行こう。ここじゃ話すに話せないし
さ」

良太郎の瞳は決意がこもっていた。

第十話 「動き出す黒き魔導師」

マンションの窓から夕陽の光が差し込む頃。
リビングには一人の青年と二人の少女がソファに対面の形で座っていた。

野上良太郎は二人の少女を前にしてとりあえず、自分で淹れたコーヒ―を口にしていた。

二人の少女——フェイト・テスタロッサとアルフはテーブルに置いてあるカップに手を出そうとしない。

自分が話すまでは頑として飲まないつもりなのだろう。

(さてと、何から話せばいいかな)

イマジンのことといつてもどこから話せばいいか悩む。

やっぱり、目的とどういった力があるかとか後は注意点くらいしかないだろう。

「まず僕が、いや僕と仲間達が戦っている相手はイマジンって言うんだ」

「イマジン?」

「僕もあいつ等がどういう経緯でそう呼ばれているのかは、わからないんだ。ただ、あいつ等は取り憑いた人間の望みを強引に叶えてその人間の最も強く願う過去へ飛ぶんだ」

「過去へ飛んで何するのさ?」

アルフは尋ねる。表情からすると今ひとつイマジンというものが理解できていないようだ。

「都合のいいように改竄するんだよ」

「ねえ、良太郎」

フェイトは拳手をした。

「なに、フェイトちゃん」

「それって、タイムパラドックスを発生させるって事?」

フェイトの解答に頷く。

「うん、過去で本来起こらなかったことを起こして現在、そして未来を変えてしまうんだ」

「でもそれって、そんなに悪いことなのかい？」

アルフは過去を変えらるというところがどういう意味をもたらすのかわかっていないらしい。

「アルフ、過去を変えることで現代が滅びちゃうこともあるんだよ」

「何でさ？」

フェイトに代わり、良太郎がアルフに説明する。

「現代は、過去で『起こった出来事』と『起こらなかった出来事』が合わさって成り立ってるんだ。逆転させるだけで現代が変わってしまふんだよ」

「そんなことしたら普通、誰か気づくんじゃないのかい？」

アルフの言葉に良太郎は首を横に振る。

皆最初はそう考えているんだと良太郎は思った。

自分も最初はそうだった。電王として時の運行を守る者として戦うまでは。

「普通の人は時間の干渉を受けるから、改竄前の記憶と改竄後の記憶とを共有することはできないんだ。だから絶対に気づかない」

「じゃあ良太郎、イマジンが過去に行って都合のいいように過去を変えたらわたし達はそれを正しい時間と認識して記憶し続けるってことになるの？」

「残念だけどね。そうなるよ」

フェイトのたとえに良太郎は首を縦に振る。

「そんな……とんでもないやつじゃないか！」

アルフはようやく理解したのかテーブルを両手で叩く。

「それが僕が戦っている相手だよ」

コーヒーを口の中に入れ、口内を潤す。

「良太郎、イマジンはどうして現れたんだい？」

アルフが尤もなことを訊いてきた。

「それは僕にもわからないんだ。僕のいる世界のイマジンなら僕と同じ方法で来たかもしれない。もし、この世界のイマジンならば目的はわからないけど、正体はおおよその見当はつくけどね」

「見当がつくってどういふこと？」

口を潤すためにコーヒーを飲んでいたフェイトはカップから口を離し、良太郎を見つめる。

良太郎はそんな眼差しを受け止めながらも迷う。

正直、当初はこれを言う気はなかった。だが、フェイトの真摯な眼差しを前に洩る意欲はなくなっていく。

観念し、打ち明けることにした。

「正体の見当がつくって言ったのはね。イマジンは未来から来た人間の精神体なんだよ。怪人の肉体を得るには人の記憶——イメージが必要になるし、実体化するには契約を交わしてないといけないから結構、面倒なんだけどね」

「人間いるところには必ずイマジンも存在するってこと？良太郎」

「うん、そうなるね」

良太郎は空になったカップをテーブルに置く。

「最後に注意してほしいのはイマジンに遭っても、絶対に耳を傾けてはいけないよ」

二人は真剣に耳を傾けている。

「無視してればいいの？」

「うん。まあそれがイマジンを避ける唯一の方法、かな」

「ねえ、良太郎。イマジンは何て言っって人と契約を交わそうとするのさ？」

アルフが参考程度に聞いてきた。

「えーっとね、確か『オマエの望みを言え。どんな望みも叶えてやろう。オマエが支払わなければならぬ代償はたったひとつ』だった、かな」

良太郎はモモタロスと最初に出遭った際に言われた台詞を思い出しながら答えた。

フェイトとアルフは顔をあわせる。

「良太郎にイマジンの説明聞いてなかったから……」

「……引っかかっていたかもしれないね」

「……ははは」

二人の素直な意見に良太郎はただ苦笑するしかなかった。

「さてと夕飯の支度に取り掛かろうかな」

ソファから立ち上がる良太郎。

「良太郎！」

フェイトがキッチンに向かう良太郎を呼び止めた。

「ん、どうしたの？」

フェイトは意を決したかのような表情をしている。

「あ、あのね……」

「フェイト！アンタ言うつもりかい!？」

アルフが止めに入ろうとするが、フェイトは首を横に振る。

金色のツインテールが同時にふるふると揺れる。

「良太郎は自分のことを嫌な顔ひとつせず話してくれたんだよ！それに応えるのが礼儀だと思っただよ！」

フェイトの正論にアルフは黙るしかなかった。

「わたしとアルフがジュエルシードを集めているのはね」

良太郎はごくりと息を呑む。

「わたしの母——母さんのためなんだ」

フェイトの真剣な表情を見て良太郎は、

「そう、なんだ。言ってくれてありがとう。フェイトちゃん」

と、真摯に受け止めることにした。

夕食を食べ終え、食器を片付け終わり後は入浴して寝るだけとなる頃。

良太郎は昼間の戦いで疲れたのか、風呂に入ると、すぐにベッドとして使っているソファに寝転がってしまう。

ちなみに、フェイトとアルフはすでに入浴が完了し、寝室で眠っている。

「疲れたー」

電王になりたての頃に比べると、体力はかなりついているのだが、それでもイマジン憑依に起こる気だるさはいつまで経っても慣れない。

「明日も朝の支度をしないとイケないから、早く……寝よう」

そう言いながら、良太郎の意思とは関係なく両の瞼が閉じようとし

ていた。

睡魔が全身を支配する感覚に襲われる。

「ぐう」

完全に良太郎の意識は夢の世界へと旅立った。

「アルフ、大丈夫だよ。良太郎寝てるよ」

「わかった。そーっと、そーっとね」

寝ていたはずのフェイトは寝室のドアを開け、こっそりと良太郎の状況を見ていた。

アルフは寝室にある唯一の窓を音を立てないようにゆーっくりと開けている。

ちなみに二人の服装は、私服でもパジャマでもない。

フェイトはバリアジャケットで、アルフはいつもの服装に黒いマントを羽織っていた。

ちなみにこの二人、このようなことをするのは今日が初めてというわけではない。

良太郎がここに住むようになってからずっとだ。

「フェイト、開いたよー」

アルフがサムズアップして窓が完全に開いたことをフェイトに示す。

「うん、わかった。ご苦労様アルフ」

フェイトはアルフに礼を言いながら、寝室のドアを音を立てないようにゆーっくりと閉める。

ドアの側に置いておいたバルディッシュを手に取り、窓の外に出る。

アルフも外に出ると、窓を先程と同じようにゆーっくりと音を立てないように閉めていく。

「行こう。アルフ」

「うん」

そう言うと同時に二人は跳躍し、夜空の景色の中に溶け込んだ。

リビングでは先程まで完全に景色と同化していた一部分がむっくりとソファから動き出した。

完全に眠っていたはずの良太郎だ。

実は良太郎もフェイト達同様に寝たふりをしていただけで、実際には熟睡していなかったのだ。

良太郎がフェイト達の動向に不審を感じたのは一昨日くらいからだ。

何故、不審を感じたと尋ねられると根拠はない。

ただ、自分が住むようになってから二人がジュエルシード探しをあまり表に出さなくなったからだ。

見ず知らずの人間から強盗まがいまでして手に入れようとしたものだ。

たかが、人間一人が生活するようになったただけでその気持ちが消えるとは思えなかったのだ。

良太郎はベッド代わりのソファから立ち上がり、フェイトとアルフが眠っている寝室に向かう。

とりあえずノックする。

何の反応もない。

再度ノックするが、やはり何の反応もない。

ドアノブを回すとガチャリと音を鳴らしながらドアが開いていく。ベッドに歩み寄る。

「やっぱり……」

そこにはいるはずの存在はなく、もぬけの殻となっていた。

窓もロックされずに閉まっているところを見ると、開けて外側から閉めたものだ と推測できた。

「僕を巻き込みたくなかったから、こんなことをしてたんだ」
良太郎は窓越しに夜空を見上げる。

曇り空だが、雨が降りそうな感じはない。

ただ、夜空に輝く数多の星々を観賞することはできないが。
「水臭いよ。二人とも……」

良太郎はそうつぶやいてから、またソファに戻ることにした。

二度寝は難しいのか、しばらくは天井を見上げたままだった。

*

高町家の朝に「静寂」という言葉はない。

これは以前からのことだが、モモタロス達が厄介になってからはその言葉は足を生やして全速力でどこかに行ってしまうている。

高町なのはは今現在、目の前で起こっている出来事を見ながらそう思っている。

兄の高町恭也とモモタロスがまた朝食の奪い合いをしている。

正直、この光景をこれから行く家のある人物には絶対に見せたくないと思っている。

何故なら頬を引つ張り合っているのだから。

「むぎぢぢぢぢぢぢ」

「うぐぐぐぐぐぐ」

と、二人が互いの頬から手を離し、組み手になっている。

「テメエ、いい加減にその玉子焼きよこせよ。一個余計に食ってるだろうが！」

「黙れ！おまえは昨日、からあげを一人分余計に食べただろうが！」

ちなみにこの光景、当初は皆止めたりしていたが次第に名物行事化して誰も止めなくなっていた。

家主の高町士郎とその妻である桃子は「元気だなあ」「若いっていいわねえ」なんてコメントを出して温かい目で見ていた。

「まあた、始めちゃった。今日はどうっちが勝つのかな？」

姉の高町美由希はどっちが勝つかを戦績が記録されているノートを取り出して、記録し始める。

(なのは、どうしよっか?)

フェレットのユーノ・スクライアが念話で止めるか止めないかをなのはに尋ねる。ちなみに彼はなのはの左肩に乗っかっている。

(魔法を使わずに止めるのは絶対無理だよ！お兄ちゃんもモモタロスさんも普通の強さじゃないもん！)

魔法の使えない自分はその場所に踏み込んだだけで気絶ものだろう。

(ここはいつも通り見守ることにしよっか)

(うん、そうだね)

なのはとユーノも危険地帯の状況を遠くから見守ることにした。
残りのイマジン達とコハナはというと、

「さあてキンちゃん、リュウタ、ハナさん。今日はどっちが勝つと思う？賭け商品は夕飯のおかずだよ」

ウラタロスは三人を煽っていた。

「うーん、今んところは勝率五分五分やしなあ。夕飯のおかずによつては真剣に考えてまうで」

キンタロスは夕飯のおかずによつては負けてもいいような口調で言う。

「悩むう」

リュウタロスも頭を抱えている。

「いい？リュウタ。たとえ、おかずが当たりでもハズレでも勝つことに意義があるのよ！」

と、コハナはモモタロス敗北に賭けた。

「よーっし！僕もモモタロス敗北に賭ける！」

コハナの言葉に感化されたのかリュウタロスも何に賭けるかを決めた。

「さあてキンちゃん、どうする？二人は決めちゃったよ？」

ウラタロスはまだ決めかねているキンタロスを煽る。

「えーい、こうなりや俺はモモの字が勝つ方に賭けるで！」

と、コハナ&リュウタロスとは逆側に賭けた。

「それじゃ僕も、と」

ウラタロスはキンタロスと同じ側に賭けた。

ちなみにこの賭けで一番勝っているのは、意外にもキンタロスで次にウラタロスとリュウタロスが同着でコハナが一番負けている。

コハナは当初、この賭けに対しては批判的だったのだが試しにという形で参加した。

そこで大勝した。いわゆるビギナーズ・ラックだ。

勝利の味を占めたコハナは翌日も参加した。

しかし、結果は先日と違って敗北だった。

そうなるかと挽回のために参加する。

後は典型的なダメギャンブラーのルールに沿って歩くことになり、現在に至るといわけだ。

なのは側から見ているからわかったことだ。

「あのハナさん、今日はやめた方が、もう四日負けてるし……」

なのははおかずを食べれず、悔しい表情を浮かべているコハナを五日連続は見たくないために諫言する。

ユーノも「キュツキュー」と言いながら首を縦に振る。

「なのはちゃん。四日負けても今日勝てばそれですべてが帳消しになるわけではないけど負けのスパイラルからは抜けられるのよ！」

なのはの主張は棄却された。

ジャンキーには何を言っても無駄だときこのとき、なのはは初めて知った。

賭けの結果、コハナは五日連続負けという大敗をすることとなった。

「私にはギャンブルの才能はないんだ……」

と部屋の隅でいじけているコハナを見て、今日は自分のを少しだけあげようとなのはは思った。

フェイトとアルフはいつものようにキッチンから漂ってくる匂いで鼻腔をくすぐられる。

食欲という本能が刺激されて、身体全身に行き渡る。

重い瞼が開いて、フェイトはベッドから起き上がる。

アルフは獣形態から人型になる。

二人は着替え終わると、居間に向かう。

リビングでは良太郎がいつも通り、三人分の朝食の準備をしていた。

「おはよう。フェイトちゃん、アルフさん」

「おはよう良太郎」

「おはよー」

今日の朝食はごはんと味噌汁と玉子焼きとシンプルなものだった。

フェイトとアルフは自分の分は自分の座る席に置いていく。

三人がそれぞれの席に座ると、

「いただきます」

と合掌して食べ始めた。

その間はとても静かだった。

アルフは隣にいるフェイトと対面の良太郎を見る。

二人とも、相変わらず朝食を食べることに集中して一言も発しようとしなない。

この雰囲気には耐えられないアルフは何度か会話を試みたが、成功したことは一度もない。

今では観念して集中して食べることにしている。

三人が同時に茶碗やお椀をテーブルに置いて、

「ごちそうさまでした」

と合掌した。

「良太郎、今日は何か予定あるの？」

フェイトは食器を拭きながら、隣で食器を洗っている青年に尋ねる。

「ん？今日は何もないよ。どうしたの？」

「わたしとアルフさ、今日は外に出ていつ戻るかわからないから、夕飯いらないけど良太郎はどうするのかって」

「夕飯かあ。二人とも外食する気なの？」

「う、うん。そうなるかな」

フェイトの曖昧な回答に良太郎は怪訝な表情になるが、すぐに平静に戻った。

「どうしようかな。一人で作っても味気ないしね」

良太郎は腕を組んで考えている。

「僕も外食しようかな。だったら皆で食べに行く？」

「え？」

「良太郎？」

良太郎の提案にフェイトとアルフは目を丸くする。

「でも、わたし達。その……」

「そうだよ！いつ終わるかわかんないんだよ？」

「だったらさ、僕この店にいるから終わったらここに来てよ」

良太郎は自分がこれから向かう店の屋号と地図にその店がある位置に大きくマル印をつけて、フェイトに渡した。

「?何て読むの?」

「ええとね、『みどりや』って読むんだ」

「うん、わかった。やることが終わったらすぐにここに行くよ」

「フェイト、行こうか」

「待ってよ。アルフ」

玄関先にいるアルフはフェイトに早く来るように促す。

「じゃあ、行ってくるね。良太郎」

「うん、行ってらっしゃい。気をつけてね」

フェイトは良太郎の気遣いが嬉しかったのか、無意識に頬を染めていた。

ドアを閉じると、アルフが待っていた。

「あれ?フェイトどうしたんだい?」

「どうかした?アルフ」

「嬉しそうだから」

「え?」

「アンタ、さつきすごくいい顔してたよ」

「そ、そうかな」

指摘されるとまたフェイトは頬を染める。

だが、すぐにこれからのためにそんな表情は消え、きりつとした表情になる。

「さあ、行こうアルフ。ジュエルシードはあの辺りで感じられるから現地に行って見つけるよ」

「うん、行こっかフェイト」

アルフは人型から獣型になり、フェイトを背に乗せて宙を駆け出した。

向かう先は月村家の林。

運命の歯車が回り始めている事をフェイトは知らない。

第十一話 「一寸先はジュエルシード？」

「あーったく、まだ着かねえのかよ」

モモタロスは今、バスの最後部座席で地団太を踏んでいた。

右前座席にいるウラタロスやリュウタロスに「やめてよセンパイ」とか「モモタロスうるさい」などと注意されるがやめる気配はない。気が短い彼は何かしていないとその場に留まる事ができないのだろう。

キンタロスと相席していたコハナが指をパキポキ鳴らしながら席を立ち上がる。

それを一人の青年が遮った。

青年はそのままモモタロスの横に座る。

「モモタロス」

「何だよ？」

左前座席に座っていた高町恭也だ。

「少しは落ち着いたらどうだ？子供のいる手前だ。大人気ないとは思わないか？」

「何気取ってんだよ。テメエだって窓何回もチラチラと見てたじゃねえか」

モモタロスが恭也に指摘する。

「なっ!?オマエ、見ていたのか？」

「後ろにいたからな」

モモタロスは興味なさそうに言う。

「……」

恭也は屈辱に感じたのか、悔しがる。

「日頃、クール気取っているオマエがソワソワしてんだ。待ち人でもないのかよ？今から行く所によ」

モモタロスは退屈しのぎに尋ねた。

「……まあ、そんなところだ」

「ふーん」

モモタロスはそれ以上は深く追及しなかった。

モモタロスはもう一度横をちらりと見る。

恭也は元いた席に座り、相席している妹の高町なのはと談笑していた。

(まあ、俺は退屈しなけりやそれでいいんだけどよ)

モモタロスは窓から空を眺めていた。

空を泳いでいる雲を様々な食べ物に思い浮かべながら。

*

野上良太郎は翠屋までの道のりをいつもよりゆっくりのペースで歩いていた。

急ぐ理由がないので景色を堪能しながら向かうという腹だ。

「いい天気だな。フェイトちゃん達との約束までは全然余裕だからどうしようかな？」

良太郎は趣味らしい趣味がない。

そのため、退屈を潰す方法が浮かばないのだ。

キョロキョロして何かないか捜してみると本屋があった。

「偶には本でも読もうかな」

本屋の前に立ち、自動ドアが開いてそのまま入っていった。

中に入ると、様々な本が置かれていた。

ファッション誌に経済誌にノウハウ本にハウトウ本に漫画に小説に教本などジャンルは色々だった。

「結構あるなあ」

良太郎は本棚を見回す。

半日以上潰すためには退屈しない上に興味深い本を探さなければならぬ。

一通りのコーナーを見回す。

そして脳内で選別する。

漫画、この世界に永住するつもりはないので没。

ファッション誌、経済誌も過去の出来事なので没となる。

ノウハウ本とハウトウ本、そして教本も特に興味がないので没としていく。

そうになると、最終的に残ったのは小説だけだ。

できれば一冊で完結する作品を選ぶことにした。

「何にしようかなあ」

散々悩んだのだが特に読みたい作品はなかった。

「はあ、どうしよう」

頭を掻きながら、もう一度ぐるりと見回す。

目に入ったのは『チエス入門』の本だった。

手にとって読んでみる。

退屈を潰すにはもってこいだった。

良太郎は本を閉じ、レジに持っていった。

「これ下さい」

料金は千五百円だった。

その後、良太郎は玩具店に行き、マグネット式の安い持ち運び可能なチエス盤（駒も同封されている）を購入した。

半日潰すにはもってこいの道具はそろったので、翠屋に向かうことにした。

翠屋に到着した良太郎はドアを開けると、ウエイトレスにカウンター席へと案内された。

「いらっしやい。良太郎君」

カウンター席には高町士郎がコーヒーを淹れていた。

「こんにちは、今日は知人とここで落ち合うことになってるんで使わせてもらっていいですか?」

「ああ、構わないよ」

そう言いながら士郎は水の入ったコップを良太郎に差し出した。

「あら良太郎君、いらっしやい。生憎だけどモモタロス君達ならなのはと一緒に出かけてるわよ」

厨房にいた高町桃子が笑顔で良太郎を迎え、モモタロス達のことを話してくれた。

「そうですね。いや、今日はモモタロス達に用があつて来たわけではないんで……」

「あら、そうなの?」

「ええ、そうなんです」

良太郎は袋からチェスの本とチェス盤を取り出した。

「良太郎君、チェスできるのかい？」

士郎が興味深く見ている。

「いえ、やったことないんです。ただ、待ち人が来るまでの間の退屈しのぎにと思つて」

「なるほど、店がすいたら少し参加させてもらつていいかな？」

「構いませんよ。僕もその間に何とか憶えるようにしますんで」

そう言つて本を開き、読み始める良太郎。

次にチェス盤を広げ、駒を所定の位置に設置していく。

「良太郎君、ご注文は？」

桃子が読みながら駒を置いている良太郎にオーダーを聞く。

本を広げたまま裏返しにしてテーブルに置き、メニューに目を通す。

「そうですね。ではプリンとショートケーキとザツハトルテをお願いします」

「かしこまりました」

それから数十分後にオーダーした三品が届き、良太郎は食べながらもページを捲つていった。

「ただいまあ」

と店なのに、我が家のように声を発しながら一人の少女が入つてきた。

（誰だろう？）

始めて見る顔だ。

「ただいま」などと気楽に発せられるところからすると、翠屋関係者の身内つまり高町家の人間だということだろう。

黒髪におさげで眼鏡をかけているが、美少女の部類に入る。

「おかえり美由希」

「ただいま、お父さん」

そう言いながらカウンター席に座る。自分の隣だ。

美由希と呼ばれた少女は良太郎がオーダーした三品を一瞥する。

「ねえ、お母さん。私、プリンとモンブランとコーヒーね」

「はいはい。わかったわ」

桃子は娘のオーダーを聞くと、厨房に戻っていった。

美由希と良太郎と目が合う。

「あ、こんにちは」

「あ、どうも」

美由希が挨拶してきたので良太郎も返す。

「そういえば良太郎君と会うのは初めてだったな。美由希、彼がモモタロス君達の仲間の野上良太郎君だ。良太郎君、こちらは娘の美由希だ」

士郎の紹介に美由希から頭を下げる。

「この人がモモ君達の仲間の人なんだあ。初めまして、なのはの姉の高町美由希です」

「どうも、モモタロス達がお世話になってます。野上良太郎です」

良太郎も頭を下げた。

そして、良太郎はまた本を読むことに専念することにした。

(ん?)

横から視線を感じる。

視線の主は美由希だった。その瞳には好奇が宿っている。

本を開いたまま、美由希に顔を向ける。

「あの、何か?」

自分は少なくとも彼女に好奇心をもたれるような存在ではない
……はずないか。

モモタロス達の仲間という時点でもたれて当然だ。

「モモ君達の仲間っていうことは君もバンドマンなの?」

(ハナさんの嘘、信じてるんだ)

良太郎はどう言えればいいか悩んだ。

ウラタロスではないので、嘘を信じ込ませる自信はないがやるだけ
やってみることにした。

「ええとね、僕は仲間だけど歌とか演奏はそんなに上手じゃないんだ。
どちらかといえば裏方、かな」

「ハナちゃんと一緒?」

「……そうだね」

と、相槌を打った。

「ふうん」

美由希は納得したようだ。

(何とか上手くごまかせた、かな)

良太郎は内心いっぱいだった。

嘘を吐くことが下手な上に吐いたとしても、すぐに顔に出してしまう性質なので余計に緊張していた。

その証拠に腹部を押さえている。キリキリと痛みが襲っていたのだ。

「ふうん」

下手な質問がないことがわかるとそつと腹部を押さえていた手を離し、設置していたチェスの駒を本の指示通りに動かしていく。

そうやって駒の役割を身体で憶えさせているのだ。

「ねえねえ、もうひとつ訊いていいかな?」

美由希が質問を切り出そうとすると、良太郎はチェスの駒を動かす手を止めて本を置き、美由希に視点を合わせた。

「僕が答えられることならね」

「ウラ君とよくナンパしてるの?」

その質問は予想を斜め上にいっていた。

訊かれてすぐに出てきた感想は、

(何を言ってるの?)

であり、声に出さなかった自分を少しだけ褒めてあげたくなった。

「してないしてない!それ、ウラタロスが言ったの!」

手を両手で振って精一杯に否定のジェスチャーをする。

「うん、私や母さんを口説くのに失敗した時にね。こう言ったんだ。

「良太郎と一緒に絶対になんか上手いって聞いたのに」てね」

ウラタロスの言葉を美由希は『良太郎と一緒に口説けば絶対に成功する』と解釈しているのだろう。

だが、良太郎は先程の美由希の台詞を聞いてこう解釈していた。

『良太郎に憑依して口説けば絶対に成功する』と。

ウラタロスのナンパ成功率はかなり高い方だ。

十人口説けば八人は確実に落とせるほどだ。

ちなみに残りの二人はというと、一人は男嫌いでもう一人は百合系の人だったりする。

だが、この成功はウラタロス一人ではなく、良太郎がいて初めて可能となるものだ。

役割分担でいえばウラタロスの話術と良太郎の容姿に分担される。

「……ウラタロス一人じゃ成功率は低いもんね」

どんなに口が達者でも、外見がアレなら成功率は一気に下がる。

ウラタロス単体で十人口説けば運がよくて一人だろう。

男は外見だけではない、と言われるがある程度は外見も必要なのだと考えさせられる事例だ。

「で、結局はどうなの？」

「結局はって言われても、してないものはしてないとか言えないよ」

「ふーん、そうなんだあ」

そう言いながら美由希はじーつと良太郎を見ている。

「なに？どうしたの？」

「いや、君だったら口説かれたかもしれないなあと思って……」

「どうして、そう思うの？」

「だって君、恭ちゃん程じゃないにしても十分カッコいいし……」

聞き慣れない言葉を聞いた。

「カッコいい？僕が？」

美由希は頷く。

「そうだよ。もしかして自覚なかったの？」

美由希の指摘に良太郎は深刻な顔をして考える。

鏡で何度も自分の顔を見たことはある。

別段、人に評価されるような容姿をしているとは思っていない。

「……うん」

良太郎は頬を人差し指で掻きながら頷いた。

その後、良太郎は美由希に飽きられるまで質問漬けに遭った。

*

バスに揺られて数十分。

月村家付近のバス停留所で降りた高町兄妹とフェレット一匹と少女一人とイマジン四体は徒歩で月村すずかが住んでいる月村家に向かった。

「なのはのダチはホテルに住んでるのか？」

モモタロスは月村邸を見上げながらそんなことを漏らした。

「センパイ、コレはれっきとした家だって」

「モモの字が言うようにコレはホテルやで」

「じゃあ、大家族なんだね！」

ウラタロスがモモタロスに家だと指摘している間に、キンタロスとリュウタロスは好き勝手な事を言っている。

「リュウタ、それじゃお金持ちや豪邸に住んでいる人はみんな大家族になっちゃうわよ」

ウラタロスの代わりにコハナが苦笑しながらリュウタロスに指摘した。

月村邸は西洋風の造りとなっており、窓の数⇨部屋の数があると思わせる外観だ。

デンライナーで生活しているモモタロス達にとって月村邸は未知の場所といってもいいほど衝撃的なものだ。

恭也が呼び鈴を鳴らすと扉が開き、そこにはショートヘアのメイドがいた。

「ようこそいらっしゃいました。恭也様、なのはお嬢様、ハナ様、モモタロス様、ウラタロス様、キンタロス様、リュウタロス様」

メイドは招待客の名をスラスラと流暢に口を動かした。

それだけでこのメイドがとんでもなく優秀な部類だということがコハナやモモ達にもわかった。

恭也となのはは当たり前のようにメイド——ノエルに挨拶する。

「ねえセンパイ」

ウラタロスが隣で呆けているモモタロスの肩をつつく。

「何だよ？カメ」

「いるんだね！あんな完璧なメイドさんって！」

「オメエ、本当にカメか？」

感激して興奮した台詞を放つウラタロスをモモタロスは自分が知っている皮肉屋で詐欺師気質のウラタロスなのか疑ってしまった。

「な、泣けるでえー！」

「クマー！オメエもか!!」

キンタロスはノエルの立ち振る舞いに感涙していた。

彼の決まり文句である「泣ける」とは、いわば良きにしろ悪しきにしろ最上級を表すものだ。

例を挙げるなら、「俺の強さは泣けるで」という場合は、「俺は最上級に強いぞ」と解釈が可能になり、「良太郎のセンスは泣けるからなあ」という場合は「良太郎のセンスは最上級に悪いからなあ」という解釈となるのだ。

なお、この場合の「泣ける」は「完璧のプロやでえ」といったところだろう。

「あの、よろしいでしょうか？」

先程まで黙って成り行きを見ていたノエルが口を開いた。

「なーに？メイドのお姉ちゃん」

現在イマジン達の中で唯一まともなりユウタロスが返事する。

「皆さん、先に行ってしまったかもしれませんが……」

「……え？」

玄関にはなのはも恭也もコハナの姿もなかった。

ノエルの案内でイマジン達四人が連れられた場所は花に彩られたテラスだった。

そこにはなのはと友人であるアリサ・バニングスと月村邸の住人である月村すずかが紅茶を飲んで談話しており、コハナは放し飼いになっている猫と遊んでいた。

「あー、モモタロスだ！」

アリサが指差してきた。

「げっ、金髪チビー！」

モモタロスはアリサの顔を見た瞬間、露骨に嫌な顔をした。

ウラタロスは上を見上げると、上の階に先程のメイドと恭也と後一

人、初見の女性がいるのを見つけた。

「ねえ、すずかちゃん。上の階にいるすずかちゃんとそっくりな人は誰？」

「姉の忍です。恭也さんとは恋人関係なんですよ」

親切にウラタロスに教えるすずか。

「本物のメイドはいるし、可愛いコがいっぱい。ここは凄いな。僕、思わず釣られたかもしれないね」

「ウラ、大丈夫？」

コハナもモモタロス程ではないが、ウラタロスの普段とは違う言動に心配になってきた。

「みなさあん。苺ミルクティーとクリームチーズクッキーをお持ちしましたあ」

とノエルとは違うメイドがやってきた。

外見からしてノエルよりは若いと思われる。

ひとつひとつの仕種からして、落ち着きがない。

名をフェアリンという。

「キュツキュー」

と猫に追いかけられているユーノがフェアリンの元に避難して来た。

「え？え？ええええええ」

猫とフェレットを避けようとするため、足取りが裏目となり、地に足つかない不安定な状態になっていく。

やがてその場で回る形となり、目が回りだしていた。

両手で持っていたトレーが離れだそうとしている瞬間。

「あかん！リュウタ行くで！」

「わかった！クマちゃん！」

とキンタロスが目を回して倒れようとするフェアリンを受け止め、リュウタロスが宙に浮いたトレーをキャッチした。

人間ならば落とすか落とさないかの瀬戸際のような状態だがイマジンの身体能力ならば大した芸ではない。

「危ないで」

とフェアリンを立たせるキンタロス。

「はい、コレ」

リュウタロスは持ったトレーをファリンに渡した。クリームチーズクッキーを一切れつまみ食いすることも忘れない。

「あ、ありがとうございますう」

と二人に深々とファリンは頭を下げた。

その後場所は中庭へと移り、なのは、アリサ、すずかは紅茶を飲みながらお菓子を食べながら、談話していた。

「食べ物も美味しいし、広い庭やなあ。昼寝には持ってこいやで」

とキンタロスはクリームチーズクッキーを一切れ口に放り込んだ後、庭に寝転がりそのまま寝た。

「今寝たらどうするのかしら？キンタロス」

コハナは隣で紅茶とお菓子を遠慮なく頼んでいるモモタロスに尋ねる。

「気にすることねえよ。アイツが昼寝たからって夜寝れないなんてことは今まで一度もねえだろ？」

「それはそうだけど……」

コハナは気になりながらも紅茶に口をつける。

「ま、それにしてもココは猫ばっかだな。犬がいなくてよかったぜ」

モモタロスは周囲を見回しながら、犬がいなことを確認する。

「アンタ、犬ダメだもんね」

コハナはからかうように言う。

モモタロスはその風貌からは想像つかないだろうが、犬が大の苦手なのだ。

モモタロスは他の三体が何をしているのかを見回す。

ウラタロスはファリンを口説いていた。ファリンは困った表情しながらも顔を赤くしていた。

キンタロスはまだ寝ている。猫が何匹かその巨体に乗っかって寝ているが起きる気配はない。

リュウタロスは数匹の猫と戯れていた。

(良太郎どうしてっかな)

ここにはいない相棒のことを思い出す。

不運だが、それに負けない強さを持っているので大丈夫だろうと確信に近い思いを抱いていた。

猫の一匹が林の中に入っていくのが見えた。

「ねえ、モモ」

「ん？何だよ」

寝転がっているモモタロスにコハナが話しかけてきた。

「どうしてイマジンが現れたのかしら？もしかして、私達の世界から流れてきた、とか？」

「さあな。俺達の世界からかも知れねえし、この世界のイマジンかもしれねえ。でもよ、相手がイマジンなら俺達のやることは決まってるじゃねえか。違うか？」

「うん！そうよね」

モモタロスはコハナを見る。

コハナはなのは達を見ていた。身体中から「仲間に入りたい」というオーラが少しだけ噴き出していた。

「何だよ？オメエ、あの中に入りてえのかよ？コハナクソお……ぶつ」
それを感じたモモタロスがコハナを煽るが、言い終わる前にコハナが顔面に一撃食らわせた。

なのはがそれを感じ取ったのは、談笑をしている最中のことだった。

今度はもう、気のせいとか何かの間違いと思うことはなかった。

ジュエルシードが確実にこの林にある。

「なのは？」

「なのはちゃん、どうしたの？」

アリサとすずかがなのはの異変を感じ取ったのか、不安げな表情を浮かべる。

そんな二人に対してなのはというと、

「大丈夫大丈夫」

と笑顔で応え、ユーノと共に林の中に入り込んだ。

ユーノは早速、魔法効果のある空間と時間信号をずらした結界を作る。

月村邸が灰色の空間に覆われた。

発動中は魔導師と発動者は自由に行動できるものだ。

林の中から巨大な光が現れる。

それはやがて形を作っていく。

光が形となり、その光は消えていった。

そこに現れたのとはというと、

「え？」

「あー」

それを見た時、なのはもユーノもそんな間抜けな台詞を吐くしかなかった。

二人の前に現れたのは巨大な猫だった。

第十二話 「ファーストコンタクトと決断」

月村邸は現在、ユーノ・スクライアが発動させた結界で天候に関係なく灰色の空に包まれている。

結界の中では一匹の巨大猫、正確にはジュエルシードの力を使って巨大化した子猫が愛らしい顔を変えることなく、能天気にも鳴いていた。

「えーと、ユーノ君」

「な、何、なのは」

頭を掻きながらどこか脱力した顔で高町なのはは隣で石の上に器用に乗っているフェレット——ユーノに訊いてきた。

「コレってどゆことかな？」

「……多分、あの子猫の「大きくなりたい」という願いを叶えた結果だと思う」

ユーノもどこか脱力した顔をしていた。

巨大猫は我が物顔でどこかの怪獣のようにのっそりのっそりと林の中を歩き出した。

巨大化しても子猫なのか仕種が愛らしく見える。

「カワイイよね」

「うん」

少女とフェレットは毒気を完全に抜かれていた。

「つて。いつまでも見てていいわけじゃないよね！ユーノ君！」

「そ、そうだね！早くジュエルシードを封印しないとね！ごめん、なのは。完全に目的を忘れてたよ」

「それはわたしも一緒だよ。ユーノ君が謝る事はないってば」

二人は標的を見上げる。
こちらの気も知らずにのほほんとして、のっそりのっそりと歩いている。

二人は同時に思った。

恐ろしい子猫と。

「レイジングハート!!お願い！」

と、スカートのポケットから赤い珠を取り出し、頭上に放り投げた。珠が輝き、なのはは光に包まれる。

私服からバリアジャケットへと切り替った。

珠だったレイジングハートも杖状の姿となり、なのはの右手に握られている。

レイジングハートを巨大猫に向ける。

こちらには気づいていない今が狙いだ。

後は、いつもどおりの手順で封印するだけだ。

「行くよ！ユーノ君！」

「うん、なのは」

二人が互いの名を呼び合うことで、それぞれの役割を確認してから果たそうとした時だ。

二人の頭上高くから金色の光弾が巨大猫に向かっていった。

「ぎにゃあああああああ」

直撃し、巨大猫は悲鳴を上げた。

「えっ!？」

「な、何!？」

なのはは構えを解いて灰色の空を見上げる。

結界でそんな色になっているとはいえ、あまり気分のいいものではなかった。

ユーノと同じように周辺を見回す。

だが、どこにも人らしい姿はなかった。

「近くにいないって事は、相当離れた距離から魔法を使ったってことかな？」

「うん、そうなるね。なのは気をつけて。遠距離魔法を使うって事は相当な魔導師って事だからね」

「うん！」

なのははレイジングハートを握る力を強めていた。

電柱の上に立っている金髪少女は手にしている相棒を月村家の林に照準を向けるようにして構えた。

「……バルディッシュ、フォトンランサー」

金髪少女——フェイト・テスタロッサは相棒であるバルデイツュに命令を下す。

「イエス・サー」

と機械音声で短く応える。

先端から金色の光が収束し、球の姿になっていく。

そしてそれは無数の光弾となって放たれていく。

それは全て獲物に直撃していく。

「うにゃあああああ」

と獲物が悲鳴を上げる。

(……やりにくい。でも……)

フェイトは獲物の悲鳴が耳に入るたびに心が揺れることを実感していた。

しかし、ここでやめるわけにはいかない。

自分には大切な目的があるのだから。

何発目かのフォトランサーを発射したときだ。

獲物の悲鳴が聞こえなくなった。

「？」

フェイトとしては悲鳴が耳に入らないのは内心ありがたいことなのだが、急になくなったというのが不自然に感じた。

「フェイト、どうしたんだい？」

今まで黙ってフェイトの行動を見守っていた獣姿のアルフは口を開いた。

「……誰かがいる。誰なのかはわからないけど」

フェイトが「わからない」という曖昧な言い方をしたのは、野上良太郎の仲間かもしれないということを考えてのことだ。

「魔導師じゃないのかい？フェイト」

「うん、わたしもそう思ったけど、良太郎の世界の住人って事も考えられるし、ね」

「うーん、ありえるね」

「アルフはここにいて。わたしは直に確かめてくる」

そう言うフェイトの足は電柱から離れて宙に浮いて、そのまま月

村邸の林に向かって進んだ。

「気をつけてねー。フェイトー」

アルフの声色はフェイトが無事に帰ってくるということを確信しているのか暢気なものだった。

突如飛んできた金色の光弾を防御魔法で防いでいたなのは表情には余裕がなかった。

(今までとは相手が違う。気を引き締めないと！)

なのは自分の周辺に醸し出されている空気が今までのものとは異なっていることに気づいていた。

それはユーノも同じ事だった。

今回の最も警戒すべき相手は巨大猫を狙撃して存在だということもだ。

耳に何か音が聞こえてくる。

人間の足音らしきものだ。

それはやがてはつきりと聴こえてくる。自分達に近づいてきているということだ。

なのはとユーノが見たのは。

木の枝に立っている金髪で黒い衣装に黒い杖を持った少女だった。

「バルディッシュと同系のインテリジェントデバイス。身形みなりからして良太郎の仲間じゃない」

金髪少女はなのはを一瞥すると、そう呟いた。

「……よかった」

一瞬だが、安堵の表情を浮かべた。

「どうして?..どうして良太郎さんを知っているの?」

金髪少女にしてみれば殆ど独り言のようなものだったが聞かれないらしい。

なのはは良太郎と初めて会った日の事を思い出した。

あの時、良太郎は自分を襲った人物にジュエルシードを渡し、一緒に生活していると言っていた。

もしかしたら、この子が。

「もしかして良太郎さんと一緒に生活していたりするのかな?」

なのはは金髪少女と目と目が合う。

二人とも逸らす気はない。

「……」

金髪少女はなのはの質問に答える気はないようだ。

だが、別の形で返答を示してきた。

「申し訳ないけど、いただいていきます」

金髪少女は静かに告げた。

「サイズモード。セットアップ」

バルデイツシュが機械音声で発すると同時に形状が変化していく。

今まで下に向いていた黒い先端が九十度に曲がり、そこから金色の鎌のような刃を出現させる。

金髪少女は正眼に構え、枝から飛び上がってなのはに向かっていった。

レイジングハートは相手がどこを狙ってきているのかを瞬時に判断する。

「フライヤー・フィン」

そう告げると、なのはの両足首付近から桜色の両翼が出現し空に舞台を移した。

（良太郎さん？この子も良太郎を知ってるのかな？）

フェイトは空へと舞台を移した白色少女（名前を知らないから外見特徴でそう呼称している）が何故、良太郎を知っているのか気になった。

（良太郎とこの子が出会う可能性はあの時だけだ）

良太郎が自分に海鳴市の地図を貸してくれたと催促した日だ。

あの時、良太郎は仲間に会うために『翠屋』に向かった。

そこで、仲間と同時にこの白色少女と出会ったのだろう。

ということとは、良太郎は『翠屋』に魔導師がいることを知っていたことになる。

それなら何故、自分に言ってくれなかったのだろうか。

（そっか。言えばきつとわたしがこの子に襲い掛かると思ったんだ）
事実、ジュエルシードを持っているだけで問答無用で良太郎に襲い

掛かったのだからそう思われても仕方ないといえば仕方ない。

この件に関しては後で良太郎に訊けばいいことだとフェイトは頭を切り替えた。

上空にいる白色少女を見据える。

「アークセイバー」

バルディッシュが発すると同時にフェイトはバルディッシュを鎌刃を地面に平行になるように構えてから、白色少女に向けて放った。

金色の鎌刃はくるくると回転しながら、向かっていく。

「プロテクション」

とバルディッシュと同系のデバイスが発した。

爆煙が立つが、すぐさま白色少女は桜色の防御魔法に包まれながら更に空を上昇した。

(逃がさない)

フェイトはその行動を予期したのか、すぐさま次の行動へと移る。バルディッシュをもう一度、サイズモードにしてから自身も飛翔する。

今なら確実に相手も油断しているという確信があった。

相手の間合いに入り込むと同時にバルディッシュを上段から振り下ろす。

「はっ!？」

白色少女はいきなりの攻撃に驚きながらもきちんとデバイスで受けた。

両者共に至近距離で目と目が合う。

「何で? 何で急にこんな……」

先に口を開いたのは白色少女だ。自分を睨むような瞳をしている。

「……答えても、多分意味がない」

フェイトはそう返した。

このままの状態を維持するつもりは両者にはないらしく、デバイスで同じタイミングで押し合ってから

後方へと下がった。

自分は木の枝に、白色少女は気を失った巨大猫の前に移動した。

「デバイスモード」

とバルディツシユはサイズモードからまた形状を変化する。

「シーリングモード」

それを素早く感じた白色少女のデバイスは先程とは違う形状に変化した。

白色少女はフェイトにデバイスの先端を向けてくる。

「デイバインバスター、セットアップ」

フェイトも何か来ると感じたのか、迎撃体勢としてバルディツシユの先端を白色少女に向ける。

「フォトンランサー、ゲットセット」

両者共に互いに何をするのかはわかる。

後は、どちらが素早くそれに移るかだ。

「にゃああああおおお」

と、その場には似つかわしくない声が出た。

先程まで気を失っていた巨大猫だ。

白色少女の意識がそちらに移った。その証拠に顔をこちらに向けてはいない。

(……今だ)

フェイトは白色少女の油断を見逃さなかった。

バルディツシユの先端から金色の球体が構成されていく。

バチバチと雷のようなものまで含んでいる。

「……ごめんね」

そう呟くと同時に、放った。

「なのは!!」

ユーノは空から落下してくるなのはを追いかけた。

今のはは完全に意識を失っている。

このまま地面に激突すればよくて重傷。最悪で死亡になるだろう。自分が巻き込んでおいて、その結果は絶対にさせないという思いがユーノを突き動かしていた。

駆ける四本足はいっそう速度に乗っていくことを実感した。

なのはとの距離が次第になくなり、頃合のよいところで魔法を展開

した。

落下するなのは優しく包み込むようなかたちで受け止める。

そのまま、ゆっくりとなのはを地面に下ろしていった。

「よかった。間に合った」

安堵の息を漏らすユーノ。

だがなのはがこの状態ではジュエルシードの封印は不可能だということも理解していた。

悔しいが、人命第一だ。

金髪少女は巨大猫の近くに着地してデバイスを巨大猫に向ける。

雷のようなものを発生させながらデバイスは告げる。

「シーリングモード。セットアップ」

デバイスの杖部分が伸び、先端が百八十度移動し、伸びた杖部分から金色の翼が展開した。

「捕獲！」

と金髪少女が言うと同時に先端から雷のようなものが帯びた球体が出現していた。

それを頭上に掲げてから地面に叩きつけるようにする。

雷を帯びた金色の球は地を抉るようにして巨大猫に向かっていく。

巨大猫に到達すると、巨大猫の全身に電撃が走っていた。

その中で巨大猫からジュエルシードが浮かんできた。

ユーノは金髪少女の動きを瞬きせずに見ていた。

（僕が彼女と戦って勝つことは、ゼロに近いくらいにない。でも、なのはなら可能性はある。だからなのはの為に、見逃さないようにしないとい！）

ユーノは今後のために金髪少女の動向を観察することにした。

無駄のない動きに先程の戦いからもわかるように隙のない身のこなし、戦闘経験なのはよりも上だということは明らかだ。

そもそもなのはは対人戦闘は今までないのだから、一回でも対人戦闘している者はなのはよりも経験豊富ということになるだろう。

ユーノは引き続き金髪少女を観察する。

「ロストロギア、ジュエルシード。シリアル14。封印」

デバイスを天に掲げて金色の光を放つ。

大気を操っているのか、周囲に雨雲が発生して無数の金色の雨、もしくは矢が降り注ぐ。

全弾気を失っている巨大猫に直撃する。

極めつけてとして、空に描かれた金色の魔方陣から特大の光が巨大猫に降り注ぎ、巨大猫を包み込んだ。

「ま、眩しいー！」

ユーノがあまりの眩しさに目を閉じてしまおうと同時に、全てが終わっていた。

金髪少女は巨大猫から元の子猫に戻っているのを見て、一瞬だが表情を和らげると、宙を浮いているジュエルシードをデバイスの中に納めた。

金髪少女が気を失っているのはを見ている。

(まさか、なのはに攻撃を!?)

ユーノはもしもに備えて戦う体勢をとる。

だが、金髪少女はそのまま立ち去っていった。

「助かった？それともその気がなかった？どっちにしてもなのは無事、か」

ユーノとしてはそれだけで安堵感を持つことはできなかった。

何故なら、目を覚ましたなのはが落ち込むのは明々白々だからだ。

「またなのはは自分を責める、な」

目が覚めるまでの間にどう励ましたらいいのか体のいい言い訳を考えることにした。

*

空は澄み切った蒼から焼けるような夕陽に変わろうとしていた頃。

野上良太郎が『翠屋』で高町美由希に絡まれながら高町士郎とチエスをしていると、ドアが開いた。

フェイトとアルフだった。

「あ、来た。思ったより早かったね」

「う、うん。思ったよりも上手く行ったから、かな」

「良太郎、どこ行く？あたしはできれば肉が食べれる所がいい！」

フエイトの声色がいつもより低いというよりも暗かったことを良太郎は見逃さなかった。

アルフがそれを気取られないようにいつも以上に明るく振舞っていることも良太郎は薄々と感じていた。

だが、それはこの場で詰問すべきことではない。

「さてと、それじゃ行きます。どうもごちそうさまでした」

「また、いつでも来てくれていいからね。良太郎君」

「はい、ありがとうございます」

そう言うと、良太郎はチェス盤と駒を片付けてから時間つぶしに食べていたスイーツ代を払い、フエイトとアルフと共に『翠屋』から出た。

「アルフさんは肉を食べたいと言っていたけど、フエイトちゃんは何がいい？」

『翠屋』を出てから百メートルほど歩いたくらいの所で良太郎がフエイトに尋ねた。

「え？うーん、身体動かしたから、わたしもアルフと一緒にいいよ」

「わかった。じゃあ、焼肉にでも行く？」

「やきにくって何？良太郎」

フエイトは首を傾げて良太郎に尋ねる。

「まあ、単純に網の上で肉を焼いてタレを浸けて食べる料理、かな」

「あたし絶対に行く！食べたい食べたい！」

アルフの食欲を更に刺激したようだ。

そんなアルフを見てフエイトも小さく笑みを浮かべる。

「行こう。良太郎」

フエイトが良太郎を促した。

商店街の一角に良太郎達の目的地である焼肉屋を発見し、三人は入店した。

店内はそれなりに客がいて、それなりに繁盛していた。

店員に空いている座敷に案内され、良太郎が一人で座り、その対面にフエイトとアルフが座った。

「さあてと、何頼もつかなあ」

アルフが舌なめずりしながらメニューを見始める。

「あ、二人とも。食べる前に訊きたい事あるんだけどいい？」

良太郎の切り出しにフェイトは一瞬だけ身を強張らせた。

アルフも持っているメニューがぶるぶると震えていた。

良太郎は悪いことをした子供に問い詰める親のような心境になりながらも続ける。

「今日の二人の用事って、ジュエルシード絡みでしょ？」

確信がこもった言い方で二人に訊ねる良太郎。

「……」

「……」

二人は口を開かない。

(やっぱり)

二人の沈黙を肯定だと良太郎は判断した。

良太郎は更に続ける。

「そこでフェイトちゃんと同じ歳くらいの女の子の魔導師と遭ったんじゃない？」

これも確信に近い物言いだ。

良太郎は二人を見る。

フェイトは顔を俯いたままでこちらを見ようとはしない。

アルフもメニューをテーブルに置いてフェイトと同じようにこちらを見ようとはしない。心なしか頭部の耳のようなものも萎れているように見える。

「……」

「……」

先程の質問と同じでやはり返答がない。

これも肯定だと良太郎は判断した。

「……知ってたの？」

俯いているフェイトの口からそんな台詞が漏れた。

「良太郎はわたし以外にジュエルシードを集めている魔導師がいるって事を知ってたの？」

今度は良太郎をきちんと見つめて訊ねた。

「知ってたよ。その子がジュエルシードを所持していることも、ね」
良太郎は誤魔化さずに正直に告げた。

「だったら何で?!」

今まで黙っていたアルフが感情に身を任せるようにして立ち上がり、両手でテーブルをドンと叩きながら良太郎を睨みつけた。

「何であたし達に言わなかったのさ!」

アルフにしてみれば良太郎は仲間なのだから、言ってくれてもいいのにといい思いがあった。

「言えば僕にしたことと同じ事をするんじゃないかと思つて、ね」

その一言にアルフは何も言い返せなかった。

良太郎がフェイトとアルフになのはの事を言わなかったのは、言えば襲撃するだろうと踏んでいたからだ。

対面にいる二人の様子からすると教えていたら確実に自分の予想通りになっていたということがわかる。

(今までは接触しなかったから何とかなかったけど、これからはそうはいかなくなるね)

今後のことを予想しながら良太郎は表情を緩めた。

「それでジュエルシードを見つけたの?」

良太郎は反省をしていると思われる二人に訊ねた。

声色には責めたり詰問したりする面は含まれていない。

「う、うん。見つけたよ」

フェイトはもしかしたらまた怒られるのではないかと、思っているのか恐る恐る答えた。

「そう、よかったね」

先程とは違い、良太郎は笑顔だ。

フェイト達の目的に小さな一歩とはいえ、進んだことは素直に喜ばしいことだ。

フェイトもアルフもその表情を見て毒気を抜かれた。

「怒ってないの?」

「うん。怒るも何も最初から怒ってないよ」

「ええ!! そうなのかい!?! 良太郎」

「僕が怒ってるように見えたのは二人に後ろめたいことがあったから
だと思っよ」

「うっ」

良太郎の指摘に少女二人の胸に何かグサリと刺さったような気がした。

そんな二人を見て笑みを浮かべていた良太郎はもう一度真剣な表情になる。

「フェイトちゃん、アルフさん」

「良太郎？」

「何、どうしたんだい？」

「僕もジュエルシード探し、手伝っよ」

良太郎の決意を込めた一言に少女二人は心は激しく揺れたことを実感していた。

海鳴温泉

第十三話 「探し場所は海鳴温泉」

「僕もジュエルシード探し、手伝うよ」

対面に座っている野上良太郎の一言がフェイト・テスタロッサの耳に入った瞬間、彼女の心は激しく揺れ動いた。

フェイトは横に座っているアルフをちらりと横目で見る。

良太郎の申し出に自分と同じように激しく心が揺れ動いているようにみえた。

ここは海鳴商店街の焼肉屋。ちなみに三人ともまだ何も頼んでいなかったりする。

「フェイトちゃんのように魔法で探すなんて事はできないけど、それでも一人より二人、二人より三人の方が早く集まると思うよ」

良太郎は激しくもなく、落ち着き払った声色でフェイト達に告げる。

「でも、良太郎。ジュエルシードは……」

フェイトは良太郎の申し出が正直に言えば嬉しかった。だが同時に自分の私情に巻き込んだことに申し訳なく思っていた。

「危険なんですよ？ だったら余計に二人より三人、だよ」

良太郎は語気を荒げることもないが、先程よりは若干押しを強くして言う。

「それはその……そうだけど」

もう一度良太郎を見る。

真剣な眼差しでこちらを一回も逸らさずに見ている。

どうしてこの人はこんなにも親身になってくれるのだろう。

(ど、どうしよう。良太郎を巻き込みたくないって思ってるのに、一緒に探してくれたら嬉しいって気持ちもあるし、どうしよう)

隣の相棒をちらりと見る。

(アルフ、どうしたらいいと思う?)

念話で話しかけることにした。

(あたしとしては、良太郎に手を貸してもらうってのはアリだと思うけどねえ)

(でも、良太郎は……)

(たしかに魔法は使えないけどさ。ジュエルシールドを横取りしようとする奴らからフェイトを守る力はあるしね)

アルフは電王のことを言っているのだろう。あの力なら自分を守ってくれるだろう。

(それに良太郎の顔見て何も気づかなかったわけじゃないだろ?)

(えと……それは、その……)

(良太郎は絶対に考えを曲げないよ。フェイト、自分の本当の気持ちに正直になりなっ)

アルフが念話の回線を切った。

(自分の本当の気持ち……)

アルフの最後の一言にフェイトはもう一度自分の気持ちを見つめ直した。

(わたしは……)

良太郎は誠実だし、優しい。それに、自分にはない強さがある。

自分にはない強さというものは電王としてもそうだが、人間としての強さが大部分を占めている。

良太郎と共にジュエルシールド探しをしているところをイメージする。

心の中を『安心』が覆った。

とても温かく、優しく、そして安らいだ。

フェイトの心は決まった。

「良太郎」

フェイトは良太郎の瞳を真っ直ぐと見つめる。

「あのね。その……ジュ、ジュエルシールドをさ、探すの、手伝ってくれりゅ?」

フェイト自身は気づいていないかもしれないが、実は頬を赤くしてどこかいっぱいっぱいの表情になっていたりする。

(わたし、何やってんの!? 思いつきり噛んじやってるし!!)

折角、自分の心に正直になつて言ったのに。

フェイトはこの時、初めて「穴があつたら入りたい」と思った。

「あのフェイトちゃん。大丈夫?」

「う、うん!だ、大丈夫だよ。それより良太郎、その……さっきの返事は?」

「もちろん。喜んで手伝わせてもらうよ」

良太郎は迷いなく笑顔で答えた。

「あ、ありがとう!良太郎!」

「そんな……、頭を下げてもらうようなことじゃないよ。ジュエルシードの事は僕も他人事じゃないからね」

「良太郎?」

「他人事じゃないってどういうことさ?」

フェイトアルフは良太郎の台詞に疑問を浮かべる。

「僕にはフェイトちゃん達にジュエルシードを渡した責任があるからね」

良太郎はそう言うと、メニューを広げた。

「深刻な話はこのままでしてと。さて、何頼む?相当高いものでない限り大丈夫だよ?」

「え、あ、うん。そうだね。アルフ何がいいと思う?」

フェイトは良太郎の切替の早い台詞に促されるようにメニューを見る。

横にいるアルフも上から覗くようにして見ている。

「あんまり高いのはダメなんだつたら安くして脂あぶらがのつてるヤツがいいねえ」

「だったらコレにしようよ。値段も安いし脂がのつてるしね」

フェイトがアルフに薦めたのはコースだ。

「わたしはコレにしようかな」

フェイトが選んだのはハラミだ。

「僕はコレとコレとコレとコレ、あとはご飯だね」

良太郎が選んだものはフェイトにはメニュー越しなのでわからなかった。

良太郎が付近にある呼び出しボタンを押す。

店員がやってきた。

「あたし、ロース五人前」

アルフが先陣を切った。

「わたしはハラミを三人前で」

店員がそれを伝票に素早くメモしていく。

「僕はタン塩三人前にカルビを五人前、あとレバーとハツを一人前ずつで、ご飯を……、フェイトちゃん達はご飯はどうする？」

「わたしも欲しいかな」

「あたしもいるー」

二人の意見を聞いて良太郎は、

「ライスは三人前で」

と店員に告げてオーダーを締めた。

「かしこまりました」

と店員はお決まりの接客用語を述べてから軽く頭を下げた。それから十分後にオーダーしたものが全てテーブルに揃った。

「さあて、食べるぞお」

アルフの瞳が肉食獣じみた光を帯びていたのをフェイトは見逃さなかった。

「アルフ、はしたないよ。でも、食欲はそそられるね」

フェイトはアルフをたしなめながらも箸を構えている。

「それでは」

良太郎は両手を合わせる。

その仕種をみたフェイトとアルフは釣られるようにして同じ仕種をする。

「いただきます」

食材に対する感謝を述べた後、三人は獰猛な獣となった。

*

雲が我が物顔に泳ぎ、月が輝く舞台がないと思われる夜。

場所はフェイト達が住んでいるマンション。

良太郎達はテーブルに地図を広げて今後の対策会議が開かれてい

た。

「それでフェイトちゃん。ジュエルシードを探すってどうやって探すの？このままじゃ海鳴市全土をしらみつぶしに探すしかなくなるよ」
「探索魔法で探るんだ。でも、大まかな場所しかわからないから後は地道に探すしかないけどね」

フェイトはそう言うと、目を閉じた。

精神を集中して探知魔法を発動させて搜索するのだろうと良太郎は判断したのでテーブルから離れることにした。

それから十分くらいが経過してから、フェイトはテーブルに広げていた地図にサインペンで赤マルを付けた。

「良太郎、アルフ。この辺りにジュエルシードがあるみたいだよ」

「えーっと」

「どれどれ」

離れていた良太郎とアルフはフェイトが記した赤マルの場所を見る。

「結構、広いんだね」

良太郎の言うようにフェイトが付けた赤マルは結構広い範囲を指していた。

魔法なしにたった三人で地道に探せば、下手をすれば数ヶ月はかかるだろう。

「ごめんね。家で探索するとなるとわたしの力だとコレが限界なんだ」

「家で、ってことはもし現場に行つて探索魔法を使えばもっと場所を絞れるって事？」

良太郎の案にフェイトはというと、

「うん、そうだね。もっと絞れると思うよ」

自信を持って頷いた。

「よーし！目的地がわかったんだ。後は行つて探すだけだね！そうでしょ？フェイト、良太郎」

今まで黙って聞いていたアルフが場を盛り上げるようにして咆哮に近い声を上げた。

「うん」

「そうだねってあれ？フェイトちゃん。ジュエルシードのある場所ってここなの？」

フェイトが頷き、良太郎も頷こうとするが何かに気づいたようだ。

「うん、そうだよ。良太郎、どうしたの？」

「ここ、温泉街だよ」

「オンセンって何だい？良太郎」

アルフが訊ねる。

「ああ、そうか」

アルフが何故こんな質問するのかわからなかったが、二人を見合わせて納得した。

二人は自分と同じで異世界人だ。

日本独特の文化に疎いのも頷ける。

だが、良太郎も他人に「温泉」を説明できるほど知識人ではない。

「わかりやすく言うよね。大きなお風呂、かな」

「お風呂？」

「うん。実際には直に見たほうがわかりやすいかもね」

良太郎は二人に自分なりの解釈で説明を終えると、一冊の薄い本を持ってきた。

「なにそれ？」

フェイトは持ち主なのにそれが何なのかわからないようだ。

「タウン誌だよ。海鳴市の事ならコレを見たら大体はわかるはずだからね。えーと温泉街はと……」

ページを捲る良太郎はフェイトはじつと見ていた。

「ん、どうしたの？」

「え？な、何でもないよ。本当だよ！」

フェイトの視線が気になったのか良太郎はタウン誌から目を離し、フェイトを見るが彼女はいきなり目が合ったのか慌てていた。

「そう？あ、あった」

良太郎はフェイトとアルフに見せる。

「えーと、『ここは海鳴温泉街。来て満足！入って満足！温泉マニアも

太鼓判。日頃の疲れもここで全部洗い落とそう!』だって」
アルフがフェイトに聞かせるようにタウン誌を読み上げた。
「今から予約取れるかなあ」

良太郎はケータロスで旅館のひとつに電話をかける。

「良太郎、旅館つて直に行ったら泊めてくれるんじゃないの?」

フェイトの尤も質問に良太郎は苦笑いを浮かべる。

「そうなんだけどね。予約しないと受け入れてくれない所もたくさんあるから、念を入れてね」

『もしもし』

男の声が良太郎の耳に入った。

「あ、すいません。実はそちらに泊まりたいんですけど、どうなんでしょう?」

『今のところは空き部屋もありますし、予約していただければ大丈夫ですよ』

「そうですか。では明日伺いますのでよろしくお願いします」

『承知いたしました。来客は何名でしょうか?あと、お客様の名前前は?』

「大人二人と子供一人の三名です。あと野上です」

『野上様ですね。ご来館お待ち申し上げております』

そう言うと、通話が切れた。

「明日からってことにしたけど、もしかして都合悪かった?」

良太郎は二人の断りなしに日取りを決めてしまったを少々悔いた。

対して二人はというと、

「え?全然。むしろ一刻も早く探して手に入れた方がいいくらいだよ」

「そうそう。良太郎の判断は間違っちゃいないさ」

フェイトとアルフに異存はないようだ。

「それじゃ、二人とも明日に備えて準備するよ」

「うん」

「はーん」

良太郎の一声にフェイトとアルフは各々の返事で返し、明日の準備

に取り掛かることにした。

太陽が燦燦と輝き、旅行者にとっては幸先がよいとも思われる朝。

「二人とも準備はいい？」

女性二人分の荷物と自分の荷物を持った良太郎がマンション入り口で確認を取っていた。

「うん。わたしは大丈夫だよ」

「あたしも問題なし！」

三人は海鳴温泉街行きのバスに乗車し、向かった。

バスの中は思ったよりもガラガラで殆ど三人の貸しきり状態となっていた。

「乗客がいるとバスって狭く感じたけど、いなかったらこんなに広かったんだね」

良太郎は感想を述べながら一番後ろの座席の中央に座っている。

「アルフ、いくらガラガラだからってウロウロしちゃダメだよ」

フェイトは良太郎の右隣に座りながらアルフに注意する。

「フェイト、いくらあたしでもそのくらいの常識はわきまえてるって」
外見はフェイトより年上のアルフだが、精神の方はどちらかといえば年下ではないかと良太郎は思っていたりする。

アルフはフェイトに注意されながらも好奇心には勝てないのか吊り革を両手で持つてぶら下がったりしていたりする。

良太郎は旅行用バッグからタウン誌を取り出す。

パラパラと捲りながら自然と笑みを浮かべる。

「良太郎、嬉しそうだね」

隣のフェイトが良太郎の笑みを見逃さなかった。

「そうだね。温泉なんていつ以来かなと思って、さ」

「そうなんだ」

「うん。フェイトちゃんは初めてなんだから思いつき楽しんでね」

「え、う、うん。わかった」

フェイトは戸惑いながらも首を縦に振った。

（まさか、いくらなんでもこの場所でぶつかるなんてことはないよ、ね？）

良太郎は一瞬、最悪の出来事を想像したがすぐに払うことにした。バスが海鳴温泉街に到着したのはそれから三十分後のことだ。

ひとつの光が現れ、まるで自分の意思を持っているかのように温泉街をふわふわと徘徊していた。

その光は、何かを考えたのか林の中に隠れた。

それはまるで、目当ての獲物をじつと待ち続ける猟師のように。

海鳴温泉街に到着した三人は前日に予約した温泉旅館に着いた。

「予約していた野上ですが……」

良太郎がそう言うと、法被を着た中年男数名と和服を着た妙齡の女性一人が笑顔で迎えた。

「これはこれは、ようこそお越しいただきました。さき、お部屋にご案内させていただきます」

女将らしき女性がそう言うと、中年男が良太郎の前に寄ってきた。

「お荷物をお持ちいたします」

「お願いします」

良太郎は荷物を全て渡した。

部屋に案内された良太郎達は荷物を受け取り、部屋の端に置くとそれぞれ自由な行動をとった。

「きれいな景色だねえ。フェイト」

「うん、でもわたし達は旅行じゃなくてジュエルシードを探しに来たって事を忘れちゃダメだよ」

フェイトとアルフは部屋から景色を眺めている。

良太郎は三人分の茶を淹れていた。

「二人とも、お茶淹れたよ」

そう言うと良太郎は二人に茶をテーブルに置いた。

「ありがとう。良太郎」

「お菓子ないのー?」

フェイトは素直に受け取り、アルフはお菓子の催促までしてきた。「この中に入ってると思うよ」

テーブルの上に最初から置いてあった丸い木製の蓋付き容器をアルフの前に差し出した。

「さて、どうする？フェイトちゃん。まだ日が暮れるまで余裕はあるから今から探す？」

「そうだね。今日は日が暮れるまで探そう。アルフは？」

「あたしは先に「温泉」に入るよ。フェイト、後で感想聞かせてあげるからねえ」

アルフはバスタオルと浴衣を持って浴場に向かった。

「あ、うん。楽しみにしてるよアルフ」

良太郎とフェイトはアルフを見送った後、旅館から出た。

旅館から出た良太郎とフェイトは早速ジュエルシード探しに取り掛かっていった。

「フェイトちゃんはアルフさんと一緒に浴場に行かなくて良かったの？」

「うん。人が多いの、苦手だから」

良太郎はフェイトがアルフと浴場に行かなかった理由を尋ねた。

フェイトが九歳の少女らしい好奇心を持っていることを良太郎は知っていた。

アルフが浴場に向かった後、フェイトは探索魔法を部屋で使ったのだが、地理がわからない状態だったのか今ひとつ曖昧な結果となった。

地理さえ理解すればもつとはつきりとわかるらしい。

フェイトにこの辺りの地理を記憶してもらうために、旅館から出たということだ。

「ごめんね。良太郎」

隣に並んで歩いているフェイトが申し訳なさそうに謝ってきた。

「そんな、謝らなくていいよ。フェイトちゃん」

そう言いながら良太郎はフェイトの頭にぽんと手を置き、フェイトの目線に合うようにしゃがむ。

「え？りよ、良太郎!？」

「この温泉街のどこかにあるっていうのはわかってるんだからさ、後はフェイトちゃんが細かいところまでこの場所を把握すれば見つかったも同然じゃない。違う？」

「あ、うん。そうだね。そうだよね」

「そうだよ。だから前向きに考えよう。ね？」

「うん！」

フェイトは良太郎に励ましに応えるように頷いた。

「いい返事だね」

良太郎は笑顔になり、フェイトの頭に置いていた手を動かし、頭を撫でた。

「りよ、良太郎。その……恥ずかしいよ」

フェイトは撫でられるたびに顔を真っ赤にする。

「ああ、ごめんね。フェイトちゃん」

フェイトの抗議に良太郎はあっさり引き下がり、フェイトの頭から手を離す。

「あ……」

離れた瞬間、フェイトは残念そうな声を漏らした。

「フェイトちゃん？」

「あ、うん。な、何でもないよ！行こう！良太郎」

フェイトは照れを良太郎に見られたくないのか早足で歩き出した。

「フェイトちゃん、どうしたのかな？」

良太郎はフェイトが何故早足に歩き出しのか理解できていなかった。

九歳とは思えない早足なので良太郎は走って追いかけた。

良太郎は知らない。

自分が予想していた最悪の出来事が現実のものになることを。

フェイトは知らない。

警戒すべき相手は、既にこの温泉街に潜んでいる事を。

第十四話 「イマジンと魔導師の息抜き」

野上良太郎、フェイト・テスタロッサ、アルフがジュエルシード探しのために海鳴温泉街に向かい、行動している昼頃。

高町家本家にある道場には四体のイマジンと、二人の少女、フェレット一匹が輪を作つてある会議を開いていた。

「やっべえなあ。なのはのダチ二人完全に怪しんでるぜ」

モモタロスが先陣を切るかのように口を開いた。

「たしかに、センパイと違ってアリサちゃんとすずかちゃんは勘が鋭いから確実になのはちゃんの事を怪しんでるよね」

ウラタロスが右手を曲げて左手で右肘を支えるといういつものポーズを取つてモモに対するからかいを忘れることなく、現状を把握しようとする。

モモタロスの頭部に怒りの象徴たるピキマークがひとつ浮かび上がっていたりする。

「あんなにちつこいのにモモの字より賢いんや。俺らの事もなのはの事もいずれは気付くで。何とか上手い事誤魔化さなあかなあ」

キンタロスが親指で首を捻つてから、今後の対策案を口に出した。

また、キンタロスの一言でモモタロスの頭部に怒りの象徴たるピキマークがもうひとつ浮かび上がっていたりする。

「アリサちゃんとすずかちゃんを騙すのは僕やだなあ。アリサちゃんもすずかちゃんもモモタロスと違って騙しても引つかかるとは思えないよお」

リュウタロスがスケッチブックにフェレット——ユーノ・スクライアを描いていた。

くどいようだが、リュウタロスの一言でモモタロスの頭部にピキマークがさらにひとつ浮かびあがっていた。

「リュウタの言う通りよね。あの二人を騙すには相当手の込んだことをしなければならぬわね。モモと違って単純じゃないしね」

しつこいようだが、コハナの一言でモモタロスの頭部にピキマークがひとつ浮かびあがっていた。

「あのお、モモタロスさん？」

高町家次女、高町なのはが小刻みに震えているモモタロスの顔を覗き込む。

「あ、あの無理かもしれませんが、その抑えてくれませんか？」

頭に完全に血が上っているモモタロスに言っても無駄かもしれないけどユーノは諫言した。

「デメエらあ……」

モモタロスは立ち上がる。

「さつきから黙って聞いてりや、人をダシにしやがってえええええ!!」
拳を作り、ウラ、キン、リュウ、コハナに向かって殴りかかろうとする。

「モモタロスさん！やめてください！」

「そうです！皆さんも言いすぎですよ！」

なのはとユーノが四人に抗議する。

「大丈夫だよ。なのはちゃん、ユーノ」

「え？」

「何故です？」

ウラタロスは余裕で構えている。

なぜそんなに余裕を構えているのかは二人にはわからない。

「モモ！」

コハナがモモタロスの間合いに入り込んで正拳を叩き込んだ。

「オマエよお、今回……俺、悪くねえだろうがよお」

そう訴えながらモモタロスは地に崩れ落ちた。

「……」

「……」

なのはとユーノは黙った。

口から出ようとした言葉を二人は呑みこんだのだ。

恐怖政治というか、イマジンとコハナの上下関係というものを見てしまったからだ。

「明日から一泊二日で温泉旅行？」

高町家長女、高町美由希が読んでいた雑誌から目を離して提案をし

てきた父、高町士郎を見た。

「ああ、すずかちゃんのところとアリサちゃんのところも一緒だから結構な数での旅行になるがな」

「それはいいんだけど、何で？」

美由希としては旅行そのものに異議はない。ただ、何故温泉旅行に行くのかが聞きたいようだ。

「理由はまあ、日頃の疲れを癒す、かな？」

士郎が模範的な回答を述べた。

「ふうん、まあ私は温泉に入れるからいいんだけどね。ところでこの事を恭ちゃんは知っているの？」

「恭也には既に忍さんから伝えてあるはずだから問題ないだろう。後のはなのはとモモタロス君達とアリサちゃんの所だけだが、アリサちゃんのところは俺が連絡するからいいとして美由希」

「なに？お父さん」

「道場にいるなのはとモモタロス君達に知らせてきてくれないか？」

「はい」

美由希はソファから立ち上がり、道場に向かった。

(そういえば彼、誘ったら来るかな)

道場に向かいながら彼女はとある人物のことを考えていた。

最近、『翠屋』で知り合った青年のことだ。

現在居候している四人のコスプレバンドマンと一人の少女の仲間で、自分が見る限り多分あの中なら一番の常識人だろう。

名前は確か野上良太郎。

外見から判断すると年齢は自分よりは上、多分恭也と同じ歳くらいだろう。

会話を数時間した程度だが、それなりに人となりは見えている。

悪人という言葉とは無縁な存在だろう。

「ハナちゃんに連絡先、聞いてみようかな」

美由希は良太郎の連絡先を知っているとと思われるコハナに訊ねてみようと思ひながら、道場に向かう足を速めた。

*

カラスが空を飛ぶ風景がさまになる夕暮れの時。

海鳴温泉街は昼間以上に人で溢れていた。

野上良太郎とフェイト・テスタロッサはジュエルシード探しをしていた。

「そろそろ夕飯時だね」

良太郎は腕時計を見て、「そろそろ切り上げようか」と進言する。

「うん、そうだね。今日はここまでにしようか」

フェイトも良太郎の意見に同意した。

「何だか急に人が多くなったね」

フェイトが周囲を見回しながら感想を述べた。

「そうだね。今の時間帯が入り時なのかな」

「でもみんながこの時間帯に温泉に入るんだったら、混んでて狭くない？」

「まあ、そうなるかな」

フェイトの鋭い指摘に良太郎は苦笑いを浮かべるしかなかった。

自分達が宿泊している旅館に着くと、法被を着た従業員が「おかえりなさいませ」と頭を下げてきたので二人は、

「ただいま戻りました」

と返した。

部屋に戻ると、浴衣姿のアルフが牛乳を何本か飲んでいて。空になった牛乳瓶は中年親父が飲み終えた酒瓶のようにテーブルの上に転がっていた。

「おかえりー。フェイト、良太郎」

「アルフ、温泉はどうだったの？」

「広かったよ！人も全然いなかったからさ、あたし思わずクロール、背泳ぎ、平泳ぎにバタフライやっちゃったよ！」

アルフは興奮気味に語った。

「そうなんだ」

フェイトはアルフの感想に満足していた。

部屋の電話が鳴り出したので、良太郎が受話器を取る。

「はい」

『夕食はいつお持ちすればよろしいでしょうか?』

男性従業員の声だ。

良太郎は腕時計の時刻を見る。

「そうですね。僕も連れの一人も入浴したいから、その後の方がいいので今から一時間半くらい後でお願いします」

『かしこまりました』

お互いに言うべき事を言い終えたので、電話は切れた。

良太郎は浴衣とバスタオルを持つ。

「さてと、汗流してくるかな」

「待ってよ。わたしも行く」

フェイトも良太郎につられるようにして浴衣とバスタオルを急いで持つ。

「あたしももう一回入ろーっと」

アルフは昼に入って気に入ったのか入浴する気満々だった。既にバスタオルも持っている。

もしかしたら一人で女湯に入る事に心細さと不安を持っているかもしれないフェイトへの配慮かもしれない。

「それじゃね、もし僕より先に上がっても待たずに部屋に戻っていいからね」

風呂場の入り口前にフェイトとアルフにそう言うと、良太郎は男湯の中に入っていった。

「うん」

「わかったー」

フェイトとアルフも頷くと、女湯に入ってしまった。

良太郎が風呂場入り口に出てくると、フェイトとアルフの姿はなかった。

「女の人の入浴って男の倍以上かかるって言ってたな」

ちなみにこのような事を良太郎に吹き込んだのは姉——野上愛理の追っかけ一号である尾形正義おがたせいぎだったりする。

それに先程から浴衣姿の客が数名、男女問わずにちらちらとこちらを見ている。

流石の良太郎も風呂場入り口ですつと待つというのはどうもそれなりに抵抗を感じているので、部屋に戻る事にした。

部屋に戻っても、フェイトとアルフの姿はないのでまだ入浴中だと良太郎は確信した。

座り込んでパスと財布とケータロスをテーブルに置く。

ケータロスの着メロが鳴り出した。

『もしもし、良太郎君?』

通話状態になると、聞き覚えがない声でした。

「あの、失礼ですけどどちらさまで?」

『あ、ごめんね。その美由希です。高町美由希』

「ああ、なのはちゃんのお姉さん」

一度しか会ったことがないので記憶に定着しなかったのだろう。

「どうしたの?というより、どうしてこの電話の番号知ってるの?僕、誰にも教えた覚えがないんだけど……」

『えと、それはね。ハナちゃんに聞いたんだ』

「あ、そうなんだ。それでその、僕に何か用事でも?」

良太郎は年端の近い女性の対応に悩みながらも用件に入ろうとする。

『えとさ、明日家族及び友達と一緒に温泉に行くんだけど、さ』

「うん」

良太郎は聞き手に回っている。

『もちろん、その家族及び友達にはモモ君達も含まれてるんだ』

「うん」

良太郎は美由希が目的を言うまで待つつもりだ。

『だからさ、モモ君達の友達である君も誘おうと思ったわけなんだけど……』

「そうなんだ。誘ってくれたのは嬉しいんだけど僕今、連れと旅行中だから無理なんだ。ちなみに温泉旅行の場所ってわかる?」

『え?海鳴温泉街だけど。そっか残念だなあ』

行き先場所が耳に入った時、良太郎は頭を抱えた。

(嘘でしょ?ぶつかる可能性大じゃないか!)

「旅館名ってわかる？」

これでもし、万に一つ同じ旅館なら確実にぶつかる。

仮になのがフェイトと鉢合わせすれば、察しのいいなののことだからジュエルシードがその近辺にあるという結論に行き着くだろう。

そうなれば奪い合いになるのは必至だ。

『海鳴◇○旅館だけど。そっか、残念だなあ』

美由希が少々がっかりした声で通話を切った。

(……良かった)

美由希が口にした旅館名を聞いて、良太郎は少しだけホツとした。それでも旅館は違えど同じ温泉街にいる以上、鉢合わせする可能性は捨てきれない事は事実だ。

(会う前に回収して、離れる以外に方法はないね)

良太郎は今後の事を胸中で練り終えた頃を見計らったかのように襖が開いた。

「良太郎、先に帰ってたんだ」

「いやー、あたし病み付きになりそうだねえ」

浴衣姿のフェイトとアルフが入ってきた。

「おかえり二人とも、フェイトちゃん、初温泉どうだった？」

「うん、とても気持ちよかったよ」

フェイトは小さく微笑むが、それはやはり場を取り繕うための笑みだ。

「そう、二人とも座って。今後のことを話したいんだ」

良太郎は頷きながら、二人に座るように促す。

「どうしたの？良太郎」

「アルフ、良太郎が話すからとにかく聞こうよ」

アルフが立ったまま、訊ねようとするがフェイトがアルフに座るよいうに言う。

「モモタロス達が明日にでも海鳴温泉街こに来るみたいなんだ」

「モモタロス？」

「モモタロスって誰だい、良太郎」

「あ、そうか。二人にはまだ言っていなかったんだね」

良太郎はこの二人にまだ、自分の身内のことを話していなかった事を思い出した。

仲間が相手側魔導師にいる事は教えていたが、名前までは教えていなかった。

「僕の仲間で、他にもウラタロス、キンタロス、リュウタロス、ハナさんがいるんだ」

「タロス？」

フェイトはあまりに聞き覚えのない名前に首を傾けてしまう。

「誰がつけたのかはわからないけどネーミングセンスは壊滅的だね」

アルフの一言は名付け主にとっては一本の矢だった。

「はうっ！」

名付け主——良太郎の胸にグサリと刺さっていた。

「まさか良太郎なの？」

仲間内から果ては未来の孫にまで自分のセンスは壊滅的（キンタロスの言葉で言う）泣ける”レベルと言われても、それなりにへこんだことはある。

だが、ここまで痛烈に胸に突き刺さったことはない。

相手が異世界人だからかもと良太郎は考えてしまう。

「りよ、良太郎。わ、わたしはいいと思うよ！タロスって」

フェイトが良太郎を励まそうとする。

「そ、そうだよ！改めて聞くといい名前じゃないさ。タロス」

アルフも励ましている。

「……わかつてはいたんだけどね。異世界でも僕のセンスって壊滅的だとわかるとき、ちよつとショック受けちゃってね。ははは」

乾いた笑みを漏らす良太郎をフェイトとアルフは不器用ながらも褒め言葉と励ましの言葉を言いまくる。

夕食が届くまでには無事立ち直らせる事に成功した。

*

野上良太郎達が温泉街で一泊過ごして迎える最初の朝。

昨日と同じく、太陽は眩しく地上を照りつけ、空は青一色だった。

海鳴温泉街のある旅館の浴場には明らかに人間ではない四色の存在が入浴を満喫していた。

「まったく、イマジン《ひと》の面見て、門前払いなんて感じ悪いたらありやしねえぜ」

赤色——モモタロスが頭に濡れた手ぬぐいを置いて、来館の際に起こったことを思い出した。

「まあ仕方ないよね。僕達の外見って下手をすれば体に塗り絵している人達より異常だからね」

青色——頭を洗っているウラタロスは旅館従業員の対応は間違っていないし、正常な判断だと言う。

「まあ、ええやないか。旦那さん（士郎のこと）と奥さん（桃子のこと）が上手い事言うてくれたんやからな」

金色——キンタロスは鼻歌を歌いながらも、二人に「過ぎた事は忘れる」と諭す。

「でも、僕の顔見て腰抜かすなんてひどくない？」

紫色——リュウタロスはモモタロス同様に不満をこぼしていた。

「クマの言うようにいつまでも過ぎた事言っても仕方ねえしな。

あー、いい湯だぜ。足が伸ばせるってのはいいもんだなあってカメ、オマエ何してんだよ？早く入れよ？」

根が単純なモモタロスは気持ちを切り替えるが、ウラタロスがらしくない行動をしていた。

湯に浸かろうとしないのだ。

「それはわかってるんだけどさ、そのね、以前キンちゃんど風呂に入つたときに起こった事を思い出しちやつてね」

「ああ、オマエ流された時か」

「えー、そんな事あったの？どうして教えてくれなかったのさ！モモタロスう！」

リュウタロスはそんな面白イベントを見逃した事を後悔し、モモタロスに八つ当たりした。

「小僧！テメエは乗つからんじやねえ！後、頭を叩くんじやねえ！テメエはその辺で泳いでろ！」

そんな二人を他所にウラタロスは湯に浸かり、キンタロスの側まで寄る。

「キンちゃん、お願いだから底に穴なんて開けないでよ！僕お笑い担当じゃないんだからさ」

「わかっとなるがな！カメの字もしつこいで！」

そう言いながら、キンタロスは風呂底を右腕で叩こうとするが、ウラタロスがとっさに掴む。

「だから、ソレをやめてって言ってるんでしょ！」

ウラタロスは本気だった。

「ほーら、すすいーっと。わーい、広ーい。見て見て。クロールウ」
今まで犬掻きをしていたリユウタロスは浴場の広さに感心しながら三人に見せるようにクロールを始めた。

海鳴温泉街には森林浴を目的とした散歩道がある。

そこに外見こそ若いのが、三児の親である二人が歩いていた。

高町士郎と桃子だ。

「二人だけでこうして歩くのも随分久しぶりね」

桃子が優しく吹く風を感じていた。

「そうだな。こんなにゆったりとした気分を味わうのは久しぶりのよ
うな気がする」

士郎も風を感じながら、太陽の暖かさを満喫していた。

「なのはがモモタロス君達を連れてきてからは毎日が祭りのようだからな」

士郎が笑みを浮かべる。

「そうね。毎日が楽しいわ。でも……」

桃子も釣られるように笑みを浮かべる。

「どうした？」

笑みを浮かべていた桃子の表情が曇る。

「最近なのはの様子、おかしくない？それもモモタロス君達が来てから……」

士郎も深刻な表情になる。

桃子の言う通り、娘の様子が急に変わったのはモモタロス達が来て

からだ。

なのは自身は気取られないようにいつも通りに振舞っているが、そこは親の目、そんな違和感も見逃さない。

「そうだな。なのはの事は心配だ。だが、モモタロス君達がいれば大丈夫だろう。彼らからは修羅場を潜った者の臭いがするからね」

「あなたと同じように？」

「ああ、多分良太郎君も同じだろうな」

「良太郎君が？まさか……」

桃子は士郎の発言に驚く。

「多分彼があの中を中心なんだろうな。そして彼が不在のときはモモタロス君が中心になっているんだろう。彼らからは俺が今までに感じた事のない強い絆を感じる。そんな彼らがなのはの味方でいてくれるんだ。俺達はいつかなのは達が自分から内に抱えているものを打ち明けるのを信じて待ってしよう」

「それが親の、いえ、大人の役割なのね」

「そうだ」

そう締めくくると、高町夫妻は更に奥を歩き出した。

第十五話 「激化のヒキガネ」

高町家とその仲間達が、温泉旅館に到着して各々自由行動を取っている頃。

海鳴温泉街の別の旅館のとある部屋では男一人女二人の三人が朝食を取り終え、今後の事を話し合っていた。

「わたしと良太郎はもう少しこの温泉街の地理を学ぶために散策するよ。あともしかしたらだけど、その途中でジュエルシードを見つければるかもしれないしね」

フェイト・テスタロツサは今後の予定を真っ先に告げた。

「アルフさんはどうするの？」

野上良太郎は湯飲みに人数分の茶を淹れながらアルフに訊ねる。

「あたし？あたしはね、他の旅館の風呂に入ろうと思ってるんだけどね」

アルフは湯飲みを受け取り、喉を茶で潤しながら答えた。

完全に観光気分なのだが、良太郎もフェイトもアルフを責めたりはしない。

「そんなことできるの？」

フェイトはこの中で尤も温泉街に関して詳しい良太郎に顔を向ける。

「温泉街にもよるけど、海鳴温泉街はできるみたいだよ」

良太郎はタウン誌を取り出して記載されているページを開き、フェイトに見せた。

「ええと、『お一人様一枚千五百円で、海鳴温泉街の露天、室内風呂問わずに三箇所を任意に選択して入湯できる『入湯手形』販売中。ご購入の際には各旅館の受付で。使用済みの手形はお土産にもなりません』だって」

「ねえねえ良太郎、フェイト。いいでしょ？」

アルフが二人に子供のようにおねだりしてくる。

良太郎は(リュウタロスがわがまま言うときみたい)と思い出し、口元を緩めてしまう。

フェイトを見るが、どこか困ったような顔をしているができるなら
願いをかなえてあげたいなという気持ちが表に少しだけ出ている。

「良太郎、どうしよう?」

「いいんじゃないかな。記念品として買っておくのもいいしね」

そう言いながら良太郎は財布を取り出し、三千円をアルフに渡した。

「あれ?良太郎。それじゃ一枚分多いよ?」

フェイトが良太郎に出し間違いではないのかと訊ねる。

「ん?フェイトちゃんの分」

「え?そ、そんな……わたしはその……」

良太郎の一言にフェイトは予想外の出来事なので狼狽する。

「僕は昨日言ったよね?思いつきり楽しんでねって」

「え?う、うん」

「だからだよ。フェイトちゃん、言わないと絶対にジュエルシード探
しばかりに専念すると思うから」

良太郎の一言はフェイトにとつては痛いところをつく指摘だった。

「少しは肩の力抜かないと、ね?アルフさん、二人分お願い」

「あいよ、良太郎」

良太郎の一声でアルフはフェイトが何かを言う前に部屋を出て受
付に向かっていた。

「わたしの分も買ってくれるのは嬉しいけど良太郎はいいの?」

そうアルフに入湯手形代金として渡したのは三千円、つまり二人分
だ。

その二人とはフェイトとアルフの分であつて良太郎の分はない。

「ああ、いいよ。僕、カラスの行水だし」

「カラスの行水?」

フェイトが聞きなれない言葉が耳に入ったので、発した良太郎に尋
ねる。

「うーんとね。湯船に浸かってもすぐに出ちやうこと、かな」

「そうなんだ。何かもつたいたくない?」

「そう、なんだけどね」

フエイトの指摘に良太郎は鼻の頭を搔いた。

アルフが二枚分の入湯手形を購入して部屋に戻ってきたのはそれから十分後の事だ。

「ふんふんふん♪ここは本当に天国だねえ。良太郎とフエイトに頼んで拠点をこつちに変えてもらおっかな」

海鳴温泉街では浴衣の胸元をだけさせたアルフが木製で将棋駒のように象られた物——『入湯手形』をくるくると振り回しながら鼻唄交じりに歩いていた。

温泉が気に入ったアルフにとってここはまさに天国といつても過言ではないだろう。

既に手形には二つの温泉旅館の判が押印されていた。

「あと一箇所かあ。正直悩んじゃうよねえ」

アルフはこれまでに自分が宿泊している露天風呂と今日に別の旅館で露天風呂に入っていた。

「室内温泉ってのもいいねえ」

アルフは室内温泉をウリとしている温泉旅館を探す事にした。

*

良太郎達が宿泊している旅館とは別の海鳴温泉旅館の女風呂ではうら若い少女達の声が飛び交っていた。

高町なのはの親友であるアリサ・バニングスが親友の姉である高町美由希の胸を背後から掴んだり、その仕返しとして美由希がアリサの下着をずらしたりしていた。

月村すずかは姉の月村忍のプロポーションを羨望の眼差しで見ている。

そんな女性陣の無防備な脱ぎっぷりを見せ付けられている、というよりは見ない振りしながらもしつかりと見ているのは一匹のフェレット——ユーノ・スクライアだ。

（あのお、なのは）

（なあに？ユーノ君）

ユーノは念話の回線を開き、なのはに話しかけた。

（僕も入るの？）

(え?もしかしてユーノ君。お風呂嫌い?)

(あ、いや、そういうわけじゃないんだけど……)

なのははユーノが何故、入浴にためらっているのか理解できていないようだ。

(じゃあ、一緒に入ろうよ)

なのはは衣服を脱いで下着姿になっている。

(あのお、なのは。僕はモモタロスさん達と一緒に部屋にいた方がいいと思うんだけど……)

ユーノは抵抗の姿勢を崩さない。

ここで屈したら自分は男として大切なものを失うと予感していた。

なのはは下着を脱ぎ、バスタオルを巻き始める。

その間、ユーノは小さな手(前足ともいう)で目を覆うようにしているが、実は少しだけ視界に入るようにしていたりする。

(だーめ!ユーノ君も一緒に入るの!)

ユーノはそれでも抵抗の姿勢を崩さない。

彼の心中には『連れて行かれたら負ける』という言葉が支配していた。

だが、生まれたままの姿同然の少女と自身の煩惱という強大な相手を前に彼の発達途上な精神が勝てるはずもなく、屈する事となった。

(ああああああ、僕の馬鹿!)

心の中で自分を罵った。

なのははに抱えられたユーノは、先に温泉を満喫している女性陣(アリサ、美由希、すずか、忍)をできるだけ視界に入れないように周囲を見回した。

ユーノとしては、異文化ともいうべき『温泉』は実をいうと興味があつた。

本来ならば諸手を挙げて大喜びしていたはずだろう。

(うううう。)

だが、今の状況ではそれは叶わないことだった。

今の自分はフェレット。そして、今自分と同じ空間にいるのは小動物の取るアクションなら何でも「カワイイ」といって魔手を伸ばして

くる恐ろしい悪魔達がいるからだ。

「お姉ちゃん。背中流してあげるね」

「さすがが姉に申し出た。」

「ありがとう。すずか」

「忍が快く了承した。」

「じゃあ、わたしも！」

「なのはも美由希に申し出た。」

「ありがとう」と美由希も快く了承してくれた。

（仲がいいんだね）

とユーノは心の中でほほえましく思っていたところを何者かに掴まれた。

「キュ？（誰？）」

と自分を掴んだ悪魔の顔を拝もうと上を向く。

「さーて、アンタはアタシが洗ってあげるわよ」

アリサだった。天使のように浮かべている笑みも今のユーノには悪魔が舌なめずりしているようにしか見えなかった。

「キュキュ、キュキュキューー！（なのは、助けて！）」

姉の背中を洗っているなのはに助けを求めてみる。

「心配ないわよ。アタシ、洗うの上手いんだから♪」

アリサはどうやら自分の先程の訴えを恐らく、「なのは以外の人に洗われるのは嫌だ！」とでも解釈したのかもしれない。

「なのはをもう一度見る。」

「……にやはははは」

と、苦笑いを浮かべながら姉の背中を洗っていた。

ユーノは退路は断られたと認めて腹をくぐる事にした。

*

良太郎とフェイトは粗方、海鳴温泉街を歩き終え、茶店で休憩していた。

「今の段階で魔法を使えばジュエルシードの場所を明確に探す事はできんわ。」

良太郎が奇数でワンセットのみたらし団子の最後の一本をフェイ

トに薦める。

「うん。海鳴温泉街

（こゝ）

の地理はすべて頭に入れたからいい結果が期待できると思うよ」
フェイトは自信を持って断言した後、茶で喉を潤す。

「そうなんだ。あ、すいません。三色団子一人前、ください」

良太郎はフェイトの回答に満足し、店員を呼び出して追加注文をした。

「アルフ、温泉楽しんでるかな？」

フェイトは良太郎が進めたみたらし団子の最後の一本を受取り、軽く会釈してから口の中に入れる。

「満喫してると思うよ」

そう言いながら良太郎は店員から頼んでいた三色団子を受け取り、皿を自分とフェイトの間に置いた。

「フェイトちゃんも楽しんでおいでよ？ほら、そこに旅館あるし」

良太郎はフェイトに楽しんでくるように促す。

「良太郎はその間、どうするの？」

自分の事より他人の事を気にするのは美德だが、時と場合によってはそれが自分自身への枷になることもある。

良太郎はフェイトの枷にならないように、この手の質問に関しての回答をあらかじめかんがえていたのだ。

「僕？そうだね、フェイトちゃんが出てくるまで、マツサージチェアにでも座ってるよ」

「マツサージしてくれるの？その椅子」

「うん。お金を入れて数分間だけね」

「へえ、何か温泉に入るより、そっちの方が興味が湧くね」

フェイトがここで食いついてくるとは思わなかった。
内に秘めていた好奇心が一瞬だが表に出たことを良太郎は見逃さなかった。

「なら、一緒に寛ぎに行こうか？」

フェイトは頷き、良太郎は代金を置いて茶店の向かいにある旅館に

入って行った。

幸いな事にマツサージチェアは二人分空いていた。

良太郎はフェイトに稼動するために必要な分の代金を渡して、腰掛ける。

フェイトも良太郎の仕種を見ながら手順を踏んでいく。

「りよ、良太郎！せ、背中に何か、何か言いようのない何かが来るんだけど……」

フェイトは今までに感じた事のないものが背中に触れたので驚きの表情を隠さずに良太郎に尋ねる。

「あー、それを今から十分間ほど味わう事になるからね」

良太郎は恍惚な表情を浮かべて、目を閉じた。

「ひゃああああああああああ」

その数分後、少女の悲鳴がその温泉旅館にこだました。

フェイトがマッサージチェアを初体験している頃にアルフはというと、室内温泉をメインとしている温泉旅館の廊下を歩いていた。

「温泉、温泉♪」

鼻歌交じりに歩いていると、

「ん？」

三人の小柄な物体がこちらに近づいて来た。

(見てくれからして、フェイトと同じ年かもしれないねえ)

会話の内容はというと、この旅館を探検する計画を練っているようだ。

(あれ？あの右のガキンチョ、良太郎とフェイトが言っていた特徴にピッタリだ)

アルフは右側にいる右肩にフェレットを乗つけた少女を見る。

フェイトの相手となる魔導師の特徴をあらかじめ良太郎とフェイトに聞いていて正解だと実感した。

ちなみに良太郎とフェイトがアルフに教えた特徴はというと、

身長と外見年齢が自分と同じくらい。(フェイトの証言)

常にフェレットを同伴している。(良太郎の証言)

インテリジェントデバイスを所持している。(フェイトの証言)

栗色の髪をして、フェイトほどではないが左右にリボンでまとめている。(良太郎の証言)

白いバリアジャケットを着用している。(フェイトの証言)
少女の名前は高町なのは。(良太郎の証言)

(本人に名前聞いてからアヤつけるってのはイマイチ迫力に欠けるねえ)

アルフは左側と中央にいる少女達を見る。

(あの二人が言うように仕向けるか)

アルフは獲物を駆ることが楽しみな獣のような笑みを浮かべて少女達の前に立った。

「ハイーおチビちゃん達」

声をかけると同時にその場の空気が和やかなものから緊迫したものにへと変わった。

「キミかね？ウチの子をアレしちゃってくれてるのは？」

アルフは腰に手を当てて歩み寄り、フェレットを肩に乗せた少女の前に立って目線を合わせるように前屈みになる。

「え？あの……」

アルフに鋭い目で見つめられて少女は後ろへ下がる。

「あんま賢そうにも強そうにも見えないし、只のガキンチョに見えるんだけどだねえ」

少女は何も言い返さない。いや、言い返せないというのが事実だろう。

中央にいた金髪少女が自分の前に立った。目つきは鋭く睨んでいる。

「なのは、お知り合い？」

後ろに下がっている『なのは』と呼ばれた少女は首を横に振る。

「この子、あなたを知らないそうですけどどちら様ですか!？」

金髪少女が両手に拳を作って精一杯強がっている。

「えー」

と、どうしたらいいのやらというような声を出しているが内心はというと、

(上手くいった。あのフェレットのガキンチョが高町なのはだねえ)
「あははははははは。ごめんごめん、人違いだったかなあ。知ってる子によく似てたからさあ」

アルフは笑って誤魔化す様に取り繕った。
緊迫した雰囲気は笑い声と共に取り除かれた。

「な、何だ。そうだったんですか」

高町なのはは安心したのか、ほっと安堵の息を漏らした。

「あははは。可愛いフェレットだねえ」

アルフは笑いながらフェレットの頭を撫で始める。

「よしよし」

フェレットの頭を撫でる事に満足したアルフは手を引っ込める。

高町なのはの表情は安心しきっていた。

(さてと、そろそろ始めるかねえ)

アルフは念話の回線を高町なのはとフェレットに開いた。

(良太郎の顔に免じて今の所は挨拶だけだけどね)

そう送ると、一人と一匹の表情が変わった。

(忠告しておくよ。子供はお家に帰って遊んでなさいね。おイタが過ぎるとガブツといくわよ)

アルフは凄んでそう送ってから念話の回線を閉じてから歩き出した。

「さて、もうひとつ風呂浴びてくるかなあ」

アルフは本来の目的を達成するために奥に向かった。

*

何かに乗せられて動いている感覚がフェイトを支配していた。
不思議と心地よいものでもう少しこうしていたいと思っていた。

(あー、もしもしフェイト。こちらアルフ)

とアルフが念話の回線を開いてきた。

フェイトの意識はまだ微妙にぼんやりしていたが念話の交信くらいはできる意識は保っていた。

(う、うん。どうしたのアルフ?)

(ちよつと見てきたよ。高町なのはを)

(そう。どうだった?)

(大した事ないね。フェイトの敵じゃないよ)

(海鳴温泉街の地理は粗方、頭に入ったから今夜にでもジュエルシードを回収できるよ)

(ホントかい? さつすがフェイト。あたしのご主人様♪)

(ありがとう。アルフ)

(それじゃフェイト。また、旅館でねー)

(うん。アルフ)

念話の回線が切れ、フェイトは現在自分が於かれている状況を把握するため閉じていた瞼を開く。

最初に映ったのは天井ではなく、見た事ある何かだ。

(この服は今日、良太郎が着ていた服だ)

良太郎が着ている服を自分は何故間近で見ているのだろう。

顔を少しだけ上に向けると、良太郎の後頭部が見える。

そして、現在もなお移動しているこの状況から推測される事はひとつ。

自分は良太郎におぶってもらっていることだ。

「あ、あの良太郎……」

「ん? ああ、気がついた? フェイトちゃん」

「わ、わたしどうしてこうなってるの!?!」

フェイトは何故自分が良太郎におぶってもらうという状況になっているかを問う。

「えーとね。聞きたい?」

顔は見えないが良太郎はきつと苦笑いをしているだろう。

「もしかして、わたし何かしたの!?!」

良太郎は歩みを止めない。

「何かしたといわれると難しいね。マッサージチェアに座って二分で気を失ってたんだけど……」

「気を失ってたの!?! わたし!?!」

「うん。旅館の人も驚いてたよ。開始二分で気を失う人がいたなんて、ね」

「ううう……」

フェイトは恥ずかしさのあまりにうなりだした。

(穴があつたら入りたいよ……)

何故自分は良太郎の前でこう醜態ばかりさらしてしまうのだろうか。

そして、何故それをこんなに恥ずかしく思ってしまうのだろうか。

そう思うと、今の自分の状況もまた恥ずかしく感じてしまう。

「あ、あの良太郎」

「ん？どうしたの？フェイトちゃん、意識もはっきりしてるから降りる？」

フェイトはここで「うん」と答えようと頭の中では組みあがっていた。

「ええとね。その……良太郎」

「ん、何？」

「もう少し、このままでいさせてくれる？」

だが、そうはならなかった。

フェイトは顔を真っ赤にしてそう言った後に良太郎の背中に顔を埋めた。

「うん、わかった。このまま旅館まで運んでいくよ」

良太郎は快く了承してくれた。

「ありがとう。良太郎」

フェイトはそう言うと、また瞼を閉じた。

この時、彼女自身もわからなかっただろう。

自分が安心しきった表情をしている事を。

カラスが鳴く夕暮れ時。

良太郎とアルフは探索魔法を用いているフェイトの結果をじっと待っていた。

三人は浴衣ではなく、私服だ。

フェイトはバルディッシュを突き立てて、目を閉じて集中している。

良太郎とアルフは茶も飲まずに、ただじっと座っていた。

「ねえ、良太郎」

「なに？アルフさん」

小声でアルフが良太郎に話しかける。

「この瞬間って何か緊張するよね？」

「言えてるね。僕らが何かしているわけでもないのにね」

アルフの意見に良太郎は同意する。

フェイトの両目が開いた。

「大分絞れたよ。良太郎、アルフ。今夜に回収するよ」

フェイトは真剣な表情で二人を見合わせる。

「わかった」

「あいよ、フェイト」

良太郎とアルフも真剣な表情で応じた。

海鳴温泉街を舞台にしたジュエルシード集めの始まりである。

第十六話 「激化するスベテ」

外は夜。闇の中をひとつの月が君臨する時間帯。

三人の人影が林の中を歩いていった。

決して遠足でも散歩でもない事は三人の内二人の風体でわかる事だ。

一人はバリアジャケットを着用し、杖のようなもの——インテリジエントデバイスを手に行している。

もう一人は自身のスタイルを強調するかのような服装に黒いマントを羽織っていた。

フェイト・テストアロッサとアルフだ。

最後の一人は普段と変わらぬ服装をしているが、普段の温厚な表情とは違って真剣な表情になっている。

野上良太郎である。

夕方に探索魔法を用いた結果、海鳴温泉街の林の中にあるということがわかった。

だが、林の中といってもどこもかしこも似たような風景なのでピンポイントで見つける事はできなかった。

ここからは自分の目が頼りになる。

「林の中っていつても結構広いんだねえ」

アルフが草の根を分けたり、木の枝に引っかかっていたりしないかとキョロキョロしている。

「それでも、林の中にあるってことがわかっていてるだけでも大幅に時間は短縮できるよ。最悪の場合、本当に海鳴温泉街をしらみつぶしなんだからね」

「うえー。今にして思えばそれゾツとするね」

良太郎が草の根を分けながら言う一言にアルフは青ざめる。

「その最悪の事態はフェイトちゃんの頑張りで免れたんだからさ。今度は僕達がフェイトちゃんの頑張りに応えないと、ね?」

「そうだね。さあ、出てこーい。ジュエルシードオー!」

「呼んでも出てこないって」

良太郎はアルフとそんな漫才じみたやりとりを前に出て探しているフェイトは小さく笑みを浮かべていた。

(確かに良太郎の言うように、こちらが声をかけて呼んで出てくるっていうならば、わたし達がこんな苦勞しなくてもいいからね)

ジュエルシードはこの林のどこかにある。

後は林の何処何処ポイントにあるかどうかだ。

(ジュエルシードが発動してくれればいいんだけど……)

フェイトがそのような希望を内に秘めていた時だ。

「!」

「!」

フェイトとアルフの動作が急に停まった。

「二人とも?」

良太郎は二人が自分には感じ取れない『何か』を感じたのだろうと察する。

「良太郎、見つけたよ」

「遅れないですよ!」

そう言うと同時に、フェイトとアルフは林の中に潜って行った。

「待ってよ。二人とも」

良太郎は二人に離れないように全力で追いかける事にした。

良太郎がフェイトとアルフの背中を逃さずに追って二、三分後。

林の中でありながら小さな川があり、それを渡れるように小さな橋が架かっていた所にフェイトとアルフがいて、川の一部分から発せられていると思われる天上に向かって昇っているひとつの光を見つけた。

「二人とも、体力あるね。全然息乱さないもん」

良太郎は息を整え終え、二人のもとに歩み寄る。

「いや、あたし達はちよつと魔法使ったし、ね? フェイト」

「う、うん。でも良太郎の方が凄いや。わたし達が魔法を使って速度を速めているのにそれにきちんと着いてきて、ほんのちよつと息乱してるだけだもん。普通の大人の人でもへ口へ口になるのに」

「そうなの?」

良太郎は意外そうな顔をするが、川から発しているひとつの光を見る。

「凄いねえ。これがロストロギアのパワーってやつう？」

「随分、不完全で不安定な状態だけだね」

アルフはジュエルシードの発動に素直に感心し、フェイトは対照的に冷静に分析していた。

「これがジュエルシードの発動状態なんだね？」

「良太郎は初めて見るの？」

フェイトの問いに良太郎は首を縦に振る。

「うん、前に見たのは発動した後のものだったからね」

怪植物の事を良太郎は言っていた。

「そう言えばわたしも初めてかもしれない」

フェイトが言っているのは巨大猫のことだ。

「ねえ、フェイトちゃん」

「何？良太郎」

「フェイトちゃんはお母さんのためにジュエルシードを集めているんだよね？」

「うん、そうだよ」

良太郎はジュエルシードが発する光を見つめながらフェイトに訊ね、フェイトもまた光を見つめたまま答えた。

「何でフェイトちゃんのお母さんはジュエルシードを欲しがるのがかな？」

良太郎はフェイトが母親のために探していると打ち明けた時からずっと気になっていた事だった。

「そういえばそうだよねえ。あたしも詳しくは知らないねえ」
のってきたのは意外にもアルフだった。

「……………」

フェイトは黙ったままだ。あまりこの話題に関わりたくないのだろう。

「アルフさんも知らないの？」

「うん。あたしはフェイトに「ジュエルシードを集めるから手伝って」

と言われたから従ってるだけだしね」

「そういえばもうひとつ気になってたんだけど、フェイトちゃんとアルフさんはどういう関係なの？」

「え？」

良太郎の一言に二人は目を丸くしていた。

「フェイト。アンタ説明してなかったのかい？」

「アルフこそ言わなかったの？」

どうやらお互いが勝手に説明してくれているものだと思っていたようだ。

二人のリアクションからすると自分は二人の関係を知ってて当たり前の認識だったらしい。

「えーとね。最初に言うけどアルフは人間じゃないんだ。わたしが作った使い魔なんだよ」

フェイトの言葉に良太郎は首を傾げた。

「人間でしょ？」

「アルフ。見せてあげて」

フェイトがアルフにそう指示すると、アルフの全身が光り出した。

やがてその光は人の姿から別のものになっていく。

その姿は大きな狼に似た犬のようなものになった。

「どうだい!?驚いたろー?」

と、獣姿になったアルフは得意満面に言う。

だが良太郎の反応はというと、

「えーつと、もしかしてそれだけ？」

薄かった。

「あの、驚かないの？」

フェイトは良太郎に驚いて欲しいかのようによく聞く。

「そうだよー……ここは驚くところだよー良太郎！」

獣姿から人姿に戻ったアルフは良太郎に詰め寄る。

「いや、その、二人の期待には応えられそうにないよ。僕、これよりもっと不思議な物を見たり体験したりしているしね」

良太郎は申し訳なさそうな顔で言った。

「フェイトオ、あたしなんかショックだよ」

アルフはいじけてしまった。

良太郎はそんなアルフを見て悪い事をしたと思いつつもフェイトに説明を求める。

「それでフェイトちゃん、使い魔ってなに？それにアルフさんを作ったっていうのは？」

「使い魔はね。魔導師が使役する一種の人造生物の総称なんだ。わたしがアルフを作ったというのも本当だよ。死亡直前、又は死亡直後の動物の身体に人工の魂を憑依させる事で造り出せるからね」

「人工の魂!?魔導師って命まで造れるの!?凄いよ!フェイトちゃん」
「そ、そうかな」

良太郎に褒められてフェイトは頬を染める。

「もしかして人工の魂があれば死者を蘇らせる事もできるの？」

良太郎のもしもの意見にフェイトは首を横に振る。

「それは無理だよ。仮に死体に人工の魂を憑依させても、それはその人の姿をした使い魔であつてその人じゃないから蘇るという意味とは違うと思うよ」

「死んだ人間を蘇らせる事は永遠の課題なんだね」

「そうだね。アルフ、サポートをお願い。良太郎、危ないから下がって」

「へいへい」

「わかった、気をつけてね。フェイトちゃん、アルフさん」

フェイトはバルディッシュをシーリングモードにする。

周囲に黄金の光が稲妻状に走り、川の水が蛇か竜のような動きを見せた。

(凄い、なのはちゃんと同等かそれ以上かも……)

良太郎は目で確認できる魔法というものをじっくり見たのは初めてだった。

高町なのはが魔法を用いた時の事を思い出した。あれは凄まじかった。

そして、目の前にいるフェイトとは一度戦闘したが、勝てたのが奇

跡に思えてきた。

良太郎はフェイトがジュエルシードを回収する様をひとつの儀式を見るかのようにして一言も漏らさずにただじっと見ていた。

*

良太郎達が林の中でジュエルシードを探している頃、高町家とその関係者と居候達が宿泊している旅館では子供達は既に就寝し、大人達が隣の部屋で談笑していた。

ちなみに居候達はというと、

遊技場でモモタロスとリュウタロスは卓球をし、ウラタロスとキンタロスは将棋をしていた。

コハナは卓球をしている二人の審判をしている。

「ねえモモタロス。良太郎どうしてるかな？」

ラケットで飛んでくる球を相手コートに送り込みながらリュウタロスは相手に訊く。

「あん？どうしたよ？良太郎が恋しくなったか？小僧」

モモタロスが飛んできたボールを返しながらかうかう。

「うん。だってー」

リュウタロスも普段はムキになって否定するところだが、良太郎に会いたいのか割と素直に頷いた。

それでも、飛んできたボールをきちんと返す。

「良太郎にだって考えがあるんだよ。オメエにだってわかってんだろ？」

モモタロスは飛んできたボールを返しながら、リュウタロスを諭す。

「でもさ、危なくないのかな？良太郎、いきなり自分を襲った奴らと一緒に住むなんてさあ」

モモタロスはラケットをコートに置く。この時点で試合放棄となり、負けとなった。

「大丈夫だろう？前に会った時、あいつピンピンしていたぜ。それに、俺達だってなのはやユーノの石コロ探しの手伝いするって決めたじゃねえか。良太郎とはそんな時に会うさ」

「そうかなあ。カメちゃんやクマちゃんならともかく、モモタロスの言う事だし」

この手の推測に関してリュウタロスの評価順位は、一位がウラタロスで二位がキンタロス。そうなると、最下位は言わなくてもわかると言うやつだ。

「オメエなあ」

モモタロスは拳を震わせていた。

折角、親身に聞いてやってるのに何てこと言いやがるんだ。コイツはと思っている。

「リュウタ、たまにはモモの言う事も当てにしてみたら？」

助け舟を出したのは審判をしていたコハナだった。

「ハナちゃん……」

「コハナクソ女、ぶっ」

コハナはタブーを言ったモモタロスの太ももに鋭い蹴りをぶつけた。

「全く！いい加減、人の名前はキチンと覚えておきなさい！」

コハナが両手を腰に手を当てて、モモタロスを見下ろす。

「センパイ、大丈夫？」

「全く懲りんやっちゃな。ほれ、立てるか？」

先程まで将棋をしていたウラタロスとキンタロスが歩み寄ってきた。

「ああ、わりいな。ん？」

キンタロスの手を借りて起き上がるモモタロスは外に出ようとする一人の少女を見つけた。

「あれ、なのはちゃんとフレット君だ」

リュウタロスが言うように、それは高町なのはとユーノ・スクライアだった。

「まったく、あいつら……」

モモタロスは舌打ちし、全員でなのは達の順路を先回りすることにした。

高町なのはとユーノ・スクライアが林の中に入り込み、バリアジャ

ケツトを着用してから魔力を察知されないように走って目的地まで向かおうとしているところ、五人の人影がそこにいた。

「モモタロスさん、ウラタロスさん、キンタロスさん、リュウタ君、ハナさん」

一人と一匹を待ち構えていたのは居候五人組だった。

「よお」

モモタロスは軽く手を挙げる。

「夜の散歩にしては重装備だよね」

ウラタロスが木にもたれてお決まりのポーズを取りながら皮肉を言う。

「危ないで。こんな時間の子供と小動物の散歩はな」

キンタロスは親指で首を捻ってから一人と一匹に注意する。

「あの石

ジュエルシード

が目的なら僕達も行くって約束だよね？ね？」

リュウタロスが念を押すように訊いて来た。

「皆さん、聞いてください。あれから考えたんですけど、ここから先は僕が……」

先に口を開いたのはフェレットのユーノだ。

「ユーノ君、それ以上言うと怒るよ？」

なのはがユーノの台詞を強引に止めた。

「おい、ユーノ」

そう言うとモモタロスがユーノを掴む。

「今更、そんなこと言うならよ、最初ハナからなのはを巻き込むんじゃないやねえよ」

ドスの利かせた声で、ユーノを黙らせるには十分なものだった。

「いい加減認めたらどうなんだよ？自分ひとりじゃどうにもならねえってことをよ？」

ユーノは黙ってしまう。

「ユーノ、スタンドプレーをするのはいいけど、力が伴っていないならやっても迷惑なだけだよ？」

ウラタロスは現状と今後を把握して諭しながら人差し指でユーノの頬をつつく。

「責任感があるのは褒めたるけど、それに押し潰されたら元も子もないで」

キンタロスがモモタロスからユーノを取り上げる。

「僕達、友達だよな？フェレット君。なのはちゃん。答えは聞かないよー！」

リユウタロスがキンタロスからユーノから取り上げ、なのはに返す。

「なのはちゃん、ユーノ。もうジュエルシード探しは二人だけのものじゃないのよ。私達もこの世界に持ち込んだ責任もあるし、それに私達の意思でもあるんだから」

コハナがなのはの肩に手を置く。

なのはとユーノは全員を見回す。

自分達の言葉が彼らの心を変えることはできないということとは明らかだ。

それに、彼らの言葉はとても頼もしく感じる。

自分達とは比べ物にならないくらい死線を乗り越えてきた証といてもいいだろう。

「わかりました。みなさん。これからもよろしくお願いしますー！」

ユーノはぺこりと頭を下げた。フェレットなのでその仕種は誠実さよりも愛らしさを感じてしまう。

「ほ、本当にありがとうございます!!」

なのはも深々と頭を下げた。

感謝をしてもしきれないという気持ちが身体全身から溢れていた。「さてと、話もまとまったところで行くぜー！テメエら!! 気い締めて

いくぞー!!」

モモタロスの咆哮で一同の表情は真剣になった。

なのはは林の奥に広がる闇を真剣な表情で睨んでいた。

レイジングハートを握る手の強さは自然と強くなっていた。

「……誰か来る」

「うん、数は多いね」

フェイトとアルフは林に広がる闇からこちらに向かっている『何か』を見ようとすする。

自然と二人の表情は険しくなっている。

フェイトはバルディッシュを握る力が強くなっている。

アルフは腕を伸ばしてから拳を作る。

良太郎も二人同様、険しい表情だが相手の正体に見当がついているため、林を見つめてはいるが二人よりは余裕のようなものがあつた。

「なのはちゃん達とモモタロス達だ」

良太郎が相手の正体を言うと同時に、現れた。

二人の人間と一匹の小動物、そして四体の得体の知れない生物が。

「よお、良太郎。元氣そうじゃねえか？」

モモタロスが良太郎に軽く手を挙げて挨拶するが、一步も踏み込もうとはしなかった。

「みんなも元氣そうで良かったよ」

良太郎も笑みを浮かべて答えた。

「ここにいるってことは、やっぱりみんなも……」

笑みから真剣な表情になる。

「そう。良太郎と同じ理由さ」

ウラタロスが答えた。

その一言で場の雰囲気为重くなった。

「良太郎、悪いけど俺らも譲らへんで」

キンタロスが腕組をして、なのはの前に立つ。

「うん」

リユウタロスもキンタロスの意見に同意したのか横に並ぶ。

「なーるほどねえ。アンタ達が良太郎の仲間だつてこともあたし達の邪魔をする気満々だつて事もよくわかつたよ」

端の手すりに腰掛けていたアルフは立ち上がり、相手陣営を睨みながら見回す。

「良太郎、確認するけどさ。今からあたし、アンタの仲間と戦うけどいいのかい？」

「アルフさん、油断しないで。みんな強いから」

良太郎の台詞はアルフへの心配とモモタロス達への信頼だった。

「わかったよ」

アルフはそう言うと、瞳を大きく開く。すると人の皮膚をぶち破り、元々の長髪が更に伸び、人の形状を崩して別の形状へと変化していく。

その姿を見た瞬間。相手側の一人はというと、

「#\$\$%&#\$\$%!!」

鼓膜を押さえたくなくなるような声を上げ、場の雰囲気をぶち壊した。

「センパイ、何て声だしてんの!?!」

耳を押さええたウラタロスが奇声とも言うべき声を発したモモタロスに抗議する。

「だあってよお。あの女、い、犬になるんだぜえ! 思わずビビツちまうだろうが」

モモタロスは犬が大の苦手だ。その苦手具合は見ただけで金縛りのように動けなくなるほどだ。

「へえ。早速一人リタイアかい? これは幸先いいねえ。フェイト、良太郎。先に帰ってな。すぐに追いつくからさ」

「うん。アルフ、無理をしないで」

「アルフさん、危なくなったらすぐに逃げてね」

フェイトと良太郎の言葉を聞いたアルフはなのはに飛び掛る。だが、なのはの身体にアルフの爪が届く事はなかった。

ユーノがなのはの周りに結界を張っていたからだ。

「このお、結界かい!?!」

「なのは、あの子をお願い!!」

ユーノは結界を張りながらなのはに指示を出す。

「そんなことさせると思ってたんの!?!」

アルフは結界を破壊しようと爪を立て、全体重を乗せる。

「させてみせるさ!! ウラタロスさん! リュウタロス!! こっちに!!」

ユーノはウラタロスとリュウタロスに呼びかける。

「え? 僕」

「行くうー！カメちゃん」

いきなり指名されて驚くウラタロスとユーノに指名されて嬉しかったのか喜ぶリユウタロスはユーノの元に駆け出す。

「僕達を呼んでどうするのさ、ユーノ」

「今から移動魔法でこことは違う別の場所に飛びます。その場所での使い魔と戦うかもしれないんでサポートをお願いしたんです」

「あの大きい犬と戦うの？可愛いんだけどなあ」

リユウタロスはアルフと戦うのには抵抗があるらしい。

「行きます!!」

そう言うと同時に、ユーノはアルフの間合いにも魔方陣を展開させる。

「移動魔法!?!」

アルフはそれが何なのか判断し、理解したときには遅かった。

移動魔法が発動し、その場にはユーノ、ウラタロス、リユウタロス、アルフの姿はなくなった。

「消えてもたで」

キンタロスはただそういう感想を述べることしかできなかった。

「……結界の強制転移魔法。いい使い魔だ」

フェイトはそうユーノを自分の常識内で賞賛した。

「ユーノ君は使い魔じゃないよ！わたしの友達だもん!!」

なのはにしてみればそれは賞賛ではなく、侮蔑に聞こえたので否定した。

その場の雰囲気はまた重くなるかこの場にいる誰もが思ったときだ。

「よっし！犬がいなくなったからようやく動けるぜ！やってくれたな良太郎。犬を使って奇襲とはよ」

今までアルフにビビッて金縛り状態になっていたモモタロスがいつものとおりに戻る。

「何、急に張り切ってるのよ!!」

コハナがお仕置きと称してモモタロスの尻に蹴りを一発食らわした。

「テメエ！何しやがる!？」

「うるさい！」

コハナの一言でモモタロスは黙ってしまふ。

「……………」

「……………」

「……………」

「モモの字、ハナ。場を読め。場を、みんな白けてるで」

キンタロスがモモタロスとコハナのどつき漫才的やりとりを見て呆然としている面々の代表として二人に諫言した。

「あっ」

二人は把握した後、黙ってしまった。

フェイトが後ろにいる良太郎に声をかける。

「良太郎。わたし、その……………」

良太郎はフェイトが何をするつもりかはわからないが、任せる事にした。

「何をするかは聞かないよ。でも気をつけてね」

良太郎はしゃがんでフェイトの肩に手を置く。

「うん。わかった」

フェイトは頷き、なのはの方に歩き出す。

「モモタロスさん、キンタロスさん、ハナさん。わたし……………」

なのはは残った三人を見上げるかたちで見る。

「気をつけろよ。向こうはやる気だぜ」

モモタロスがフェイトを見て、小声で話す。

「え？」

「話し合いで何とかしたいと思うなのはの気持ちはわかるで。でもな、アレは明らかに話し合うっていう気配はないで」

キンタロスが釘を刺す。

「アンタ達、そこまでしておきなさい。なのはちゃんの気が済むようにすればいいよ」

「ハナさん。皆さん、いいんですか？その……………」

相手が仲間ならやりづらいのではないかとなのはは心配するし、本

音を言えば仲間同士で傷つきあつてほしくないのだ。

「なるようにしかならねえだろ。おい！良太郎！」

モモタロスが良太郎を呼んだ。

「なに？モモタロス」

「場所、かえようぜ？」

モモタロスが顔を右に振る。

「わかった」

モモタロスの提案に乗った良太郎はモモタロス達の許に歩み出す。
キンタロスとコハナも二人の後に付いていった。

あれだけ賑やかだった場所には二人しか残っていないなかった。

なのはとフェイトの二人しかない。

「で？どうするの？」

フェイトは静かに眼前の相手に尋ねる。

「話し合いで何とかできるってことない？」

なのはは話し合いで何とかならないかと試みる。

なお、話し合いが成立したからといつても事態が改善されるとは思えないだろう。何故ならこれはただ単純に戦闘を避けるだけの逃げの一手でしかないからだ。

「……わたしはロストログアの欠片、ジュエルシードを集めなければならぬ。そして、あなたも同じ目的ならわたし達はジュエルシードを賭けて戦う敵同士ってことになる」

フェイトは淡々と告げるが、自分の目的を曝け出さない。

聞いたなのはにはそれがとても悲しく感じた。

目的は違えど追う獲物は同じ、だから敵。

まるで人との繋がりを最初から否定しているように思えて仕方ないからだ。

「だから、そういう事を簡単に決め付けないためにも話し合いって必要なんだと思う！」

なのはは自身が正しいと思う事、絶対に譲れない事を主張する。

「……………」

フェイトは瞳を閉じて、なのはの話に静聴する。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃきつと何も変わらない」
両目を開く。

「伝わらない!!」

バルディツシユを構えて、フェイトは駆け出した。

良太郎、モモタロス、キンタロス、コハナは特に何かを動くわけでもなく、静かに互いを見合っていた。

「良太郎、何であのガキ止めなかったんだよ？」

モモタロスは良太郎の性格上、フェイトとなのはの戦闘を止めるだろうと思っていた。

「できる限りなら戦いは避けたかったよ。それが彼女達をサポートするって決めた僕の役目だからね。でも、あの二人は出会い、そして一度戦い、こうしてまた出会ってしまったている。もう、戦わずにすまそうなんて事は言っていられない。いや、もう言えないんだ。だから、僕はあの二人の事はもうあの二人に任せる事にしたんだ。無責任だけれどね」

なのはとフェイトに関してはもはや外野が干渉できる領域ではないと良太郎は判断した。

「それは、あの二人が互いに納得いくまでぶつかれて事？」

コハナの解釈に良太郎は頷く。

「良太郎にしては随分と荒い方法やなあ」

キンタロスは良太郎らしくないやり方だと評した。

「クマ、何言ってるんだよ。俺達だってそうだったじゃねえか？」

「モモの字？」

モモタロスの言葉は良太郎の代弁にも思えた。

キンタロスは今までのことを思い出す。

そういえば自分も最初は良太郎達とは敵対関係に近かった。

仲間になっても常に文句の言い合いにいがみ合いに喧嘩の日々だった。

だが、それも繰り返されるうちに互いを理解するためのひとつの手段なのではと思うようになった。

そして、現在のような関係へと発展したのだ。

「ま、言われてみたらそうやな。互いを知る方法はひとつじゃないってことやな。それぞれに合った方法があると言いたいんやな？良太郎」

キンタロスも良太郎の意図を理解し、納得したようだ。

「わーったよ。ったく、でもよ良太郎。俺達はこれからどうすんだよ？」

「僕はこれからもフェイトちゃん達のサポートをするよ。モモタロス達はなのはちやん達のサポートをすればいいんじゃないかな」

「それじゃ今までと変わらねえぞ？」

「急には変わらないよ。ただ、わかっている事はある。あの二人の邪魔をするなら僕達は全力でその相手と戦う。違う？」

良太郎の意見にその場の全員が首を縦に振った。

互いに立つ場所は違えど、思いは繋がったままのチームメンライナーだった。

フェイトはなのはと距離を詰めたと同時に、突進する速度よりも更に速度を上昇させた。

なのはにしてみれば瞬間移動したように見えるだろう。

なのはが後ろに振り向くと、そこにはバルディッシュを横に振る態勢をとったフェイトがいた。

「フライヤー・フィン」

なのはよりも先にレイジングハートを反応し、なのはを空へと回避するように促した。

「だからってー！」

なのはは夜空へと舞台を移しながらも追いかけてくるフェイトに抗議の言葉をぶつけようとする。

だが、

「賭けて、それぞれのジュエルシードをひとつずつ」

フェイトはなのはの言葉の意味に耳を傾けず、自身の望みのみをなのはにぶつける。

「フォトンランサー、ゲットセット」

バルディッシュが機械音声でそう発した。

フェイトは上昇速度を更に速め、なのはより上の位置に付いた。月をバックにしてのその仕種にはどこか妖艶さのようなものがあった。

フェイトの足元に金色の魔方陣が展開し、左手には金色で球状の魔力弾が構築されており、バルディッシュをその魔力弾の後ろに掲げる。

「フォトンランサー」

発すると同時に魔力弾はひとつの光線と化した。

なのははレイジングハートと共に迎撃する態勢をとる。

レイジングハートはシーリングモードへとなる。

「ディバインバスター」

レイジングハートが発し、先端から桜色の光線が放たれる。

金色と桜色の光線がぶつかり合う。

まるでフェイトとなのはの意思がぶつかり合うように。

「レイジングハート！お願い！」

なのはの一声でレイジングハートは更に威力の高い一撃を放つ。

なのは自身、更なる魔力が身体を覆う感覚を感じた。

「!!」

フェイトは先程よりも強い一撃が来ると判断し、次の手を打つ事にした。

フォトンランサーを完全に消したが、そこにはフェイトの姿はなかった。

「え!?!」

気づいたときには遅く、フェイトがバルディッシュのサイズモードにし、なのはの首許に突きつけていた。

「……………」

誰が見ても勝敗は明らかだった。

レイジングハートは主を守るために、ひとつの方法をとった。

所持しているジュエルシードのひとつをフェイトに渡す事にしたのだ。

「レイジングハート！何を!?!」

主の抗議に主思いのデバイスは耳を貸さなかった。

「きつと主思いのいいデバイスなんだよ」

フェイトがレイジングハートを称賛した。

ジュエルシードを手にしたフェイトは空から地上へと舞台を移すために、ゆつくりと降下していく。

なのはも釣られる様にして降下していく。

「待ってー!」

先に地に足つけたフェイトがその場から去ろうとしたところを、なのはは呼び止める。

「できるならもう、わたし達の前に姿を現さないで。良太郎の知り合いいとはいえ、もし次があるなら今度は止められないかもしれない」

フェイトはなのはの顔を見ることなく、背を向けたまま警告した。

「名前!あなたの名前は?」

フェイトは目を閉じ、決意したかのように言う。

「フェイト。フェイト・テスタロッサ」と。

林の中で先程の戦闘をじっと見ていたそれは少女二人のうち、黒装束の少女に狙いを定めた。

爪を研ぎ澄ませ、待っていた。

少女の緊張の糸が切れ、『油断』が少女を支配したときがこちらの最大の機会だ。

名を名乗り、その場を去ろうとする少女には完全に油断——隙が生まれていた。

それ——ウィッチドッグイマジンは少女の前に現れてこう告げた。

「お前が持っているジュエルシードを俺によこせえ!」
イマジンの爪が少女を襲う。

第十七話 「子供を泣かす奴は俺が泣かす!!」

ジュエルシードを一個、海鳴温泉街の林の中で入手し、相手魔導師との戦闘に勝利して更に一個を手にする事ができた。

これだけ良い事が立て続けに起これば、本人が意識せずとも『油断』が生じるものである。

それは普段から慎重にかつ迅速に行動する少女——フェイト・テスタロッサも例外ではなかった。

眼前に立ちはだかる怪人にとってはそれが獲物を狩るための最大の機会でもあるのだが。

フェイトが怪人の狙いを理解したのは眼前の怪人が自前の爪を振り下ろしたときだ。

「しまっ……はあっ!!」

バルディツシュで爪を受け止める。

「ぐっ、うっうっう」

だが、フェイトの顔は苦々しげな表情を浮かべていた。

爪を受け止めるためのバルディツシュも小刻みに震えている。

これはバルディツシュが震えているのではなく、握っているフェイトの手が震えているのだ。

怪人の一撃がフェイトが支えられる重量を超えているからこそ起こる事だ。

（もう……限界!）

力負けしている以上、押し出して下がることもできない。

となれば怪人が攻撃してくるときが最大の機会だ。

「このお、ガキの癖に粘りおってえ」

焦れ始めた怪人は今まで使っていなかった左爪を使い始めた。

フェイトの右脇腹を狙う。

（来た!!）

フェイトは怪人が自分の右脇腹を狙ってくる事を目できちんと捉え、

「は、速……うわあああああああ」

られずにもろに食らってしまい、左へと飛ばされた。受身もとつきに魔法で回避する事も出来なかったため、地面を滑るかたちで倒れる。

右脇腹辺りのバリアジャケットは裂かれているが、フェイト自身は裂傷を免れたのか一滴も出血していなかった。

「う、うううう」

バルディッシュを支えにして立ち上がる。幸い顔には傷はないが少々汚れていた。

「これが、イマジン」

顔の汚れを手で拭いながらイマジンを睨みつける。

対してイマジンはというと余裕な態度でフェイトの視線を受け止めていた。

「サイズモード」

バルディッシュが機械音声で発すると同時にデバイスモードからサイズモードへと切り替わる。

金色の魔力で構築された鎌の刃が出現する。

「ほお、それで俺と戦おうってのか？」

イマジンはまだ余裕の表情を崩さない。

「フェイトー」

獣姿のアルフが林の中から出てきた。

「アルフ、上手くあの三人から逃げ切れたんだね」

フェイトは使い魔であり、相棒であるアルフの姿を見て胸を撫で下ろすと同時に、心強い味方を得た気分だった。

転移魔法で別の場所に飛ばされただけなら、何とかなるから特に心配はしていなかった。

だが、共に転移したのが使い魔的フェレット以外に野上良太郎の仲間であるイマジン二体も一緒なのだから心配だった。

何せ、戦闘能力が未知数なのだから心配になるのは当然だろう。

「まあね。でも思った以上にしつこかったから、来るのに手間かかったよお」

アルフは獣姿から人型へと変身する。

「コイツが良太郎が言ってたイメージってやつかい？」

アルフがイメージを睨みつけながら指をパキパキと鳴らす。

「気をつけてアルフ。魔導師と一緒にだと思って戦うと痛い目に遭うよ」

そう言いながら、フェイトは先程の攻撃で裂かれたバリアジャケットの右脇腹部分を見せる。

「バリアジャケットを裂くだけの力があるってワケかい？」

「うん」

フェイトとアルフはイメージを睨み、戦闘態勢を取っていた。

高町なのははフェイトに忠告された後、林の中へ彼女が溶け込んでいく姿をただ黙って見送っていた。

正確には追いかけてようと思ったのだが、フェイトが放つ拒絶の気配に立ち入る事が出来ず見送るしかなかったというのが実情だったりする。

「あれー？カメちゃん、フェレット君。ワンちゃんじゃなくて、なのはちゃんがいるよ」

林の中から出てきたのは頭にフェレットを乗せた紫色のイメージ——リユウタロスだ。

「うーん、どうやら巻かれたみたいだねえ。釣りというなら餌を食いちぎられた気分、かな」

続いて青色のイメージ——ウラタロスがキザな台詞を言いながら出てきた。

「なのは、一人？こっちにあの使い魔来てない？」

リユウタロスの頭に乗っかっているフェレット——ユーノ・スクライアがなのはに訊ねる。

「ううん、来てないよ」

なのはは正直に答えた。

「そっか」

ユーノはなのはに危害がなかったことに心底安堵していた。

「みんな！」

「オメエらー！」

「なのは、ユノ助（ユーノのこと）、カメの字、リユウタ！無事やっただけみたいやな」

別の林の中から聞き覚えの声が出たのでなのは、ユーノ、ウラタロス、リユウタロスが顔を向ける。

出てきたのは青年と少女と赤色と金色のイマジジンだ。

「良太郎、モモタロス、ハナちゃんにクマちゃんだ！」

見知った顔を見て、リユウタロスが名を言うことで場の雰囲気は和みの空気が漂い始めた。

「……あの、ユーノ君。ごめんね。その……ジュエルシードを一個渡しちゃった」

なのはは自身の不手際でジュエルシードを相手側に渡してしまった事をユーノに詫言った。

「仕方ないさ。相手がなのはよりも上手うわて」

だったんだから。それよりも、そんな魔導師相手に殆ど無傷で済んだんだから僕としてはよかつたくらいだよ」

ユーノは首を横に振ってなのはを責めずに、無事だった事を喜んでいた。

一人と一匹によってその場の雰囲気が本格的に和みつつある頃。

「ん？」

「どないしたんや？モモの字」

赤色のイマジジン——モモタロスが鼻を犬のようにクンクンしていた。

「良太郎、あつちにイマジジンがいるぜ」

漂っていた和みの雰囲気を一瞬にして吹っ飛ばした。

その一言で場にいる全員が真剣な表情になった。

「あつちって……確か！」

モモタロスが指差す方向を見ていちはやく反応したのはなのはだった。

「良太郎さん！」

なのはが焦りが混じったような表情で声をかけた。

「なのはちゃん？」

良太郎には何故、なのはが何故焦りの色を浮かべているのかわからなかった。

「あっちの方向にはフェイトちゃんがいるんです！」

「何だっつて!?!それ本当?」

なのはは自信を持って首を縦に振る。

「急ごうぜー!良太郎」

モモタロスが促す。

「うん！」

良太郎もフェイトがいる方角を睨む。

「よっしゃ、ここは俺の出番やな」

金色のイマジジン——キンタロスは腕を組んで、同行する意思を示す。

「あの、良太郎さん！」

これから向かおうとしている良太郎を呼び止めたのはなのはだった。

「わたしも、わたしも連れてってください！」

「なのは、もしかして……」

なのはの行動の目的を理解したユーノはなのはに確認するように訊ねようとする。

「それはダメだよ。なのはちゃん」

ユーノが訊ねようとする前になのはの申し出を拒否したのは良太郎だった。

「なのはちゃんはフェイトちゃんとの戦いで疲れてる。それに、時間が時間、だしね」

良太郎はそう言いながら、なのはに腕時計を見せる。

「あ……」

時刻を見てなのはは苦しい表情を浮かべる。

既に翌日になろうとしている時間だった。

正当な理由があつて抜け出したとしても、叱責は免れないだろう。ましてや自分は親友、両親には理由を明かしていない身だ。

帰る道が重くなり始めた。

「良太郎、なのはちゃんの事は僕達に任せてセンパイとキンちゃん連れて行ってきなよ」

申し出たのはウラタロスだ。

「ウラタロス？」

良太郎がウラタロスのいきなりの申し出に首を傾げる。

「この中でご両親と親友二人を納得させる理由をつくれるのは僕だけでしょ？」

「ま、ウラほどここういう役に適任っていないわよね」

コハナは納得していた。

「カメちゃん。お喋り、上手だもんね」

リュウタロスも納得していた。

「でも、わたし……」

なのははそれでも良太郎達と同行する意思を変えようとしなない。

「なのはちゃん」

ウラタロスがなのはの前に立ち、しゃがみこむ。

「相手の子を助けたいっていう気持ちは立派だけど、今はダメだよ。釣りでもそうだけど、焦ったっていい事は何一つないよ？」

「ウラタロスさん……」

「なのはちゃん、おじさんやママさん」（桃子のこと）を悲しませちゃダメだと僕、思うんだ」

リュウタロスは自分なりに考えた言葉でなのはを説得しようとする。

なのはは二人の言葉を聞いて心が揺れ、冷静に考え始める。

ウラタロスの言うように、今は気持ちばかりが先走っているだけだ。仮に良太郎達と共に行っただとしても足を引っ張りかねないだろう。

リュウタロスの言うように、いくら正しい事を自分が行っているとはいえ身内を悲しませるのは本末転倒だ。

なのはは魔導師になって初めて自分の未熟さを恥じ、無力を呪った。

「良太郎さん、モモタロスさん、キンタロスさん」

「ん？」

「何だよ？」

「どうした？」

三人がなのはの呼びかけに三者三様の態度をとる。

「えっと、その……わたしが言うのも変なんですけど、フェイトちゃんをよろしく願います！」

「僕からも願います！」

なのはとユーノがこれから戦場に向かおうとしている三人に頼んだ。

「うん、任せて」

「しようがねえなあ」

「大船に乗ったつもりでおり！」

そう言いながら三人はフェイトがいる方向に駆け出した。

(ユーノ君、どうして?)

念話の回線を開き、頭を下げてくれているユーノに訊ねた。

これは言ってしまうえば自分のワガママだ。

それを人に委ねるのだから、頭を下げるのは当然だが、ユーノまでが頭を下げる必要もなければ義理もないはずだ。

(なのはは二回しか遭った事のない、しかも自分に攻撃を仕掛けてきた子の為に頭を下げたんだよ。それなのに僕が何も思わないと思う?)

(ユーノ君……)

なのははユーノの気遣いが嬉しくなり、回線を切った。

その後、バリアジャケットから私服へと戻るとウラタロス、リュウタロス、コハナと共に旅館への帰路を辿りながら口裏を合わせる打ち合わせをした。

フェイトとアルフは息を乱しながらも、イマジンと戦っていた。

フェイトのバリアジャケットはあちこちが爪で裂かれており、肌が露出していた。

羽織っているマントも新品同様に設えたものでなく、どこか長旅に出て長期間羽織り続けていたように

ボロボロになっていた。

それはアルフも同様だった。

「はあはあ……フェイト！大丈夫かい!?」

使い魔は口元に付いている血を手で拭いながら主の安否を探る。

「だ、大丈夫だよ。アルフ」

そう言っているが、それが強がりというのは言った本人が一番理解していた。

バルデイツシュもサイズモードからデバイスモードに戻っていた。

今となつては無駄な魔力消費でさえ、命取りになるとバルデイツシュ自身が判断したのだ。

フェイトは眼前の怪人を睨む。

「ジュエルシードをよこせえ！」

まるで呪いのように先程から同じ事しか言わない。

またフェイトに向かって飛び掛る。

フェイトよりは体力が残っているアルフが行く手を阻む。

イマジンの手から足から繰り出される攻撃をアルフは的確に自身の手足で捌いていく。

「くっ……しっ……いねえ！」

アルフの表情も曇り始めていた。余裕がなくなっている証拠だ。

フェイトはアルフと肉弾戦をしているイマジンを見る余裕が出来たので冷静に考える事にした。

(どうして、このイマジンはジュエルシードを知っているんだろう)

イマジンがジュエルシードを知っている事がフェイトには腑に落ちなかった。

良太郎が以前に教えてくれた事を思い出しながら対峙しているイマジンと照らし合わせる。

イマジンは契約者の望みを叶えることで、契約者が最も強く記憶している過去へと飛び、タイムパラドックスを生じさせることが目的、いや使命だ。

そして、契約者の殆どがイマジンの契約執行方法と想像していた契約執行方法が大きく違っている事実を知り、後悔する事になると言っ

ていた。

(このイマジンの契約者は間違いなく、ジュエルシードの価値を知っている)

『ジュエルシードの価値を知っていてイマジンと契約を交わす』それだけでフェイトにしてみればかなりの絞れた。

(契約者は管理外世界の住人でもないし、良太郎が住んでいる異世界の住人でもない。わたしのいる世界の誰か！)

だが、明確に誰かなんてのはわからない。

「あなたの契約者は誰ですか!?!」

フェイトはアルフの右突きを避けながら、左フックを仕掛けようとするイマジンに訊ねる。

フェイトにしてみれば駄目もどだった。

「契約者が誰だあ? そんなの知らねえよ」

「え?」

イマジンの返答はフェイトにしてみれば意外なものだった。

彼女が想定していた台詞は「俺がそんな事を喋ると思っっているのか?」だったからだ。

「契約者だって、イマジン

俺達

のことをいちいち訊ねずに契約するんだぜ。それと同じだ」

イマジンはアルフと距離を取って自らの返答に付け加えた。

「さてと、そろそろジュエルシードをよこせえ!」

イマジンがアルフより反応するより速く、フェイトに向かっていく。

「フェイト!!」

アルフが「逃げて!!」という想いを込めて主の名を呼ぶ。

フェイトはというと、

(まずいーやられる!?!)

イマジンの魔手に葬られると思ったとき、口が動いた。

「……………」

その声は最初は小さく、余程聴力が発達した者でなければ聞き取れ

ないほどだ。

「りよ……う」

先程よりは大きい、それでもまだ小さい声だ。

「良太郎」

自分が知る中で今の状況を打破できる人物の名を言う。

イマジンのとの距離が限りなくゼロになり、自分の頭上に振り上げられている爪が月の光で輝く。

「良太郎!!」

「ジュエルシード、いただきい!!」

フェイトが両目を閉じて叫び、イマジンが爪を振り下ろす。

イマジンの後を追いかけていたアルフは主の無残な姿を見るかもと予想し、目を閉じてしまったときだ。

「「うりゃあああああああ」」

「げべえええ」

この場にはない三人の声が突如、フェイトの耳に入りイマジンの声
が自分から遠くなった。

フェイトは自分がイマジンの手にかかっていないとわかると、閉じていた瞼を開く。

見慣れた背中がひとつ、あとふたつは赤色と金色の背中だった。

見慣れた背中の中の人物がこちらに向いてしゃがむ。

「フェイトちゃん、遅くなってごめん。大丈夫？」

「良太郎！」

自分が待ち望んだ人物だとわかるとフェイトは全身から力が抜けた。

良太郎、モモタロス、キンタロスはフェイトを襲おうとするイマジンに飛び蹴りを放って距離を開けた。

「フェイトちゃん、遅くなってごめん。大丈夫？」

良太郎はすぐにフェイトの方に向き、安否を気遣う。

「良太郎！」

フェイトは良太郎の顔を見て安心したのかその場に座り込んでしまった。

全身の張り詰めていたものが一気に削がれたのだろう。

「つたく、また犬かよ。今日は厄日だぜ」

モモタロスがこれから戦うイマジンの姿を見てげんなりした。

「はははは。まっ、今回はモモの字の出番はないっちゅうこっちゃん」
キントロスはモモタロスの肩を叩きながら言う。

「フェイト、無事でよかったよ！良太郎、アンタ遅すぎるってばあ！」

アルフが良太郎やフェイトのいる場に駆け寄ってきた。

良太郎の頭を叩いた後、フェイトを抱きしめた。

「ア、アルフ痛いよ！」

抱きしめられたフェイトは力を込めて抱きしめているアルフに抗議する。

「あ、ああ。ごめんよ」

アルフは離れても、フェイトを守るようにして前に立つ。

「しかしまあ、いくら契約のためとはいえ子供を襲うとは許せんなあ」

キントロスがイマジンを睨みつける。

「良太郎、このイマジンの目的はジュエルシードだよ」

フェイトは自らが得た情報を提示した。

「契約者に心当たりは……ないよね？」

「うん。誰なのかはわからないけど、わたしが住んでいる世界の住人が契約者だと思う」

「そうなんだ。わかった。アルフさん、フェイトちゃんをお願いします」

良太郎はそう言うのと立ち上がり、二人のイマジン同様にこれから戦うイマジンを睨みつける。

既に自らのチャクラで具現化させたデンオウベルトを呼び出し、巻きつけていた。

右手にはパスが握られている。

「良太郎、行くでー！」

キントロスが良太郎の横に並び、股を開いて四股を踏んでいた。

キントロスが気を引き締める際に行われる仕種だ。

「もちろん!!キントロス、行くよー！」

良太郎はキンタロス同様に気を引き締める。

「変身!!」

パスをデンオウベルトのターミナルバックルにセタツチする。

プラット電王に変身してから、フォームスイッチの金色を押し。

ソードフォームともロッドフォームとも違うミュージックフォームが流れ出す。

プラット電王がもう一度、パスをターミナルバックルにセタツチする。

「アックスフォーム」

デンオウベルトが音声で発すると、プラット電王の胸部周辺にオーラアーマーが出現して一周ぐるりと回る。

回ってからソード電王時に胸部となっていたアーマーは背部に、ソード電王時に背部となりロッド電王時に展開されていたアーマーは閉じたまま胸部へと、肩部もソード電王時のアーマーを前後逆にした状態で装着されていく。

斧を思わせるレリーフが眼前に停まり、外側の左右には「金」の字が象られたパーツが展開して、電仮面へととなった。

電仮面とオーラアーマーが装着を終えると、全身から黄金の色をしたフリーエネルギーが放出された。

キンタロスの力を纏った電王、電王アックスフォーム（以後：アックス電王）が現れた。

「わたし達が戦った時とは姿が違う」

「あたし達と戦った奴は確か、赤色だったよね？」

フェイトとアルフが初めて見たソード電王とにいる今自分達が見ているアックス電王と比べた。

「貴様、何者だ!?!」

（え?何で?）

イマジンの台詞に疑問を持ったのはアックス電王の深層心理の中にいる良太郎だった。

「どないしたんや?良太郎」

キンタロスの精神が良太郎に訊ねる。

(以前、ウラタロスと一緒に戦った時のイマジンに名乗ったんだけどね)

良太郎はイマジン同士に何がしかのネットワークがあるのではないかと考えていた。

でなければ、自分の世界にいたイマジン達が電王という名や風体を知る事が出来ないからだ。

だが、この世界のイマジンにはそういったイマジン同士のネットワークがないのかもしれない。

あるならば、先程のような台詞は決して吐かないだろう。

「まったく、しゃあないなあ。お前に仲間がおるんならどないかして伝えとけ！俺は電王や」

両手をパンと合掌して相撲取りが試合を始める前の構えを取ってから言う。

「俺の強さにお前が泣いた!!」

構えを解いてから両腰にあるデンガツシャーの内、右と左のパーツをひとつずつ抜き取ってから縦連結させる。

その仕種はゆっくりであり、ソード電王のような派手さはない。

右のツールを腰元から抜き取ってから縦連結させたパーツの一番上に更に縦に連結する。

最後に左腰に余っているパーツを抜き取って、縦連結させた一番上のパーツの横に連結させた。

フリーエネルギーがデンガツシャーに伝導され、斧の刃とも思われるものが出現した。

イマジンはアックス電王の仕種に苛立ちを感じたのか、先手を取るようにして間合いを詰めて右爪で胸部を狙う。

フェイトとアルフはその一撃をまともに食らうのだから、後方に吹っ飛ぶと予想していた。

だが、

「何!？」

イマジンが驚愕の声を上げる。

吹っ飛ぶどころか先程から一ミリも下がっていないのだ。

「そおりやあああ！」

右手に握られているデンガツシャーアックスモード（以後：Dアックス）を振り上げて、イマジンの胸元を狙って振り下ろした。

「がああああああ」

あまりの激痛に後方へと下がるイマジン。

アックス電王は走らずにゆっくりとイマジンに歩み寄ろうとしていた。

「おいクマー！さっさと片付けちまえ！」

モモタロスが戦っているアックス電王に応援どころかヤジを飛ばしていた。

アックス電王は先程と同じスタイルでイマジンに攻撃をしていた。モモタロスの言葉を左から右へと聞き流しているようだ。

「あ、あのお」

フェイトがモモタロスに恐る恐る話しかけてきた。

「あん？何だよ？」

モモタロスが声のする方向に向き、隣に座る。

「貴方達もイマジンなんですよね？」

「ああ、そうだよ。それがどうした？」

モモタロスは別に隠す事もないので素直に認めた。

「その、今戦っているイマジンと比べると何か違うような感じがして……」

「どう違うんだよ？」

「そう聞かれると答えようがないんです。ただそう思ったただけなんです……」

「良太郎という時間が長かったからな。それでじゃねえのか？」

モモタロスもどう答えたらいいのかわからないのでフェイトには適当に言った。

「おつ、そろそろクライマックスだぜ」

モモタロスがフェイトとアルフに戦いが終盤になってきたので見逃さないように促した。

「くつ、契約者の望みは目の前にあるというのに!!」

イマジンは契約を完了できそうにない悔しさとアックス電王に対する憎しみを混ぜた声を発した。

「……………」

アックス電王は何も発しない。

「くそおおおおおお」

イマジンが突っ込むがアックス電王の左平手打ちを右頬に食らい、吹っ飛んだ。

(キンタロス、今だよ！)

「わかつとる。そろそろ詰みやな」

パスを取り出し、ターミナルバツクルにセタッチする。

「フルチャージ」

ターミナルバツクルから音声が発すると、フリーエネルギーがDアックスへと伝導される。

Dアックスの刃にはフリーエネルギーで充填されており、バチバチと音を立てている。

「はあっ!!」

両足を広げ、助走もなしでその場を跳躍する。

跳躍の最高点に到達するとDアックスを振り上げる。

最高点からイマジンに向かって落下が始まる。

同時に、Dアックスを下ろしていく。

イマジンの頭に刃が触れると、ケーキを斬るかのように縦一文字に真っ直ぐに下ろしていく。

イマジンは自身の許容範囲以上のフリーエネルギーで真っ二つにされたので耐え切れずに爆発した。

「うおおああああああああ」

と、いう悲鳴を残して。

爆煙が立つがすぐに晴れていき、そこには技を繰り出したままのアックス電王がいた。

「ダイナミックチョップ」

技名を告げると、姿勢を崩してベルトを外す。

外すと同時にアックス電王の形が崩れていき、キンタロスが良太郎

の身体から離れた。

「ふう。終わったね」

良太郎はその場にいる全員に告げると、フェイトとアルフの元へ歩み寄る。

「モモタロス、キンタロス。僕はこれで」

フェイトに上着を着せると、良太郎はその場から自分達が宿泊している旅館に向かって歩き出そうとする。

フェイトは二人に頭を軽く下げ、アルフもまた主を助けてくれた者達なので渋々だが軽く下げてから、林の中へと向かっていった。

（海鳴温泉街にあったジュエルシード一個となのはちゃんから奪ったジュエルシード一個、そフェイトちゃんが個人で入手した一個、そして僕が渡した一個を合わせて四個か）

良太郎は夜空を見上げながら、確信した。

ジュエルシードを巡っての戦いはこれからが始まりなのだという事を。

海鳴市激闘

第十八話 「想イ絡マリ」

そこはとても静かではあるが神聖な雰囲気はなく、どこか寒気を感じさせる不気味さを漂わせていた。

その者はただ一人でこの広い部屋の中央に佇んでいた。

その者の身体から白い砂が噴き出る。

砂はひとりで動き出し、上半身と下半身が逆転した怪物の姿が形成されていく。

その者はその砂の塊に告げる。

砂の塊はその一言を聞くと上半身と下半身が正常な位置に移動し、二足歩行の出来る怪人になった。

怪人は砂色から全身白色に着色されていく。

羊型のイマジン——シープライマジンが誕生し、白い光の球体となつて何処かへと飛び立った。

*

海鳴温泉街の一件から三日が経過していた。

空は若干、雲が泳いでいるが太陽はいつも通りに自らの天命に従っている。

「ふぁーあ」

リビングにあるソファからむっくりと一人の人物が欠伸をしながらも起き上がった。

この部屋の住人の中で只一人の男性、野上良太郎だ。

目をこすりながら側のテーブルに置いてあるケータロスを取る。

ケータロスの画面には『AM:8:30』と表示されていた。

普段の起床時刻からすると、二時間遅かった。

「これは旅館ボケっていうのかな」

既に三日も経過しているのに良太郎はまだ海鳴温泉街での感覚を抜けきれていなかった。

ソファから立ち上がり、軽く伸びをしてから首を二、三度コキコキ

鳴らしてからキッチンに向かう。

冷蔵庫を開けると、食材がぎっしりというわけではないがそれなりにあった。

やっぱりドッグフード缶が三缶あった。

当初は「何故?」と思ったが、今ならば理解できる。

これはアルフのものだということ。

「アルフさん、コレどうやって食べるのかな?」

アルフはこの部屋にいる時、殆どが人の姿をしている。

まさか、酒飲みのように普通に人型でたべているのでは、と想像してしまう。

ドッグフードを人間が食べてはいけないという法律があるわけではないが、それでも人前でドッグフードを美味しそうに食べる人間を見たらどうなるだろうか。

無関心を決め込んでくれればありがたいと良太郎は祈るばかりだ。

「さてと、準備に取り掛かるかな」

良太郎は袖をまくってから支度を始めた。

フェイト・テスタロッサは自身でもわからないくらいに身体全身がだるかった。

全身に何十キロものおもりが乗っかっているような感じだった。

ここ三日間、ずっとこうだ。

「ごちそうさま」

フェイトは合掌すると、リビングのソファにもたれた。

朝食は空になっていた。

良太郎が空になった皿を回収して洗い始めた。

フェイトは視界に入ると、キッチンに向かい布巾を手にした。良太郎が洗い終えた食器を拭くのが彼女の役割だ。

「どうしたの?温泉から帰ってきてから三日間、ずっとそんな調子だよ?」

黙々とスポンジに洗剤をつけて食器を洗っていた良太郎が口を開いた。

「そ、そうかな」

フエイトは誤魔化そうとするが元来、嘘や姦計というものに向かない人間なのですぐにバレた。

「もしかして、なのはちゃん達のが気になって食欲ないの?」

「う、うん」

フエイトは皿を拭く手を止めて、正直に頷いた。

「そっか」

良太郎は水道の水を止めた。フエイトの目線に合わせる様にしがむ。

「僕が今言えることはひとつしかないよ。どんなかたちであれ、なのはちゃんと正面から向き合うしかないってこと、かな」

「良太郎……」

フエイトは良太郎の言葉に真剣に耳を傾ける。

「後悔だけはしないように、ね?」

良太郎はそう告げると立ち上がり、フエイトをリビングに向かうように促した。

良太郎が人数分のコーヒーを作り、リビングに持ってきたのはそれから数分後の事だ。

*

スズメが鳴き、空腹が襲い始める昼頃。

買い物袋を持ち、ラムネを飲んでいるモモタロスと右肩にフレット——ユーノ・スクライアを乗せているリュウタロスが歩いていた。

理由とするならジュエルシード探しのためではなく、もっと現実なことだ。

「クソお、あのコハナクソ女めえ。まさか俺達の宿泊代、ライブで稼いだ金を使いやがって!」

モモタロスがここにはいない、自分にとっては目の上のコブ的少女に対して文句を言った。

「モモタロスウ、ハナちゃんの文句言っていないで早く探そうよお。今日のライブの場所」

「わーってるよ。ったく、オーナーのオッサンから貰った金を宿泊代

にすりやこんなことにはならなかったのによお」

それでもまだ愚痴るモモタロス。

ちなみにコハナ預かりとなっていているオーナーから貰った金であるが、実はモモタロス達が高町家及び翠屋で破壊した窓や机、壁等の修繕費となっていたりすることを彼らは知らない。

「なあ、小僧」

モモタロスがラムネを飲み終えたりユウタロスに話しかける。

「何さ、モモタロス」

「何かよお、背中辺り変じゃねえか？」

モモタロスが周囲を見回しながら、先程から背中辺りをチクチクとするものがあると告げた。

リュウタロスはモモタロスに言われてから、自身の背中を手で触ってみる。

「何だろ？変なかんじがするう」

正体不明のものに対して嫌悪の表情を表に出すリュウタロス。

モモタロスが不機嫌なオーラを周囲に放出しながらも本日のライブ会場となる場所を探そうとしたときだ。

「あ、あの、もしかしてモモタロスさんですよね？」

頭に二本角をつけたカチューシャを付けた女性が現れた。

その横にはリュウタロスの髭に似た付け髭を付けた男性がいた。

「紫色でドラゴンを模した顔立ちといえればリュウタロスさんですよね？」

女性がリュウタロスにも確認する。

「うん、そうだよ」

リュウタロスは即答した。

「やっぱり本物だ！」

「すごいすごい！あの実は私達ファンなんです！サインください！」

そう言いながら二本角がついたカチューシャをつけている女性（以後・角女）がサイン色紙とサインペンをハンドバックから取り出して、モモタロスに渡してきた。

「え？おい、俺達は……」

モモタロスは初めての事なので戸惑う中、

「いーじゃん、書こうよ。モモタロスウ」

リュウタロスがモモタロスから色紙一枚とサインペンを引っ手繰って書き始めた。

「ふんふーん♪」

リュウタロスの右手に握られているサインペスが舞いを舞っているかのように、色紙の上を滑っていた。

「できたあ！はい！」

リュウタロスは自分のサインが書けたのか、角女に渡した。

モモタロスは自身の参考のために覗き見る。

『りゅうたろす』とひらがなで書かれているようだが、どこかミミズのように曲がりくねっており原型はあまりとどめてはいなかった。

サインといえはサインと呼べる字体、つまり汚い字だった。

「しよすがねえなあ」

モモタロスがリュウタロスからサインペンを引っ手繰って色紙を滑らせる。

「ほらよ、できたぜ」

そう言っ角女に放り投げた。

角女は宙に浮いた色紙を受け取り、うっとりとしていた。

「おい、リュウタロスさんのサインは俺のだぞ」

そう言っ付け髭をつけた男（以後・髭男）が角女にリュウタロス直筆のサイン色紙を渡すようにせがむ。

「あ、ごめんごめん」

角女が髭男に謝罪しながら色紙を渡した。

「モモタロスさん、リュウタロスさん！ありがとうございます！」

「一生の宝物にします！」

角女と髭男がモモタロス、リュウタロスに感謝の言葉を述べてから頭を下げて満足そうな顔をしてその場を離れていった。

「凄いですね！もうファンが出来るなんて」

今まで黙っリュウタロスの肩に乗っかっていたユーノが口を開く。

「なるほどな」

先程から背中に感じていたものが何なのかをモモタロスは漸く理解した。

「どうしたの？モモタロス」

「モモタロスさん？」

リュウタロスとユーノは一人だけ何かを理解したかのような声を上げたモモタロスに訊ねた。

「ああ、さっきから俺と小僧の背中に感じるヤツが何なのかやっとなかったんだよ」

モモタロスは出し惜しみするつもりも、もったいぶるつもりもないので素直に答えることにした。

「何なのさ？」

「何なんですか？」

一体と一匹は答えを待ち望んでいた。

「フアンの連中の視線だよ」

「フアンの？」

「視線、ですか？」

「ああ、その証拠に見てみるよ。あそこにいる二人」

モモタロスはリュウタロスとユーノに自分が指差している場所を見るように促す。

そこには金色の角を象った帽子を被って顔に何かの模様を化粧した女性と、水色の亀の甲羅のようなものを背負っている小学生くらいの少年がスイーツを食べていた。

「あの二人、クマちゃんとかメちゃんの真似っこしてるう」

「あ、あっちの四人組も見てくださいー！」

ユーノが指差す方向にモモタロスとリュウタロスが顔を向ける。

「何アレえ？僕達がいるよー！」

そこには四体のイマジンの姿を完全に真似ている四人組がいた。

リュウタロスが言うように、遠目から見ると自分達四人ではないかと思ってしまうほど精巧に作成されていた。

「コスプレってやつか？」

モモタロスは頑張つて記憶の中から四人組を見て相応しい言葉を引き出した。

「多分そうだと思います。それにしてもライブは今までで何回したんですか？」

ユーノがモモタロスの肩に飛び乗った。

「えーと、ちよつと待ってろよ」

指で数え始めるモモタロス。

「あー、確か六回以上じゃねえのか？」

モモタロスは指折りながら数えていた手を止めて、適当な数字をユーノに答えた。

「何で疑問形なんですか？」

「モモタロスつて数をきちんと数えられないからじゃない？」

ユーノの疑問をリュウタロスが疑問形な語尾で答えた。

「うるせえ！小僧」

「だって、真実じゃーん」

リュウタロスはモモタロスの言葉を右耳から左耳へ流してから事実をぶつけた。

モモタロスはリュウタロスの言うように、きちんと一から数字を数える事は出来ない。

証明する手立てとするならば彼の十八番というべき、『俺の必殺技』の中には何故か『パート4』がないのだ。

彼自身は『パート5』を披露した時に、良太郎に「三の次は四だよ」とツツコミを入れられた際、「一個飛ばすくらい凄えんだよ！」と力説し、自分が数を数えられる事を良太郎に証明するために「一、二、三、五、六、七、八、九、十」と自信たっぷりと言ったことがある。

この出来事以降、モモタロスを除く面々は『モモタロスは数字を正しく数える事は出来ない』と受け止められている。

「まっ、今日のライブはこの辺りでいっか」

モモタロスが今夜のライブを実施する場所を決めた。

そこは海鳴市に数店舗しかない信用金庫の入口前だった。

この信用金庫、閉店しても外側からガラス張りの入口をシャッター

で閉じるような事はせずに、内側から店内だけを閉じるようにしているため、ガラス張りの入口はそのままになっている。

「今日もお客さん、たくさん来るかなあ」

リュウタロスはライブ会場を見ながら夜の事を想像する。

「来るかなあじゃねえよ。引き寄せるんだよ」

モモタロスは右肩に乗っているユーノをリュウタロスの頭に乗せてから言い聞かせた。

今回のライブは何が何でも成功させなくてはならない。

自分達の生活のためにもだ。

「そうだよ。リュウタロス、ライブ頑張ってね」

右肩に移ったユーノも応援する。

「うん！わかった。ありがとうフェレット君、あとついでにモモタロスも」

モモタロスは何か言おうとしたが、埒が明かないと判断したため、わなわなと震えていた右拳を治めた。

*

空は青色からオレンジ色へと切り替わって間もない頃。

モモタロス、リュウタロス、ユーノの二体と一匹は高町家への帰路を辿っていた。

「さて、今日の晩飯は何だろなあ」

「ママさんの作るものなら何でも美味しいよねえ」

イマジン二体の脳内を支配しているのは本日の夕食のことだった。

高町桃子の作る料理は人間と微妙に味覚が異なるイマジン達にも大好評だった。

「ああ、僕も一度は食べてみたいなあ」

フェレットであるユーノは桃子の料理を食べる事は出来ず、市販のフェレット専用の餌である為、夕食が何なのかを想像する事が出来るモモタロス達が羨ましかったりする。

「おい、あれって……」

モモタロスが前方に向かっていている人物が見知っていたので指差す。

ユーノは天に仰いでいた顔を正面に向けると、見知った人物を両の

目で捉えた。

「なのはだ」

「なのはちゃんだ!」

モモタロスはなのはを発見しても特に態度を変えなかったが、リュウタロスは嬉しいのか右手を振っていた。

高町なのはが通学鞆のベルトを両手で握り締めながらとぼとぼと歩いていた。

沈んでいた顔を上げると、

「あ、ユーノ君にモモタロスさん。それにリュウタ君も」

その場の雰囲気と和ませる為の作り笑いを浮かべていた。

「アリサちゃんやすずかちゃんと一緒じゃないの?」

リュウタロスが帰路の中、購入したラムネを飲みながら俯いて歩いているなのはに訊ねる。

「……う、うん」

なのはは顔を上げ、リュウタロスと目を合わせる。

「なのは……」

「……」

ユーノは心配げな声色で少女の名を呟く。

赤色のイマジンは事の成り行きを見守るかのよう一言も発さず、黙々とラムネを飲んでいった。

雰囲気は明るくなるどころか暗くなる一方だという事をこの場に居る全員が察知した。

だが、それを口に発する事は誰にも出来なかった。

暗くした張本人を知っているから。

そしてその張本人が暗い雰囲気を発したかという原因も知っているからだ。

「なのは」

沈黙を破ったのはモモタロスだ。

「モモタロスさん?」

「オマエ、これから忙しいか?」

なのはは首を横に振る。

「いえ、今日は特に何も……」

「なら少しだけ付き合え」

静かだが有無を言わせぬ力が声にはあった。

「!?」「」

モモタロス以外の一人と一体と一匹は揃って首を傾げた。

「ここなら誰かの目も気にすることなく遠慮なしに言いたい事は何でも言えるぜ」

モモタロスが連れてきたのは、サッカーグラウンドがある河川敷だった。

我先にとコンクリートで作られた階段に腰を下ろすモモタロス。

「座れよ」

静かだが、やはり有無を言わせぬ迫力が含まれていた。

なのははモモタロスの隣に座り、リュウタロスがその隣に座る。

ユーノはなのはの右肩に乗った。

「学校でなんかあったのか?」

「!!」

モモタロスの質問はかなりの的を射ていたのか、なのはは身体をびくっとした。

「ええと、その……」

「なのは、言ってよ。僕達はそのためにここにいるんだから」

「友達が元気なかったら助けてあげるのが友達だって、おじさんやママさんが言ってたよ」

ユーノやリュウタロスもなのはに打ち明けるように促す。

「……………」

それでもなのははだんまりだった。

「つたく……………」

モモタロスは軽くなのはの頭をはたいた。

「つうううううう」

なのはは両手ではたかれた頭を押さえた。

「モモタロスさん!何やってるんですか!?!」

「モモタロス!女の子に暴力振るっちゃいけないんだよ!」

モモタロスのいきなりの行動にユーノとリユウタロスは激昂する。

「うるせえ！オメエら黙つてろ！」

その一言にブーイングを発していた二人は黙った。

「なのは、オメエ何様のつもりだ？」

モモタロスの問いになのはは真剣に耳を傾けていた。

なのははこれ以上だんまりを決め込む事は出来ないと観念したのか口を開き始めた。

第十九話 「海鳴の夜は盛大に」

カラスが鳴き、夕日が美しく映える頃。

一人の少女と二体のイマジンと一匹のフェレットがコンクリートで作られた階段に腰掛けていた。

「なのは、オメエ何様のつもりなんだよ?」

モモタロスの一言が高町なのはの胸に刺さった。

「え? わ、わたしは……」

何様と聞かれて何の迷いもなく即答できる人間はあまりいないだろう。

いるとするならば『自分』というものを客観的に捉えている者が、何の考えも持たない能天気な者くらいだ。

なのはが問いに答える前に、モモタロスが続ける。

「オメエがどんなにスゲエ魔導師でもな、出来る事なんてたかがしれてるんだよ」

「た、たかが……ですか」

なのははモモタロスのあまりの物言いにショックを受けたと同時に全身の力が抜ける感じがした。

なのははある日突然魔導師になった。

それは否応なくといったというものではなく、双方合意の上でなったものだ。

その日から、『ただの一般人』だった自分は『ひとつの使命を背負う魔導師』になった。

正直に言えば自分にしか出来ないことという事で、気負いがあつたことは否定できない。

それをモモタロスは何の遠慮もなく、ぶち壊したのだ。

自分を『ひとつの使命を背負う魔導師』から『悩みを持った一人の少女』にしてしまったのだ。

「ああ。『たかが』だけ」

モモタロスはラムネを口に含む。

「リュウタロス」

モモタロスとなのはのやりとりを間近で見ているフェレット——
ユーノ・スクライアはなのはの右肩からもう一体のイマジンである
リュウタロスに移動していた。

「なーに？フェレット君」

リュウタロスも小声で応じていた。

「あの二人、大丈夫かな？」

「うーん、わかんないよ。モモタロスって言いたい事ズケズケ言っ
ちやうからねえ」

「え、本当に？」

リュウタロスのモモタロスに対する率直な感想を聞いたユーノは
不安にかられて一人と一体を見ていた。

「ねえ、なのはの元気がなくなっただのって……」

「フェレット君の思ってること通りだと思うよ」

リュウタロスは容赦なく告げた。

彼もモモタロス同様、言いたい事はズケズケと言ってしまいうタイプ
だ。

ただ、モモタロスと違うのはモモタロスが言ったからにはきちんと
責任を取ろうとする『大人』であるに対して、リュウタロスは言った
ら言いっぱなしで放ったからかしにする『子供』だということだ。

「もし、僕がなのはをこちらに引きずり込んだりしなかったら、なのは
はこんな悩みを抱えずに済んだのかな？」

「でも、僕達とは出会う事はなかったと思うよ」

リュウタロスはユーノのIFの意見を今の現状を受け入れた意見
で打ち消した。

「！」

目から鱗が落ちたとはまさにこのような事を言うのかもしれない
とユーノは実感した。

「なのはちゃんがフェレット君のお願いを聞いたから僕達と出会えた
んじゃないの？」

リュウタロスは小声で何の含みもなく言った。

だが、ユーノにしてみればまさにその通りだと考えさせられる言葉

だった。

なのはが魔導師にならなかった場合、彼女は極平凡な小学生として下手な悩みを抱えることなく友達や家族と共にそれなりに人生を謳歌する事が出来ただろう。

だが、そこには自分はもちろんモモタロス達もいないのだ。

それはそれで寂しいと感じてしまった。

「モモタロスがなのはちゃんを泣かせたら僕達でモモタロスをやっつけるよ」

「え、あ、う、うん」

良くも悪くも純粹なりユウタロスの意見にユーノは首を縦に振るしかなかった。

「実はですね……」

今まで比較的受身の態勢になっていたなのはが初めて切り出した。

自身に起きた出来事を思い出しながら。

本日、学校の休み時間のことだった。

いつも通り、親友のアリサ・バニングスと月村すずかの三人で他愛のない会話をしていた。

二人は盛り上がっていたが、自分

なのは

一人はその中に入らなかった。

同じ魔導師で恐らくジェルシードを集める上で障害となる少女――

――フェイト・テスタロッサのことを考えていたからだ。

その事がこのところずっと、正確に言うなら月村邸での一件以来彼女の頭を支配していたといっても過言ではない。

そして、とうとうこの三人の中では一番短気とも思われるアリサの堪忍袋がっいに切れた。

アリサの声は教室を一瞬だが支配した。

アリサとて単純に自身の感情を表に出したわけではないことは
なのは
自分にもよくわかっていた。
なのは

自分のことを心配しているからこそ、抱えているものを打ち明けて欲しいと思ったからこそ

大声を張り上げた事を。

だが、それでも自分なのはは謝罪以外は一言も言い返さなかった。

その謝罪もどこか場を取り繕うようなものだ。アリサは受け止めたため、とうとう彼女は自分なのはから事情を聞きだすことを諦めて教室から抜け出したのだ。

すずかは何とか自分なのはとアリサをこのまま仲違いさせるわけには行かないと思ったのか、自分なのはにフオローを入れた後、アリサの後を追いかけていった。

その出来事以降、二人とは会話せずに学業時間を終了して一人で下校していたのだと言う。

「なるほどなあ」

黙って聞いていたモモタロスはなのはが全てを言い終えたのだと判断すると、口を開いた。

「んで、なのは。オメエはどうしたいんだよ？」

モモタロスなのはの原因を全て聞いていたが、自分の意見は言わずになのはにこれからの事を聞いた。

「え？」

「あの魔導師や金髪チビとの問題だよ。このまま放ったからしにするのか？」

「そんな、放つたらかしになんて出来ませんよ！それにこうなったのも、わたしが悪いんですから……」

最後になのはは自分を責めていた。

こんな事態になったのは全て自分の不手際によるものだと言わんばかりに。

「あー」

モモタロスは髪の毛があるわけでもないので後頭部を掻いた。

気が済むまで掻き終えるとなのはを見る。

「何でオメエ、何でもかんでも背負い込むんだよ？そりや趣味か何か？」

モモタロスはそんな人間を一人知っている。

「しゅ、趣味じゃありません！」

なのはは両手を拳にして必死で否定する。

多分、自分が知っている人間も同じような反応をするとなのはを見ながら思ってしまう。

「だったらよ、少しは他の連中にも背負わせりやいいじゃねえか」
「え？」

なのはは目を丸くしているが、モモタロスは気にすることなく続ける。

「オメエ、まだガキなんだ。大人にケツ拭いてもらっても恥ずかしいことなんかねえんだぜ」

「でも……」

それでもなのははためらってしまう。

自分に課せられた事を自分で片付ける、というのが九歳の少女の道徳であり信念だろうと察する事が出来た。

モモタロスにもそれが立派な信念だという事はわかっていた。

だが、自らの信念を誰でも彼でも一人で貫けるほど世の中は上手く出来ていないのだ。

目の前の少女はそれをまだ理解していない。

また、場に沈黙の空気が漂い始める。

「なあなのは、オマエの信念は誰かに手え借りて達成しちやいけねえものなのか？」

モモタロスは静かになのはに訊ねた。

「モモタロスさん？」

「オメエが信念貫くのに俺達が手を貸しちやいけねえのかって聞いているんだ」

その言葉を耳に入れるまで高町なのはは自分が一人ではないことを完全に失念していた。

モモタロスを見てからユーノとリュウタロスを見て、ここにはいないウラタロスとキンタロスの顔を思い浮かべていた。

モモタロスは自分にこう言いたかったのかもしれない。

『もつと他人に甘えろ』と。

『もつと言いたい事を言え』と。

『オマエには俺達がいる』と。

「あー、ったく。真面目すぎるガキはこういうとき、面倒で困るぜ」

モモタロスは言いたい事を言い終えたのか、照れ隠しに頭を掻いてから残っているラムネを飲み干す事にした。

「……すいません」

なのは謝罪するが、その声色は落ち込んでいるものではなかった。

ラムネを飲み終えたモモタロスは数メートル先にあるゴミ箱に向かって空のラムネ瓶（瓶といってもプラスチック製）を放り投げた。

「はい、なのはちゃん」

リュウタロスが立ち上がり、右肩に乗っているユーノに渡した。

ユーノはなのはの右肩に乗っかる。

「なのは、僕じゃ心許ないかもしれないけど何でも言つてよ。僕はもう迷わないから」

「ユーノ君……」

ユーノも先ほどまでのやり取りを見て何かを見出して、覚悟を決めたのかもしれない。

そう感じたのは、先程までと彼が発している雰囲気が違うからだ。

モモタロスが立ち上がり、なのはに手を差し伸べる。

「さあ、帰ろうぜ？カミさんの晩飯が待ってるぞ？」

「はいー」

なのはは元気よく声を上げ、モモタロスの手を握って立ち上がった。

*

夕日が窓に差し込み、眩く感じる頃。

野上良太郎が居候しているマンションではというと。

獣耳と尻尾をぴくぴくと動かしながらフェイト・テスタロッサの使いであるアルフは一足早い夕飯を食べようとしていた。

「良太郎が食事を作るようになってからはご無沙汰だったからねえ」

「アルフさん、それ本当に食べるの？」

良太郎はアルフが食しようとしているソレを見てから確認するかのようにつねる。

「ん？良太郎、アンタも食べたいのかい？」

そう箱入りのドッグフードをチヨコスナツクのように差し出してくる。

「ええと……」

アルフの好意に応えるべきかどうかというところだ。

差し出されたドッグフードを見る。

チヨコスナツクのように見えなくはないが、これはあくまで犬の主食だ。

「コレ、結構イケるからさ。良太郎も食べてみなって！」

ずいずいと薦めてくるアルフ。

「じゃ、じゃあひとつだけ」

押し弱い良太郎はアルフの薦めを押しつける事が出来ず、ドッグフードをひとつ袋から摘み出した。

ドッグフードをまじまじと見る。

チヨコスナツクだと思って食べれば何とかなるだろう。

だが、ここで良太郎は暇つぶしに憶えた雑学知識を記憶の箱から引っぱり出してしまった。

（たしか、犬の味覚と人間の味覚は違うはずって聞いたことがあるよ
うな……）

よりにもよってこの時に一番引っぱり出さなくてもいい雑学知識だ。

アルフを見る。

まるでお菓子のごとく、ムシヤムシヤバリバリと食べている。

それを見ていると、『あ、食べれそう』と思ってしまう。

口の中に入れようとした時に我に返る。

（アルフさんはあんなふうに食べているけどコレはドッグフードなんだよね……）

口に入れるのを躊躇ってしまう。

しかし、いつまでも掌のドッグフードと睨めっこをしているわけにはいかない。

良太郎は両目を閉じ、精神を集中してから口の中へ放り込んだ。

そして、小学校時に覚えた一口三十回を実践する。
正直、美味い不味いなんてわからなくなっていた。

そして、ごくりと喉を通した。

「美味かったろ？良太郎」

とアルフは聞いてきた。

(美味かったろ？って聞かれても、味なんて全然わかんないくらい噛んだからなあ)

体のいい回答が出てこない。

元々、嘘やごまかしという詐術に長けているわけではないので行き着くところはバカ正直に答えるという選択肢しかないのだ。

「あの、ドッグフードなんて食べるの初めてだからさ、その、口に入れるだけでいっぱいいっぱいだったんだ。だから、味を感じる余裕なんてなかったんだよ」

本当にバカ正直に答えた。

「なーんだ。アンタ、ドッグフード食べるの初めてだったんだ。そりやちよつと上級者向けなこと望んじまったね」

何が上級者なのかよくわからないが、アルフが自分の行いに反省している事だけはわかった。

「それにしてもフェイトちゃん出てこないね」

良太郎は寢室を覗む。

「そうだねえ。良太郎、アンタが食事を差し入れた時はどんな感じだったんだい？」

「ベッドで寝転がっていたよ。ただ、英気を養うって感じじゃなかったと思うよ」

「どういう意味だい？」

「何かを真剣に考えてるんだと思う」

「何かって何だい？」

アルフが詰め寄ってきた。

「それはわからないよ。フェイトちゃん自身に聞いてみないとね」

良太郎は下がりながらも答えた。

わからないと言いなながらも、仮にフェイトが考え込んでいるのだと

したら凡その見当は付いていたりする。

ただ、それはジユエルシード探しにとつて障害になりかねないのでアルフには告げなかった。

告げるとフェイトに諫言しそうだと思ったからである。

良太郎はケータロスを取り出して時刻を見る。

「さてと、そろそろ食器の回収に行つてくるよ」

そうアルフに告げてからフェイトが籠っている寝室に向かう。

「行つてらっしゃーい」

とアルフはソファの上に寝転がった。

ノックをしてから「どうぞ」と声がしたので良太郎は入る。

「食器の片付けに来ただけど……」

良太郎は差し入れに渡した食事を見る。

大した量ではなかったが、食事は殆ど手をつけられていなかった。

つまり、全く食べていないという事だ。

「……殆ど残してるじゃない」

良太郎は一息吐く。

「……少しは食べたから大丈夫」

フェイトはゆつくりとだが、ベッドから起き上がる。

バリアジャケット姿ではあるが、マントは羽織っておらず、また手

袋

グローブ

もはめていなかった。

「アルフさんから聞いたよ。広域探索の魔法は体力をかなり使うんだってね？」

「う、うん」

良太郎の指摘にフェイトは首肯する事で対応した。

「それにこういう事は何度かあったとも聞いたよ」

ベッドに腰掛ける良太郎。

「な、何度かって程でもないんだけど……」

フェイトは顔を伏せてしまう。

食事を作ってくれた良太郎に顔向けできないという表れかもしれ

ない。

『こういう事』とは出された食事を残す事だ。

「フェイトちゃん、そんな状態でもやっぱりするの？ ジュエルシード」

良太郎は答えはわかっている事を確認のために訊ねる。

「うん、母さんが待っているから……」

フェイトは即答した。

「そっか。だったら尚更食べないといけないね」

「え？」

「コレ、温め直して持ってくるよ」

良太郎はベッドから立ち上がり、食事が乗っかっているトレイを持つ。
つ。

「良太郎、わたしはその……もうお腹いっぱいだし……」

フェイトは良太郎の申し出を断ろうとするが、嘘の吐けない性格のためよい言葉が出なかった。

「それ以上言うと、僕怒るよ？」

良太郎はドスを利かせたような口調で言ったわけではないが、フェイトを黙らせるには十分な力があつた。

フェイトの心の中に良太郎に対する後ろめたさがあつたからこそ、上手くいっただのかもしれない。

「相手はなのはちゃんやモモタロス達だけじゃない。誰かと契約を交わしたイマジンまでいるんだ。体力はあつた方がいいに越した事はないんだからさ」

「う、うん」

フェイトは良太郎の静かではあるが有無を言わせぬ気迫に負けて頷くしかなかった。

食事一式を持った良太郎は、寝室を離れてキッチンに向かった。

リビングではソファで寝そべっていたアルフが起き上がり、フェイトの体調を訊ねてきた。

「万全とはいえないね。食事も残してたし」

良太郎は報告をしながら食事にラップを巻いて電子レンジに放り込み、作動させる。

ラップに包まれた食器がぐるぐると回っている。

「じゃあ、アンタは何してんだい？」

残した食事をラップして電子レンジに放り込む意図がアルフにはわからなかった。

「フェイトちゃんにもう一度食べさせるために温めているんだけど……」

「フェイト、断らなかったのかい!？」

使い魔であるアルフはかなり驚いていた。

「断ろうとしてたけど、ちよつと強く言ったら渋々だけど了解してくれたよ」

「嘘だろ!?!あたしが強く言っても聞いてくれないのに、どうやったのさ!?!良太郎」

「特に難しい事はしてないよ」

電子レンジがチン!と鳴った。

「アルフさん、ひとつ聞いていいかな?」

「何だい?良太郎。あたしがわかる事なら答えるけど」

良太郎は電子レンジの中身を取り出し、食器の上にかぶっているラップを剥がしていく。

「フェイトちゃんのお母さんってどんな人なの?」

「……………」

アルフは急に顔を伏せた。

開いていた手がいつの間にか拳となり、ぶるぶると震えていた。

よく見ると、全身も震えていた。

それが『怒り』や『憎しみ』といったものなのか、それとも『恐怖』なのかは判別できなかったが、あまり良い感情を抱いていないということだけはわかった。

「えと、答えにくかったらいいよ。ごめんね、アルフさん」

「あ、ああ。こつちこそごめんよ」

良太郎は温めた食事を持ってフェイトがいる寝室へと向かった。

(アルフさんの態度からすると、フェイトちゃんのお母さんはちよつとワケありなのかもしれない)

記憶の片隅に留めながらも、寢室のドアをノックした。

「良太郎、ありがとう」

ベッドから起き上がり、食事を受け取って黙々と食す。

味わって食べているわけではなく、作った人間に対する礼儀もしくはエネルギーにするための摂取とも思える食べ方だった。

数分後には、

「ごちそうさまでした」

と合掌してすぐに、手袋をはめてからマントを出現させて羽織った。

「良太郎。食器が洗い終わり次第、行くよ」

そう言うと同時にバルディッシュを出現させた。

それが、本日のジュエルシード探しの合図だと良太郎にはすぐにはわかった。

第二十話 「オマエ倒すよ？いいよね？答えは聞いてない！」

海鳴市は『眠らない街』というわけではない。

ある一定時間を過ぎれば道路を走る車両の姿はぷつりと消えるし、深夜でも営業しているコンビニエンスストアの来客数も激減する。数字で表すなら一時間に十人も来店すれば上等だろう。

しかし、現在は見渡す限りに人はたくさんいる。

仕事帰りのサラリーマンもいれば合コン帰りの若い集団もいるし、これから夜勤を勤めようとしている人達など様々だ。

そんな中に、四色の怪人四体と一人の少女が本日のライブのための準備をしていた。

「何か妙な格好してる人達も増えたわね」

一人の少女——コハナが機材のセッティングをしながら遠目からこちらを見ていると思われる面々に目をやる。

「昼にも見たぜ。俺達のコスプレをした連中」

赤色の怪人——モモタロスが自分が愛用しているエレキギターのチューニングをしていた。

「ファンに女の子がいるのは僕としては励みになるよね」

青色の怪人——ウラタロスがマイクの高さを調整していた。

「カメの字、そんな事言うたらんと歌詞憶えんかい。今日は俺とオマエが出だしやで」

金色の怪人——キンタロスが歌詞が書かれている紙を玩味している。

「ねえねえハナちゃん。音量はこんなもんでいい？」

紫色の怪人——リュウタロスがマイクやギターに繋がっている機材で音量を調節していた。

「うん、十分よ。リュウタ」

コハナが太鼓判を押す。

リュウタロスはセッティングされているマイクを持って歌う素振

りをする。

当人に自覚はないかもしれないが、いわゆるイメージトレーニングだ。

「ところでセンパイ」

歌詞に視線を向けているウラタロスがエレキギターで弾く素振りをして、モモタロスに話しかけてきた。

「何だよ？ カメ」

「なのはちゃん達、ジュエルシードを見つけられたと思う？」

「魔法使えば何とかなるんじゃないかね？ 探索魔法ってヤツ？」

「だったらさ、何で前の時もソレ使わなかったのかな？」

ウラタロスの指摘にモモタロスのエレキギターを奏でる手が止まる。

「忘れてたんじゃねえのか？ なのははまだ、魔導師になってキャリア薄いんだろ？」

「もしかすると、そういうのに向いてないのかもしれないね」

ウラタロスが魔導師としての高町なのはを思い出す。

モモタロスも同じように思い出す。

どでかい桜色の魔力光を相手にぶつけているところしか浮かんでこなかった。

「駄目だ。戦っているところしか浮かんでこないよ」

「俺もだ」

この二体は心中で高町なのはは『巨大な一撃をぶつ放す事に特化した魔導師』という本人が聞いたら顔を真っ赤にして抗議しかねないレットルを生み出した。

「へくちっ」

私服姿の高町なのはが左肩に乗っている相棒のフェレット——ユーノ・スクライアを落とさないように、くしゃみをした。

「なのは、風邪？」

ユーノが心配げな表情でなのはの顔を覗き込む。

「う、うん。大丈夫だよ。風邪じゃないよ。多分、誰かがわたしの噂でもしたのかな？」

「噂？」

ユーノは首を傾げる。フェレットなのでその仕種は愛らしい。なのはは頷きながらも、自分が称賛であれ悪罵であれ噂をされるほどのことをした覚えはないと考えている。

何せ魔導師になる前もなつた後も彼女の表向きの立ち位置は『極平凡な一般人』なのだから。

犯罪者等を撃退しない限り、称賛はされない。

犯罪者等にならない限り、悪罵もない。

そのどちらもしていないから噂など普通は出ないのだ。

逆恨みなどの線もあるが、考え出したらきりがないので打ち切ることにした。

出発したのは夕方で、既に夜になっていた。

照明が輝きだし、昼や夕方のような眩しく激しい光がなりを潜め、優しくも妖しい光が表立っていた。

昨日まではここでタイムリミットとなり、打ち切りになるはずだが今日はというと、

「モモタロスさん達と一緒に帰るから大丈夫って言ってよかったね」

モモタロス達のライブを見てから帰ると家族にはあらかじめ告げていた。

家族の反応はというと、

『それなら安心だ』

とあっさりとして承してくれた。

高町家の面々にとってモモタロス達は『なのはが全面的に信頼している仮装集団』となっていた。

こんな事を言った中にはジュエルシード探しはもちろんだが、なのはもユーノも実を言うとき、モモタロス達のバンド『D・M・C（電王メンバーズクラブ）』を見てみたかったという隠された本音もあったりする。

ジュエルシードが見つからなかったらライブを見て帰ろうと一人と一匹で話し合ってたくらいだ。

「どうしよう？ユーノ君」

なのはが左肩に乗っている相棒に訊ねる。

「ライブまで後三十分くらいか……。もう少しだけ探してから行くか」

ユーノは電光掲示板に表示されている時計を見ながらなのはに促す。

「うん」

なのはとユーノはまた海鳴の夜の中の人ごみに紛れた。

*

時間は少しだけ遡って夕方に戻る。

早めの食事を終えたフェイト・テスタロッサとその使い魔のアルフ、そして居候の野上良太郎はマンションを出て、街中にはおらずにしばらく、その姿を巨大な樹木の枝に潜めていた。

理由とするなら、良太郎以外はあまりにも目立つからだ。

良太郎とフェイトは枝に腰をかけ、アルフはお座りの姿勢でいた。フェイトのバリアジャケットは下手をすればコスプレ衣装と誤解されるし、それを着用している彼女の容姿が良いため、変な欲望を抱えた面々に目をつけられる事も否めない。

アルフにしてもそうだ。人型ならば大丈夫だが、現在の犬か狼かわからない獣姿となるとそうはいかない。得体の知れない動物が街中を徘徊していれば警察に通報される事は間違いないだろう。

人が多い時間帯の街中ではジュエルシード探しをするには何かと制限されるものだ。

それでも、二人と一匹は街から離れようとは思わない。ただひたすら待っていた。

良太郎は、フェイトとアルフの横顔を見る。

真剣な表情で、瞳には『ジュエルシードを回収する』という意味が秘めていた。

アルフの瞳には『フェイトに目的を達成させる』という意味が秘められていたりする。

ケータロスを取り出して時刻を見る。

ここに身を潜めてから一時間が経過した。

(ふう……)

良太郎は特に何かしているわけでもなく、精神的に疲れがきたのか汗が出ているわけでもないのに額を拭った。

自分がこんななのにフェイトはどうなんだろうと良太郎の脳裏によぎった。

気になったので横を見てみると、フェイトの頭が揺れて、こちらにもたれてきた。

「すーすー」

と寝息を立てている。

良太郎は右腕にフェイトがのしかかっているので、ケータロスを取り出せないで左腕に巻いている腕時計を見てから、周囲を見回す。

まだ明るく、陽はまだ沈んでいない。

「誰だあい？寝てるのはって……」

アルフは良太郎が寝ているのだと予測していたのか、からかおうとするが、寝息を立てていたのがフェイトだったので台詞を途中で中断した。

「アルフさん、しー」

良太郎は人差し指を口元に当てる。

「わかった」

アルフも小声で了承した。

「夜になるまで、寝かせておこう」

良太郎の提案にアルフは反論しなかった。

夜となり、夕方に比べると若干ではあるが気温が下がったと野上良太郎は肌で感じた。

「う、うん」

右腕を枕代わりにして眠っているフェイト・テスタロッサに変化が生じた。

閉じていた瞼がゆっくりとだが、開き始める。

開き終わると、フェイトは周囲をキョロキョロして見回す。

現在の自分に置かれている状況を把握するためだろう。

「起きた？フエイトちゃん」

「りよ、良太郎!？」

フエイトは良太郎の顔を見ると、驚いた表情になる。

そして、自分が今まで何をしていたのか理解したようだ。

「も、もしかして……。わ、わたし寝てたの？」

口調からして眠っていた事を隠しておきたいようだ。

だが、寝ていた人間に『起きていた』とはいえない。

「まあ、その、もしかしなくても寝てたよ。二時間ほど……」

「うううううううう」

フエイトの顔は真っ赤になっていった。

「ま、まあ……。仕方ないよ。口では平気だって言っても身体は休息を求めたわけなんだし……」

「そ、そうだよ。フエイト」

良太郎とアルフは仮眠した事は恥じる事ではないと、フォローする。

「それでも、情けないよ」

フエイトはこうなるとしばらくは立ち直らないと良太郎が予測していた。

だが、フエイトが次にとつた行動は良太郎の予測を裏切るものだった。

フエイトが腰掛けていた枝から立ち上がった。

バルディッシュを握っている力が強くなっている事は良太郎の目から見てもはつきりわかった。

「でも、気分はスッキリしたよ」

良太郎はフエイトがベストには遠いが、それでも不調ではないコンデイションになったのだと解釈した。

「二人とも、行くよ」

そう言うと同時にフエイトは、眼前にある別の木の枝に向かって跳躍していき、暗闇の中へと飛翔し、溶け込んでいった。

「ぎ、良太郎。乗りな」

アルフは良太郎に背中に乗るように促す。

「うん」

良太郎は遠慮なく、アルフに乗っかる。

アルフの前足が乗っかっていた枝から離れ、フェイト同様に眼前の枝へと渡っていく。

そして、ある程度までになるとフェイトを追うように夜空の中へと溶け込んでいった。

*

「モモ様あああああ」

「ウラ様最高おおおおお」

「キン様渋すぎいいいい」

「リュウウタ君がんばってえええええ」

と海鳴の夜の一角は人が集っていた。

彼らは決して烏合の衆というわけではない。

『あるもの』を観て、共に喜びと興奮と快感を分かちあう『同士』なのだ。

彼ら彼女らが共通して観ている『あるもの』とは

「オメエらあー！クライマックスにはまだ早えぞおー！」

モモタロスの雄叫びと共に、観客の空気は更に盛り上がっていた。

「モモ様あああ!!」

「クライマックスまでお供しますううう!!」

と熱狂的なD・M・C（電王メンバーズクラブの略）ファン信者がモモタ

ロスに付いていくように叫ぶ。

「さあ、みんな！僕に釣られてみる？」

ウラタロスが間を埋めるかのように挑発をぶつける。

「ウラ様ああああ」

「私を釣りあげてえええええ！」

などと、様々な女性陣からそのような声援を受けた。

「す、すごい……。ここまでファンがいるなんて思わなかったよ」

高町なのはの左肩に乗っかっているフェレット——ユーノ・スクライアは異様な盛り上がりを見せ、独特の空気を放っているライブ場に呑み込まれそうになった。

それは自分のために左肩を貸してくれている少女——高町なのはも同様だった。

「ユーノ君、ここにいる人達みんなモモタロスさん達のファンなんだよね!？」

ライブ場の空気に吞まれながらもなのはユーノに確認するかのよう
に訊ねる。

「うん！間違いないよ！」

普通に話す声では正確に相手に全てを聞き取る事は難しいと判断
したユーノは、いつもより声量を上げてなのはに答えた。

「こういう時ってどうしたらいいのかな!？」

なのはもユーノに聞こえるかのように声量を上げていた。

実はなのは、この手のイベントに参加するのは本日が初めてである。

ユーノも初めてだが、スクライアの集落では大きな仕事に成功した
後には必ずと喋っているほど、総出でバカ騒ぎをしていることを何度
も体験しているため、それと似たようなものなんだと分析できる余裕
はあった。

「僕達もノリに乗ろう!!それが一番の選択だよ!!」

「うん！みなさん!!がんばってえええ!!」

なのはは応援しながらも最前列へと向かっていく。

小柄な体躯が幸いしたのか、大人と大人が集まって出来る隙間を利
用してすると抜けていった。

最前列にまで到達し、一人の少女と一匹のフェレットが見たものは
というと、

ギターを弾いているモモタロスとリュウタロス。

ベースを弾いているウラタロスと豪快にドラムを叩いているキン
タロスだった。

コハナは空の段ボール箱を持って賽銭のように投げて地面に転
がっている小銭及び紙幣を回収していた。「ハナさん！」

「なのはちゃん！ユーノ！」

なのははコハナの姿を見つけると、手を振り、コハナもなのはと

ユーノの姿を見つけると作業を中断して駆け寄ってきてくれた。

「もしかしてジユエルシード探しの途中？」

「はい、でも、一度観てみたかったんです」

なのはの意外な答えにコハナは首を傾げる。

「何を？」

「モモタロスさん達のライブをですよ」

ユーノがなのはの代弁をした。

コハナは携帯電話を取り出して、時刻を見る。

「そろそろ終わり、ね。なのはちゃん、ユーノ。ゆっくりねとは言えないけど、まあ息抜きに楽しんでいってね」

コハナは作業を再開した。

ユーノとなのはは最後までD・M・C（しつこいけど電王メンバースクラブの略）のライブを観ていった。

*

夜が今、海鳴市の全てを包み込んでいた。

数多く建っているビルのひとつに二つの影が空から降りてきた。

ひとつはフェイト・テスタロッサ。

もうひとつは使い魔であるアルフで居候の野上良太郎がライドオンしていたものだ。

良太郎はアルフから降りる。

「ありがとう。アルフさん」

「いいってことさ、良太郎」

アルフは軽く返した。

フェイトは二人のやり取りが終えたと判断し、本題に外れない台詞を切り出す。

「大体、この辺りだと思っただけ……」

「この辺り？」

良太郎はビルの屋上から周囲及び主に下を見る。

人間が小さく見える。確か、こういうときに良く似合う台詞があったような気がするが状況が状況なので自粛する事にした。

「これだけゴミゴミしていると探すのも一苦労だねえ」

アルフも良太郎同様に周囲及び下を見回しながら率直な感想を述べた。

「フェイトちゃん、何か手はあるの？もしかしてここでもう一度探索するの？」

フェイトは首を横に振る。

「ううん、多少だけど強引な手を使うんだ」

「強引な手？」

良太郎はフェイトが何をやろうとしているのかわからない。

「この辺り周辺に魔力流を打ち込んで強制発動させるんだ」

マリヨクリユウって何？と良太郎は尋ねたかったが話の腰を折るわけにはいかなかったので、黙って聞くことにした。

「あ。じゃあそれ、あたしがやるよ」

アルフが器用に右前足で立候補する。

「大丈夫？結構疲れるよ」

フェイトがアルフの身を気遣う。

「あたしが誰の使い魔だと思ってるんだい？」

アルフがからかいながら訊ねる。

しかし、言葉の中にはフェイトの使い魔であることに『誇り』を感じている事を聞いていた良太郎は感じ取っていた。

「じゃあ、お願い」

フェイトは自身の使い魔に任せる事にしたようだ。

「そんじゃあ!!」

アルフの体からいつものおちゃらけた雰囲気なくなった事を良太郎は感じた。

そして、何か大きな事をするということも。

「そんじゃあ!!」

魔方陣を展開させ、一筋の光を夜空に向けて撃ち込んだ。

「一体、何が始まるの？」

「説明するより見た方が早いと思うよ」

フェイトは良太郎にこれから起こる事を見る様に促した。

*

モモタロス達のバンドが終わり、あれだけ集っていたD・M・C信者達も蜘蛛の子を散らすように散り散りとなって帰っていった。

モモタロス達は機材を片付けていた。

高町なのはは携帯電話を取り出して、アリサ・バニングスもしくは月村すずかからメールが着信されていないか確認していた。

だが、なのはの希望も空しく携帯電話の画面には『メールはありません』と表示されていた。

小さく息を吐く。

「なのはちゃん、どうしたの?」

マイクを箱に収納し終えたコハナがなのはの側に歩み寄る。

「あ、いえ、その……。アリサちゃんやすずかちゃんからメール来てなかったんで、そろそろお稽古も終わってますし……。来てるかな、と思っただんですけど……」

「……早く仲直り、できるといいね」

コハナは考えた挙句に飾り気のない言葉で励ましをしてくれた。

「はい」

なのはは携帯電話を上着のポケットにしまいこみ、モモタロス達の手伝いをする事にした。

(なのは、僕は調べてくるよ)

ユーノが左肩から飛び降りて、地に足を着けると同時に念話の回線を開いてきた。

(ユーノ君、大丈夫?)

(うん、それに僕じゃこの片付けは手伝えそうにないし……)

フェレットが持つていけるような道具はここには一つもない。

ユーノの判断は正しいとなのはは理解した。

(わかった。ユーノ君、気をつけてね)

(うん!)

そう言うのとフェレットは全速力で駆け出した。

四本足なので、人間よりはるかに速かった。

「なのはちゃん。これ……。あれ?フェレット君は?」

五百ミリリットルのジュースを三本持っていたリユウタロスがな

のはに一本渡してきた。

「あ、ありがとう。ユーノ君はジュエルシードを探してくるって……」

「そうなんだ」

そう言いながらリュウタロスはペットボトルのキャップを回して開け、勢いよく口の中に含んだ。

「おいしー!!」

至福の声を上げた。

なのはもペットボトルのキャップを回して開けて、口に含もうとしたときだ。

強力な魔力が天に向かって打ち込まれたようなものを感じた。

満月が出ていたのに、雲が急に出現して隠し始めた。

それはまるで、地上で起こる醜いものを見せない配慮のようにも、なのはには見えた。

その直後に雷が鳴り始めたが、雨が降る兆候はない。

ここにはいない相棒

ユーノ・スクライア

が結界を張ったのだろう。

以前、月村邸で張ったものどこか似ていると、なのはは思った。

「レイジングハート！お願い!!」

レイジングハートを掲げ、『極平凡な一般人』から『魔導師』へと切り替わる。

私服からバリアジャケットへとなり、右手には杖の姿になっているレイジングハートが握られていた。

やがて人工的に発生した現象は収まり、後には海鳴市に青色の光が天に向かっていくという光景だった。

その天に昇る光が何なのかは、なのはにはわかった。

そして、この突然の異常気象を引き起こす原因となる魔力を打ち込んだ者にも目星がついていた。

「それじゃ、みなさん！行ってきますー！」

なのはは頭を下げて、飛行魔法を使わずそのまま走り出した。

「あ、なのはちゃん待って！僕も行くよー！」

リュウタロスが後を追うように走り出した。

「見つけたー！」

天に向かって放たれている一筋の青い光。

それがジュエルシードだという事をフェイト・テスタロッサは確信していた。

そもそもこのような状況を起こさせるために、天に向かって魔力を放ったのだから。

「前々から思ってたけど、魔法って何でもありだね」

横にいる野上良太郎がぼかんと口を開けて、そんなことを言った。

「そうかな？ 様々な効果を望むんだっつらより複雑な構築式を魔法陣に描かないと駄目なんだよ」

「自分が望む効果を魔法として発動させたいなら、あらかじめ魔法陣に描かないといけないってこと？」

「そうだね。土壇場の思いつきで描いても、悲惨な目に遭う方がほとんどだよ」

それで魔法として機能する事が出来たら構築した魔導師は天才だろう。

「そうなんだ。てっきり魔力さえあれば何でも出来るんだと思ってたよ」

良太郎の一言はまさに『魔法』というものを目の当たりにした素人の裏表のない意見だと思った。

「フェイトお、良太郎。講義の最中に悪いんだけどさあ。アイツ等も近くにいますよ」

アルフが言う『アイツ等』というのは誰を差しているのか、すぐにはわかった。

「……早く片付けよう。バルディッシュュ！」

「シーリングフォーム。セットアップ」

バルディッシュュが自動音声を発してからデバイスモードからシーリングモードへと形態を変化していく。

「良太郎、アルフ。離れててね」

フェイトが注意するより早く、良太郎とアルフは離れていた。

「大丈夫！もう離れてるから！」

「遠慮なくぶっ放していいよ！フェイトオ！」

二人が大声で叫んでいるのを聞き取ると、フェイトは獲物を睨みつけながら、封印魔法の射出態勢をとっていた。

本気ではないが、まず一発放つ。

金色の線の細い魔力光が青い光の柱に向かっていく。

(距離は問題なし、あとは更に強い一撃を放つだけ！)

「ジュエルシード、シリアル19！」

本格的に封印に取り掛かることにした。

「きれいだなあ。あれがジュエルシードなんだあ」

青い光の柱を見上げていたリュウタロスを他所に高町なのははどこか別の場所で結界を展開しているユーノ・スクライアからの念話を受けていた。

(なのは、発動したジュエルシードは見える？)

(うん、すぐ近くだよ)

本当に近くなので、なのはは即答した。

(あの子達もすぐに近くにいるんだ。あの子達よりも先に封印して！)

(わかった！)

念話の回線はどちらが先というわけでもなく切れた。

なのはの意思を汲み取ったのかレイジングハートがシーリングモードへと形態を変えていく。

金色の光が発動したジュエルシードに向かっていくのが視認できたので、焦りながらも一発を放つ。

「リュウタ君、危ないから少し離れていてね」

「うん！わかった！」

リュウタロスはなのはより数メートル後方。それでも、いざというときに備えてを考慮しての距離だ。

「リリカルマジカル！」

先に封印するという思いがなのはの頭を支配していた。

レイジングハートから先程の何倍もある桜色の魔力光が発射され

た。

*

「封印!!」

*

二人の少女が叫ぶと同時に、金色と桜色の光がジュエルシールドにぶつかった。

ジュエルシールドは浮揚してはいるが、それ以上の動きはない。

やがて二つの光は消失し、そこに残っていたのは浮揚しているジュエルシールドひとつだけだった。

「ジュエルシールドは封印されてこそ、初めて安全に手にする事が出来るんだって言ってたな」

白い光の球体は、落ちてくる雷にまぎれてこの場所に来ていた。

その球体は羊型のイマジジン——シープイマジジンへと姿を変えていった。

「俺じゃ、どう転んでも無理だな」

イマジジンには一度発動したジュエルシールドを封印するなんてことはできない。

「さあてと、封印をした魔導師が来る前に……」

ジュエルシールドがシープイマジジンの手に収まろうとしていた時。

「誰か来る、か。仕方ない。もう少し様子を見るか」

シープイマジジンはまた、球体になって夜空へと溶け込んだ。

*

リュウタロスは隣にいる高町なのはと共にジュエルシールドに向かって歩いていった。

「なのはちゃん、どうしたの?」

「え? っ少しだけ昔の事、思い出してたんだ」

「昔の事?」

リュウタロスが首を傾げているが、両足は『歩く』という事を忘れていない。

「うん」

なのも頷くが、リュウタロス同様に立ち止まらずに歩いている。

やがて、一人と一体は浮揚しているジュエルシードの前でその足を止めた。

「なのはー！」

先程まで別の場所まで結界を張っていたと思われるユーノ・スクライアがなのはとリュウタロスの後から全速力で走り寄ってきた。

「あ、フェレット君」

「なのはー早く確保をー！」

ユーノはリュウタロスの左肩に乗っかって、なのはに次の行動を指示する。

「そうはさせないよ!!」

頭上から声がしたので、見上げてみると何かが落下してきた。

高町なのはがジュエルシードに向かって一歩一歩と歩みを進めている頃。

ジュエルシードを確保をするために飛行魔法を使って、先に向かったフェイト・テストアロツサとアルフを野上良太郎は追いかけていた。

全力疾走に近い速度で走っている。

何かの影響なのか、ここまで一度も人と出会っていない。

深夜とは呼べない時間帯でこれは異常だと思ったが、今はそんなことよりもフェイト達の向かった場所に向かうことが最優先事項だ。

ジュエルシードのある先に誰もいないならいいが、そんな希望的観測は持つべきでない和海鳴温泉の一件で嫌というほど思い知っている。

ビル屋上からみて目測だが、自分がいたビルからジュエルシードまでの距離は一キロもないはずだが、焦っているためか妙に長く感じてしまう。

電灯とは質が違う光が見えた。青い光が、急に弱まりだしたていた。

「あれだー！」

良太郎は進路を決めて、駆け出す。

それから時間にして一、二分後に良太郎は戦場となる場に着いた。

良太郎が見たものは、高町なのはの頭上から落下して奇襲を仕掛け

たアルフが、なのはを守るようにして

現れたリュウタロスが発動した緑色の結界が強固なのか砕く事を諦めて、後方へ滑るように下がるといふ光景だった。

リュウタロスに結界を張るなんて芸は出来ないことを良太郎はわかっていたので、『リュウタロスがなのはを守る結界を張った』ように見えるトリックを見抜くのは簡単だった。

フェレットであるユーノ・スクライアがリュウタロスの肩か頭にもあらかじめ乗っかっており、そこから発動させたものだ。

下手に声をかけるわけにはいかないので良太郎は事の成り行きを見守る。

なのはとリュウタロスとユーノを覆っていた結界はガラスのように砕ける。

なのはは電灯の上に立っているフェイトを見て、驚きの表情をしていた。

良太郎は『電灯に立っているフェイト』と『結界の中に覆われているなのは』の両方を見ることが出来る位置に立っていたので、なのはが何故、あのような表情をしたのかがわからなかった。

考えられるとしたら、あの結界は防護壁としては申し分ないが『壁』のため、前方の視界を遮断してしまうものなのかもしれない。

そうなれば砕けた瞬間に視界がクリアとなり、目に入ったものが『電灯の上に立っているフェイト』で驚く事も領ける。

なのはとフェイトがしばらく互いを見つめ合う。

「この間は自己紹介できなかったけど……。わたし、なのは。高町なのは。私立聖祥大付属小学校三年生……」

先に行動を起こしたのは、なのはだった。

だが、フェイトは良太郎経由でなのはの名前は知っていた。

フェイトはバルディッシュを下ろす。

「サイズフォーム」

バルディッシュから黄金の鎌が出現する。

電灯から離れ、宙に浮かんで一定の距離をとるようにして下がる。

そして、構えてなのはに向かって突っ込んでいった。

「フライヤー・フィン」

レイジングハートが反応し、なのはの両足に桜色の双翼を展開させ、フェイトと同じように宙へと舞台を移した。

それは他者からの干渉を拒絶しているかのようにも見えた。

「良太郎！」

「良太郎さん！」

ユーノを乗つけたリユウタロスが走り寄ってきた。

「リユウタロス、ユーノ。ジュエルシードはどうなってるの？」

なのはとフェイトはジュエルシードそっちのけで戦闘を始めているので、気になっていたので訊ねた。

「フェイトとガキンチョ（なのはのこと）が封印状態にしたよ」

答えてくれたのは獣姿のアルフだった。

「じゃあ、今は安全なんだ」

良太郎のその言葉にリユウタロス以外の二匹が首を縦に振る。

「石コロはそうかもしれないねえけどよ。アイツ等のうち、どっちかがコイツを手に入れるっ点では安心できねえぜ」

そう言いながらその場にやってきたのは赤色のイマジジン——モモタロスだった。

「モモタロス、お片づけはどうしたの？もしかしてサボった？」

「なわけねえだろ！カメラやクマやコハナクソ女に急かされて来たんだよ！オメエ一人じゃ心配だ、って言ってな。んで、今どうなってんだよ？」

「なのはちゃんとあのワンちゃんの飼い主が喧嘩してるよ」

リユウタロスが簡潔に説明してくれた。

モモタロスはリユウタロスが指した『ワンちゃん』をみる。

「げっ……」

さりげなくアルフから距離をとろうとするモモタロス。

「モモタロス、さっき言ってたけど、このジュエルシードをなのはちゃんかフェイトちゃんのどちらかが手に入れるところでは安心できないって言ってたけど、どういう意味？」

モモタロスはアルフから良太郎に顔の向きを変える。

「ああ、悪い悪い。本題はそつちだ。この近くにさつきまでイマジンの臭いがしたぜ」

「イマジンが!？」

良太郎、モモタロス、リュウタロスを中心にその場の空気が変わった。

「ねえねえ。イマジンは何でここに来たのかな？」

「バカ。ここには何かがあるんだ？小僧」

「えーつと、ジュエルシード」

「そう。今回のイマジンもジュエルシードを狙っているんだ。フェイトちゃんと言うには契約者はこの世界の人間じゃない可能性が高いって……」

『この世界』という表現はあまり適切とはいえないが、他に適当な表現がないのでこう表現する事にした。

「この世界ってどういう事だよ？良太郎。まるでオメエと一緒にいるガキと犬は海鳴《ここ》の住人じゃねえみたいな言い方じゃねえか」「そう言ってるんだよ。といつても、僕達のような特殊すぎる方法でこの世界に来ているとは思えないけどね」

あらゆる世界には共通して『時間』が存在し、そこには『時の空間』が当然ある。

良太郎達は自分達の世界の『時の空間』で十年前に遡り、フェイト達がいる世界の『時の空間』を繋いでいる『橋』を経由して来たのだ。フェイト達がどのような方法で来たかは知らないが、自分達と同じ、もしくは似た方法で来たとは考えられないことは確かだ。

「で、どうするよ？良太郎」

モモタロスが頭をかきながら訊ねる。

「僕達、なのはちゃん達の喧嘩に手を出しちゃいけないんだよね？」

リュウタロスは確認するように聞いてきた。

「うん。あの二人のことはどんな結果であれ、あの二人が決めるべきだと思うんだ。僕たちが出来ることはあの二人がきちんと向き合うための手伝いくらいだよ」

「俺達、目立たねえじゃねえかよ」

モモタロスがそんな自分の立ち位置に不満がある。『目立ってカッコよく』が彼のポリシーなのだから仕方ないといえば仕方ない。

「なのはちゃん、大丈夫かなあ」

「大丈夫、だと信じようよ。リユウタロス」

リユウタロスはユーノと共に空へと舞台を移した別世界の友達を心配していた。

「フェイト……」

アルフがそう心配げな声で呟いたのを良太郎は聞き逃さなかった。夜空を二人の魔導師が舞っていた。

白をメインとするバリアジャケツトを着用し、レイジングハートを手にしてる少女——高町なのはと黒をメインとするバリアジャケツトを着用し、バルディッシュをサイズフォームにしている少女——フェイト・テスタロッサだ。

桜色と金色の魔力光が飛び交っており、二人の表情に余裕はない。この若さで『油断すれば命取り』ということを本能で悟っているのだろう。

フェイトがバルディッシュを振りかぶって、なのはの背後に回りこむ。

「あー」

なのはより先にレイジングハートが反応して、フェイトの背後に回りこんだ。

「!？」

フェイトは一瞬だが、驚愕するがすぐに次の攻撃に転じるための策を頭の中で練ろうとする。

「ディバインシューター」

レイジングハートがそれを遮るかのように先端に桜色の魔力球を練り上げていく。

一定量まで練り上げていくと、なのはの指示で発射する。

一直線にフェイトに向かっていく。

バルディッシュがフェイトより速く反応する。

「フォトンランサー」

金色の魔力球を練り上げていくが、十分な量に到達する前に発射する。

バルディツシユは主を守るために相手の砲撃を弾くか、良くて撃ち消す事が出来ればいい、つまり反撃する事が目的ではないと判断したのだ。

バルディツシユの目論見どおり桜色の砲撃は打ち消す事に成功した。

だが、フェイトの立ち位置を不利な方向に招く事になった。

上下でいうなら、なのは上に立ち、フェイトは下に下がるかたちとなっている。

両者同時に各々のデバイスを構える。

次の一撃に備えようとフェイトが策を練ろうとしたときだ。

「フェイトちゃん！」

なのはが構えながらも話しかけてきた。

「!？」

フェイトは目を大きく開いてしまう。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど！だけど、話さないと言葉にしないと伝わらない事もきつとあるよ！」

なのはの言葉にフェイトは耳を傾けているようにも見える。

「ぶつかりあって競い合うのも仕方ないかもしれないけど、だけど……」

なのははフェイトから視線を離さない。まるで、射撃手のように。

「何も分からないままぶつかりあうのは……、わたし、嫌だ!!」

それはなのはの心からの叫びだった。

フェイトととて無感情な少女ではない。

一人の少女が面と向かって自分に臆することなく、主張してきたのだ。出来るなら応えたいという気持ち芽生えてしまう。

それでも、フェイトは自分を主張しようとはしない。

「わたしがジュエルシードを集めているのはそれがユーノ君の探し物だから……、ジュエルシードを見つけたのはユーノ君でユーノ君はそ

れを元通りに集めなおさないといけないから、わたしはそのお手伝いで。だけど、お手伝いをするようになったのは偶然だけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めている。自分の暮らしている街や自分の周りの人達に危険が降りかかったら嫌だから!!」

なのはは一拍置いてから更に決意を秘めた眼差しをフェイトにぶつける。

「これが、わたしの理由!!」

ぶつけられた側は完全に蛇に睨まれた蛙になっていた。

バルデイツシュを構えているが、それはすでに本来の意味をなくしつつある。

「わたしは……」

フェイトもまた、なのはに応えようとし始めた。

両目を閉じてから、もう一度開いてから唇を動かそうとする。

なのはも、下で見上げて観戦している野上良太郎、モモタロス、リユウタロス、ユーノ・スクライアもフェイトの本音が聞けると思った。

「フェイト！答えなくていい!!」

フェイトの使い魔であるアルフがそれを遮った。

「アルフさん!!」

「テメエ、犬女!!」

フェイト・テスタロッサが高町なのはに対して、心を開こうとした時を邪魔したアルフを野上良太郎とモモタロスは睨みつけた。

全員の動きが止まり、アルフに視線を向ける。

アルフは一人と一体に臆することなくフェイトに諫言を続ける。

「優しくしてくれる人達のところ、ぬくぬくと甘ったれて暮らしているガキンチョになんか何も教えなくていい!!」

その一言がなのはに対して、悪意を込めた一言だという事はそこにいる誰もが理解した。

その証拠としてなのはは、ショックを受けた表情をしていた。

「あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよー」

その一言が硬直していたフェイトの身体と精神を動かした。

ジュエルシードに向かって一直線に向かっていく。

ショックを受けていたなのはも、フェイトを追いかけるように降下していく。

やがて、二人は並び同時にデバイスがジュエルシールドに向かって突きつける。

レイジングハートとバルディッシュが接触する。

所有者である少女二人は内心、破損がなくて安堵する。が、

二つのデバイスに、ほぼ同時に亀裂が走った。

今まで、静かに浮揚していたジュエルシールドがその衝撃で暴走を始めた。

雷雲を貫き、光の柱が発生する。アルフが強引に発動させたときは比べ物にならない大きさだった。

その衝撃で、その場にいた面々は吹っ飛ぶ。

こうなると良太郎達、別世界の人間

よそ者

にはどうしようもない。

ジュエルシールドを封印できる魔導師に委ねるしかないのだ。

吹っ飛んだ面々の中でいち早く、次の事を考えていたのはフェイトだった。

破損したバルディッシュを気遣いながら手袋の装飾品状態に戻すと一旦下がり、魔力を利用して加速し、ジュエルシールドを両手で覆う。

吹っ飛ばされた面々は大した怪我もなく、すぐに起き上がる。

「みんな大丈夫?」

良太郎が起き上がりながら他の面々の安否を確認する。

「おお、いきなりでビビッたけどよ。無事だぜ」

「僕も大丈夫ー」

「僕もリュウタロスが護ってくれたから大丈夫です」

モモタロスが身体についている汚れを叩きながら起き上がる。

リュウタロスは両手で護っていたユーンを自分の左肩に乗つける。

二体と一匹は確認できた。

「アルフさんは?」

「……あたしも無事さ。そんな事よりフェイトは!？」

「あそこにいるよ……って、ええ!？」

良太郎はフェイトのいる場所を指差しながらも驚いた。

「どうしたんだよ？良太郎って、おい!？」

モモタロスもフェイトの側にいるそれを見て驚かずにはいられなかった。

「なのはちゃん!」

「なのは!」

リュウタロスとユーノがフェイトの側にいるそれを見てから距離が近くて、すでに起き上がっているなのはにその場から離れるように叫ぶ。

「バカヤロオ!!:下手な事言うんじやねえ!」

モモタロスがそんな一体と一匹を叱責する。

自分達が動けばフェイトの側にいるそれが何をしでかすかわからないからだ。

距離が近ければこちらから行動を起こす事も出来るが、自分達はフェイトやなのははからかなり離れている。

それの方が自分達が行動を起こすより速く、フェイトとなのはに危害を加える事が出来るだろう。

フェイトは瞳を閉じ、ジュエルシールドの暴走を抑える事に集中しているために気づいていない。

自分の横にいるそれ——シープライマジンがいる事を。

「おい、良太郎。何でイマジンがここにいるんだよ?」

モモタロスが何故、先程までいなかったはずのイマジンが急に現れたのか理解できない。

「モモタロスう、お鼻でわからなかったの?」

リュウタロスが自慢の嗅覚でわからなかったのか訊ねる。

「いつでも嗅げるってわけじゃねえよ。結構、イマジンの臭い嗅ぐのって神経使うんだぜ」

あの暴走の中ではそちらに目がいつてしまつて、『嗅ぐ』ということを失念していたのだ。

「多分だけど、あの暴走のときにフェイトちゃんの側にいたんだと思う。あの姿じゃなくて球体の状態でね」

球体姿のイマジンは光のようなもので、巨大な光の側にいればそれを判別する事は限りなく難しい。紛れる事が可能だ。

ジュエルシードの光が収まるタイミングを見計らって、球体姿から怪人姿へと変えていけばいいというわけだ。

「吹っ飛ばされても、きちんと見ていればこんな事にはならなかったのに……」

「良太郎……」

「誰もジュエルシードが暴走するなんて思いも寄らなかった事なんです。良太郎さんの責任じゃないですよ」

良太郎は自分に非があるわけでもないのに、自身を責めるような事を言う。モモタロスはただ名前を呟くだけで、ユーノは良太郎に励ましという言葉を送る。

「なんとかならないの？良太郎」

リュウタロスが今の状況を打破するためにはどうしたらいいかを良太郎に尋ねる。

「……………」

良太郎はただ、シープイマジンを睨むしかなかった。

「停まれ。停まれ！停まれ！」

フェイト・テスタロッサは真横で処刑執行人のように佇んでいるシープイマジンの事などに目もくれずに、両手で覆っているジュエルシードを抑える事に集中していた。

両手から光が漏れ出す、その力はどんどん弱まっていく。

それはフェイトの力で封印状態に戻っているという証明だった。

「停まれ。停まれ！停まれ！」

フェイトの大声ではないが、魂の叫びとも聞こえる言葉に応えるかのように彼女手から漏れているジュエルシードの光は弱まっていた。その光はどんどん小さくなっていく。

「停まれえ！」

漏れ出す光はなくなり、ジュエルシードはフェイトの手の中で封印

状態に戻った。

「はあ…はあ…はあ…」

フラフラになりながらも、立ち上がろうとするフェイト。

野上良太郎達から離れた位置にいたアルフが獣姿から人型になって寄ろうとするが、途中で止まった。

(アルフ?)

フェイトには何故、途中で止まったのか理解できなかった。

「今だ！ジュエルシールドをもらったぞお！そのためにお前が封印するのを待ってたんだからなあ！」

「え？」

フェイトの左耳にそのような言葉が入ってきたので顔を向ける。

ごりつとフェイトの額に冷たいものが当たった。

それはシープライマジンが持っているオートマチック型の専用銃だった。

「さあ、おとなしくジュエルシールドを渡しな。ひとつなんて小さい事は言わねえ。お前が持っているやつ全部だ！そのガキ！お前のも全部だ！」

シープライマジンもフェイトが所持するジュエルシールド以外にも高町なのはが持っているジュエルシールドも要求してきた。

「フェイトオー！」

アルフが全速力で駆けるが、シープライマジンが銃の引き金を絞り、一発放つ。

その弾丸は実弾ではなく、フリーエネルギーで構築されたものだ。

「動くなよ？動けば、お前のご主人様の脳天に穴が開くぜ」

「くっ！」

その一言でアルフは金縛りにあったかのように動きを停めた。

他の面々も動こうとはしない。自分達にも向けられた言葉だと受け止めているからだ。

「おい、そこのガキ！こっち来い！早くしろ！」

シープライマジンのはなを呼びつける。

「え、は、はい」

レイジングハートをぎゅつと握り締めながら駆け寄る。

「さてと、ジュエルシードを渡しな。渡せばこのガキもお前も、そしてここにいる全員に危害を加えねえ」

「ほ、本当ですか？」

「イマジンは約束を守るさ」

フェイトとなのははシープライマジンが放ったその言葉を信じるしかなかった。

このとき、二人の思いは不思議と一緒だったりするが、それを二人の魔導師が知る事はなかった。

「あのヤロオ、調子に乗りやがって!!」

モモタロスは現在この場のイニシアチブを握っているシープライマジンを睨みつけながら、拳を強く握り締めていた。

「僕、もう我慢できないよ!!」

リュウタロスもモモタロス同様に堪忍袋の緒が切れかけている。

「二人とも、落ち着いて！僕だってこのままで済ませる気はないから」

良太郎は静かだが、確かにシープライマジンに対して怒りをもっていた。

「良太郎さんの言うとおりですよ！ここは様子を伺いましょう」

ユーノも卑劣な手口を使うイマジンに怒りを覚えながらも、冷静に努めようとする。

現在、シープライマジンは二人の魔導師にジュエルシードを要求している。

どちらが人質かはわからないが、こちら側にしてみれば二人とも人質にされているようなものだった。

「これからどうなるんだよ？良太郎」

モモタロスが良太郎に歩み寄って尋ねる。イマジンが二人に要求している事が幸いなのかこちらの細かな動きまでは把握していないようだ。

「あのイマジンのことだから、なのはちゃんはフェイトちゃんを人質にされているかもしれない。フェイトちゃんは、なのはちゃんを人質にされているかもしれない」

「あの二人、仲間でもダチでねえぜ。通じるのかよ?」

二人が友人等、つまり敵対関係以上ならばその方法は効果的だ。

「あの二人が、互いを見殺しに出来ると思う?」

「無理だよ。なのはちゃん、すごく優しいもん!」

リウウタロスもシープライマジンの目を盗んで歩み寄っていた。

「それはフェイトちゃんも同じだよ。誤解されやすいけど、あの子も優しい子だからね」

「あ、皆さん見てください。なのはとあの子が同時にジュエルシードを渡しましたよ」

全員がユーノの一言で顔を向ける。

そこにはバルデイツシュ及びレイジングハートに収められていたジュエルシードを全部渡すフェイトとなのはがいた。

「よし、これで全部だな」

シープライマジンは満足すると、それを全て口の中に放り込んだ。

愛用の銃のグリップでフェイトの側頭部を殴りつけた。

元々、満身創痍で立っているのもやつとの状態なので殴られるだけで意識を飛ばされてしまった。

「フェイトオ!!このお!!」

今まで金縛りとなっていたアルフは怒りに我を忘れて、飛び掛る。

「バアカが」

そう言いながら、銃口をアルフに向けて引き金を絞る。

フリーエネルギーの弾丸がアルフの腹部に直撃し、アルフは前のめりに倒れた。

「フェイトちゃん!」

ぐったりと倒れているフェイトになのはは駆け寄ろうとするが、シープライマジンが遮った。

なのははキツとありったけの勇気を振り絞るようにして睨みつける。

だが、シープライマジンは臆する様子はない。

「どうして!ジュエルシードを渡せばフェイトちゃんに危害を加えないって!」

なのはの抗議もシープライマジンはどこ吹く風で聞き流している。

「イマジンは約束を守るんじゃないんですか!？」

その言葉を確かにシープライマジンは言った。

だが、彼は純真な少女の心を壊す事を喜びとするような下衆な大人な笑い出した。

「確かに、お前の言うようにイマジンは約束を守るさ。契約者とはな」
そして、銃口をなのはの胸元に向ける。

「だが、お前は契約者ではないんで守る必要はねえんだよ」

引き金を振り絞った。

「きゃあああああああああ」

というなのはの悲鳴がこだました。

「……………」

「……………」

良太郎は拳を強く握り締め、シープライマジンに向かって歩き出す。
それはとても静かだが、一步一步が怒りを表すかのように凄みがある。

隣のリュウタロスも普段のおちやらけた雰囲気は一切なくなっている。

一人と一体の背中を見て、モモタロスは恐れた。

多分、自分が知る限りで最も怒らせてはならない者達が怒っているのだ。

「おい、そこの羊野郎!」

モモタロスが叫ぶ。

「オメエ、終わったぜ。ま、当然の結果ってやつだ。諦めろ」

それはモモタロスがシープライマジンにぶつけた口での攻撃だ。

シープライマジンは今から何が起るのかわかっていない。

良太郎はチャクラを使用してデンオウベルトを具現化させ、歩きながら腰に巻きつける。

「良太郎!」

リュウタロスが良太郎に顔を向ける。瞳に怒りの炎を燃やして。

「うん、行くよ!リュウタロス!」

パスをズボンのポケットから取り出す。

「変身！」

パスをデンオウベルトのターミナルバックルにセタッチする。プラット電王へと変身し、フォームスイッチの紫色を押し。

今までのミュージックフォンとは違うミュージックフォンが鳴り出す。

軽快でダンスでも踊りたくなるようなテンポだ。

ターミナルバックルにもう一度セタッチする。

「ガンフォーム」

自動音声が入ると、リュウタロスが紫色の球体となってプラット電王に入り込む。

入り込むとその直後に、オーラアーマーが出現する。ソード電王が使用していた状態に似ているが、胸部が展開し、展開した裏側に宝玉——ドラゴンジエムを挿んだ龍の前脚を模したデザインが現れる。

紫色の龍を模したかのようなものが眼前まで走り、形状を整えて電仮面となる。

立ち止まり、その場でぐるりとターンしてから右親指と右人差し指のみを立ててシープライマジンを指す。

「オマエ、許さないけどいいよね？」

先程とは違う足取りで、デンガツシヤーの左パーツを投げて、その瞬間に右パーツ一個と左パーツ一個を横連結させる。

余った右パーツを横連結させたパーツ後ろの斜めに連結させる。

先程投げた左パーツのひとつが三つのパーツを連結させた状態のデンガツシヤーの先端に連結される。

銃の姿になると、フリーエネルギーによって武器らしい大きさとなる。

デンガツシヤーガンモード（以後：Dガン）の銃口をシープライマジンに向ける。

「答えは聞いてない!!」

一方的かつ無慈悲な回答をした電王ガンフォーム（以後：ガン電王）は引き金を絞る。

一発ではなく、数発のフリーエネルギーの弾丸がシープライマジンに直撃する。

(モモタロス、アルフさん。なのはちゃんとフェイトちゃんを！)

深層心理の中にいる良太郎がモモタロスと起き上がろうとしているアルフになのはとフェイトの保護を頼む。

「わあったよー！」

「うんー！」

ガン電王はひたすらDガンの引き金を絞る。

弾丸は一直線にシープライマジンにすべてヒットする。

「このヤロオ!!」

シープライマジンも銃で応戦するが、銃のスペックの差なのかそれとも戦闘力の差なのかガン電王にダメージを与える事が出来ない。

「ちよこまか逃げるなあー！」

苛立ちながらも距離を詰めながら、銃口を向けるシープライマジン。

ガン電王は踊るようなステップでDガンから弾丸を放ちながら、距離を縮める。

「やーい、下手くそー！」

挑発を入れることも忘れない。

ガン電王は相手の弾丸を全てかわしながらも、きちんと反撃している。

それはまるでダンスを踊っているかのように。

相手側にとってこれほどやりづらい事はない。

隙だらけのように見えて、その実まるで隙がないのだから。

「よくもなのはちゃんに酷いことしたなー！」

怒りを込めた台詞と同時に更に一発を放つ。

やがて互いの距離が間近となる。

シープライマジンの銃はガン電王の胸元に。

ガン電王のDガンもシープライマジンの胸元だ。

「先に撃った方が勝ちってヤツだなあ」

「撃てば?」

勝ち誇ったシープライマジンの言葉に対して、ガン電王の言葉は挑発

とも投げやりにも捉える事が出来た。

「だったら撃つてやらあー！」

シープライマジンの引き金が絞られた。同時に勝ちを確信した。相手にしている者が常識範囲内常識範囲外まともな奴なら右か左に避けるが、それには必ず動作が出る。それはつまり、相手に『こちらに避けますよ』と教えるようなものだ。

だが、シープライマジンの相手が常識範囲外まともでない奴ならばどうなのだろう。

ガン電王は右にも左の避けず、上体を反らして避けながらもDガンを握っている右手を感覚でシープライマジンの頭部に狙いをつけている。

「ははははは、バーカバーカ!!」

挑発と嘲笑を混ぜて発しながら、引き金を絞った。

「ぶほああああ」

銃を手放し、大きくのけぞり仰向けになって倒れた。

むつくりと反らした上体を元に戻す。

「く、うううう。倒すのはやめだ！目当てのものは手に入れている。後は契約者に渡せばいいんだ！お前を倒す必要なんてない！」

シープライマジンは戦う事よりも目的を達成させる事を選んだ。

ガン電王はDガンを左手に持ち替え、右手にはパスが握られていた。

「逃がさないよ?」

ガン電王は確認するかのように言う。

「逃がしてくれ!もう金輪際、お前達には手を出さない!」

シープライマジンの命乞いに対してガン電王の判決はというと、

「答えは聞いてない!」

そう言うと同時に、パスをターミナルバックルにセタッチする。

「フルチャージ」

Dガンのグリップ部分と両肩付近にある宝玉——ドラゴンジェムにフリーエネルギーが伝導される。

今まで、片手で持っていたDガンを両手で握り、狙いを定める。

Dガン先端に巨大な、弾丸とは思えないほど巨大なフリーエネルギーの球が練り上げられていく。

大きさが一定になると判断すると、引き金を絞る。放たれた球は一直線にシープイマジンに直撃する。

許容範囲以上のフリーエネルギーを外側から叩き込まれたシープイマジンはその原型を留める事が出来ずに爆発した。

飲み込んだと思われるジュエルシードが道路に飛び散った。

「やったね！良太郎」

怒りが収まったのかりユウタロスの声色が普段のものになっている。

だが、シープイマジンは跡形もなくなったのではなく、構成されている肉体のイメージが暴走して巨大化が始まったのだ。

「ギャオオオオオオオオオオ」

シープイマジンは六つの目を持って三本の角を生やした大地を駆るものを象徴した姿、ギガンデスヘルとなった。

「良太郎、別世界別世界でも呼べるよね？」

（もちろん、ウラタロスも呼んでたからね）

そう言うと同時に空間が歪みデンライナーとは違う列車がレールを敷設、撤去しながらガン電王に向かってきた。

第二十一話 「電光石火と時の庭園」

電王にはそれぞれの車両つまり、『時の列車』が存在する。

モモタロスの力を纏っているソード電王にはデンライナー・ゴウカ。

ウラタロスの力を纏っているロッド電王にはデンライナー・イスルギ。

キンタロスの力を纏っているアックス電王にはデンライナー・レッコウ。

そして現在ギガンデスヘルと戦おうとしている、リュウタロスの力を纏っているガン電王にも先の三人のように『時の列車』がある。

名をデンライナー・イカヅチという。

空間が振れて歪みが生じ、そこから線路が敷設され、列車が走ってきた。

その列車はガン電王の電仮面に似た車体前面をして二両編成となっており、ガンフォームに変身する際のミュージックフォーンを鳴らしながら、こちらに来る。

「来た来た」

ガン電王はそう言いながら、指で何がしかの合図をする。

どこからともなく、マシンデンバード（以後：デンバード）が自動で走ってきた。

「よつと」

飛び乗って、デンバードのグリップを握り、アクセルを噴かす。

デンバードが真っ直ぐに走っているイカヅチに並び、更にアクセルを噴かして車体を浮かす。

フリーエネルギーなのか、それともデンバードと『時の列車』には磁力のようなものがあるのか、ガン電王を乗せたデンバードは、吸い寄せられるようにイカヅチの一両目上部に接続される。

それでも、ガン電王のすることは変わらないのか、更にグリップをまわす。

イカズチの速度が上がり、あらかじめ敷設されている線路に向かっ

て突っ走る。

線路は地上ではなく、空になっているがそんなことは関係ない。

(これ以上、街を滅茶苦茶にさせるわけにはいかない。リュウタロス)

「うん！わかつてる。僕に任せて！良太郎！」

ガン電王がそう言うと同時に、更に空間が振れ始めて歪み、そこから『時の列車』が走ってきた。

レッコウ、イスルギ、ゴウカだ。

それぞれが各々の次の役割を理解しているのか、併走している。

なお、これは余談かもしれないが野上良太郎やイマジン四体、コハナ、ナオミ、オーナーがたむろしている非戦闘車両は切り離されている。

「よーしー行くよー！」

イカツチの二両目が外れる。

それが合図なのか併走していたゴウカ、イスルギ、レッコウがそれぞれの役割を果たそうとする。

レッコウが先に走り出し、イカツチの一両目と連結する。

続いて、イスルギがその後ろに連結される。

そして、他の二台が一両編成なのに対して、四両編成となっているゴウカが連結されていく。

仕上げとして、余ったイカツチの二両目がゴウカの四両目に連結される。

全てが連結されると、イカツチの車体前面が動き出し、それは龍の頭部が出現する。

連結されているため、後続車両にも変化が生じる。

二両目のレッコウは車体側面からサイドアックス——昆虫の足のような外観の斧が（右に二本、左に三本）展開され、三両目のイスルギは車体後方に搭載されているレドームが展開し、四両目から七両目となっているゴウカは車輛の左側が箱を開けるように開き、

四連装の大砲のゴウカノン。

犬の頭部の形をしたドギーランチャー。

サル型の武器であるモンキーボマー。

キジ型のミサイルであるバーディーミサイル。
が出現する。

そして、八両目となっているイカツチ二両目からは龍の尻尾のよう
なものが展開される。

八両の『時の列車』からなる巨大な龍（以後・デンコウセツカ）が
海鳴の夜に現れた。

デンコウセツカは空を我が物のように泳ぐような動きで地上で街
の破壊を行っているギガンデスヘルへと向かっていった。

モモタロスとアルフ、ユーノ・スクライアは海鳴に数あるビルの一
つ々の屋上に場所を移していた。

もちろん、気を失っている高町なのはとフェイト・テストロッサを
連れてだ。

「おい、犬女」

「あたしにはアルフって名前があるんだ。んで何さ？赤いの」

モモタロスは気を失っているのはを下ろして地面に寝かせるな
がら、アルフに声をかけた。

「赤いのじゃねえ。俺はモモタロスだ。んで、そっちのガキは大丈夫
か？」

アルフは目を丸くしていた。

「え？アンタそこのガキンチョコの仲間だろ？どうしてさ!？」

「んなことどうだっていいだろ。で、どうなんだよ？」

「ああ、命に別状はないと思うけど……。んで、あのイマジンは何でギ
ガンデスヘル

あんなの

になつたんだい？」

「イメージの暴走ってヤツだ。偶に起こるんだよ」

こうすれば必ずイマジンが『イメージの暴走』を起こし、ギガンデ
スになるというような説明がされていないためか、このようなコメン
トしか出来ない。

仮に説明されていたとしてもモモタロスがそれを記憶していると
は思えないのだが。

「じゃあ、あのドラゴンみたいなのは何だい!？」

「あれはまあ、俺達の電車を全部くつつけたやつだ」

こちらも曖昧なコメントで返してしまおう。

そもそもモモタロス達は野上良太郎の肉体に憑依して電王に変身する際に、当然の能力として専用の『時の列車』を召喚したり連結させて迎撃する事が出来るわけだから改めて訊ねられると答えようがない。

それは魔導師でいうなら「何で魔法使えるの?」と質問されるようなものかもしれない。

魔導師とてこのような質問の場合、「使えるんだから仕方ない」と返答するしかないだろう。

自分にとつて『当たり前』のものを真剣に考えたりすることは余程の事でない限りないものだ。

「う、ううん」

寝かせていた高町なのはの閉じていた瞼が動き出す。

「なのは!モモタロスさん、なのはが……」

ずっとなのはの容態を見ていたユーノがモモタロスに報告する。

「う、ううん。ユーノ君にモモタロスさん。あの、ここは?」

仰向けになつていたなのはがゆっくりとだが起き上がる。

「ビルの屋上だ。何せ地上はギガンデスヘル

あんなの

がいるからな」

モモタロスが言う『あんなの』の正体を確かめるためになのはは屋上から地上を見下ろす。

そこには道路を挟み、ビルを手当たり次第に破壊している一匹の怪物がいた。

「ふえええ、な、何ですか!?!アレ!?!」

「イマジンのイメージが暴走した姿、らしいよ」

驚くなのはにモモタロスからアバウトな説明を受けたユーノが説明した。

「初めてみるんだからビビッても仕方ねえだろ。ま、安心しろ。良太

郎と小僧（リユウタロスのこと）がアイツを確実に倒すからな」

「そういえば、良太郎さんとリユウタ君は？」

「アレ」

ユーノが右前脚で雷雲の空を背景に我が物顔で泳いでいるようにも見える物体を差す。

「モモタロスさん」

「何だよ？」

「アレ、何ですか？」

「あー、また説明しなきゃいけないのかよ？」

モモタロスははつきりいつて面倒臭かったりする。

「アレはね、モモタロスさん達がこの世界にやってくるために乗ってきた電車の集合体、らしいよ」

やっぱりアバウトな説明しかできないユーノ。

最初に教えてくれたのがモモタロスだから仕方ないといえば仕方ない。

「そろそろ始まるぜ」

モモタロスの一言が合図になったのか、地上を蹂躪している巨獣と空を遊泳している機械仕掛けの龍が睨みあい、動いた。

「行くよー」

ガン電王がデンバードのグリップを回すと、デンコウセツカがギガンデスヘルに向かって行く。

空から地上に向かって急降下するため、ちよつとしたジェットコースター気分を味わう。

唯一違うのは、ジェットコースターは予めコースが決まっているのに対して、その都度に敷設、撤去を繰り返しながら走っているデンコウセツカは走る道

コース

に際限がないことだろう。

ギガンデスヘルが、両腕を無造作に振り回す。

それでも、あの巨体から繰り出されるものなので、直撃すればデンコウセツカとて相応のダメージとなるだろう。

「当たらないよ！」

ガン電王は更にデンバードのグリップを回して、デンコウセツカの速度を速める。

ギガンデスヘルの攻撃をかわして、そのまま地上に線路を敷設しながら走っていく。

ガン電王は後ろを向き、Dガンを構えて引き金を絞る。

フリーエネルギーの弾丸が数発、ギガンデスヘルに直撃する。

だが、人並みの大きさのイマジンならその数発が相当のダメージになるのに対して、巨獣であるギガンデスヘルにはそれなりのダメージにはなるが、確実に弱るほどではないようだ。

(リユウタロス、この街中でデンライナーの武装は使えないよ)

「わかつてるよ！」

良太郎の忠告にガン電王は聞き入れながら、デンバードをウイリーするように上へ引つ張るようにしながらハンドルを左に傾ける。

デンコウセツカが反応し、車体が上へと向く。線路が空へと向かい、反時計回りになるようにと敷設されていく。

ギガンデスヘルを中心に円を描くようにして走る。

「さっさとやられちゃえー！」

先頭車両の龍の口が大きく開いて、フリーエネルギーの光線を吐き出す。

同時に三両目となっているイスルギに搭載されているレドームからフリーエネルギーのレーザー光線を発射し、四両目から七両目になっっているゴウカの武装が一齐に発射される。

ゴウカノンが光弾を放ち、

ドギーランチャーの口から『ドギーバーク』という威嚇ミサイルを放つ。

モンキーボマーから『モンキーボム』が休みなく投擲され、バーディーミサイルが発射された。

ガン電王はDガンの銃口をギガンデスヘルに狙いをつけて引き金を絞り、フリーエネルギーの弾丸を連射する。

デンコウセツカとガン電王から繰り出された攻撃はすべてギガン

デスヘルに直撃する。

後ろへ傾きながらも、ギガンデスヘルはデンコウセツカを睨みつけながら直進してくる。

捕まる気はないので、デンコウセツカは攻撃を一旦中止してからギガンデスヘルの背後に回るように走り出す。

背後に回ってから、飛び道具系の全武装を一齐に発射する。

ギガンデスヘルが前のめりに倒れようとするが、すぐにこちらに向き直って右腕を大振りする。

「ああー！」

(避けられない！)

ドゴン!!と、巨獣の爪が二両目のレツコウに直撃するが、同時にサイドアックスで反撃したので痛み分けとなる。

「やったなあー！」

ガン電王がギガンデスヘルを睨みつけてからDガンで数発放つ。

それからグリップを回してデンコウセツカを発進させ、空に向かって螺旋状に線路を敷設させていく。

一度空へと場所を変えると陸戦型であるギガンデスヘルは、自慢の両腕で攻撃する事は出来ない。

となると地面を抉り、瓦礫を作り出して飛び道具として投げつけた。

だが、それがデンコウセツカに当たる事はない。見下ろすかたちになっっているのどこに投げてくるかわかっているからだ。

一定の高度まで来ると、デンコウセツカは停車する。

(確実に弱ってるね)

「わかってるー！最後、行くよー！」

グリップを握って、思いつきり回す。

デンコウセツカは一直線にギガンデスヘルへと向かっていくように線路を敷設しはじめる。

Gがかかっている中でもデンバードのシートから立ち上がる。

グリップから両手を離して、Dガンを両手で握り締める。

銃口からフリーエネルギーが収束されていく。

龍の口にも同じようにフリーエネルギーが収束されていく。それは先程放った光線とは比べ物にならない大きさになっていた。

まるで、ガン電王とつながっているかのような動きだ。

(リュウタロス、見えてきたよ)

良太郎がそう言うのと、ガン電王はDガンを握る力を弱めることなく前を見る。

確かに、ギガンデスヘルが瓦礫を持ち上げていた。

そして、デンコウセツカがこちらに向かっているということがわかると、持ち上げていた瓦礫を投げつけてきた。

「今だ！行けええええ!!」

Dガンの引き金を引いた。

収束されたフリーエネルギーは今までのような弾丸ではなく光線として放たれた。

それはデンコウセツカの口から放たれたものと同じだった。

飛んでくる瓦礫を二つの光はものともせずに破壊し、ギガンデスヘルへと向かっていく。

ギガンデスヘルは武器を失い、素手で反撃しようと弱った身体に鞭打つような状態で前進するが、フリーエネルギーで構成されたレーザー光線を二つ浴びながらなので、思った異常に遅い。

それでも歩み寄ろうとする。

ガン電王とデンコウセツカは臆することなく放ち続ける。

ゆっくりだが、歩み続けていたギガンデスヘルが停まった。

「ギャオオオオオオ」

許容範囲以上のダメージを受けたため、肉体が耐え切れずに爆発した。

爆煙の中をデンコウセツカは突っ切り、そのまま勝利の雄叫びを上げながらモモタロス達がいるビルの屋上へと向かった。

『機械仕掛けの龍』から『八面編成の列車』に姿を戻して、モモタロス達がいるビルの屋上にまで線路を敷設しながらガン電王が操縦するデンライナーはゆっくりとだが走る。

(リュウタロス見て。なのはちゃん、目を覚ましたみたいだよ)

「本当だ！なのはちやああん！フェレットくううん！あとモモタロスウウウウ」

ガン電王は仲間達を見つけると、高らかに叫びながら大きく手を振る。

目的地が近づくと、更に速度を緩めて停車する。

デンバードのキーボックス（パスを差し込む場所）からパスを抜き取って、ガン電王はビルへと飛び移る。

時の列車は役目が終えたと判断したのか、空に発生した空間の歪みへと針路を変えて走っていった。

デンオウベルトを外すと、ガン電王から良太郎へと戻り、紫色の光球が胸元から出てきた。

紫色の光球はリュウタロスとなった。

「アイツ、ちゃんとやつつけたよ」

リュウタロスは満喫した感想を述べる。

「今まで戦ってきたイマジンのの中では最悪の部類だったもんね」

シープイマジンを今まで自分が遭遇したイマジンと比較した感想を述べた。

「最悪の人間に付いてるイマジンはたくさん見たけどよ、単体で最悪のイマジンは羊野郎が初めてだもんね」

モモタロスも良太郎と同様に比較していたようだ。

首領格となって犯罪を企てたイマジンが一体いたが、単体での極悪さでは遥かに劣っている。

少なくともそのイマジンには『悪』の美学みたいなこだわりがあったと思われる。

倒してしまった相手なのでその真意を探る事は出来ないが。

「さてと、帰ろうぜ」

「うんー」

「はい!!」

モモタロスの一言が合図なのかりュウタロス、なのは、ユーノは返事をする。

なのははバリアジャケットから私服に戻っていた。

「じゃあな。良太郎」

ビルの非常階段からモモタロスを先頭に降りていく。

良太郎は一人と二体と一匹の姿を見送ってから、アルフとフェイトの姿を探す。

だが、そこには二人の姿はなかった。

「みんなと話している間に帰っちゃったんだ……」

一人だけ取り残されたような気持ちになった良太郎だった。

*

良太郎が下宿先に戻ると、室内は真っ暗だった。

フェイトもアルフも既に寝たんだと思い、リビングの電気をつける。

壁にかかっている時計を見ると、まだ午後九時三十分だった。

「あれだけの事があったのに、日は変わってないんだ」

率直な感想を述べると、テーブルに置いてあるテレビのリモコンを手にして、電源を押す。

映像が映しだされ、多分この年代に流行なのだと思われるお笑いコンビがどつきあいをしている。

「他の番組は、と」

良太郎はリモコンで番組を切り替えていく。

午後九時代という時間帯なので一時間ドラマに二時間ドラマにバラエティといった娯楽番組ばかりだった。

「……はあ」

目当てとしているジャンルの番組がないため、ため息をついてから風呂場に向かう。

「お風呂でもいれるか」

そう言いながらポケットの中に入れていた私物を取り出して、テーブルに置いてから風呂場に向かった。

風呂場に向かうと、やはりというか当然のことだが電気はついていなかった。

電気をつけてから洗剤とブラシを持って、湯船を洗い始める。

一日経つとどんなに気を遣っていた湯船に浸かろうとも汚くなる

ものは汚くなる。

洗剤を噴きかけてから、ブラシで擦ってシャワーで水を噴きかける。

湯船にこびりついていた汚れはすべてなくなった。

後は栓をして、湯を入れるだけだ。

蛇口を回して、湯を入れる。

あとは時間にして十五分くらいで湯船を満たす量になるだろう。

良太郎はリビングに戻り、ベッド代わりにしているソファに寝転がった。

寝るつもりはなかったが、一分後には眠ってしまっていた。

「う、ううん」

フェイト・テスタロッサの瞼が開き、見慣れた天井が視界に入ると、脳が働き始めた。

（確かジュエルシードを封印して、その後イメージンにあの子や良太郎達が人質になったから渡して……、あれ？その後は……）

フェイトはベッドから起き上がりながら、思い出そうとするが思い出せない。

思い出せなくて当たり前だ。彼女はそのとき気絶しており、そのときの事を記憶していないのだから。

側で眠っていた獣——アルフは眠り続けている。

アルフを起こさないように、フェイトはベッドから出る。

寝室から出ると、風呂場に電気がついていたので、覗いてみる。

湯船が湯で既に満たされており、溢れており余った湯は排水口へと向かっていく。

フェイトはこれ以上、溢れさせるわけにはいかないと判断したので、蛇口を閉める。

「良太郎、かな？」

リビングにも電気がついているので、覗いてみる。

「すーすー」

良太郎がソファで眠っていた。

恐らく、湯が入るまで寝転がって待とうとしたところを睡魔に勝て

ずに熟睡してしまったのだろうと推測する。

「ごめんね。それと、ありがとう良太郎」

良太郎には聞こえていないが、フェイトは謝罪と感謝の言葉を告げてから、風呂場に向かった。

身体に纏わりつく汗の重みを払いたかったのだ。

それが何なのかはわからない。

人に説明しようにもしようがないものだが、それが眠っている良太郎の意識を強引に起こした事は間違いない。

閉じていた瞼は開き、ソファから起き上がる。

「あー、寝ちゃってたんだ」

後頭部を掻きながら、良太郎は風呂場へと向かう。

意識は完全ではないためか、身体全身に気だるさを感じる。

「そういうえば、蛇口閉めてなかった」

そう言いながら、風呂場に向かう。

そして、風呂場の入り口を開けると、

「えええ!? りよ、良太郎!」

泡のついたスポンジで身体を洗っている少女が声を挙げた。

今のフェイトは一切服を纏っていない、いわゆる全裸だ。

その声とフェイトの姿で意識が完全に覚醒する。

半眼になっていた両目が全て開く。

「フェイト……ちやん?」

良太郎は今になって、自分が何をしたのか理解した。

「あ、えーと。そのお……」

弁解しようと言葉を探そうとするが、出てこない。

「……て」

湯船の湯を洗面器に入れながらフェイトが何かを言う。

「へ?」

「いいから出てってえ!!」

洗面器に入った湯を良太郎の顔面に向かってかけた。

「うわああああ!!」

顔面に思いつき湯をかけられた。服も全身ではないが、湯が染み

込んでいる。

「あ、熱うう」

「早くー！」

更に空になった洗面器を投げつける。それは良太郎の顔面に直撃した。

良太郎はクラクラと揺れて、仰向けになって倒れた。

*

翌朝となり、天気は雲はあるが太陽は照っていた。

「あー、そのさ。フェイト、良太郎も悪気があつたわけじゃないんだしさ」

「……………」

「ご機嫌斜めになっているフェイトをアルフは何とか宥めようとしていた。

「ごめんなさい」

良太郎も事故とはいえ、非は自分にあると感じているので先程から土下座とまではいかないが、頭を下げて謝っている。

「良太郎」

今までご機嫌ななめながらも朝食を取っていたフェイトが初めて向かいにいる青年に声をかけた。

「えーと、なに？」

「もう、怒ってないから」

「へ？」

フェイトの意外な言葉に良太郎もアルフも一瞬理解できなかつた。「もう、怒ってないよ。昨日は驚いたけど、良太郎がそんなことをする人じゃないってわかってるし……………」

「フェイトちゃん」

良太郎はフェイトの表情を確かめるために、下げていた頭をゆつくりとだが上げる。

「でも、次は許さないよ？」

フェイトの一言で良太郎は次に同じ事をしたどのような目に遭うのか想像した。

デバイスモードのバルデイッシュユで頭を殴られるとか。
サイズフォームのバルデイッシュユで頭をがち割られるとか。
フォトランサーで吹っ飛ばされるとか。
とにかく、そんなことにはなりたくない。

「……はい」

次は絶対にならないようにと、覚悟を決めた。

昨日のハプニングの件が解決すると、フェイトは本日の予定を話し始めた。

「これからお母さんに？」

「うん、だから今日は夕飯はいらないかも……」

そんなことを言うフェイトの横にいるアルフの表情が良太郎は気になった。

とても暗い、いやどこか怯えているようにも見えた。

フェイトも無理して嬉しそうな顔をしているようにもとれた。

とてもこのまま、この二人を行かせる訳にはいかなかった。

「フェイトちゃん、アルフさん。僕も行つていい？」

「え？」

良太郎の申し出に二人は目を丸くした。

「ダメかな？」

「え、ううん。そんなことないよ！じゃあ良太郎、一緒に行こう」

フェイトは承諾してくれたので、首を縦に振る良太郎。

良太郎個人としても一度は会ってみたかったのだ。

そして、じかに聞きたかった。

「何故、ジュエルシード探しながら危険な事をさせているの？」
と。

良太郎は知らない。

この訪問がある真実を知るための旅のきつかけになることを。

過去への旅 デンライナーの車窓
第二十二話 「母と娘と電王と 前篇」

空は晴れ、ところにより曇りありといったところだろう。

平日か休日であろうと本日は平日、つまり学生が学校に行つて学業に専念している時間帯だ。

若年者層を狙いに行っている店はまだ店を開けていない。

だが喫茶『翠屋』は若年者層のみを狙いに行っているわけではないので、開店していた。

「こんにちは」

野上良太郎が翠屋の入り口を開けて挨拶する。

「いらつしやい、て。ああ良太郎君」

カウンターにいる男——高町士郎が笑顔で迎えてくれた。

「どうも、高町さん。モモタロス達はどうしてます?」

「道場で何かしていたと思うけど、何なら呼んでこようか?」

「そうですね。いえ、今日は買い物に來ただけで会いに來たわけじゃないんで」

士郎の申し出を良太郎は角が立たないように断つた。

「そうか。それで何がご所望で?」

良太郎は陳列されている様々なスイーツを見る。

「あのお、高町さん」

「何だい?良太郎君、もう決まったのかい?」

「いえ、その、一児の母親が好んで食べるスイーツつてどれですか?」

良太郎自身、これから会いに行く人間の食べ物の好みはわからない。

下手な素人が選ぶよりはベテランに任せたほうがいいと思つたのだ。

「ふむ、主婦層が好んで食べるとしたら大体この辺り、かな」

士郎はそう言いながら、スイーツを教えてくれる。

種類にして十種類近くある。

その中で『当たり』を選ぶのは良太郎には不可能だろう。彼のくじ運の悪さは常人のそれを遥かに上回る。

「じゃあ、この中で最も人気のあるスイーツを三種類ほどください」
士郎にそう言うと、士郎はトングを持ってスイーツを三種類掴み、紙箱に収めていく。

紙箱に蓋をして、良太郎に渡して代金を請求する。

良太郎はお札一枚と小銭数枚でちようどの代金を払った。

「それ、誰かに渡すのかい？」

「ええ、まあ」

士郎の質問に良太郎は全てを語るわけにはいかないので、曖昧に答えるしかなかった。

頭を軽く下げて、良太郎は翠屋を後にした。

*

高町家の道場ではイマジン四体がトランプで神経衰弱をしていた。
「今回といい、前回といい、イマジンの契約者は明らかにジュエルシードを狙ってるよね」

ウラタロスが一枚捲る。スペードの2だった。

「ああ、でもよ。一体誰なんだよ？」

モモタロスはそう尋ねながらも、先程自分が捲ったのがクラブの2だったので捲らない事を祈っていたりする。

「多分だけど、この海鳴の住人ではないと思うよ」

そう言いながら、モモタロスが先ほど捲った一枚に手を出す。

『2』として揃ったので自分の持ち点となった。

「海鳴の住人ではない、ということはどういうことや？カメの字」

キンタロスはウラタロスの発言に疑問があるようだ。

「海鳴の住人がジュエルシードを知ってるとは思えないからね」

その言葉にモモタロスとキンタロスは自分が知る限りの海鳴の住人を思い浮かべる。

「でもよ、カメ。俺達が知らねえところにいるかもしれないねえじゃねえか？」

モモタロスが尤も事を言う。

自分達は海鳴の土地に聡いわけではない。主な場所しか知らないのだ。

もし、海鳴の住人でジュエルシードに聡い人物が海鳴の地下世界アンダーグラウンド

に潜伏しているのなら自分達ではどうしようもないが。

「いや、それはないと思うよ」

ウラタロスが次のカードを二枚を素早く捲るがはずれだったので、すぐに裏返した。

「どうして？カメちゃん」

「海鳴の住人が自力でジュエルシードの情報を手に入れること自体が、不可能なんだよ」

「何でや？カメの字」

キンタロスが一枚捲る。ハートの1だ。そして、すぐ隣を捲る。スペードのキングだった。

「みんな、忘れてない？アレは元々、海鳴のモノじゃないんだよ」

「「あー」」

ウラタロスの一言で三体とも思い出した。

「僕達やなのはちゃんはユーノ、つまりジュエルシードの知識を持っている存在から情報を得ているし、良太郎は一緒にいる女の子二人とユーノから情報を得た僕達から得ているわけだしね」

つまり、『海鳴の住人』がジュエルシードの情報を得るには『外界の存在』との接触が絶対条件となるわけだ。

そして、『外界の存在』と都合よく接触する方法は宝くじを一枚買って一等を当てるくらいに難しい。

それは運命の女神とやらの加護を得ない限り接触できないということだ。

「カメの字、それやったら俺等よりも……」

キンタロスが何を言おうとしているのか理解したのかウラタロスは言い終える前に首を縦に振る。

「良太郎の方が案外、近いところにいるかもしれないね」

「だったらよ、契約者の事は良太郎に任せときゃいいじゃねえか。俺

達はソイツと契約してるイマジンを片っ端から仕留めりやいいんだしよ」

「そうやな。イマジンの契約者がわかったら俺らにも教えてくれるやろうしな」

キンタロスはモモタロスの意見に同意する。

「ねえねえ。みんなー、早く続きやろうよー」

話を聞きながらも、神経衰弱に没頭していたリュウタロスが話を締めくくった三体にゲームの続きをやるように促す。

「お、おお。ええと、クマが終わったから次は小僧、オメエか？」

「僕も終わったからモモタロスの番だよ」

「オメエ、俺達が話しこんでる間にイカサマしてねえだろうな？」

モモタロスがリュウタロスに不正行為をしていないか訊ねる。

「カメちゃんじゃないんだからそんなことしないもん！」

「それもそうだな。カメじゃあるめえし」

「そうやそうや、カメの字じゃないしな」

リュウタロスの言葉はモモタロスとキンタロスを納得させるには十分なものだったらしい。

「ちよっと、待ってよ！それは聞き捨てならないよ！」

今度はウラタロスが声を荒げた。

「みんなからして僕って、ゲームとかで平気でイカサマをやるように見えているわけ!?!」

ウラタロスは他の三体に確認をするかのように訊ねる。

三体は顔を見合わせる。

「やらなきやカメじゃねえだろ？」

「歩くインチキこそがカメの字やろ？」

「ズルしないカメちゃんなんてカメちゃんじゃないよね？」

三体の返答に流石のウラタロスも言葉が出なかった。

(日頃の行いがモノをいう、僕自身がそれを味わうなんてね)

だからといって、ウラタロスが自身のスタイルを変えるわけがないのだが。

*

野上良太郎はフェイト・テストタロツサ、アルフと落ち合う手筈となっている場所へと向かっていた。

翠屋から出て五分以上は経過していた。

「何だろ、変に落ち着かないなあ」

別にお見合いに行くわけでもないのだが、良太郎の胸中はざわめいていた。

それが緊張によるものなのか、不安によるもののかはわからないが。

待ち合わせの場所に着くとフェイトとアルフが既にいたので、右手に持っている紙箱に気を遣いながら駆け寄る。

「二人とも、早いね。もしかして僕遅刻？」

「そんなことないよ。全然間に合ってる」

フェイトの言葉を確認するかのようには、良太郎は腕時計を見る。

時刻は集合時刻の五分前だった。

「よかった。はいコレ、お母さんに」

フェイトに紙箱を渡す。

「ありがとう良太郎。お土産はこれでよしつと」

フェイトは受取り、礼を言う。

良太郎は二人の表情を見る。

「……………」

とても喜んで会いに行くようには見えなかった。

「甘いお菓子か。こんなモンで、あの人は喜ぶのかねえ？」

アルフはフェイトが両手で抱えているように持っている紙箱を持ち上げて、眺めていた。

「わかんないけど、こういうのは気持ちだから」

「伝わると、いいね」

良太郎は月並みな言葉を送る事しか出来なかった。

「うん」

フェイトは頷くと、真剣な表情になって唇を動かし始める。

「次元転移。次元座標876C4419……」

良太郎は何を言っているのか訊ねようと思ったが、聞ける雰囲気では

はないのでそのまま黙っている。

「3312D699……」

フェイトはまだ続けている。

フェイトを中心に、良太郎、アルフを囲うように魔法陣が出現する。
(どこかに移動するための魔法、かな)

そんなことを思いながらも、フェイトの行動をじっと見ている良太郎。

「3583A1460、779F3125」

次元座標を一通り言い終えると、フェイトは一拍置いてから魔法を発動させるための言葉を告げ始める。

「開け、誘いの扉。時の庭園、テスタロッサの主の元へ！」

言い終えると同時に、黄金の光が天に向かって昇っていく。

光が消えると、そこには誰もいなかった。

*

雷が常に鳴り、黒い雲が螺旋を描く運動を一向にやめようとしな

空間——高次元空間内に『時の庭園』は存在していた。

元々、この空間に最初から存在していたわけではない。

所有者がとある場所から切り離して、ここまで移動したものだ。

そこに一瞬だが二つの黄金の光が『時の庭園』の違う箇所落ちて、消えた。

「いたたたって、何で僕一人？」

光が落ちた場所にはうつ伏せで倒れている野上良太郎が一人いた。

「もしかして、はぐれた？」

一人、現状を口にするがそれを答えてくれる者は周りにはいない。
起き上がって、服に付着している汚れを叩く。

周囲を見回す。

「汚れひとつないけど、でも不気味……だね」

どんなに綺麗な場所でも人が生活していればそれなりの温かみのようなものを感じる事が出来る。

だが、ここにはそれがまるでない。

以前に体験したあそこほどではないが、それでもここに長居したい

という気持ちにはなれない。

「二人を探すにも、僕、ここに来たの初めてだからなあ。勝手がきかないや」

それでも、ここに待っていればフェイトかアルフ、あるいは二人が迎えに来てくれるという保証があるわけでもないのに、良太郎はその場から歩き出す事にした。

(でも、何で二人とはぐれたんだろ……)

良太郎は自分が何故、二人と離れてここに到着したのかを歩きながら考えていた。

フェイトが座標を間違えたのだろうか？

(それはないね)

良太郎はフェイトがそんなミスをするなんてありえないと即座に否定した。

自分の不運のせいでは？

(これが一番有力かな)

確信はないが、これが一番有力だと感じた。

「それでも、まだ運がいいほうかも……」

フェイト達とはぐれはしたが、きちんと目的地に足を着けているだけ幸運だと思っている。

もしこれが最悪の部類の不運だったら、間違いなく自分は『時の庭園』に足を着けるどころか、下手をすればどこかの空間にさまざま可能性だってありえるからだ。

冗談ではなく、本当に起こすかもしれないのが野上良太郎なのである。

「フェイトちゃん、お母さんと会って何してるんだろ？」

自分の勘を正しいと信じながら、良太郎は『時の庭園』を歩き回っていた。

母と娘、いわゆる親子のコミュニケーションに良太郎は憧れていたりする。

何故なら彼はそれをする前に両親に他界されているからだ。

自分にとって『親』とは育ててくれた祖母と共に暮らしている姉の

野上愛理だろう。

それを不満に感じたことはない。祖母も姉も自分にとっては誰にでも誇れる『親』なのだ。

(もし、父さんと母さんが生きていたら僕はどうなったのかな?)

今の自分は両親が他界したからこそ存在している。

両親が健在なら、ここにいる自分——『時の運行』を守る仮面ライダー電王としての野上良太郎は存在していないだろう。

良太郎は両親と共に暮らしている自分を想像する。

両親や姉と共に食卓で他愛のない会話をしている自分。

つまらないことで父親や母親と喧嘩をしている自分。

休日に外で家族総出で遊んでいる自分。

それらを頭において、意識を集中する。

だが、靄のようなものがかかって上手く出来なかった。

「……駄目だ。全然できない」

理屈ではわかっていても、心が反応しないのかもしれない。

良太郎はこれ以上想像することは無駄だと諦めて、停まっていた足を動かす事にした。

「あれ?」

しばらく歩くと、靴の裏に何かを踏んだような感触がした。

踏んだ靴の裏を見てみると、硬い小さな粒のようなものだった。

靴に付着しているものを手に取り、親指と人差し指でさする。

憶えのある感触だった。

「これって、もしかして……」

袋でもあれば回収して、オーナーに調べてもらえるのだが不幸な事に袋はないので回収できない。

「やっぱりいるのかな。ここに……」

良太郎はフェイト達を探すべく、また歩き出した。

『時の庭園』を歩き回ってから時間にして三十分くらいが経過した。

良太郎の耳に何かの音と妙な声が聞こえ始めた。

「もしかして、幽霊?」

何て事を口走るが、即座に否定する。

彼はごく最近にその幽霊と当てはめる部類と出くわした事がある。拉致されたうえに、戦って倒したという貴重な体験もしている。だからこそ、彼にはわかる。

先程から聞こえてくる声らしきものは幽霊などではないと。人間の声だと。

そこまで考え出すと、良太郎はフェイトとアルフを思い出した。「悪い予感当たらないといいけど……」

良太郎は『歩く』から『走る』へと切り替える。

どこにフェイト達がいるかもわからないが、不安で仕方がない。一度心にそのようなものが宿ると、身体が自然に反応する。

聞こえてくる声と音を頼りに走り出す。

「良太郎ー!!」

聞き知った声が正面からした。

そこには息を切らしていたアルフがいた。

「アルフさん。て、どうしたの?」

良太郎はアルフとの再会を喜ぼうかと思ったが、アルフの表情と醸し出す雰囲気から察した。

何かが起こっている事を。

そして、それがフェイト絡みだという事を。

「アルフさん、フェイトちゃんに何かあったの!?!」

アルフの両肩を掴み、訊ねる良太郎。

「りよ、良太郎!お願いだよ!フェイトをフェイトを……」

アルフは涙目になりながらも良太郎に何かを伝えようとしている。

「フェイトを助けて!!このままじゃ、フェイトはあの人に殺されちゃうよー!」

「殺される?」

親子の対面で一番出てきて欲しくない言葉だった。

アルフが言う『あの人』というのが誰かは良太郎にすぐにわかった。

「アルフさん、フェイトちゃんは今どこにいるかわかる?」

「こつちだよ!ついてきて」

アルフの先導で良太郎はフェイトがいる部屋に向かった。

次第に、『声』と『音』が大きく聞こえてきた。

それは距離が近くなった事を示している。

二人はやがて大きな扉の前に立っていた。

ピシヤン

「くううー！」

ピシヤピシヤン

「かはあー！」

フェイトの声と何かの音が聞こえた。

『何か』がフェイトを直接攻撃していることがわかる。

良太郎はここで疑問が生まれた。

何故、フェイトはその『何か』を避けないのだろう。

フェイトなら余裕で対処できるはずだ。

(もしかして、避けないんじゃないやなくて避けれないんじゃないや……)

それなら納得できる。

拘束されたフェイトを何かで滅多打ち。

最悪のシチュエーションだった。

しかもその加害者がフェイトの母親ならなおの事だろう。

良太郎はドアを乱暴に叩く。

ノックというより、借金取りが滞納している客の家でするソレに近い音を立てていた。

だが、何の反応も示さない。

ピシヤン

ピシヤン

「うううう」

ピシヤンピシヤン

「かはあ、はあっ」

ピシヤンピシヤピシヤン

「あ、あ、あ……」

先程より『何か』の音が増し、フェイトの声が何度かしたがとうとうしなくなつた。

状況がかなりヤバイと感じた二人はドアを蹴飛ばす。

マナーとしては決してよくないが、そんなことを言つてはいられない

い。

二人は同時に部屋に入る。

良太郎の瞳に映ったのは、

天井から吊るされてバリアジャケットをボロボロにされてグツタリしているフェイトと、ボロボロにした張本人だった。

「フェイトオー！」

アルフがフェイトに呼びかける。

フェイトをボロボロにした張本人は良太郎と目が合う。

良太郎は張本人を見る。

黒髪の長髪に全身黒づくめの衣装。そして、手にはフェイトを滅多打ちにした『何か』——鞭が握られていた。

「……何やってるんですか？」

先に切り出したのは良太郎だった。

言葉は質問だが、態度は違っていた。

怒っていた。その証拠に、拳を作ってわなわなと震わせていた。

目つきも普段の穏やかなものと違い、鋭くなっていた。

張本人——フェイトの母親は怯むことなく、良太郎を見ている。

「野上……良太郎、ね」

フェイトの母親は眼前の青年を見て、フルネームを言った。

「「え？」」

そこにいる三人がその事に驚いた。

第二十三話 「母と娘と電王と 後編」

フェイト・テスタロッサは朦朧とする意識の中で母が放った言葉に驚かずはいられなかった。

何故、母は野上良太郎の名を知っているかだ。

自分もアルフも良太郎のことは母に告げていない。

自分達の念話、もしくはマンションを盗聴しない限り得られない情報だ。

「……………」

本当なら「どうして？」と訊ねたいところだが、満足に言葉を発することできない。

(母さんはどうして良太郎の名前を知ってるの? どうして…………)

心中でそこまで考えるとフェイトの意識は途切れた。

「アルフさん、フェイトちゃんの手当てを!」

予想しなかった出来事に誰もが硬直していたが、良太郎がいち早く我に返り、アルフに指示した。

「あ、ああ。フェイト! 大丈夫かい!」

アルフの問いかけにフェイトは首をこくんと頷いた。

フェイトの両腕を縛っていた鎖は魔力で構成されているものらしく、力任せに引きちぎろうとしてもびくともしない。

「……………」

女性が握っていたものが鞭から杖へと変わる。

その直後に、フェイトを吊っていた鎖は消え、フェイトは前のめりになって倒れていく。

アルフが間一髪でフェイトを受け止めた。

「…………アルフ、フェイトを連れて行きなさい。そして伝えなさい。これ以上、母さんを失望させないで、と」

「……………」

アルフは何も言わずにフェイトを抱きかかえ、女性を見ずに良太郎を見る。

「…………良太郎、行こう」

良太郎はアルフの申し出に首を横に振る。

「アルフさん、先に行つて。僕はこの人と話があるから」

「何バカなこと言つてるんだい!?!りょうた……ろう?」

アルフは無謀な事をしようとしている良太郎を止めようとするが、止める決意が揺らいだ。

良太郎の目にはアルフの制止などものともしない迫力があつた。

「……わかつたよ。良太郎、無理するんじゃないよ」

アルフは良太郎に忠告すると、気を失っているフェイトを抱きかかえて部屋を出た。

良太郎はそれを見送ることなく、目の前の女性と対峙する。

「もう一度聞きます。何をしていたんですか?」

静かにしかし、内に秘めた感情は上手く押し殺していかないのか身体全身が震えていた。

「しつけをしていたのよ」

女性は自分のした事がさも正しいかのように言い放つ。

「あの子はこの大魔導師、プレシア・テストアロッサの娘。不可能な事などあつてはならない、邪魔をするものはどんな事をしても排除しない、とね」

「……フェイトちゃんはまだ子供ですよ。失敗だつてありますよ」

「それは普通の家の子の話でしょ。うちとは違うわ」

良太郎の意見をばつさり切り捨てるプレシア。

「……ジュエルシードを五つ集めたのが失敗だといいたいんですか?」

「二十一の内、五つを回収した事を成功といえるかしら?」

プレシアは娘の結果に失望するだけだ。

その結果に生じた過程を認めようとはしない。

良太郎の握っていた拳が更に強くなる。

同時に腰元にはデンオウベルトが出現する。

「あなた、フェイトちゃんの生みの親でしょ?よく、あんな事を平気で出来ますね?」

良太郎の堪忍袋も限界が来ていた。その証拠に感情が表に出てい

る。

「……ふふ」

プレシアが顔を伏せて、身体を震わせていた。

「あはははははは、はははははははははは」

今度は高らかに大笑いしていた。

その笑いには侮蔑や見下しといった感情は含まれていなかった。

ただ、純粋に良太郎の発言がおかしかったから笑ったといったかんじだ。

「何がおかしいんですか？何がおかしい!!」

笑われた側に見ればたまったものではない。

良太郎の大きめな堪忍袋の緒もとうとう切れてしまった。

「今の台詞で確信したわ。あなた、まだ何も知らないみたいね」

プレシアは笑い終えると、杖で良太郎を指す。

「何も……知らない？」

「ええ。貴方はまだ真実の入り口にも立っていないのよ」

「真実？どういう意味ですか？」

「真実は真実よ」

プレシアはそう言うと、良太郎を指している杖から紫色の魔力を収束させる。

「それ以上知りたければ、私に一発でも攻撃を与えてみたらどうかしら？」

「!!」

良太郎はポケットからパスを取り出して、ターミナルバックルにセタッチする。

「変身!!」

プレシアの杖から紫色の魔力光が放たれた。

爆煙が立ちこめる中、ひとつの影がプレシアに近寄る。

四体のイマジンを宿していない電王——プラットフォーム電王だ。

腰元に常時装備しているデンガツシャーに手をつける。

Dソードへと連結させて正眼に構える。

「下手なバリアジャケットよりは性能がよさそうね。その姿」

プレシアは冷静にプラット電王を見ている。
プラット電王はプレシアを睨んでいる。

プレシアの言った事は気になるが、それよりも彼女がフェイトに対して行った仕打ちの方が彼を支配していた。

「あんなに頑張っているフェイトちゃんを……」

フェイトが命がけでジュエルシードを探し、封印している姿が脳裏によぎる。

Dソードを握る力が強くなる。

「あんなにいい子に……」

フェイトと共に生活していた姿がよぎる。あんな仕打ちを受けるような落ち度があるような少女ではない。

一歩一歩ゆつくりとだが間合いを詰める。

「よく、そんなひどい事ができたな!!」

ゆつくりとした歩みが急に速くなった。緩から急になったのだ。

正眼に構えていたDソードを上段に構えて、プレシアに切りかかる。

(届いた!)

プラット電王は捉えたと確信したときだ。

Dソードの刀身がプレシアの身体に触れなかったのだ。

正確にはプレシアとDソードの刀身の間に障壁のようなものがあるようだ。

何で防いでいるのか見てみると、紫色の魔力で構成された障壁が見えた。

「そんなものじゃ、私には届かないわよ」

プレシアは空いている左手に魔力を収束させて、プラット電王の胸元辺りにかざして放つ。

ドオン、というような音が鳴った瞬間にプラット電王は後方に宙を舞った。

「う、ぐぐぐ」

背中を強く打ったためか、上手く息を吐き出す事が出来ない。

プレシアはかざした左手を下ろして、倒れているプラット電王へ

ゆっくりと歩み寄る。

「こんなもので貴方の私に対する怒りは治まったのかしら？ 野上良太郎」

それは挑発にもとらえることが出来る台詞だ。

「そんなわけ……ないでしょ……う」

ゆっくりとだが、Dソードを杖代わりにして起き上がる。

「はあ……はあ、はあ……はあ」

Dソードを再度、正眼に構えなおす。

プラットフォームは電王全フォーム中、最低の位置にあるフォームだ。

身体能力が若干向上しただけで、他のフォームに比べると突出した能力がないので、全体的に低い。

そのため、たった一発の魔法攻撃でもフラフラに近い状態になってしまう。

防御力が低いため、当然と言えば当然だろう。

今度は下手な予備動作もせず、一気に走りこんで切り込む。

剣筋は、右袈裟に向かっている。

「ふふ」

小さく笑うと先程と同じように、魔力障壁がDソードの刀身を防いでいた。

先程と同じように左手をかざす素振りが見えると、プラット電王は自分から間合いを開くようにして後方へと下がる。

「甘いわね」

プレシアがそう言うと、同時に紫色の雷がプラット電王に向かって降り注いだ。

「うわああああああああ」

全身に電気が走り、痛み、痺れが一気に襲い掛かる。

変身していなかったら、確実に意識が飛んでいたと思われる一撃だ。

「う……う……う……う……」

倒れてはいないが、フラフラだ。身体全身から焼けたのか煙が立つ

ている。

Dソードの刃先を地に突き刺す。

それでもプラット電王はプレシアを睨んでいる。

それだけ、プレシアがフェイトにした仕打ちに対して怒りを感じている事だ。

「貴方はまだ何も知らない。そうさつきも言ったようにまだ何も……」

プレシアは睨みつける視線を受け止めながらゆっくりと、歩み寄る。

「だから……だから何を!？」

睨みながらプレシアに訊ねる。

「さつきも言ったように私の言葉の意味を知りたければ真実を知りなさい」

プレシアは右手に持っている杖を天に掲げる。

その直後に、先程とは質量がまるで違う雷がプラット電王に降り注いだ。

「うわああああああああああああ」

杖代わりになっていたDソードがガシャンという音を立てて倒れると、引かれるようにプラット電王も全身に煙を立てて前のめりに倒れた。

変身が解けて、プラット電王から良太郎に戻る。

倒れている良太郎をプレシアは見下ろす。

「う、うう……」

「……………」

プレシアは良太郎が意識が朦朧していると判断すると仰向けに転がす。

その拍子にポケットからパスが落ちた。

パスを拾い上げてから、気を失っている良太郎を見る。

「な………にを」

「何をするつもりなんですか」と言いたいが言えない。

「野上良太郎。真実を知り、受け止め、行動しなさい」

そして、パスを良太郎に向かって放り投げた。

「フェイトのためにも、ね」

良太郎の意識はそこで途切れた。

*

「う、ううん」

野上良太郎は全身におもりが乗っかっているかのように重いまぶたを開いた。

何度か見たことがある天井だった。

右、左と顔を動かす。

そこが『時の庭園』ではないということだけはわかった。

殺風景だが、『時の庭園』ほど冷たい雰囲気はない。

自分が居候しているマンションだった。

まぶた同様に、重たく感じている身体を起こす。

プレシア・テスタロッサから受けたダメージはまだ抜け切っていないが、それでも動くくらいには回復していた。

「さーて、そろそろ目え開けてくれると嬉しいんだけど……」

ドアを開けて入ってきたアルフが独り言を言いながら良太郎に歩み寄るが、現状を見て停まる。

「おはよう。アルフさん」

良太郎は笑みを浮かべる。

「フェイト！良太郎が起きたよ！」

アルフは真っ先に主に報告に向かった。

その直後にフェイトが入ってきた。

腕や脚に包帯が巻かれていたりガーゼが貼られていたり痛々しい姿になっている。

「良太郎！よかった……。大丈夫？」

フェイトがわが身を省みぬような勢いで良太郎に訊ねる。

「まだ、身体が重いけど大丈夫だよ。僕よりフェイトちゃんの方が……」

「わたしは、大丈夫だよ」

包帯を巻かれている腕を擦りながら言う。

それが、強がりなのはこの場にいる二人にはすぐに理解できた。

「あの後、僕はどうなったの？」

良太郎は自分がここにいる経緯を訊ねた。

「アンタはプレシアにやられて、気を失っていたのさ。あの部屋で一人放置されていたところをあたしとフェイトが運んできたってわけさ」

「そうなんだ」

アルフの説明を受けながら、もうひとつ訊ねる事にした。

「僕はどのくらい気を失っていたの？」

「三時間ほどだよ」

フェイトが答えてくれた。

「二人とも、ありがとう。フェイトちゃんは怪我を押ししてまで運んでくれたなんて……」

良太郎は二人に礼を言うと、沈んだ表情になる。

「良太郎？」

「どうしたのさ？」

「情けないよ。聞きたいことも聞けずに、ただやられるなんて……」

「あの人がアンタの質問に答えるもんかい！」

アルフがプレシアのことを思い出しながら、侮蔑と怒りを交えた声を出す。

「アルフ、言いすぎだよ」

フェイトがたしなめる。

「でも、フェイト！」

「アルフ」

静かだが、有無を言わせぬ声でフェイトはアルフを黙らせた。

「……わかった。ごめんよフェイト」

「ううん、わかってくれたらいいんだから」

二人のやり取りが良太郎には痛々しく感じられた。

（このままでもいい筈がない。でも僕に何が……）

今の状況を打破するためにはどうしたらいいか悩む。

その中でプレシア・テスタロッサがよぎった。

(あの時は頭に血が上ってたから、深くは考えてなかったけど……)
プレシアとのやり取りを思い出していた。

(あの人は何で僕にあんな事を言ったんだろう？あれじゃまるで……)

『真実』を知るように唆している様にも思えた。

何故、そんなことをするのだろうか。普通は隠すだろうと良太郎は考える。

まるで、知ってほしいとでも言わんばかりのことだ。

実際、自分はそれに乗せられつつあるようだ。

プレシアが言う『真実』とは何なのか、そして、朦朧とする意識の中で聞いた「フェイトのため」と言った彼女の言葉も気になっていた。『真実』を知るにはどうすればいい？

警察や探偵なら聞き込みなどで『足跡』となるものを捜すだろう。

その集めたいくつかの『足跡』が『真実』への道となる。

だが、自分はただの一般人。しかも別世界に探偵や警察の知り合いなんていないし、いたとしても魔導師関連の事なので何の力にもならない。

(どうすればいい？真実、真実……)

同じ言葉を呪文のように胸中で唱える。

「真実……か」

口に出して呟いた時、何かが閃いた。

フェイトとアルフが心配げな表情をしているが今は気にしてはいられない。

まず、ベッドの横に飾られている写真立てを取る。

プレシアとフェイトが写っていると思われる写真だ。

その写真に写っているフェイトとプレシアは笑顔でとても幸せに満ちているという事がわかる。

それが何故、今のような状態になったのだろうか。

「フェイトちゃん、この写真っていつ撮ったの？」

写真立てを見せながらフェイトに訊ねる良太郎。

「ええと、四年位前だけど……」

「そうなんだ」

そう言うと、写真立てを元の位置に戻してからポケットを探る。パスを取り出して展開する。そこには無記載のチケットがあった。チケットを取り出してから、それをフェイトにかぎす。

「フェイトちゃん。ちよつとごめんね」

「良太郎？」

時間にして二、三秒が経過したのでそろそろ頃合だと思つてチケットに写った内容を見てみる。

「えっ!？」

内容を見て、自分の予想とは違った結果が表示されているのに驚く良太郎。

「どうしたの？良太郎」

「それ何だい？」

フェイトは良太郎が何に驚いたのか気になり、アルフは良太郎が持っているチケットに興味を持った。

「これはね。ええとチケットなんだ」

「チケット？」

フェイトが訊ねる。

「うん、これがあればデンライナーを『目的とする時間』に走らせることが出来るんだ」

デンライナーは目的となる時間が指定されていなければ延々と『時の空間』を走り続けているのだ。

「チケットがないと、行きたい時間にいけないってのかい？結構不便だねえ」

アルフの鋭い指摘を良太郎は苦笑するしかない

そう言うと、フェイトにかぎしたチケットをパスに収納する。

「ジュエルシード探しはどうするの？」

「出来るなら良太郎が完治してから再会しようと思つてたけど、今日、明日と休んで明後日から再会するよ」

そう聞いて、良太郎はフェイトを見る。

二日三日で完治できる傷ではない。無理を押しやるつもりなん

だろう。

ならば自分も一刻も早く、プレシアが言った『真実』を知らなければならぬ。

良太郎は自分の手の動きを見る。

とても、満足にいくものではない。プレシアから受けた雷撃の痺れが残っているようだ。

動くなら明日からだろう。

明日なら何とか完全とまではいかないが、五体を動かし日常生活までは可能だと思われる。

「良太郎、ゆっくり休んでね」

「じゃねー」

フェイトとアルフは部屋から出ようとする。

「今日はどうするの？」

「わたし達は今日はリビングで寝るよ」

「でも……」

「いいから良太郎は寝てなつて」

「アルフの言うとおりでよ。良太郎、ゆっくり休んで」

二人の強い押しに良太郎は従うしかなかった。

二人は出て行き、寝室には良太郎一人となる。

パスを取り出し、フェイトにかざしたチケットを取り出す。

「まさか、こんな事があるなんて思わなかったよ」

チケットは確かに記すべき事は記していたが、

「イラストはシルエットみたいで真つ黒、年号と月日はデタラメだなんて……」

今まで人に何度もかざしたチケットだが、こんな事は初めてだった。

それは良太郎により一層、『真実』を捜す決意を固める結果となった。

第二十四話 「デンライナーの車窓から」 出発前

空は野上良太郎の心に反しているかのようには晴れていた。

良太郎はベッドから起き上がると、パスから一枚のチケットを取り出した。

チケットに記載される年号や月日はチケットをかざされた人間の最も強い『記憶』を記載している。

つまり、人間にチケットをかざしている限りは違法性のないチケットが完成するという事になる。

この法則に当てはまらないチケットも存在している

かつて牙王が『神の路線』を走る際に用いた『無限（インフィニティ）』と記載されているチケット。

オーナーが所持している『乗車拒否』と記載されているチケット。リュウタロスがカイから渡されている『無期限有効（年号、月日が8888・8888と表記）』チケット。

製造方法は不明だが通常とは違う方法で作成しなければならぬということだけは、はっきりしている。

それが何種類ものチケットを見たりして学び、野上良太郎が分析した事だ。

「人にかざしたはずなのに……」

良太郎は昨日、フェイトにかざしたチケットを見ていた。

人間にかざしているのに明らかに違法性の臭いが満ち溢れているこのチケットは良太郎にとっては初めてのことだ。

チケットをパスに収納し、起き上がる。

まだ本調子というわけではないが、日常生活程度ならこなせるまでに回復していた。

「よし、行こう」

良太郎は寝室を出て、リビングに向かう。

朝食を作るために。

*

高町家。

高町なのはの部屋では一人の少女と一匹のフェレットが小さく亀裂の入った紅い珠を見ていた。

「大分、回復してきたね。ユーノ君」

「うん、自己修復機能をフルに活用しているからね」

部屋の主である高町なのはとユーノ・スクライアが紅い珠——レイジングハートの回復に喜んでいた。

「なのは、君は大丈夫？あのイマジンの一撃をまともに食らったんだから……」

「バリアジャケットを着ていたおかげで、まだちよつと痛いけど大丈夫だよ」

笑みを浮かべてユーノに自身の身体状況を告げる。

「そっか」

その笑みが作りではないと、ユーノは判断する。

「なのはちゃん、フェレットくん。ご飯だよー！」

一階からリユウタロスの声が聞こえてくると、なのはとユーノは部屋を出た。

なのはとユーノが一階に下りてリビングに向かうと、そこには高町士郎と桃子が朝食の準備をし、高町恭也とモモタロスが何が原因なのかわからないが睨みあっており、高町美由希がウラタロスとキンタロスから何かを聞いており、リユウタロスはテレビのリモコンを持ってチャンネルをいじくりまわしており、コハナは別世界こちらに来てから習慣になったのか新聞を読んでいた。

「みんな、出来たわよ。席について」

桃子の一声で各々バラバラな行動を取っていた面々がそれぞれの定位置に座る。

そして、

「いただきますーす」

と食材に対して感謝の言葉を述べて食べ始めた。

これが一匹のフェレットと四体のイマジンと一人の少女が加わっ

た高町家の朝である。

朝食を食べ終えた面々はそれぞれ行動する。

士郎と桃子は『翠屋』へと出勤。

恭也も大学での講義が休講なのか、高町夫妻同様に『翠屋』へと向かった。

美由希、なのはは学校へと行く。

そうになると、高町家に残っているのは居候軍団だけだ。

「僕はレイジングハートの回復状況を見てきます」

ユーノはそう言うと、リュウタロスの肩から飛び降りてなのはの部屋へと向かった。

ウラタロスとリュウタロスはどこから持ってきたのかオセロをしており、キンタロスはソファで爆睡していた。

「あーつたく、暇だ」

「だったらアンタもやること捜せばいいじゃない?」

暇を訴えていたモモタロスに対して、コハナはやる事を捜すように薦める。

「ねーんだよ」

捜す気がないので、ソファにもたれて天井を仰ぐ。

「!!」

さつきまでだらけていたモモタロスが急に立ち上がった。

「オメエら。今忙しいか?」

モモタロスがウラタロス、キンタロス、リュウタロス、コハナを見回してから言う。

その言葉にはおちやらけた事ではないという重みがあった。

「センパイ?」

「どないした?モモの字」

「なにになに?教えてよ。モモタロスウー」

「モモ?」

「良太郎からだ。何か今後の事を決めるからちよつと来いってよ」

その言葉に誰もが真剣な表情となった。

「これでよしっ」と

ケータロスを畳んでポケットにしまいこむと、良太郎はソファで寛ぎながらテレビを見ているアルフに声をかける。

「アルフさん、フェイトちゃんは？」

「あたしの隣で寝てる。出かけるのかい？良太郎」

「うん、昼までには帰ってくるよ」

「じゃあさ、コレ買ってきてくんない？」

アルフはそう言いながら、良太郎にチラシを一枚渡してきた。

そこには『ドッグフードの特売フェア』と記されていた。

「アルフさん、人間の食べ物食べれるんだからそっち専門にすればいいのに……」

「いやー、偶たまにこうムラムラつと食べたくなるんだよねー」

アルフのそういった衝動には良太郎も何となくではあるが理解でききる。

「わかった。あれば買ってくるよ」

良太郎はチラシをポケットに突っ込んでドアノブを握って回した。

*

野上良太郎が指定した場所は『翠屋』だった。

距離的には似たようなものらしく、良太郎が先に到着しコーヒーを頼んでいた。

後で来る待ち人達（正確には待ち人一人と待ちイマジン四体）のことも考えてカウンターには座っていない。

時間帯が午前であり開店して時間が浅いためか、翠屋はガラガラだった。

その方がこちらとしてみれば好都合だ。

「お待たせいたしました。コーヒーです」

青年がトレーに乗せたコーヒーを良太郎のテーブルに置いた。

「あ、どうも」

「君が野上良太郎、か？」

青年は名前を尋ねてきた。

良太郎はコーヒーから視線を名を尋ねてきた青年へと向ける。

「そうですけど、君は？」

「高町恭也。なのはと美由希の兄といった方が君にはわかりやすいだろう」

「そう、なんだ」

実はこの二人、今日が初めての出会いだったりする。

良太郎は何度か『翠屋』には訪れているのだが、間が悪いのか恭也とは一度も会ったことがない。

恭也もまた、自身が『翠屋』でバイトしているときに限って、これもやはり間が悪いのか良太郎が来ないので一度も会ったことがない。

「君の事はなのはや美由希、モモタロス達から聞いている」

恭也はそう言いながら、良太郎の向かいに座る。

「はあ」

なのはとモモタロス達が真相を話すわけがないので、『D・M・C（電王メンバーズクラブ）』の一人として認識されているのだろう。

「君とモモタロス達はどのくらいの付き合いになるんだ？あいつ等は君をととても信頼しているように見えたから」

恭也の質問に良太郎は出会いから現在に至るまでを振り返ってみる。

「一年半くらい、かな。多分」

「そんなに短いのか。なら、共に歩む時間が濃かったということか」

「そう、だね」

良太郎は恭也に対してタメ口で答えた。

本来なら、敬語を使うべきなのだが恭也は特に気分を害しているわけでもないのですそのままの口調で通す事にした。

「今日は何か？なのはは学校だが」

「いや、モモタロス達に用があるんだ」

「そうか。ゆつくりしていくといい」

「ありがとう」

恭也は席から立ち上がって業務に戻ろうとすると、カランカランとドアに設置してある鈴が鳴った。

良太郎は誰が入ってきたのかを見る。

四体のイマジンと一人の少女だった。

「何だよ？良太郎。今後のことってのはよ」

テーブル席に座っているモモタロスがプリンを食べながら、良太郎に呼び出した理由を訊ねた。

「センパイ、とりあえずプリン食べちゃいなって」

ウラタロスがコーヒーに口をつけてからモモタロスをたしなめる。

「そうやで。モモの字、口に入っとるものはちゃんと消化せなアカン」

そう言いながらキンタロスはケーキを四個食べていた。

「ママさん！僕、コーヒーお代わり！」

リュウタロスが空にしたコーヒーカップをくるくると回していた。

「あんた達！良太郎が話を切り出せないじゃないの！」

コハナがイマジジン達をいつもの手口（鉄拳制裁）で鎮静化させた。

それから五分後。

イマジジン達は大人しくなっていた。

コハナの鉄拳制裁が久々だったため、かなり堪えているらしい。

「それで、良太郎。今後の事って何なの？」

「その前に、これを見てほしいんだ」

良太郎はパスから一枚のチケットを取り出して、テーブルに置いた。

モモタロスがそのチケットを手にする。

「何だよコレ？数字も何かもメチャクチャじゃねえか」

「確かに、こんなのデンバードにセットしたらどこ行くかわかんないよ」

モモタロスの横を覗き見るかたちでウラタロスが言う。

「モモの字、カメの字。俺にも見せえや」

「僕も見るー」

キンタロスとリュウタロスがうるさいのでモモタロスはチケットをもう一度、テーブルに置いた。

キンタロスが取り、リュウタロスが覗き見る。

「確かにデタラメもいいとこや。こんなんじゃどこにも行かれへんで」

「僕が持ってたのより、酷いや」

キンタロスはウラタロスと同じ意見を述べ、リュウタロスはかつてカイから渡されたチケットを思い出していた。

「これどうしたの？良太郎、誰かに貰ったとか？」

コハナがチケットの入手経緯を訊ねてきた。

「フェイトちゃんにかぎしたらそんな風にできあがったんだ」

良太郎は遠まわしな言い方はせずに率直に答えた。

「「「え？」「」」」

四体と一人はてっきりこのチケットの入手経緯は誰かから入手したものだと思っていたようだ。

「コレ見たら普通はそう思うよね」

良太郎はテーブルに置いてあるチケットを手にして一瞥する。

モモタロス達の反応は別におかしいことではない。

むしろ、『時の運行』に関わる者ならその反応は正しいといってもいいだろう。

「人間にかぎしてこんなことになるのかよ？普通」

モモタロスが良太郎からチケットを取って、もう一度見る。

「確かにありえないよね」

ウラタロスがモモタロスから引っ手繰り、違った角度から見ようとしている。

「ありえん事になるいう事はや。その子供に何かあるつちゆうことやな」

キンタロスがウラタロスから取り上げて、凝視しようとする。

「何なんだろうー」

リュウタロスはキンタロスから取ろうとするが、上手くいかなかったらしく横から覗くかたちになっている。

「でも、どうして人にかぎしてるのにこんな風になるのかしら？」

「わからない。でも、フェイトちゃんには何かあることは確かだと思うんだ」

コハナの疑問に良太郎は回答できない。

フェイトの寝室に置いてあった家族写真を思い出していた。

写真に写っていたフェイトとプレシアは実に仲の良い親子だった。

それが数年で現在ののような関係になるのだろうか。

余程のことが起こらない限り、そんなことにはならないだろう。では『余程の事』とは何なのだろうか？

まるで底なし沼に沈んでいくような気分だ。

パスを開き、チケットをしまいこもうとする。

チケット収納部に収まっているブランクチケットがずれていた。

「あれ？」

普通なら気にする事はないことだ。

ずれたブランクチケットの後に収納されているのは普通ならブランクチケットだ。

なのに、ずれたブランクチケットの後ろにあるチケットにはイラストと月日が記されているように見えた。

「何だろ」

そう言いながら、ずれたブランクチケットを収納部から取り出す。

「み、みんな！これ見て！」

良太郎はいつしかチケットの取り合いになっている四体のイメージとそれを武力をもって沈めようとするコハナに見せた。

そこにはフェイトとプレシアがイラストとなっており、年号と月日も正確に記されていた。

しかし、年号は自分達が見てきたものとは明らかに違っていた。

「多分、この年号はフェイトちゃんに住んでいた世界の年号だと思う」
海鳴の住人にチケットをかざした場合、年号は自分達の世界と同じように西暦で記される。

更にチケットを抜き取る。

「まただ……」

更に一枚、ブランクチケットではなくイラストと年号、月日が記載されているチケットがあった。

イラストはフェイトで年号は同じだが、月日は違っていた。

「おいおい、どうなってんだよ？」

モモタロスも何が何だかわからなくなっていた。

「まさか、それを抜き取ったらまた一枚あるんじゃないの？」

ウラタロスがからかい気味に言うが、いつものような声色ではない。

良太郎はパスから二枚目のチケットをゆっくりと抜き取る。

「やっぱり……」

「これで三枚目やで……」

抜き取るとブランクチケットではなく、チケットがあった。

イラストはプレシアで年号、月日も記載されており、年号は二枚目より後になっていた。

「いつ、パスに三枚のこんだけチケットを入れたのかな？」

リュウタロスは三枚のチケットをどうやって収納したのか考え出す。

「いつ、誰が入れたのかはわかるよ」

「」「え？誰？」「」

良太郎以外の全員が声を合わせた。

「この人だよ」

三枚目のチケットを皆に見せる。

「誰だよ？このオバサン」

当人が聞いたら落雷が落ちそうな事をモモタロスが言う。

「プレシア・テスタロッサ。フェイトちゃんのお母さん」

「何か妖艶な人だねえ。釣りがいがあるよ」

相手が女性なら敵味方問わず、『釣り』をしようとするのがウラタロスである。

「オマエはナンパそればかりやな」

キンタロスは呆れるだけだった。

「怖そうなオバサンだねえ」

リュウタロスの第一印象は『怖い人』のようだ。確かに愛想のいい人に見えないことには違いないが。

「でも、これで確定したね。プレシアさんは間違いなく僕に真実を知るように勧めているって事が」

良太郎はテーブルに三枚のチケットを年号順に並べ替える。

「で？良太郎、オマエはそのオバサンの言葉に乗るのかよ？」

「もちろん」

モモタロスの問いかけに良太郎は即答する。

「罨かもしれないよ?」

「たとえ罨だったとしても、今より前に進めると思うんだ」

罨だとほのめかすウラタロスの一言にも良太郎の決意は揺らがないかった。

「行かな真実は掴めんしなあ。良太郎、俺は行く事を勧めるで」

「うん。ありがとう」

キンタロスは良太郎の決意を察してか応援した。

「でも良太郎、どうするの?皆で行くの?皆で行ったらなのはちゃん達はどうなるの?」

リュウタロスなのは達の事を心配しながら、良太郎に今後の事を訊ねる。

「そうだね。なのはちゃんやフェイトちゃん達の事もあるから、皆で行く事はできないね。だから……」

「二つに分かれるしかないね。良太郎と一緒に過去に行くメンバーとここでなのはちゃん達のジュエルシードをイマジンから守るメンバーに、ね」

ウラタロスが良太郎に代わって今後の提案をした。

「だったら、どうやって決めるの?僕、なのはちゃん達のいるここがいい!」

リュウタロスは残留組の立候補する。

「リュウタが残るなら僕も残るしかないよね」

リュウタロスの面倒係としてウラタロスも残留組となる。

「カメの字がナンパに走らんようにせなアカンから、俺も残るしかないな」

キンタロスも残留組となった。

「てことはよ、俺とコハナクソ女が良太郎と一緒に行くって事か?」

「そうなるけど、アイツ(ウラ、キン、リュウ)らを残していくのも不安なのよね」

コハナとしてはモモタロスと良太郎で過去に行くとも不安であり、

残り三体を置いていくのも不安らしい。

「ハナさん。僕とモモタロスなら大丈夫だから、ここに残ってあげて」

「良太郎……」

「大丈夫だから、安心して」

何か言おうとするコハナを良太郎は静かで穏やかだが有無を言わせぬ迫力で留めた。

「良太郎がそこまで言うならいいけど、モモ！良太郎に迷惑かけるんじゃないわよ！」

「うるせえ！オメエに言われなくてもわかってるよ！コハナクソお……ぶっ」

一度目は見逃したが、二度目は許さなかったらしくコハナの正拳がモモタロスの腹に直撃した。

*

夜となり、海鳴の街には電飾が太陽に代わって人々の光となっていた。

高町家の食卓は相も変わらず賑やかに始まって終わった。

皆がリビングで寛い中、変化が起きた。

変化の原因は赤いイマジンド。

「あー、俺、ちよつと明日から出かけてくるんで、とつつあん。カミさん。コイツ等のこと頼むぜ？」

モモタロスの切り出しに先程の団欒とした空気は一瞬にして変わった。

「出かけるというと、遠くにかい？」

「ああ、遠くだ。上手く行けば明日の夜までには帰ってこれると思うぜ」

士郎が訊ねるとモモタロスは差し障りない返答をした。

「遠くってどこ？モモ君」

高町美由希がお茶を飲みながら訊ねる。

「あー、まあ、遠くなんだよ！」

強めの口調で答えた。「過去に行ってくる」なんて言える訳がない。その態度で何かを感じた者がいた。

高町なのはとユーノ・スクライアだ。

一人と一匹はモモタロスの側まで寄る。

テレビを見ていたリュウタロス、恭也と腕相撲をしていたキンタロス、そしてその審判をしていたウラタロス、桃子の手伝いとして食器を片付けているコハナは一人と一匹が「何か察したな」と感じたが、それを態度で表すわけにはいかないのですぐに先程までしていた事を続行する事にした。

「モモタロスさん、もしかして……」

「それ以上は喋るなよ」

モモタロスはなのはにそれ以上、口を開く事を控えさせるために先手を打った。

ここはリビングで、誰が聞き耳を立てているかわからない。

魔導師同士ならこう言った時、人目も気にせずに『念話』を使用するという手段があるが、魔導師とイマジンとなるとそのような手段はない。

「は、はい」

なのはは察し、頷いた。

ユーノもなのはの表情を見てわかったので、首を縦に振る。

「さてと、明日は早いからな。俺は先に寝るぜ」

なのはの頭にポンと手を置いてからモモタロスは寝床が置かれている道場に向かった。

野上良太郎、フェイト・テストアロッサ、アルフが住んでいるマンション。

「明日から出かける？」

「うん、上手くいけば明日の夜には帰ってこれると思うけど……」

フェイトが明日の予定を告げる良太郎の言葉に耳を疑った。

夕食が終わり、食器の片づけをしながら良太郎はフェイトとアルフに告げた。

「どこに行くんだい？」

アルフが昼間に良太郎が買ってきてくれたドッグフードを食後のデザート感覚で食べていた。

「ちよつと遠くまで……かな」

良太郎は正直に打ち明けるわけにはいかないのです、はぐらかすしかなかった。

（多分、この二人だったら僕が過去に行くといつても信じてくれるだろうけど……）

言ったとしても、「何のために行くのか」と訊ねられれば真相を打ち明けなければならなくなる。

そうならば自分は嘘を吐きとおせるとは思えない。ウラタロスの力を借りればどうにかできるかもしれないが。

「でも、これから忙しくなるのにさ。明日の用事ってのはジュエルシードを回収し終わってからってわけにはいかないのかい？」

アルフにしてみれば「何故このタイミングで？」という部分が占めているらしく、良太郎に思いとどまらせようとする。

「アルフ、駄目だよ。良太郎にも都合があるんだし……」
フェイトがアルフを止めようとする。

「でもさー良太郎、アンタだつてわかつてるんだろ!？」
フェイトの制止に応じながらも、アルフは言う。

アルフが何を言いたいのか良太郎には理解できていた。
プレシアのフェイトに対する折檻だ。

回収に時間がかかればかかるほど、いかに結果を出しても折檻は免れないだろう。

「……わかつてるさ。もちろん」

ポロリと本音を言いそうになったが何とか耐えた。

水道の蛇口を止め、タオルで濡れた手を拭く。

「だからこそ、行くんだ」

良太郎はフェイトとアルフに聞こえないように決意と覚悟を決めてつぶやいた。

明日に備えていち早く就寝に入ったモモタロスだが、寝付けなかったので道場の外に出ていた。

何かをしているわけでもなく、ただ夜空を見上げているだけだった。

「何か、姉ちゃんの時みたいでややこしくなりそうだけ」

誰もいない事をいい事にモモタロスは本音をつぶやいた。

彼の言う「姉ちゃん」とは野上愛理の事である。

「モモ」

後ろから少女の声がしたので、振り向くと高町美由希が幼いころに着ていたと思われるパジャマを着ているコハナだった。

「何だ、コハナクソ女か。どうしたんだよ？」

モモタロスがいつもの呼び方をしたのでとりあえず腹ではなく、頭部への拳骨で済ませてから隣に座った。

「アンタこそどうしたのよ？」

「殴ってから言う台詞じゃねえだろ！」

モモタロスは頭部を撫でながら文句を吐く。

「愛理さんの時みたいにややこしくなりそうだって言ってたじゃない？」

「どうやら本音が聞こえていたようだ。」

「まあな。だって、そうだろう？あのフェイトってガキは間違いなくワケありだけ。チケットがあんな風になるんだからな」

「確かに普通じゃないわよね。特異点にチケットかざしてもあんな事にはならないし……」

コハナの言うように、特異点にかざしてもチケットは特異点が最も記憶に残っている年号と月日が記載され、フェイトのようにはならない。

「ねえ、モモ」

「何だよ？コハナクソ女」

いつもの反応がなかったので違和感を覚えたが、モモタロスにしてみればありがたかった。

コハナは話を続ける。

「良太郎はフェイトって子やその周りの真実を知ってどうするのかしら？」

「さあな。アイツのことだから自分の腹の中だけで受け止めるだろう。そのガキにとって必要なら伝えるかもな」

野上良太郎は決して『真実』からは逃げない。

たとえそれが、どんなに残酷で悲惨な『真実』だったとしてもだ。「さてと、そろそろオマエも寝ろよ？明日は早いんだからよ」

モモタロスは道場に戻ろうとする。

「わかつてるわよ。モモー！」

「ん、何だよ？」

「アンタに言う言葉じゃないかもしれないけれど、その、気をつけてね」
「ああ、わーつてるよ」

モモタロスは自分の寢床に戻って、今度こそ眠る事にした。

高町家でそのような事があった頃。

ソファで寝転がっている野上良太郎もなかなか寝付けなかった。

ケータロスで時間を見る。

午前零時三十二分。日は変わったが、普段ならまだ起きている時間だった。

「眠れないや」

良太郎はテーブルに置いてあるテレビのリモコンに触れ、電源を押す。

映像が映り、深夜ドラマが始まっていた。

「この時間帯のドラマなんてあんまり見ないからなあ」

それは別世界別世界だろうと自分の世界だろうと変わらない事だ。

しばらくボーっとテレビを見ていたが、自分に合いそうにないと判断したのか電源を切った。

「やっぱり眠れないなあ」

こういう時は本でも読んで眠気を誘いたいのだが、周辺を見回しても本と呼べるものは以前に購入したチエスの本かタウン誌のふたつぐらいしかない。

タウン誌は正直読み飽きたので、チエスの本を手にする事にした。

本を開いて目を通し始めてから五分後のことだ。

「良太郎、起きてるの？」

既に寝室で寝ていたはずのフェイト・テスタロッサが髪を下ろして、パジャマ姿で枕をぬいぐるみを抱きしめるようにして、リビング

にやってきた。

「うん、何か寝付けなくてね。フェイトちゃんは？」

「わたし？わたしはその……ええと……」

フェイトは良太郎に訊ねられた途端に、枕で口元を隠して目を泳がせていた。

「？、座ったら？」

事情はわからないが良太郎はフェイトに隣に座るように促す。

「う、うん」

フェイトはゆつくりとだが隣に座る。枕はまだ抱きかかえている。

「明日、というより今日なんだね？」

「そうだね。なるべく早く帰ってくるようにするよ」

「うん」

「もしかして、それを聞きに？」

良太郎がそう尋ねると、フェイトは首を横に振る。

「ち、違うよ。ええとね、その……」

ちらちらとフェイトが見てくる。

だが、良太郎はフェイトから言ってくるのを待っている。こちらから尋ねる気はない。

「りよ、良太郎……あのね……その……」

「うん」

「もしも、だけどね。その……よかったらなんだけど……」

「うん」

「一緒に寝てくれる？」

「え？」

こればかりは頷かなかった。

「フェイトちゃん、今何て？」

我が耳に入った内容は実は間違いでは？と思っただけで聞き返す。フェイトは先程の一言ですでに顔を真っ赤にしていた。

「ま……また言うの？」

こちらをちらちら見ながら言ってくる。

今の彼女にもう一度同じ事を言えということは言えない。

というより言っではならないと判断した。

「ええと、何で？」

一緒に寝る事自体は良太郎は反対ではないが、理由は尋ねる事にした。

尤もフェイトが変な理由でこんな事を申し出るわけがないし、少なくとも今までのフェイトにはなかったことだからだ。

「ええとね。その……良太郎、前にわたしに言っただよね？もつとワガママになっていいって、だから……その……」

「ああ、なるほど」

良太郎はフェイトが何を言いたいのか理解した。フェイトは初めて自分からワガママを言ったのだということ。

確かに以前、フェイトに「もつとワガママになってもいい」と言っただ事がある。

ならば自分は出来る限り、それを受け止める義務がある。

「わかったよ。フェイトちゃん」

良太郎はそう言うと、フェイトの頭を撫でる。

「ありがとう。良太郎」

良太郎はその後、フェイトと共に寝室へと向かい、ベッドで眠る事にした。

フェイトが服を掴んで離してくれなくなったが、良太郎は不快に感じることなく熟睡した。

午前八時八分八秒。

デンライナーが走っている『時の空間』へと野上良太郎とモモタロスが向かう時刻であり、真実への旅路への発車時刻でもある。

第二十五話 「デンライナーの車窓から ー 真実への
路線」

午前八時七分四十九秒。

通学をしている学生や通勤をしている社会人が目立つ時間帯と
いってもいい。

残り十九秒で数字がゼロ目となり、近くにあるドアを開くとデンラ
イナーが走る『時の空間』へと行くことが出来る。

野上良太郎とモモタロスはそれぞれ仲間に見送られてから、近くの
コンビニエンスストアにいた。

「モモタロス。そろそろだよ」

「おう、わーつたよ。せつかくいいところだったのによ……」

テレビ雑誌を読んでいた良太郎は雑誌を元あつた場所へと戻し、隣
で週刊漫画雑誌を読んでいたモモタロスに声をかけた。

モモタロスは未練がましいのか名残惜しそうに漫画雑誌を元あつ
た場所に戻す。

二人はコンビニのトイレへと通じるドアの前に立つ。

良太郎は腕時計を見て時刻を確認する。

「八時八分二秒。あと六秒」

良太郎はドアノブを握る。

チャンスは一度で失敗すれば一時間以上、待たなければならない。

「四、三、二、一。今だ」

ドアノブを回して、良太郎とモモタロスは飛び込んだ。

彼等が『時の空間』へと向かった後に、トイレに入ろうとした客が
「あの二人が消えた！」と騒いでいた事など彼等は知る由もない。

*

空は先程とは変わって、昼のような夕方を思わせる色彩をしてお
り、周囲はビルもなければ民家もない、モニュメントバレーを思わせ
る一面の荒野。

ここが『時の空間』である。

トイレへの入口のドアから入った良太郎とモモタロスの前には一人と一体を待ち構えているかのようにデンライナーが停車していた。デンライナーのドアが開き、見知った女性が顔を出した。

デンライナー食堂車で唯一、アルバイトをしている女性のナオミだ。

「良太郎ちゃん、モモタロちゃん！お久しぶりでーす！」

満面の笑顔と両手を振って、一人と一体を迎えてくれた。

ナオミの後をつけるようにしてデンライナーに乗車する良太郎とモモタロス。

「ん、ピアノの音？」

「何でデンライナーから聞こえるんだよ？」

良太郎とモモタロスは乗車直後に聞こえてくる音に関してナオミに訊ねた。

「すぐわかりますよお」

ナオミは正確に答えようとはせずに、一人と一体についてくるように促す。

食堂車に入ると、そこにはスーツを着て、ステッキを横に置いてナオミが作ったと思われる旗付きチャーハンを食べているオーナーがいた。

オーナーは良太郎とモモタロスを見つけると、右手に持っていたスプーンを置く。

「お久しぶりですねえ。良太郎君にモモタロス君」

「お、お久しぶりです。オーナー」

「よお、オツサン。元気してたかあ？」

良太郎とモモタロスはそれぞれのやり方で挨拶する。

「ナオミ君、私とモモタロス君にコーヒーを。良太郎君にはジュースをお願いします」

「はい。わかりましたあ」

ナオミはカウンターに向かい、準備に取り掛かった。

「オーナー。さっきから気になっていたんですけど、このピアノは？」

良太郎が先程から気になっていたピアノの音について問う。

ピアノは食堂車に設置してあった。カウンターと向かい合う位置、つまり今、良太郎がいる場所の左側にあるということだ。

「ええ、食堂車も今まで地味でしたからねえ。ちよつと盛り上げようと思ひまして、彼を雇ったんですよ」

良太郎はピアノを演奏している人物を見る。

モモタロスも釣られるように見る。

「こ、この人って……」

「オッサン、よく雇えたな」

演奏者を見て良太郎とモモタロスは驚かずにはいられなかった。

演奏者とは以前、良太郎達が救い損ねたピアノ演奏者だった。

彼は今も、熱心にピアノを弾いている。

「いえ、私が声をかけても何も反応しませんでしたけど、ここにピアノを設置したらいつの間にかいたんですよ」

「オッサン！ それ雇ってねえよ！ ただ居座ってるだけじゃねえか！」

「確かにあの人と話し合つて受け入れているわけじゃないから、雇っているわけじゃないですよ」

モモタロスと良太郎がそれぞれツツコミを入れる。

「まあどんなかたちであれ、彼はしばらくここでピアノを弾きますから良太郎君達もそのおつもりで」

オーナーは強引に話を締めくくると良太郎はパスから一枚のチケットを取り出し、オーナーに見せた。

それはフェイトにかざした時のチケットだ。

「良太郎君、これは誰かが作った物ですか？」

良太郎は首を横に振る。

「いえ、ある女の子にかざしたらこんな結果だったんです」

「ふむ。正規の方法で作成したのに、このような結果ですか……」

良太郎がチケットの結果にいたるまでの事を説明すると、オーナーはチケットを持っている手とは逆の手であごを擦りながらチケットを凝視する。

「これは大変珍しい事例ですねえ」

「珍しい？」

良太郎はオーナーの台詞に聞き返す。

「ええ、チケツトはあくまで人の記憶を読み取るだけのものであって、それ以外の機能は備わっていないんですよ。そのため、チケツトをかぎされた人間の記憶に問題があると、このような現象が起きてしまうんですよ」

「どうしてこんな事が起こるんですか？」

「推測ですが、誰かに植え付けられた記憶なのかもしれませんねえ」

「植え付けられた記憶？」

良太郎が聞きなれない言葉なので聞き返す。

「実際にはそんな事をしてはいないのに、『した』という偽の記憶を植え付けるんですよ」

「じゃあ、もしかして……」

「ええ、良太郎君がチケツトをかぎした女の子、ええと誰ですか？」

「フェイトちゃん。フルネームはフェイト・テストアロツサさんです」

「フェイトさんも誰かに記憶を植え付けられた可能性があるという事ですねえ」

オーナーは良太郎にチケツトを返す。

「何のためにだよ？オツサン」

「さあ、そこまでは……。ただ、このようなことができるといふ事はその人物は相当の切れ者で知識人になりますねえ。かじり程度の知識ではまずできませんからねえ。記憶の植え付けなんて……」

「そう、ですね」

良太郎にはフェイトに記憶を植え付けた人物が誰なのか見当がついていない。

だが、確証はなかったの口には出さなかった。

「まだ、私に見せたいものがあるようですねえ。良太郎君」

「は、はい。次はこれを見てほしいんです」

それはフェイトとプレシアが写っている写真のコピーだった。

実は良太郎、昨日『翠屋』に行く際にフェイトに了承を得てこの写真をコンビニでコピーしたのだ。

「この女の子がフェイトさんですか？」

「はい」

オーナーはじつとコピー用紙を見ている。

「幸せそうに写ってますねえ」

そんな感想をオーナーは述べる。

「この女の子にチケツトをかざすと先程見せていただいた状態になったというわけですねえ」

オーナーの表情は険しくなっている。

「結論から言いましよう」

オーナーはコピー用紙を良太郎に返すと、じつと良太郎を見る。

良太郎は思わずごくくつと喉を鳴らしてしまう。

「この写真の人物がフェイトさんと同一人物と考えるのは少々疑問になりますねえ」

「そうですか……」

良太郎は驚かなかつた。予想していた答えだからだ。

「して、フェイトさんとこの写真の女性との現在は何？」

「良好とはいえませんが。折檻、いや虐待を受けていますから」

良太郎はプレシアがフェイトを鞭で叩いている現場を見たわけではない。だが、フェイトの身体についた痕は痛々しいものだったため、目に焼きついていた。

思い出すだけでも、怒りがこみ上げてくる。その証拠に拳がプルプルと震えているのだから。

「良太郎？」

普段は見せない感情を露にした良太郎から噴出す雰囲気は今までモノとは別質らしく、モモタロスには隣にいる人物が良太郎なのか疑ってしまった。

オーナーも黙してこちらを見ている。

「……ごめん。ちよつと思ひ出しちゃってね。オーナー、続きをお願いします」

良太郎はモモタロスとオーナーに謝罪し、

「わかりました。では続けましょう。フェイトさんと写真の少女が同一だった場合、良太郎君が話してくれた現在と合わせてチケツトをか

ざすと多分、この年号と月日が出てくるはずですからねえ」

オーナーはスプーンを指し棒のようにして良太郎が持っているコピー用紙の年号と月日の部分を指す。

「しかし、チケットに記載されたのは年号も月日もデタラメだった」

「そうです。だから、疑問を持つてしまったわけなんですよ」

オーナーは一息吐く。

「ますます行かないといけないね」

「ああ、まったくだぜ」

良太郎とモモタロスも手近な席に座り、一息吐く。

「コーヒーとジュースお持ちしましたー」

カウンターにいたナオミがオーナーとモモタロスにはコーヒーを、良太郎にはジュースを渡してくれた。

「どうも、ナオミ君」

「ありがとう。ナオミさん」

「おう、悪いいな。ナオミ」

三者三様にナオミに礼を言うと、それぞれ狙ったかどうかかわからないが、同じタイミングで口につけた。

「良太郎君、写真の人物とフェイトさんが同一だと証言したのは……」

「直接聞いたわけではありません。僕だってチケットの事がなければ何も疑問に抱かなかったと思います」

「おい、オツサン。それ誰なんだよ？良太郎も知ってるんだったら教えてろよ！」

モモタロスが二人の会話についていけないのか、それとも単にイラついているだけなのか二人に答えを吐くように急かす。

オーナーは良太郎の手からコピー用紙を取り、モモタロスに渡す。

「この写真の人物とフェイトさんが同一人物だという証言はフェイトさんのみの証言でしか得られていないですよねえ」

「そのフェイトの記憶は誰かに植え付けられたモンだつてことだから、つまり……」

オーナーが言った事をモモタロスが続ける。

「写真の女の子とフェイトちゃんが別人だとも考えられる、かな」

良太郎が締めくくった。

二人と一体はそれぞれの飲み物を口につけ、気持ちを落ち着かせる。

良太郎はモモタロスからコピー用紙を取り上げて、見る。

ここにいる面々はかつてこれと似たような事に出くわした事がある。

『桜井侑斗の失踪と野上愛理の記憶喪失』に関する時だ。

この一件、実は良太郎の証言でしか得られていない部分が多すぎる場所があった。

それはつまり、良太郎の証言が間違っていればそれだけで根底から覆されることになるということだ。

実際、その通りになったわけだが。

今こうしてフェイトの事に関して自分がそれなりに事実を受け止めて取り乱さなかったのは、この経験があったからかもしれない。

「それで良太郎君、これからどうするつもりなんですか？そのチケットでは過去へはいけませんよ？」

「大丈夫です。チケットは他にもあるんです」

そう言うと、パスから三枚のチケットを取り出す。

「ほお、三枚も……」

オーナーはその三枚を手にして凝視する。

「年号がそれぞれ、違っていきますねえ。こういう場合、古い順から先に行くというのがセオリーでしょう。そもそもの始まりにもなるはずですからねえ」

オーナーはチケットを良太郎に返す。

良太郎はチケットの一枚をパスに差し込んで、デンバードが格納されている一号車へと向かう。

デンバードにパスを差し込むと、デンライナー前面の方向幕相当部分に、次に向かう年号と月日が表示され、デンライナーはゆっくりと起動し、やがて列車を敷設、撤去しながら走り出した。

*

ここは海鳴市にあるマンション。

フェイト・テスタロッサはリビングでストレッチをしながらコン
ディションを確認していた。

背中を反ったり、足を伸ばしたまま指を地に付けようとしていたりして
いた。

「フェイトオ。今日から再開するけど身体はどうなんだい？」

アルフはドッグフードの缶詰を空にしてから訊ねる。

「うん、だいぶよくなったよ」

アルフの確認にフェイトはお決まりの返答をする。

(回収するくらいには回復したけど……)

そこで白いバリアジャケットを着用した少女や、イマジンのことを
思い出す。

(戦い出来るほどには至っていない……かな)

ストレッチを終えてから、指を動かす。

(良太郎、無事に帰って来てね)

フェイトは口には出さなかったが、良太郎の無事に帰還することを
願っていた。

*

「フェイトちゃん？」

ピアノの演奏を聴きながら食堂車で昼食を摂っていた野上良太郎
は箸を止めて、天井を見上げた。

「良太郎、どうしたんだよ？」

対面にいるモモタロスも箸を止めていた。

「いや、何でもないよ」

「そっか」

良太郎はモモタロスに余計な心配をかけさせたくないし、特に深刻
な事でもないのでそう告げた。

モモタロスは良太郎の回答に納得したのか、また昼食を摂る事を再
開した。

「間もなく、指定した時間へと停車しまーす」

ナオミが食堂車を基点にして客車にアナウンスを流した。

だが、ピアノが中断される事はなかった。

アナウンスが終わると、またピアノの音が食堂車内を支配していた。

「行こう。モモタロス」

「おうよー」

良太郎とモモタロスはテーブル席から立ち上がり、食堂車を出ようとする。

「良太郎ちゃん、モモタロちゃん。頑張ってくださいー！」

ナオミが両腕をぐつとして笑顔で応援してくれた。

オーナーは右手を軽く挙げて、「ご武運を」とても言いたげなポーズを取っていた。

デンライナーのドアが開き、一人と一体は過去へと足を踏み入れた。

空は蒼く、地上は見渡す限りの草原だった。

平和な場所だなあと良太郎は降車して足を踏み入れた感想だった。

「何もねえな」

「うん。でも、いいところだね」

「ああ、できるならのんびりしてえところだが、そういうわけにはいかねえからな」

良太郎とモモタロスは周囲を見回す。

本当に何も無い。

とてもここで何かが起こるとは思えなかった。

「僕達はここで何をすればいいんだろう？」

「オメエが知らねえのに俺が知ってるわけねえじゃねえか」

モモタロスの言う事も尤もだった。

良太郎とモモタロスは当てもなく広大な草原を歩き出す。

時間はあるようでないのだ。だから、止まるよりも進む事を選んだ。

歩き始めて十五分くらいが経過する頃。

山と森を切り拓いて設立されたと思われる工業地帯が見えた。

「あの中に入れば何かわかるかな？」

「かもな」

良太郎とモモタロスは工業地帯という新たな目的地を定めると、歩く速度を速める。

そんな中、左耳に声が入ってきた。

「良太郎、何か来るぜ」

モモタロスが先にこちらに向かってくるモノを先に見つけた。

「何だろ？」

一人と一体は立ち止まってみる。

危険なモノなら迎撃すればいいと考えていた。

「すいませーん」

人間の、女の子の声だ。

しかも良太郎にとってはとても聞き覚えのある声だ。

女の子を追いかけるようにして、一人の女性と一匹の山猫も来た。

その女性も良太郎は見覚えがあった。

女性はプレシア・テスタロッサだ。

だが、彼女から出ている雰囲気は自分が知っているプレシアとは全く違っていた。

「もうっ、はしゃいじゃって仕方ない子ね。どうもすいません」

そう言いながらプレシアは女の子を笑みを浮かべながらたしなめ、こちらに謝罪してきた。

「あ、いえ。お気になさらずに……」

山猫が女の子に纏わりついていた。

「リニスう。お母さんと一緒に追いかけて切れたのお。偉いねえ」

女の子がしゃがんで山猫を撫でていた。山猫も幸せそうな表情をしていた。

「あ、そうだった」

女の子は自分が駆け寄ってきた目的を思い出したのかポケットからカメラを取り出してきた。

「すいません。写真お願いしていいですか？」

そう言いながら、女の子は良太郎にカメラを渡してきた。

「あ、はい」

良太郎は女の子の頼みを流されるかたちで了承した。

「お母さん！リニス！こっちこっち」

「もう、この子つたら強引に……」

「にやあ」

プレシアと山猫のリニスも女の子に流されるように動く。

良太郎はカメラを構えながら二人と一匹の構図を見る。

（あれ、この構図。見たことがある）

リニスはじっとする事に飽きたのか、蝶を見つけると追いかけ始めた。

女の子もプレシアも気づいていない。

「では、撮ります」

女の子もそろそろ焦れる兆候を感じ取った良太郎はシャツターを押す。

「はい。ごめんね。その……猫、写しそびれちゃった」

「ううん、リニスはじっとするの苦手なんだから仕方ないよ」

女の子は良太郎からカメラを左手で受け取った。

（左手？）

そういえばカメラを渡してきたときも左手でカメラを持っていたような気がする。

フェイトの行動を思い出す。

箸を持っているフェイト。

食器を拭くときのフェイト。

ドアノブを握るときのフェイト。

（フェイトちゃんは右手だった）

「……さん」

「おい、良太郎」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「お兄さん！」

「良太郎！」

女の子とモモタロスだった。

どうやら、意識は別のところに行っていた様だ。

「写真撮ってくれてありがとう！お兄さん！」

そう言うと、女の子はまた走り出した。

「にやあ」

と言いながらリニスも追いかける。

「この子のワガママに付き合っていたら、どうもありがとう。感謝します」

プレシアも礼を言い、一人と一匹を追いかける事にした。

その場には良太郎とモモタロスが残っていた。

良太郎はポケットからコピー用紙を取り出す。

「この写真、撮ったの僕だったんだ」

「俺達のこの時間で出来る事ってのはこれで終わりか？」

「多分ね。それにわかったこともあるし……」

そう言いながらコピー用紙をポケットに納める。

「何だよ？わかったことってのはよ？」

「あの子がフェイトちゃんかどうかってことだよ」

「で、どうなんだよ？早く言えよ」

モモタロスは良太郎を急かす。

良太郎は一息吐く。そして、

「あの子とフェイトちゃんは全くの別人だよ。フェイトちゃんは右利きで、あの子は左利きだったからね」

第二十六話 「デンライナーの車窓から 見た少女」

野上良太郎とモモタロスが三枚あるチケットのうち、一枚目の過去の時間へと足を踏み入れている頃。

高町家では

「良太郎とセンパイ、上手くやってるかなあ」

庭でウラタロスが自作の釣竿で紙で描いた魚を釣って遊んでいた。

「モモの字だけやったら心配やけど、良太郎がおるんやから問題ないやろっ。」

キンタロスも庭で四股を踏んでいた。

「いーじゃん♪いーじゃん♪すげーじゃん♪」

リユウタロスは自前のシャボン玉を発射する銃の引き金を絞りながら庭で踊っていた。

「アンタ達！遊んでないで手伝いなさい！」

テーブルを拭いていたコハナは庭で遊んでいる三体のイマジンに怒鳴りつけた。

「「はーい」」

三体のイマジンは渋々と面倒くさそうに手伝い始めた。

*

野上良太郎とモモタロスはデンライナーへと戻っていた。

食堂車はピアノの音が響き渡っているが、演奏者が奏でる曲は『癒し』をもたらす曲ではないことが残念とさえ残念かもしれない。

「まさか、この家族写真を撮ったのが良太郎だったとはな」

モモタロスがフェイト・テストアロスと瓜二つの女の子とプレシア・テストアロスが写っている写真をコピーした用紙を見て、先程の出来事を振り返っていた。

「多分だけど、この時間での僕達の役割はもうないと思うよ。チケットのイラストである二人には会ったしね」

一枚目のチケットのイラストはプレシアとフェイト似の女の子

だった。

その二人と出会い、フェイトと自分が出会った女の子が別人だとわかっただけでもこの時間に来た意味は充分にあった。

残りのチケットは二枚。

次に向かうべき時間のチケットのイラストは女の子一人だけのものだ。

ちなみに一枚目のチケットは役割を終えて、消滅している。

どうやら片道切符だったらしい。

「よし、次の時間に行こう」

「おうー！」

良太郎とモモタロスは一号車に向かい、チケットをセットしたパスをデンバードのキーボックスへと差し込む。

デンライナーの前頭部分に年号と月日が表示され、停まっていた車輪が動き始めた。

空の空間が歪み、『時の空間』へと通じる穴が発生するとデンライナーは空中に線路を敷設、撤去しながら向かって行った。

穴へと突入したデンライナーは『時の空間』に入り込み、良太郎とモモタロスにしてみれば見慣れた風景が窓から見えていた。

モニュメント・バレーを思わせる荒野だ。

「なあ、良太郎」

「なに？モモタロス」

一号車から食堂車へと向かっていく道中、モモタロスが真剣な表情で良太郎に声をかけた。

「一枚目のチケットでよ、あのガキとオバサンすげえ幸せそうだったよな？」

「……うん、そうだね」

モモタロスが何を言いたいのか良太郎は察した。

「てことはよ、これから俺達が見ようとしてるものってのはよ、やっぱり……」

「……うん、モモタロスの考えているとおりだと思うよ」

「……辛えよな」

「……うん」

それでも、停まるつもりはない。
いや、停まるわけにはいかない。

プレシアが言った『真実』にまだ辿りついていないのだから。
行く前からある程度はわかっていたはずだ。

自分達が見ようとしているものは決して虚飾で彩られたものではない事を。

残酷で無慈悲にも思えるものだという事を。

食堂車に戻ると、オーナーは旗付きチャーハンを食べていた。

「良太郎ちゃん、モモタロちゃん。お帰りなさい。何か飲みます？」
ナオミが笑顔で迎えてくれた。

「いや、俺いいわ。喉渴いてねえし」

モモタロスは断って、自分がいつも使っているテーブル席にどつかりと腰を下ろした。

「ナオミさん、僕は水をお願いします」

良太郎はとりあえず、水分を摂る事にした。

「はい、わかりましたー」

ナオミはカウンターへと行く。

すぐに水を入れたグラスを持ってきてくれた。

「はい、良太郎ちゃん。お水ですよー」

「ありがとう。ナオミさん」

良太郎はグラスを受け取り、一気に飲む。

「……はあ」

空になったグラスを置いてから一息吐く。

「オメエが一気飲みなんて珍しいな」

「これから行く時間で起きる事が僕達が予想している事だと思ふとき……。水でも飲んで強引に気持ちを落ち着けないと、もたないよ」

「良太郎……。で、落ち着いたのかよ？」

モモタロスが良太郎の名を呟き、落ち着いたかどうか確認する。

「何とかね」

良太郎は笑みで返す。

「まもなく、指定した時間へ到着しまーす」

ナオミのアナウンスがデンライナーに伝播したとき、デンライナーは『時の空間』から現実空間へと通じる穴を抜けて、地上に向けてレールを敷設しながらデンライナーは向かって行った。

デンライナーが停車してドアが開くと、良太郎とモモタロスが降車した。

「ここが二枚目のチケットの時間……」

良太郎は周囲を見回している。

「一枚目と大して変わんねえなあ」

モモタロスも周囲を見回しながら、感想を述べた。

「それでもないよ」

良太郎は指差す。そこには、巨大な発電所のような建物がいくつも建っていた。

「あれは、一枚目の時間には殆どなかったでしょ？」

「あ、言われてみりやそうだな」

よく見ると一枚目の時間に比べると、都会的な場所だ。

それは良く言えば『近代的』であり、悪く言えば『窮屈』ということだ。

「二枚目はガキに会うんだよな？」

「多分ね」

「でもよお、これどこ探しゃいいんだよ？向こうからやってくるの待つか？」

「そんな時間もないし、とにかく手分けして……あれ？」

「どうしたんだよ？良太郎って、おい、あれまさか……」

良太郎とモモタロスはこちらに向かってくる小柄な物体二つをじつと見ていた。

見覚えがあるのだ。

「良太郎。オマエ帰ったら相当ひでえ目に遭うぞ？間違いない」

「口に出さないでよ。現実になりそうで怖いんだから……」

こちらに向かってくる小柄な物体とは、自分達が探していた女の子と山猫のリニスだった。

*

雷が常に鳴り続け、雲が螺旋状に渦巻く高次空間。

『時の庭園』はそんな不気味な景色を背景に一枚の絵にしてもよいくらいに溶け込んでいた。

主であるプレシア・テスタロッサはそんな不気味な空間を見つめていた。

彼女の身体から砂がこぼれる。

砂は水溜りくらいの大ききになると、それはやがて同じ大ききくらいに分裂した。

「ジユエルシードを集めなさい」

そう言うと、二つの砂は人の姿を象っていく。

人というよりは怪人だろう。何せ、顔が魚のタラなのだから。

タラ型のイマジジン——コツドイマジジンは光の球体となって、『時の庭園』から出て行った。

*

「あ、あの時のお兄さんと赤い人だあ！」

「にやにやあ」

野上良太郎とモモタロスに向かってくる一人の少女と一匹の山猫は更に速度を上げて寄ってきた。

「また、会ったね」

「よお」

一人と一体は当たり障りのない挨拶をした。

「あの時は写真撮ってくれてありがとう。お兄さん」

「いえいえ」

笑顔で礼を言ってくる少女に良太郎はどう対処したらいいか戸惑う。

「今日は母ちゃんはどうした？」

モモタロスがプレシアのことを訊ねると、女の子の表情は途端に暗くなった。

「…………お母さんは今日もお仕事なの」

「…………にやあ」

女の子が言うのと、山猫も沈んだ声で鳴く。

「あー、悪かったな」

モモタロスは後頭部を掻きながら、女の子に謝る。

「ううん、赤い人は悪くないよ」

女の子は首を横に振る。

「ところで、お兄さん達はどうしたの？」

「え、ええとね……」

女の子の当たり前といえば当たり前の質問に良太郎は返答に悩んだ。

「君に会いに来た」なんて言える筈がない。

「もしかして、お兄さん達ヒマなの？」

女の子は回答に悩んでいる良太郎に焦れたのかこれからのことを訊ねてきた。

「え？」

これもまた回答に困る質問だった。

自分達は『真実』を知るために無駄に時間を消費するわけにはいかない。

だが、『この時間で得られる真実』は何一つ得ていない。

自分の眼前には『この時間で得られる真実』の鍵となる少女がいる。

少女のこれからの行動に何か意味があるのでと深く考えてしま

う。

「そう、だね。暇といえば暇なのかな」

「じゃあ、少しだけ遊べる？」

「にやあ」

女の子と山猫は上目づかいで良太郎を見ている。

「うーん、わかったよ。ずっとってワケにはいかないけどいい？」

「うん！いいよ！」

女の子は笑顔になった。

「そうだ。名前言ってなかったよね。わたし、アリシア。アリシア・テスタロッサ。お兄さんは？」

「僕は野上良太郎。そして、隣にいる赤い人はね……」

「モモタロスだ。憶えとけよ？」

互いに自己紹介をした面々はアリシアとリニスの案内でテストロッサ家へと向かった。

テストロッサ家は一軒家でもなければマンション及びアパートの一部屋というわけではなかった。

プレシアの仕事場である工場の近辺にある研究室の一室だった。研究室を改造して設けられている生活空間は、親子二人と猫一匹が生活するには問題ない広さだったりする。

現在の仕事が片付き次第にすぐに引き払うつもりなのだろうか、最低限の装飾しか施されていなかった。

質素ではあるが、生活感がないというわけではない。

「どうぞ。ここに人を呼んだのはお兄さん達が初めてかもね？リニス」

「にやあ」

アリシアとリニスに招かれ、良太郎とモモタロスは入る。

「お邪魔します」

「邪魔するぜえ」

「今から遊ぶもの持ってくるから、どこかに座っててね」

アリシアはそう言いながら、部屋の奥へと向かって行った。

「なあ、良太郎」

「なに？モモタロス」

「あのガキに何が起こるんだろうな？」

「わからないよ。でも、今日に何かが起こることは確かだと思うよ」

モモタロスの質問に良太郎は適切な回答を出す事は出来なかった。

「お兄さん達、ゲームできる？」

「内容にもよるけど、できなくはないよ」

良太郎は自身のゲーム経験を考えてそのような返答をする。

「俺もだ」

モモタロスも似たような返答をする。

「じゃあ多分、このゲームは出来ると思うよ」

一人と一体のコメントを聞いたアリシアは取り出してきたモノを

テーブルに広げた。

広いボードには曲がりくねった道が描かれており、その道には一マス一マス様々なことが記されていた。

『一回休み』、『三マス進む』、『振り出しに戻る』などがあり、何も記されていないマスもいくらかあった。

「双六すいろくだね」

「ああ、これなら何とかなるな。変に頭使わなくていいしよ」

良太郎もモモタロスも、ややこしいゲームでなくてよかったと安堵していた。

「コレ、使ってね」

アリシアは握っていた手を開く。彼女の手のひらにはサイコロがひとつと、プレイヤーの分身ともなる駒が三つあった。

良太郎とモモタロスは駒をひとつずつとって、振り出しのマスに置く。

アリシアも駒を振り出しに置く。

「さあ、始めるよーわたしが一番ねー」

アリシアはサイコロを手にして、放り投げた。

それから一時間後。

「やったー！わたしが一番！」

アリシアの駒はゴールへと無事に到着していた。

「よし！俺が二番つとー！」

モモタロスの駒がゴールへと到着した。

残りの良太郎はというと、

「えーっと、つまずいて怪我をしたので一回休みって、また休み!？」

障害のあるマスばかりに到着して、通常よりも遥かに遅い歩みでゴールを目指していた。

「俺達、ゴールしたから気にすることねえぞ」

「お兄さん、頑張って！ゴールまで半分だから」

「う、うん」

モモタロスの慈悲とアリシアの応援を受けながら、良太郎はサイコロを振る。

「振り出しに戻る、また最初からだ……」

「……良太郎。早く駒を振り出しマスに戻せよ」

「お、お兄さん。その……頑張ってゴールしてね」

モモタロスとアリシアの同情と哀れみの混じった眼差しを受けながらも良太郎はサイコロを振った。

この後、彼はもう一回振り出しに戻ることにになり、無事にゴールしたのはそれから更に一時間半後の事だったりする。

「あー、面白かった！ここに来て誰かと遊んだのって初めてなんだ！」

アリシアは満喫した表情になっている。

「にやあにやあにやあ」

リニスも満喫したのか嬉しそうに鳴いている。

「あ、片付けなきや。散らかしっぱなしにしていると、お母さんに怒られるから」

アリシアは双六の駒とサイコロとボードを片付けていく。

「結構、時間たったね」

「ああ、だが時間をかけた大半の原因はオマエだけ？良太郎」

「……返す言葉もないよ」

良太郎とモモタロスはアリシアの後姿を見ている。

わかっていることは今日にアリシアの身に何かが起こるといふことだ。

だが、そんなものが起こる兆しすら今のところない。

むしろ、チケットが読み間違えたのではと疑ってしまうくらいだ。

「お待たせ。お兄さん、モモタロスさん」

アリシアはそう言いながら、向かいの席に座る。

「どうしたらいいかな？」

「俺がわかるわけねえだろ。アリシアが何か起こすまで待つしかねえよ」

小声で話し合う良太郎とモモタロス。

「ねえねえ。お兄さんとモモタロスさんって……」

アリシアが切り出してきた。

「ん？なに、アリシアちゃん」

「何だよ？」

良太郎とモモタロスは次にアリシアの口から出るのは「どこから来たの？」といった質問であり、良太郎とモモタロスとしては「外国から来た」とか「遠くから来た」という答えを準備も万端だった。

「未来から来たんだよね？」

その言葉がアリシアの口から出た時、良太郎とモモタロスは硬直した。時間にして五秒ほど。

「え？」

もう一度確認するかのようにアリシアに聞き返す。

「だから未来から来たんだよね？」

アリシアは確認するかのように訊ねる。

「オメエ……」

「モモタロス」

良太郎は訊ねそうになるモモタロスを止めた。

「……うん。その通りだよ」

「やっぱり、そうなんだ」

アリシアは先程の明るい表情から真剣な表情となっていた。

「アリシアちゃん、ちょっとごめんね」

そう言うと、良太郎はアリシアに背を向けた。

小声で話し始めた。

「どういうことなんだよ？良太郎。何でアイツ、俺達が未来から来たなんて知ってるんだよ？」

「多分だけどね、桜井さんがゼロノスカードを使う前の姉さんの時と同じだと思う」

「姉ちゃんの時？」

良太郎の姉——野上愛理は桜井侑斗がゼロノスカードを使用する前は全ての事を知っていた。

『時の運行』のこと。

イマジンのこと。

時の列車のこと。

特異点のこと。

自分が現在経験している事を姉は知っていたのだ。
まるで自身が体験したかのように。

「あの時は疑問に思わなかったんだけどね。今にしてみれば腑に落ちない事もあったんだ。特に、ハナさんの事に関しては、ね」

「コハナクソ女の事に関してだあ？ どういうことだよ」

「ハナさんが未来の特異点ってどうやって姉さんは知ったのか、ってことさ」

「あ……、言われてみりや確かにそうかもな」

生まれてくる赤ん坊が『普通』か『特異点』なのかどうかは産婦人科に行ってもわからないことだ。

「これは推測なんだけどね。姉さんは誰かに教えてもらったんじゃないか、夢か何かで見たんじゃないかと思うんだ」

「えーと、そりやヨチムってヤツか？」

「うん。でも、今言った僕の説が正しいとは限らないけどね」

そう、どんなに予知夢を見たとしてもそれを他者に話したとして必ず信じてくれるわけではない。

夢で見たものを信じてくれる人間は余程、純真かそれに近い体験をした者ぐらいだろう。

「じゃあ、あのガキもか？」

「多分……ね」

良太郎とモモタロスはアリシアに向き直る。

「アリシアちゃん、どうして僕達が未来から来たってわかったの？」

「夢を見たの。お兄さんとモモタロスさん、そしていろんな人達がお母さんと向き合ってる夢を見たの」

アリシアが見た夢が未来だと良太郎は確信した。

今、自分の身内の中でプレシアと会っているのは自分だけだからだ。

自分達は総出でプレシアと戦うという事だろう。

「他にはどんな夢を見たの？ 憶えている範囲でいいから」

アリシアは天井を見ながら思い出そうとしていた。

「えーとね、未来のわたしなのかな？ とにかく未来のわたしが魔法を

使って白い女の子やお兄さんと戦っている夢を見たの」

アリシアが言った『未来のわたし』とはフェイト・テスタロッサの事だろう。そして、『白い女の子』とは高町なのはだと良太郎は解釈した。

アリシアの言った内容は全て自身が体験したり、見たりしたものだ。

自分は別世界こに到着した際、すぐにフェイトと戦っているし、フェイトとなのはが現在進行形で戦っているのもアリシアからすれば未来の出来事だ。

「アリシアちゃん、その夢って音とか声とかもあつた？」

フェイトを『未来のわたし』と言っているところからするとアリシアの予知夢は、音声が含まれていない映像だけのものと推測した。「偶にだけ聴こえたよ。聴こえても、どこかひどい雑音みたいな感じだったかなあ」

映像としては申し分なくとも音声の部分では不安定だという事だ。

「そうなんだ。ありがとう」

良太郎は質問に答えてくれたアリシアに礼を述べた。

「ねえ。お兄さん、モモタロスさん」

「何？アリシアちゃん」

アリシアは何かが起こるのをわかっているのか悟ったかのような表情をしていた。

「もうすぐここは危なくなるから早く離れたほうがいいよ」

「!!」

良太郎とモモタロスは目を大きく開いた。

アリシアの一言は未来を知っている者にしか言えない台詞だ。

「アリシアちゃん……」

「オメエ……」

ここで以前の自分なら「だったら君もここから出よう」といったことを平然と言ったかもしれない。

だが今はそれを言う事が出来ない。

何故なら、ここで起きた事は未来から来た良太郎達にとっては『実

際に起きた事』であり、それはどんなに悪い事でも未来を生むためには大切な事なのだ。

「アリシアちゃん。もしかして、自分に起こることも……」
アリシアは首を縦に振る。

「わたしね、今日ここでね……死ぬの」

アリシアは五歳。それでも『死』というものがどういうものかはわかっていくらしい。

「でも、わたしが死ぬ事で『未来のわたし』が生まれて、わたしが見た夢のとおりになるんだよね？」

アリシアは確認するかのように良太郎に訊ねる。

良太郎は無言で首を縦に振る。

「あとね、お兄さん」

「うん、なに？」

「わたしね。お母さんとずっと一緒にいる夢も見たんだ。コレもやっぱり未来なのかな？」

プレシアとアリシアが共にいる、それが未来なのか単にアリシアの願望かは良太郎にはわからないことだった。

下手な同情はかえって傷をつける。特に『時の運行』ではそれが顕著だ。

「……ごめん。僕にはわからないよ」

謝罪する良太郎にアリシアは笑顔で答える。

「ううん、いいよ。早く行って！お兄さん、モモタロスさん。未来のわたしによろしくね！」

笑顔で見送ってくれているアリシアに言葉に良太郎とモモタロスは無言で頷くと、テストロッサ家を後にした。

デンライナーに乗り込んだ良太郎とモモタロスはこの時間の『真実』が何なのかをようやく理解した。

この時間は『アリシア・テストロッサの最期』なのだ。

彼女の死因が何なのかまではわからなかったが。

「アリシアさんが早く離れるように促さなかったら、良太郎君もモモタロス君も彼女と同じ道を辿っていたでしょうねえ」

「アリシアちゃんの死因がわかるんですか!？」

「オッサン、あのガキが何で死ぬのか教えろよ!?!このままじゃやりきれねえよ!」

良太郎とモモタロスもオーナーに詰め寄る。

モモタロスにいたっては、オーナーの胸倉まで掴みかけている。

「コレを見てください」

オーナーはそう言うと、新聞記事を見せた。

何故かその新聞は日本語訳になっていたが、間違いなくここでの出来事だった。

「ええと、『大型魔力駆動炉』稼働実験中に大暴発。違法エネルギーを使用した事が原因か?工場内のスタッフ及び見学者は完全遮断結界により命に別状はなし。なお、基点とする工場外の付近一帯にいる生物は流出したエネルギーを体内に取り込んだために死亡」

良太郎は新聞記事を読み終えると、自分なりにアリシアの死因を解釈する事にした。

アリシアは駆動炉から流出した有毒ガスのようなものを吸い込んだために死亡したのだと。

オーナーは良太郎から新聞記事を受け取り、懐から取り出したマツチを使って焼却した。

良太郎とモモタロスはアリシアが最期となる笑顔を思い出していた。

「……アイツ、最後の最後まで笑ってたな」

「……僕達に余計な気を遣わせないようにしたんだと思う」

一枚目の『真実』を知った時とは逆に食堂車の雰囲気は暗かった。

「……行こう」

「ん?」

良太郎はテーブル席から立ち上がり、拳を震わせながらモモタロスに告げた。

「行こう。三枚目の時間へ!」

三枚目のチケット。

この事故が起こったさらに後の時間である。

そして、フェイトとアリシアの関係、プレシアが何故良太郎を知っていたのかがわかるかもしれない時間でもある。

第二十七話 「デンライナーの車窓からく母の決断」

高町なのは平日なので、私立聖祥学園へと登校していた。

教室内は休み時間なのか生徒達が机から離れて友人と談笑している。

なのはも本来なら親友であるアリサ・バニングスと月村すずかと談笑をしたりするのだが、現在は少々距離を置いている状態なので今は一人でぽつんと席に座っていた。

退屈を紛らわすために、なのはは空を見上げる。

雲がいくつかあるが、それでも青空だった。

(レイジングハート、直ったかなあ。ユーノ君から何の連絡もないってことはまだってことだよな)

前回の戦闘で負傷した相棒の一刻も早い復帰を望んでいた。

*

二枚目のチケットの時間から離れて、デンライナーはモニユメント・バレーを思わせる荒野——『時の空間』を走っていた。

既に先頭車両である一号車に格納されているデンバードには三枚目のチケットをセットしている。

ピアノの演奏者は疲れたのかピアノの椅子で熟睡しているため、食堂車内には何の音楽も流れていない。

「次で最後になりますねえ」

オーナーはナオミから水が入ったグラスを受取り、飲むわけでもなく水の揺らぎを見ていた。

ナオミはその後、別車輛へと移動した。食材を貯蔵庫から取って来るためである

「アリシアちゃんは自分が死ぬ事でフェイトちゃんが生まれるって言うってたね」

野上良太郎は先程の時間で出会った少女の言葉を口に出した。

「ああ。どういう意味だよ？良太郎」

アリシア・テスタロッサ死亡とフェイト・テスタロッサ生誕がつながるといふ事がモモタロスには理解できていないようだ。

それにアリシアとフェイトは別人だと一枚目のチケットに向かった後に良太郎が断言した。

モモタロスの脳内では追いつかない出来事なのだ。

「うーん、何とも言えないよ。養子縁組したとは考えにくいし、あそこまでそっくりな人間を捜すなんて、まず不可能だからね」

「じゃあ、一体何なんだろうな？あのアリシアとフェイトはよ……」

「わからないよ。……だからこそ、三枚目のチケットで知る事ができるんじゃないかな」

良太郎は確信があるわけではないが、そう思わずにはいられなかった。

あの三枚のチケットのイラストとなっている人物がその時間の『鍵』となっている存在だ。

一枚目のチケットで得た真実とは『写真の少女とフェイトが別人だ』という事

二枚目のチケットで得た真実とは『写真の少女であるアリシア・テスタロッサが死亡するという事』

今から向かう時間で得られる真実を良太郎は予想する。

(二つの時間を渡ってまだわかっていないことといえ……)

二つの時間を渡った中でまだ得ていないのは『フェイトの誕生』だろう。

彼女はどうかやって生まれたのか、そのあたりは二つの時間でも触れられていないことだった。

「今以上に覚悟を決めていかないといけないね」

「ああ、そうだな」

良太郎の決意にモモタロスは素直に頷いた。

ナオミが車内アナウンスを流し、デンライナーは『時の空間』から現実空間へと抜けた。

「何だ？あのでけえ建物は……」

「あれは……」

モモタロスは初めて見たからそのような感想をこぼすが、良太郎には見覚えがあった。

「時の庭園……」

それは紛れもなく『時の庭園』だった。

良太郎が『真実』を求める決断を促された場である。

良太郎とモモタロスオーナーとナオミに見送られながら、デンライナーから降りた。

「何か神殿つてやつみたいだな。人住んでるのかよ？ここに」
「プレシアさんが住んでるよ」

良太郎は自信を持って断言した。

「随分言い切るじゃねえか。まさか表札でもあるのかよ？」

「ないよ。そんなの……。ただ、そんな予感がするだけだよ」

「勘かよ!？」

良太郎の自信が勘によるものだと知ったモモタロスは呆れてしまう。

「まつ、行ってみりやわかることだしな」

そう言いながら、モモタロスが『時の庭園』に足を踏み入れようとする。

「待って」

良太郎が止めた。

「何だよ？折角、気合入れて入ろうとしたのによ」

横に並んでいた良太郎はモモタロスと向き合う態勢に移動する。

「ここからは僕一人で行きたいんだ」

「良太郎?」

「頼むよ。モモタロスはここで待機して何か起こったら知らせてほしいんだ」

良太郎とモモタロスの目と目が合う。

良太郎の決意は固い。

「わーったよ。しゃーねえなあ。行って来い良太郎!」

「ありがとう。モモタロス」

良太郎は笑みを浮かべて感謝の言葉をモモタロスに述べると、『時

の庭園』へと向かった。

自分が初めて訪れた時と『時の庭園』は造りが変わっていないため、大体把握できていた。

だが、それでもどこにプレシアがいるのかはわからない。

「ここかな？」

ノックもせずに入るのは失礼だと思ったが、良太郎はプレシアと初めて出会った広間に入る。

「……誰もいない」

そこには誰もいなかった。

ドアを閉めて、また別のところを捜す。

ドアがあるところを片っ端から開くが、人一人いない。

それどころか何も置かれていない。『空き部屋』ばかりだった。

(僕が知らない部屋にいるのかな)

知っている場所及び部屋は粗方調べたが全てハズレだった。

プレシアの行動を思い出すことにする。

そこに何か『秘密の部屋』とでも呼ぶべき場所のヒントになるかもしれないからだ。

プレシアがフェイトを折檻(虐待と良太郎は認識している)していた場所を思い出す。

良太郎は広間へと行く。

ここでプレシアはフェイトに折檻を加えていた。

今、ここで大切なのは被害者であるフェイトではなく、加害者であるプレシアだ。

プレシアは何故、広間で折檻をする必要があったのだろうか。

これだけたくさんある部屋で何故、広間を選んでいるのかだ。

動けなかったのか、それとも動きたくなかったのか。

どちらにも共通点があるとしたら、プレシアが広間から出る事に対して消極的だということだ。

それは逆に広間に何かあるということだ。

「広間に行こう。何かあるはずだから」

広間に入っても、何か変わったところはなかった。

「プレシアさんはここに何かを隠しているはずなんだけど……」

良太郎はそう言いながら壁を触ったり叩いたりするが変化があるとは思えなかった。

「後あの玉座……くらいか」

ひとつだけぽつんと佇んでいる玉座に歩み寄る。

玉座に触れ、上から下から右から左から斜めから眺めてみるが、何の変化もない。

「ここに何かがあるはずなんだ。でも、どこに……」

良太郎は完全に行き詰りかけていた。

「ん？あれて……」

そんな彼にかすかの希望が芽生えた。

玉座を中心に右側から光が漏れていた。

光がある方向に良太郎は歩き出す。

そこには何かの部屋らしいのかプレートが貼られていた。

正直、ドアから醸し出す雰囲気は良いものではない。

どちらかというと、禍々しいものだった。

良太郎は万が一に戦闘があるかもしれないと踏んだのか腰元にデシオンオウベルトを出現させる。

ドアに触れると、横に滑るようにして開いた。

「誰？」

そこには黒髪の女性——プレシア・テスタロッサが液体の詰まったカプセルの中で眠っている少女を見上げていた。

「こんなところに人が来るなんて珍しいわね」

プレシアは良太郎に顔を一度だけ向けると、またカプセルの中に入っている少女を見上げていた。

「貴方、以前にアリシアと私の写真を撮ってくれた人よね？」

「……はい」

プレシアの質疑に良太郎は応答する。

「アリシアが最期に会ったのは貴方だったのね」

プレシアは立ち上がり、机の引き出しからスケッチブックをひとつ取り出して良太郎に渡した。

スケッチブックの何ページかを捲って、プレシアは良太郎に見せた。

「こ、これは!？」

そこには『おにいさん』とクレヨンで書かれた文字とイラストがあった。

「紛れもなく貴方よ。不思議ね。こと私達にとって重要と思われる場面には必ずと喋っていいほど貴方がいるわね」

プレシアは良太郎の素性を探ろうとする言葉を発する。

「それは……」

プレシアは良太郎に向き直ってから座る。

「とにかく座りなさい」

そう喋って良太郎に椅子に座るように促す。

「はあ……」

良太郎は椅子に座る。

「私から聞いていいかしら? 貴方は未来から来たということと合ってるかしら?」

「え? は、はい」

良太郎はプレシアから発した言葉が理解できなかったが、頷いた。

「あの、どうして……もしかして、アリシアちゃんから聞いたんですか?」

アリシアが予知夢のことをプレシアに話したのではないかと思っ

た。
「そうね。でも、最初はそれを鵜呑みにしなかったわよ。私がアリシアの言葉を信じるようになったのは私がアリシアと同じ体験をしたからよ」

「同じ体験って……プレシアさんも、ですか?」

プレシアは首を縦に振る。

「あの子を生み出してからすぐ、かしらね。毎晩のように見るようになったわ」

そう言いながら、カプセルの中で眠っている少女を見ている。

「未来の私はこの子——フェイトにひどくあたっているようね」

「……はい」

良太郎は肯定する。

「そして、さらに未来ではフェイトと私は一緒にはいないわ。フェイトは別の所で養子に貰われ、幸せに暮らしているという未来も見たわ」

プレシアは笑みを浮かべていた。

それは母親の笑みだった。

そして、プレシアが見た未来は良太郎の知らない事ばかりだった。

「あの、プレシアさん」

「何かしら？」

「フェイトちゃんとアリシアちゃんはどういう関係なんですか？アリシアちゃんは言っていました。自分が死ぬ事で未来の自分が生まれるって」

プレシアは息を吐いてから口を開き始めた。

「アリシアの言っている事は間違いではないわ。フェイトはアリシアの死によって誕生しているといってもいいくらいよ。何故なら……」

プレシアは意を決して告げた。

「フェイトはアリシアの細胞で生み出されたクローンなのよ」

「クローン人間……」

SFや少年漫画などではよく聞く言葉だった。

実際に良太郎のいる世界でもクローン技術は存在している。

だが、それは『家畜』などであり、『人間』を対象にしていることは良太郎が知る限りでは聞いたことがない。

改めて文明の差が激しいと痛感した。

「クローン人間が元となっている人間の過去の記憶を持つ事は？」

「ないわ」

プレシアは即答した。

「生み出されたクローン人間は外見がどうであれ、過去の記憶というものはないのよ。生まれたての赤ん坊のようなものね」

「じゃあ、やっぱりフェイトちゃんはアリシアちゃんの『過去の記憶』を植え付けられているんですか？」

「そうね。フェイトがもし自身の過去を語るのならそれはアリシアから転写した記憶よ」

オーナーの仮説はこれで正しいと証明された。

そして、チケツトが正確に読み取るのは『その人物が体験した記憶』だけなのだという事だ。

だからフェイトにかざした場合、『転写されたアリシアの過去の記憶』と『フェイトが体験した過去の記憶』とが混濁して正確に読み取れなかったのだらうと解釈した。

「久しぶりね。人とこんな会話をしたのは。時の庭園を購入するまでは人の事なんか気にせずに、仕事と研究に打ち込んでたから」

「それもやっぱり、アリシアちゃんのために？」

良太郎にはクローン技術を用いたり、『時の庭園』を購入した動機については凡その見当がついていた。

「ええ。クローン技術を学んだのもアリシアを蘇らせるためのものだったわ。でも、失敗だった。いくらアリシアの細胞で生み出したとしてもそれは『アリシアと同じ姿をした別人』であって『アリシア』ではないと気づかされるのに時間はかからなかったわ」

「……………」

良太郎は黙って聞いている。

「そして毎晩のように見る夢。正直、私は気が変になりそうだったわ。私はこの毎晩のように見る夢をどう解釈すればいいか散々悩み、同じように夢を見ていたアリシアはどうしてきたのか考えて結論を出したわ」

プレシアは天井を仰いでから、決意を秘めた表情で言った。

「私もアリシア同様、この夢を受け入れる事にしたの。自分のために、そしてフェイトのためにもね」

「フェイトちゃんのために？」

プレシアは頷いてから続ける。

「未来の私はフェイトに対してまず冷淡な態度をとっていたわ。そして、アリシアを蘇らせるためにある場所へ向かうという名目でジュエルシードを捜させているわ。もちろん、どんな結果を出しても決して

褒めたりはしていなかった。多分そんな仕打ちをするのは、あの子の心の中にある『私』を一刻も早く消したかったからかもしれないわね」

「フェイトちゃんの心の中にあるプレシアさん？」

「子供は親を無条件で慕うようになってきているのよ。それがどんな親でも、ね」

「フェイトちゃんをアリシアちゃん以上に愛そうとは？」

「……無理なのよ」

プレシアは良太郎の案を切り捨てた。

「わたしが見たフェイトの未来は全てと違っていいほど、私が冷たくあたるのが前提となっていていいのよ。私がフェイトに優しく接したらその時点で、フェイトの未来はなくなってしまうわ」

「未来がなくなる？」

「最悪、死ぬかもしれないわね」

震えるような声で言うプレシア。

辛くあたることで今後の未来が誕生し、優しく接する事で未来がなくなる。あまりにやりきれない現実だった。

良太郎は確信した。

プレシアはフェイトに愛情を持っているという事を。

そして、フェイトのためにあえて『悪い母親』を演じようとしている事を。

(だからあの時、プレシアさんは笑ったんだ……)

良太郎がプレシアと初めて会った際、フェイトの事で怒りを剥き出しにして文句を言った。

その時、プレシアはそれを聞いて大笑いした。

多分だが、『今ここにいる自分』と『プレシアにとっては三度目に出会った自分』を比較して笑ったのだろう。

自分だけが、プレシアの本心を知る人物なのだから。

(プレシアさんは僕が考えているよりずっと、フェイトちゃんのことを想ってたんだ……)

「このことを話すのは貴方が最初で最後でしょうね」

プレシアは眠っているフェイトを見ていた。

良太郎はそんなプレシアを見て考えていた。

この人はこれから数年、そう『フェイトと離れるという未来』が現実になるまで人々を、そして自分を欺くのだろう。

「次にフェイトを起こした後、私は今言った事をすべて実行するわ。貴方には……愚問だったわね」

プレシアは良太郎の表情を見て、頼もうとした事を言うのをやめた。

「わかってます。この事は僕の胸に留めておきます」

良太郎は全て理解していた。

これは誰かに言えばそれだけで未来が変わるかもしれないデリケートなものだからだ。

そして、アリシアの時と同様に『起きた事』である以上、決して変えてはならないのだ。

「助かるわ。そういうえば名前を聞いていなかったわね。よければ名前を聞かせてもらえるかしら？」

この時間のプレシアは自分のことをまだ知らないのだ。

「野上良太郎」

「そう、では野上良太郎。未来の私がしでかす始末と、フェイトの事をよろしく願います」

プレシアは良太郎に頭を下げた。

「わかりました」

良太郎は覚悟を決めて答えた。

その表情は誰もが『この人になる任せられる』といった決意と覚悟を持った表情だった。

『時の庭園』から出ると、モモタロスは欠伸をして待っていてくれた。

「よお、何にもなかったみてえだな？」

「うん。何もなかったよ」

「で、良太郎。この時間では何がわかったんだよ？」

モモタロスが訊ねてくる。

今、ここで全てを話すわけにはいかないの、『時の庭園』を見つめながら、

「フエイトちゃんの誕生と、母親の想い、かな」

そう言ってから良太郎はデンライナーへと向かう。

「おい、どういう意味だよ!? 教えろよ!? 良太郎!」

モモタロスは出し惜しみしていると想われる良太郎に文句を言いながら背中を追いかけた。

第二十八話 「デンライナーの車窓から く俺、遅れて参上！〜」

航行『時の庭園』とは違う次元空間にその艦は航行していた。

次元空間航行艦船『アースラ』

時空管理局御用達の艦である。

艦長であり、時空管理局提督であるリンディ・ハラオウンはモニタールームへと向かっていた。

急がず、それでもゆっくりでもない。それが、彼女が歩く速度だ。

モニタールームに入ったリンディは任務中の数名のスタッフに近況を尋ねた。

「みんな、どう？ 今回の航行は順調？」

スタッフは皆、リンディに視線を向けた。

「はい。現在第三船速せんそく（船の速度の事）にて航行中です」

「目標次元到達には今から凡そ百六十ペクサ後に到達予定です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きはないようですが二組の捜索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

「そう」

艦長席に座りながらリンディはオペレーター達の報告を聞き、今後の対策を練ろうとする。

「失礼します。リンディ艦長」

少女といってもいい年代の女性が紅茶を淹れたカップを持って、リンディの前に置いた。

「ありがとねエイミー。そうね、小規模とはいえ次元震の発生は……ちよつと厄介なものね」

リンディは紅茶を眺めながらも真剣な表情で今後を語る。

「危なくなったら急いで現場に向かってもらわないと……。ね？ クロノ」

リンディは全身黒づくめの少年に声をかける。

クロノと呼ばれた少年は自信に満ちた瞳を持って艦長席へと振り

向く。

「大丈夫。わかってますよ艦長」

一枚の銀色のカードを持って、自信を持って答えた。

「僕はそのためにいるのですから」

*

『時の列車』——デンライナーは三枚目のチケットの時間から『時の空間』へと場所を移して、走っていた。

拠点となっている食堂車はピアノ演奏者が奏でる音楽がその場を支配していた。

オーナーは対駅長戦に備えてスプーンのメンテナンスをしていた。

「これで、三枚のチケットの真実が全てわかりましたねえ」

野上良太郎はプレシア・テスタロッサの『真意』に関しては誰にも言っていない。

「それでどうします？良太郎君」

「え？」

「今見てきたことは、我々の『時間』とは一切関係ない『別世界の時間』での出来事です」

オーナーが何を言おうとしているのか良太郎は今ひとつ理解できない。

「ハッキリ言ってしまうえば我々は『自分達の世界の時間』さえ守ればい
いと思いませんか？」

「オーナー？」

「オッサン、何言ってるんだよ!？」

良太郎とモモタロスはオーナーが言おうとしている事が理解できなかった。

オーナーはこう言いたいのだろう。

自分達以外の世界の時間は好き放題に改竄してもいい、と。

別世界の時間まで自分達の世界の義務を押し付ける必要はない、と。

良太郎はそれがオーナーからの課題だと受け止めた。

確かに自分達はこの世界の人間ではない。

自分達の世界の『掟』を別世界でまで遵守する必要はないといえない。

別世界の『時の運行』を改竄しても今のオーナーの口調からして責めたりはしないだろう。

良太郎はそれを不思議と魅力的なものだとは思わなかった。

アリシア・テストロッサとプレシア・テストロッサの生き様を見たからだろう。

ここでもし、オーナーの言うように改竄すればアリシアとプレシアのしてきた事を全て否定する事になる。

あの二人は、未来のために自らの運命に従ったのだ。

それを弄ぶ権利はこちらにはないし、あつたとしても行使する気はない。

「さて、どうしますか？良太郎君」

「良太郎……」

「良太郎ちゃん……」

オーナーは良太郎の采配を待っている。

それはモモタロスや普段、この手の話には関わらないナオミもだ。

良太郎は決意と覚悟を持った瞳でオーナーを見つめる。

「変えません。僕はこの世界でも僕達の『やり方』を貫きます」

良太郎は続ける。

「たとえば、ここが僕達が住んでいる世界でなくても、僕達にこの世界の『時間』を変える力があつたとしても、無責任に変えていいはずがないんです」

「変えることでよくなるかもしれないという可能性もありますよ？それでも変えませんか？」

オーナーは執拗に訊ねる。

以前に似たような質問をカイにされたことがある事を思い出した。「以前にカイにも似たような事を言われました。でも過去を改竄するという事は、どんなに悪い過去だったとしてもその人達が築いた『時間』を否定する事になります。だから、一時の欲望で変えていいとは思えません」

オーナーは良太郎の言い分を全て聞いてから首を縦に振って満足げに頷く。

「どうやら今更確認するまでもなかったようですねえ。今回の三枚のチケットの旅で良太郎君はあの親子に感情移入したかもしれないと思つたものですから」

「感情は入ってますよ。あの二人の想いを絶対に守るって事はね」

良太郎は今の気持ちを正直にオーナーにぶつける。

「そうですね。でも、今の答えを聞いて安心しました。良太郎君、我々は別世界の『時の運行』も守らなければならぬかもしれないかもしれませんので、お願いしますよ」

「はいっー」

良太郎は気を引き締めて返事した。

「さあて、行こうぜ。良太郎」

今まで黙ってオーナーと良太郎のやり取りを見ていたモモタロスは良太郎の決意に満足したのか右肩を掴んだ。

「まもなく、目的の時間に到着しまーす！」

ナオミの車内アナウンスが流れた。

*

鴉が鳴き出す夕方。

市バスを降りた高町なのは一人で家路へと向かおうとしていた。

「なのは」

「なのはちゃん！」

フェレット——ユーノ・スクライアを右肩に乗せたりユウタロスが手を振っていた。

ユーノには赤い珠を身体に巻きつけていた。

ウラタロスとキンタロスもいた。

ウラタロスは手を軽く挙げ、キンタロスは腕組をして頷いていた。ユーノは巻きつけていた赤い珠——レイジングハートを外して、なのはに渡す。

なのはは受取る。

「レイジングハート、直つたんだね。よかったあ」

「コンデイショングリーン」

安堵の声を漏らすと、レイジングハートは自身を輝かして返事をした。

「また一緒に頑張ってくれる？」

なのはは確認するように訊ねる。

「オーライ。マイマスター」

レイジングハートは即答した。

なのははその返答が嬉しく、レイジングハートを両手で優しく包み込んだ。

その姿を一匹のフェレットと三体のイマジンに微笑ましく見ている。

フェイト・テスタロッサはアルフと共にマンションの屋上に立っていた。

衣装はバリアジャケットで、プレシアに折檻されたような部分は残っていない。

「感じるね。あたしにもわかるよ」

獣姿のアルフがジュエルシードの存在を感知していた。

「バルデイツシュ。どう？」

手袋の装飾品状態となっている相棒の体調を訊ねる。

「リカバリ。コンプリート」

「そう。頑張ったね。偉いよ」

フェイトは相棒に褒めの言葉を与えてから、小さく微笑む。

「良太郎が帰ってきてからでもいいんじゃないのかい？」

「今から回収しようとするジュエルシードはもうすぐ発動するよ。その前に良太郎が帰ってくれば一緒に探せるかもしれない」

フェイトとしてもアルフのいうように良太郎が帰還してから探すという方法を使いたかった。

だが、いつ帰ってくるかもわからない相手を待っていてくれるほどジュエルシードの発動は甘いものではない事も知っている。

それに今から手にするのが自分達だけならいいが、そういうわけにはいかない。

高町なのはとその使い魔的存在であるフェレット、そして良太郎の仲間であるイマジンと一人の少女。

もし、この面子が総出で今回のジュエルシードの回収に参加し、ぶつかる状態になればこちら側が不利になることは明らかかな事だった。それは海鳴臨海公園にあった。

誰かに指示されているわけでもなく、激しく光り輝いている。

その光は最大限に輝き、光の柱を発生させる。

柱の中にあるそれぞれは宙に浮き出し、近辺の一本の木に埋まっていた。

その光景を一部始終、海から見ていた者達がいた。

「ジュエルシード発動しちゃったね。兄ちゃん」

「だが、今の状態は我々ではどうしようもないぞ。弟よ」

「やっぱり、魔導師達が封印してから横取りするんだね？兄ちゃん」

「ジュエルシードを狙っている魔導師も持つてるからな。それもついでに奪うぞ？弟よ」

「了解だよ。兄ちゃん」

タラ型のイマジン——コッドイマジンが二体、海から顔を出しながら今後のことを話していた。

海鳴臨海公園に到着したなのはとユーノはそれぞれの仕事をこなそうとする。

ユーノは近辺に結界を展開し、バリアジャケットを着用しているなのははレイジングハートをジュエルシードの影響で怪物化した木（以後：怪木）に向けていた。

特に枝がカマキリの手のようになっているのが、不気味である。

魔法を発動させようとした時、背後から無数の黄金の魔力光が怪木に向かって行った。

しかし、怪木はそれらを全て障壁のようなものを展開して、すべて防いだ。

怪木はコンクリートの地面を抉って植物でいう根の部分を鞭のようにならせてなのは達に向けた。

「ユーノ君、逃げて！」

地上にいるユーノにこの場から離れるように促す。

ユーノはなのはの指示に従い、茂みの中へと避難する。

「フライヤーフィン！」

レイジングハートがなのはの足場を空中へと変更するために、発動した。

なのはの足首あたりから片足に二枚の計四枚の桜色の双翼が出現し、なのはを地上から空中へと移した。

「飛んでレイジングハート！もつと高く！」

「オーライ！」

レイジングハートは主の気持ちに応えるようにして、桜色の翼をばたかせた。

茂みの中に避難したユーノは三体のイマジンと会った。

「ユーノもこつちに来たんだね？」

ウラタロスがどうして茂みに来たのかを訊ねてきた。

「僕も、つてことは皆さんも？」

「そうや。俺等イマジンとは戦えるけど、ジュエルシードがらみの怪物は無理やからな」

キンタロスが親指で首を捻らせてから答えた。

「なのはちゃん！頑張れー！」

リュウタロスは空へと飛翔した少女を応援していた。

「わああ、生意気にバリアーまで張るのかい」

獣姿のアルフが怪木の予想外の能力の高さに驚いた。

「今までのより強いね」

海鳴臨海公園にはなのは達だけでなく、フェイト達もいた。

ちなみに怪木に向かって数発の魔力光を放ったのは彼女だった。

バルディッシュを怪木に向けており、電灯の上に立っていた。

「それにあの子と良太郎の仲間もいる」

白いバリアジャケットを着用した少女——なのはのことだ。

フェイトはバルディッシュを一旦、天に掲げてから下ろす。

「アークセイバー。いくよバルディッシュ！」

「アークセイバー」

バルドイツシユから黄金の鎌刃が出現した。
大きく振りかぶる。

軽く跳躍して、バルドイツシユを振り下ろした。
黄金の鎌刃は怪木の根を回転しながらスパスパと斬っていき、やがて中樞となる顔面へと向かっていく。

障壁に衝突したが、打ち破ってダメージを与えた。
怪木が初めてよろけた。

空中に場を移したなのはは怪木にレイジングハートを向ける。

「シユーンティングモード」

レイジングハートがデバイスモードからシーリングモードへと形態を変化させていく。

「行くよー！レイジングハート！」

先端から桜色の魔力光が収束されていく。

レイジングハートの先端と後尾には桜色の円が展開されていく。

一定量まで溜まるとなのはとレイジングハートは、

「打ち抜いてー！デイバイン！」

「バスター！」

桜色の魔力光を怪木に向かって放った。

桜色の光は一直線に、自らを覆っている怪木の障壁に衝突する。

デイバインバスターの重圧に耐え切れなくなったのか怪木が態勢を低くなった。

(いけるー！)

なのはは放ちながらもそのような確信を持ち始めた。

アークセイバーを放ったフェイトは空中には場所を移さずに、地上にいた。

左手を前に出し、右、左、下、前と手を動かして小さな黄金の魔法陣を展開させる。

「つらぬけー！轟雷!!」

フェイトが言ってから、宙に展開されている魔法陣に向かってバルドイツシユで突く。

「サンダースマッシュャー」

バルディッシュュが発してから、黄金の魔力光が一直線に向かって行った。

怪木に正面から直撃し、怪木は懸命に障壁で防ごうとする。

上からのディバインバスターと正面からのサンダースマツシャーで怪木の障壁はガラスのように砕け、肉体を保てなくなり、押しつぶされるようにして消滅した。

一筋の光が走り、そこからジュエルシードが出現し、宙に浮いていた。

「シーリングモード。セットアップ」

「シーリングフォーム。セットアップ」

レイジングハートとバルディッシュュがほぼ同タイミングでこれらのことに相応しい形態変化をした。

「ジュエルシードシリアル七!!」

なのはとフェイトが同じタイミングで叫ぶ。

「封印!!」

両デバイスも同タイミングで実行する。

だが、辺り一面にまばゆいまでの光が発生した。

光がおさまり、その場にいた者たちの視界が回復するとそこにはジュエルシードがまだ宙に浮いていた。

フェイトはゆつくりとなのはがいる空中へと場を移す。

「ジュエルシードには衝撃を与えてはいけないみたいだ」

フェイトは独り言のように言った。

「うん、この前みたいなことになったら、わたしのレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュュも可哀想だもんね」

なのはの言葉にフェイトの心は少し揺れた。

「だけど、譲れないから」

決意を表すようにバルディッシュュを構える。

「デバイスモード」

バルディッシュュも形態を変化する。

「わたしは……わたしはフェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど……」

「デバイスモード」

レイジングハートも形態を変える。

なのははフェイトから視線を外さない。

「わたしが勝ったら、ただの甘ったれた子じゃないってわかってくれたら……、お話聞いてくれる？」

なのはの一言が心に響いたのはフェイトではなくアルフだった。

「……………」

アルフは地上から二人の魔導師を見ている。

(フェイト……)

ただ、主の安否を祈るしかなかった。

「あれー？赤いワンちゃんだ！」

アルフが振り向くと、青色、金色、紫色の三体のイメージがこちらに歩み寄ってきた。

「アンタ達、たしか良太郎の……」

アルフは青色と紫色のイメージとはチェイスをしたことがある。

正直、やりあいたくはない。

「なのはと君のご主人は？」

紫色の右肩に乗っているフェレットは自分に訊ねてきた。

「あそこにいるよ」

フェレット及び三体のイメージはアルフが顔で指す方向に顔を向けた。

灰色とオレンジが主となっている空に二人の魔導師がいた。

二人の魔導師が一気に加速して、間合いを詰めて互いのデバイスを振りかぶって、下ろそうとした。

絶対にぶつかり、何がしかの衝撃が起これると互いが思った。

だが、その衝撃はこなかった。

二人は驚く。

そこには全身黒くくめの少年がなのはのレイジングハートを素手で受け止め、フェイトのバルディッシュを黒一色の杖で受けていた。

「ストップだ！」

少年はそう叫んだ。

「ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

クロノはなのはとフェイトを一瞥してから事情を聴取すると言ったときだ。

「行くよ！兄ちゃん！」

「いいぞ！弟よ！」

海から声がし、何かが三人の魔導師に向かって行った。

「なに？」

「え？」

「魔法、じゃない？」

三人がいきなり自分に向けられた攻撃に三人は戸惑う。

その場にいることを危険と感じた三人は空中から地上へと場を移す。

「なのはー！」

「なのはちやーん！」

「フェイトー！」

聞き覚えのある声がしたのでなのはとフェイトは振り向くと、声をかけてきたユーノ、リュウタロス、アルフと現状を見極めようとするウラタロスとキンタロスが走り寄ってきた。

「ユーノ君、リュウタ君、ウラタロスさんにキンタロスさん！」

「アルフ！」

仲間に会えたことに素直に喜ぶ二人。

「仲間と出会えたところを申し訳ないが、海から出てきたあの変な怪物の説明をして欲しいんだが？」

クロノが喜び合っている面々に尋ねてきた。

今、ここにいる面々の中で海から出てきた二体の怪物に関して知識を有していないのはクロノだけだ。

フェイトは海から出てきた怪物を見る。

だが、説明よりも早く反応した者がいた。

「イマジン!?!しかも二人!?!」

フェイトだった。

「「えええっ!?!」」

フェイトが言った数になのは、ユーノ、アルフは驚く。てつきりイマジンは常に一体で行動すると思っていたのだろう。確認のため自分達も見る。

確かに二人、いや二体いた。

タラの顔をしたイマジン——コツドイマジンだ。

「だったらここからは僕達の出番、かな?」

ウラタロスが右手を曲げてお決まりのポーズを取ってから、専用武器ウラタロッドを構える。

「なのは、ユノ助。危ないから下がるとき」

なのはとユーノに下がるように言ってから、親指で首を捻ってからキンタロスが専用武器キンタロスアックスを構える。

「ワンちゃんとその飼い主さんもね」

リュウタロスが良太郎の関係者であるアルフとフェイトにも言う。専用武器リュウボルバーを構えている。

「んじゃ、行くよおー!」

そう言うと同時にリュウタロスがリュウボルバーの銃口をコツドイマジンに向けて引き金を絞った。

紫色の大きな球が飛ぶ。

コツドイマジンは素早くかわしてから、何かを二体揃って射出した。

「このっこのっ」

ウラタロッドを縦横無尽に操り、『何か』を叩き落していくウラタロス。

「ええい、小さくて俺の斧では捌ききれんわ!」

キンタロスは自前の武器の重量と巨大さ、そして『何か』の小ささに愚痴る。

「クマちゃん!ちゃんと落としてよ!痛いってば!」

リュウタロスはキンタロスの背中に隠れるが、捌ききれなかった余りが流れて何発かを喰らってしまう。

「何コレえっ!」

リユウタロスが身体に刺さった『何か』を抜いて見てみる。
それは鱗だった。

「カメちゃん、クマちゃん。アイツ、鱗使ってるよ!」

「何だって!?!鱗!?!」

リユウタロスの報告に、捌いているウラタロスは自分達の障害となっている武器の意外な正体に目を丸くする。

「どうするカメの字。このままやったら俺等この間合い詰められへんで!強力とまではいわへんけど厄介な武器やで」

キンタロスの言うように戦闘を開始してから、こちらは防戦一方でも一度も攻撃していない。

「どうしよう。カメちゃん」

リユウタロスも訊ねてくる。

(良太郎やセンパイだったらどうする、かな?)

今、ここにはいない一人と一体の事をウラタロスは考えていた。

「ユーノ君、もしかしなくても……」

「かなりまずいね。あのイマジン達、相当強いと思う」

「やっぱり、助けに行った方が……」

なのはとユーノはウラタロス達が不利な状況になっていると分析した。

「そうだね。でも、なのはは攻撃しちやいけないよ。なのはの砲撃は当たれば脅威だけどあのイマジン達には通用しないと思っただけ」

ユーノはなのはがウラタロス達を助けに行く事に異議を唱えない。だが、最低限のアドバイスだけはすることにした。

「うん、攻撃はウラタロスさん達に任せてわたしは防御を徹するんだね」

ユーノは首を縦に振る。

そして、なのはの次の行動は魔導師サイドの者達を唾然とさせる。

「フェイトちゃん。一緒にウラタロスさん達を助けよう!」

「え?」

フェイトは目を丸くする。

「ア、アンタ……」

アルフは口をぽかんと開ける。

「君達は良太郎さんの友達なんだろう？ウラタロスさん達は良太郎さんの仲間なんだ。良太郎さんがいない今、あの人達を助けられるのは僕等だけなんだ」

ユーノもフェイトとアルフに協力を申し出る。

「アルフ……。どうしよう？」

「良太郎の仲間を見殺しにしたんじゃ、あたし達良太郎に申し訳が立たなくなつちまうからね」

「そうだね。君の提案、乗るよ」

フェイトもアルフもなのはの提案に乗ることにした。

「確認しておきたいんだが、あの海から出てきた怪人二匹は何を狙って僕たちを狙ったんだ？」

ちよつと蚊帳の外扱いになっていたクロノがこの中で一番情報を持っていると思われるユーノに訊ねてきた。

「正確にはなのはとその子が持つてるジュエルシードだよ」

「それって僕は巻き添えか？」

クロノは事実を知って引きつるが、平静を保つ。

「うん。ちよつどあんなどころにいたからね」

クロノの確認にユーノは正確に答えてくれた。

「あの怪人は何という名称なんだ？」

「イマジンだよ」

ユーノはきちんと答えた。

「そうか。ジュエルシードを回収するためにもあの二体のイマジンは撃退する必要があるわけか」

クロノも参加するようだ。

手にしている杖を強く握り締めていた。

「なら、あたしはあんた達のサポートと行こうかね。アンタもなんだろ？」

アルフはユーノに確認するかのように訊ねる。

「まあね。イマジン戦では僕は足を引っ張るだけだよ」

そう言った時のユーノの声には『劣等』とか『自棄』といったものは含まれておらず、ただ冷静に判断しただけのようにアルフは感じた。

フエイト、なのは、クロノがウラタロス達の前に立ち、それぞれのデバイスを構えた。

「ガキが三人いるよ。兄ちゃん」

「ああ、だが必要なのは女二人が持つてるジュエルシードだけだぞ。弟よ」

「女はジュエルシードを手にするためにも殺しちやいけないんだね？兄ちゃん」

「ああ、男は一番邪魔そうだから一気に片付けるぞ。弟よ」

そう言うと同時に、コツドイマジンはそれぞれのフリーエネルギーで構築された二振りの剣と、二丁の銃を手に入っていた。

「では行くぞ。弟よ」

コツドイマジン兄は二丁の銃を構える。

「オーケイだよ。兄ちゃん」

コツドイマジン弟は二振りの剣を構える。

二体のイマジンがクロノに向かって行った。

弟が前衛となって、クロノに切りかかる。

クロノは向かってくる双剣をデバイスで受け止める。

「くっ。何て力だ！こちらから責められない」

受け止めるだけで、次の攻撃に転じる事が出来ないクロノ。

完全に両腕を防がれており、両足も支える事で精一杯で押すことも引く事もできない。

「いいぞー！弟よー！」

兄が弟の背を踏み台にして、クロノの背後に回った。

「終わ……ぶっ」

引き金を引こうとするコツドイマジン兄をウラタロスが右回し蹴りが顔面に炸裂した。

発射態勢が崩れ、よろめく。

「僕達を無視するなんていい度胸だね。それと、感謝するよ。わざわざ

「ざ近くまで来てくれて！」

ウラタロツドを振り下ろすが、二丁の銃で受け止められる。

「カメちゃん！どいて！」

ウラタロスの後ろからリュウタロスの声がしたので、鏢迫り合い状態から離れる。

「いつけええええ」

リュウボルバーから一発の弾が放たれた。

「甘い！」

コツドイマジンは避けるどころか、迎え撃つつもりなのか二丁の銃を構えて素早く引き金を絞った。

弾質がフリーエネルギーなので、同じフリーエネルギーの弾をぶつける事で相殺は可能だ。

「こいつ等、半端やないな！」

キンタロスがコツドイマジン弟の剣戟をキンタロスアックスで捌いている。

鏢迫り合い状態に持ち込んだキンタロスだが、コツドイマジン弟の蹴りが腹に炸裂し、強引に間合いを開けられた。

キンタロスは吹っ飛び、仰向けになって倒れる。

「キンちゃん！」

「クマちゃん！」

ウラタロスとリュウタロスが走り寄る。

「隙だらけだ！」

コツドイマジン兄の銃口が三体のイマジンを捉えて、引き金を絞る。

「プロテクション」

レイジングハートの声が三体のイマジンの前からした。

なのはが前に立ち、魔法障壁で防いでくれたのだ。

「大丈夫ですか？みなさん」

ウラタロス、キンタロス、リュウタロスはサムズアップして答えてくれた。

フェイトは単身で、コツドイマジン弟と戦っていた。

バルドイツシュをサイズフォームにしている。

『技』と呼ぶべきものは現在使っていない。

アークセイバーを放つには間合いが狭く、発動に時間がかかるサンダースマッシュャーでは発動中に相手の餌食になることは言うまでもないからだ。

「ガキの割にやるな！」

コッドイマジンの評価をフェイトは特に嬉しく感じることもなく、攻撃を続ける。

ある一定の間合いが開く。

「アークセイバー！」

フェイトは振りかぶって黄金の鎌刃を放つ。

くるくると回転しながら、狙っていく。

だが、

「こんなもので俺と兄ちゃんが倒せるか!!」

双剣を振り下ろして、アークセイバーは真つ二つになった。

二つに分かれたアークセイバーは適度な距離まで飛ぶと、爆散した。

(このイマジン、電王と互角!?)

そうなると、今戦っているイマジンに勝てる確率は急激に減る。

何せ突然乱入してきた執務官はどうか知らないが、今の面子の中で電王に勝てるものがないからだ。

(良太郎………)

フェイトはこの状況を打破できるかもしれない人物が頭によぎった。

「ボサツとしてると首刈られちゃうよ!？」

コッドイマジン弟がフェイトの間を見つけたのか間合いに踏み込んでいた。

双剣を振り下ろそうとする。

「危ないー！」

背後から声がして、コッドイマジン弟の背に爆煙が立った。

クロノが魔法射撃をして、防いでくれたのだ。

「隙を突いた攻撃なのに、ダメージらしいダメージがない……」
フェイトは状況を見回す。

どこか、暗い雰囲気になっていた。

(良太郎！早く、早く帰ってきて！)

フェイトは良太郎のいち早くの帰還を待ち望んでいた。

「え？この音楽って……」

フェイトの想いが届いたのか、クロノを除く面々にとって聞き覚えのある音楽が流れてきた。

「！！」「デンライナー！！」「！！」

空の空間がゆがみ、線路が敷設、撤去を繰り返しながら、地上へと向かっていった。

「オッサン、まだかよ!?アイツ等ヤベエことになってるぜ！」

モモタロスが逸る気持ちを抑えられないのか、オーナーに突っかかる。

「モモタロス！」

良太郎もモモタロスを抑えようとする。

「今から飛び降りれば、デンライナーが地上に到着するより早く戦場に着くと思いますよ」

オーナーの一言でデンライナーのドアが開く。

「え？」

良太郎とモモタロスは声を合わせる。

現在、デンライナーは地上に向かっているとはいえ、空中だ。

そして目的地は地上。

高度何千メートルというわけではないが、飛び降りるには勇気がいる高さだ。

「下が海じゃなくてよかったぜ。俺、泳げねえしな」

デンライナーの下は海ではなく、戦場となっている地上だった。

「そうだね。でもこのまま飛び降りたら、僕が死んじゃうよ」

飛び降りる事前提で話すモモタロスと良太郎。

「んなもん、こうすりゃ大丈夫だぜ」

モモタロスが赤い光の球体となって、良太郎の中に入り込んだ。

髪の毛が逆立って、一本に赤いメツシユが入り、瞳の色も赤色となる。

また、どこか筋肉質になったようにも感じられる。

「んじゃ、行くぜ！良太郎！」

そのままデンライナーから飛び降りた。

「イヤッホオオオオ」

と言いながら、モモタロスが憑依した状態の良太郎（以後：M良太郎）が地上に向かっていった。

向かっているというよりは落ちていっていると言った方が正確かもしれない。

（モモタロス、もうすぐ地面だよ。ちゃんと着陸態勢にならないとー）
「おう！わかってるぜ！」

大の字になっている態勢を変え、足の裏を地上に向ける態勢にする。

そして、それから五秒後に地に足がついた。

響くような音ではなかった。だが、その音がこの場にいる面々の耳に入ったとき、音の原因となったモノの所へ足を運ぶ者達がいた。

モノはこちらに寄ってくる面々を見渡す。

駆け寄った二人の魔法少女、三体のイマジンに魔法少女のサポートをする使い魔と一般人を魔法少女への道へと誘ったフェレット。そして、黒い格好の少年だ。

モノ—— M良太郎は右親指を立てて、自分を指してから左手を前にかざして、右手を後ろに開き、歌舞伎役者が取りそうなポーズを取ってから言う。

「俺！遅れて参上！」

ウラタロス、キンタロス、リュウタロスが駆け寄り、背中をバシバシと叩いてくる。

なのはとユーノはモモタロスはどこなのかキョロキョロしていた。

「あの……貴方は良太郎じゃ、ないですよね？」

フェイトはM良太郎の前に立ち、確認するかのように訊ねた。

「フェイト？」

いきなりの言葉にアルフはフェイトに訊ねる。声には出さないが、なのはとユーノもだ。

クロノは状況が把握できていないため、静観している。

「オメエ、俺が良太郎じゃねえってわかるのかよ?」

「は、はい。良太郎はそんな荒々しい雰囲気はないから……」

フェイトは自分の意見をM良太郎にぶつける。

「たいしたもんだぜ。カメヤクマや小僧が憑いてもコイツにはバレるだろうな」

M良太郎はそう言うのと笑みを浮かべながら、フェイトの頭を撫でる。

撫でてから、なのはやユーノを見る。

「オメエらもイマジン相手によく持ったじゃねえか。上出来だぜ」

喋り方なのはとユーノはモモタロスがどこにいるのかわかった。

「モモタロスさんだよ。ユーノ君」

「うん、外見は良太郎さんだけど中身はモモタロスさんだよ」

M良太郎は一人、見慣れない少年を見つけた。

「誰だ?オメエ」

ストレートに訊ねた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。貴方はここに居る者達とは……」

「仲間だ」

(仲間だよ)

モモタロスと深層心理の中に居る良太郎が同時に答えた。

M良太郎がウラ、キン、リュウに顔を向ける。

「おい、オメエら。まさかもうへばったわけねえよな?」

挑発とも取れる台詞だ。

「まさか、これからだよ」と言いながら歩み寄るウラタロス。

「本番はこれからやで」とキンタロスも歩み寄る。

「僕、まだいけるよ!」とリュウタロスが踊るようなステップで来る。

「お前等!さつきから俺達を無視するな!」

「そうだそうだ!俺と兄ちゃんを無視するな!」

M良太郎の登場で一時、蚊帳の外になっていたコッドイマジン達が堪忍袋の緒が切れたのか文句を言ってきた。

「うるせえ！・テメエは引っ込んでろ！」

M良太郎はイマジン二体を睨みつける。

「なのは、ユーノ、フェイト、あとええと獣女に黒いの！」

M良太郎は魔導師サイドの面々を呼んでからケータロス装着型のデンオウベルトを手にする。

「今からイマジンとの本当の戦い方ってヤツを教えてやる！」

余裕と自信に満ちた笑みを浮かべてからデンオウベルトを巻きつける。

(ウラタロス、キンタロス、リュウタロス！行くよ！)

良太郎が三人を促す。

「うっしやー！待っとったでえ！」

キンタロスが親指で首を捻らせてから腕を組む。

「じゃあ、行きますか！」

ウラタロスもいつものポーズを取る。

「やったあ！別世界こっちでは初めて！」

リュウタロスがその場で軽く跳躍してから、バイサインをする。

今までのものとは違うミュージックホーンが鳴る。

「変身！」

M良太郎がパスをケータロス装着型のデンオウベルトにセタッチする。

「クライマックスフォーム」

電子音声が発すると同時に、三体のイマジンも輝きだした。

時空管理局介入

第二十九話 「最強の電王と最大の組織」

「クライマックスフォーム」

ケータロス装着のデンオウベルトはターミナルバックルにパスをセタッチする事で、電子音を発した。

M良太郎の姿からプラット電王へと変身するが、それは今までのプラット電王とは違っていた。

身体の部分部分に銀色の線路のようなライン——デンレールが裝飾されていた。

赤色が主体となっているオーラアーマーが出現し、両肩と胸部と背部に装着されていく。

青、金、紫の光球となった三体のイマジンはそれぞれの電仮面へと姿を変えて、各々が装着箇所へと浮遊しながら移動していく。

ウラタロスは電仮面ロッドとなって、右肩に向かっていく。

キンタロスは電仮面アックスになって、左肩へと。

リュウタロスは電仮面ガンとなり、胸部へと移動する。

三種類の電仮面がそれぞれの位置に到着すると、その場で一回転してから右肩、左肩、胸部へと装着されていく。

電仮面ロッド、アックス、ガンが装着されると、頭部から電仮面ソードが走り、固定の位置で停まってからソード電王と同じように展開されてからさらにもう一段階、モモタロスいわく「皮が剥けた」状態になった。

全身からオーラが発せられる。

仮面ライダー電王クライマックスフォーム（以後：クライマックス電王）が戦場に降臨した。

「わー、やっぱり別世界でもくつついた！でも、気持ち悪さは変わってないー！」

リュウタロスの声（以後：リュウボイス）を出して、クライマックス電王は胸を張りながら、左右へと跳ねてから両人差し指でつつん

とする。

「うるせえ！二匹とも仕留めるぜ！」

モモタロスの声（以後：モモボイス）を出したクライマックス電王は胸部の電仮面ガンに一言言うと、両肩に装着されている電仮面達に次に移す行動を高らかと言う。

「おっしやあー！」

キンタロスの声（以後：キンボイス）を発しながら電仮面アックスは張り切っていた。

「いつでもどうぞー！」

ウラタロスの声（以後：ウラボイス）を発しながら電仮面ロッドは右腕のみをウラタロスお得意のポーズを取った。

クライマックス電王が降臨を目の当たりにした魔導師サイドの面々は目を丸くして、声を出して驚きたいのを必死にこらえていた。

これから戦闘が始まるのにその空気を壊さないための配慮である。

（ユーノ君、説明できる？）

高町なのはは念話の回線を開き、ユーノ・スクライアにクライマックス電王について訊ねてみる。

（なのは、僕が自信を持って説明できるのは僕自身が身近だったりする事や、本で覚えたことだけなんだ。とてもじゃないけど、あの電王については説明出来ないよ。ただ、なのはもわかってるんじゃないの？あの電王がとんでもなく強いって事は、さ）

（うん。でも大丈夫かな……）

なのははどこかクライマックス電王に対して感じていた不安をユーノにぶつける。

（何が？）

（だって、モモタロスさん達ってしょっちゅう喧嘩してるから、その……）

ユーノはなのはの言いたい事が理解できた。

（上手くあの電王が機能しないんじゃないかって思ってるんだね？）

なのはの言いたい事をユーノが先に告げた。

（うん）

(大丈夫だと思おうよ)

なのはにしてみればユーノの意見は意外なものだった。てつきり自分と同様、もしかすると自分以上に不安を感じ取っているのではないかと思っただからだ。

(どうして?)

(なのは。変身するまでのやり取りを思い出してみてよ)

ユーノに促されて、なのははクライマックス電王に変身する前の事を記憶の引き出しから引っぱり出した。

先程の事なので割と鮮明に残っている。

モモタロス達の息はバッチリだった。

その場の雰囲気は「勝ったも当然」というような感じがしたくらいだ。

(みんなの想いはひとつ。て感じだったね)

(でしょ。それにこれは僕の仮説だけどね。あの電王はモモタロスさん、ウラタロスさん、キンタロスさん、リュウタロスの四体の『呼吸』、もしくは『想い』がひとつにならないと成立しない変身じゃないかと思うんだ)

(てことは、わたしが言ってたことって……)

(もし、なのはの言った事が現実になってたとしたら変身そのものが成立してはいないと思うよ)

(そう、だよね)

なのはとユーノはクライマックス電王がどのようなにしてあの二体のイマジンを倒すのかじっくりと観察する事にした。

(クライマックス電王

あれ

はあたし達の常識通じるのかい? フェイト)

(アルフ、聞かないでよ。絶対に通じないよ)

アルフとフェイト・テスタロッサも念話の回線を開いて、会話をしていた。

(電王つてさ、てつきりイマジン一体だけが良太郎に入り込んで戦うスタイルだと思ってたよ)

(今まではそういうスタイルしか見てないから、そう考えるのも仕方ないよね。わたし、電王って今いるのを含めて三形態しか知らないよ)

自分は『電王』の戦闘スタイルを全て知っているわけではないのだ。フェイトが知る電王とは、最初に戦ったソード電王と海鳴温泉街で自分を襲ったイマジンと戦ってくれたアックス電王、そして今戦おうとしているクライマックス電王の三形態だ。

(フェイトは三形態なんだ。あたしはええと、前にいるヤツ含めて四つだよ)

アルフが知る電王は、ソード、アックス、クライマックスは同じだが、ガン電王も見ているので一つ多い。

あの時フェイトは気を失っていたので知らなくて当然といえば当然だが。

(あのイマジン二体、強いよ。電王一人で大丈夫かい?)

アルフが心配げな表情でフェイトを見る。

対して、フェイトは自信と確信を持った瞳でアルフを見つめ返した。

(一人じゃないよ)

(え?)

(電王は良太郎とイマジンの一人と一体で一人の戦士、ううん二人で一人の戦士なんだ。だけど、今の電王は……)

(五人で一人、かい?)

(うん。大丈夫だよ。電王はイマジンに負けたりなんかしない!)

フェイトは電王の勝利を断言した。

(そうだね。フェイト、始まるよ)

アルフがクライマックス電王とイマジン二体の戦いが始まろうとしているので、フェイトに見るように促した。

ギャラリーとなっている魔導師サイドの内、二組が念話で会話を行っている頃、一人あぶれたというか取り残されているというか念話をするほど、親しい相手がいない時空管理局執務官クロノ・ハラオウンは腕を組んで、今から戦いを起こそうとしている一人と二体を自身

が持っている情報で分析していた。

(イマジンと呼ばれる怪人二体は一体でも戦闘能力は極めて高い。即席とはいえ、こっちは向こうの三倍の数で戦ったのに、奴等はそれと対等に戦いきれるんだ。それをたった一人でどう戦うつもりなんだ?)

クライマックス電王を見る。

バリアジャケットとは違う仕様だということは一目でわかる。

それに、一つの身体に四種類の声が出た。

声マネでもあれだけ高度なものではないだろう。

それに戦闘が始まる際に、そんなことをする意味はない。

(今はイマジンと戦っている以上、味方と判断していいが……。今後どうなるかはこの戦いが終わってから、だな)

クロノは他の観客達も見る。

誰もが今からの戦闘を見届けるつもりなのだろう。

クロノがもう一度見たとき、クライマックス電王は歩き出した。

クライマックス電王は右腕をぐるりと回してから、まるで散歩でもするかのように歩き出す。

「何、歩いてるんだ！お前！」

「待て!!弟よ！」

コッドイマジン兄の制止をきかず、コッドイマジン弟が握っている剣の一振りをクライマックス電王に向けて振り下ろす。

振り下ろされる剣をクライマックス電王は左人差し指と左中指で挟むようにして受け止めた。

「そんなんで泣けるかい！」

キンボイスを発して、剣を挟んでいる指の力を強めていく。

「ぐ、ぐぐぐ。何て力だ！」

「オラオラ、もっと力入れるよ? そんなじゃ、俺の身体に届かねえぜ?」

モモボイスでクライマックス電王が煽る。

バキン、という音がした。

指で挟んでいた剣を折ったのだ。

「折った!?俺の剣を!」

「そんなことでショック受けてていいのかい!」

ウラボイスを発して、右腕が正拳突きでコツドイマジン弟の顔面を狙い撃った。

「ぐはああああ」

後方に派手に吹っ飛ぶ。

コツドイマジン兄が受け止めるが、それでも二体は大きく下がっていく。

「ちようど二匹くつついたな。仕留めるにはもってこいだぜ」

モモボイスで今の戦況を声に出してから、ゆっくりと歩いてコツドイマジン兄弟との間合いを詰める。

「あー!何か来るよ!」

リュウボイスが言うと同時に、クライマックス電王の胸部にフリーエネルギーの弾丸が直撃した。

しかし、クライマックス電王は倒れるどころか歩みをやめていない。

「痛い!何で僕だけえ!?こういうのはモモタロスの役割なのに!」

リュウボイスで愚痴るクライマックス電王。

「うるせえ!胸にいるテメエが悪いんだろうが!」

モモボイスで言い返すクライマックス電王。

言い合いをしている間に、コツドイマジン兄弟は態勢を立て直して、兄が銃口をクライマックス電王の右肩を捕らえて、引き金を絞った。

クライマックス電王の右肩に直撃した。

「センパイ!リュウタ!言い合いをやめて集中してよ!僕、当たっちゃったじゃない!」

ウラボイスで喧嘩を止めようとするクライマックス電王。

更にもう一発フリーエネルギーの弾丸が左肩に直撃した。

「コラア!モモの字!遊んどらんと早く決着つけんかい!食らったの俺らだけやないか!」

キンボイスで抗議するクライマックス電王。

「言われなくてもやってやらあ！」

右拳を、左手でパシンと受け止めてからクライマックス電王は走り出す。

「今度こそ仕留めてやるー！」

コッドイマジン弟が残った一振りの剣を両手持ちにして、走っているクライマックス電王に向かって斬りかかろうとする。

クライマックス電王は走りながら、左腰にあるデンガツシャーのパーツ二つを手にして横連結させる。

そして、横連結させたパーツを宙に浮かせた瞬間に右腰に収まっているパーツ二つを瞬時に手にして、横連結させたパーツの上下から挟むと先端からオーラソードが出現し、Dソードを完成させた。

コッドイマジン弟の刃は確実にクライマックス電王の首元を狙っている。

Dソードの刃をコッドイマジンの腹部を狙う位置に構える。

やがて、コッドイマジンとクライマックス電王の距離がゼロになる。

クライマックス電王は上手く首と上体を曲げて刃が直撃するコースから外す事に成功し、通り過ぎると同時に構えていたDソードで目標となる部位を狙って斬りつけた。

「ぐおおおおお」

痛みに苦悶の声を挙げるコッドイマジン弟。

お互い通り過ぎ、向き合うかたちになる。

この場合、先に切り込んだほうが勝ちとなる。

クライマックス電王が上段で構えを取ってから振り下ろす。

コッドイマジンは振り下ろされるDソードを剣で受け止めるが、パキンと折られて左肩にDソードの刃が届くことを許してしまう。

「必殺！俺達の必殺技!!」

モモボイスでそう発すると同時に、Dソードの刃が赤色、青色、金色、紫色のフリーエネルギーがオーラソードに伝導されていく。

時折、オーラソードから稲妻のようなフリーエネルギーが溢れている。

バチバチと音が鳴るところが、斬られる側にとってはたまったものではないのだが。

「クライマックスバージョン!!」

そのまま袈裟斬りをしてから、Dソードの構えを変えてから逆袈裟でもう一度斬りつける。

「ぐうおおああ。兄ちゃああああああん」

コッドイマジン弟は外部からのフリーエネルギーに耐え切れなくなって爆発した。

「弟よおおおおおおおおお!!!」

遺された兄は弟の死を悼みながら叫んだ。

「残るはテメエ一匹だけ?」

Dソードを右肩にもたれさせながら、クライマックス電王はコッドイマジン兄を煽る。

「ぐっうううう。貴様あ、よくも弟を!!」

コッドイマジン兄は二丁の銃の銃口を向けて、引き金を絞りながらクライマックス電王と距離をとる。

接近戦で戦って勝つ事は無理だと判断したのだろう。

「行くぜ行くぜ行くぜえー!」

クライマックス電王は避けることができる弾丸は避けながら、コッドイマジン兄との間合いを詰めていく。

そして、左袈裟斬りから右薙ぎ、左薙ぎへと斬激箇所を素早く斬りつけていく。

「ぐおおおおお」

よろよろと後ろへと下がっていく。

「ええい!くそお!」

ダメージを受けた箇所を押さえながら、コッドイマジン海へと飛び込んだ。

勢いよく飛び込んだが、飛沫はさほどあがっていない。

「へっ!逃がすかよ!」

クライマックス電王はコッドイマジンが逃げていると思われる海を睨んでから、パスを取り出してデノウベルトに装着されている

ケータロスのボタン中央に大きくある円型のボタン——チャージアンドアップスイッチを押してからターミナルバツクルにパスを展開してからセタッチし、更にパスを閉じた状態でセタッチした。

「チャージアンドアップ」

電子音声が発するとその直後に、デンオウベルトからDソードの柄部分を経由してフリーエネルギーがオーラソードへと伝導されていく。

一定量伝導されると、クライマックス電王はDソードを両手で持つて、正眼と違い、騎士が構えるような構えを取る。

「俺の必殺技、パート3！」

オーラソードがデンガツシャーから離れ、デンガツシャーとオーラソードはフリーエネルギーの糸のようなもので繋がっている状態になった。

釣竿のようにして振り下ろす。

オーラソードがコッドイマジンを追尾する。

「ぐおっ」

「うええっ」

などという声がするとところからオーラソードがコッドイマジンにダメージを与えているということだろう。

飛沫が上がり、そこからドリルのように回転しながらコッドイマジンを押し上げているオーラソードが現れた。

オーラソードは海中から出て、一定の高さまでコッドイマジンを押し上げるとデンガツシャーへと再連結される。

Dソードを構えて、クライマックス電王は跳躍する。

「とみせかけてストレートと真ん中！クライマックスバージョン!!」

叫ぶと同時にDソードを振り下ろしてコッドイマジンに直撃させ、エネルギー許容量を超えたために空中で爆発した。

爆煙からクライマックス電王が抜け出て、見事に着地した。

イマジン二体が滅び、クライマックス電王がデンオウベルトを外して野上良太郎、モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロスへと戻っていった。

誰もが良太郎とモモタロスの帰還を喜ぼうとした瞬間の事だった。突如、なのは、ユーノ、クロノに向かってオレンジ色の魔力光が飛んできた。

飛ばしたのは空中でオレンジ色の魔法陣を展開し、オレンジ色の光球を溜め込んでいるアルフだった。

「おい良太郎！アイツ空飛べるのかよ!？」

「一度だけだったから忘れてたけどアルフさん、空飛べるんだった」
モモタロスの問いに良太郎は自身もさつき思い出したように答えた。

「フェイト！良太郎！退却するよ！」

アルフの一声でその場にいた面々は今この場で何をすべきなのかを思い出す。

アルフはもう数発、魔力光を放つ。

フェイトはタイミングを見計らって、宙に浮いているジュエルシードを回収するために浮揚した。

アルフの放った魔力光が地に激突して、砂煙が立ち始める。

砂煙を回避するために、なのは、ユーノ、クロノはその場から離れる。

フェイトはそのまま左手を伸ばしてジュエルシードを取ろうとする。

だが、

青色の数発の魔力光がフェイトに向かっていった。

数発がフェイトに直撃し、フェイトは急速に落下していく。

アルフが落下するフェイトより速く、地上に移動して背中を受け止めた。

「ア、アルフ……」

「フェイト、大丈夫かい？良太郎！いるんだろ？逃げるよ！」

アルフはフェイトの安否を気にしながら、良太郎を呼びかける。

砂煙が晴れていき、その場にいた者達の視界がクリアになっていく。

クロノが杖の先端をフェイトに向けていた。

先端から魔力が収束されていた。

「フェイトちゃん、アルフさん。行って！」

クロノの前に両腕を広げた良太郎が立った。

なのはもまた、同じようにして立ちふさがった。

「やめて！撃たないで！」

二人が立ったことでクロノはフェイトアルフを狙えなくなった。

「……………」

クロノは構えていた杖を下ろした。

フェイトとアルフはこの機会を逃すはずなく、その場から去っていった。

なお、今回のジュエルシードを入手したのはクロノである。

「おいカメラ！これどうなってんだよ!？」

「イマジンが出てきてしばらくは共同戦線ってかたちになってたんだよ」

砂煙が晴れ、何故手を取り合ってる状態からいきなり戦闘になったのかわからないモモタロスは、ウラタロスに訊ねた。

「あの黒いのも、もしかして石ころ目当てか？」

「多分な。俺らもようわからんのや。なのはとあの子供の戦闘を止めに入ったりとな。」

クロノのことをモモタロスはキンタロスに訊ねるが、モモタロスが望む回答は得られなかった。

「じくーかんりきよく、て言ってたよ。あの黒いヤツ」

リュウタロスが自分が記憶している事を良太郎とモモタロスに教えた。

「時空管理局だって」

「良太郎、知ってるのかよ？」

モモタロスを筆頭に他のイマジン及びなのはやユーノまで集まっていた。

「フェイトちゃんがそんなことを言ってたな、と思ってるね」

「で、それは何なんだい？」

ウラタロスも答えが知りたいようだ。

「警察みたいなものだと僕は解釈しているけどね」

「「なるほどお」」」

モモ、ウラ、キン、リュウ、なのはは頷いた。

「え？みなさん。今のでわかるんですか？」

ユーノは時空管理局に関する知識は恐らく、クロノを除いて一番知っている。

自分が説明するより早く、良太郎なりの解釈で頷く面々に驚いた。

「まあな」

「長い説明よりはわかりやすいよ」

「知ってるもので例えてくれるのはありがたいで」

「良太郎は偉いんだよ！」

「凄くイメージしやすかったです！」

イマジン四体となのはは良太郎を大絶賛した。

「あ、ありがとう……」

良太郎は照れ隠しに頬を掻いている。

「良太郎さん、説明ありがとうございます」

ユーノは単純な説明で人を納得させる事が出来る良太郎に敬意と感謝を持って礼を言った。

「いえいえ……」

「あー、君達。盛り上がっている所申し訳ないんだが……。僕の話と
いうより、僕の上司の話を聞いてほしいんだ」

クロノがその場から数歩離れると、宙に描かれている魔法陣に一人の女性が映像のように映っていた。

「誰？あの美人」

ウラタロスが女性を見た瞬間に口説こうとしていた。

「「テメエ（オマエ）は黙ってる（とれ）！」」

モモタロスとキンタロスが魔法陣に向かおうとしているウラタロスを取り押さえた。

「ちよつとー！センパイ、キンちゃん!？」

「カメちゃんのスケベー！」

おしおきなのかリユウタロスが取り押さえられているウラタロス

の頭をペシペシと叩く。

「ごめんね。続けて」

良太郎がクロノに謝ってから促した。

「なかなか愉快な方達に囲まれてるのね。貴方」

女性が穏やかに率直な感想を述べてくれた。

「はあ……いつもこんな感じですよ」

女性の感想をどう受け止めたらいいのかわからない良太郎。

「貴方達にはこれから私達の艦『アースラ』へ来てもらいます。色々聞きたいことがあるし、ね？」

口調は柔らかだったが、任意ではなく強制だと誰もが感じた。

「どうする？・良太郎」

モモタロスが耳元で他者に聴こえないように訊ねてきた。

「行こう」

即答した。

アースラに転送された良太郎、なのは、イマジン四体、ユーノはクロノの背中を追うようにしてついていった。

良太郎は歩きながらも周囲を見回す。

映画で見るような狭苦しい感じがしていると思ったのだが、内装が想像していた以上に広がったのには声には出さないが、驚いていた。

ちなみになのははまだ、バリアジャケットのままである。

イマジン四体は珍しいのか周囲をキョロキョロしている。

ユーノはなのはの肩には乗らず、ててと四本足で歩いてた。

どこかの部屋の前になると、クロノは歩む足を止めて後ろを向き、なのはに言う。

「いつまでもその格好じゃ、窮屈だろう？バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

なのはその言葉に従い、解除した。服装は聖祥学園の制服姿へと戻る。

それからクロノはユーノを見る。

「君も元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

クロノに言われて、ユーノは何かを思い出したかのような顔をして

いた。

その直後、ユーノは身体全身を輝かせていた。

やがて姿がハッキリすると、なのはとイマジン四体は驚きの声をあげずにはいられなかった。

「貴方は驚かないのか？」

「まあ、コレより異常なことを体験したりしているから特に、ね」

一人驚かない良太郎にクロノは訊ねてきた。

良太郎は過去の体験を思い出しながら苦笑いを浮かべて答える。

ユーノ、なのは、イマジン四体はまだ騒いでいた。

「艦長に会う前に僕個人として訊きたい事がある。貴方と逃亡した二人の関係は？」

プチ事情聴取と良太郎は判断した。

「家主と居候、かな」

良太郎は『真実』は隠したが、『嘘』は言っていないかった。

第三十話 「容疑者!?!野上良太郎」

時空管理局執務官クロノ・ハラオウンは背後から聞こえてくる喧騒に対して、必死で自身の内に秘めるものを抑え込んでいた。

(穏便に、穏便に……。冷静に、冷静に……)

この者達は犯罪者ではないし、これからの捜査を行うためにはこの者達の証言は必要不可欠なのだ。

「ユーノ。オメエ、カメにいつの間にもスケベを仕込まれたんだよ？俺は悲しいぜ」

モモタロスがしゃがみこんで一人の少年——本来の姿に戻ったユーノ・スクライアの右肩をつかんで嘆いていた。

「モモタロスさん？」

肩をつかまれたユーノは何を言っているのかわからなかった。

「あの、僕がどうしてウラタロスさんにその……えと……悪い遊びを仕込まれたと？」

「そうだよセンパイ。僕はユーノにそんなことを仕込んだ覚えはないよ」

ウラタロスも身に覚えのないことなので口を挟んだ。

「モモの字、どないしたんや？急にそんな事言い出して」

「モモタロスこそ、バカになったんじやないの？」

キンタロスはモモタロスに説明を求め、リュウタロスは鋭い一言をぶつけた。

「オメエらこそバカになったんじやねえのか？思い出してみろよ。ユーノは今までフェレットだったんだぜ？」

「だから何なのさ？あ……」

ウラタロスはモモタロスが何を言いたいのかやつと理解した。

「カメの字？」

「カメちゃん？」

キンタロスとリュウタロスの視線がウラタロスに集まる。

「センパイ、いくらなんでもそれは僕に責任はないんじゃない？アレはどちらかというと、なのはちゃんに責任があるって」

「わ、わたしですか!？」

いきなり矛先を向けられた高町なのは目を大きく開いて驚く。

野上良太郎はモモタロス達が何の話をしているのかわからないので、黙って聞いている。

「アレか!アレはカメの字に責任ないでえ。ユーノにだってあらへんって」

キンタロスも何のことかわかったようだ。

「フェレット君がグツタリしてた時だあ!」

リユウタロスの一言でなのは何が言いたいのか思い出したようだ。

「え、あ、その、ふええええええ!アレ、わたしの責任なんですかあ!？」

顔を真っ赤にして、今にも煙でも出てきそうだ。

クロノの額に青筋が浮かび上がっていたが、誰も見えていない。

「あ、あの……。ユーノ君」

なのはが顔を赤くしながら俯いてユーノに声をかける。

「なのは。その、ごめんね。ええと……。初めて出会った時にこの姿で自己紹介してれば、その……」

ユーノは自身にも責任を感じているのか、先になのはに謝罪した。

「ううん。ユーノ君は悪くないよ!あの時のことは、わたしの方が悪かったんだから!」

なのははあの時の事を思い出しながら、謝罪してくるユーノに頭を上げるように言う。

「なのは……。わかったよ」

ユーノは頭を上げた。

ひとまず一つの問題が片付いたとクロノは判断したので、口を開こうとする。

「あのお、よかったらでいいんだけどさ。みんな何の事話してたのか教えてくれる?」

先に良太郎が口を開いた。

「ユーノがなのはと一緒に温泉に入った話だ」

モモタロスが簡単に教えてくれた。

良太郎はユーノとなのはを見る。

そして、理解した。

『ユーノ・スクライア海鳴温泉覗き事件』の概要はこうなっている。

なのははユーノを『喋るフェレット』だと思っていた。

ユーノは自身が『人間の男』だという事を事前になのはに教えたと思っていた。

なのははユーノを『人間の男』だと知らずに、一緒に温泉に入った。(この時、ユーノは全身全霊を持って入浴拒否をしたが、なのはに強引に連れて行かれた)

ユーノは『人間の姿』を現した。

モモタロスはユーノが『人間の男』だと知り、もしかしてウラタロスに悪い遊び^{スケ}を教え込まれて温泉に入ったのではないかと思い、ユーノに訊ねた。(彼がこう考えたのはウラタロスがユーノに教え込むには十分な時間があったから)

「モモタロス。誰かが悪いわけじゃないよ。これは事故、みたいなものだよ」

良太郎は苦笑いを浮かべながら、大岡裁きならぬ良太郎裁きをした。

なのはとユーノの誤解、ウラタロスの素行、モモタロスの早とちりからなるこの事件はこうして幕を閉じた。

「君達！いい加減にしろお!!」

幕を閉じたと同時にクロノの堪忍袋も切れたらしい。

クロノの先導で一行は艦長室前へと到着した。

「艦長、失礼します」

自動ドアをくぐって、艦長室へと入る。

中に入ると、良太郎となのはは目を疑った。

たくさんの盆栽に、茶を点てるための道具(柄杓、茶釜、茶碗、茶筌)に赤い敷物(毛氈^{もうせん})に室内用にこしらえたと思われる獅子おどしと『和』を感じさせるものばかりがあった。

そして、毛氈の上には一人の女性が正座しており、笑顔で待ち構えていた。

言う必要もないが、美人である。

「お疲れ様。まあみなさん。どうぞどうぞ。楽にしてえ」

穏やかだが、断れない雰囲気か艦長室を支配した。

さすがに全員一列は多すぎるので、良太郎、なのは、ユーノが前列となつて、後列にはイマジン四体という陣形を取った。

ちなみに全員正座している。

イマジン四体が何故正座ができるのかというと、最低限のマナーとしてコハナに叩き込まれたからである。

抹茶と羊羹が皆に出された。

女性の横にクロノが正座した。

こうして事情聴取が始まった。

「なるほど。そうですか。あのロストロギア——ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね？」

女性——アースラ艦長であるリンディ・ハラオウンはユーノに確認していた。

ユーノは首を縦に振る。

「それで、僕が回収しようと……」

ユーノが申し訳なさそうに語る。

「立派だわ」

リンディはユーノの心意気を高く評価した。

「だけど、同時に無謀でもある！」

クロノがユーノの行動を認めつつも、非難した。

ユーノはしゅん、となった。

「あの、ロストロギアって何なんですか？」

なのははへこむユーノを気にしつつも、リンディに尋ねた。

リンディは困った顔をしながらも、質問に答え始めた。

「ああ、異質世界の遺産、ていつてもわからないわね。ええと……。次元空間の中にはいくつもの世界があるの」

聞いている側の面々は頭の中でリンディの言葉を映像でイメージしている。

この時点でキンタロスは眠り始めていたりする。

「それぞれに生まれて育っていく世界、その中に極稀にだけど進化しすぎる世界があるの。技術や科学、進化しすぎたそれらはやがて自らの世界を滅ぼしてしまつて、その後に取り残された『失われた世界の危険な技術の遺産』」

この時点でリユウタロスは飽きたのか、考える事を放棄している。モモタロスは何とか頑張つて頭の中に入れており、ウラタロスはすんなりと理解しているらしいのか、涼しい顔をしている。

「それらを総称して『ロストロギア』と呼ぶ」

クロノが続ける。

「使用法は不明だが、使い方次第で世界どころか次元空間さえ滅ぼすほどの力を持つ事もある危険な技術」

空気は深刻なものへとなっていることはその場にいる誰もが口に出さずとも理解していた。

リンデイが口を開いて続ける。

良太郎は息の合ったコンビネーションだと感心したが、声には出さない。

「しかるべき手続きをもつて、しかるべき場所に保管しなければならぬ品物……。あなた達が捜しているロストロギア——ジュエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体。いくつか集めて特定の方法で起動させれば空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合になると次元断層さえ引き起こす危険物なの」

「君と黒衣の魔導師がぶつかった際に発生した震動と爆発。あれが次元震だよ」

クロノはなのを見てから身近で起こつたことで説明してくれた。なのははジュエルシードを挟んでレイジングハートとバルディツシュがぶつかったときに起こつたことを思い出した。

体験した事なので理解は早かつた。

クロノは更に続ける。

「たったひとつのジュエルシードの全威力の何万分の一の発動でもアレだけの威力があるんだ。複数個集まつて動かしたときの影響は計り知れない」

それからクロノ、リンデイはロストロギアが引き起こした災厄を語り始めた。

ユーノは話題についていけたが、魔法やロストロギアとは無縁の世界の住人であるのはや別世界の良太郎やイマジン四体は全くついていけなかった。

昔語りが終わると、リンデイは角砂糖を抹茶の中に入れてから一口飲んで、良太郎達を見回す。

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

リンデイの一言に全員が目を丸くした。

今まで静かだった艦長室は騒がしくなった。

「おい、良太郎。どういうことだよ？」

「つまり、なのはちゃんや皆がやってるジュエルシード探しをこの人達、いや時空管理局が引き受けてくれるって事だよ」

モモタロスが訊ねてきたので、良太郎はわかりやすく答えた。

「君達は今回のことを忘れて、それぞれ元の世界に戻って暮らすといい」

クロノは穏やかな口調で今後の事を示唆した。

「それって、なのはちゃんやフェレット君は危なくならないってこと？」

「そうだね。ジュエルシードがあの人達が言ったとおりの代物なら個人で捜すより組織総出で捜すほうが安全でいいからね。」

リュウタロスの疑問にはウラタロスが答えてくれた。

「でも、なのはもユノ助もええ顔はしてへんで」

キンタロスが二人の顔を見て率直な感想を述べた。

全員が二人の顔を見る。

確かに面倒事から外れてほっとしたような表情はしていない。

どちらかというと、自分なりに取らなければならない責任を他者に取られて納得できない表情だった。

「え、でも……」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらおうレベルの話じゃ

ない」

クロノは厳しい、いやこの手の事件に関わるプロの顔をして言った。

「でもー」

なのはは、それでも納得できなかつた。

険悪な雰囲気になりつつあつた。

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて二人で話し合つて、それから改めてお話をしましょう」

(民間人であるのはちゃんに介入してもらいたくないのに何故……)

リンデイの案に良太郎は疑問を感じた。

「送つていこう。元の場所でもいいね?あと……」

クロノは立ち上がり、良太郎を見る。

「貴方の身柄を拘束します」

その一言にモモタロスがクロノの胸倉を掴もうとするが、ウラタロスとキンタロスに抑えられる。

「離せよ!カメ!クマ!」

「センパイ!落ち着きなつて」

「そうや!気持ちはわかるけど落ち着け!」

それでもモモタロスはバタバタしている。

「オマエ!何で良太郎を捕まえるのさ!」

リュウタロスがモモタロスの言葉を代弁するかのよう抗議する。

「えと、その、あの皆さん?」

「と、とにかく落ち着いてください。皆さんって聞こえてないね」

なのはとユーノはどうしたらいいかわからないようだ。

「皆、待つてよ!」

良太郎の一声が騒ぎを治めた。

「」「良太郎(さん)?」「」

「彼の言い分も仕方ないよ。時空管理局としては逃亡した二人に関するの情報も欲しいはずだからね」

それでイマジン四体、なのは、ユーノは納得した。

黒衣の魔導師——フェイト・テスタロッサの情報を持っているのは良太郎だけだということを。

「大丈夫だよ。折角時間を貰ったんだから早く戻ってゆっくりしておいでよ」

笑顔を見せて、皆を安心させてから早く戻るように促した。

誰もが渋々とだが納得して、艦長室から出て行った。

艦長室に残ったのは良太郎とリンデイの二人だけだった。

「ごめんなさいね。仕事上とはいえ……」

「いえ、仕方ありませんよ。ただ……大丈夫なんですか?」

「何がかしら?」

「イマジンのことです。全く触れてませんでしたよね?」

良太郎の言うようにイマジンのことについては今の話には全く出ていなかった。

「……そうね。できれば聞かせてもらえるかしら?」

良太郎はリンデイにイマジンのことについて話した。

「まさか、ジュエルシードを狙っているなんて……」

リンデイは深刻な表情になった。

「契約者は間違いなく、あなた達の世界の住人です」

「それが誰、という事は?」

「見当は付いていますが、確証はありません」

良太郎は確たる証拠を今持っているわけでもないないので、契約者の名は告げなかった。

「艦長。戻りました」

なのは達を送っていたクロノが艦長室へと戻ってきた。

「お帰りなさいクロノ。今、彼からイマジンの事を聞いていたところなの」

リンデイがクロノに労いの言葉をかけた。

「そうですね。さて、貴方には聴きたいことが色々あるのだが」

クロノが良太郎と向き合うかたちで座る。

「答えられることなら答えるけどね」

「ではまず、貴方は何者なんだ？」

電王になってイマジンを撃退した。魔導師が四苦八苦した相手もいとも簡単にだ。それだけでも彼等にしてみれば脅威となる材料だろう。

「まず、僕はこの世界の住人じゃないんです。正確にはこの世界のこの時間の住人じゃないんです」

「え？」

良太郎の言い回しにリンディとクロノは混乱していたが、理解が早いらしく表情が見る見る平静へと変わっていった。

「では貴方は、別の世界のどの時間から来たんですか？」

リンディは良太郎に訊ねる。

「今から十年後の時間、です」

良太郎は即答した。

「タイムマシンにでも乗ってきたというのか？時空管理局の技術でもまだ開発のメドすら立っていないというのに……」

クロノは良太郎の言葉で自分が考えられる可能性を口に出し、ありえないと否定した。

ちなみに次元航行艦では『現代』のあらゆる次元世界は航行可能だが、『過去』や『未来』は不可能なのだ。

「貴方の世界ではタイムマシンが作れるほど高度な文明が発達しているのかしら？」

「いえ、僕がいる世界の文明はこの時間の海鳴市より若干進化した程度なんです。だからタイムマシンはもちろんの事、次元航行艦すら作れません」

リンディの質問に良太郎は誤解を招かないように答えた。

いくら、自分が『時の列車』を当たり前のように利用しているとしても、それはあくまで『自分の周り』だけであって、決して自分と同じ時間に住んでいる人間が『時の列車』を利用しているわけではないのだから。

「だが、貴方はタイムマシンを上手く利用して、この世界に来たと言っている。矛盾しているではないか！」

クロノも出来る限り平静を保っていたかったのだが、矛盾な証言に苛立ちを露にしてみました。

「僕もどう答えたらいいか正直わからないんだ。何せ全部を知っているわけではないからね」

良太郎は『時の列車』を当たり前のように利用しているが、ソレがいつ出来たのか、何のために作られたのか、誰が作ったのかなんて事は知らない。

「では、質問を変える。貴方とあの黒衣の魔導師の関係は？」

これ以上のことは聞けないと判断したのかクロノは質問内容を変えたようだ。

「さっきも聞いてきたね。だから……」

「家主と居候、以外での関係を僕は聞いている」

クロノに先手を取られた。

「ジュエルシードを捜している仲間、かな」

良太郎は今回も『真実』を隠したが、『嘘』は言っていなかった。

*

海鳴市には夕方から夜へと向かう時間帯になっていた。

ソファに寝そべっているフェイト・テストロッサをアルフは心配で心配で仕方がなかった。

とにかく、弱っている。

プレシア・テストロッサから受けた折檻のダメージが若干残っているのか、それともろくに栄養を取っていないため、肉体が弱体化したのか、それとも精神的ストレスがピークに達しているのかわからないが、誰から見てもわかるように弱っていた。

「駄目だよー良太郎は時空管理局に捕まっちゃうし、どうしようもないよー」

アルフは泣きそうな顔でフェイトに弱音を吐く。

「逃げようよ。どこかにさ……」

時空管理局対個人では竹槍で最新兵器に喧嘩をするようなもの。結果は誰から見ても明らかなものだ。

フェイトはその言葉に反応したのか、アルフに顔を向ける。

「それは……、駄目だよ」

「だってさ……。時空管理局が本気で捜査なんてしてみなよ？ここだってバレるのも時間の問題だよ……」

アルフは励ますどころか弱音しか出てこない。

「それにあの女、アンタの母さんだってワケのわかんないことばっか言うし、フェイトにひどい事ばっかりするし……。それにジュエルシードを持つてる限りさ、イマジンだって襲いかかってくるんだ。もうどうしようもないよ……」

アルフにしてみれば自分達の周りには敵しかいない状態なのだ。

「……母さんの事は悪く言わないで」

「言うよーだって、あたしフェイトの事が心配だ！フェイトが悲しんでいると、あたしの胸もはちきれそうで痛いんだ……。フェイトが泣くのも悲しいのもあたしは嫌なんだ！」

アルフはどうとう抑えていた涙腺を溢れさせた。

そして、なりふり構わず泣き始めた。

フェイトにとってはその気持ちは嬉しかった。

だが、母であるプレシア・テスタロッサの願いも叶えたいという気持ちも譲れないというのも本音だ。

フェイトは泣きじやくるアルフの頭を撫でながら、ここにいない青年のことを思い出していた。

「良太郎。大丈夫……だよね？」

フェイトはアルフに聞こえない様に呟いた。

第三十一話 「クライマックスへのダイヤ」

雨雲のような雲が螺旋状に動いている空間に一隻のSFチックな艦が航行していた。

次元航行艦『アースラ』である。

身柄を拘束された野上良太郎であるが、独房に放り込まれているわけではない。

その証拠に、今現在凄まじい勢いで料理を平らげていた。

元々、電王になると体力を通常よりも遥かに消耗する。それがクライマックスフォームなら尚のことだ。

アースラスタッフで食事を取る時間を許されている面々はその異様な食欲っぷりに開いた口がふさがらない状態になっていた。

ちなみに彼がここで食べた食事はというと、パスタ二人前、チャーハン三人前にギョーザ四人前にカレー三人前を食べていた。

「げぼう。食べた食べたあ。下手なレストランよりずっと美味しかった」

良太郎は感想を述べてから、コップに入っている水を飲んだ。

「凄まじい食欲ね。それも電王の影響によるものかしら？」

「見かけに似合わず、大食漢だな」

聞き覚えのある声が正面からした。

リンデイ・ハラオウンとクロノ・ハラオウンだ。

二人とも、トレーの上には和風の定食が乗っている。

「帰ってきてすぐに戦闘でしたからね。食事をする暇もなかったんです」

良太郎は空になったトレーを持って、返却口に戻しに行った。

その後、また先程座っていた席に戻る。

「僕、身柄を拘束されているんですよね？こんなに自由でいいんですか？」

「脱走できるのならしてみればいい。それが無駄な事だという事は貴方もわかっているはずだが」

クロノはそう言いながら、食事を取り始める。

「君の言う通りだね。僕一人の力じゃ無理だね」

良太郎はムキになるわけでもなく、冷静に返答した。

アースラから海鳴へ行くには転送するための場所がある。

仮にその場所まで行けたとしても、使用方法がわからなければ意味がないことだ。

クロノはそこまで見越して挑発じみた事を言ったのだろう。

「あの、艦長さん」

「ごめんなさいね。自己紹介がまだだったわね。リンデイ・ハラオウンよ」

「僕もそうでした。すみません。野上良太郎です」

良太郎とリンデイは互いに自己紹介をしあつた。

そして、良太郎から切り出した。

「時空管理局って警察みたいなものですよね？」

「ええ。そうね。貴方の感覚でいえば、警察でもあり、司法機関でもあり、軍隊でもあるのよ」

「そうですか。ではこの一件はご存知ですか？」

良太郎は一枚のメモの切れ端をリンデイに見せた。

リンデイはそれを見てからクロノにも見せる。

「この事件に関しては管理局は関わっていないわね」
「何年か前に起こった事故だろ？確か死者が多数出たと言われている」

（アリシアちゃんの死の原因となった事故に関しては管理局は関与していない、か）

仮に関与していたとしてもプレシア・テスタロッサの心が晴れるとは思わなかったが。

「そうですか。ありがとうございます」

そう言うと、良太郎はクロノからメモを取り上げた。

「あと、もうひとつ聞いていいですか？」

「何かしら？」

リンデイは穏やかな表情で良太郎の質問に答えるようだ。

「何でなのはちゃん達にあんな事言っただんですか？」

クロノの箸が停まり、リンデイも持っていた箸を置いた。

「あんな事って何かしら？」

「クロノがなのはちゃん達の介入を拒んだ後の台詞です」

リンデイは黙ったままだ。

良太郎は続ける。

「なのはちゃん達を今回の事件から遠ざけて元の生活に戻す事を本当に望んでいるのならば、まず言いませんよね？」

「あら、それではまるで私があの子達にこの事件に参加させるために、わざと言ったという風に捉えられるじゃない？」

「僕はそう思っています。あなた達、いえあなたはなのはちゃん達にこの事件に参加してほしいんです。理由は色々あると思いますけどね」

良太郎は睨むわけでもなく、ただリンデイの瞳を見ていた。

クロノは二人の動向が気になるのか、交互に見ている。

リンデイが言い返さないところを見ると、凶星なのかもと良太郎は判断する。

「何故、私があの子達をこの事件の参加する事を望むと考えているのかしら？」

リンデイは良太郎に訊ねた。

質問する側とされる側が逆転した。

「単純に考えるなら戦力の増強でしょうね。ロストログアが危険なものなら戦力が多いに越したことはありません。危険物に対処するなら限りなくリスクはゼロに近いほうがいいというのが理想ですからね」

「艦長がそのような事を含めてあんな事を言ったと本気で考えているのか？ 貴方は！」

クロノが割り込んできた。その瞳にはまるで肉親を侮辱されたかのような怒りが宿っていた。

「それだけじゃない。あの言葉にはモモタロス達を引き込むことも想定してのことだと僕は思ってる」

リンデイの眉がピクリと動いた。

「どういう意味だ？」

クロノは純粋に良太郎に訊ねた。

「モモタロス達がなのはちゃん達の仲間だからさ。なのはちゃん達が時空管理局に協力するといえれば必ずついてくるからね。そうなれば今後ジュエルシードを捜すにしても必ず出くわすイマジンを撃退するための力を手に入れたことにもなるからね」

「確かに、イマジンを撃退となるとその道のプロとも呼べる貴方達の力は魅力的になるだろう。だが、既に先の戦闘からデータを分析し、対処法も練り上げつつある。正直に言えば貴方達の力を引き込む必要はないと思うが」

クロノは今後、時空管理局がイマジンに後れを取る事はないと言う。

「イマジンはそんなに甘くはないよ。たかが一回の戦闘で全てを見極める事が出来るほど底は浅くない」

良太郎は自身の経験からクロノに警告した。

「それに、イマジンの目的はジュエルシードを集めて終わりじゃない。そこから先がイマジンの本来の目的なんだ」

「ジュエルシードを集める事がイマジンの最終目的じゃないのね？」

リンディは確認の際に良太郎に聞く。

「ええ。イマジンにとってジュエルシードを集める事は自分達の目的を果たすための過程でしかないんです」

「最終目的は一体何だ？ロストログアの回収を過程にするくらいだ。厄介な事を起こそうとしているんだろ？」

クロノが良太郎に回答を迫る。

「そうだね。イマジンの目的が完遂された場合、時空管理局は何も出ずに敗北する事になるね」

「!!」

良太郎の回答にリンディは穏やかな表情から真剣な表情へとなる。

クロノにしても良太郎の言葉は意外だった。

「我々が何も出来ずに負ける？今の言葉はどうにも聞き捨てならないな」

クロノは額に青筋を立てていた。侮辱された怒りによるものだ。良太郎は特に怯む様子もない。

「時空管理局には過去に遡る技術はないんでしょ。だったら何も出来ずに滅ぶ以外に選択肢はないよ」

「良太郎さん。イマジンの最終目的って……」

リンデイはを飲み込めたようだ。

「過去に遡って改変させる事、つまりタイムパラドックスを起こす事なのね？」

「はい」

リンデイの導き出した答えに良太郎は首を縦に振る。

「そんな事になれば……」

「……時空管理局では対処しきれないわね」

クロノとリンデイが最悪の結果を想像し、率直な感想を述べた。

「でも、イマジンが過去に遡る前にこの時代で倒してしまえばそういう心配はないですよ」

良太郎が安心させるように付け足した。

「クロノ。今話を聞いてどう思った？」

「……彼等の力は必要になりますね」

クロノ・ハラオウンは別世界の住人達を認める言葉を吐いた。

*

夜。それは漆黒の空が支配している時間帯。

高町家はやはり賑やかだった。

だが、台所風景はいつもと違っていた。

高町なのはが洗い物を手伝っていた事だ。

他の面々は皆それぞれに興味なり何なりをしようとしていた。

モモタロスは翠屋特製のプリンを食べていた。

「かあーっ。美味えー！カミさんのプリンは最高だぜー！」

まるでその一言は風呂上りにビールを飲んで吠えるそれに通じるものがある。

ウラタロスはモモタロスの向かいでケーキを食べている。

「ところでさ、センパイ。出かけた甲斐はあったの？」

怪しまれないように言葉を選んで訊ねた。この辺りは口の上手いウラタロスならではだろう。

「……ああ。大有りだったぜ。後で聞かせてやるよ」
「センパイ？」

一瞬だけトーンダウンしたことをウラタロスは見逃さなかったが、今ここで追及すべきことではないので黙っている事にした。

「クマちゃん。モモタロスどうしたのかな？いつもと違うよ」
「確かにモモの字らしくないな」

将棋をしていたリユウタロスとキンタロスが様子のおかしいモモタロスを見て小声で話していた。

彼等もまた、モモタロスの一瞬だけのトーンダウンを見逃さなかったのだ。

ちなみにフェレット状態のユーノ・スクライアがこの場になくなっていて誰も気づいていなかったりする。

*

アースラのモニタールームでは一人の少女が映像に映っているフェイト・テストアロッサとなのはとコツドイマジン二体とクライマックス電王の分析をしていた。

キーボードを叩く手は慣れたものであり、それが彼女がこの手の素人ではないと物語っていた。

彼女の名はエイミー・リミエッタ。
執務官補佐。つまり、クロノの補佐役という事だ。

「凄いよ。黒い子も白い子もAAAクラスだよ！」
彼女が言うAAAとは魔導師ランクの事だ。

「エイミー。二人のことよりもあの得体の知れない二種類はどうなってるんだ？」

クロノがモニタールームでモニターを眺めながら訊ねる。
「ええと、こっちのタラ型の何だっけ？」

聞きなれない言葉なのかエイミーは記憶できていないようだ。
「イマジンだ」

クロノが補足した。

「イマジンの能力を魔導師ランクで分析してみるとAAA―クラスかな。一体でこれだからね。もし集団で来られたらゾツとするよ」

「……そうか。彼の言う事は正しかったんだな」

「ん？もしかして、身柄拘束した人のこと？結構二枚目だよ。人のよさそうな感じするし」

「エイミー！」

「あ、クロノ君。もしかしてヤキモチー？」

エイミーはケラケラと笑いながらクロノをからかっていた。

「違うー！」

ムキになればなるほどドツボに嵌ることをクロノは薄々はわかっているのだが、どうにも嵌ってしまふ。

それがエイミー・リミエッタの力なのかもしれない。

「それでイマジンはわかったが、そのイマジンをいとも簡単に倒した電王はどうなんだ？」

「あー、それなんだけどねえ」

「？」

彼女にしては珍しく歯切れが悪かった。

「コレ見てよ」

モニターにはクライマックス電王があらゆる角度で映っていた。

動くたびにモニター端にある数値が動いている。

「改めて見ると異様な姿だな」

「はははは。でもソレに完全に後れ取っちゃったからねえ」

「……言うな。それで結果はどうなんだ？」

「計測不能だつてさ」

「は？まさか、嘘だろ？」

「正確に言おうと、常にエネルギーが安定していないんだよねえ。電王つてさ」

「安定していない？」

電王は魔導師ではない。そのため、魔導師の格付けともいう『魔導師ランク』に当てはめる事そのものが無理な事なのかもしれない。

「うん。感情の起伏みたいにさ、上がったたり下がったりしてるんだよ。

これで正確に分析しろつてのは無理だよお」

どこまでも異様な存在だとクロノは思っているが、口には出さない。

「なら、最も安定している状態で判断しよう。それでどのくらいなんだ？」

「ええと、S十だね。……安定しているだけでコレだもんね。データメだよお」

エイミイはもう笑うしかないよね、といった感じだ。

「ところでさクロノ君。彼ってどういう人？」

エイミイは良太郎に興味があるのかクロノに訊ねる。

「正直に言えば敵に回したくない奴だな」

クロノは食堂でのやり取りを思い出していた。

温厚そうな顔をしていて、妙に鋭い。

それでいて荒げるわけでもないのに言葉には凄みがある。

何よりも妙な貫禄がある。

管理局で彼と似た年齢の者と接した事があるが、次元が違うとしかいいようがない。

幾多の修羅場を潜った人間にしか放てない雰囲気だった。

ドアが開く。

「あら、それはもしかして先の戦闘のデータね？」

私服姿のリンデイが入ってきた。

「あ、艦長」

クロノは声を出し、席に座っているエイミイは笑顔で軽く会釈した。

リンデイはモニターに映っている映像を見る。

その目つきは鋭く、どんな小さなことも見逃さないといった感じだ。

「あの子達も凄いいけど、彼等はあらゆることで別格ね」

AAAクラスの魔導師が霞んで見えるほど、電王の存在は大きかった。

並の魔導師がタバになっただけかかかっていってもハッキリ言って、戦力

を消費するだけだろう。

五分五分の戦いにはならない。

一方的な戦いになるだろう。

「正直に言えば、私もイマジンは良太郎さんの話を聞くまでは過小評価していたわ。電王だってトップクラスの魔導師なら五分五分に渡り合えるときさえ考えていたのよ」

いくら強いといっても時空管理局じぶんたちより上であるはずがないという思いがあった。

それはいわば、彼等もまた『自分達が保護すべき存在』と考えていた。

だがイマジンの事を聞き、彼等の役割を察したとき立場は逆転した。

自分達が彼等を守るのではない。彼等が自分達を守ってくれているのだということにだ。

「彼等と共に行動するなら五分五分の関係がベストでしょうね。それに……」

「艦長。本気ですか!?いくら彼等の存在が我々の予想を超えるものでも彼等は民間人ですよ」

「良太郎さんの人柄からしたら有り得ないと思うけど。もしよ。私達が彼等の怒りを買ったら彼等はこういう事をすると思像できる?」

リンデイの例え話にクロノは思考を働かせる。

「過去に戻って創設されて間もない管理局を滅ぼす。ですか?」

クロノが考えられる限りの報復を口に出した。

「そうよ。そのくらいのが出来るのよ彼等には……」

エイミイも顔色を悪くしていた。

「うえええー」

時空管理局にとって、別世界の者達は脅威の対象になりつつあった。

モニターがいきなり切り替わった。

大画面にフレット——ユーノが映っていた。

*

高町家の二階になのはの部屋がある。

ユーノは机の上に置かれているレイジングハートを介してアースラへと回線をつなげた。

「僕です。ユーノ・スクライアです」

『聞こえています。それで用件はと訊ねる必要はないわね』

レイジングハートからリンデイの音がする。

「あれから、皆で話し合っただんですが僕達もそちらに協力させていた
だきたいと……」

『協力、ねえ』

クロノがユーノの申し出に渋る声を出した。

ユーノにしてみればこれは予想範囲内だった。

この手のプロが一番屈辱だと感じるのは民間人の手を借りなければならぬということだ。

自身も遺跡発掘に関していえば、プロのようなものだ。自分が同じ立場に立ったときにはクロノと似たような反応をするかもしれない。

「僕はともかく、なのはやモモタロスさん達は時空管理局にとつてもプラスになるはずです。ジュエルシードの回収やあの子達やイメージンの戦闘など、そちらにしてみても便利に使えるはずです」

ユーノは考え付く限りの意見をぶつける。

『なるほど、しっかり考えていますね』

リンデイの声からして満足できる回答のようだ。

『わかりました。手伝ってもらいましょう。こちらからの条件は二つあります。高町なのは及びユーノ・スクライアの両名及び野上良太郎の関係者はこちらに身柄を預ける事。そして、もうひとつは我々と貴方達は対等の関係で接すること』

「え？」

リンデイの提示した条件にユーノは思わず声を出してしまう。

『何か異論が？』

「あ、いいえ。その条件で謹んでお受けいたします」

こちら側としてみれば願ったり叶ったりの条件だった。

時空管理局と対等の立場で今後に関わる。

本来ならありえない。というより、起こりえるはずがないことだった。

ユーノは何故そのような厚遇になったのかを考える。自分となのはではそんな事にはならないだろう。

(あの人達だな)

厚遇の原因は間違いなく良太郎達だ。

少し考えればわかることだった。

仮に時空管理局が良太郎達の機嫌を損ねるような態度をとった場合、どうなるかということだ。

良太郎達がそんなことをするわけがないのだが、人というものはとかく、脅威となる存在には必要以上に考えてしまうものだ。

(とりあえずよかった。僕となのはただけだったら、協力といっても実質『支配される側』になってたからね)

リビングでは、なのはと高町桃子とユーノだけがいた。

なのははこれまで自分の身に起こったことを魔法やユーノの正体や電王やイマジンのことを除いて全て話した。

桃子はそれを黙って聞いていた。

娘が内に抱えているものを打ち明けてくれた事が嬉しかったのだ。同時に娘が決意しているものがあるということも知った。

「もしかしたら危ないかもしれないことなんだけど……。大切な友達とやってきた事を最後までやり通したいの」

桃子は縦に振って頷く。

「心配かけちゃうかもしれないけど……」

なのはは申し訳なさそうに言う。

「お母さんはいつも心配よ。なのはが迷っているのなら、危ないからやめなさいって強く言えるけど……。なのははもう決めているんですよ？なら行つてきなさい。お父さんとお兄ちゃんには上手く言つておくわ。それに……」

桃子は笑顔でなのはに力を与える。

「モモタロスさん達も一緒なんですよ？だったら安心できるわ」
「お母さん……」

それからなのはとユーノは部屋に戻って支度していた。
リュックに最低限、必要な物を詰め込んでいる。
全ての準備を整え終えるとなのは高町家を出る。

「よお。決心はついたみてえだな？」

そこにはモモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、コハナが待っていた。

「はいっ！」

なのはとユーノは同時に返事した。

「じゃ、行きますか」

ウラタロスはついていくことが当たり前のように言う。

「俺ら抜きはなしやで？」

「そうだ。そうだー!!」

キンタロスもリュウタロスもついていく気マンマンだ。

「話は皆から聞いたわ。私達も行くわよ！」

事情をイマジン達から聞いたコハナもついていく事には迷いはない。

四体と一匹と二人は夜空を見上げた。

月は優しくも妖しく輝いていた。

第三十二話 「クライマックスへの切符」

雨雲もしくは雷雲らしきものが渦を巻いている空間を次元航行艦アースラは航行していた。

その中で野上良太郎は特にする事もないので、いざという時に備えて艦内を散策していた。

「確かに全部把握しても脱走は無理そうだね」

クロノ・ハラオウンの挑発に乗る気はないが、こうして歩いてみると彼の自信も領けるものだった。

アースラスタッフ達が良太郎をチラチラと見ている。

好奇の眼差しが大半を占めているだろう。

(やりにくいな。それに僕からしたらアースラにいる人達の方が珍しいんだけどね)

良太郎はそんなことを思いながら口元を緩めてしまおうが、すぐに真剣な表情となる。

これからのことを考えたからだ。

(僕がリンディさんに言った事が、その通りになるとしたらそろそろモモタロス達が来ると思うんだけど……)

良太郎はケータロスを見る。日付が変わる時刻になりつつあった。

「何かあの変な怪人四体が来たぞ」

「民間人なのにロストログアを回収した子供達も来てるぞ」

「一人、見慣れない女の子が来たぞ。あの子も魔導師なのかな?」

そんな声が良太郎の耳に入った。

それは良太郎の知り合いの特徴を見事に捉えたものだった。

転送装置がある場所まではここからは近いし、既に道程も記憶している。

それから五分後。

目的地に着いた良太郎が見たものはというと、

モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リユウタロス、コハナ、高

町なのは、ユーノ・スクライア(人間)がいた。

「みんな! やっぱり来たんだ」

「当たり前だろ！」

良太郎が声をかけ、代表としてモモタロスが返した。

時間は午後十一時四十五分となっていた。

到着した面々はエイミイ・リミエツタの案内でそれぞれの部屋に荷物を置いた。

「今から今後の方針と皆さんの紹介がありますので、付いてきてください」

明るく愛想よく今後の事を告げてくれた。

「黒いの（クロノのこと）と違って、愛想いいな。あの姉ちゃん」

モモタロスが隣にいる良太郎に耳打ちする。

「センパイ、比べる相手を間違えてるって」

ウラタロスがクロノとエイミイを比べても仕方ないと指摘する。

「ま、色んなヤツがおるっちゆうことや」

キンタロスが腕を組んで、クロノやエイミイ、リンデイ・ハラオウンと言った個性的な面子を認めるような事を言う。

「僕、アイツやだー」

リュウタロスは気が進まないのか足運びが他の三体よりも機敏としていなかった。

「リュウタ君。ワガママ言っちゃダメだよ」

隣を歩いているのはが苦笑いを浮かべながらリュウタロスをしたしなめる。

「良太郎さん。何かしました？」

ユーノが良太郎の隣まで歩み寄って訊ねてきた。

「何かって何を？」

良太郎はユーノが何を聞きたいのかという趣旨がわからなかった。

「実はですね。協力を申し出た時、五分五分の扱いになったんです。民間人と大組織がですよ？」

「普通ならまずありえないことだね。ユーノがそうリンデイさんに申し出たの？」

ユーノは首を横に振る。

「いえ、リンデイ提督からです」

「リンデイさんから？」

「はい。だからもしかしたら良太郎さんが何かしたのかなって思ってた聞いてみたんです」

良太郎は今に至るまでのアースラでの自身の行動を思い浮かべる。食堂で暴食してから、リンデイやクロノと話をしたくらいだ。

特に「厚遇してくれ」と申し出てはいない。

なら、可能性とするならば時空管理局が勝手に自分達に何らかの脅威を感じて、機嫌を損なわない程度に取り扱おうと考えたのかもしれない。

「ユーノとしてはその扱いにどう思ってるの？」

良太郎は逆にユーノにこれから置かれようとしている処遇について訊ねる。

「正直に言えば意外ですよ。『協力』といっても支配下に置かれるはずですからね」

「確かに、ね」

良太郎もユーノの意見には賛成だった。

大組織が個人団体と対等な関係を保ちたがるはずがない。自分が常に優位に立ちたいものなのだ。

「良太郎さんは自分達のことをどのくらい話したんですか？」

「この世界とこの時間の人間ではないってことと、後はイマジンのことは包み隠さず、かな」

「それだけ話せば時空管理局が脅威に感じて、五分五分の関係を持とうとするのも領けますね」

それは自分が仮に同じ立場だったら、そうすると言うような口調だった。

「みなぎーん。着きましたよ！こちらです！」

先頭を歩いていたエイミイの足が停まり、左手がこれから入室しようとする部屋を指していた。

恐らく今から入る部屋は会議室だな、と良太郎とユーノは予測した。

そこはアースラの中ではとにかく暗い印象しかなかった。

電気が通っていないはずがないので、雰囲気を出すためにわざとこんな半分暗いような演出をしているのではないかと、初めて入室する者達が最初に感想として出すだろう。

既にリンデイ、クロノを始めとする主なアースラスタッフが座っていた。

良太郎達は空いている席に適当に座る。

ちなみにイマジン達の横及び対面になっているアースラスタッフは小刻みに震えていたりするが、誰も見なかったことにした。

それが運悪く隣と対面に座る型になってしまった者達のプライドを守るための唯一の手段だからである。

面子が揃った所で会議が始まった。

「というわけで、本日零時を持って本艦全クルーの任務はロストログア——ジュエルシードの搜索と回収に変更されます。また、本件においては特例として問題のロストログアの発見者であり、結界魔導師でもある……」

リンデイが威厳と迫力を身体中に纏わせながら今後の方針を説明しながら、キリのいいところで適任者に自己紹介を込めてバトンタッチする事にした。

「ユーノ・スクライアです！」

気合を込めて席から立ち上がり、気合を込めて自己紹介した。

「いいぞー！ユーノー！ぶべっ」

モモタロスが茶化すが隣に座っているコハナに脇腹を殴られて沈黙した。

「こほん、それから彼の協力者であり、現地の魔導師さん……」

リンデイはもう一度、先程と同じように威厳と迫力を纏ってからユーノの協力者に自己紹介させる。

「た、高町なのはです！」

ユーノに勝るとも劣らぬ気合で席から立ち上がった。

「なのはちゃん！ガンバレーー！ぶっ」

なのはを応援したりユウタロスだが、その直後に背後に移動していたコハナのハリセンを食らってテーブルに突っ伏した。

「あ、あとそんな現地の魔導師さん達に協力してくれる別世界から来た……」

二度目の緊張感を削ぐ攻撃を食らいながらもリンディは良太郎達を紹介しようとする。

「野上良太郎です」

良太郎が立ち上がって自己紹介した。

「モ、モモタロスだ……」

脇腹を押さえながらモモタロスが立ち上がった。

「ハナです。よろしくお願いします」

コハナが先に行った行動とは百八十度違う態度で頭を下げた。

「ウラタロスだよ。よろしくね」

ウラタロスは差し障りのない紹介をした。

「キンタロスや」

名を告げた後は座り込んで眠り始めた。

「僕、リュウタロス。まだ痛い」

後頭部を押さえながら自己紹介をした。

「以上八名が臨時局員の扱いで事態に当たってください」

リンディが説明を終えると、ユーノ、なのは、良太郎、コハナは頭を下げたがイマジンはそのままだった。

会議室で協力者の紹介が終わるとアースラススタッフとチームメンライナー+2(+2とはなのは&ユーノの事)はモニター室に戻り、リンディは艦長席に座る。

「ここからはジュエルシードの位置特定に関してはこちらですわ。場所がわかったら、現地へと向かってもらいます」

「は、はい！」

艦長席の後ろにいるのはとユーノが返事する。

「それから、ジュエルシードを狙っている怪人——イマジンについては貴方達に一任します」

リンディはジュエルシードを狙うイマジンの討伐如何を良太郎達に任せることにした。

「はい！」

「わかりました」

コハナと良太郎がそれぞれ返事する。

「艦長、お茶です」

エイミイがトレーにお茶と砂糖とミルクを乗せてリンディに渡した。

良太郎の服の裾が引っ張られる。

引っ張っていたのは、なのはだった。

「砂糖とミルクってお茶の中に入れるんですよね？」

起こってほしくないというような表情で小声で訊ねてきた。

「……間違いなく入れるね」

良太郎もリンディの味覚が常人のソレとは違うと考えているので、なのはの予想を肯定した。

「注意した方がいいんじゃないの？」

コハナが良太郎に小声で進言する。

「無理だよ。あんなに美味しそうに飲んでるんだよ」

良太郎が見ているものに、コハナとなのはも見る。

リンディが湯飲みに入った茶に砂糖とミルクを放り込んだ。

そして、それを美味しそうに飲んでいた。

「あのお茶って、あんな飲み方しませんよね？」

日本人ではないユーノでもリンディの飲み方には疑問があるらしい。

高町家の食卓をフェレット姿で毎日見てきた彼だからこそ疑問にもてたといつてもいいだろう。

「ところで、なのはさん。学校の方は大丈夫なの？」

リンディは引き込んではいいても、なのはの本来の生活を気にはしていた。

「あ、はい。それなら家族と友達には説明していますので……」

「そう、なら問題ないわね」

リンディは早速アースラスタッフに的確な指示を下していた。

ちなみにイマジン達四体はというと、いたら確実に騒ぎを起こすので食堂へと強制的に移動させられていた。

モニタールームから出た良太郎とコハナはイメージが出現したと連絡が出るまでの間は食堂か割り当てられた部屋で待機するかの選択肢が用意されていたが、良太郎自身は過去で得た『真実』を留守番してくれた面々に報告するために食堂へと向かうことにした。

イメージ達四体のうちモモタロスとリュウタロスはというと、遊び道具も持ってきていないため机に突っ伏しており、ウラタロスは食堂のメニューを退屈を紛らわすために見ており、キンタロスは腕を組んで椅子にもたれて寝ていた。

「あ、良太郎、ハナさん。センパイ、キンちゃん、リュウタ。起きなつて」

ウラタロスがメニューから目を離すと、良太郎とコハナが映った。ウラタロスが寝ている一体と机に突っ伏している二体を揺すつて起こす。

「う、ううん。どうしたんや？カメの字、朝か？」

「何だよ？カメ、イメージでも出たか？」

「え？イメージ、今度は僕が行くからね！」

相当暇なのかイメージの出現でさえ、彼等には退屈を潰すためのひとつにされていた。

「アンタ達！不謹慎よ！」

コハナがモモタロスとリュウタロスを叱る。

「何だよ。コハナクソ女じゃねえかよ」

モモタロスは退屈がやつと潰れると期待したのか、コハナを見た瞬間にガツカリした。

「モモタロス、ガツカリしてる場合じゃないよ。これから僕等が『過去』で見えてきたことを話すんだから」

良太郎がそう言いながら、空いている席に座る。

「そうか。おいオメエ等、耳の中ちゃんと掃除してから聞けよ？」

ダレていたモモタロスは急に真面目になり、三体を促した。

チームデンプライナー全員が席に着く。

それだけで食堂内の雰囲気は急に重くなったように感じた。

「僕とモモタロスが見てきた『過去』について、皆に話しておかなきゃ

いけないことがあるんだ」

良太郎が口を開き始めた。

モモタロスを除く面々は一人と一体が見てきた出来事が想像以上に重たいものだと知り、そのあとしばらくは気楽な会話をすることが出来なかった。

*

良太郎が仲間達に自身が見てきた『過去』のことを話している頃。

なのはとユーノは海鳴とは違う別の次元世界で、ジュエルシードが発見されたのでその回収にあたっていた。

発見されたジュエルシードのシリアルナンバーは8。

ジュエルシードの影響で害が及ばないように既に周囲には結界が展開されていた。

それは外観で見ると、ドーム状になっている。

なのはとユーノはバリアジャケットを纏っており、ジュエルシードの力で巨大化した生物を相手にしていた。

その生物は元は鳥類の部類なのだろうか、鳳凰のような姿をしていた。

しかし、現在は翡翠色の鎖で身体中を拘束されて自慢の双翼を広げても羽ばたく事ができなかった。

翡翠色の鎖を繰り出しているのは地上で鎖の色と同じ魔法陣を展開しているユーノだった。

「捕まえたーなのはー」

ユーノはなのはに促す。

「うんー」

木の枝にのっかっていたなのははレイジングハートを巨大鳥に向けて構える。

もがきながら翼をバタバタさせているため、突風がなのはに降りかかる。

それでも、なのはは構えを崩さない。

「シーリングモード。セットアップ」

レイジングハートの先端が形状を変形させていく。

巨大鳥に桜色の魔力で構成された無数の線が巨大鳥に突き刺さる。突き刺さるといっても、貫かれた巨大鳥は出血していない。

貫いてダメージを与える事が目的ではなく、拘束させることが目的だということがわかる。

「スタンバイレディ？」

レイジングハートが主に確認する。

なのはは決意を込めた瞳を持って、ユーノの鎖で拘束されている巨大鳥を見つめながら唇を動かす。

「リリカルマジカル！ジュエルシールドシリアル8！封印！」

「シーリングー！」

なのはが唱え、レイジングハートが発するとさらに桜色の魔力の線が巨大鳥に刺さる。

巨大鳥の全身が光り、その場に姿はなくなった。

封印する際に飛行していたので、足元には桜色の双翼『フライヤー・フィン』が展開されていた。

ゆつくりとだが地上へと降下していく。

地に足がつくと、桜色の双翼は消え、ゆつくりと降下していくジュエルシールドを待ち構えてから、一定の距離が縮まるとレイジングハートへと収納した。

ユーノがなのはの元へと走り寄ってきた。

「なのは。やったね！」

「うん！ユーノ君、サポートありがとう！」

「僕はあくまで動きを封じただけさ。大変なのは僕よりなのはだよ」

「ううん、ユーノ君が動きを封じてくれたからこんな短時間で封印できたんだよ。ユーノ君の力なしじゃもつと時間がかかってたって！」

「そうかな」

「そうだよ」

ユーノは自身を評価されることには慣れていないため、なのはのストレートな評価に対して照れながらも受け止めた。

アースラがゲートを開くのはそれから数分後のことだった。

*

次元空間を航行している時空管理局御用達の航行艦アースラ。

リンデイがいるモニター室とは違う別室で、クロノとエイミイがとある人物を調査していた。

モニターに映っているのは金色の髪が特徴の少女——フェイト・テストロッサだった。

エイミイはボードを何度も叩きながら、あらゆる角度で分析しているが芳しい結果は得られていなかった。

「ええと、この子。フェイトちゃんだっけ？」

エイミイが側でモニターを見ているクロノに確認するかのように訊ねる。

「フェイト・テストロッサ。かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

「ふええ。そうなの？」

『大魔導師』という称号にエイミイは驚きを隠さなかった。

自称で名乗る者は多くても、人々から通称でそのように称される者は極めて少ない事をエイミイは仕事柄知っている。

「随分前の話だよ。ミッドチルダの中央都市で魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして追放されてしまった大魔導師……」

時空管理局は『あの事故』には関わっていない。

だが、新聞記事などでは大きく記載されていたので、そういった情報でクロノは記憶していたのだ。

「その人の関係者？」

その大魔導師と同じ姓

ファミリーネーム

を名乗っている所からエイミイがそのように考えるのは当然といえは当然だろう。

「……さあね、本名とは限らないよ」

「良太郎君なら知ってるのかな？」

エイミイがフェイトと一番縁の深い人物の名を出す。

「多分知ってるだろうね。彼は大魔導師が起こした事故の事も知っているような素振りだったし……。恐らくだが彼女の出自についても

知っていると考えられるね」

クロノは良太郎がことフェイトに関する事は自分達よりも遥かに豊富な情報を有していると考えている。

「良太郎君がその事を私達に教えてくれるってことは……」

エイミーが一縷の希望に賭けてみようとするが、

「無理だろうね。彼が僕達に教えることはまずないよ」

クロノはその希望を完全に砕いた。

良太郎と会話した時、彼の一挙手一投足に常に目を光らせていた。隙が『ある』ように見えて『ない』ともいえる物腰。

穏やかだが、どこかナイフのように鋭い口調。

民間人でありながら、下手な管理局員よりも遥かに切れる頭脳。

そして、自らが決めた決意を揺るがせることはない強い瞳。

「それに、協力関係といっても彼はまだ時空管理局に対して好印象ではない。下手に強要すれば即座に切れてしまうほど危うい関係なんだ」

「だから艦長は五分五分の関係に？」

「それもあるけど、単純に怖いんだと思う」

「怖い？」

「ロストログア相当の物を使って、時空管理局では対処できないことを平然とやってのけている彼等の存在がね」

クロノはデンライナーを見たわけではないが、現在・過去・未来を行き来できるようなものは下手をすればロストログアクラスの厄介な代物だと見ている。

モニターには『Not found』と表示された。

「やっぱダメ！見つからない。フェイトちゃんにはよっぽど高性能なジャマー結界を使っているみたい」

モニターではフェイトではなく、一匹の獣が映し出された。

使い魔のアルフである。

「使い魔がいる。恐らくコイツがサポート役だろう」

「おかげでこちらが発見したジュエルシードを一個奪われちゃってる」

エイミイが真剣な表情でクロノに現状を告げる。

「しつかり捜して補足してくれ。頼りにしてるんだから。あとイメージンを見つけたら良太郎達に連絡してくれ」

「はいはい」

エイミイは滅多に聞きなれない言葉を適当に受け止めながらも、内心は嬉しかったりする。

*

海鳴ともなのは達がいた次元世界とも違う次元世界に彼女達はいた。

フェイト・テストロッサとアルフだ。

風が強いため、彼女の自慢の金髪がなびいていた。

「フェイト。ダメだ。空振りみたいだ」

アルフは、フェイトに余計な労力と神経を消費させたことを詫げる口調で言う。

「……そう」

「やっぱり、時空管理局に見つからないように隠れて探すのはなかなか難しいよ」

アルフは本音を漏らす。

「うん。でも、もうすこし頑張ろう」

フェイトは不器用ながらもアルフを元氣付けた。

（良太郎が管理局にいるなら、わたしに関する情報は既に伝わっているはずなのに。アルフがジャマー結界をかけてくれているとはいえ、こうもわたし達に対する搜索に時間がかかっているとどこからすると……）

良太郎は時空管理局に自分達のことを一言も言っていないことになる。

（良太郎、自分が不利になるはずなのに……。わたし達のことを……）

フェイトの胸中に温かいものが灯った。

左腕に巻きつけていた包帯を解く。

解けた包帯は風に乗って空へと飛んでいった。

*

それから十日が経過した。

*

その間にアースラスタッフの全力の捜索にもかかわらず発見したのは一個であり、なのは達が回収したのは計二つとなる。

そして、フェイトが回収したのは一個だ。

ここで現在のジュエルシードの回収状況を整理しておこう。

なのは達は別世界から持ってきたモモタロス達や時空管理局の力を借りて、回収したジュエルシードは合計九個。

対してフェイト側は良太郎からもらった一個と地道に回収したり、なのはから奪取した一個などを含めて計六個となっている。

ユーノが発見したジュエルシードは全部で二十一個。

未回収は後六個となっている。

その六個の回収が難航を極めている現状だった。

ちなみにイマジンはその間に一体も出現していない。

「残り六つ。見当たらないわねえ」

リンディは八方塞な状態だった。

「捜索範囲を地上以外に広げています。海が近いのでもしかしたらその中かも……。例の黒い服の子と合わせて、エイミイが捜索してくれています」

「そう」

リンディの表情は深刻なままだった。

イマジン達の適応能力は高いのか、それとも彼等が特殊なのかどうかかわらないが十日も経つとモモタロス達はアースラの内部を殆ど理解し、我が物顔で活用していた。

現在四体はトレーニングルームがあつたので、そこで身体を鍛えていた。

良太郎となのはとユーノは食堂で寛いでいた。

「今日も空振りだったね」

なのはがガツカリした表情で口を開く。

「もしかしたら結構長くなるかもしれないね」

対面に座っているユーノは今後の事を予想していた。

「管理局の搜索能力を駆使しても、難航しているんじゃないか？」

良太郎はコーヒーを飲む。

「二人とも、さびしくない？その……親御さんと離れてるわけだし、さ」

良太郎が年長者ぶって二人の心境を訊ねる。

「ぼくはその、両親っていないんです。家族というならスクライアの部族ですから……。だからその、あまり寂しいとかって考えた事ないですね」

ユーノが孤児だということを知って、良太郎となのはも驚く。

「なのはちゃんは？」

「え、わたしもその、家族はいますけど昔は一人でいることの方が多かったんです。だから一人でいることを寂しいってあまり感じないんですよ」

「二人とも、強いね」

良太郎は敬意を込めて二人の頭を撫でた。

「え、あの……」

「りよ、良太郎さん？」

いきなりの仕種に二人とも戸惑っていた。

「ところで、良太郎さんはご家族は？」

「あ、わたしも知りたいです」

ユーノとなのはは別世界の人間である良太郎の家族構成には前々から興味があったようだ。

その証拠に目が輝いている。

「僕も両親はいないんだ。物心つく前には祖母に育てられてたしね。今は姉と二人で暮らしてるよ」

「モモタロスさん達は一緒じゃないんですか？」

ユーノがモモタロス達はどこに住んでいるのか訊ねた。

「モモタロス達は普段はデンライナーで住んでるんだよ。僕の世界じゃイマジンはおおっぴらに歩けるほど寛容じゃないからね」

「へえええ。そうだったんですか」

なのははどうやら、一緒に住んでいると思っていたらしい。

そんなほのぼのとした雰囲気食堂を覆い始めていた頃。

それを振り払うかのように、緊急招集のアナウンスが艦内に流れた。

良太郎となのはがモニター室に入ると、そこには大画面で台風とも嵐ともいえる天災が映っていた。

大雨が降り、雷が鳴り響き、海がうねりを上げている。

それだけでも脅威を物語るには十分だった。

「ここってどこなんですか？」

「海鳴市の海上よ」

良太郎の質問にリンデイが答えてくれた。

その表情は険しいものだった。

隣にいるクロノも同じような表情をしていた。

だが、何故こんなものを映しているのだろうかと良太郎は感じた。

時空管理局は天災まで取り扱っているのだろうかと思っただが、ふと

ひとつの考えがよぎった。

それはこの天災が文字通りの天災、つまり天がもたらす自然現象でなく、魔導師がもたらせたものだったとしたらモニターに映すのも領けることだった。

一人の少女がその中を飛び回っていた。

金色の髪に黒いバリアジャケットに鎌のような黒い杖を持った少女。

「フエイトちゃん！」

良太郎はモニターに映る少女の名を誰よりも速く叫んだ。

第三十三話 「共同作業」

海鳴海上に一人の少女と一匹の獣が空中にいた。

フェイト・テストロツサとアルフである。

黄金の魔法陣を広範囲に展開し、目を閉じながら唇を動かしていた。

「アルカス・クルタス・エイギアス……」

フェイトは更に唇を動かす。

「きらめきたる天神よ。今導きのもと、降りきたれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル……」

展開された黄金の魔法陣から雷が海に向かって降りそそいでいく。振る気配のなかった雨が急に降ってきた。

使い魔は主の行動に目を光らせていた。

ジュエルシードは海の中にあるものと考えたフェイトは海に電気
の魔力流を叩き込んで、強制発動させて位置を特定させる事を選んだ。

そして、特定されたジュエルシードを封印し回収すればいいという
プランだ。

一人で行うにはリスクが大きすぎるといふものだが、成功すれば未
回収であるジュエルシードを独占できるといふ魅力もあった。

「撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス……」

フェイトの頭上に金色の巨大な球が構成され、ぎよろりと目のよう
なものが開く。

そして、それは自ら雷を発していた。

その黄金の球体はひとつではなく六つであり、それぞれが輪を描く
ようにして、雷で繋がっていた。

黄金の魔法陣が展開し、フェイトは宙を舞いながら、海鳴の海に向
かって放つ。

六つの金色の球もフェイトにつられるようにして移動する。

強風が発生し、海がうねりを上げている。

海中の中に眠っていると思われるジュエルシードを強制発動させ

るためにフェイトは人工的に天災を引き起こしたのだ。

これで、回収できれば御の字だが回収できなければ完全に無駄骨になる。

海中から走り出した光の柱をフェイトは息を乱しながらも、睨みつける。

バルディッシュをサイズフォームにして構える。

(必ず回収する！絶対に！)

フェイトを支配するのはそれだけだった。

*

次元航行艦アースラでは海鳴の海上で起こった出来事はモニター室のモニターで映し出されていた。

「良太郎！」

モモタロス達、四体のイマジンやコハナも遅れてモニター室に来室した。

「これ、何？」

ウラタロスが良太郎に訊ねる。

「あ、おいアレ、フェイトやろ？」

野上良太郎がウラタロスに答える前にキンタロスがモニターでフェイトを発見した。

「あー、ホントだ！見て見て！ワンちゃんもいるよ！」

リュウタロスもモニターを見ながらアルフも見つけたようだ。

「良太郎、あの子は何やってるの？」

コハナは何故、フェイトがわざわざ人工的に天災を引き起こしたのかという理由がわからないようだ。

「多分だけどね。魔力流を叩き込んで海中にあるジュエルシードを強制発動させて回収しようとしてるんだよ」

良太郎がコハナに、フェイトがこれから行おうとしている事を説明した。

「何とも呆れた無茶をする子だわ！」

リンディ達、プロからすればフェイトの行動は自殺行為でしかない。

「無謀ですね。間違いなく自滅します。あれは個人が出せる魔力の限界を超えている！」

クロノもフェイトの行動には呆れて同時に酷評も混ぜる。危険だとわかっていて、それに手を出すのは『勇敢』でも何でもない『蛮勇』もしくは『無謀』でしかないのだ。

二人のプロからのあまりに酷い評価に民間人集団チームデンライナー1+2の心は激しく揺れていた。

先にモニタールームに入った良太郎と高町なのはは特にだ。

「あ、あの！わたし急いで現場に！」

なのはは出勤しようとする。だが、

「その必要はないよ。放っておけば彼女は自滅する」

クロノの一言でなのはは金縛りにでもあつたかのように身体全身が停まった。

モニターに映っているフェイトは自身が起こした天災の中を駆け回りながら、ジュエルシードの回収に取り組んでいた。

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい」

「なるほどね」

ウラタロスはクロノのプランに一応の理解を示していた。

良太郎もウラタロス同様、理解していた。

クロノの言うように、相手が弱まったところを叩けばこちら側のリスクはほぼゼロに近い状態で物事を収める事が出来る。

ただし、納得はしていなかった。

「でも……！」

なのはが異議を唱えようとするが、聞く耳持たない状態で事態は進行していた。

モニターに映るフェイトは竜巻を避けながらジュエルシードが発している光の柱へと向かっていた。

良太郎はモモ、ウラ、キン、リュウ、コハナに目線を送る。

誰もが頷き、モニター室へと出て行った。

良太郎がなのはの横に立って、右肩に手を置く。

「なのはちゃん、落ち着いて」

「良太郎さん、でも……。!!」

良太郎の横顔を見た直後、なのはは黙った。

先に出たイマジン達と何か関係があるのだとなのはは思った。

良太郎はしやがみ、なのはに小声で耳打ちする。

「もうすこしだけ我慢して。あとユーノに念話でモモタロス達と合流するよう言ってくれる?」

「わ、わかりました」

なのはは小声で了承した。

モニターに映っているフェイトは竜巻に吹き飛ばされ、助けようとしたアルフは雷に身体を奪われていた。

「私達は常に最善の選択をしないとイケないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

リンディの言葉には重みがあった。それは彼女自身が体験した事なのだろう。

「そうですね」

良太郎はリンディの意見に相槌を打った。

それが『適当な受け流し』ということは、なのはにはすぐに理解できた。

その場に似つかわしくないミュージックが流れた。

発信源は良太郎のズボンのポケットからだ。

ケータロスを取り出し、展開する。

「こんな時に非常識な!」

クロノがミュージックの元凶を睨みつける。

「あ、ごめんね」

そう言いながら、良太郎はなのはを連れてモニタールームを出た。

その後次元空間の空間が歪み出し、正体不明の物体がアースラの側にいることが伝わったのはその直後の事だった。

『おう、俺だ。準備できてるぜ。オッサンも了解してる』

発信者はモモタロスだった。

「わかった、ありがとう。すぐ行くよ」

良太郎はケータロスを切った。

「なのはちゃん。今からフェイトちゃんを助けに行こう！」

良太郎ははつきりと告げた。

「え？……。は、はい！」

なのはは良太郎の言葉に最初は理解できなかったが、理解すると力強く返事した。

二人で仲間達が待っていると思われる場所に向かった。

そこには四体のイマジンとコハナとユーノがいた。

そして、全員の前には一つのドアがある。

「行くよーみんな！」

その場にいる全員が頷いた。

良太郎はドアのスイツチを押し開いた。

そこには次元空間でなく、一人の女性と杖を携えているスーツをびしっと来た初老の男性が待ち構えていた。

「おーしー！俺一番！」

モモタロスが飛び移った。

「じゃ、僕二番！」

次にウラタロス。

「ハナ、俺に捕まっとき！」

「え、うん」

キンタロスがコハナを抱きかかえて飛び移り、

「なのはちゃん、フェレット君ー行こー！」

リュウタロスはなのはを抱きかかえ、ユーノは人間モードからフェレットモードになってリュウタロスの頭に乗っかる。

準備が整ったところで飛び移る。

「よし、最後は僕、と」

良太郎が飛び移ろうとした時だ。

「待つんだ!!」

クロノが良太郎を止めた。

「貴方達は一体、何をしようとしているんだ!?!」
半ば興奮気味にクロノは良太郎に訊ねる。

「フェイトちゃんを助けに行くんだよ」

良太郎は荒げる事もなく当然のように告げる。

「貴方はわかつているのか？彼女は我々の敵なのかもしれないんだぞ！」

「クロノ。言葉を間違えてるよ。我々じゃなくて君達の、でしょ？それに……」

良太郎はクロノに顔を向ける。

「フェイトちゃんは敵じゃない。仲間だ！」

そう告げると良太郎も飛び移った。

アースラのドアは閉まり、クロノはただその場に立ち尽くしていた。

その直後、アースラの側にいた未確認物体が消失したという情報が入ったのはすぐの事だった。

*

アースラの側に突如現れた未確認物体ことデンライナーは次元空間から姿を消し、海鳴海上の更に上の位置にいた。

といっても、フェイト達が展開した結界の中であることには変わりはない。

「しかし、デンライナーごと転移させるとはまだ若いのにやりますねえ」

デンライナーのオーナーがユーノを賞賛した。

「いえ、そんな……」

「もしかして、皆さんが途中で退室したのは……」

「そういうことだよ。なのはちゃん」

ウラタロスがなのはの考えが正解であると認めた。

「あの黒いのと喧嘩してもよ。フェイトは助けられねえしな」

「だから、良太郎は俺等に目で指示を送ったんや」

「アイツ、絶対悔しがってるよ！」

モモタロス、キンタロス、リユウタロスがそれぞれの意見を述べる。

「良太郎、フェイトちゃんを助けるってどうするの？管理局とは対等関係だけど真っ向から楯突く形になっちゃった以上、失敗したら何言

われるかわかんないわよ?」

コハナの言うように、対等関係とはいえ時空管理局の方針に完全に異を唱える事をしたのだ。フェイトを助けるだけでなく、ジュエルシールドも回収しないと顔が立たないだろう。

「とにかく、フェイトちゃんとアルフさんを救助しよう。ジュエルシールドの回収はそれからだよ」

良太郎の一言にデンライナーにいる全員が頷く。

「では、このまま下りますので、皆さん。しっかりと何かに掴んでおいてくださいねえ」

オーナーがそう言うと同時に、デンライナーが下りだした。

乗員は無重力状態になりつつあった。

「「「「「うわああああああああああああああ「「「「「」」」」」」」

悲鳴を上げさせながらもデンライナーは雲を突き抜けて目的地へと向かった。

その場にいる者の視界と体温を奪う雨と、目的へ行かせまいと障害物のように遮る荒波、そして無慈悲に襲い掛かる雷のなかを一人の魔導師と一匹の使い魔がいた。

フェイトはジュエルシールド六個をいまだに一個も回収できずにいた。

ただでさえ、無茶とも無謀といえる方法を用いてジュエルシールド六個を強制発動させてから、それを封印しようというのだ。

いわば体力も魔力もレッドゾーンに近い段階での回収ともいえる。

「はあ…はあはあ…はあ」

バルディッシュの黄金の鎌刃も徐々に消えていった。

フェイトの隙を突くかのように竜巻が襲い掛かる。

体重が軽い上に、バテ気味なフェイトは紙のようにあっさりその後方へ飛ばされるが、何とか体制を整える事は出来た。

「フェイトー!」

アルフはフェイトを助けるために向かうが、雷が鎖のようにして彼女に纏わりつき、移動を妨げた。

「ええい!!邪魔だねえ!」

言葉を荒げるが、相手は物言わぬ脅威なので言葉による攻撃は効果はない。

「良太郎が乗ってる電車があればこんな脅威なんて!!」

アルフはデンライナーの存在を思い出す。

あの非常識な乗り物があるだけでも今の状況を変えることができるとはたしかだ。

(アルフの言うとおりかも。あの電車があれば回収もこんなに手間取らなくてすむのかな)

フェイトはアルフの言葉に釣られて、そんなことを考えてしまう。だが、すぐに現実に戻る。

ここにはデンライナーはなく、いるのは自分とアルフだけだ。

彼女は今現在ないものを当てにするほど楽観的な思考は持ち合わせていない。

(回収……するんだ。絶……対に!)

ジュエルシードが放つ光の柱を睨みながら強く思う。

だが、身体は彼女の身体に反して動こうとはしない。

眼前の荒波が魔物のようにも見えた。

「うう……まだま……だ……だ……!」

意識まで朦朧とし始めたとき、この場には似つかわしくない音楽が彼女の耳の中に入った。

「フェイトーアレ!!」

アルフが顔を向けている方向に、フェイトも顔を向ける。

空中に線路が敷設され、電車がこちらに向かって走ってきた。

「良太郎が乗ってきた電車だ……」

デンライナーは雨も強風も雷もものともせず、フェイトの元まで走って停車し、ドアが開く。

「フェイトちゃん!こっちに!早く!」

そこには自分に手を差し伸べている良太郎がいた。

フェイトとアルフは警戒しながらも良太郎が差し伸べた手を掴む事にした。

良太郎はフェイトとアルフをデンライナーの中に収容すると、オー

ナーにドアを閉めるように頼む。

ドアが閉まると、良太郎は一人と一匹を食堂車へと案内した。

食堂車に入るとフェイトとアルフにはタオルが渡され、その後コーヒー（良太郎が淹れたもの）が渡された。

といつても、フェイトがアルフの分まで受け取っているかたちだが。

「タオルで身体を拭いて、良太郎君が淹れたコーヒーを飲んでください」

「あ、あの……。どうも」

「あー、まあ……。ありがとう」

オーナーがフェイトとアルフに席に着くように促す。

フェイトとアルフは礼を言ってから席に着く。

「どうして私が淹れたものじゃダメなんですかあ!？」

ナオミが自分の仕事を奪った良太郎に抗議する。

「……アレはダメでしょ」

良太郎はナオミが淹れたコーヒーを思い出しながら、できるだけ柔らかい口調で指摘した。

その意見にコハナはうんうんと首を縦に振る。

ナオミが淹れたコーヒーはイマジン達やオーナーには受けがよいが、それ以外の者達には物凄く悪い。

大抵の人間は一口含んだだけで、吐き出してしばらくは得体の知れない不快感が身体を支配する。

そんな半ば下剤に近いものをフェイトやアルフに飲ませるわけにはいかないのだ。

ナオミには悪いが、この緊急時に病人もどきを出すわけにはいかないのだ。

なお、余談だが先にデンライナーに乗っているのはとユーノも良太郎が淹れたコーヒーを飲んでいる。

フェイトとなのは目が合う。

互いにコーヒーを飲んでいる状態なので、何も言えない。

アルフは獣型のままでなのはとユーノを睨みつける。

「フェイトの邪魔はさせない！良太郎！いくらアンタでもね！」

「このバカ野郎が！おい獣女！良太郎はオメエ等助けるためにここまで来たんだぜ！」

モモタロスが良太郎の真意を口にし、アルフを止めた。

「え？」

フェイトとアルフは目を丸くする。

「しかもだよ。わざわざ管理局の命令に背いてまで、ここに来たんだよ。疑うなんて心外だねえ」

ウラタロスが皮肉を込めて内情を語る。

「良太郎もなのはもユノ助もお前らが心配でここに来たんや。それでも疑うんか？」

キンタロスがフェイトとアルフに確認する。

「……………」

「……………」

フェイトとアルフも黙ってしまふ。

「みんな、見てよ！外が凄い事になってるよ！」

窓から外を見ていたリユウタロスが全員に外を見るように促す。

良太郎、コハナ、イマジン達で窓から外を眺める。

竜巻がいくつも発生し、どういつていいかわからない状態になっていた。

雷が鳴り、強風が吹き乱れて、雨が矢もしくは弾丸のように休みなく振り続けている。

「事態は刻一刻と悪くなるだけだね。急いで回収するしかない、かな」

良太郎の一言に魔導師サイドの面々はピクリと動いた。

なのはとユーノが席を立ち、フェイトとアルフの席の対面に座る。

ちなみにアルフは椅子に『座る』というより『乗っかっている』という表現のほうが正しい。

「何だい？アンタ達？」

アルフがまだ警戒を解かずに半ばケンカ腰に二人を睨む。

「待って。僕達は戦うつもりはないんだ」

「フェイトちゃん。フェイトちゃんは自分のことを一人ぼっちだと

思ってるのかもしれないけど、違うと思うよ」

「え？」

なのはの一言にフェイトは聞き返す。

「だって……だって、フェイトちゃんにはアルフさんや良太郎さんがいるんだもん」

「アンタ……」

アルフの呟きが耳に入っているのかどうかはさておき、なのはは続ける。

「一人で寂しさを抱えきれないなら、アルフさんや良太郎さん、ハナさんやイマジンの皆さんやユーノ君。それに……、わたしだっているんだから、分け合う事は出来るよ」

良太郎もフェイトの前に立ち、しゃがんでからフェイトの頭に手を置いてから言う。

「前の戦いだって、協力し合ってたじゃない。一度出来たんだからもう一回できるよ」

フェイトは食堂車にいる面々を見る。

「わかった。やろう」

短い言葉だったが、食堂車にいる全員は大声で喜んだ。

外は更に激しさを増していた。

ジュエルシードを封印する事が出来るのは魔導師だけなので、厳密に言えば良太郎達は直接手を貸す事は出来ない。

デンライナーで事の成り行きを見守る事しか出来ないのだ。

それでも良太郎はイマジンとの戦闘に備えてデンオウベルトを腰に巻いている。

なのはもユーノもバリアジャケットを着用している。

レイジングハートがバルディッシュに桜色の魔力光を渡している。

恐らく急場しのぎの魔力回復処置だろう。

「モモタロス」

「イマジンの臭いはねえよ」

良太郎の意図が理解できるモモタロスは即答した。

「仮に出てきたとしても、どこから来るのかな？」

ウラタロスはイメージンの出現場所を予測する。

「前みたいに海か？」

「空からじゃない？」

キンタロスとリユウタロスはそれぞれ勝手に予想するが、どちらもありえることなので何ともいえないというのが聞いている良太郎の見解だったりする。

「一番いいのは出てこない事なんだけどね」

「そうね」

良太郎は本音を呟き、コハナは頷きながら見守る事にした。

「二人できっちり半分個」

共同作業ならば折半が妥当だろうとうなのはの提案だ。

フェイトにしてみれば全部手に入れることが理想だが、現実には自分の力では六個どころか一個も回収できない。

ならば半分の三個でもゼロよりはマシだ。

フェイトは小さくこくりと縦に振る。

既にユーノとアルフがジュエルシードが核となつている六箇所の竜巻を翡翠色の鎖六本と橙色の鎖で動きを封じていた。

それでも竜巻は蛇か鰻のようにウネウネと抵抗しているかのように動いている。

「くっ！」

「うろうろー！」

六ヶ所同時に巻きつけていることは至難のことなのか一人と一匹は苦悶の声を漏らす。

「ユーノ君とアルフさんが止めてくれている！今のうちに！」

なのはが決意を持った瞳で言う。

「二人でせーので一気に封印！」

なのはは先導するかのように次の行動に移りだす。

「シューティングモード」

レイジングハートは飛行しながらも自らを主が次に取る行動を予測し、形態を変化させる。

なのはは所定の位置に到達すると、桜色の魔法陣を展開して足を着

ける。

彼女はこちらを見ている。

(あの子の目の輝き、良太郎と一緒にだ)

自分を信じてくれている目だ。

ならば、良太郎の言うように協力し合える。

「シーリングフォーム。セットアップ」

バルディッシュがサイズフォームから形態を変化した。

まるで、フェイトに次の行動を取る事を促すかのように。

「バルディッシュ……うん、やろう」

なのはを見ると左目を閉じて、ウインクしてきた。

なのはすぐ真面目な表情となって、眼前の脅威を睨む。

「デイバインバスターフルパワー。行けるね？」

レイジングハートを天に掲げて、なのはは確認する。

「オーライ。マイマスター」

天に掲げられたレイジングハートは即答する。

そして同時に先端の後ろから桜色の翼が広がる。

振り下ろすと、展開されていた魔法陣が更に広がった。

フェイトもまた黄金の魔法陣を足元に展開し、眼前の脅威を睨んでいる。

バルディッシュの先端から後ろに黄金の翼が広がる。

魔法陣には雷が帯びていた。

なのははレイジングハートをまるで大砲でも放つかのように腰に入れて構えている。

先端には桜色の輪が展開されている。

フェイトもバルディッシュを天に掲げて魔力を収束させている。

同時に彼女の周りには無数の雷が守るかのように帯びている。

「せーの!!」

なのはの言葉を合図に、先に行動を取ったのはフェイトだった。

「サンダアアアアアアアア」

更に上に飛行してからバルディッシュを薙ぐようにして下ろすと、黄金の柱のような魔力光が海に叩き込まれる。

六つの竜巻に直撃し、猛り狂うように動いてたものが停止し始める。

「ディバイイイイイイイイン」

続いてなのはが、レイジングハートの先端に特大の魔力光を収束させていく。

先に行動していたフェイトは、上昇から下降へと急速に切り替える。

「レイジイイイイイイ!!」

シーリングフォームのバルディツシユを展開していた黄金の魔法陣に突き刺した。

魔法陣から黄金の魔力光が噴き出す。

極め付けともいわんばかりの一撃が竜巻を襲う。

フェイトより遅く行動に移したなのはは眼前の脅威に向けてレイジングハートを構える。

「バスタアアアアアアア!!」

叫ぶと同時にレイジングハートから特大の桜色の魔力光がレーザー光線のように真っ直ぐに動きを封じられている竜巻に向かっていった。

竜巻の消滅と同時に、特大の魔力やら少量の魔力がぶつかり合って混じり合いながらも消滅した。

ただし、それなりの代償もしくは傷跡は残ってしまうが。

そう、たとえば……

「み、みんな大丈夫?」

「とんでもねえな。魔導師ってのはよ」

「あの二人の将来が少々恐ろしくなってきたよ」

「下手すりゃ、俺等より強いぞ。あの二人」

「そんなこといいから早くどいてよ! 僕、重くて潰れそうだよ!」

デンライナーの中は先程の魔力の余波で傾き、ゴツタゴタになっていた。

蒼い柱が海底から立ち、六個のジュエルシードが浮上した。

なのはが見ると六個全てになのはが映り、フェイトが見ると六個全

てフェイトが映っているのだろう。

それが自身の中の自分のようになるのはは思えた。

(同じ気持ちを分け合えるなら、さつきも言ったように悲しい気持ちも寂しい気持ちも分け合う事が出来るんだ)

なのは自身がフェイトに告げたことを思い出していた。

眼前のフェイトを見ると、そんなことがどうでもよくなってきた。

ここに来たのは困っていたから助けに来た、という単純な理由だった。

でも、それだけではない。

きつと、これを告げることが本当の理由なのかもしれない。

(ああ、そうなんだ……。やっと……。わかった。わたし、この子と分け合いたいんだ)

なのはは胸に手を当て、フェイトに手を当てて告げた。

「友達になりたいんだ」

その場の空気が変わった。

冷たくはない。温かくなりつつある空気だった。

その場にいる誰もが何か良い事が起こりそうだと妙な予想をしてしまいたくなる雰囲気だ。

アルフもユーノもデンライナーの中にいる面々も何かが起こると思っていた。

そして、それは起こった。

「ジュエルシードをよこせえ！」

空から鳥型のイマジンを六個のジュエルシードを狙って空から降りてきた。

フェイトとなのはを吹き飛ばして、ジュエルシードを強奪しようとする。

吹き飛ばされたフェイトをアルフが獣型から人型となって、海に落ちる前に救出することに成功した。

その表情には怒りが満ち溢れていた。

そのままジュエルシードまで移動する。

イマジンを殴り飛ばして、ジュエルシードを手に取りろうとするがな

のはとも電王とも違う武器がアルフを遮った。

眼前にいたのはクロノだった。

ただでさえ、以前も邪魔にされフェイトの努力を無にするような輩ばかりでアルフは完全に苛立っていた。

「邪魔をするなああああ!!」

叫ぶと同時にアルフはクロノを腕力のみでぶっ飛ばした。

しかし、浮遊しているのは三個しかなかった。

ぶっ飛ばしたクロノを見ると、彼の左手には三個のジュエルシードが握られていた。

アルフは怒りと憎しみを込めて、魔力を拳に収束させて海へと叩き込んだ。

小さな波が上がり、目くらましになるには十分なものだった。

そこにはフェイトもアルフもいなかった。

魔力の余波から態勢を整えたデンライナーではあるが、完全に時既に遅しとなっていた。

「良太郎……」

モモタロスが良太郎を見る。

「……………」

良太郎はただ黙って空を睨んでいた。

降り続ける雨が良太郎にはフェイトとアルフとプレシア・テスタロツサの涙にも思えた。

第三十四話 「アルフがもたらす仲直り 前編」

雨雲とも雷雲ともいえる雲が渦を巻いている次元空間を航行しているアースラ。

会議室ではリンディ・ハラオウンがクロノ・ハラオウンを側において、チームデンライナー+2に対して計画を破綻させた責任をどう取らせるかを検討していた。

主従関係ならば命令違反になり嚴重な処分を下す事が出来るのだが、五分五分の関係である以上、リンディとしてはチームデンライナー+2に対して強く出れない。

だが、相手に六個全てを回収されなかつただけマシと考えれば彼等の功績は評価できるものである。

(六個全てを回収するという計画は潰されたけど得られるものはあつたし、それに対等の関係を結んだ以上、こうなることはわかっていたことだから……)

リンディはなるべく厳しい表情をしている。

それだけで、高町なのはには効果は抜群だった。

その証拠に顔は気丈だが、手足は震えていた。

ユーノ・スクライアと野上良太郎とコハナは覚悟を決めてした事なのか、特に微動だにしていなかった。

イマジン四体のうち、モモタロスとリュウタロスは意に反する処罰なら殴りかかろうと腕を動かしていた。

そんな二体をどんな手を用いても止めようとしているウラタロスとキンタロスは止めに入ろうと構えていた。

(こちらにも不備はあつたし……、今回は不問が妥当かしらね)

「さてと、今回の貴方達の独断専行ですが……」

その場の雰囲気更に重くなつたような気がしたのは自分の勘違いではないだろう。

「我々の側にも貴方達に対しての不備があつたこともあり、痛みわけということ『不問』とします」

なのは、ユーノ、良太郎は思った以上に軽い裁決に顔を見合わせる。

イマジン達はそれぞれ、手を軽くパンと叩きあつて声には出さずとも喜んでいた。

その場の雰囲気は急に軽くなったように感じた。自身も何か身体にかかった錘のようなものが取れたのだらうと感じたので間違いないだろう。

「良太郎さん」

「はい」

良太郎は何故自分が呼ばれたのかを理解している表情でこちらを見ていた。

「今後このようなことがないように話し合いたいのですが、よろしいでしょうか？」

「わかりました」

良太郎は快く了承してくれた。

「さて問題はこれからね。クロノ、事件の大元について何か心当たりは？」

壁にもたれて今までのことを腕組みをして静観していたクロノが目を開いた。

「はい。エイミィ、モニターに」

壁から離れて中央にあるテーブルまで歩み寄る。

『はいはい』

別室にいると思われるエイミィ・リミエツタの声が聞こえた。

同時にテーブルの中央にある半円の球体から映像が映し出された。

その容疑者と思しき人物が表示されるとリンディは目を丸くした。

対して、良太郎達は特に驚いている素振りがなかった。

(知っていた、というわけね)

良太郎達の反応からそう判断した。

クロノは映像に映った人物について語り始めた。

「僕等と同じミッドチルダ出身の魔導師。プレシア・テストアロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発で、偉大な魔導師でありながら違法研究の事故によって放逐された人物です」

良太郎の眉がピクリと動いたのをリンディは見逃さなかった。

良太郎はクロノが語るプレシアの説明を自身が得ている情報と比較していた。

(違法研究の事故っていうのは、アリシアちゃんが死ぬ結果になった時の事だ)

脳裏にアリシア・テスタロッツサの最期の笑顔がよぎった。

それだけで、拳を強く握り締めてしまう。

(それにあれはプレシアさんの責任じゃないのに……。プレシアさんのせいになっている)

プレシア・テスタロッツサが勤めていた会社が責任を全て彼女に押し付けたのは明らかだった。

愛娘を失った彼女に更なる追い討ちをかけるかたちになったはずだと良太郎には想像できた。

「そして、あの少女——フェイトは恐らく……」

クロノの語る言葉に自分の隣にいるのははおおよその見当をつけているようだった。

(フェイトちゃんの未来のためにプレシアさんは悪い母親を演じる事にした。だったらイマジンは何のために?)

良太郎はプレシアが何故、イマジンと契約を交わしているのかが気になりだした。

フェイトを蔑ろにして、『アリシア蘇生』のためにジュエルシードを集めさせるために契約を交わしたのならば納得できる。

だが、事実は『フェイトの未来』を守るために彼女は『悪い母親』を演じているだけなのだ。

そうなるとわざわざイマジンと契約を交わす必要はないように思える。

意識をその場に戻すと、リンデイがエイミィにプレシアに関する情報を探すように命令していた。

話が進展するまでもう少し時間がかかると判断したので、思案を再開する。

(プレシアさんは最終的にはフェイトちゃんの心にいる自分を消す事が目的だと言っていた。フェイトちゃんの心の中からプレシアさん

を早く消す方法といえは……)

フェイトの出生とアリシアのことを打ち明けることぐらいしかない。

(ダメだ。プレシアさんがイマジンと契約する目的が見えてこない……)

プレシアがしようとしている事はわかっている。だが、そこに何故イマジンが絡んでくるのかわからない。

イマジンの契約執行方法を振り返る。

結果はどうであれ、過程の段階では確実に契約者の意図とは食い違っているため、契約者がイマジンに感謝した事はない。むしろ後悔の念が強いだろう。

その方法が手っ取り早い『武力行使』なのだから仕方ないといえは仕方ない。

今回のジュエルシード探しにしてもそうだ。

イマジンと契約してジュエルシードを欲するならば、契約者は「ジュエルシードを捜して見つけてほしい」と思うだろう。

だが、イマジンは契約完了を先走るあまりに「ジュエルシードを所持している者から強奪して手に入れる」という行動に出る。

どこにあるかもわからない物を捜すよりずっと効率がいいからだ。

そして、イマジンはジュエルシード所持者が契約者の身内だったとしても、例外なく行うだろう。

契約者にジュエルシードを渡す事が出来ればいいのだから。

大抵の契約者はこの事実を知ったときに初めてイマジンと契約を交わしたこと後悔する事になる。

だが、プレシアにはその素振りがまるでない。

(まさか……。イマジンの契約執行の手段を予め予測して……)

良太郎の中に『まさか』の考えが浮かび上がる。

プレシアは聡明な人物だ。

もしかしたらイマジンと契約する際にこう予測していたのかもしれない。

自分が望むような方法で自分の契約を叶えてくれる事はないだろ

う。

と。

彼女にしてみればフェイトの心が自分から離れるには最高の存在だと思っただけだ。

娘の目的の邪魔をする謎の怪人と契約をしたのが自分だと告げた場合どうなるだろう。

これは出生やアリシアのことを話して与えるほどのダメージはないが、フェイトの心に相当のダメージを与える事が出来るのは確かだ。

（僕達は完全にプレシアさんの本当の思惑に踊らされているってことか……）

時空管理局の面々はプレシアの『本当の思惑』には気づいていない。今のところ、時空管理局はプレシアを『ジュエルシードを悪用しようとする犯罪者』と見ているだろう。

プレシアがイマジンと契約を交わした本当の理由が『より確実にフェイトの心を引き離すため』と推測したところで良太郎は考える事を中断する事にした。

エイミーが部屋に入ってきた。

手ぶらで来ているという事は資料がなかったのか、頭の中にありつただけの情報を詰め込んだかのどちらかだろう。

エイミーの唇が動き始めた。

「プレシア・テストロッサ。ミッドの歴史で数年前は中央技術開発局第三局長でしたが、当時彼女個人が開発していた次元航行エネルギー駆動炉が急度の試用の際に違法な材料を持って実験を行い、失敗」（彼女個人が開発？完全に企業側の証言だね）

その時間帯に行った事がある良太郎にはエイミーが入手した情報源がどこなのかはすぐにわかった。

これからエイミーが語るプレシアの情報には『プレシア個人の言い分』となるものはないだろう。

「結果的に中規模次元震を起こした事がもとで、中央を追われて地方へと異動へとなりました。この一件に関しては随分と揉めたみたい

です。失敗は結果にすぎず、実験材料に違法性はなかったと。辺境に異動後も数年間は技術開発に携わっていましたが、その後、行方不明になって……、それつきりですね」

「家族と行方不明になるまでの行動は？」

リンディがプレシアの家族構成について訊ねる。

「その辺りのデータはきれいさっぱり抹消されちゃっています。今、本局に問い合わせ調べてもらっていますので……」

「時間はどのくらい？」

「一両日中には……」

リンディは納得すると、今後の事を考えているようだった。

「アースラに打撃を与えたプレシア女史、あれだけの魔力を放出したフェイトさん。二人ともすぐには動けないわね。その間にアースラのシールド強化もしなければならぬ……」

今後の事をどこか独り言のようにつぶやいていたリンディが席から立ち上がる。

「貴方達は一休みしておいたほうがいいわね」

リンディの意外な言葉にその場にいる誰もが目を丸くしていた。

「え、でも……」

なのはにしてみれば深刻な事態に陥ろうとしているのに自分達だけが休んでいいのだろうかと考えているのだろう。

「特になのはさんは、あまり長く学校を休みっぱなしでもよくないでしょう。一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せておいた方がいいわ」

「……はい」

「本日はこれにて解散します。あと良太郎さん、ハナさんはここに残っていてください」

「はい」

今後の連携についての話し合いだと良太郎は確信していた。

*

アースラが航行している空間に似て非なる空間に佇んでいる『時の庭園』

そこでは空を切り裂く音がした直後に少女の音が響くといったことが数分間繰り返されていた。

「はあああっ！ぐううう！」

紫色の魔力光で構成された鎖に吊るされているフェイト・テストアロツサの身体に鞭が直撃した。

鞭をフェイトに直撃させた女性——プレシアは無表情に近い表情でこのようなことを繰り返していた。

フェイトの表情が痛みで苦悶の表情を浮かべている。

その度にプレシアの心は大きく揺れていた。

できるならやめたい。やめてフェイトの身体の手当てをしてあげたいという衝動が常に襲っていた。

しかし、やめるわけにはいかない。

何故なら自分が一時でもフェイトに情を見せてしまったらそれだけで、『フェイトの未来』が消滅してしまうからだ。

予知夢を見るようになって、その通りに行動する事を決めた時から覚悟を決めてはいたが、これほど辛いものだとは思わなかった。

プレシアは鞭を操ってフェイトに痛みと苦しみを与えていく。

鞭を振るうたびにプレシアの息も乱れていく。

「あれだけの好機を前にして、ただボーっとしているなんて……」

(フェイト。早く私から離れなさい。早く私を嫌いになり、この場から離れなさい)

娘が自分から一刻も早く離れていく事を願いながら。

「ぐ……ぐ……めんなさい」

フェイトが痛々しい姿で途切れ途切れの声でそう呟く。

(謝る必要はないのよ。謝るくらいなら私を嫌いなさい)

プレシアの思いはフェイトにはいまだ届いていない。

「ひどいわフェイト。貴女は母さんをそんなに悲しませたいの？」

本音とは百八十度逆の言葉をフェイトにぶつける。

そして、右手に握られている鞭を動かしてフェイトに向けてぶつける。

そのたびにフェイトは悲鳴を上げ続けた。

プレシアはフェイトの悲鳴を聞いたたびに心を痛めてはいたが、それでも心を鬼にして鞭を振るい続けた。

アルフがフェイトを見つけた時には、彼女はグツタリして倒れていた。

抱き上げるが、フェイトは気を失っているのか瞳を開こうとはしなかった。

アルフはフェイトの身体全身を見る。

鞭で打たれた痣がいくつもある。

こんな仕打ちをした人間が、他人なら二度とこんな真似が出来ないようにぶん殴れば終わりだ。

だが、この仕打ちをした張本人が彼女の母親——プレシアだ。

アルフは前々から気になっていた。

何故プレシアはフェイトに対してこのような仕打ちが平然と出来るのだろうか。

何故あんなに頑張っているフェイトに褒めの言葉一つ与えないのだろうか。

これではあまりにフェイトは不憫すぎる。

何をしても報われないというのはまさにこのことだ。

(あの女あー！)

アルフはプレシアがいると思われる部屋を怒りと憎しみを込めて睨みつけてから行動に移した。

ジュエルシード九つが輝きながらも宙に浮いている。

プレシアはその輝きに目を奪われる事なく見つめていた。

「九つ。次元震を起こす事は可能ね。でも、アルハザードには届かない」

彼女はジュエルシード九つがもたらす事象と結果を述べたに過ぎない。

彼女にその気はないのだから、仮にその事象を起こしたとしてもそれはすべて演技なのだ。

「次こそ、あの白いガキ(なのはのこと)から回収してきてやる」
プレシアの身体から光の珠が現れ、それが人の姿を象っていく。

海鳴海上で漁夫の利的方法でジュエルシールドを掠め取ろうとした
イマジンだ。

「……頼むわ」

プレシアがそう言うと、イマジンはどこかへと飛び立ってしまった。
た。

「……………!!」

プレシアの身体全身に妙な不快感が襲い掛かってきた。

「がはっ！」

口を開くと赤い液体を吐き、周囲にそれがへばりつく。

赤い液体——血だ。

口元を手に押さえて、身体を丸めて咳き込んでしまう。

「はあはあ……はあ……はあ……」

ある程度落ち着くとプレシアはまた立ち上がる。

口元に付着している血を手で拭いながら小さく自虐的な笑みを浮かべる。

「悪い母親を演じるのも楽ではないわね」

ドオンと後ろから爆発音が立ち、爆煙が立ち込め始める。

爆煙から出てきたのはアルフだった。

プレシアはアルフを見ると、何をしにきたのか理解した。

アルフの双眸には明らかに自分に対する怒りと憎しみが籠っていた。
た。

(彼女と野上良太郎がいればフェイトは何とかなるわね)

フェイトのために怒れる者がいることがプレシアは嬉しかった。

プレシアは小さく笑みを浮かべる。

だが、アルフにはそれが侮蔑と嘲笑に見えたのか更に怒りを買うか
たちになった。

プレシアは振り向かず、背を向けたままだった。

アルフが飛び掛ってくることは予想できたので、魔法障壁を張って
防ぐ。

(でも……試させてもらおうわ)

「ぐううう」

バチバチバチとアルフが障壁を手で直に触れて破壊しようとする。たかが障壁を張られたくらいで諦めるくらいならアルフの命を奪う事も考えていた。

バチバチバチバチという音が鳴りながらも、何か亀裂が走るような音がプレシアの耳に入った。

ガシャンという音を立てて、魔法障壁が崩れた。

(合格、ね)

プレシアは心の中でアルフに太鼓判を押した。

アルフはプレシアのマントを掴んで振り向かせる。

「アンタは母親で、フェイトはアンタの娘だろ!? あんなに頑張ってる子に！ あんなに一生懸命な子に！ 何であんなひどい事が出来るんだよ!?!」

プレシアも心の中では「その通りね」とアルフの言い分を認めていた。

アルフの瞳にはプレシアに対する怒りと憎しみが籠っていた。

プレシアのガラ空きとなっている右手に魔力を収束させていく。

アルフがその異変に勘付いたときには遅く、プレシアの手から放たれていた。

声を挙げる間もなく、アルフは後方へと吹き飛んで壁か何かに叩きつけられていた。

(フェイトもアルフくらい感情の赴くままに行動してくれたら……。無理な注文かもしれないわね)

フェイトが感情的に赴くままに行動する人物なら自分もこれだけ手の込んだことをせずに済むのだが、今更蒸し返しても仕方ない。

「あの子は使い魔の創り方が下手ね。余計な感情が多すぎるわ」

上辺だけの酷評をアルフにぶつける。

アルフは口から出ている血を拭いもせず、プレシアを睨みつけている。

「フェイトは……。アンタの娘は、アンタに笑ってほしくて……。優しいアンタに戻ってほしくて……。うぐっ！」

アルフは起き上がろうとするが、先程放たれた一撃が相当効いてい

るのか起き上がれない。

プレシアの右手から愛用の杖が召喚される。

先端をアルフに向ける。

「邪魔よー消えなさいー!」

上辺だけの罵声をぶつけながら、杖に魔力が収束されて放たれる。

本能的にアルフは転移魔法を展開するために、左手のひらを地に付けて、橙色の魔法陣を展開させる。

爆発音が響き、爆煙が立ち始めると同時に発動した。

爆煙が晴れるとそこには巨大な穴だけがあり、アルフの姿はなかった。

「逃げたわね。アルフが頼るとすれば、野上良太郎くらいでしょう!」

プレシアはアルフの行き先を予想しながらフェイトがいる広間へと向かった。

広間にはバリアジャケット姿のフェイトがアルフのマントを布団代わりにして眠っていた。

フェイトの寝顔を見て、プレシアは自分の心に痛みが走っていることを自覚する。

安らかというよりはどこか苦しそうな、誰かに助けを求めるようにも見えた。

「…アルフ……どこにいるの?……」

プレシアはフェイトの寝言を聞くことにした。

夢の中でアルフを捜しているのだろう。

「良太郎……逢いたいよ……」

これはフェイトの願望だとプレシアは思った。

それからもフェイトは寝言をつぶやき、その中には自分の事も口に出していた。

(まだ、この子の中には私がいるのね)

これだけひどい仕打ちをしながらも、自分を想ってくれている。

いつそ未来のことなんて無視して今のことだけ考えてしまおうかとも思った。

フェイトを見るたびに自身の決意が揺れる。

(アリシアは私の不始末で命を落としたようなもの。でも、フェイトだけは必ず！)

失うわけにはいかない。

これ以上、『娘』を失うわけにはいかない。

そのためならば鬼にも悪魔にもなろう。

決意を新たにしてプレシアはフェイトを起こそうとする。

「フェイト。起きなさいフェイト」

「は、はい。母さん」

プレシアの呼びかけに答えるようにフェイトはゆつくりとだが起き始める。

「貴女が手に入れてきてくれたジュエルシード九つ。これじゃ足りないの。最低でもあと五つ、できればそれ以上。急いで手に入れてきて。母さんのために……」

「はい。……アルフ？」

フェイトは自分に被せられているマントがアルフのものだと判断すると、その持ち主の姿を探す。

「ああ、あの子は逃げ出したわ。怖いからもう嫌だつてね」

プレシアは嘘を吐いた。誰にでもわかるような大嘘だ。

プレシアはしゃがむ。

「必要ならもつといい使い魔を用意するわ」

フェイトとアルフの関係がこんな程度で壊れる事はないはわかっている。

先程の嘘と同じ様にフェイトがこれ对自己に対して、軽蔑なり侮蔑なり憎しみさえ持つてくれるなら良好なのだが。

「いい？フェイト忘れないで。貴女の味方は母さんだけ……。いいわね？フェイト」

フェイトの表情はどこか腑に落ちない感じだった。

それは自己に対して不信感を抱き始めた兆候だとプレシアは判断した。

*

外は夕方、カラスが合唱を始める頃。

一時帰宅命令が出たチームデンライナー+2は海鳴市に戻っていた。

高町家には良太郎の代わりにリンデイが事情説明のために訪れていた。

尚、リンデイが高町桃子や高町恭也、高町美由希に語っている内容はすべて嘘である。

「カメ、あの女。間違いなくオマエと同じくらいの嘘吐きだぞ」

「センパイ、僕は僕のために嘘を吐くのさ。嘘を体裁のために使ったりはしないよ」

「似たようなもんやろ。威張るな」

「威張るな」

ソファでなのはの事を話しているリンデイをイメージン四体はヒソヒソと品評していた。

「それにしてもリンデイさん、よく良太郎を自由の身にしたわね」

コハナの言い分も尤もかもしれない。

良太郎は自分達とは違い、『協力者』というよりは『容疑者』側なのだ。

だが、リンデイは自分達を帰宅命令を出す際に良太郎も戻したのだ。

「良太郎は別に何も悪いことしてねえだろ。フェイトやオバサンのことを隠してはいるがな」

「それにリンデイさんだってわかってるんじゃないの？良太郎は確かにフェイトちゃん側にいたけど、時空管理局に引かれるようなことは何一つしていないってね」

モモタロスとウラタロスは良太郎が自由の身になるのは別段、不思議な事ではないという口調で言う。

「クロノは渋つとつたけどな」

「黒いのは良太郎のこと嫌いなんだよ。きっと」

キンタロスとリュウタロスは良太郎を自由の身にする事に唯一渋っていたクロノに対して批評していた。

「なのは、今日明日くらいはお家にいられるんでしょ？」

美由希の問いになのはは二つ返事で答える。

「アリサもすずかちゃんも心配していたぞ。もう連絡はしたか？」

恭也が訊ねると、なのはは「うん、さっきメール出しといた」と返答した。

海鳴市ではあるが高町家とは違う場所で良太郎は一人寝床代わりに使っているソファに寝転んでいた。

そこはフェイト達がアジトとして使っていたマンションだった。

幸い、合鍵は持っていたので入ることは出来た。

「やつぱり、誰もいない、か」

フェイトかアルフどちらかに会うことが出来れば幸いだと思ったのだが現実はそんなに甘くはないらしい。

「夕飯一人分は味気ないしね」

良太郎はソファから起き上がって外食を決意し、部屋を出た。

部屋を出て、鍵を閉めてから良太郎は一人で歩く。

「フェイトちゃんとアルフさん、ちゃんと食べてるかな……」

良太郎は知らない。実はアルフが海鳴市にいることに。

そして、アルフがきつかけでどこかギクシヤクしていた面子が無事に元通りになることも。

第三十五話 「アルフがもたらす仲直り 後編」

私立聖祥学園初等部校舎屋上

高町なのはは月村すずかとアリサ・バニングスといた。

「なのはちゃん！よかった！元気で！」

すずかがなのはの両手を握って久しぶりに親友と逢う事が出来た事に素直に喜んでいた。

「うん、ありがとう。すずかちゃん」

なのはは素直に礼を述べた。

事の全ては解決していないが、正直今は気を抜いていいもいとさえ思えた。

(あ……)

横からの視線が気になった。

少し距離が離れて腕組みをして、こちらを見ているアリサだった。

「あ、あの……。アリサちゃんもごめんね。心配かけて」

なのはは両手をすずかに握られたまま、顔だけをアリサに向けて謝罪した。

アリサはすずかと違って素直ではないのか、照れ隠しとして顔を明後日の方向に向けた。

「……まあ、よかったわ。元気で」

そう言ってくれた。

アリサの態度の真意を知っているなのはとすずかは笑い出した。

*

バニングス邸に一匹の巨大な獣が身体のあちこちに包帯が巻かれて檻の中に入っていた。

オレンジ色の毛並みで、眉間には赤い宝石のようなものが埋め込まれている珍しい獣——アルフだ。

(あのガキンチョの友達に助けられるなんてね)

奇妙な巡り合わせだと思った。

正直に言えば、自分を困っている檻を壊すくらいには回復している。

だが、出てどうなると問う。

『時の庭園』にいるフェイト・テスタロッサをプレシア・テスタロッサから救出に向かおうとしても、結果はわかりきっている。

今の状態でプレシアと戦っても自分に勝ちの見込みはない。

それにフェイトに自分と母親が戦う姿を見せたくはないという気持ちもあつた。

(ここにいればガキンチョに会えるかもしれないね)

これはもはや『賭け』の領域だった。

自分は高町なのはの住居先を知らない。

なのはとコンタクトを取るならばここで待つしかないのだ。

自分にとつてもう一人頼みの綱となる人物がいた。

(良太郎は今、ガキンチョと一緒に海鳴市に来てる可能性は十分にありうる、か)

野上良太郎は自分達と共に行動した時間が長いいため、時空管理局からの印象はよくないはずだ。

そのため、良太郎のみ拘束されているという考えも否定できない。

だが、アルフとしてみてはこれも『賭け』の領域だ。

(どっちにしても、傷がもう少し癒えるまで大人しくしてるか)

アルフは眠り始めた。

*

翠屋ではアルバイトをしている高町恭也と月村忍は何度も目をこすって、眼前の現実を疑っていた。

普段は「手伝え」と言っても露骨に嫌な顔をするか、昼寝をするか、サボってどこかに逃げているかをしているイメージが真面目に手伝っていたのだ。

「何だよ？」

恭也と目が合ったモモタロスは訝しげな表情で訊ねる。

「あ、いや……。お前達、どういう風の吹き回しだ？」

「あん？ いいじゃねえかよ別に。それとも、俺達にサボってほしいのかよ？」

「いや、そうは言っていないが……」

「だったら、オメエも手伝えよ？そんな所でボーっとしてんじやねえよ」

モモタロスはそう言いながら内側から窓を拭き始めた。

リュウタロスが外側の窓を拭いている。

洗剤となつているスプレーで窓に様々な絵を描いていた。

それでも、布巾できちんと拭いていた。

「はははは。面白い」

キンタロスは玄関をほうきで掃除していた。

本来彼のポジションは力仕事なのだが、彼の場合そのポジションで周囲に大迷惑をかけることも少くない。

「ほうきで掃く人も悪くないなあ」

キンタロスは箒を操りながらも玄関の埃を払っていく。

「忍さんもボーっとしてないで手伝ったほうがいいよ？」

床をモップがけしているウラタロスが忍に手伝うように促していた。

この異様な光景に慣れるに恭也と忍はもう少し時間がかかるようだ。

コハナは厨房で高町桃子の足を引つ張らない程度に厨房の中を駆け回っていた。

『商品』として販売されるスイーツを作る事はコハナの腕では到底無理なので、必要な材料を邪魔にならない程度にキッチンに置いたりとしていた。

「ハナちゃんも適当な所で休んでいいからね」

桃子がコハナに労いの言葉を送る。

「はい！わかりました」

コハナは答えると、裏口に封の閉じられているゴミ袋を外に出しに行つた。

ゴミ袋を外に出してから、休憩を取って裏口で先程購入した缶ジュースのタブを開けて一口飲む。

ゴクゴクツと音が聞こえてきそうなくらいの勢いのある飲みっぷりだった。

もちろん、フリーとなつてゐる左手を腰にすえることも忘れない。頃合のところまで口から離す。

「ぶはーっ。ゆっくりできるのも今日までなのよね」
明日からのことを考える。

この事件の大元は既に明かされている。

恐らくだが、『ジュエルシード捜索』から『プレシア・テスタロッサの逮捕』に切り替わるだろうと予測している。

二十一個の内、十二個はこちらにあつて、残り九個はプレシア達が持っていることはハッキリしているから、方々探し回る必要がないのだ。

『ジュエルシード捜索』の場合、プレシアに対して逮捕ができない可能性があると思つてゐる。

だが、『プレシア・テスタロッサの逮捕』ならば彼女がジュエルシードを所持しているので、証拠品として押収することも可能だろうと踏んでいる。

犯罪者を逮捕できるし、危険物であるジュエルシードも回収できるという、いいことづくめだ。

コハナは更に一口飲んでから、空を見上げる。

「良太郎、どうするのかな？ 『真実』を知つてゐる以上、迂闊なことはできないし……」

コハナは良太郎から『真実』を聞かされている。

写真の少女やフェイトの出生などについてだ。

だが、良太郎が三枚目で本当に知つた『真実』は知らない。

こちらとしてもそれを無理に訊ねようとは思わなかつた。

恐らく『時の運行』に影響があると思つたからだろう。

「長くいすぎると忘れちゃうけど、ここつて『過去』なのよね……」

「よお、オメエここで休憩してんのかよ？」

考え込もうとしたとき、頭上から声がした。

「モモ……」

上から下まで赤色のイメージ——モモタロスだ。

彼の手にも缶ジュースが握られており、タブはすでに開けられてい

た。

当然のように彼女の隣に座る。

「アンタこそ休憩？」

「いや、抜けた」

「何よ？サボリ？」

「違えよ。恭也と紫チビ（すずかのこと）の姉貴のせいで居心地悪く
なったんだよ。アレはとつつあんとカミさんが出すヤツそのものだ
ぜ」

「あー、なるほどねえ」

モモタロスの言っている意味がコハナにはすぐに理解できた。

「オメエさつき過去がどうたら言ってたけどよ。どうしたんだよ？」

「聞いてたの？」

「聞こえちまったんだよ」

コハナはモモタロスに睨むが、彼は彼女とは目を合わせずに答えた。

目を合わせば『蛇に睨まれた蛙』状態になることは明白だ。

「良太郎さ、これからどうするのかなんて思っ……。だってここっ
て私達にとっては『過去』じゃない。だから……」

「まあな。でもよ、良太郎がここで起きた事が誰かに都合が悪いか
らって変えちまうようなヤツじゃねえってことはオメエだってわ
かってるだろ？」

「うん……」

コハナは頷く。

過去で起きた事は決して変えてはならない。それがたとえ、とても
辛いことであっても変えてはならない。それが、『時の運行』の掟だ。
「それに変わるんだつたらよ。良太郎なら上手くやるよ」

モモタロスの言葉にコハナはハツとした。

あらゆる『掟』や『規則』といったものには必ずといっていいほど
『抜け道』または『裏技』というものが存在する。

もちろんそれは『時の運行』とて例外ではない。

『時の運行』にも裏技や抜け道は存在している。

仮に良太郎が改変を望むなら、その方法を利用するだろうとモモタロスには告げているのだ。

「ねえモモ……」

「何だよ？」

コハナがジュースを飲んでいるモモタロスに声をかける。

「なのはちゃん、フェイトちゃんと友達になれるかな？」

「さあな。あいつ等次第だろ」

モモタロスは軽はずみに『なれる』とは言わず、立ち上がって翠屋へと向かった。

*

夕方となり、小学生は既に本日の授業を全て終了している時間帯。

なのははアリサの勧めで、すずかと共にバニングス邸にいた。

バニングス邸に到着する前、聖祥学園でアリサは昨日、巨大な獣を拾ったとなのは達に告げた。

その特徴に、なのはは心当たりが十分すぎるほどあった。

そして現在、なのは、アリサ、すずかはその獣が入っている檻の前で座って見ている。

正確にはアリサとすずかは座って様子を伺っているようだったが、なのはは違っていた。

なのはとその獣——アルフは念話の回線を開いていた。

(やっぱりアルフさん……)

なのはから声をかけた。

(……アンタか)

アルフも会話に応じてくれるようだ。

(その怪我、どうしたんですか？それにフェイトちゃんは？)

なのははアルフが単体でバニングス邸にすることが不自然に感じるので、思ったことを正直に訊ねた。

アルフは後ろを向いてしまった。

「あららら。元気なくなっちゃった。大丈夫？」

アリサはアルフが元気をなくしたと思ったのだろう。

「傷が痛むのかな？」

すずかもアルフの態度に不安を感じたのか、考えられる可能性を口に出した。

「そつとしといてあげようか……」

すずかの一声でなのはとアリサも立ち上がる。

すずかに抱きかかえられていたフェレット——ユーノ・スクライアがすずかの腕から飛び出し、地面に着地した。

そして、アルフが入っている檻の前に立つ。

「ユーノ！危ないよ！」

アリサが注意する。彼女にはユーノがアルフにとって捕食対象になりかねないと感じたのかもしれないからだ。

「大丈夫だよ。ユーノ君なら」

なのは笑顔でアリサとすずかの心の中に宿りつつある不安を取り除いた。

（なのは、彼女からは僕が話を聞いておくから……。なのははアリサちゃん達と……）

ユーノがなのはと念話の回線を開き、話しかけてきた。

（うん。わかった）

なのははアルフからの事情聴取をユーノに任せて、アリサ、すずかと共にお茶とお菓子をいただくために屋敷の中に入っていた。

なのは達が屋敷の中に入る事を確認したユーノは念話の回線を開いた。

相手はもちろん、自分に背を向けているアルフだ。

（一体どうしたの？君達の間で何が？）

ユーノはなのはが訊ねた事をもう一度ぶつけた。

アルフは背を向けたままだ。

時間にして三十秒ほど経過した頃だろうか。

（……アンタが海鳴

ここ）

にいてるってことは管理局の連中も見てるんだらうね？）

アルフの問いは正確だった。

今こうして念話で会話している事もアースラでは筒抜けになつて

いるのだ。

(うん。……まあね)

ユーノは誤魔化しても仕方ないと判断したのか、歯切れは悪いが肯定の返事をした。

(……そうかい)

アルフにしても想定内なのか特に驚く感じはない。

(ねえ。アンタ……)

アルフから話しかけてきた。

(なに?)

(良太郎はどうしてるんだい? アイツはアンタや良太郎の仲間達と違って、管理局にしてみれば容疑者じゃないのかい?)

(うん。管理局は良太郎さんを今でも容疑者として見ている節はあるね。だけどね、正直手を持って余している傾向でもあるね)

(何でだい?)

(良太郎さんが非協力的だからかな。これは僕の勘なんだけど、良太郎さんは君を含めて僕達の知らない何かを知っていると思うんだ)

(あたしが知らない事を良太郎は知っている?)

(それが良太郎さんが管理局に対して非協力的な態度を取っている理由だと思うんだ)

ユーノは自分から見た良太郎の態度を分析した結論をアルフに告げた。

(良太郎さんがどういう経緯の人かは君も知ってるでしょ?)

(そりゃあ、まあ……)

(大丈夫だよ。良太郎さんがいくら容疑者として見られていても管理局は強く出ないよ。ジユエルシードを手に入れようとするイマジンを倒すには良太郎さんの力は不可欠だからね)

ユーノの言葉を聞き、どこか安心するアルフ。

(あ、これが一番大事だったんだ。良太郎さんは海鳴にいるよ)

(本当かい!? それ……)

(多分、君達が海鳴で拠点としていた場所にいると思うよ)

(そうかい。良太郎、こっちに来てるんだね)

アルフの沈んだ声が明るくなりつつある事をユーノは聞き逃さなかった。

(そろそろいいかな？時空管理局クロノ・ハラウンだ)

二匹の念話の中にクロノ・ハラウンが入り込んだ。

(どうも事情が深そうだ。正直に話してくれば悪いようにはしない。君のことも、君の主であるフェイト・テストロッサの事も……) クロノは頭は固そうだが、約束を違えたりはしないとユーノは思っている。

ユーノはアルフを見るが、まだ背を向けたままだった。

(わかった。……全てを話すよ。だけど、約束して！フェイトを助けるって！あの子は何も悪くないんだよ！)

今まで背を向けていたアルフが正面を向いた。

獣状態なので、細かな表情はわからないが必死なのだとユーノは思った。

(わかった。約束しよう)

クロノが条件を呑みこんだことがわかると、アルフは語り始めた。

(フェイトの母親、プレシア・テストロッサが全ての始まりなんだ)

アルフが語る内容をユーノは全て聞いたが、良太郎が時空管理局に対して非協力的になるほどのものなのだろうかと疑問に感じる内容だった。

アリサとすずかがTVゲームに夢中になっている頃、なのはは部屋から出てユーノとアルフ、クロノの念話を全て聞いていた。

(なのは、聞いたかい?)

クロノが確認するかのような言葉を発した。

(うん。全部聞いた)

なのはは頷くような言葉で返す。

(君の証言と現場の状況、そして彼女の使い魔アルフの証言と現状を見るに、この話に嘘や矛盾はないみたいだ)

(どうなるのかな……)

(……)

なのはの問いにユーノの声は出ない。恐らく考えているのだろう

と想像した。

（プレシア・テスタロッサを捕縛する。アースラを攻撃した事実だけでも逮捕の理由にはお釣りが来るからね。だから僕達は艦長の命があり次第、任務をプレシア逮捕へ変更する事になる。君はどうする？高町なのは）

クロノの問いになのはの答えは決まっていた。

（わたしはフェイトちゃんを助きたい！アルフさんの想いと、それから……、わたしの意思。フェイトちゃんの悲しい顔は、わたしも何だか悲しいの。だから助けたいの。それに……、友達になりたいって返事、まだしてもらってないからね）

（わかった。こちらとしても君の魔力を使わせてもらうのはありがたい。フェイト・テスタロッサに関しては、君と、……野上良太郎に任せるよ。良太郎にはこの事をなのは、君から伝えてくれ。アルフ、それでいいな？）

フェイトの処遇を自分と恐らくフェイトやアルフが絶対と言っていいほどに信頼を寄せている良太郎に任せてくれることは嬉しかった。

良太郎が聞けば喜ぶだろう。

（なのは、だったね。頼めた義理じゃないけど、フェイトを助けて。あの子、本当に一人ぼっちなんだ）

（アルフさん。前にも言ったけど違うよ。フェイトちゃんにはアルフさんや良太郎さんがいるから一人じゃないよ。それに、わたしやユーノ君、モモタロスさん、ウラタロスさん、キンタロスさんにリュウタ君にハナさんだっているんだから）

なのはの言葉はアルフに反論させる余地のないものだった。

彼女は閉じていた扉を開き、中に入った。

「なのは、遅ーい」

「なのはちゃん、待ってたんだよ」

「にやはは。ごめんごめん」

アリサとすずかからの抗議になのはは笑みを浮かべながらも謝罪した。

クロノがアースラへの帰艦は明日の朝であり、その間にフェイトに出会った場合の処遇はすべて、なのは達に一任するとの事だ。

「あ、アリサちゃん。あの大きな犬（アルフのこと）？ なんだけど……」
なのははアルフのことをアリサに申し出た。

「どうしたの？ なのは」

「わたし。飼い主知ってるから帰る時に引き取ってもいいかな？」

「飼い主を知ってるんだったら、別にいいわよ。あと飼い主に言っていて。二度と放し飼いするな！ って」

「こ、こわいよ。アリサちゃん」

さすががアリサの剣幕に少々引いている。

「う、うん。わかった」

なのはも怖かったが、頷いた。

*

夕陽は沈み、星が輝き始めている頃。

フェイトとアルフが海鳴の拠点として生活していたマンションではというと。

良太郎がベッド代わりに使っているソファに寝転がっていた。

「外食でもしよっかな……」

一人分の食事を作る事ほど味気ないものはない。

そう呟いた時、ズボンのポケットの中に入っているケータロスからメロディが鳴り出した。

「もしもし……」

『あ、えと良太郎さんですか？ わたし、高町なのはです』

相手はなのはだった。自分に電話するのは初めてなのか緊張しているのではと声色で予測できた。

「なのはちゃん、どうしたの？」

『え、えと……ですね。良太郎さん。わたしアルフさんと会いました』
なのはの一言に良太郎は身を乗り出す勢いになっていた。

「本当に!？」

『は、はい。アリサちゃん——友達の間から引き取ってきました。多分そちらに向かっていると思います』

「そうなんだ。ありがとう、なのはちゃん」

良太郎は感謝の言葉を素直に述べる。

『そ、そんな……、いいですよ。アルフさん、怪我してますから無理させないでくださいね』

なのはは素直に礼を言われた事に照れが入ったのかどこかアタフタしていたが、告げるべきことは告げて切った。

ケータロスポケットの中にしまい込むと同時に、インターホンが鳴った。

良太郎がドアノブを回すと、腕と足に包帯が巻かれているアルフ（人型）が立っていた。

「アルフさん……」

良太郎は逢えたこと、アルフの痛々しい姿に対してのが悲喜が混ざり、どう迎えたらいいかわからない表情をしていた。

「良太郎！」

「アルフさん。無事でよかった……」

とにかくそう言うしかできなかった。

「ア、アンタも無事でよかったよお」

アルフはそう言いながら涙声になっていた。

「とにかく中に入って。今後の事もあるし、ね？」

アルフは良太郎に言われるように、中に入っていた。

中に入ったアルフをソファに座らせて良太郎は単身で海鳴にいる経由を訊ねていた。

「プレシアさんと戦って、やられる寸前のところを転移魔法を使った。場所はどこでもよかったわけで、結果として海鳴に漂着した。そしてその傷はプレシアさんと戦ってできた傷だったんだね……」

「……ああ。あの女のフェイトに対する扱いがあんまりにひどかったからさ……」

アルフは思い出しながら言っているのか瞳には『憎しみ』が宿っていた。

プレシアのフェイトに対する扱いの『真意』を知っている良太郎にはアルフにどのように返答をすればいいか悩むところだった。

「明日の朝に僕達がアースラに戻らないといけないうてのは知ってる？」

「ああ。念話の回線開いてたからね」

「その間にフェイトちゃんに遭遇した場合のことも聞いてるんだね？」

「ああ」

確認するかのようにつねる良太郎にアルフは短く肯定の返事をする。

「良太郎」

「ん、なに？アルフさん」

「アンタさ、その……あたしやフェイトが知らない事も知ってるのかい？」

「え？」

アルフからそんな質問が出るとは思わなかったので良太郎は目を丸くするが、すぐに元の表情に戻る。

「うん、知ってる」

全てを語るわけにはいかなないので、それだけを語った。

「それをあたし達には……」

「悪いけど今は言えないんだ。でも、時期が来れば話せると思うからそれだけを信じてほしいってことじゃダメかな？」

良太郎の頼みにアルフはというと、

「しようがないね。アンタがそう言うんじや、あたしはそれを信じるしかないよ」

受け入れてくれた。

「ありがとう。アルフさん」

アルフの厚意に良太郎は感謝の礼を述べた。

「明日は早いから今日はもう休もう」

「そうだね。おやすみ良太郎」

そう言うと、アルフは人型から獣型へと変身して、その場でしゃがみこんで寝始めた。

良太郎も掛け布団を持ってソファで寝る事にした。

*

雲が空を占拠し、太陽の顔を邪魔している朝。

良太郎と獣姿のアルフは高町家へと向かっていた。

合流してから、アースラへと戻るとい手はずになっていた。

高町家に着くと、なのは、ユーノ、イマジン四体にコハナが正門を出たところだったようだ。

特に挨拶を交わすことなく、全員で海鳴公園に向かう。

「ここならいいよね？出てきて。フェイトちゃん」

なのはがフェイトが出てくるような台詞を言う。

風が吹き、木が揺れる。

何かが起こる前兆なのではと、そこにいる誰もが思う。

時間にして二、三分が経過した頃だ。

「フェイトちゃん。僕言ったよね。なのはちゃんと向き合わなきゃいけないって。今この機会を逃したら向き合う機会は二度とないよ！それでもいいの？フェイトちゃん！」

良太郎がいるかいないかもわからないフェイトに告げた。

良太郎の言葉に応えるかのように電灯の上にバルディッシュをサイズフォームにしたフェイト・テストアロツサが現れた。

「フェイト。もうやめよう。あんな女の言う事聞いちゃダメだよ。フェイト、このまんまじゃ不幸になるばかりじゃないか！だからフェイト！」

アルフはこれ以上、プレシアの命で動く事をやめるようにフェイトに懇願する。

だが、フェイトは首を横に振るとい否定の返答だった。

「だけど、それでもわたしはあの人の娘だから……」

「そっか。なのはちゃん、お願いできる？」

良太郎なのはにフェイトと本気で向き合うことを頼む事にした。なのはは頷き、バリアジャケットを纏ってレイジングハートを手にする。

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね。逃げればいいってわけじゃない。きつかけはきつとジュエルシード。だから賭けよ」

う？お互いが持っている全部のジュエルシード！」

「プットアウト」

レイジングハートがそう発すると、なのはの周りに円を描くように十二個のジュエルシードが現れた。

「プットアウト」

バルディッシュもそれに応じるかのように、発する。

フェイトの周りに九個のジュエルシードが円を描くように出現した。

「それからだよ。全部、それから」

なのははそう言いながら、レイジングハートをフェイトに向ける。

「わたし達の全てはまだ始まってもない。だから、本当の自分を始めるために、始めよう！最初で最後の本気の勝負！」

なのはとフェイトが向き合う時間が始まったと良太郎は感じた。

CLIMAX

第三十六話 「想いと斬撃は駆け抜ける」

海鳴の空にいくつももある雲の中にひとつの球状の光が佇んでいた。

「ジュエルシードを賭けての大勝負、か」

その光は地上で起こっていた事をじっと見ていた。

「あの二人が疲弊したところを奪うか」

光はまたその場でじっと待つことにした。

必ず機会が訪れるという事を信じて。

*

海鳴公園には緊迫した空気が漂っていた。

この空気を漂わせている原因となっている高町なのはとフェイト・テストアロツサはお互い様子を伺っているのか微動だにしなかった。

野上良太郎、コハナ、イマジン四体、アルフ、ユーノ・スクライアも事の成り行きをじっと見ている。

誰一人として口を開こうとしない。

フェイトは瞳を閉じる。

彼女の記憶で蘇るのは母親のプレシア・テストアロツサと二人でピクニックに行っている時の事だった。

優しく微笑む母とそれに応えるかのように無邪気に笑っている自分がいた。

プレシアは摘んだ花で冠を作っていた。

自分はそれが完成するのをじっと見つめながら待っていた。

「ねえ、とてもきれいなね。アリシア」

母は名を呼び間違えたのだろうか。

ここにいるのは『アリシア』ではなく『フェイト』のはずだ。

「さあ、いらっしやい。アリシア」

プレシアは優しくもう一度その名で呼んで、自分をこちらに来るよう促す。

プレシアは自分に完成したばかりの花冠を被せてくれた。

「とても可愛いわよ。アリシア」

その名で呼ばれるたびに感じる違和感を拭う事はできなかったが、自分はこの甘美ともいえる時間に浸りたかった。

(まあ、いいのかな)

現実に戻り、閉じていた瞳を開く。

一瞬だが、現在のプレシアがよぎった。

(わたしは……、優しい母さんに戻ってほしいから！)

自分が頑張れば母は元の優しい母に戻ってくれると信じているフェイト。

優しい母を取り戻すために、今自分ができることは目の前に立ちただかる少女と全力で向き合うことだった。

決意すると、足場としていた電灯から離れて空へと場を移した。

サイズフォームのバルディッシュをなののはに向けて構えた。

*

次元空間を航行しているアースラでは海鳴にいる者達には内密に着々と次の計画が実行されようとしていた。

「戦闘開始、みたいだね」

モニタールームの席に座ったエイミイ・リミエツタは髪の毛が何本か、によーんと跳ねたのだが当人は気づいていなかった。

隣で立っているクロノ・ハラオウンはそれに気づいていたが。

「ああ……」

クロノは返答とは裏腹にぴこぴここと揺れているエイミイの髪が気になって仕方がない。

「しかし、ちよつと珍しいよね。クロノ君がこういうギャンプルを許可するなんて」

「まあ、なのはが勝つに越した事はないんだけど……、あの二人の勝負自体はどちらに転んでもあまり関係ないからね」

そう言いながら忍ばせていた整髪スプレーを上下に振る。

「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれている内に、あの子の帰還先追跡の準備をしておくってね」

自分がこれから行う事を自信と誇りを持って言うエイミイ。

クロノは人差し指でスプレアの頭を押す。

「頼りにしてるんだからね」

発射され、エイミイの髪に当てる。

「逃がさないですよ」

それから、これまたあらかじめ忍ばせていたブラシでエイミイの髪を整えていく。

「おうー任せとけー」

自信を持って二つ返事するエイミイだが、クロノが折角整えてくれた髪の部分はやっぱり、みょーんと跳ねた。

クロノの手をこれ以上煩わせるわけにはいかないと感じたエイミイは自分で髪を整え始めた。

「でも、あの事をなのはちゃん達に伝えなくてもいいの？プレシア・テスタロッサの家族とあの事故のことを……」

「勝ってくれる事に越した事はないが、今はなのはを迷わせたくなーいんだ。それにあの面子の中でプレシアの家族とあの事故に関して知らないのは、恐らくなのはとフェレットもどきだけだろう。良太郎達は僕達より早くこの情報入手しているはずだからね」

「クロノ君は良太郎君をまだ容疑者としてみるの？」

エイミイはクロノに訊ねる。彼女個人としてみたらとても悪事に加担するタイプに思えないからだ。

「正直に言うと、彼を容疑者としてみるかどうかと聞かれると微妙という返答しか出ないね。シロと決めるには彼が僕達の知らない何かを知って隠している事があるというのは確かだし……。だがクロノでもないね」

「その根拠は？」

「彼にメリットがないから、かな。ジュエルシードが彼に利得を与えてくれるとはとても考えられないからね」

ジュエルシードに関するあらかじめの知識がないと入手しても宝の持ち腐れであり、仮に偶然発動させたとしても発動者の望む結果は得られないだろうと、クロノは考えている。

「だったら良太郎君は何でジュエルシードを捜してたのかな？」

「それは簡単な答えだよ。純粋にフェイトやアルフの手伝いをしたかった、かな」

「ああ、なるほどお。それなら領けるよ」

二人は会話を打ち切ると、モニターの戦闘を見ることにした。

*

海鳴の空ではなのはとフェイトが一進一退の攻防を繰り広げている。

飛行速度はほぼ直角であり、レイジングハートとバルデイツシュを振りかぶるタイミングはほぼ同じで、相手に向けて振り下ろす。

両デバイスがぶつかり、火花でなく魔力光が二人を覆うようにして発生するが、二人が互いに後方へと下がる事によって、それは消えた。

(違う……)

フェイトはなのはの動きと繰り出す攻撃を防ぎながらも、以前に戦闘していたときと比較していた。

移動速度、攻撃のタイミング、明らかに以前とは違っていた。

(わたしの攻撃を確実に防いでる。目で正確に捉えているんだ)
短期間での成長にフェイトは内心、驚きを隠せなかった。

「フォトンランサー」

バルデイツシュが発した。

黄金の鎌刃が消え、先端が九十度に曲がってデバイスモードになる。

正直に肉弾戦を繰り返しても仕留められないと判断し、魔法射撃へと切り替えたのだ。

フェイトの周りに稲妻を纏った黄金の光球が出現する。

(これでわかる！)

全弾直撃ならばそれでこの戦いは終わる。

フェイトは自分と同じ様に浮揚しているが、位置的に自分より下にいるのはを見下ろしていた。

(何とか今の所は動きも見えないし、付いていけるけど……)

なのはは自分より高い高度で浮揚し、射撃魔法を放とうとしているフェイトを見上げていた。

自分が初めてフェイトと戦ったよりはよくなったという自覚はある。

だが、それでもフェイトの方が対人戦や魔法を用いた戦術が上だという事実は変わらない。

(気は抜けない。フェイトちゃんはきつとまだ何か奥の手があるような気がしてならないよ)

レイジングハートを天に掲げる。

「デイバインシューター」

レイジングハートがそう発すると、なのはの周りに円のようにして桜色の魔力光が数個出現する。

これで迎撃の準備は整った。後はどのタイミングで放つかだ。

フェイトを見ると、放っていないところから考えると自分と同じ様にタイミングをうかがっているようだ。

このまま膠着するわけがないとなのはは感じた。

放つなら一斉射撃。出し惜しみはしないと予測する。

両者の視線と視線がぶつかる。

「ファイアツ!!」

「シュートオオオ!!」

両者同時に魔力で構成された光球を放つ。

両者の弾は生き物のような捻りを見せて、相手に向かって行く。

なのはは右へ左へ必要最小限の動きをして、弾を避けながらフェイトへと間合いを詰めていく。

フェイトを見ると、自分が放ったデイバインシューターは誘導ミサイルのようにしてフェイトを追尾していた。

デイバインシューターに後を追いかけているフェイトは全速力で撒こうとしていた。

だが、自分の速度と殆ど変わらずに追尾してくるデイバインシューターを見てから計画を変える。

自然消滅するまで逃げ回ろうと最初は思ったが、自分とデイバインシューターの距離が開かないのでその計画は使えないと考えた。

逃げ回る事を止め、立ち止まって追尾してくるデイバインシュー

ターを全て防いだ。

爆煙が立ちこめるが晴れると、そこには第二撃ともいえるデイバインシューターを準備しているのが自分を見上げていた。

「シュートオオオ!!」

発すると同時に桜色の光球はフェイトに向かっていく。

(第一撃から第二撃までに切り替わる速度が速くなっていく！)

流石にこの第二撃も『防ぐ』という手は使えない。

使えばダメージになることは必須だし、なのはに第三撃を繰り返させられるわけにはいかない。

「サイズフォーム」

バルディッシュがデバイスフォームから黄金の鎌刃を出現させてサイズフォームへと形態を変えた。

迫り来るデイバインシューターを黄金の鎌刃で切り裂いていく。

正面、頭上、下方、中には捻りを見せながら変則的なものである。的確に目で捉えて、効率よくデイバインシューターを切り裂きながら、下位置にいるのはへと間合いを詰めていく。

「!?」

なのはに驚愕の表情が出た。

それを隙だと睨んだフェイトはさらに速度を上げていく。

そして、バルディッシュを上段に構えて振り下ろす。

なのはは右手をかざす。

(まさか!?)

フェイトの中に不安がよぎった。

この状況でデバイスを持たない手を前にかざすという事はやる事はひとつしかない。

「ラウンドシールド」

レイジングハートが発するとなのはのかざした右手を起点にして、桜色の魔法陣が展開される。

「くっー!」

(戻せない!)

フェイトは振り下ろそうとしているバルディッシュの重力に逆ら

う事ができない。

結果としてそのまま振り下ろしてしまう。

黄金の鎌刃と桜色の魔法陣がぶつかる。

なのはの表情を見ると、何かあるようにも見えた。

後ろから音が聞こえる。

風とは違う別の音。

自分を狙う音だと感じた。

後ろを向くとデイバインシューターの一発があり、こちらに向かってくる。

バルディツシュを握っている両手の内、左手をかざして黄金の魔法陣を展開させて、デイバインシューターを防いだ。

魔法陣を閉じるとそこには、なのはの姿はなかった。

「……すごいね、二人とも」

「ああ。ガキのケンカ、じゃねえよな……」

「一歩間違えば死んじゃうような戦いしてるね。二人とも」

「全力勝負やからな。まだ激しくなるで」

「なのはちゃんが消えた？ねえ、なのはちゃんどこ行ったの？」

良太郎、モモタロス、ウラタロス、キンタロスがなのはとフェイトの戦闘の凄まじさに驚愕し、リュウタロスは戦っているなのはを目で追いかけていたのだが、途中で見失ったらしくキョロキョロしていた。

「私達、ここで見てるしかないのね……」

コハナは自身の立ち位置に歯痒さを感じていた。

「ハナさん……」

「……………」

ユーノとアルフにはコハナの気持ちが痛いほど理解できていた。

ギャラリーとなつている面々はなのはを応援する声もなかったが、フェイトを応援する声もなかった。

この戦いはどちらが『善』で『悪』かなどが決まっているような戦いではない。

そもそも『正義』や『悪』などの位置づけは人の見方や感じ方次第

でいくらでも変化する曖昧なものでしかないのだ。

ただここにいる全員が思うことは「無事であってほしい」ということは一致していた。

「あ、なのはちゃんだ」

リュウタロスがフェイトより高い位置に浮揚しているのはを見つけた。

「フラッシュムーブ」

レイジングハートが発すると同時になのははレイジングハートを振り下ろせる位置に構えて急降下した。

「てやあああああああ!!」

叫び声を挙げながら、フェイトへと向かっていく。

フェイトはなのはが自分を惑わせる程の速度で移動した事に驚きの表情を隠せなかった。

ガキン!と振り下ろされたレイジングハートをバルディッシュが受け止めたが、フェイトは少し下位置へと下がった。

その直後、至近距離に二人を中心に桜色の魔力光と金色の魔力光が膨れ上がった。

魔力光の中にいる状態でなのはは振り下ろしたままの構えでそこから抜け出た。

(見つけた!逃げがさない!)

魔力光の中、フェイトは移動しようとするなのはの姿を捉えた。

バルディッシュを構えてなのはに向かっていく。

「サイズフラッシュ」

バルディッシュの音声と同時に振り下ろす。

何かを切った感触はあった。

だがそれは、なのはではない。

なのはのバリアジャケットの胸元のリボンだった。

なのははその場でぐるりと反転して、間合いを取ろうと移動しようとするが、眼前にはあらかじめ仕掛けておいた金色の光球数個が道をふさいでいた。

「ファイア」

バルドイツシユの声と同時に光球がなのはに向かっていく。
なのははラウンドシールドで三発防ぐ。

残りは全て海に向かっていった。
フェイトはなのはを見る。

先程防いだ三発は、決め手となるダメージにはならなかったが魔力を消費させるといふ点では十分に役立っただけよしとできるものだった。

「はあ……はあ……はあはあ……」

現になのはは肩を揺らして息を乱していた。

だが、それはフェイト自身にも言えることだった。

その証拠に自分も肩を揺らして息が乱れている。

短期決戦を想定したが、こうまでもつれ込むとは思ってもいなかった。

（初めて会った時は、魔力が強いだけの素人だった。でも、もう違う。速くて強い！）

この時フェイトは初めて対峙している少女を『脅威』だと感じた。
（迷ってたら……、やられる！）

フェイトのなのはを見る目が更に鋭くなった。

決意を持ち、ためらいを捨ててフェイトはバルドイツシユを正眼に近い構えを取る。

目を閉じて、これから発動させる魔法に意識を集中させる。

彼女の足元から金色の魔法陣が展開して広がった。

「!？」

なのはを包囲するように上下左右斜めにと金色の魔法陣が、出現し
ては消えてという作業を繰り返していた。

（何なの？何かを仕掛け始めているかはわかるけど、どんなものが来るかは予測できないよ！）

この場にいることは決して得策ではないとわかるのだが、行く手を遮るかのよう出現する魔法陣のせいで迂闊に動く事ができない。

焦りが来るが、何とか平静を保とうとするなのは。

（怖い。フェイトちゃんが本気で来るってのは覚悟してたけど、正直

怖いよ)

なのはの心に恐怖を感じさせるほど、フェイトが繰り出そうとしているものは得体がしれなかった。

なのははこの戦いを見守ってくれている仲間達を見る。

(でも、これは誰かに押し付けられたことじゃない！わたしは考えて、わたしが決めたことなんだ。だから怖くても絶対に逃げない！)

なのはの心には『恐怖』は残っている。

だが、それをも上回る勇気が彼女の身体に宿った。

なのははどう対処するか精一杯頭を回転させることにした。

「フアランクスシフト」

バルディツシュが繰り出す魔法の名称を発すると、フェイトの周りに紫色で雷を纏った光球が数個出現した。

「!!」

なのはの表情が強張った。何かが来ると予感したのだろう。

(もう遅いよ。君は逃げられない)

レイジングハートを構えたなのはの左腕が磁石のように後ろに引つ張られ、縫い付けられるような感覚が襲い掛かってきた。

レイジングハートを握っている右も同じ様な感覚が襲ってきた。

なのはの両腕には金色の輪が押さえつけていた。

今から繰り出す魔法は威力が凄まじいが、発動には時間がかかる。

その間に相手に妨害をされて発動失敗になる可能性は十分すぎるくらいにありえる。

だから、保険をかけてなのはの動きを封じる事にしたのだ。

フェイトはまだそれを繰り出す域には達していないのか、目を閉じていた。

「ライトニングバインド!? まずい！ フェイトは本気だ！」

フェイトが何を始め、そして何を繰り出そうとしているのかを最初に理解したのはアルフだった。

本当は腹の内だけで留めておくつもりだったのだが、つい口に出してしまったというところだろう。

ユーノはそれを聞き、一瞬サポートをしようかと思った。

(サポートすべきなんだけど……)

黙って戦闘を見ている良太郎達を見る。

彼等は誰一人サポートしようとは思っていないだろう。

なのはやフェイトの意思を尊重しているからだ。

(僕がやろうとしている事は、なのはの意思を踏みにじることになる……)

ユーノの覚悟は決まろうとしていた時だ。

(アンター！なのはのサポートをしなくてもいいのかい!? フェイトが今からやろうとしているヤツは本当にヤバイんだよ!?)

アルフはサポートに行かない自分に焦れているのか促そうとしている。

(僕は……、なのはを信じる！なのはの意思の強さを信じる！僕がここで手を貸せば、なのはの意思を侮辱した事になる！)

(アンター……、わかったよ。あたしはもう何も言わないよ……)

ユーノの覚悟を知ったアルフはこれ以上何も言えなかった。

「アルカス・クルタス・エイギアス……」

フェイトの詠唱が始まる。目は開かずひたすら詠唱と発動までの現段階の維持をする事に集中する。

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル……」

詠唱が終盤にまで差し掛かると、閉じていた瞳を開く。

その瞳に映るのはなのはのみ。

無数の金色の光球が肥大化し、紫色の雷を纏っている。

バチバチバチと激しい音がフェイトの耳に入る。

だが、それはそれだけ凄まじい威力を誇るものだという証明でもある。

(これで終わらせる！)

フェイトは右手を天に掲げ、発射態勢に入る。

「フォトンランサー・フアランクスシフト!!」

狙いを定める。外せば自分に勝機はない。

「打ち砕け!!ファイア!!」

無数の雷を纏った光球――(以後：雷球)がフェイトが右手を振り下

ろすと同時に、雷球が放たれた。

「ぐっ」

これだけの雷球を放つには射出者であるフェイトにも相当の負担がかかる。

身体がふらついているのが証拠といってもいい。

雷球はすべてライトニングバインドで拘束されているのはに向かつていく。

爆煙が立ち込め、なのはの姿が見えなくなる。

仕留めたとはフェイトは思わなかった。

仕留めたのならば爆煙から抜けて、海に落下するはずだ。

だが、それが無いということは彼女はまだ健在という事だ。

「はあはあ……はあ……はあはあ……」

(あと一発、この一発で！)

左手を天に掲げてフェイトは自分の周りにある雷球を収束させる。

一発だけだが、十発分以上の威力はありと思われる雷球だ。

外せば終わる。だから、爆煙が晴れて姿が見えたときに放つ。

そこには無傷とまではいかなくとも、それでもまだ戦闘ができる状態でレイジングハートをシューティングモードにしているのはがいた。

「はは……、撃ち終わるとバインドつても解けるんだね……」

なのははレイジングハートをこちらに向けていた。

(あれを、耐え切るなんて……)

左手で収束させている一発でどうにかできるかわからない。

不安はよぎるが、それでも後戻りはできない。

「今度はこっちの番だよ!!」

なのはが力強く叫んだ。

「ディバイン……バスター」

レイジングハートから桜色の光線ともいふべき魔力光が一直線に放たれた。

フェイトは向かってくる光線に対して、左手に掲げている雷球を放り投げる。

「!?」

結果はフェイトの予想を覆すかたちになった。

相殺とまではいかなかったも、威力を弱めるくらいにはなるだろうと思っていたからだ。

フェイトに出来る事は迫り来るデイバインバスターを防ぐか、諦めて直撃するかのどちらかしかない。

(まだ、まだやれる!)

フェイトは左手をかざして、金色の魔法陣を展開させてデイバインバスターを防ぐ。

だが、魔法陣を発動させているフェイトにもその余波が襲い掛かる。

その証拠にバリアジャケットがあちこち破れていく。

(直撃?! 耐え切る!! あの子だって耐えたんだから!!)

そう心に思うことでフェイトは残った力を引き出そうとしていた。

耐え切り、魔法陣を閉じた。

「はあ……はあはあ……」

満身創痍のフェイトがそこにいた。

自分の手の内はほとんど出し尽くした。

策は思いついても身体が動いてくれないのだ。

上から桜色の光が見えた。

巨大な魔法陣を展開し、レイジングハートに魔力を収束させているなのはがいた。

「受けてみて! デイバインバスターのバリエーション!!」

なのはの一言にフェイトは正直青ざめた。

(あれより強力なものが来る!?)

「スターライトブレイカー」

レイジングハートがこれから発動する魔法名を告げる。

散りばめられた桜色の光球が、なのはの前に収束されていく。

それは巨大な光球へとなっていく。

(直撃したら確実に終わる!!)

フェイトは本能的に感じて、その場から離れようとするが、両腕両

脚が動かなかった。

「バインドー！」

自分が仕掛けたことを仕掛けられるとは思わなかった。
逃げようとするが、逃げれない。

こうなってしまうては自分は完全に百発百中直撃するのだ。

「これがわたしの全力全開!!」

なのは高らかに宣言する。

(勝てない。負ける。ごめんね母さん。ごめんねアルフ。ごめんね……良太郎)

フェイトの心に負けの確信と母に対しての謝罪。自分のために行動してくれたアルフ、そして良太郎への謝罪が浮かんだ。

レイジングハートをフェイトに向けて、高らかに放つ。

「スタアアアライトオオブレイカアアアア!!」

デイバインバスターとは比較にならない桜色の光線、いや超巨大な大砲とも呼ぶべき一撃がフェイトに向かっていく。

バインドをかけられて拘束されている自分に与えられた選択肢はひとつしかなかった。

直撃を受けること。

悲鳴をも打ち消す威力だ。フェイトを直撃した余波は海に向かう。
柱ともいえるような飛沫が上がった。

撃ち終えると、レイジングハートが冷却作業が行っていた。

高町なのはとフェイト・テスタロッサの一騎打ちは、なのはの勝利となった。

「フェイトちゃん!」

叫んだのは先程まで戦っていたなのはとギャラリーとなっていた良太郎だった。

気を失っていると思われるフェイトは海へとまっ逆さまに落下していく。

良太郎はデンオウベルトを巻き、ポケットからパスを取り出す。

「ウラタロス！」

これからする事に一番適しているイマジンの名を呼ぶ。

「いい判断だよ。良太郎」

ウラタロスは良太郎の意図がわかっているため彼の判断を賞賛した。

青色のフォームスイッチを押してからパスをターミナルバックルにセタツチする。

「変身！」

海へと飛び込むと同時に、良太郎からプラット電王へ、そしてオーラアマーが出現して青色をメインとした形（ソード電王時に胸部となつている部分が背となり、アックス電王の際に胸部となる部分が開いている状態）となつて装着されて電仮面が頭部を覆われて、ロツド電王となった。

飛び込むと飛沫が上がった。

海中に入ると、その速度はまるで水を得た魚のように速かった。

まるで、足にスクリューでも付いているかのように速かった。

海の底へと向かっているフェイトを見つけた。

（ウラタロス！速度を上げて）

「わかっているって。良太郎」

ロツド電王は冷静に返事すると同時に、泳ぐ速度を上げた。

海底でフェイトを抱きとめると、そのまま海上へと上がっていく。

ロツド電王が顔を出すと、なのはがそこにいた。

彼女も満身創痕という状態だった。

ロツド電王はデンライナー・イスルギを召喚し、レドームが搭載されている部分へと飛び乗る。

「なのはちゃん、乗って。そんなへ口へ口じや見てる方が不安になるよ」

「は、はい。ありがとうございます」

ロツド電王の厚意になのはは甘える事にした。

イスルギからレドームが切り離され、ロツド電王、フェイト、なのはを乗せて海鳴公園へと向かって行った。

「う、ううん」

フェイトの閉じていた瞳が動き出す。

目を開き始めている証拠だ。

フェイトの目が完全に開いた。

「フェイトちゃん、気が付いた？」

「え？うん。あの、わたし……」

「なのはちゃんの超特大の一撃

スターライトブレイカー

を食らって気を失って、海の中にまっ逆さまに落ちてそれを僕達が助けたってわけさ」

抱きかかえているロッド電王がフェイトに事のあらましを説明した。

「そう、なんだ……」

ロッド電王はフェイトがこちらをじつと見ている事が気になった。

「何？フェイトちゃん」

「その姿からして、電王なんだよね……」

「うん、ウラタロスさんが憑いてる状態なんだよ」

なのはがフェイトにロッド電王のことを大まかに説明してくれた。

「あの、フェイトちゃん。その……わたしの勝ち、だよな？」

「……うん。わたしの負け、なんだよね」

フェイトは自身の負けを認めた。

その潔さには声には出さないものの、ロッド電王も感心していた。

「あ、あの……ええと、ウラタロス？良太郎？」

フェイトはロッド電王をどちらで呼んでいいのかわからないので混乱している。

「好きなように呼んでいいよ。僕

ウラタロス

も良太郎も声は出せるしね」

「じゃ、じゃあ良太郎。良太郎、降りしてくれないかな？もう大丈夫だから……」

(わかったよ。フェイトちゃん)

ロッド電王はフェイトを降ろす。

フェイトはレドームに足を着けて、立つ。

「プットアウト」

バルディツシュが頃合を見計らったかのように、声を出してジュエルシールド九個を宙に出現させた。

*

アースラでは今までの戦闘をモニターで見ていたクロノとエイミーはというと。

「よし、なのは。ジュエルシールドを確保して。それから彼女も……」

なのはにジュエルシールドの確保とフェイトの保護を指示しようとしていた時だ。

「いや、来た！」

エイミーが言うようにモニターには上空で何かが起こるような兆しを見せるように、雲が怪しくなっていた。

フェイトに紫色の雷が降り注いでいた。モニターからはわからないが、あくまで『麻痺』を重視した一撃だと推測できる。

ロッド電王はなのはを庇う様な態勢を取っていた。

下手な余波を食らわせるわけにはいかない処置だった。

なのはとロッド電王が、フェイトの名を叫んでいた。

ジュエルシールドがフェイトから離れて、渦を作っている空に向かって移動していき、吸い込まれるようにして消えていった。

「ビンゴ！尻尾掴んだ！」

立っていたエイミーが席に座って、ボードを超速で叩き始める。

「不用意な物質転送が命取りだ！座標は？」

「もう割り出して、送ってるよ！」

クロノの言葉を続けるようにエイミーは即座に返した。

リンディ・ハラウンがエイミーから受け取った座標を見て、次なる命令を下すことにした。

「武装局員！転送ポートから出動！任務はプレシア・テスタロッサの身柄確保です！」

*

「フェイトちゃん、大丈夫!?フェイトちゃん！」

変身を解除した良太郎が先程の一撃でまたもや気を失いかけた

フェイトの状態をうかがう。

「りよ、良太郎……」

「よかった。フェイトちゃん」

良太郎は安心して笑みを浮かべる。

「わたし、それにさっきのつて……」

フェイトは先程、自身を狙った雷を放った者の正体に凡その見当がついているみたいだ。

「今は何も考えない方がいいよ。落ち着くまで、ね？」

「う、うん……」

良太郎はフェイトの頭を撫でてから、立ち上がる。

「九個は結局向こうの手中に、か」

「何か、乗せられた感じやな」

「でも、なのはちゃんのは捕られてないよ」

ウラタロスは九個を回収し損ねた事を残念がり、キンタロスはどこか誰かに上手く利用されたような居心地の悪さを感じ、リュウタロスはなのはが所持する十二個が捕られなかっただけマシだと言った。

「良太郎、イマジンが来るぜ。どうやら、前の雨ん時のヤツだな」

モモタロスの言葉に良太郎を含め、全員の顔が強張った。

全員が見つめる一点に光球が現れ、それは人の形を象っていく。

鳥型のイマジン——ファルコンイマジンだ。

「その白いガキが持っているジュエルシードをよこせ！そうすれば命だけは助けてやる」

自信満々に告げるファルコンイマジン。

自分の強さに絶対的な自信がないと言えない台詞だ。

「悪いけど、そういうわけにはいかない。君はここで倒す。なのはちゃんのジュエルシードは渡さない！」

良太郎の静かなそれでいて怒りが籠った声が響いた。

「俺達にもやらせろよ。良太郎」

指をバキボキと鳴らすモモタロス。

「いい加減、鬱陶しくなってきたんだよね」

ウラタロスは棘のある言葉をぶつける。

「コイツで終わりにしたいもんやな」

キンタロスは親指で首を鳴らしてから腕を組む。

「じゃあ、僕から行くね。答えは聞いてない！」

リュウタロスは宣言すると同時に身体をフリーエネルギー化して良太郎に入り込む。

デンオウベルトを巻きつけ、紫色のフォームスイッチを押してからセタッチする。

「変身！」

「ガンフォーム」

良太郎からプラット電王へとなって、オーラアーマーが宙に出現する。ソード電王時の胸部が展開してドラゴンジエムが露になるアーマーへとなる。

それらが装着されると、頭部からドラゴンを模した電仮面が装着される。

「オマエはみんなでやつつけちゃうけどいいよね？答えは聞いてない！」

ガン電王は宣言と同時に右手に握っているDガンでファルコンイマジンを攻撃に切り替わる前に、撃ちだした。

フリーエネルギーの弾丸が数発直撃し、ファルコンイマジンの歩む速度を遅くする。

「ぐっ……ぐおお……、おのれ！」

ファルコンイマジンはフリーエネルギーで斧を喚び出した。

弾丸を斧で防ぎ、ガン電王と間合いを詰める。

「ありや……」

斧で切りかかってくるファルコンイマジンの攻撃を身体を捻って避けると同時に、Dガンの引き金を絞って撃つ。

「目には目、斧には俺やで！リュウタ、交替や！」

キンタロスがそう言いながら、フリーエネルギー化してガン電王に入り込む。

リュウタロスが追い出されるかたちとなる。

「クマちゃん！まだ早いってば！もう！」

リウウタロスが抗議するが、そんなことはどこ吹く風である。金色のフォームスイッチを押してからパスをセタツチする。

「アックスフォーム」

オーラアーマーが宙に浮き、百八十度回転して、先程まで背部となったオーラアーマーが前となり、前となっていたオーラアーマーが背部となった。

電仮面もドラゴンを模した電仮面ガンから斧と金という文字をモデルにしたと思われる電仮面アックスへと変わって、頭部に装着される。

Dガンからフリーエネルギーの影響でDアックスとなる。

「俺の強さは泣けるで！」

決め台詞を吐きながら、アックス電王がDアックスでファルコンイマジンへと切りかかる。

斧で応戦するファルコンイマジン。

それらを自慢の防御力で受け止めるアックス電王。

Dアックスで袈裟切りを仕掛けるが、斧で防がれる。

斧で胸部を狙われるが、Dアックスで防ぐ。

互いにダメージを与える事ができない状態が続く。

斧同士のぶつかり合いとなった。そうになると、性能がよい方が勝つことになる。

Dアックスがファルコイマジンの斧の刃に食い込んでいく。

「うおりゃあああああ」

アックス電王が斧を切り裂き、ファルコンイマジンの胸部にダメージを与える事に成功した。

「くっ……ば、馬鹿な俺がこんな変な連中に……」

ファルコンイマジンは後ろへ下がりがりながら間合いをあげようとしていた。

手には斧ではなく、フリーエネルギーで構成された杖を喚び出した。

「適材適所、だよ？キンちゃん。交替！」

ウラタロスがアックス電王の側まで寄って、フリーエネルギー化し

てくるくるとバレエダンサーのように回りながら入り込んだ。

青色のフォームスイッチを押してからパスをセタツチする。

「ロッドフォーム」

デンオウベルトが発すると、オーラアーマーが宙に浮き、一周回ってから胸部となっていたアーマーが展開して、装着されて電仮面アックスから海亀をモデルにした電仮面ロッドが装着され、Dアックスもフリーエネルギーの影響でDロッドとなった。

「オマエ、僕に釣られてみる?」

ロッド電王がDロッドを突きつけて突進していった。

「よくもまあ、あんなに変わるもんだね」

電王とファルコンイマジンの戦闘をギャラリイというかたちで見られるようになったアルフはあまりに様々に変わる電王に驚きと感心が混じりのコメントが出た。

「でも、形態によって完全に戦闘方法が変わってるからね。あれじゃ相手にしてみれば最悪の相手だよ」

ユーノは冷静に電王の戦闘方法を見て感心し、自分は絶対に敵に回したくないと思った。

「どうして? ユーノ君」

なのはが訊ねてきた。

「なのは、フェイトがもし電王と同じ様な戦い方をしてきたら勝てる?」

ユーノはなのはに理解しやすいようにフェイトでたとえた。

「無理! 絶対無理! 勝てないよ」

座っていたフェイトが立ち上がり、アルフやユーノ、なのはがいる場所まで歩み寄る。

「フェイト、大丈夫なのかい?」

「歩くぐらいなら大丈夫だよ。それよりも良太郎達の戦いを見ておきたいんだ」

アルフの心配を受け止めながら、フェイトはその場で座る。

ロッド電王がDロッドでファルコンイマジンを突いたり、叩きつけたりしていた。

「同じ得物って性能でモノをいうんだけど、僕の場合って破壊するのって結構難しいんだよね」

ロッド電王はファルコンイマジンの横薙ぎの棒攻撃をしゃがんで避けながら愚痴っていた。

しゃがみから立ち上がる最中にDロッドで突く。

しかし、棒で防がれる。

(なるほど、この手があったか)

Dロッドを薙ぎや叩きつけをやめて、ひたすら突きで攻撃する。

棒の同じ部分を。

「無駄無駄あ。そんなんじゃ破壊できないぜ」

「どうかな?」

ロッド電王が含み笑いを浮かべながらひたすら棒を突く。

やはり、最初に防がれた部分をだ。

胸部を狙っての突きだけでは意図が読まれるので、頭を狙ったりする。

そして、それらはすべて棒で防がれる。

「そろそろ、終わり!」

ロッド電王の最後の1突きがファルコンイマジンの棒を破壊することに成功した。

突いたDロッドを肩にかけるロッド電王。

「おし!俺の番だぜ!カメ、交替だ!」

「はいはい。センパイ」

ロッド電王は了承し、モモタロスが走りながらフリーエネルギー化して、入り込む。

赤色のフォームスイッチを押して、パスをセタッチする。

「ソードフォーム」

オーラアーマーが外れて展開していた部分が閉じ、百八十度反転する。

赤色の胸部と肩部のオーラアーマーで、桃をモデルとした電仮面が装着された。

「俺、別世界でも参上!!」

左手を前にかざして歌舞伎のようなポーズを取る。

DロッドからDソードへと切り替わり、握り締め、全力で走り出して間合いを詰めてファルコンイマジンの胸部を左袈裟、右袈裟、そして右から左へ横一文字に斬りつける。

斬りつけるたびにファルコンイマジンからは火花が飛び散る。

火花を飛び散らしながらも後ろに徐々に下がっていくファルコンイマジン。

「へっ、どうした？デカイ口たたいた割には大したことねえな？」

Dソードを肩にもたれさせながらソード電王は挑発と嫌味を込めた台詞をぶつけるが、ファルコンイマジンはそれに応じるだけの余力が残っていないようだ。

「良太郎！最後はバシッと決めろよ！」

ソード電王が言うと、モモタロスが抜けてプラット電王に戻る。

「うん！わかった」

「オメエら！行くぜ！とお!!」

「二とおつ!!」

良太郎が了承すると、モモタロスを筆頭にウラタロス、キンタロス、リュウタロスも球体となって何処かへと飛んでいった。

ソード電王の一言はギャラリーにざわめきを生んだ。

「良太郎さんが最後を決める？」

「でも、変身してるのは良太郎さんだよ？」

なのはとユーノは顔を見合わせているが、ソード電王の言葉の意味がわからないままだった。

「今までだって良太郎が戦ってたじゃないか？何であんな事言ったんだい？アイツ……」

アルフも同様にわからないようだ。

「それは違うよ。電王は良太郎の身体に入り込んだイマジンが戦っているんだ。良太郎が表立って戦った事はないよ」

イマジンが憑いている良太郎見分ける事ができるフェイトだからこそ言える台詞だろう。

三人（正確には一人と二匹）の視線がフェイトに集まる。

「な、なに？」

「いや、フェイト。アンタよく見てるんだなあと思つてさ。電王、いや良太郎のことを、かな」

アルフの一言にフェイトは何故かわからないが恥ずかしさを感じて頬を赤く染めていた。

プラット電王はケータロスを取り出してターミナルバックルにセットする。

その直後、金色のオーラでできた線路（以後・オーラレール）がケータロスから出現する。

空間が歪み始め、オーラレールはそこに向かって続いている。

オーラレールに滑るようなかたちで何かがプラット電王に向かってくる。

プラット電王はそれを右手で受け止める。

Dソードよりも明らかに肉厚のある刃先を持った剣だった。

そして、それぞれの電王を現していると思われる電仮面が四つ付いていた。

デンカメンソードである。

プラット電王はパスを取り出して、デンカメンソードの峰部分にあるパススロットルにパスを差し込んだ。

「ライナーフォーム」

デンカメンソードが電子音声で発すると、今までにないくらいのエネルギーが噴出した。

その場にいる誰もを吹き飛ばすような凄まじいエネルギーだ。

「ぐおあああああ」

とファルコンイマジンが吹き飛ばされる声が聞こえた。

「みんな、僕に集まってー！」

ユーノが吹き飛ばされないように結界を張る声も聞こえた。

ミュージックホーンが流れた。空間の歪みから線路を敷きながらデンライナーがプラット電王に向かって走ってくるのだ。

「よ、避けてー！良太郎！撥ねられちゃうよー！」

フェイトが叫ぶが、動く気はない。というより、動く必要がないの

だ。

「きやあああああ!!」

「撥ねられる!」

「良太郎!!」

なのは、ユーノ、アルフも悲鳴に近い声を上げる。ある意味、当然の反応だろう。

「大丈夫。僕は撥ねられたりしないよ」

プラット電王は四人（正確には二人と二匹）を安心させるために穏やかに言う。

デンライナーによってプラット電王は撥ねられ……なかった。

それどころかデンライナーはプラット電王との距離がゼロになると、半透明の状態（以後：オーラライナー）となってプラット電王を透過していく。

その中でプラット電王はデンオウベルトが輝きだし、オーラアーマーが装着されていく。

全体が黒色と銀色だったが赤色、黒色、白色の三色が入りだす。

装着されたオーラアーマーは今までのオーラアーマーと違い、全体に丸みがあつて今までのような一色ではなく、赤、白、黒、胸部には金色が入っていた。

頭部もデンライナーを模した電仮面が装着されている。

今までの電王とは全体的に違う電王といってもいいのかもしれないというくらい一線を画していた。

仮面ライダー電王ライナーフォーム（以後：ライナー電王）の完成である。

ライナー電王がフェイト達に顔を向ける。

「みんな、もう少しだけ待って。すぐに終わらせるから」

そう言うと、ライナー電王はファルコンイマジンに向かって歩き出す。

「みんな、行くよ」

ライナー電王の一言にデンカメンソードから「おう、いつでもいいぜ」とモモタロスが言うとその後に、

全員で「良太郎!」という声が聞こえた気がした。
「あれが、良太郎の電王……」
フェイトはただライナー電王の勝利を祈るだけだった。

第三十七話 「真実を語る者 それは母」

ライナー電王は移動手段を『歩き』から『走る』ことに切り替えて、ファルコンイマジンとの間合いを詰め始めた。

戦いを長期戦ではなく、短期決戦で終わらせる意図が取れる行動だ。

デンカメンソードを両手で持っていたが、今は右手だけで持っている。

Dソードよりは重たいが、移動の際にはこちらの方がいい。

『良太郎。野郎、剣を構えているぜ』

デンカメンソードからモモタロスの声が聞こえる。これは刀身側に位置するターンテーブルの電板面が『モモソード』になっているからである。

ライナー電王はファルコンイマジンを見ると先程まで手ぶらだったのに、右手には長剣が握られていた。

(見てくれからして、デンカメンソードよりは軽い、かな)

ライナー電王は相手の得物が自分の得物より軽量だと判断すると、短期決戦で決めるためには何が得策かを考え、行動に移すことにした。

「モモタロス！このままで行くよ」

『おうー』

デンカメンソードを振りかぶると同時に、フリーとなっていた左手でも握る。

片手で振り下ろすより、斬撃の威力は増す。

「てやああああああ」

右足を地に着けて踏ん張り、左足で支えてファルコンイマジンの左袈裟を狙って両手で握られたデンカメンソードを振り下ろす。

「がああああああ」

ファルコンイマジンから火花が飛び散り、よろよろと後方へと退がる。

斬られた箇所をフリーとなつている左手で押さえながらも、こちら

を睨んでいる。

「あれだけやられているのに、まだ戦えるなんて……」

『しつこい野郎だぜ』

ライナー電王とデンカメンソード（モモタロス）がファルコンイマジンに対する感想を述べる。

「当たり前だ！お前達のせいで、誰一人としてイマジンの本懐を達成していないんだぞ!!こんな事が許されてたまるか!」

自分のしている事に『プライド』でもあるような言い方だった。

「それが僕達のやる事だからね」

ライナー電王は時の運行を守ることを『やる事』と言って『仕事』とは言わなかった。

『仕事』と呼ぶには抵抗がある。何せ、給料貰ってないからだ。

もし、『仕事』と呼ぶならば自分のしている事は警察官、消防士、弁護士、検察官、医者といった部類に入るだろうと考えている。

どれも失敗が許されず、失敗すればそれだけで人生が変わってしまうものばかりだ。

ファルコンイマジンは長剣を構えてライナー電王に斬りかかる。

「くっ!」

火花が飛び散るが、それはライナー電王から噴き出たものではない。

ファルコンイマジンの長剣とデンカメンソードのターンテーブル部分がぶつかった際に生じたものだ。

「あの女と契約を交わしたイマジンは俺で最後になった。俺まで本懐を遂げずに負けたとなったら、イマジンの面汚しになってしまう!」

鏢迫り合い状態の中、ファルコンイマジンは切羽詰った声でライナー電王に本音じみた事を言う。

『んな事、俺達が知るか!!』

モモタロスの声と同時に、ライナー電王がデンカメンソードを前へ押し出して鏢迫り合い状態を解き放つ。

「君で最後って事は、君を倒せばイマジンからジュエルソード狙われる心配はなくなるんだね」

それがわかると、ライナー電王はデンカメンソードのターンテーブルの下に付いている吊革上のレバー——デルタレバーを引く。

「ウラロッド、キンアックス、リユウガン、モモソード……」

『き、来たああー!』『ちよ、ちよつと良太郎!』『アカン!何か掴め!』『回るー!』

ターンテーブルはデンライナーの食堂車に設置されている回転椅子と連動しているため、現在回転椅子に座っているイマジン達はいきなり高回転しだした事に、驚いているのも無理はない。

ターンテーブルを一周以上、回転させてからデルタレバーを押し込む。

ターンテーブルから緑色の十字の模様が浮かんで光りだす。

デンカメンソードの切先からオーラレールが出現して、地面から五センチほど宙に浮いて敷設される。

ライナー電王は飛び乗ってそのまま、流されるようにファルコンイマジンに向かっていく。

その最中、ライナー電王を中心に右斜め上に半透明のイカズチ（以後：オーライカズチ）、右斜め下に半透明のレッコウ（以後：オーラレッコウ）、左斜め上にオーラライナー、左斜め下に半透明のイスルギ（以後：オーライスルギ）が象られて一直線に進んでいく。

デンカメンソードを構える。

一発で仕留めるように全身に神経を研ぎ澄ませて。

「電車斬り!!でやあああああ」

ライナー電王が技名を叫ぶと同時にデンカメンソードで横一文字に斬り裂く。

「ぐわあああああ」

ファルコンイマジンの最期の叫びがなくなると爆煙が立ち、オーラレールに滑るようにデンカメンソードを構えたライナー電王が抜け出てきた。

オーラレールもオーラライナーも消え、ライナー電王はフェイト・テスタロッサ達がいる方向へ身体を向けて、駆け寄った。

「ん?どうしたの?みんな」

コハナを除くフェイト、アルフ、高町なのは、ユーノ・スクライアはライナー電王を見ていた。

「……本当に良太郎なんだね？」

「うん、そうだよ」

フェイトが訊ね、ライナー電王は即答した。

「あ、あの良太郎さん」

「さっきの、電車斬りって……」

「え？ 僕の、必殺技だけど」

ライナー電王の回答になのはとユーノは顔を見合わせて複雑な顔をしていた。

（あ、やっぱりセンスないのかな。この名前……）

ライナー電王は真剣に自身の技名を改名しようかと考えた。

*

次元航行艦アースラのメインモニターには『時の庭園』が映し出されれていた。

上手くいけば『プレシア・テスタロッサの捕縛』が映し出される予定だ。

イマジン達とコハナは食堂にあるモニターで見ている。

メインモニターで見ているのはアースラスタッフを除くと良太郎、なのは、ユーノ（人間）、アルフ（人型）、そして白装束で手には手錠のようなものがかけられているフェイトだった。

良太郎はフェイトに手錠をかけるのは反対で異議を申し立てたのだが、フェイトがかかるように申し出たのだ。

どんな理由にしろ自分は罪を犯したというフェイトなりのけじめかもしれない。

「第二小隊、転送完了」

「第一小隊、侵入開始」

男性オペレーターが報告を続ける。

リンディ・ハラオウンが良太郎達に歩み寄ってきた。

「お疲れ様。それから……フェイトさん。初めまして」

リンディが笑顔で応対するが、フェイトは破損したアクセサリー状

態のバルディツシユを握り締めて、黙っていた。

これから母親が捕縛される様を見るかもしれないのだ。呑気に挨拶交わす気にはなれないだろう。

(母親が逮捕される姿を見せるのは忍びないわ。なのはさん、彼女をどこか別の部屋へ)

リンディは念話の回線を開き、なのはに指示する。

(は、はい)

「フェイトちゃん、よかつたら、わたしの部屋へ……」

なのはは了承し、フェイトに私室に行くように誘う。

だが、それよりも早く事態は進んでいたようだ。

『総員！玉座の間に侵入！』

モニターから映し出される映像には『時の庭園』の玉座の間が映し出されていた。

『目標発見！』

男性武装局員の一人が報告するように告げた。

彼の告げた目標とは玉座の間にある玉座で優雅というか威厳というか余裕を持つて座っているプレシア・テストアロツサだった。

『プレシア・テストアロツサ！時空管理局法違反及び管理局管制の攻撃で貴女を逮捕します！』

プレシアは余裕の表情だった。

『武装を解除してこちらへ』

武装局員はこちらに来るように促すが、プレシアは動く素振りすらない。

『フンッ』

嘲笑する始末だ。

応じないと判断したのか武装局員達はプレシアを包囲するようにフォーメーションを組んだ。

それでもプレシアは動じない。

だが、局員数名が『ある部屋』に向かった時に、目つきが変わったことを武装局員はおろかモニターで見ている者達は誰一人として気づいていない。

モニターには局員数名が目当たりにした妙な部屋が映っていた。玉座の間とは対照的にどこか生物的な雰囲気があった。無数に並んでいるカプセルには植物のツタのようなものが縦横無尽に巻かれているのだ。

そして、その部屋の中央にはカプセルがあった。

その中身を見たとき、モニターで見ている者達は驚いた。

そこにはフェイトと瓜二つの少女が全裸で納められていたのだ。

(アリシアちゃん……。こんな姿になってたんだ)

良太郎はその少女の名を心の中で呼んだ。

「あのガキ、あんな姿になってたのかよ……」

食堂のモニターにも映像が映し出され、モモタロスは手に握っていた紙コップを握りつぶしていた。

「センパイ……」

「モモの字……」

「モモタロス……」

「モモ……」

この中でモニターに映っているカプセルの中の少女と直に対面した事があるのはモモタロスだけだ。

モモタロスは少女の別れ際の笑顔を思い出してしまう。

「クソつたれが!!」

机をドンと激しく叩くが、誰も彼を責めたりはしなかった。

*

プレシアは瞬間移動でもしたのか、その部屋の少女が入っているカプセルの前に現れ、武装局員を数人ぶっ飛ばしていた。

「私のアリシアに近寄らないで!」

その目つきはとても鋭く、人一人殺害する事に何のためらいも見せないような瞳をしていた。

武装局員達がデバイスを構えていた。

(無駄な事を……)

武装局員達は一齐に魔法射撃をする。

「……五月蠅いわね」

プレシアは静かに告げ、左手をかざす。

その直後に『時の庭園』全体から紫色の雷が降りた。

同時に武装局員達の悲鳴が『時の庭園』内で響いた。

(無駄な魔力を消費させて……)

身体を蝕んでいるものが襲い掛かってきたが、表情には出さなかった。

医者に診せたら間違いなく、「絶対安静」と言われるだろう。

自分の命が残り少ないという事はわかっている。

なまじ、頭の切れがいいとこういう時にどういう行動を取ることが『後悔のない人生』になるかもわかっている。

アリシアが入っているカプセルに触れる。

「……最後の仕上げといくわよ。アリシア、貴女を利用する私を許して」

プレシアは最期の大芝居を演じる事にした。

*

「アリ……シア……？」

フェイトはモニターに映っている少女の名を呟いていた。

良太郎はこれから起こすプレシアの行動を見逃す気がないのか、目つきが鋭くなっていた。

モニターに映るプレシアが独り言のように語り始める。

『もう、ダメね。時間がないわ。たった九個のジュエルシードではアルハザードにたどり着けるかどうかはわからないけど……』

モニターに映っている事がわかっているのか、目をこちらに向けていた。

『でも、もういいわ。終わりにする。アリシアを亡くしてからの暗鬱の時間を……』

プレシアの一言はフェイトやアルフが過ごした時間を否定する言葉だった。

『身代わりの人形を娘扱いするのも……』

プレシアはカプセルに身体を預けてずると滑り落ちる。

「!？」

なのはとフェイトの瞳が大きく開いた。

『聞いていて。貴女のことよ。フェイト』

プレシアはフェイトを逃げないように名を呼ぶことで金縛り状態にした。

『折角、アリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ。役立たずでちつとも使えない私のお人形』

メインモニタールームにいる誰もが口を開くが声を発する事ができないほどの衝撃だった。

別室ではプレシアが告げる内容を知っているエイミー・リミエツタは正視できず、クロノ・ハラオウンはモニターを正視してはいるが、苦しみに満ちた表情をしていた。

『最初の事故の時、プレシアは実の娘アリシア・テスタロッサを亡くしているの。彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる、使い魔を超える人造生命の生成』

エイミーの言った言葉が本当ならばプレシアの最後の研究で生み出されたのが誰なのかをメインモニターを見ていたなのは、ユーノ、アルフは悟った。

そして良くない事ではあるが、つついその人物を見てしまう。

そう、フェイトを。

エイミーのアナウンスは続く。

『……そして、死者蘇生の秘術。フェイトって名前は当時、彼女の研究でつけられた開発コードなの』

(そうだったのか……)

良太郎はフェイトがクローンである事は知っているが、『フェイト』の名の由来までは知らなかった。

この事から、当初はプレシアがフェイトを受け入れようとしなかったことが伺える。

だが、今のプレシアは違うことも良太郎は知っている。

『よく調べたわね。そうよその通り』

プレシアは滑り落ちた態勢からもう一度立ち上がり、カプセルに触れる。

『だけど、ダメね。ちっとも上手くいかなかった。作り物の命は所詮作り物。失った者の代わりにはならないわ』

静かではあるが、刃のような一言がモニターを見ている全員に突き刺さる。

プレシアはフェイトがいる方向に視線を向けてくる。絶対に逃がさないように。

『アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々ワガママも言ったけど、私の言う事をもっとよく聞いてくれた……』

「……やめて」

なのはが前に出て、モニター漉しに映るプレシアに懇願の気持ちを込めて言う。

『アリシアはいつでも私に優しくかった』

なのはの言葉はプレシアには届かず、独白が続く。カプセルを撫でてからフェイトに視線を向けた。

とても冷たい瞳を。

『フェイト、やっぱり貴女はアリシアの偽者。せつかくあげたアリシアの記憶も貴女じゃダメだった』

「やめて、やめてよー！」

なのはが諫言するが、プレシアには届かない。

『アリシアを蘇らせるまでの間に、慰みに使うためのお人形。だから貴女はもういらないわ。どこへなりと消えなさい!!』

今まで正面を見せていなかったプレシアが正面を向いた。

「お願い！もうやめて!!」

なのはがフェイトをかばうようにして前に出てプレシアに懇願する。

『ふふふふ、はははははははははは』

右手を頭に当ててプレシアは狂ったような高笑いをする。

フェイトの瞳に涙が浮かび上がっている。

一言も発しない。いや、発する気さえなくなっているのだ。

『いい事を教えてあげるわ。フェイト。貴女を造りだしてからずっとね、私は貴女が大嫌いだったのよ！貴女の力なんて全く期待していな

かったから私はイマジンとも契約していたのよ!』

何かが床に落ちる音がした。

アクセサリー状態の破損したバルディッシュだった。

フェイトの身体に全身の力が抜けてその場に崩れ落ちた。

「フェイトちゃんー!」

「フェイト……」

なのはとユーノが駆け寄るが、何て声をかけたらいいかわからないようだ。

「僕が運ぶよ」

良太郎が放心状態のフェイトを抱きかかえた。

そして、モニターに映るプレシアを見る。

モニターのプレシアも良太郎を見ていた。

良太郎はモニターに背を向けて、部屋を出た。

廊下を歩きながら、良太郎は抱きかかえている放心状態のフェイトを見る。

(プレシアさんの思惑はこれで遂げたんだ……)

「こうなるってわかってても……」

良太郎はフェイトを抱き寄せる。

「……辛いし、苦しいよ。ここが『過去』でこの出来事も全て『起きた事』だってわかっててもね……」

『時の運行を守る者』としての野上良太郎ではなく、『フェイト・テスタロッサの仲間』としての野上良太郎の言葉だった。

コハナが使っていた部屋が近かったので、そこに入る。

「僕は信じる。フェイトちゃん、君が必ず立ち上がるって事を……。この現実を受け止めて前へ進むって事を……。でない……」

静かにベッドに寝かせる。

「プレシアさんが全てを賭けてした事が無駄になってしまうから……」

良太郎は近場にある椅子に座ってフェイトの手を握った。

それは自分の力をフェイトに注ぐようにも見えた。

*

『時の庭園』では鎧騎士を模したような傀儡兵が地面からよきによきと出現していた。

数で言えば百以上。

「これで、これで全て終わったわ。後は私がフェイトの前から姿を消すだけ、ね」

プレシアの隣にはアリシアの入ったカプセルが浮揚している。

ジュエルシードを九個、自分の前に出現させる。

(どこでもいいわ。フェイトの未来を守るならどこだって……。アリシア、貴女と同じ場所にはいけそうにないわね)

フェイトのためとはいえ、これだけのことをしでかしたのだ。

アリシアのいる天国にはいけないだろう。

自虐的な笑みを浮かべて、プレシアはジュエルシードを発動した。

第三十八話 「決戦！時の庭園 最高の仲間達」

次元航行艦アースラでは『時の庭園』を中心に引き起こそうとする現象に対して対策が急ピッチで行われていた。

「次元震発生！震度、徐々に増加しています！」

「この速度で震度が増加していくと次元断層の発生予測値まで後十分たらずです！」

オペレーター達の報告も忙しないことこのうえない。

ハッキリ言えばこの場にいる中で高町なのは、ユーノ・スクライア、アルフは完全に蚊帳の外状態だ。

メインモニタールーム
ここ

にいてできることは何一つない。

先程フェイト・テストロツサを抱きかかえて退室した野上良太郎の後を追うくらいしかできない。

そうとわかると三人は部屋を出た。

『あの庭園の駆動炉もジュエルシードと同系のロストログアです！それを暴走覚悟で発動させて足りない出力を補っているんです！』

「始めから片道の予定なのね……」

プレシア・テストロツサの無謀な決断にリンディ・ハラオウンは背筋に嫌な汗が流れた感じがした。

フェイトの容態が気になるため、なのは、ユーノ、アルフは廊下で良太郎に遭遇した。

「良太郎さん！」

「なのはちゃん、ユーノ、アルフさん」

良太郎はなのはに声をかけられ、顔を三人のいる方向に向けた。

「良太郎、フェイトの容態はどうなんだい!？」

アルフはフェイトの容態を尋ねてきた。

良太郎は首を横に振る。

「身体よりも心のダメージが大きいからね……。後は本人の意思次第になるね……」

その一言でなのはとユーノは何も言えなくなる。

自分達ではどうしようもないのだと理解したのだろう。

右手に黒い杖を持っているクロノ・ハラオウンがこちらに向かって走ってきた。

正確には転送ポートに向かっていている途中というのが正しいのだろうが。

「クロノ君、どこへ？」

「現地に向かう。元凶を叩かないと」

なのはの質問にクロノは即答した。

「良太郎！」

モモタロスを筆頭にしてイマジン四体もこちらに向かってきた。

食堂で大人しくできるような状況ではないと察したのだろう。

「みんな……」

「フェイトちゃんの容態はどうなんだい？良太郎」

「やっぱ悪いんか？」

「良太郎、大丈夫だよね？」

ウラタロス、キンタロス、リュウタロスがフェイトの容態を訊ねてくる。

「正直わからないよ。フェイトちゃんの意味次第だからね……」

なのは達に答えた時と大して変わらない台詞で良太郎は答える。

「で、これから何しようってんだ？オマエ等」

モモタロスがなのは達を見て何をしようとしているのか訊ねる。

「クロノ君はこれから現地に向かうって言ってます。わたしも行きま
す」

「僕もです。アルフは良太郎さんと一緒にフェイトの側にいてあげて
ほしいんだ」

なのはとユーノは自分達も『時の庭園』に向かうと断言し、アルフ
には生ける屍になりつつあるフェイトの側に良太郎がいるように示
唆する。

「なのはちゃんとフェレット君が行くなら僕も行く！」

リュウタロスは乗り気なのか拳手をした。ちなみに、人間状態の

ユーノでも呼び方は変わらないようだ。

「子供だけで危険な事はさせられへん。俺も行くで！」

キンタロスも保護者か引率者のようなコメントを出して挙手する。「本命を釣るにも障害物や罫はありそうだね。だったら僕の出番でしょ？」

ウラタロスが頭脳労働は自分の専売特許だといわんばかりなことを言いながら、参加を表明する。

「わかった。行きたい者はこれから転送ポートに向かう。着いてきてくれ」

クロノが先導し、なのは、ユーノ、ウラタロス、キンタロス、リュウタロスは転送ポートへと向かうように足を進める。

「ん？センパイ、どうしたのさ？今からセンパイの大好きなイベントが始まるのに……」

ウラタロスが参加表明もせず黙っているモモタロスの態度に訝しげな表情をして訊ねる。

「オメエ等、先行つてろ。俺は良太郎に付き合うぜ」

モモタロスはそう答えると、壁に背を預けて腕組をしていた。

三体はモモタロスの態度を見て、どんな言葉を言っても動きそうにないと察した。

「わかったよ。そのかわり、オイシイところがなくなっても怒らないですよ。」

ウラタロスは軽く手を振ってから歩き出す。

「モモの字、そないなつても恨みっこなしやで？」

キンタロスは親指で首を鳴らしてから歩き出した。

「良太郎にワンちゃん、先に行ってるね。あ、モモタロスは別に来なくていいからね」

リュウタロスはモモタロスに対していつもの口調を崩さない。

「そういうえば、ハナさんは？」

現地直行組及び待機組のどちらにもコハナの姿はない。

「アイツ、何か忘れ物取りにいったらしいぜ」

「忘れ物？」

良太郎にはそれが何かを理解するにはしばし時間が必要だった。

*

『時の庭園』に先に向かって返り討ちに遭ったぶ武装局員達は全員、エイミー・リミエツタを筆頭にアースラ裏方組の機転によって全員アースラに転送されていた。

つまり、今この『時の庭園』でプレシア・テスタロッツサに戦いを挑もうこの地に足を踏み込んだのは、なのは、ユーノ、クロノ、ウラタロス、キンタロス、リュウタロスの計六人（正確には三人と三体）である。

そして、彼女達の前には当然のように行く手を阻む傀儡兵がわんさかといる。

ウラタロス、キンタロス、リュウタロスも自前の武器を手にして、構えている。

「……いっぱいいるね」

「まだ入り口だ。中にはもつといるよ」

ユーノが眼前の敵の数に率直の感想を述べるが、クロノは庭園内に入ると、入り口の何倍もいると警告する。

「ここにいる奴等、みーんなやつつけてもいいんだよね？」

リュウタロスはリュウボルバーを傀儡兵に銃口を構えている。後には引き金を絞ればそれだけで弾丸が銃口から飛び出すだろう。

「それでいいの？クロノ君」

なのははクロノに確認するように訊ねる。

「近くの相手を攻撃するだけのただの機械だよ」

クロノの一言でなのは、ウラタロス、キンタロスは身体から余計な力が抜けた。

「そっか……」

「あの鎧、誰か着てるとかだつたら厄介だもんね。僕達基本的に『殺し』はしないからね」

「俺等が確実に葬るんはイマジンと時間を悪用しようとする奴だけやからな。目の前の奴等が人間やったらちよつとやばかったで」

「貴方達にもポリシーのようなものがあつたのは意外だな」

クロノはイマジン達が口々に漏らす内容があまりに意外だったため、本音を言ってしまった。

「ねえ、なのはちゃん。ぼりしーって何？」

リュウタロスはなのはにポリシーの意味を訊ねる。

「自分が決めた決まり事とか自分が決めた信条。もしくは信念みたいなもの、かな」

なのはが解説する前に、ユーノがわかりやすく砕いて説明してくれた。

「ふーん」

リュウタロスが納得したようだ。

全員が構えて戦闘態勢に入ろうとするが、クロノが右腕を出して、『停まれ』というような合図を取る。

「この程度の奴等に無駄弾は必要ないよ」

「黒いのがやつつけちゃうの？」

リュウタロスがクロノに訊ねる。

クロノはリュウタロスに口で答えるより早く行動で示す事にした。

杖——S2Uを天に掲げると同時に、事前に練りこんでいた青色の魔力球をS2Uの先端に向けて投げる。

「ステインガースナイプ」

と発すると同時に、傀儡兵達が攻撃態勢をとってクロノに向かっていく。

クロノはS2Uを刀剣を扱うようにして、薙ぐようにして振る。

先端から三日月型の魔力光が飛び出し、向かってくる傀儡兵を四体ほどを一撃で破壊しながら宙に青色の魔力光で渦巻きを作る。

「は、速い！」

「無駄なく的確に葬る、か。やるねえ。クロノ」

「執務官は伊達やないって事か」

「黒いのだけずるーい!!」

なのは、ウラタロス、キンタロスはクロノの実力に驚き、リュウタロスは不満をこぼしていた。

「スナイプショット!!」

クロノはS2Uを今度は振らずに杖らしく、相手に掲げる構えを取る。

先ほど宙に作った渦巻きが一筋の矢のようになって、傀儡兵の腹部を次々と貫いていく。

ある程度の数を貫くと、宙で渦巻きを作って狙いを定めて矢のように飛んでいく。

爆煙が立つと同時に傀儡兵の残骸がまるで獣が意地汚く食べた後のような状態で転がっていく。

入り口にいる傀儡兵はクロノが殆ど倒した事になる。

最後の入り口を塞いでいる一体だけが残った。

青色の矢はその一体にも向かっていく。

だが、その一体は貫く前に消えていた。

クロノはそれも予測どおりだったのか、傀儡兵との間合いを詰めるために宙にいた。

「はあああああああー！」

傀儡兵の前に着地すると、傀儡兵が手にしていた重斧をクロノ目掛けて振り下ろす。

高く跳躍して、傀儡兵の頭部に乗っかりS2Uの先端を当てる。

「ブレイクインパルス」

S2Uの青光が頭部から輝きだす。

一時的に柱のようなものが発生したが、消える。

消えたと同時に、傀儡兵はまるで内部から破壊されたかのように粉々になった。

クロノは地に足を着けると、後ろで半ばギャラリー化している面々に顔を向ける。

「ポーっとしてないで行くよー！」

我に返ってクロノの後を追う、なのはとユーノ。そして……

「クロノが言う台詞じゃないよね。アレ」

「カメの字。細かい事考えたらハゲるで」

「カメちゃん。つるつるりーん！」

自分からスタンドプレーを見せておいて、「ポーっとするな！」はな

いだろうとツツコむウラタロス。

そんなウラタロスに細かい事は考えるなど注意するキンタロス。自分の手を頭上にかざして円を描いて「つるつる頭」をジェスチャーするリユウタロスも三人の後を追った。

庭園内に入ると床があちこち食い散らかされたかのように穴が開いており、下が見える。

なのははちらりと左目でその穴を見る。

正直、あまり直視したくない衝動に駆られるものがあつた。

「落ちたらヤバげじゃない？この穴。キンちゃん、勢い余つて床壊さないですよ？」

ウラタロスもなのはと同様にこの穴に対して得体の知れない恐怖のようなものを感じたのか馬鹿力で床に穴を開けかねないキンタロスに警告する。

「わかつとるがな。温泉のときといい、何気にしつこいで」

キンタロスはウラタロスの警告を素直に受け入れるが、姑か小姑のようにしつこく同じ事を言われて少々うんざりしていた。

「クマちゃん、寝たら忘れそうだもん。モモタロスと一緒に！」

リユウタロスがキンタロスは寝たら必ず忘れるだろうと言う。しかも、習性は何気にモモタロスと同じだとまで。

「リユウタ。それはひどいで」

モモタロスと同レベル扱いというのはキンタロスにとっては人生最大の屈辱でしかない。

「貴方達はどこにいても緊張感というものは無縁のようだな」

「あと、気になつているようだから言いますけど、黒い空間がある場所には気をつけてください。虚数空間と呼ばれている穴で、あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんです」

クロノがイマジン三体のやり取りに呆れ、ユーノがなのはとイマジン達に下にある穴の黒い部分について説明した。

「飛行魔法もブリートされる！もしも落ちたら重力の底まで落下する。二度と上がってこれないよ！」

クロノはユーノを除く同行者達に注意を促す。

「うん！気をつける！」

なのはは素直に聞き入れた。

「あらゆる魔法が発動不可になるってことはさ。それ魔導師限定だよね？」

ウラタロスが前方にいるユーノに訊ねる。

「ユノ助。俺等はどうなるんや？」

「キンタロスさん、つまりイマジンですか？」

「そうそう。で、どうなの？フェレット君」

リュウタロスも自身のことなのかユーノに訊ねる。

「正直言いますと、虚数空間にイマジンが落下した場合に関しては前例はありませんからね。虚数空間についてだって先駆者が研究に研究を重ねて立証したものが、手っ取り早く魔導師を一人その中に落とすという結果になったかで今ののように伝えられていますからね」

「貴方達のうち、誰かが仮に落ちればそれだけで後学になるだろうな」

クロノが真顔でとんでもない事を言う。

「クロノ、それセンパイの前では言わないでね。君絶対殴られるから」

「モモの字は冗談通じんからなあ」

「いーじゃん。殴られとけば」

クロノの言った事が一種の『からかい』だと理解しているウラタロスとキンタロスは大人な対応を取れるが、元々クロノに対して好印象を持っていないリュウタロスは真に受けていた。

クロノがドアを蹴破る。ドアは特にぶっ飛んだりしなかった。

そこには入口よりも遥かに多い数の傀儡兵が待ち構えていた。

上に向かうための階段がある。

「ここから二手に分かれる！君達は最上階にある駆動炉の封印を！」

クロノはS2Uを構えてなのは達に指示する。

「クロノ君は？」

なのはが訊ねる。

「プレシアの元へいく。それが僕の仕事だからね」

S2Uを構えるクロノ。青い光が収束されていく。

「今、道を作るから。そしたら！」

なのははユーノと距離を詰めて飛行魔法の準備をする。

「よし、僕だつて！」

リュウタロスはリュウボルバーを構える。

ウラタロスとキンタロスも武器を構えて、なのは達と同じ目的地に目を向けている。

「ブレイズキャノン」

「行つけえー！」

紫色の光球と青い直線の光が同時に発射される。

傀儡兵達は粉々になっていく。

そこにはクロノの宣言通りに『道』ができていた。

「クロノ君！ 気をつけてね！」

なのははユーノを抱えたまま、階段に向かって飛んでいく。

「それじゃ頑張つてね。クロノ」

ウラタロスが軽く手でサインを送ってから階段を駆け上がったいく。

「感謝するで」

キンタロスは礼を言ってから階段を駆け上がったいく。

「……ありがとう」

リュウタロスは小声だが礼を言ってから階段を上っていった。

*

次元航行艦アースラに設けられているモニターには『時の庭園』で起きている出来事が全て映っていた。

「私も出ます。庭園内でディストーションフィールドを展開して次元震の進行を抑えます！」

メインモニタールームではリンディが現地に向かうと宣言した。

『時の庭園』での出来事をフェイトが眠っている部屋から見ていたアルフは何かを決意したかのような表情になっていた。

「あの子達が心配だから、あたしもちよつと手伝つてくるね」

アルフはフェイトの左頬に触れる。

「すぐ帰ってくるよ。それで全部終わったら、ゆっくりでいいから……、あたしの大好きな本当のフェイトに戻つてね。これからはフェ

イトの時間は全部フェイトが使っているんだから。」

アルフは優しい表情を浮かべて告げてから離れる。

もう一度、フェイトを見るが何の変化もない。

アルフは振り返らずに部屋を出た。

廊下では良太郎とモモタロスが壁に背を預けていた。

「アルフさん……」

「オメエ、行くのか?」

「うん。良太郎、モモタロ。あたし行くよ」

アルフの決意は固い。

「わかった。後のことは任せて」

「おう、行って来い行って来い。」

「すまないね……」

良太郎とモモタロスに礼を言ってから、アルフは転送ポートへと向かっていった。

転送ポートに向かうと、そこには……

「アンタ……」

「アルフさん。……行くのね?」

リンデイが『時の庭園』に向かおうとしていた。

「ああ」

「そう。なら一緒に行きましょう」

リンデイの言葉にアルフは頷く。

リンデイは転送ポートを起動させた。

アルフがいなくなってから、フェイトの虚ろな瞳はすぐに戻った。

ドアの方に顔を向けると、なにやら声が聞こえた。

(誰かが廊下にいるのかな)

耳に神経を集中する。

男の声が二つと、女の声が一つだ。

(アルフ、モモタロス……。良太郎!)

やがて、その声は聞こえなくなつて足音が聞こえ始めた。

誰かが走つていったのだろう。

それから部屋のモニターを見る。

『時の庭園』での映像だ。

(母さんは最後までわたしに微笑んではくれなかった。わたしが生きていたいと思っただのは母さんに認めてほしかったからだ。どんなに足りないと言われても、どんなにひどいことをされても笑ってほしかった)

フェイトはこれまでの事を振り返る。

(あんなにはつきりと捨てられた今でも……。わたし、まだ母さんに縋り付いている)

モニターにアルフが映った。

(アルフ。ずっと側にいてくれたアルフ。言う事を聞かないわたしに、きつと随分と悲しんで……)

モニターになのはが映った。

(何度もぶつかった真つ白な服の女の子。初めて、わたしと対等にまっすぐに向き合ってくれたあの子。何度も出会って、戦って……。何度もわたしの名前を呼んでくれた。何度も……。何度も……)

フェイトの瞳が潤み出す。心の中で何かが動き出したのが手に取るようにわかる。

フェイトはベッドから起き上がる。

(生きていたいと思ったのは、母さんに認めてもらいたいからだ。それ以外に生きる意味なんてないと思っていた。それができなきや生きてはいけないと思ってた)

涙を流しながら自分のこれからすべき事、そして、今しなければならぬ事を考える。

(捨てればいってワケじゃない。逃げればいってワケじゃないもつとない)

ベッドから離れて、大破と呼んでもおかしくない状態のバルディッシュを見る。

それはまるで、自分の心のようにも見えた。

「わたし達の全てはまだ始まってもない……」

バルディッシュをデバイスモードにする。

それでも痛々しい姿は変わらない。

正直、いつ機能停止してもおかしくない『虫の息』状態だ。

「……そうなのかな？バルディッシュ。わたし、まだ始まってもいなかったのかな？」

バルディッシュに訊ねる。

バルディッシュはパーツをぼろぼろとこぼしながらも動く。

「ゲットセット」

フェイトを促す言葉を発して。

バルディッシュを抱きしめる。

「そうだよ。バルディッシュもずっと、わたしの側にいてくれたんだよね……」

フェイトの涙の一滴がバルディッシュに当たる。

「おまえもこのまま終わるのなんて、嫌だよね？」

「イエス・サー」

バルディッシュの返答がフェイトの決意を完全に固めた。

バルディッシュを両手で持ち、天に掲げてから振り下ろす。

「上手くできるかどうか、わからないけど……。一緒に頑張ろう」

フェイトの両手から光が発し、それがバルディッシュ全体に伝導される。

光が解き離れたとき、バルディッシュは新品同様の姿になる。

「リカバリ」

フェイトは瞳を閉じて呟く。

「わたし達のすべてはまだ始まってもない」

宙にマントが出現し、フェイトに羽織る。

フェイトの身体が光に包まれて、バリアジャケット姿になる。

「だから、本当の自分を始めるために！」

フェイトは歩き出す。ドアの方向へ。

自分を信じてくれた。なのはより先に自分と対等に向き合ってくれた青年がいる廊下へ。

「今までの自分を終わらせよう！」

自分の心の壁を破るようにして、ドアが開いた。

フェイトが眠っている部屋のドアが開いた。

そこにはバリアジャケット姿のフェイトが立っていた。

「良太郎、モモタロス」

良太郎は壁にもたれていたが、離れてフェイトの目線にあわせるようにしてしゃがむ。

「待ってたよ。必ず立ち上がるって信じて、ね」

良太郎は笑みを浮かべた。

「うん、ごめんね。そして、ありがとう良太郎。わたしを……信じてくれて」

フェイトは真っ直ぐ良太郎を見る。

「行くんでしょ？プレシアさんの所に」

「うん」

良太郎が訊ね、フェイトは首を縦に振る。

フェイトは右手を良太郎の前に出す。

「良太郎。一緒に来てくれる？」

「もちろんだよ。フェイトちゃん」

良太郎が右手でフェイトの手を握り、握手した。

「なら早く行こうぜ。良太郎の付き合いでオメエ待ってたけどよ。慣れねえことはするもんじゃねえな。身体が鈍った感じがするぜ」

モモタロスは首を鳴らしたり、軽く運動をし始めた。

「モモタロスはどうして？」

フェイトはモモタロスがどうしてここにいるのかを訊ねる。

「良太郎の付き合いだよ」

ぶつきらぼうに理由を答えるモモタロス。

「あんな事を言ってるけどね。モモタロスも心配してたんだよ。フェイトちゃんのこと」

良太郎がもの見事にぶち壊した。

「バカヤロオー！そういう事をベラベラ喋るな！」

「どうやら凶星だったらしい。」

「ありがとう。モモタロス」

フェイトは素直に礼を言う。

「ったく。なのはといいオメエといい、真面目なガキはこういう時困

るぜ。もつと気楽にワガママになって生きてりやいいんだよ」

モモタロスは明後日の方向に顔を向けて言う。

「良太郎も言ってた。もつとワガママになっていいって」

良太郎の台詞を口にするフェイト。

「ゆつくり話したいのはやまやまだけど。みんな、行こう」

「おう！」

「うん。今から転送魔法を発動させるから！」

「待って！みんな！」

フェイトが転送魔法で良太郎、モモタロスと共に『時の庭園』に向かおうとしていた所をこちらに向かってくる少女に止められた。

「ハナさん？」

「コハナクソ女」

少女——コハナは息を切らせながら、二人と一体の所まで駆け寄る。

「モモ、これアンタの！」

コハナはそう言つて、モモタロスに手にした黒いもの——パスを投げる。

「おい。これって……」

「良太郎。こっちはウラとキンタロスとリュウタの分」

良太郎にはモモタロスが投げたパスを三つ分渡した。

「もしかして、これを取りに？」

良太郎の問いにコハナは首を縦に振る。

「これで少しは戦力アップになるはずよ」

コハナの言つた事は満更張つたりでもない事を知っているので良太郎とモモタロスは頷く。

「良太郎、モモタロス。準備はいい？行くよ」

フェイトは転送魔法を発動一步手前で待機してくれていたようだ。
「うん。わかった」

「オメエ、どうすんだよ？コハナクソ女」

モモタロスはコハナはどうするのか訊ねる。

「私はここで待ってるわ。モモ、良太郎。気をつけてね」

一人と一体が首を縦に振ると同時に転送魔法が発動し、良太郎、フェイト、モモタロスの姿は廊下にはなかった。

*

駆動炉を向かうなのは達を傀儡兵達が襲い掛かってくる。

空から奇襲してくる傀儡兵をなのはは、ディバインシユーターで一体ずつ破壊していく。

途中で加勢に来たアルフは人型から獣型に変身して、身体全体を活かして傀儡兵を粉碎する。

「くっ！数が多い！」

傀儡兵を破壊した後、アルフは愚痴る。

「全く、次から次へときりがないね」

ウラタロスはウラタロッドで傀儡兵の剣戟を受けてから腹部に蹴りを入れて後方へ転ばせて、後方に並んでいる傀儡兵もろとも混乱状態を招かせる。

「カメの字！文句言わんと手え動かさんかい！」

キンタロスはキンタロスアックスで武器ごと傀儡兵を縦に真っ二つにして、爆発させる。

「こいつ等しっこいよ！もう！」

リュウタロスはリュウボルバーで一体ずつ破壊していくが、そろそろと湧いてくる傀儡兵にうんざりとしていた。

なのはは飛行して、自分の周囲に桜色の光球を構築してから一斉に発射する。

飛行型の傀儡兵を破壊していく。

「数が多いだけならいいんだけど！」

なのはの瞳に『諦め』はない。

「このままじゃ進展しない。何とかしないと！」

ユーノが翡翠色の魔力で構築された鎖で傀儡兵を縛り付けて、金縛り状態にしながら事態の好転を望む。

翡翠色の鎖を傀儡兵が引きちぎって、なのはに向けて斧を振り下ろす。

「なのは！」

ユーノが危機が迫っているという意味を込めて、なのはに叫ぶ。

「!!」

なのはの双眸に斧が映ったとき。

「うおりゃああああああー!」

なのはの頭上から荒々しくも頼もしく聞き覚えのある声がした。

「この野郎おおおおお!!」

声の主が蹴りの態勢に入っ、なのはを襲う傀儡兵の頭部を蹴りで潰してすぐに飛び退く。

「サンダーレイジ」

その直後、聞き覚えのある電子音声がある場にいる誰も耳に入る。

黄金の雷が傀儡兵に注がれ、傀儡兵は麻痺する。

「サンダアアアレイジイイイイイ!」

先程よりも何倍の威力がある黄金の雷が傀儡兵に落ちる。

傀儡兵は耐え切れずに爆発した。

なのは達は地上に降りた声の主を見てから、雷を落とした張本人を見上げる。

モモタロスが憑依した良太郎——M良太郎とバルデイツシュをシーリングモードにして構えているフェイトだった。

M良太郎はすぐに良太郎とモモタロスに分かれる。

「遅いよ。三人とも」

ウラタロスが、遅れて乱入した三人（正確には二人と一体）に喜びを混ぜて文句を言う。

「役者は揃ったってことやな」

キンタロスは親指で首を鳴らしてから満足げに言う。

「良太郎!モモタロス遅いよ!」

リュウタロスは両手を挙げて身体全体で喜びを表現しながらも、モタロスに対しては文句を言うが、その声にはウラタロス同様に喜びが混じっていた。

フェイトがゆっくりとなのはの元に降りてくる。

場の雰囲気は穏やかなものが流れようとしたとき。

壁を壊して今までよりも何倍も大きい傀儡兵が出現した。

「大型だ。バリアが強い」

フェイトは大型傀儡兵の大まかな特徴を述べる。

「うん、それにあの背中中の……」

なのはは大型傀儡兵の背部に搭載されている武装を見ている。

大型傀儡兵は発射態勢に入り、魔力光が収束されていく。

「だけど、二人ならー」

「うん！うんうん！」

フェイトの言葉はなのはが何よりも望んでいたものだった。

「行くよ！バルディッシュー！」

「ゲットセット」

フェイトは宙に足場を移して、バルディッシュをデバイスモードにして構える。

「こつちもだよ！レイジングハート！」

「スタンバイレディ」

なのはも足場を宙に移す。レイジングハートはなのはの次の行動にあわせてシーリングモードになる。

黄金の魔法陣を左手で構築させてから展開し、バルディッシュの先端を向ける。

「サンダーアアアスマッシュアアアアアア!!」

魔法陣から黄金の魔力砲が大型傀儡兵に一直線に飛んでいく。

バリアーを展開して、防ぐ大型傀儡兵。

バチバチバチという音が響く。

「ディバイイイイイインバスターアアアアア!!」

レイジングハートから桜色の魔力砲が発射されて、大型傀儡兵のバリアーにぶつかる。

発射してから五秒くらい達してから二人はというと、

「せえのお!!」

二人は同時に今放出している魔力に更に魔力を上乗せさせる。

サンダースマッシュとディバインバスターの威力は増し、巨大傀儡兵のバリアーを破壊、そして巨大傀儡兵をも跡形もなく消滅させ

た。

ちなみに外から見ると『時の庭園』の一部に爆煙が立ったりするが、内部のいる者達には確認のしようがないことだった。

バルデイツシュもレイジングハートも排熱処理をする。

蒸気が立つが、すぐに晴れていく。

巨大傀儡兵のいたところには巨大な穴が開いていた。

下には虚数空間も見えていた。

「フェイトちゃん！」

なのは喜びの顔を上げる。フェイトも声には出さないが小さく笑みを浮かべている。

「フェイト！フェイトオーフェイトオオオオ！」

いつの間にか獣型から人型になったアルフが涙を流しながら、フェイトに抱きつく。

「アルフ。心配かけてごめんね。ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ」

フェイトはアルフに告げてから、イマジン達とやり取りしている良太郎を見る。

良太郎もフェイトの視線に気づいたのか顔をフェイトのいる方向に向けた。

「そうだよね？良太郎」

良太郎は首を縦に振る。

「みんな！気をつけて！また出てきたよ！」

ユーノの一声で全員が周囲を見回す。

傀儡兵がわらわらとうじやうじやと湧いてきたのだ。

「つたく、ゴキブリかよ？コイツ等」

モモタロスが腰に手を当てて睨んでいる。

「アンタにとってはコイツ等はゴキブリと一緒かい!？」

アルフはモモタロスのコメントに突っ込む。

「でも、センパイの言うとおりゴキブリ並のしつこさだよ」

ウラタロスが傀儡兵のしつこさはゴキブリと同じだと言う。

「なら、俺等は殺虫剤やな」

キンタロスは自分達をゴキブリを駆除する殺虫剤と称する。

「ゴキブリホイホイにもなれるよ！」

リュウタロスは捕らえて殺すゴキブリホイホイになると言い出す。

「大型を倒したからといって気は緩めさせてはくれない、か」

「それでも、倒しても進まないよ！」

フェイトもなのはも闘志は失われていない。

「みんな！ハナさんから受け取って！」

良太郎はコハナから渡されたパスをウラタロス、キンタロス、リュウタロスに向けて放り投げる。

三体は見事にキャッチしてから、これからの意図がわかった。

良太郎もモモタロスもパスを手になっている。

パスを持った全員がデンオウベルト（良太郎はケータロス装着型）を手にして、巻きつける。

フェイト、なのは、ユーノ、アルフは良太郎達が次を取る行動を見て大きく目を開く。

「！！「変身！！」！！」

四体のイマジンは光に包まれて、各々のスタイルの電王になる。

モモタロスはソード電王に。

ウラタロスはロッド電王に。

キンタロスはアックス電王に。

リュウタロスはガン電王に。

良太郎はライナーのカラーリングをしたプラット電王になり、すぐにオーラアーマーと電仮面が装着されて、ライナー電王へと変わった。アックス電王、ソード電王、ライナー電王、ロッド電王、ガン電王の立ち位置になる。

「で、でででで……」

「電王が……」

「五人!?!」

なのは、フェイト、ユーノ&アルフが声を上げながら驚いた。

電王五人はそんな声は耳に入らないのか、傀儡兵達の前に立つ。

「俺、再び参上！」

ソード電王が定番のポーズと台詞を叫ぶ。

「オマエ達、僕に釣られてみる?」

ロッド電王が右人差し指を電仮面の額部分に軽く当ててから離すというインテリじみた仕種をする。

「俺の強さにお前が泣いた!」

アックス電王が親指で首を鳴らしてから、相撲取りのようなポーズを取る。

「オマエ達、みんなやつつけちゃうけどいいよね? 答えは聞いてない!」

ガン電王は身体を捻りながらくるりとターンしてから傀儡兵を指さす。

「みんな、準備はいいね?」

ライナー電王は両サイドにいる電王を見合わせてからその場で戦う気構えを取る。

『時の庭園』での戦いも、終幕になりつつあることを庭園内にいる誰もが感じていた。

第三十九話 「決戦！時の庭園　　～悲願成就～」

『時の庭園』で戦闘が更に激化していたが、リンデイ・ハラウンが足を踏み入れている場所は安全地帯と化していた。

床に傀儡兵の残骸が転がってはいたが。

髪の色と同じ緑色の魔法陣を展開する。

背中には半透明で、童話などで出てくる妖精が生やしているとも考えられる翼が四枚出現していた。

ただの飾りではない。

その証拠に彼女がこの状態になり、それから数分後には次元震が庭園全体にかかる震動が沈静化しているのだ。

瞳を閉じて、庭園のどこかにいるプレシア・テスタロッサに対して念話の回線を開く。

（プレシア・テスタロッサ。終わりですよ。次元震は私が抑えています）

プレシアからは返答がない。

黙って聞いているだけなのかもしれないと判断する。

（駆動炉はじきに封印。貴女のもとには執務官が向かっています）

現状を説明することでプレシアの戦意を殺ぐ作戦に出たが、やはり、プレシアから返答はなかった。

『時の庭園』の最深部ともいうべき場所にはプレシアとカプセルの中で永遠の眠りについてるアリシア・テスタロッサがいた。

アリシアは何もできないし、プレシアはアリシアを見つめていた。「もうすぐよ。もうすぐで私の悲願は達成されるわ」

アリシアは何も語ってはくれない。

「!？」

プレシアは自身の念話の回線が開かれた事に驚く。

フェイト・テスタロッサでも使い魔であるアルフでもない。

念話である以上、魔法関連なので彼——野上良太郎ではないことは確実だ。

（プレシア・テスタロッサ。終わりですよ。次元震は私が抑えています）

す)

時空管理局の人間だという事はわかったが、名前は知らない。とりあえず黙って聞くことにする。

「くろろろなこね……」

プレシアは口に出して、感想を漏らす。

賞賛も皮肉もないただの感想だ。

念話での会話の場合、腹の内に思っていることもダダ漏れになる可能性が濃厚なので、普段とは逆の事をして対処する。

(駆動炉はじきに封印。貴女のもとには執務官が向かっています)

こちらが不利だから投降しろとでも言いたいのだろう。

「上手く言ったわね」

時空管理局は自分がアリシアを蘇生させるために、アルハザードに行くとは本気で思っていると判断した。

(忘れられし都、アルハザード。そしてそこに眠る秘術は存在するかどうかすら曖昧なただの伝説です！)

プレシアはボソリと呟く。とてもとても小さな声で。

「……そんな事言われなくなつてわかつてるわよ」

それからリンディに聞こえるような声で語り出す。

「違うわ。アルハザードへの道は次元の狭間にある。時間と空間が砕かれた時、その狭間に滑落していく輝き！道は確かにそこにある！」

自分で言ってるんだが、馬鹿な事を言っていると思ってしまう。自分に念話で話しかけてきた者はこれを聞いたらこう言うだろう。

「随分と分の悪い賭けだわ」と。

駆動炉に向かう道程の中、五人の電王とフェイトの参加によって突入組は破竹の勢いで進んでいた。

「オラア！てやあぁーそりやあぁー！」

ソード電王がDソードで傀儡兵三体を一体目には右薙ぎ、二体目には左薙ぎ、三体目には唐竹と移動しながら斬りつける。

斬られた傀儡兵三体は、爆発した。

Dソードを突き出すようにしながら歩きながら傀儡兵に詰め寄る。

「へへ。退治してくれよう。モモタロスってな」

飛行型傀儡兵が襲いかかってくる。

「おりゃあー!」

跳躍して唐竹から始まり、縦一直線に振り下ろす。

ドオンと空中で爆発し、爆煙の中からソード電王が抜けてきた。

「センパイ、張り切っちゃって」

ロッド電王はソード電王の戦闘を見ていたが、自身が傀儡兵に狙われていることがわかると、戦いに集中する。

振り下ろされる斧を避けてから、腹部に蹴りを入れるが相手が物言わぬ存在なのでダメージを受けたかどうかは判別しかねるので戦法を変える。

デンガツシャーをDロッドに連結させてから、傀儡兵を腹部に突き刺して持ち上げる。

そして、先端に向けてフルチャージほどではないが、フリーエネルギーを伝導させる。

「はああつー!」

結果、Dロッドに刺さって持ち上げられていた傀儡兵は爆発して、残骸が飛び散った。

「俺もやるでー!」

アックス電王は張り手で傀儡兵の装甲を窪ませてから、持ち上げて比較的数が多い場所を狙って投げ飛ばす。

「うおりゃあああああああ」

投げ飛ばした傀儡兵だけでなく、巻き添えを食った傀儡兵数体も爆発した。

「そりゃー!おりゃー!とりゃー!」

ガン電王は傀儡兵達の攻撃を掻い潜りながら、デンガツシャーをDガンに連結させてから、引き金を絞る。

比較的広い場所に出てから、自分の後ろにいるDガンを連射する。迫り来る傀儡兵の二、三体は爆発した。

「す、すごい。あれだけいたのにもうこんなに減ってる……」

ユーノ・スクライアは歩いた跡を見る。

そこには数体、いや数十体の傀儡兵の残骸が転がっていた。

「おらああああ！」

ソード電王とアックス電王がドアを蹴飛ばす。

クロノ・ハラオウンの時とは違い、ドアは千切れて待ち構えている傀儡兵達に向かっている。

ドアの一つは飛行型傀儡兵が破壊し、残りの一枚は地上にいる鎧騎士型傀儡兵が斧で真つ二つにした。

「あそこのエレベーターから駆動炉に向かえる」

『時の庭園』が実家でもあるフェイトは駆動炉まで行けるルートも熟知している。

「ありがとう。フェイトちゃん達はお母さんの所に？」

なのはは礼を言ってから、確認するかのように訊ねる。

フェイトは首を縦に振る。

なのははレイジングハートを瓦礫に置こうとする。

「なのは、僕が預かるよ」

ユーノがレイジングハートを受け取ると申し出る。

「うん」

ユーノの厚意に甘えることにした。

なのはは両手でフェイトの右手を包み込むようにして握った。

「わたし、その……上手く言えないけど……、頑張って」

変に飾らない言葉だが高町なのはらしい言葉だと誰もが思った。

「ありがとう」

フェイトも飾らない言葉で握ってくれているなのはの手から空いている手で包むように覆った。

二人とも自然を外さずに見つめ合っていた。

「え？わかった。みんなに伝えておくよ」

レイジングハートを預かっていたユーノは誰かからの念話での報告があったのか了承した。

「クロノが今から一人で向かっています！急がないと間に合わないかも！」

ユーノがクロノから受けた言伝をその場にいる者達全員に伝えた。

「フェイト、良太郎！」

アルフの一声にフェイトとライナー電王は頷いた。

「あ、二人ともちよっと待ってて」

ライナー電王は右手の甲を前に差し出す。

「へっ。しょうがねえな」

ソード電王はライナー電王の意図がわかったのか、右手を差し出された手の上に被せるようにして乗せる。

「まったく、こういうのは流行らないよ？良太郎」

そう言いながらも更に上に被せるように手を乗せるロッド電王。

「ははは。そない言いながら乗せとるやないか？カメの字」

言葉とは裏腹な行動を取っているロッド電王に苦笑しながら、その上に右手を乗せるアックス電王。

「僕も乗せる！」

ガン電王は素直な言葉で右手を乗せた。

五人が五人、互いを見合っている。

「みんな、必ず帰ろう！いいね？」

ライナー電王の一声に、

「「「おう!!」」」

ソード、ロッド、アックス、ガン電王が声をそろえて応えた。

「ごめん、待たせたね？」

「ううん、でも急ごう！良太郎」

「早くしないとアイツが先にプレシアの元に行っちゃおうよー」

ライナー電王、フェイト、アルフはプレシアがいる場所へ。

四電王、なのは、ユーノは駆動炉へと足を向けた。

駆動炉へと向かうエレベーターの中では四電王、なのは、ユーノが役割分担を決めていた。

「ドアを開けたら、傀儡兵

アイツ等

待ち構えてるね」

エレベーターにもたれているロッド電王が確信に近い口調で言う。

「数は多いやろな。ならアイツ等の掃除は俺等に任しとき」

親指で首を捻りながらアックス電王がなのは、ユーノに告げる。

「なのはちゃんとフェレット君の邪魔はさせないぞお！」

ガン電王はエレベーターの中にもかかわらず、くるりとターンした。

「僕はなのはのサポートに回ります。なのはは駆動炉の封印。いいね？」

「うん！」

ユーノの的確な指示になのはは頷く。

チンと鳴り、エレベーターが停止し、ドアが開く。

腰に手を当てて、首を鳴らしてから指をパキポキと鳴らすソード電王。

「オメエ等！クライマックスと行こうぜ!!」

ソード電王の叫びと同時に、電王達は眼前に映る傀儡兵達の駆除に取り掛かりだした。

ユーノがなのはの前に立つ。

その構図は『なのはを守る』という型になっていた。

「防御は僕がやる！なのはは封印に集中して！」

強い言葉で言い放つ。

「うん！いつも通りだよね」

なのはが笑顔で頷く。

「え？」

なのはの言葉の真意が今ひとつ理解できていないユーノ。

「ユーノ君。いつもわたしと一緒にいてくれて、守ってくれたよね！」

なのはは感謝を込めて笑顔で言う。

「シーリングモード」

レイジングハートがデバイスモードから形態を変化していく。

レイジングハートの先端辺りから桜色の翼が広がる。

「だから戦えるんだよ！背中がいつもあったかいから！」

なのはの言葉にユーノは口には出さずとも、感謝していた。

レイジングハートを駆動炉に向けると、なのはの足元に桜色の魔法

陣が展開される。

なのはの周りに桜色の光球が数個出現する。

「行くよー！」

なのははレイジングハートを大きく振りかぶる。

「ダイバインシューター！フルパワー!!」

絶対に外さないように、駆動炉を睨みつける。

「シュートオオオ!!」

その振り方は野球でもテニスでもなく、言うならばゴルフのスイングのようだ。

数個の桜色の光球が駆動炉に向かって飛んでいった。

また揺れた。

庭園の駆動炉も時空管理局の人間が予告したように封印されたのだろう。

プレシアはそう判断した。

（貴女はそこに行つて、一体何をやるの？失った時間と犯した過ちを取り戻すの？）

まだ投降するように自分を説得するようだ。

息を一息吐く。

正直、わかっている事を言われるのは聞いている側としても楽ではない。

「五月蠅いわね」

念話の回線が開かれているのなら、腹の中の本音は口に出して吐き出しておいた方がいい。

（そうよ。私は取り戻す！私とアリシアの過去と未来を！）

念話でそう送り返した。

まだ自分は『演技』をし続けなければならないとプレシアは判断すると、瞬時に出たのだ。

「……取り戻すの。こんなはずじゃなかった世界の全てを！」

独白のような叫びを言うと、後方から青色の魔力光が岩山を貫いた。

岩山からは爆煙が立ち、やがて晴れていくと全身黒づくめで額から

血を流し、あちこちにダメージを受けている少年が現れた。

それが執務官——クロノだということはすぐにわかった。

「招かれざる客、ね」

クロノには聞こえないようにプレシアは呟く。

「世界はいつだって、こんなはずじゃない事ばかりだよ！ずっと昔から、いつだって誰だってそうなんだ！」

彼の言葉は予知夢を見る前の自分なら心に響くものだろう。

だが予知夢を見て、覚悟を決めている自分にとっては彼の言葉は滑稽にも思えていた。

「あれは……」

クロノの言葉を右から左に流しながら、上を見上げる。

クロノより高い位置から何かが三つ降りてきた。

フェイトとアルフ、そして自分が対面した時とは違う電王——ライナー電王だ。

だが、プレシアにはライナー電王が野上良太郎だとすぐにわかった。

全てを知り、覚悟を決めた野上良太郎だと。

「こんなはずじゃない現実から逃げるか立ち向かうかは個人の自由だ！だけど自分の勝手な悲しみに無関係な人間を巻き込む権利は誰にもありはしない！」

彼の言葉は実に正しい。この事件の犯人を屈服させるには申し分ない内容だ。

同時にそれは自分の『仕掛け』に完全にはまった証明でもある。

「貴方は邪魔よ。少し黙ってなさい」

プレシアはクロノに向けてあらかじめ構築した紫色の魔法陣を展開し、杖の先端を魔法陣に向けて突く。

紫色の魔力光が一直線に向かって飛んでいく。

「うわあああああああー！」

クロノは満身創痍だったらしく、防御魔法を構築する前に吹っ飛んだようだ。

不意打ちに近いかたちで放ったので防ぐのは至難だろうと予測は

していたが。

「っ!?!」

腹の底、いや身体全身から何かが蝕んできた。

「(っ)ほっ(っ)ほっ」

苦しみのあまりにしゃがんでしまう。

口元を押さええて、蝕む何かを抑えつけることはできたが、無代価ではなかった。

その証拠に右手のひらには血が付着していた。

「プレシアさん」

「母さん!」

ライナー電王とフェイトがこちらに駆け寄ってくる。

(フェイト?)

プレシアはフェイトの瞳と纏う雰囲気以前と違う事を肌で感じた。

(私のした事は報われたようね……)

今、眼前にいるフェイトは『自分のご機嫌取りに精一杯の人形』ではなく、『前を向き、未来を歩む決意をした一人の人間』になろうとしているのだ。

(これが最後の、最期の仕上げよ!)

「今さら何をしに来たの?」

プレシアはフェイトを睨みつけながら問うことにした。

その一言で、フェイトの足は停まる。

「消えなさい。もう貴女に用はないわ」

(貴女はこの言葉にどう出るの? フェイト)

プレシアは試す。

ライナー電王がフェイトの横に立ち、彼女の左手を握る。

「良太郎……」

「大丈夫。フェイトちゃんが今思っている事を言えばいいから」

「うん」

フェイトがライナー電王の手を握り返すようにプレシアには見えた。

「貴女に言いたい事があって来ました」

フェイトはプレシアの目を見つめて告げる。

それだけでも、プレシアはフェイトに合格点を与えられると思っ
た。

「わたしは……。わたしはアリシア・テストロッサではありません。
貴女が作った只の人形かもしれません。だけど、わたしはフェイト・
テストロッサは貴女に育ててもらった貴女の娘です」

（育ててもらった、か。貴女の未来を守るためとはいえ、親らしいこと
は何もしてあげられなかったのに……）

フェイトの言葉はまさに自身で考え、導き出したものだろう。

だが、それでも自分との繋がりを求めている節があることは確か
だ。

自分が見た『フェイトの未来』に自分はいない。

それは自分との繋がりが精神的にはどうかかわからないが物理的に
は完全に切れているという事だろう。

（フェイト。貴女は自分の意思を持ってここに来た。それだけで十分
よ。貴女はもう未来を歩いていけるわ）

だからこそ、自分のことは忘れた方がいい。

彼女の未来に自分は邪魔でしかない。

「だから、何？今さら貴女を娘と思えと言うの？」

自分はフェイトを生み出し、アリシアではないと理解したときから
娘と思っている。

だけど、今それを告げるわけにはいかない。

「……貴女がそれを望むなら」

フェイトはそう答え、続ける。

「それを望むなら、わたしは世界中の誰からもどんな出来事からも貴
女を守る。わたしは貴女の娘だからじゃない。貴女がわたしの母さ
んだから」

フェイトの決意は本物だろう。その証拠に自分に手を差し伸べて
いる。

本来ならば差し伸べている手を握り、そして抱きしめてあげたかつ

た。

でも、それは叶わない。

今ここで全てを無にするわけにはいかない。

「くだらないわ」

「え？」

これで完全に切れただろう。そして、『フェイトの未来』は約束されただろうとプレシアは確信した。

(十分よフェイト。貴女の本音は聞かせてもらったわ)

プレシアは笑みを浮かべていた。

それは侮蔑でも皮肉でも、我が子を褒めるときに使う笑みだ。

「プレシアさん。貴女は一度も本音を言っていない。それでいいんですか？」

「え？」

フェイトとアルフがライナー電王の言葉に目を大きく開いた。

(真実を語ってから去れ、というのね野上良太郎)

プレシアはライナー電王を見てからフェイトを見る。

「フェイト、貴女は野上良太郎を信じているのね？」

「は、はい。もちろん！」

フェイトの瞳に一点の曇りもない。

「フェイト。私の本当の気持ち——本音を知りたければ野上良太郎に賭けなさい。野上良太郎、私と戦って勝てば貴方の要求を全て呑んであげるわ」

プレシアは杖をライナー電王に向ける。

左手に持っているデンカメンソードを見る。

握っていたフェイトの手を離し、右手にデンカメンソードを持ち替える。

そして、プレシアの前に立つ。

「わかりました。勝てば本当に呑んでくれるんですね？」

「ええ」

プレシアとライナー電王は睨み合う。

駆動炉の封印は無事に成功し、なのはは駆動炉に使われていたロス

トロギアを手にし、他の面々がどうなっているかが気になっていた。傀儡兵が固まって山のようになっていた。

なのははレイジングハートを構えてディバインシユーターを放とうとする。

だが、傀儡兵の山が崩れた。

「おらあああああー！」

アックス電王がその山を下から崩したのだ。

傀儡兵はゴロゴロと転がったりしていく。

「キンタロスさん……」

なのはは無事な事に安心すると、この部屋で戦っている者達の戦闘を見ることにした。

アックス電王はパスを手にして、デンオウベルトにセタッチしている。

「フルチャージ」

電子音声が発するとパスを足元に落として、左手に持っていたDアックスを右手に持ち替える。

Dアックスはデンオウベルトからフリーエネルギーが伝導されている。

「ダイナミックチョップ！」

技名を宣言すると、傀儡兵達が囲むようにしてアックス電王に襲い掛かる。

「うおりゃああああー！」

Dアックスで確実に倒せる間合いに入ると、時計回りで傀儡兵達を斬りつけていく。

一周が終わると同時に、傀儡兵達は一斉に爆発した。

「フルチャージ」

ガン電王はデンオウベルトにセタッチした後、右方向にパスを放り投げた。

「フェレット君！少し離れててー！」

自分の後ろにいるユーノに指示しながらも、Dガンにはデンオウベルトとドラゴンジエムからのフリーエネルギーが伝導されていく。

ユーノがその場から離れて、なのはの元に向かった事を確認すると、前方にいる傀儡兵達に向かってDガンの引き金を絞る。

「はあああああ!!」

銃口に収束されている紫色の光球が発射され、眼前の傀儡兵達に向かつて飛んでいき、触れた傀儡兵達を次々と巻き込んで爆発した。

「フルチャージ」

ロッド電王はデンオウベルトにパスをセタッチしてからパスを左に放り投げる。

そして、フリーエネルギーが充填されているDロッドで自身の後方にいる傀儡兵達にぶつけるようにして振り回す。

Dロッドに触れた傀儡兵達は爆発し、ロッド電王はそんな事には目もくれずに前方にいる傀儡兵達を狙ってDロッドを投げつける。

投げられたDロッドは青色の亀の甲羅のような網となって、傀儡兵達を金縛り状態にする。

「せやあああああー!」

軽く走ってから跳躍して、右足を蹴りの態勢に持ち込んでから綱――オーラキャストの中心に向かう。

足の裏とオーラキャストが触れると同時にオーラキャストで捕らえられている傀儡兵達は爆発していった。

「へへ。やっぱり最後は俺だよな!」

ソード電王が右手に持っているパスをデンオウベルトにセタッチする。

「フルチャージ」

左手に持っているDソードにフリーエネルギーが伝導されていく。「もう一丁」

パスをもう一度、デンオウベルトにセタッチする。

「フルチャージ」

フリーエネルギーが更にDソードに伝導されていく。「おまけに」

更にパスをデンオウベルトにセタッチしてからパスを右に放り投げる。

「フルチャージ」

Dソードを左手から右手に持ち替える。

バチバチバチバチという激しい音がDソード、正確には刃となっているオーラソードから鳴り響いている。

「ひそかに温めていた新必殺技を見せてやるぜ！」

言った直後に、その場で跳躍して飛行型の傀儡兵がこちらに向かってくる。

「行くぜ！俺の必殺技！なのはバージョオオオオオン！！」

叫ぶと同時に、オーラソードが通常の数十倍の長さで肉厚のある巨大な刃に変化する。

馬どころか艦だって真つ二つにしかねない大きさだ。

「うおりやああああああ！」

眼前の飛行型傀儡兵左薙ぎで横一直線に切り刻んでいく。

「空の奴等は全滅だぜ！次はつと！」

斬られると同時に、どんどん爆発していく。

Dソードを左薙ぎの状態から次の行動への移すための時間を限りなくゼロにするために右手から左手へと持ち替える。

地上に残っている傀儡兵達を睨みつける。

自身が空から陸へと足場が強制的に変わろうとしていることにソード電王は気づく。

「オメエらだ！！」

右薙ぎで地上に足が着く前に、傀儡兵達を捉えて斬りつける。

地上にいる傀儡兵達の半分近くは斬られて爆発する。

地に足が着くと、両手でDソードを握る。

構えは上段。縦に一直線に斬りつける。

残った地上の傀儡兵達はこちらに向かってくる。

「これで最後だあ！！」

ソード電王は縦一直線に斬りつける。

刃は向かってくる傀儡兵達の身体をチーズのように難なく切り裂く。

ドオンボオンゴオンと爆発音を立てながら傀儡兵達は爆発して

いった。

駆動炉を守る傀儡兵達は見事に全滅した。

「よし、これで終わったな」

ソード電王がDソードを右肩にもたれさせながら周囲を見回しながら言う。

「センパイはまだ問題があるよ?」

ロッド電王が歩み寄って問題となる人物を親指で指す。

「モモの字、まあ頑張れや」

アックス電王がソード電王の左肩を叩く。

「モモタロス、なのはちゃんいじめたら許さないからね?」

ガン電王はイマジンを倒すときの仕種をそのままする。

「モモタロスさん、なのはショック受けてますよ」

先程までなのはと何かを話していたユーノがこちらに来て、なのはと話していた内容の一部を伝えた。

「?オメエ等さつきから何言ってるんだよ?」

ソード電王は件の人物を見る。

そこにはレイジングハートをプルプルと震わせながら、涙目でこちらを睨んでいるのがいた。

「モモタロスさん!!」

「は、はい」

なのはの迫力に気圧されたのか、ソード電王はつい丁寧に戻してしまふ。

「あ、あの技名変えてください!あ、あれじゃまるで、わたしが破壊魔さんみたいじゃないですか!」

なのはは先ほどの技名の改名を要求してきた。

「えー、何でだよ。いいじゃねえか。なのはバーシヨン」

ソード電王は気に入っているらしく、なのはの要求をスルーするつもりだ。

「ダメです!変えてください!」

「えー。じゃあオメエが考えてくれるんだったら変えてやってもいいぜ?」

「本当ですか？ユーノ君、手伝って！」

なのはが自分だけではよい技名が浮かぶ自信がないのかユーノも呼ぶことにした。

「いいけど、急には浮かばないよ」

ユーノは了承はしたが、自信はないようだ。

最初は三人だったのだが、後にエイミー・リミエツタから脱出するように告げられるまで駆動炉室内にいる全員で考えていた。

ライナー電王とプレシアの戦闘が始まって、既に二分が経過していた。

「てやああああー！」

ライナー電王は支えとなる両脚に力を入れて、デンカメンソードを両手で握って左薙ぎにプレシアを斬りつける。

だが、プレシアの身体にはその刃が届く事はなかった。

魔法障壁で遮っているのだ。

間合いを開けずに別の角度——上段から縦に振り下ろすが、バチンと弾かれて後ろに足が数歩下がってしまう。

デンカメンソードを中段に持ち替える。

「アルフは破ったわよ」

以前にアルフはプレシアが展開した魔法障壁を破った事がある。

「このくらいが破れないようでは貴方の覚悟も大したものではないわね」

明らかに挑発だが、ライナー電王は動じない。

（一発で破壊しないと、次の攻撃に移れない。プレシアさんは恐らく手数は少ないけど威力のある一撃を狙ってくるはずだ）

「ウラロッド、キンアックス」

デンカメンソードのデルタレバーを二回引く。

ターンテーブルの電仮面がロッドに移動してからアックスで停まった。

ライナー電王の構えはキンタロスもしくはアックス電王に酷似していた。

「てええい!!」

デンカメンソードを縦に一直線に振り下ろす。

その仕種は『剣』というよりは『斧』に近い扱い方だった。

プレシアは魔法障壁を展開するが、振り下ろされたデンカメンソードの力が先程よりも強いのか亀裂が入り始めることに目を開く。

「まさか……、破るといふの!?!」

プレシアは次の手に出るのだろう、左手に紫色の魔力光を収束させる。

「次の手!?!」

自分が予測していたよりも速く、次の行動に移る。プレシアを見てライナー電王も自身の次の手を模索する。

(キンアックスから別フォームに切り替える前に食らう。なら……!)

魔法障壁が砕けると、プレシアは左手をライナー電王にかざす。

「食らいなさい!」

ライナー電王はデンカメンソードを盾のようにして構えてプレシアの左手の前に突き出す。

「ぐ、ううううううう」

放たれると同時に、ライナー電王の身体はずると後方に地面を抉りながら下がっていく。

「?」

ライナー電王は身体全体に襲い掛かってくる負荷のようなものに妙な違和感を感じた。

(威力が弱くなってる……?)

これなら何とかなので、一步一步前へ前へと歩き出す。

ある程度まで間合いを詰めると、前から圧しかかる負荷を薙ぎ払って飛ばす。

ドオンと横から爆発音が出たが、気にしない。

プレシアを見る。

手で口元を押さえている。

恐らく先程の魔法障壁と魔法攻撃で身体に相当な負担がかかっているのだと思われる。

このまま長期戦に持ち込めば、プレシアの身体はさらに悪化するだろう。

勝敗でいえば『勝ち』を手にすることができると。

だが、それは自分が望むものではない。

口元を押さえていた手を離し、左手で何かをしようとしていた。

(多分、クロノを吹き飛ばしたヤツだ)

となるとこれで決着をつけるつもりなのだろう。

ならばこちららも必殺技で迎えるしかない。

ライナー電王はデルタレバーに触れようとする。

だが、

「え!?!」

ライナー電王の両腕が意思とは反対に磁石のように宙に縫い付けられるようにして動かなくなった。

いや、何かに押さえつけられて動けないのだ。

「バインド!?!」

プレシアを見る。

「貴方を確実にしとめるにはこのくらいは必要よね?」

プレシアはこれで終わらせる気だ。

バインドで押さえつけられている両腕を動かしてみる。

やっぱりバインドを外す事はできない。

なのはがフェイトのバインドを受けたときの事を思い出す。

(あの時、なのはちゃんはフェイトちゃんのバインドを受けて大技を受けるしかない段階まで追い込まれていた。なのはちゃんは耐え切る事で勝機を見出したんだ)

大技が発動し終わるとバインドは強制的に解除される。

そこに勝機があるのだとライナー電王はプレシアを見る。

正確にはプレシアの『動き』をだが。

「母さんのあの構えは……」

プレシアとライナー電王の戦いを見ているしかないフェイトとアルフはプレシアが次にライナー電王に向けて放つのが理解できた。

「サンダースマッシュ……」

二人は同時に答える。

「良太郎！プレシアは本気で撃つよ！早く逃げて！」

アルフはバインドで縛られているライナー電王に呼びかける。

「……………」

フェイトはプレシアにもライナー電王にも応援の声をかけない。

どちらが勝っても負けても自分は喜べないだろう。

かたや母親。

かたや自分の一番最初の仲間。

フェイトの本音はどちらを応援したらいいのかわからないのだ。

だからこそ、フェイトは両手を絡めて祈るしかない。

（良太郎、母さん…………）

「これで終わりよ。野上良太郎！」

プレシアは足元に魔法陣を展開してから、左手で構築した魔法陣を展開する。

そして、杖で宙にある魔法陣を突くような仕種をする。

その直後に、宙に浮いた魔法陣を起点に紫色の魔力光がライナー電王に飛んでいく。

その魔力光には雷が帯びている。

（耐え切る!!）

腹をくくったのか、ライナー電王は下手な足掻きをせず真正面を見据えていた。

サンダースマッシャーが来る。

「うわあああああ!!」

魔力によるダメージ+電撃による痺れがライナー電王を襲う。

時間にしてどのくらいこのダメージを味わったのだろうかはわからない。

一瞬のようにも感じたし、数秒間ほど味わったようにも思えた。

宙で縛り付けられていた両腕が軽くなった。

バインドが解けたのだ。

押さえつけられていたものが急になくなり、重力に逆らえずに前のめりになる。

倒れるわけにはいかないので、四つんばいの態勢で支える。
シユウーと身体全身から煙が立ち込めている。

「はあ……はあはあはあ……、耐え切った」

デンカメンソードを地に刺して杖代わりにしながら立ち上がる。
肩を上下させながら息を整える。

プレシアを見る。

「はあ……はあ……はあはあ……はあ……」

自分よりも激しく体力を消耗しているようだ。

顔色は悪いし、汗ばんでもいる。

「うっ……ごほごほ……ごほ……」

左手で口元を押さえるが、ライナー電王を視線で捉えている。

「まだよ……。まだ終わってないわよ」

「いや、もう終わらせませすー！」

ライナー電王はデンカメンソードのデルタレバーを引く。

「リユウガン、モモソード、ウラロッド、キンアックス、リユウガン、
モモソード……」

ターンテーブルを一週以上回転させてから、デルタレバーを押し込
む。

ターンテーブルから緑色の十字で方位を表すようなマークが浮か
び上がる。

デンカメンソード先端からオーラレールが出現し、プレシアに向
かって敷設されていく。

オーラレールに飛び乗り、そのままプレシアに向かっていく。

オーラライナー、オーライスルギ、オーラレツコウ、オーライカズ
チが出現し、ライナー電王と共にプレシアに向かっていく。

「ふふふふ。もうこれを迎撃するだけの力はないわ。でも！」

魔法障壁を展開する。

最後の力を振り絞るつもりなのだろう。

「最後まであがかせてもらうわよー！」

プレシアはライナー電王が繰り出す電車斬りに怯むことなく睨む。

「てやあああああ!!」

デнкаメンソードを両手で握って左薙ぎに振る。

バチバチバチバチバチとデнкаメンソードと魔力障壁がぶつかる。

「くううううううう!!」

「ぬううううううう!!」

ライナー電王とプレシアの最後の攻撃と足搔きがぶつかり合う。

二人がいる床に亀裂が入り始めた。

その事に気づいたのは観戦をしているフェイトとアルフだった。

「母さん！良太郎！亀裂が！」

フェイトが戦っているライナー電王とプレシアに呼びかけるが、全く聞こえていないようだった。

「フェイト！早く離れるよ！あたし達まで危なくなるよ！」

アルフがフェイトに戦っている二人から距離を置くように言う。

瓦礫からクロノが出てきた。

「げほ……ごほ……、何をやってるんだ!?あの二人は？君達、あの二人は何を？」

クロノは状況を把握するためにフェイトとアルフから聴取しようとする。

「プレシアが勝てば良太郎の用件を呑むって事で始まった戦いなんだけど……」

アルフが大まかにクロノに説明した。

「良太郎！母さん！」

フェイトが呼びかける。だが、二人とも何も聞こえていない。

互いの意地の張り合いに夢中になっているといつてもいいだろう。

ライナー電王とプレシアがいる場所は特に亀裂がひどくなっている。

何か強い衝撃が起これば確実に地面は崩落する。そのくらい脆くなっているのだ。

「うおおあああああああ!!」

ライナー電王が更に力を上げた。

プレシアの魔力障壁は砕ける。

それは同時に二人が足を着けている地面も崩落するということだ。

地面の亀裂はアリシアのカプセルがある所まで伝わり、そこも崩落していく。

『時の庭園』全体が揺れ始める。崩壊が本格的になっているのだろう。

「良太郎!!母さん!!」

フェイトが呼びかけるが、時既に遅しだった。

「まさか、プレシアさん。貴女……」

「貴方を巻き込んだのは申し訳ないわね。でも、これで本当に悲願は達成したわ」

ライナー電王はプレシアが自身に戦いを仕掛けた真の理由を理解し、彼女を見た。

プレシアの笑みを。

二人は重力に逆らう事ができないので、そのまま虚数空間の中に落ちていった。

アリシアの入ったカプセルも二人を追うようにして落ちていった。

それから数分後に『時の庭園』は完全に崩壊した。

第四十話 「空間を抜けると、そこはターミナル」

『時の庭園』は完全に崩壊し、虚数空間の中に吸い込まれていった。高町なのはの機転のおかげで、フェイト・テストロッサは脱出に成功。

使い魔のアルフやクロノ・ハラオウン、ユーノ・スクライア、モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、リンデイ・ハラオウンも無事に脱出した。

次元航行艦アースラから突入した面々のほとんどは無事に生還したのだ。

ただ一人、プレシア・テストロッサ、カプセルの中に入っているアリシア・テストロッサと共に虚数空間の中に吸い込まれた野上良太郎を除いては。

*
吸い込まれるという感覚がなくなり、ライナー電王は虚数空間の中を流されるように下に降っていた。

下というのはあくまで自分の感覚からでた方向であり、宇宙と同じ様に方向感覚がないのかもしれない。

「う……駄目だ。意識が……」

先のプレシアとの戦いで完全に精も根も尽きたのか、まぶたが重くなっていく。

プレシアやアリシアも自分と同じ様に流されていく。

(駄目だ。何かを考える力も残って……ないや)

意識が完全に途切れたのでライナー電王から良太郎の姿に戻る。

そのまま彼等は虚数空間の波に流されていった。

*

次元航行艦アースラではというと。

「庭園崩壊終了。全て虚数空間に吸収されました」

「次元震停止します。断層発生はありません」

メインモニタールームではオペレーターが現状を報告した。

「了解」

『時の庭園』から脱出したリンデイ・ハラオウンがオペレーターへの報告を了承した。

「第三船速で離脱。巡航路路に戻ります」

リンデイは報告を黙って聞いていた。

別室ではというと、フェイトとアルフを除く面々が手当てを受けていた。

といつても、手当てを受けているのはクロノとなのはの二人だ。

クロノはエイミー・リエツタに怪我している頭部に包帯を巻いてもらい、なのははすりむいたと思われる両脚をユーノに手当てしてもらっていた。

イマジン達は手当てをしてもらうほど、怪我をしているわけでもないので部屋の中で寝そべっていた。

モモタロス、ウラタロス、キンタロスは黙りこくっている。

リュウタロスはなのはの心配をしていた。

コハナが部屋に入り、人数分のドリンクを持ってきてくれた。

既に彼女も知っている。

良太郎が虚数空間の中に吸い込まれてしまった事を。

この場にいる誰もがその事にふれようとはしない。

まるで、臭い物に蓋をするように。

「あれ？フェイトちゃんは？」

なのはは良太郎の安否以外で話題を探した結果、今ここにいないフェイトのことになった。

「彼女がここにいないって事はもしかして……」

ウラタロスは起き上がって、自分が想像している事を口に出そうとする。

「アルフと一緒に護送室にいる。彼女はこの事件の重要参考人だからね……」

クロノは時空管理局の一人として打ち明ける。

「申し訳ないが、しばらく隔離になる」

「そ、そんな……！」

なのははフェイトの処遇に抗議しようとする。

「なのはーじつとして」

手当てをしているユーノに注意される。

「事情がどうであれ、フェイトちゃんは犯罪者の一味として見られているんだね?」

ウラタロスが確認するかのようにクロノに訊く。

クロノは首を縦に振ってから、唇を動かし始める。

「今回の事件は一歩間違えれば次元断層さえ引き起こしかねなかった重大な事件なんだ……。時空管理局としては関係者の処遇に対しては慎重にならざるを得ない。それはわかるね?」

クロノの口調はなのはに強引にでも納得してもらおうといった感じだ。

「なのは、納得してないでしょ?」

ユーノが包帯を巻きながら、なのはに訊ねる。

なのはは質問内容が的を射ているのか、目を丸くしている。

「ふえ?ユーノ君、な、何で?……」

ユーノは作業を終えたのか、見上げるかたちで、なのはの目を見ている。

「わかるよ。僕も良太郎さんがフェイトにジュエルシードを渡されたときね、わかってはいても納得してはいなかったんだ」

それは初耳だった。

「でもね、時間が経つにつれて納得したんだ。良太郎さんは僕達とは違う別世界の人間だし、魔法やジュエルシードの事を何も知らない良太郎さん達に僕達の常識を押し付けてもいいわけじゃないってね」

「ユーノ君……」

「なのははミッドチルダの人間じゃない。だから今すぐに納得しなくてもいいんだ」

ユーノはなのはの手当てが終わると立ち上がって、クロノを見る。

クロノの頭に包帯は巻かれてはいたが、思わず噴出したくなる巻かれ方だった。

リボン結びされているのだ。

「クロノ。まだ僕達の条件は五分五分だよね？」

「ああ。そういう取り決めで君達とは手を結んでいるからね。それが？」

「フェイトとの面会を許してほしいんだ」

ユーノの申し出に、クロノとエイミィは顔を見合わせてからユーノに渋い表情を見せる。

「それは、その……」

「さっきも言っただろ。彼女の処遇は慎重にならざるを得ないって」

ユーノの申し出をクロノは棄却する方向に持っていく。

「何だよテメエ。フェイトにビビってんのかよ？」

モモタロスの挑発じみた言葉が出る。

クロノの額に青筋が浮かび上がっていた。

「センパイ、ユーノ。クロノはお役所仕事なんだよ。期待しちやダメだって」

ウラタロスがモモタロスを治めようとするが、明らかにクロノに対しての挑発だ。

クロノの額に更に青筋が浮かび上がっていた。

「ここは大岡越前みたいに気の利いたところ見せたら株が上がるかもしれへんのかなあ」

キンタロスが名奉行と名高い人物の名前を挙げながらもやっぱり煽っていた。

ちなみにキンタロスの言っている大岡越前は歴史上人物というよりはテレビで放映されていた時代劇の「手のつけられない八代目將軍」の方だが。

クロノの額に青筋がまたまた増えた。

「なーんだ。偉そうなこと言ってるダメじゃん。黒いの」

リュウタロスが冷やややかに言い放つ。

クロノの全身が震えて、挑発したイマジジン四体にユーノ、なのは、コハナを睨みつける。

「わかった!!そこまで言うならこうしよう!野上良太郎が帰還したらフェイトとの面会は許可する!それでどうだ!?!」

クロノは肩を揺らせて大声で言い放つ。

クロノの提示した条件を聞いて、ユーノ、なのは、エイミイはほぼ絶望的だと感じた。

対して、イマジン四体の反応はというと、

「何だよ。そんな条件でいいのかよ」

「思ったよりいい条件だね」

「それやったら、面会できる日も近いな」

「よかったね、なのはちゃん。面会できるよ！」

絶望どころか物凄くポジティブだった。

「みんな、良太郎が帰ってくるって本気で信じているのよ」

「ハナさん……」

なのはの肩を置いて、イマジン達がポジティブな理由を言った。

コハナの表情も暗くなく、良太郎が帰ってくると信じているのだ。

「でも、虚数空間の中に……」

ユーノがそれは有り得ないと言おうとする。

だが、

「それでも帰ってくるよ。アイツは」

モモタロスは大声で張り上げたりせずに告げた。

帰ってくるのが当たり前のように。

「当然でしょ」

ウラタロスも帰ってきて当たり前といった口ぶりだ。

「こんな事は一度や二度やないんや。良太郎は帰ってくるで」

キンタロスも確信と自身を持って言う。

「だーいじょうぶ！良太郎は必ず帰ってくるよ！なのはちゃん、フェレット君」

リユウタロスはブイサインしてなのはとユーノの不安を取り除こうとする。

「虚数空間の中に入ったんだよね？良太郎君」

エイミイが確認するかのようクロノに訊ねる。

「……そうなんだが、どうなんだろう」

イマジン達の有り得ないまでの自信に満ちた姿を見て、クロノも良

太郎が本当に虚数空間の中に入ったのかどうか確認しなくなった。

*

「う……ん、ここは？」

良太郎の閉じていた瞼がゆっくりとだが、開き始める。

意識がハッキリすると同時に、冷氣のようなものが身体にひしひしとぶつかってきた。

起き上がって、周囲を見回す。

見覚えはあるが、何かが違っていた。

華やかな雰囲気がなく、生氣のようなものがまるで感じられなかった。

室内全体もどこか薄暗くお化け屋敷の中にいるようにも思えた。

室内照明が蛍光灯などの電化製品でなく、蝋燭になっているから余計にだろう。

「虚数空間を抜けた、のかな？」

良太郎は虚数空間に吸い込まれて数秒で意識をなくしているのだのようにして、ここに流れ着いたのか経緯がわからない。

今自分がいる建造物は虚数空間の中に存在しているのか、それとも虚数空間を抜けた先に存在しているものなのかハッキリとさせたいところだった。

「プレシアさんやアリシアちゃんがない？」

もしかしたら自分と同じ様にこの場所のどこかにいるかもしれないと考える。

軽くその場で体操をしてから、プレシアとアリシアを捜すために動こうとした時だ。

「あ、お兄さん」

聞き覚えのある声が背後からした。

振り向いてみると、フェイトと瓜二つの少女がこちらに走り寄ってきた。

全裸ではなく服を着ており、髪もツインテールにしている。

リボンは黒色で、服も黒色だった。

良太郎はこの少女がフェイトでない事を知っている。

フェイト誕生の鍵となった少女——アリシアだ。

「アリシアちゃん？」

アリシアは既に死亡している。自分の前に二足歩行で駆け寄ってくるはずがない。

彼女は蘇ったのだろうか。

という事はここはプレシアが夢見た『アルハザード』という場所なのだろうか。

情報が少なすぎるので、自身が持っている情報で現状を把握するしかない。

「うん！そうだよ。お兄さん久しぶり！」

アリシアは良太郎の疑問など気にすることなく明るく挨拶する。

アリシアは左手を良太郎の前に出す。

再会の握手を望んでいるのだろうと判断すると、良太郎も左手でアリシアの手を握る。

「!!」

その瞬間、良太郎は大きく目を開いた。

今、握手しているアリシアの正体に気づいたのだ。

アリシアは生き返ったわけではないということに。

カツンカツンと何かが床を叩く音がこちらに近づいてくる。

「アリシア……何故？」

床を叩きながら、こちらに歩み寄ってきたのは杖を支えにしないと満足に立つ事もできないプレシアだった。

「お母さん！」

アリシアが笑顔でプレシアに寄る。

プレシアには何故アリシアがこのような状態になっているのか理解できていない。

「どういふこと？野上良太郎」

プレシアはここがアルハザードとは思っていないらしい。

それにプレシアは『アリシアの死』を受け入れて行動してきたのだ。

『アリシア蘇生』も『アルハザードへ向かうためにジュエルシードを収集する』こともすべて『フェイトの未来を守る』という真の動機を隠

すためのカモフラージュでしかない。

「お母さん？」

アリシアは母親が自分に対して見せる反応に寂しさのようなものを感じているようだ。

「アリシア、貴女はどうして？その……」

プレシアはしゃがんでアリシアの頬に触れる。

「!!」

プレシアは何か気づき、良太郎に顔を向ける。

「これは一体どういうことなの？アリシアは言葉も発しているし、動いてもいる。なのに……、なぜ身体がこんなに冷たいの!？」

プレシアは良太郎に意見を求めている。

「……アリシアちゃんは生き返ったわけじゃないんですよ」

良太郎はこのような状態になっている人物に心当たりがあった。

幽霊列車に乗車していた二人——死郎とソラだ。

あの二人に今のアリシアは似ていた。

それはつまり、人間としてのメリットとデメリットが逆転した事になる。

老化しないが成長もしないということだ。

「その通りでえす」

聞き覚えのある声だったので良太郎は声のする方向に顔を向ける。

プレシアとアリシアも釣られて同じ方向に顔を向ける。

愛想のよい笑顔を向けて中年もしくは初老の男が歩いてきた。

「え……き……長？」

その人物はデンライナーのオーナーと瓜二つといってもいい容姿で百八十度違う表情を浮かべたオーナー同様、国籍不明の本名不明で『駅長』と呼ばれている男だった。

ただ、良太郎が知る駅長は全身白づくめなのに対して、自分の目の前にいる駅長は喪服のように全身黒づくめだった。

「てことは、ここはターミナルですか？」

駅長がいるということは今自分がいる場所がどういいうところなのか凡そに理解し始めた。

良太郎が訊ねると黒い駅長——黒駅長が首を縦に振る。

「たしかに、ここはターミナルですよ。ただし、君が知っているターミナルとは違い少々特殊ですがあ」

良太郎が知っているターミナルとは『未来への分岐点の管理』を主にしている巨大な新幹線型の『時の列車』でキングライナーのことだ。

「ターミナル？」

「何ソレえ？」

プレシアとアリシアには馴染みない単語なのだから疑問顔を浮かべるのは当然の事だ。

「ええと、どういえばいいのかな……」

ターミナルの事を説明するとなると『時の運行』のことを全て話さなければならぬため、それを上手く説明できる自信は良太郎にはなかった。

「この事は後々説明しますが、まずはアリシアさんのことを説明させていただきます。お二人が感じられているようにアリシアさんは蘇った、つまりですねえ。死者から生者に戻ったわけではないですよ」

「では、今のアリシアは何なの？」

プレシアは黒駅長に問い詰める。

「ぐっ！(っ)ほっ(っ)ほ……」

口元を手で押さえてしまう。

「お母さん！」

アリシアが心配そうにプレシアの側による。

「だ、大丈夫よ……」

プレシアは必死で笑みを浮かべて返す。

「そちらの方は体調がよくありませんねえ。ここは只でさえ生者で時間の干渉を受けている存在にとっては居心地の悪い場所ですからねえ。では簡単に説明しますと、アリシアさんはアルハザードの秘術でいまの状態になっているのですよ。ここにはアルハザードのテクノロジーがいくつもありますからねえ」

黒駅長の説明は続く。

「結論から申しまして、今のアリシアさんは死霊なのですよ。それらの貴方は今のアリシアさんと同じ方々と面識がありますよねえ」

黒駅長は良太郎に確認するかのよう告げる。

「はい」

「その方々と同系だと思ってくださいあい」

「お兄さん、どういうこと？わたし、変になったの？」

アリシアが不安げな表情で良太郎の上着の裾を引っ張る。

「ええとね、アリシアちゃんはこうして僕やお母さんと話しをしたりできるし、このターミナルから離れて生活も送れるんだよ。でもね、生き返っているわけじゃないから成長もしないし、老化もしない。それに既に死亡しているから死ぬ事もないんだ」

「ふろーふし、なの？」

「……そうなる、ね」

良太郎がアリシアと話をしていると、横からガシャンという音が流れた。

「お、お母さん！」

「プレシアさん！」

床を血で塗らし、プレシアが前のめりに倒れた。

「これはいけません。幸いここには医療施設もありますからすぐに治療に取り掛かりましょう」

黒駅長が言うと同時に、いつの間にか黒駅長と同じ服をした駅員達がストレッチャーを持って現れ、プレシアを乗せて医務室へと向かった。

それから数時間が経過した。

良太郎はケータロスでマメに時間をチェックしていたから時間の流れを感じることができたのだ。

「お兄さん、お母さん大丈夫だよ？死んだりしないよね？」

アリシアは両目に涙を浮かべながら隣に座っている良太郎に訴えるように訊ねる。

「……大丈夫。そう信じよう。アリシアちゃん」

良太郎はアリシアの手に自分の手を重ねて元氣付けた。

医務室から手術着を来た黒駅長が出てきた。

「お母さんはどうなったの!?!」

アリシアが食ってかからんとする剣幕で訊ねる。

「大丈夫ですよお。先程も言ったように、ここにはアルハザードのテクノロジーもいくつかありますからねえ。プレシアさんを蝕んでいた病魔は現代の医療では難病扱いですがあ、どうにか上手くいきましたあ」

黒駅長が笑顔で答え、良太郎とアリシアは手を取り合って喜んだ。

「良太郎君。プレシアさんが貴方にお話があるので、どうぞお。ただし、まだ治療が終えて間もないので長話は駄目ですよお」

良太郎とアリシアはプレシアが療養している医務室へと入っていった。

医務室に入ると、医務室御用達の衣装を着ているプレシアが天井を見上げているかたちでベッドにいた。

「野上良太郎、アリシア……」

顔色も先程よりずっとよくなっており、良太郎もアリシアも胸をなでおろす。

プレシアは顔を良太郎に向ける。

「アルハザードのテクノロジーで治療を受けながら、あの駅長の言っていた事を考えていたわ。アルハザードとはもしかして死者の国かもしれない、とね。そしてここは生者と死者——正確には現世と常世を監視する場所ということもね」

「僕も同じ事を考えていました。幽霊列車の始発駅及び終着駅は恐らく、このターミナルの奥にあるアルハザードだ」と

良太郎の考えでいくと、幽霊列車はあらゆる世界の死者を乗車させながら走行している事になる。

どうやって、別世界に移動するかはわからない。

自分達と同じ様な手口を使うのかもしれないし、幽霊列車独特の方法があるのかもしれない。

今考えても仕方ない事だが。

「お二人とも聡明ですねえ。まさかこのターミナルやこの奥にあるア

ルハザードの正体にまで気づいてしまいましたかあ。できればこの事は内密にお願いしますよお」

黒駅長が手術着から元の制服に戻って入ってきた。

「言いませんよ。言っても信じてくれそうにないし……」

良太郎は言いふらして変人呼ばわりされたくないのです、黙る事を了承した。

「助かりますう」

黒駅長は愛想良く頭を下げた。

「そう言えば駅長」

「何でしよう？」

「僕ってここから元の場所——アースラがある次元空間に帰れるんですか？」

良太郎は本来ならば一番最初に黒駅長に訊ねなければならないことを今さらになつて訊ねた。

「帰れますよお。ここは希望者以外は強制的に送還されるようになってますからねえ」

良太郎はここにいてもつもりはないので、送還されるといふ事だ。

それでも、気になることがあるのでそれだけは解決させておく事にした。

「プレシアさん」

「何かしら？」

「これからどうするんですか？」

良太郎が気になること。それはプレシアのこれからのことだ。

プレシアとフェイトは現在、物理的には完全に手の届かない場所まで離れている。

プレシアがここにいて望まないなら自分同様に強制送還されるだろう。

「その質問は愚問よ。野上良太郎」

プレシアは笑みを浮かべている。

それは狂った笑みではなく、穏やかな笑みだ。

「それに、私は死んでいるのと同じよ。本来ならば虚数空間の中を

延々と漂っているはずなのだから」

その台詞で良太郎には理解できた。

プレシアはここに残るのだと。

「本当にそれでいいんですか？」

良太郎は確認するようにもう一度訊く。

「私はフェイトの未来を守れるなら何もいらな思っていたわ。アリシアともう一度共に過ごせる機会をもらえただけで十分よ」

プレシアは穏やかだが譲らない輝きを帯びた瞳をしていた。

「お母さん！」

アリシアがプレシアの手を小さな両手で包むようにして握る。

「貴女の本心をフェイトちゃんに伝えてもいいですか？」

「私との一騎打ちで貴方は私に勝っていたでしょうね。いいわよ。貴方の条件を呑むわ」

プレシアは良太郎の要求を呑んだ。

「僕がフェイトちゃんの元に帰ってあげて、という要求を突きつけるとは思わなかったんですか？」

プレシアは顔を正面に、天井を見上げる状態にしてから口を開く。

「それはないわ。貴方はお人好しでしょうけど、一時の情に流されるような甘い男ではないはずよ。でなければ私達の真実を受け止める事はできないでしょうね」

プレシアは良太郎に称賛の言葉を送る。

「お兄さん、ありがとう！」

アリシアが良太郎に頭を下げて礼を述べた。

良太郎にはアリシアが自分に感謝の言葉を述べたのか理解できない。

「アリシアちゃん、どうして？」

「わたしが見た夢通りにわたし、もう一度お母さんと一緒にいられるんだもん！お兄さんのおかげだよ！」

「僕は……、何もしていないよ」

首を横に振って否定の態度を取る。

「ううん。お兄さんがわたし達の事を知って、それでも頑張ってくれ

たからこうなったんだと思うよ！」

アリシアは良太郎の否定を更に否定した。

「アリシアちゃん……」

「未来のわたし、じゃなかった……フェイトの事をお願いね。お兄さん」

「私からも、フェイトの事をよろしくお願いします」

アリシアとプレシアがフェイトの事を良太郎に懇願した。

「……わかりました。最善を尽くします」

良太郎にはそう応えるしか出来ない。

自分の世界の事などを考慮しての事だ。

二人は感謝の言葉を述べない。その代わりに、満足げな笑みを浮かべていた。

「ええとお。そろそろ良太郎君を送還させたいのですがあ、よろしいでしょうかあ？」

今まで黙っていた黒駅長が三人に確認をする。

「お願いします」

良太郎は黒駅長に答えた。

「わかりましたあ。それではターミナルをステーションモードからライナーモードに切り替えまあす」

黒駅長はそう言って、ピーと笛を鳴らした。

*

次元航行艦アースラでは各々が自由に行動していた。

ユーノとクロノは負傷した武装局員に治癒魔法をかけていた。

なのははフェイトとアルフが収容されている護送室の前に立つて、二人のことを案じていた。

モモタロスも護送室の前に立つが、後頭部を搔いてすぐに食堂に戻った。

ウラタロスはメインモニタールームで変化がないか、チェックしたりしていた。

キンタロスは食堂でドンと構えているように見えて、実は寝ていた。

リユウタロスはその隣で持参したクレヨンとスケッチブックで絵を描いていた。

コハナはエイミィに頼んで電王に関するデータを全て消去してもらっていた。

そんな日が何日か繰り返されていた。

それから数日後。

会議室では主なアースラススタッフとリンディ、クロノ、エイミィがなのは、ユーノ、イマジン四体、コハナ、そして良太郎の功績を称えて感謝状を授与していた。

なのはは感謝状や賞状関連を貰うのが初めてなのか表情が強張っており、隣にいるユーノが小声で「リラックス。リラックス」と小声で言ったりしていた。

チームデンライナーも受け取りはしたが、『過去の物』を未来に持って帰るわけにはいかないので感謝状をなのはに渡す事にした。

感謝状を受け取り、会議室を出て廊下を歩くチームデンライナー、なのは、ユーノ、クロノ。

「クロノ君」

なのはが歩く足を止める。

廊下を歩いていた全員の足が停まる。

「フェイトちゃんはこれからどうなるの？」

クロノは口を開く。

「事情があったとはいえ、彼女が次元干渉犯罪の一端を担っていたのは紛れもない事実だ」

なのはは表情は暗くなる。

ユーノも予想はしていたが、それでも暗い表情になる。

イマジン四体もコハナも黙って聞いている。

クロノは続ける。

「……重罪だからね。数百年以上の幽閉が普通なんだが……」

「そんなー」

なのはが非難の声を上げようとする。

「なのはちゃん、落ち着いて。それじゃセンパイみたいだよ？」

ウラタロスが両手をなのはの両肩に置いて宥める。

クロノが咳払いをしてからまた口を開く。

「なんだが！状況が特殊だし、彼女が自らの意思で次元犯罪に加担していなかった事もハッキリしている。後は偉い人にその事実をどう理解させるかなんだけど、その辺にはちよつと自信がある。心配しなくていいよ」

その言葉になのはの表情は明るくなる。

「何だよ。脅かしやがって」

モモタロスが安堵の息を吐く。

「もつたいぶりすぎだよ。クロノ」

なのはを押さえていたウラタロスがクロノにちよつと非難をぶつける。

「できるならできるって早よ言わんかい」

キンタロスがクロノの遠回しな口ぶりに痺れを切らして、文句を言う。

「だから、黒いのって呼ばれるんだよ。オマエ」

リュウタロスが無茶苦茶な理屈をクロノにぶつける。

「貴方達はああああ!!」

あまりの辛口に切れたクロノはS2Uを手にして構えていたが、イマジン四体は既に逃亡していた。

食堂にはなのは、ユーノ、リンデイ、コハナ、そしてクロノから無事逃げ切る事ができたイマジン四体が席に就いていた。

「次元震の余波はもうすぐ治まるわ。ここからなのはさん達の世界に
なら明日には戻れると思う」

リンデイが現状と今後を話してくれた。

「よかったあー!」

なのはは明日には帰れると聞き、素直に喜んだ。

「ただミッドチルダ方面の航路はまだ空間が安定しないの。しばらく時間がかかるみたい」

リンデイの言葉はユーノに向けられた言葉だ。

「そうなんですか……」

こればっかりはどうしようもないものだと言っているのにそう言うしかない。

「数ヶ月か半年か安全な航行ができるまで、それくらいはかかりそうですね」

「そうですか。その……まあ、ウチの部族は遺跡を捜して流浪している人達ばかりですから……。急いで帰る必要はないといえませんが……。でもその間、アースラ

（こ）

にお世話になるわけにもいかないし……」

ユーノは帰る帰れないで焦っているわけではない。ただ、その間の衣食住が気になっているようだ。

「じゃあ、ウチにいればいいよー!」

なのはが衣食住を提供した。

「今までどおりに!」

「なのは、いいの?」

なのはの申し出はとても嬉しい。

今までどおりということはフェレットとして生活する事は必須だろうと予感していた。

「うん! ユーノ君さえよければ」

ユーノはそれでも少々迷う。

「いいじゃねえかよ。世話になりやあよ」

「女の子の厚意を断るのは男としてどうかと思うよ? ユーノ」

「なのはの家以外に住むとこないんやろ? 甘えとけ甘えとけ」

「甘えとけー」

イマジン四体はユーノに高町家に世話になるように薦める。

「じゃあ、その……お世話になります」

ユーノはなのはの厚意に甘える事にした。

「うん!」

なのはは笑顔で応じた。

リンデイとコハナはそんな二人を笑顔で見ていた。食堂のドアが開いた。

S2Uを構えて興奮気味のクロノと寝ぼけ眼でそれを押さえたいるエイミイが入ってきた。

「クロノ君。やめてー、私眠いんだよー」

「離してくれエイミイ！今日という今日は彼等を許すわけにはいかないんだ！」

食堂にいる全員が二人と目を合わせたが、敢えてスルーすることにした。

「あの人が目指していたアルハザードについては、ユーノ君は知っているわよね？」

リンディは確認するかのようにユーノに訊ねる。

「はい、聞いたことがあります。旧暦以前の前世紀に存在していた空間で、今はもう失われた秘術がいくつも眠る場所だって……」

ユーノは自身が得ている情報を全て話した。

「だけど、とつくの昔に次元断層に落ちて滅んだっていわれている」

クロノが割り込んだ。

「あらゆる魔法がその究極の姿に辿りつき、その力をもってすれば叶わぬ望みはないときえいわれたアルハザードの秘術。時間と空間を遡り、過去さえ書き換えることができる魔法。失われた命をもう一度蘇らせる魔法。彼女はそれを求めたのね」

「はい……」

なのはは黙って聞く。

「でも、魔法を学ぶ者なら誰もが知っているんだ。過去を遡る事も死者を蘇らせる事も決してできないって……」

ユーノが魔導師が行き着く現実を告げる。

チームデンライナーも黙って聞いている。

クロノが付け加えるように言う。

「だから、その両方を望んだ彼女はおとぎ話に等しいような伝承にか頼れなかった……」

「でも、あれだけの大魔導師が自分の命さえ賭けて捜していたのだから、もしかして本当に見つけたのかもしれないわ」

リンディはプレシアなら発見したのかも、という説を唱える。

チームデンライナーはハラOWN親子のやり取りに口を挟まない。彼等は知っている。

プレシアのアルハザード探しが実は嘘であるということ。

周囲を頷かせるための偽りの大義名分でしかないことを。

『前方より、未確認物体が接近！』

このようなアナウンスが流れ、一行はメインモニタールームに向かう。

メインモニターには、紫色をメインカラーにした異形の物体がアースラの前方に停まっていた。

「「「キングライナー？」」」

モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リユウタロス、コハナは声をそろえてメインモニターに映る物体の名称を口にした。

第四十一話 「ラストライブ D・M・C」

次元航行艦アースラのメインモニターに映っている物体。つまり、こちらに向かっているそれを見てモモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、コハナは揃えて口に出した。

「二「キングライナー？」三」

四体と一人が口には出したが、自信を持ってその名を告げたわけではなかった。

理由としては知っているキングライナーとモニターに映っているキングライナーはカラーリングが違っているからだ。

通常、『時の空間』で分岐点の監視を行っているキングライナーは赤色をメインカラーとしているのに対し、アースラと向かい合うかたちになっているキングライナーは紫色でどこか不気味な雰囲気を漂わせていた。

正直、あまり直視したいものではない。

『ええ、そちらは時空管理局が所有する次元航行艦アースラですかあ？』

メインモニターの画像が切り替わり、人のよさそうな感じの壮年あるいは初老とも呼ぶべき男性が映った。

『私は、駅長という者ですう。実はですねえ。迷子を一人回収しましたのでお返しに参りましたあ』

「迷子？」

リンディ・ハラオウンは迷子と呼ばれているのが誰なのかわからない。

正直に言えば緊張感が解けているので、いつもの明晰な頭脳が少々弛緩しているといっても過言ではない。

「次元漂流者なのかな？」

「いや、アースラを名指ししているところからすると僕達の知り合い……まさか！」

エイミイ・リミエツタも脳の働きが弛緩しているが、クロノ・ハラオウンはいつものように平静を保って、今一番起こりうる可能性を考

えた。

チームデンライナーの面子はというと。

「あのオツサン。服変えたのか？」

「別人じゃないの？」

モモタロスとウラタロスが駅長の服装に疑問を持つ。

彼等の知る駅長は白服だが、映っている駅長は黒づくめの喪服だった。

「あの人もオーナーや俺等が知つとる駅長とは他人やろか？」

「絶対に他人だつて言いそうだよねー」

キンタロスとリュウタロスはオーナーと自分達が知っている駅長とモニターに映っている駅長は他人なのか近親者なのかが気になるようだ。

イマジン四体は割と能気な会話をしていた。

彼等にとって野上良太郎の帰還はいわば絶対なので、勘繰る必要のないことなのかもしれない。

「あの、もしかしなくてもその迷子というのは……」

コハナが代表して黒駅長に尋ねる。

『野上良太郎君の事ですよお』

黒駅長の一言でアースラの内部は喜びの声が一気に湧き上がった。

「良太郎さん！帰つてくれたんだ！」

「うん！虚数空間の中からどうやって帰つてこれたのかは気になるけどよかったよー！」

高町なのはとユーノ・スクライアは手を取つて喜んでいた。

「な、俺達の言つたとおりだろ？」

モモタロスが喜び合っている二人の頭をポンポンと叩く。

「クロノ、約束は守つてよね？」

ウラタロスがクロノに『約束』の実行を要求する。

「……わかっている。僕はそんなに約束を破棄するように見えるのか？」

クロノは頷くが、その表情は悔しさよりも驚きと呆れと喜びが混じっていた。

「屁理屈こねて誤魔化しそうな気はするわな」

「オマエ、頭ガツチガチだもん」

キングタロスとリュウタロスの辛口評価しか出なかった。

「……エイミイ」

「なにになに？クロノ君」

「僕は明るくなった方がいいのだろうか……」

「え？クロノ君、病気？」

クロノは自分の性格を見つめ直したくなったのか、一応年長者であるエイミイに訊ねた。

だが、エイミイに病人扱いされたので見つめなおす事をやめた。

『あのお、皆さん。盛り上がっている所を大変申し訳ありませんが、良太郎君の引取りをお願いしたいのですがあ』

リンデイは弛緩した頭脳をフル回転させて、明晰な頭脳へと切り替えて黒駅長から教えてくれたキングライナーの座標を送るように黒駅長に依頼した。

それから数秒後に黒駅長からキングライナーの座標を入手し、良太郎の身柄を引き取った。

紫色のキングライナーは良太郎の身柄を渡すと同時に、空間の中に入り込んでその姿を消した。

護送室の中ではアルフの膝を枕にして眠っていたフェイト・テストアロツサの閉じていた瞼が開いた。

彼女の手には手錠、服装は囚人服とまではいかないがはっきり言って子供が喜んで着るようなものではない質素なものだった。

「……なに？騒がしいけど……」

フェイトはゆっくりと起き上がり、アースラ内が妙に騒がしくなっている事をアルフに訊ねた。

「ああ、フェイト起きたのかい」

「アルフ、何で騒がしくなってるの？」

フェイトはアルフに訊ねるが、アルフも渋い顔をしていた。

「ドア漕しの声や艦内アナウンスだけじゃ、どういう事になってるかはよくわからないんだけどさ。何かアースラの前に未確認の物体が

現れたらしいよ」

「未確認の物体？何なんだろう……」

「何なんだろうねえ」

フエイトとアルフは『未確認物体』について考えるが、どんなものなのか想像する事もできなかった。

護送室のドアが突然開いた。

「フエイト・テスタロッサ、アルフ。面会の許可を出したので、食堂に来るように」

ドアの開いた先に待ち構えていたのはクロノだった。

「え？」

護送室の中にいる二人にはクロノが何を言ったのか理解できなかった。

「なあ、アンタ」

「ん？」

「何でアタシ等に面会の許可が出たんだい？出せるほど軽い罪でもないだろうに……」

アルフが代表してクロノに訊ねる。

フエイトもアルフも自身の意思ではないとはいえ犯罪に荷担している意識は持っている。

「君と面会を希望する者達がいてね。だが、場合が場合なんで二つ返事で許可するわけにはいかない。だから、僕はひとつの条件を出したんだ。その条件がクリアされたから君達を今、食堂に連れていっているわけさ」

クロノは面会の許可が出るまでのあらましを二人に説明した。

「その条件って、何？」

フエイトがクロノが出した条件の内容を訊ねる。

「野上良太郎の帰還だよ」

内容を聞き、二人の目が大きく開いた。

「りよ、良太郎。帰ってきてるの？」

「う、嘘だろ!?虚数空間の中に落ちてんだよ!?普通、帰ってこれないって……」

フェイトもアルフも魔法に携わる者だ。

良太郎が落ちた空間がどんなものなのかも知っている。

魔法に携わる者の常識として見れば、『絶対に帰ってこれない』と結論付けてしまうものだ。

だが、今自分達が置かれている状況を考えると、その常識が覆された事になる。

(そうだよ。良太郎は、わたし達の常識をいつもいつも覆してきたんだから。今度だってそうなんだよ！)

フェイトは俯いていた顔を真っ直ぐに上げて、歩き出した。

「行こう。アルフ」

「うん！」

フェイトとアルフは食堂に向かって歩き出した。

一歩一歩が先ほどとは違い、力強かった。

二人の背中を見てクロノはつぶやく。

「どこか虚ろだった彼女達に活力が戻った。彼女達にとって貴方はとても大きい存在なんだな。良太郎」

クロノは早歩きで向かう二人に追いついて先導した。

フェイトとアルフが食堂に入ると、そこにはイマジン四体、コハナ、なのは、ユーノ、リンデイ、エイミィに先程帰還したばかりの良太郎がいた。

良太郎とフェイトの目が合う。

良太郎は席から立ち上がり、どこか申し訳なさそうな表情を浮かべている。

「あの……えと……。た、ただいま」

良太郎の声を聞いた瞬間、フェイトの瞳に涙が浮かび上がる。

帰ってきて嬉しい。

自分達の家庭問題のとばっちりを受けさせてしまったことへの罪の意識。

そして、自分を最後まで信じてくれた事への感謝。

そういった感情がないまぜになっていた。

「おかえり、ごめんなさい、ありがとう。良太郎……」

感情を整理する事ができなかつたため、こんな妙な迎えの言葉しか出せなかつた。

「うん。ただいま、あとフェイトちゃんが謝る事はないよ。そして、どういたしまして」

良太郎は全てに対応した。

「良太郎、アンタどうやって?!」

アルフは良太郎に帰還した方法を問い詰めようとする。

「まあ、その……色々と」

良太郎は適当にはぐらかした。

それだけでフェイトもアルフもそれが、触れてはいけないものなのだと察する。

食堂内の空気が微妙に重くなるうとしているときだ。

ぐぎゆるるるううううう

妙な音が食堂内に響いた。

「……ごめん。ここに帰ってくるまで何も食べてなかつたから」

良太郎は後頭部を掻きながら苦笑いを浮かべている。

「つたく、そんなこと言ったら俺も腹減っちゃまうじゃねえかよ」

モモタロスが腹を擦る。

「そういえばさつき食べそびれたもんね」

ウラタロスが冷静に事実を述べる。

「腹が減っては何もできんからな」

キンタロスは威張れる事でもないのに腕を組んで言い放つ。

「僕、お腹すいたー」

リュウタロスも自身が空腹である事を隠そうとはしなかつた。

「それじゃ、皆さん一緒に食べましょうか?」

リンデイの一言に誰もが諸手を挙げて喜ぶ。

「えと、その……、わたし達も?」

「それっていいのかい? アタシとしてみれば願ったり叶ったりだけどさ……」

リンデイの言う『皆さん』に自分達も含まれているのか訊ねるフェイトとアルフ。

「ええ、もちろんよ。クロノ、フェイトさんの手錠を」

「はい」

リンディの指示でクロノはフェイトの両手にかけている手錠を外す。

「食後にはまた付けるからそのつもりで」

「はい」

面会が許可されたといっても、彼女の立場が変わるわけではないのだ。

クロノの釘を刺す一言にフェイトは頷く。

それぞれの食事がテーブルに置かれて全員が席に着く。

そこから先は凄まじいものだった。

良太郎とイマジン四体は飢えた獣のように食事に手をつけては空にして、追加注文を頼んでいた。

その様に、たくさん食べようと密かに思っていたのはは一瞬にして、普通に食べる事を選んだくらいだ。

一人と四体の周りには皿が山のように積まれていく。

良太郎が空になった皿を積み、何か別の料理を捜そうとするが良太郎の前にカレーライスが置かれていた。

「はい。良太郎」

フェイトが置いてくれたのだ。

「ありがとう」

笑みを浮かべて礼を言うと、スプーンを手にしてカレーを食べ始めた。

「あ……」

パンをちぎって食べながら、なのははとあるものを見て目を丸くした。

「どうしたの？なのはは……。あ……」

ユーノは手を止めているのはが見ているものを見てみることにする。

二人は見た。フェイトが今までみたことがない表情で良太郎を見ていることを。

「フェイトちゃんのおんな顔初めて見たよ」

「うん、きつと良太郎さんがフェイトの閉じ込めていた感情を少しずつ引き出していったんじゃないかな」

「そうだね」

それはとても幸福に満ちている表情だった。

食事も粗方終わり、それぞれの今後の身の振り方について話し合うことになった。

「俺達は、なのはが海鳴に帰る時に一緒に行くぜ」

「やり残した事があるしね」

「そうや。それをやらんと俺等は帰るに帰れんしな」

「うん！」

「そうね。まだやり残した事あるもんね」

イマジン四体とコハナは海鳴で何かやり残した事があるといって明日海鳴に戻る、なのは、ユーノと同行する気だ。

「良太郎はどうするの？」

コハナは良太郎がその間、どこで何をするかを訊ねる。

「僕はここにいるよ。フェイトちゃんとは面会可能になっているから話し相手にはなれるからね」

「ありがとう。良太郎」

手錠をかけられたフェイトが良太郎の厚意に甘える事にする。

「アンタ、やっぱいいヤツだよ！良太郎」

アルフは良太郎の両肩をバシバシと叩く。

「アルフさん。痛いって……」

力いっぱい叩くアルフに良太郎は抗議し、他の面々はそれを微笑ましく見ていた。

翌日となり、なのは、ユーノ（フェレット）、モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リユウタロス、コハナを海鳴に送る日となった。

見送り人としては良太郎、リンデイ、クロノ、エイミイが転送ポイントにいた。

ちなみにフェイトとアルフは護送室の中だ。

「それじゃ、今回は本当にありがとう。皆さん本当にお疲れ様でした」

リンデイがこれから海鳴に向かう全員に感謝の言葉を述べる。
「協力に感謝する」

クロノがなのはに握手を求める。
なのははそれに応じた。

「フェイトの処遇は決まり次第、連絡する。大丈夫さ、決して悪いようにはしない」

クロノはそう皆に告げた。

「ハナさん。貴女達の回収は私達のタイミングに任せるって事でいいのね？」

「はい。私達のやる事というのはこの二、三日で終わることなので、それ以降ならいつでも回収してください」

リンデイが確認するように訊ね、コハナは丁重に答える。

「ユーノ君も帰りたくなったらいつでも連絡してね。いつでもゲートを使わせてあげる」

「はい！ありがとうございます」

リンデイがユーノに対して、今後の事について教えてくれた。

エイミイが転送ポートを起動させるためにキーボードを手際よく叩く。

「じゃあ、そろそろいいかな？」

エイミイが名残惜しそうな顔をする。

「またね。クロノ君、エイミイさん、リンデイさん。良太郎さんもありがとう」

なのはが、時空管理局員十良太郎に別れの言葉を送る。

見送る側は手を振って送る。

それから数秒後なのは、ユーノ、モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、コハナは光に包まれて消えた。

*

海鳴市は澄み切った青空ではなく所々ではあるが雲が泳いでいた。

海鳴公園の空間が光り出して現れたなのは、ユーノ、イマジン四体、

コハナはその場で深呼吸をしてから

高町家へと向かって走り出した。

「「「ただいまあ!!」」」」

「キュキュー!」

なのは、イマジン四体、コハナが玄関前で元気よく声を出した。

その声に恐らく訓練中とも思えるラフな格好をした高町美由希が走ってやってきて、なのはを抱きしめた。

「おかえり、なのは!皆もおかえり!」

「帰ったか」

「ん?」

背後から声があったのでモモタロスが振り向くと、美由希と同じ様にラフな格好をしている高町恭也がいた。

「よお、また少しの間世話になるぜ」

モモタロスが手を軽く挙げて挨拶する。

「また騒がしくなるな」

恭也は口調とは逆に笑みを浮かべている。

「そうでもないよ。ところでさ、道場使いたいんだけど」

ウラタロスが恭也に道場の使用許可を申し出る。

「俺達が使う際に邪魔でなければ構わないが」

「なら使わせてもらうね。ありがとう」

ウラタロスは使用許可を得ると、礼を言う。

「ここにおるんのも、あとちよつとやねんなあ」

キンタロスは高町家を見上げながら、寂寥感がよぎった。

「アリサちゃんやすずかちゃんやサッカークラブの皆は元気かなあ」

リュウタロスはこの海鳴で知り合った人達の事を思い出していた。

「これから私達がすることにみんな呼べばいいじゃない。リュウタ」

コハナはリュウタロスに自分達がこれからすることに皆を呼べばいいと進言する。

「ま、そうになると、なのはちゃん達の力が必要になるけどね」

コハナは海鳴の空を見上げていた。

アースラにいる良太郎達はどうしているのだろうかと思ったからだ。

*

「チェックメイト」

フェイトが白のクイーンをチェス盤において宣言した。

次元航行艦アースラの食堂では良太郎、フェイト、アルフ、クロノがいた。

フェイトが白の駒で良太郎の黒のキングを詰んだ。

「……参りました」

始まって五ターンで良太郎は降伏した。

本来のチェスならまずありえないくらい短時間の戦いだっただ。

ちなみにこのありえないくらい短時間による結果の事を『フルズメイト（馬鹿詰み）』と呼ばれている。

良太郎もフェイトもチェスの経験はないに等しい。

そうなると、この結果はまさにプレイヤーのセンスが大きいのかもしれない。

「また勝ったよ。アルフ」

フェイトは笑みを浮かべている。

「やったじゃないか！しかし、良太郎。アンタ弱すぎないかい？」

アルフは主に勝利に喜ぶが対戦相手のあまりの弱さに呆れる。

「フェイトちゃんの飲み込みがよすぎるんだよ」

良太郎は苦笑交じりに言い訳じみた事を言う。

「この本に書いてあることを憶えただけだよ」

フェイトが良太郎が買ったチェスの入門書を見せる。

「買った僕が言うのも何だけど、よくこの短時間で憶えたね」

良太郎が入門書を捲りながら感心している。

「うん。魔法の理論を憶えるよりはずっと楽だよ」

フェイトは褒められた事が嬉しいのか、饒舌になる。

「魔導師って勉強しなきゃいけないの？」

「当然だろ」

良太郎の質問にクロノが答えた。

何故ここにクロノがいるかというと、彼はフェイトとアルフの監視役だからだ。

二人が逃亡するはずないのだが、体面上はそうしておかなければならないのだ。

「貴方の中では魔導師はどういうもの何だ？」

「生まれついでにの才能が幅を占めるんでしょ？だから何もしなくてもできるんじゃないかって思ってたから……」

良太郎の解釈に魔導師サイドの面々は複雑な表情をしている。

「半分は当たってるが、半分間違ってるな」

クロノが良太郎の解釈をそう評価した。

「うん、確かに先天的な部分もあるけど、勉強したり練習したりしないといけない部分もあるんだよ」

フェイトが笑みを浮かべながら解説してくれる。

（本当に笑えるようになってよかった……）

出会った時から、見たことがない表情があった。

それは笑顔だ。

たまに笑顔を見たことがあるが、それはその場を取り繕うための笑顔であって心の底からの笑顔ではなかった。

だが、今の彼女の笑顔は紛れもなく本物の笑顔だ。

自分が望んでいたものだ。

プレシア・テスタロッツサが命がけで行った行為の結果なのかもしれない。

「どうしたんだい？良太郎、フェイトの顔をじっと見てさ」

「ん？フェイトちゃん、笑ってる方がいいと思ってるね」

アルフが訊ねたので良太郎は思った感想を言った。

「!!……な、何言ってるの。良太郎」

フェイトは頬を赤くし、良太郎から視線をそらすように顔を明後日の方に向ける。

「？」

良太郎は何故フェイトがそんな行動を取ったのかわからない。

「アンタも罪な男だねえ。良太郎」

アルフが含み笑いを浮かべながら良太郎の脇腹をつつく。

「何？アルフさん」

「べっつにー」

アルフはそう言いながらからかう。

クロノが腕時計を見る。

「時間だ。戻ろうフェイト、アルフ」

「うん」

「わかったよ」

フェイトとアルフは了承した。

フェイトの手には手錠がかけられる。

面会可能時間は一日のうちに三時間となっている。

普通の面会時間から考えると明らかに厚遇だ。

「それじゃ、良太郎。また明日」

「じゃーねー」

クロノの先導でフェイトとアルフは護送室へと戻っていった。

一人残った良太郎はチェスの駒を片付けながら、今までのことを思い出していた。

初めて来た別世界でフェイトとアルフに出会ったこと。

住む所がないので居候として生活していたこと。

別世界でのイマジンとの戦闘のこと。

プレシアと出会ったこと。

過去へ行き、プレシアの真意やアリシアの事を知ったこと。

紫色のキングライナーのこと。

辛い事や苦しい事もあったが、それでもやりきれてよかったというのが全てを見つめなおして導き出された評価だ。

フェイトとアルフには既に『プレシアの真意』は伝えてある。

二人の反応は驚きと疑いしかなかった。

当然といえば当然だろう。

自分だってあれが『演技』だなんて過去に行つて真意を聞いていなければ信じる事は出来なかっただろう。

すぐに受け止めれるとは思っていない。

だが、この事を話した後でフェイトの雰囲気が変わったようにも思えた。

「僕がここできてることといえば……」

フェイトとアルフの話相手くらいしかなかった。

「モモタロス達のやり残した事ってやっぱリアルかな……」

D・M・C（電王メンバーズクラブ）のことだ。

*

モモタロス達は高町家の道場を借りて、これから行う事への下準備をしていた。

「といっても機材の設置は完了しており、後は彼等が歌詞を憶えるだけなのだが。」

「ったく、しばらくやってねえとすーぐ忘れちゃうよな」

「一人で全部歌うわけじゃないから憶えるのは楽かなって思ってたけど、自分のパート忘れてたらそれだけで大失敗になるからね」

「明日行うライブはここでお世話になった人達に送る大事なもんや。絶対に失敗はでけへんで！」

「わかってるよ。クマちゃん。僕だって頑張るんだから！」

円陣を組んでモモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロスは歌詞を頭の中に叩き込んでいた。

「みんな！恭也さんと士郎さんに頼んだ件だけど、明日来てくれるって！」

コハナが近況を報告してくれた。

このライブを行うには特定の客が必要になる。

高町士郎には翠屋JFCのメンバーを、恭也には月村家の面々に声をかけるように頼んでいたのだ。

「よっしやああー！」

「あのメイドさん達も来るんだったら張り切らないとね！」

モモタロスとウラタロスは張り切る。

「ハナ、なのはからはどうなんや？」

「まだ、連絡はないわよ。まあ学校なんだから仕方ないけど、結果はなのはちゃんが帰ってきたらわかるわね」

「アリサちゃんやすずかちゃん、来るといいなあ」

リュウタロスはなのはの親友達が来る事を望んでいた。

夜、高町家の食卓はいつも以上に賑やかだった。

高町桃子が腕を揮って作ってくれたのだ。

イマジン四体もコハナも食べる機会が少ないので、じっくりと味わって食べていた。

「モモタロス君。明日最後のライブをやるといつていたが、しばらく海鳴から離れるのかい？」

士郎が餃子を食べているモモタロスに訊ねる。

「まあな」

本当は自分達のいる世界に戻るのだが、士郎に話す訳にはいかなないので相槌を打つしかない。

「……何か寂しくなるね。モモ君達がいるのが当たり前な感じがしてだから……」

美由希が寂しげな表情になる。

「そういつてもらえるのは嬉しいね。美由希さん」

ウラタロスがかに玉を自分の皿に入れる。

「だったら明日も豪勢に作らないといけないわね。何か希望はあるかしら？」

桃子がイマジン達の好みの料理を作るらしく、リクエストを訊ねる。

「おおきに、カミさん。ご厚意感謝するで」

キンタロスは桃子の厚意にいたく感激する。

「僕、ママさんの作ったものなら何でもいいよ！」

リュウタロスが代表してリクエストを出す。といっても、料理は桃子に任せるといったものだが。

「あ。コイツ等、桃子さんが作ったものなら何でも食べますんで、その、桃子さんは気楽に考えて作ってください」

コハナは桃子に変に張り切ることなく、いつも通りに作ってほしいと頼んだ。

コハナ自身、家庭料理というものはさほど縁がない。

普段はデンライナーの食堂でナオミが作ったものを食べているからだ。

「ありがとう。ハナちゃん」

桃子がコハナの頭を撫でる。

コハナは普段では滅多にない出来事に戸惑いの表情を見せた。
コハナの実年齢を知るのはとユーノとしては、苦笑する以外になかった。

*

海鳴でモモタロス達が最終ライブが行う当日。

「フェイトちゃんの処遇が決まった？」

アースラの食堂ではフェイトの処遇が決まったと良太郎はクロノから聞かされた。

「ああ、フェイトの身柄は本局に移動される。そこで事情聴取と裁判を受ける事になる」

「本局？」

「時空管理局の本部の事だよ。正確には管理局二大勢力のひとつの次元航行部隊だけだね」

クロノの隣にいるエイミーがパンをかじりながら解説してくれた。

「それで、フェイトちゃんはどうなるの？」

「多分、いやほぼ確実に無罪になるよ」

「そっかあ」

フェイトが無実確定と聞き、良太郎は安堵の息を漏らした。

「明日、なのはにも伝えるよ。でもその前にフェイトの身柄は貴方に一番最初に教えたかった」

「クロノ、ありがとう」

「……礼を言われるほどの事じゃない」

クロノは明後日の方に顔を向ける。

「クロノ君。照れてるんだよ」

エイミーがからかうような表情で良太郎に解説してくれた。

その後、「照れてない！」とクロノはエイミーに抗議したが良太郎から見てもクロノが照れているのは間違いないことだった。

*

ライブ当日の夜。

高町家道場には普段では絶対に有り得なくらいの人数が座っていた。

高町家全員

月村家長女の忍に、次女のすずか。

月村家のメイドであるノエルとフアリン。

なのはの親友の一人のアリサ・バニングス。

そして、士郎が監督しているサッカーチーム『翠屋JFC』のメンバー達。

大体三十人近くは腰掛けて今か今かと待ち構えていた。

「なのは、モモタロス達って本当に演奏できるの？」

アリサがなのはに訊ねる。

「うん、わたしも一回聞いただけだけどとても凄かったんだよ。ね？
ユーノ君」

「キュキュー（うん）」

なのはとユーノは一度だけ、彼等の路上ライブを観たことがある。

とても凄まじいもので、中には彼等のマネをしたコスプレイヤーまでいたくらいだ。

「大学でも彼等のことを知らない者はいないくらいの人気だからな」

「ええ。私も友達がハマったと聞いた時には驚いたわ」

恭也と忍が通う大学でもD・M・C（電王メンバーズクラブ）の人は凄まじいらしい。

「へえええ。すごいんだあ」

すずかは恭也と忍からの情報を聞いて、目を丸くして驚く。

道場が突然暗くなる。

「D・M・C！D・M・C！」

同時に翠屋JFCのD・M・C信者がいたのか、高らかに声を上げた。

「D・M・C！D・M・C！D・M・C！D・M・C！」

次第に上げる声が増えていく。

「な、なのは。何かすごいことになってるじゃないの!？」

アリサが場内の異様な雰囲気には慄きつつあった。

「みんなもやろうよ！D・M・C！D・M・C！」

なのはは身内の中で先陣を切った。

なのはに釣られて、アリサ達もやり始めた。
道場内はまさにD・M・Cコール一色だった。

「待たせたな！オメエ等！」

「俺達！参上！！」

全員が背後を振り向くと、モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロスが正面に向かって走り出す。

コハナが後始末のように、道場の入口を閉める。

客達は指示されたわけでもないのに、モーゼの十戒のように中心に道を開けるように移動する。

「今日はよく集まってくれたな！最後までクライマックスで行くぜえ！！」

モモタロスが高らかに宣言すると、客達はそれだけでテンションを高くした。

「みんな！今日はありがとう！遠慮なく僕に釣られていいからね？」

ウラタロスの気障な台詞も今の客達にはテンションを高くさせる力がある。

「今日はおおきに！俺の歌声にお前等泣くで！」

キンタロスは感謝と同時に決め台詞をアレンジした台詞を言い放つ。

「みんな！楽しんでいくよね？答えは聞いてない！」

リュウタロスも予言じみた台詞と決め台詞を言う。

ギターを弾き始めるモモタロスとリュウタロス。

ベースを弾くウラタロス。

ドラムを叩くキンタロス。

「よし！！ラストライブだ！行くぜ！テメエ等！！」

「おおおおおお！！」

モモタロスが右腕を振り上げると同時に、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、そして客も釣られるように右手を挙げる。

ウラタロス、キンタロス、リュウタロスは演奏を始める。

そして、全員がそれぞれに設置されているマイクに顔を近付ける。

そして……四人が発すると同時に道場内は大歓声となった。

D・M・Cの海鳴最終ライブは大成功に終わった。

観客全員が興奮状態かつ喜びに満ちた表情で家路に向かっていくのが何よりの証だろう。

道場での機材の片付けも終わり、イマジン四体とコハナ、なのは、ユーノは道場で就寝した。

そして翌日。

なのはの携帯電話が鳴り出し、彼女はそれを手にして開いて見る。画面には「時空管理局」と表示されていた。

最終話 「再会の駅名は未来」

高町なのはが時空管理局からの連絡を受けてから数十分後にはフェレットのユーノ・スクライア、イマジン四体とコハナも連れて、海鳴公園に来ていた。

フェイト・テストロツサ、アルフ、クロノ・ハラオウン、野上良太郎は既に到着していた。

「フェイトちゃん！」

なのはが元気に右手を上げて、フェイトのもとに走り寄る。

左肩に乗っかっているユーノが落ちないように前脚でしがみついている。

フェイトが小さく笑みを浮かべていた。

イマジン四体とコハナは良太郎の元に歩み寄る。

「みんな、終わった？」

良太郎が確認するように訊ねた。

「おう！バッチリだぜ！」

モモタロスがサムズアップする。

「いつでも帰れるよ」

ウラタロスが右腕を曲げて手首にスナップをきかせるいつものポーズを取る。

「お世話になった皆さんには昨日に挨拶しといたしな！」

キンタロスが親指で首を捻らせてから報告した。

「ママさんから貰ったんだよ！帰りにみんなで食べなさいって」

リュウタロスが翠屋の紙箱を両手に持って掲げていた。

「オーナーがリンディさんと話してるから、デンライナーはアースラの側で待機してるって本当？」

「うん。僕達の事でお礼が言いたいとか言ってたよ」

コハナがここに来るまでに携帯電話で良太郎からそのように聞かされた内容を反復するかたちで訊ねる。

「あんまり時間がないんだが、ゆっくり話すといい。僕達は向こうにいるから」

クロノは自分達がここにいると邪魔になるだろうと察して二人から離れる事にした。

アルフ、ユーノ、良太郎、イマジン四体、コハナもクロノに付いて行くかたちで場を離れる事にした。

「ありがとうございます」

二人はその場から離れていく者達に感謝の言葉を述べた。

*

次元航行艦アースラは現在航行せずに次元空間の中で停留していた。

その横にはデンライナーが停車していた。

「この度は本当に感謝してます。良太郎君達を代表してお礼を申し上げます」

デンライナーのオーナーが席に着いたままだが、軽くリンディ・ハラオウンに頭を下げた。

「いえいえ、こちらこそ。良太郎さん達のおかげでイマジンの脅威を退ける事もできましたし、こちらこそありがとうございます」

リンディも席に着いたままだが、オーナーに軽く頭を下げた。

「それにしても、貴方をどこかで拝見した事があるんですけど……」

リンディはオーナーの顔を見て、記憶を探ろうとする。

「気のせいですよ。どこにでもある顔ですからねえ。お気になさらずに」

オーナーはリンディに詮索をすることをやめさせる。

「ナオミ君」

「はぁーい。チャーハンお持ちしましたあ」

アースラの厨房を借りていたナオミが明らかに二人前以上あるチャーハンをオーナーとリンディが向き合うかたちに置いた。

もちろんチャーハンには旗が刺さっている。

デザインはいつものデンライナーやキングライナーではなく、アースラだったりする。

二人の側にはベルが置かれており、いかにも『チャーハン対決』の態勢になっていた。

「良太郎さんから聞かされたときから興味はあったのですが、まさか実践出来るとは思ってみませんでしたわ」

「いえいえ。私としても興味を持っていただいて嬉しい限りですからねえ」

そう言いながらオーナーは持参したトランクケースを開く。

そこには様々な形の金色のスプーンが入っていた。

その一つをリンデイに渡して、自身も一つを手にする。

「それでは……」

「よろしく願います」

二人は対戦相手に敬意を称してから競技を始めた。

*

波が小さく打って橋にぶつかり、飛沫が数滴だがなのはとフェイトがいる橋に飛んだ。

「にやはは。何だかいっぱい話したことあったのに、変だね。フェイトちゃんの顔を見たら忘れちゃった」

なのはは苦笑するしかなかった。

「わたしは……。そうだね、わたしも上手くは言葉にはできない」

フェイトもなのはと似たようなことしか言えなかった。

二人は静かに波を打っている海鳴の海を見ながら話していた。

「だけど、嬉しかった」

「へ？」

なのははフェイトの顔を見る。

「まっすぐ向き合ってくれて」

フェイトもなのはの顔を見て、嘘偽りのない気持ちを告げた。

「うん！友達になれたらいいなって思ったの」

なのはも嘘偽りのない気持ちを笑顔で打ち明けた。

「でも、今日はこれから出かけちゃうんだよね……。モモタロスさん達も今日には帰っちゃうんだ」

なのははフェイトとの別れ、そしてモモタロス達との別れと二重の別れを今日しなければならぬ。

わかっている事だが、寂しいといえば寂しいのだ。

「……そうだね。少し長い旅になるね」

フェイトもなのはとの別れ、そして良太郎との別れの二重の別れをしなければならぬ。

寂しいけれど、仕方がないことだと理解はしていた。

二人とも、寂しい表情で海を眺めていた。

「また、逢えるんだよね？」

なのはがフェイトに訊ねる。

フェイトがなのはの目を見て、笑みを浮かべて強く頷いた。

「少し悲しいけど、やっと本当の自分を始められるから……」

その言葉でなのはは明るくなる。

フェイトはまた、なのはから視線を外す。

「来てもらったのは、返事をするため……」

「え？」

「君が言ってくれた言葉。友達になりたいって……」

「あ……うんうん！」

なのはは若干興奮気味に首を縦に振る。

フェイトはなのはを見ている。

なのはもフェイトを見ている。

両者共に視線は逸らさない。

「わたしに出来るなら、わたしでいいなら……。だけど、わたし……。どうしたらいいのかわからない。だから教えてほしいんだ。どうしたら友達になれるのか……」

なのはは理解した。フェイトは友達のなり方を知らないのだと。

そうになると、良太郎は彼女にとって何だろうかという考えがよぎったが今はフェイトの事だ。

フェイトは不安な表情を浮かべていた。

「簡単だよ」

なのはは元気付ける口調で言う。

フェイトはその言葉に逸らしていた顔をもう一度なのはに向ける。

「友達になるのはすごく簡単」

笑顔でなのはは言う。

フエイトは彼女の笑顔で確信を持ったなのはを見る。
なのはは告げる。

「名前を呼んで。始めはそれだけでいいの。『君』とか『あなた』とか
そういうのじゃなくて。ちゃんと相手の目を見て、ハッキリと相手の
名前を呼ぶの」

なのははそうすることで友達をつくってきたのだ。

「わたし、なのは。高町なのは。なのはだよー!」

なのはの口調はフエイトにそう呼んでもらいたいように催促する。

「なのは……」

「うん!そう!」

初めて呼んでもらえたのでなのはは嬉しく頷く。

「な、の、は……」

なのはの目を見てフエイトは呼ぶ。

「うん!」

なのはは頷く。

「なのは」

今度はハッキリと言った。

「うん!」

なのはは涙腺が緩みながらも、フエイトの手を両手で握る。

風が吹き、二人の少女の髪がなびく。

「ありがとう。なのは」

「うん」

なのはが頷く。

涙腺が更に緩む。

「君の手は温かいね。なのは」

フエイトの言葉になのはの涙腺は限界を超えていた。

両目から涙がこぼれる。

なのはは嗚咽を漏らし始めた。

フエイトが右目の涙を拭ってやる。

「少しわかったことがある。友達が泣いていると自分のことのように
自分も悲しいんだ」

「フェイトちゃん！」

なのは自身の感情に抑えがきかなくなったのか、フェイトに抱きついた。

フェイトは優しく抱きとめる。

「ありがとう、なのは。今は離れてしまっけど、きつとまた逢える。そしたらまた君の名前を呼んでもいい？」

「うん……。うん」

なのははフェイトの胸に顔を埋めながらも涙声で頷く。

「会いたくなったら、きつとまた名前を呼ぶ」

フェイトもまた涙を流していた。

なのははフェイトを見る。

「だから、なのはもわたしを呼んで。なのはが困った事があつたら今度は、わたしがなのはを助けるから」

なのははまた嗚咽を漏らした。

フェイトがなのはの嗚咽が止むまで抱きしめていた。

「よかった。これで心残りはなくなったよ」

ベンチに腰掛けていた良太郎は満足な笑みを浮かべていた。

「よかったわね。良太郎」

コハナもハンカチで涙を拭っている。

「アンタのこの子はき……。なのはは本当にいい子だねえ。フェイトがあんなに笑ってるよ……」

アルフも涙を流していた。

とうとう嗚咽を漏らしだした。

「ぐっ。うううう」

「うう……。ちよつと釣られちゃったね」

「アカン。泣ける！泣けるでえ！」

「うわああああああん！」

イマジン四体も泣いていた。

感情が豊かなのもこういう時は少々困りものだが、誰も彼等を止めようとはしなかった。

そんな光景を見ているクロノの表情も柔らかかった。

ベンチに座っていたクロノが立ち上がる。
時間が来たのだらうと良太郎は判断した。

「みんな、そろそろ時間だよ」

良太郎もベンチから立ち上がる。

なのは、ユーノとの別れが来たのだ。

「時間だ。そろそろいいか？」

クロノが声をかけるといふことは別れが来たという事だ。

フェイトは抱きしめていたなのはを離して、首を縦に振る。

「フェイトちゃん！」

なのはは髪を結んでいる桜色のリボンを解き始めた。

「思い出に出来るもの、こんなしかないんだけど……」

解いたリボンをフェイトに差し出す。

「じゃあ、わたしも……」

フェイトも髪を結んでいる黒色のリボンを解きはじめる。

解いたリボンをなのはに差し出す。

二人とも髪を下ろした状態となる。

同じ様なタイミングで互いのリボンに手を取る。

「ありがとう。なのは」

「うん。フェイトちゃん」

「きつとまた……」

「うん、きつとまた……」

二人の手が離れ、二人は思い出のものとなるリボンを入手した。

なのはの肩に先程までなかった重量が乗った。

アルフがユーノを乗せたからだ。

「ありがとう。アルフさんも元気だね」

「ああ、色々ありがとうね。なのは、ユーノ」

アルフは笑顔で答える。

「それじゃ僕も……」

「うん、クロノ君もまたね」

「ああ」

クロノも笑顔で返す。

なのはがチームデンライナーと向き合う。

「皆をありがとう。なのはちゃん」

良太郎が礼を言ってから手を振る。

「また会おうぜ。プリン用意しとけよ？」

モモタロスが今度来た時に備えてかプリンの催促までする。

「じゃあね」

ウラタロスが軽く手を上げる。

「達者でな」

キンタロスが腕組みをする。

「バイバイ。なのはちゃん！フェレット君！」

リユウタロスが別世界で出来た初めての友達に両手を振る。

「さようなら。なのはちゃん、ユーノ。色々ありがとう」

コハナがリユウタロスと同じ様に両手を振る。

魔法陣が、アースラへと向かう者達の足元に展開される。

良太郎がイマジジン四体がコハナがフェイトがなのはとユーノに手を振り続ける。

そして、海鳴市全域を包むような光が発動した。

海鳴公園には高町なのはとユーノ・スクライアだけがいた。

「なのは」

「うん！」

一人の少女と一人の少年（今は一匹だが）は前へと歩き出した。

*

アースラに戻った一同をオーナー、ナオミ、リンディ、エイミイ・リミアエツタが待ち構えていた。

「終わりましたか？」

「ええ。いつでも帰れます」

オーナーが確認をし、良太郎は即答した。

「そうですか。では先に乗っていますよ」

「良太郎ちゃん、お先にー」

「私も先に乗ってるわ。良太郎」

オーナー、ナオミ、コハナがデンライナーに乗車した。

「良太郎も帰っちゃうんだね」

「……うん。僕達もやることは終わったからね」

「……そうだよね」

フェイトは良太郎が今日、帰ることを知っている。

良太郎本人から告げられたことだからだ。

理解はしている。

良太郎は別世界でしかも十年後の未来から来た人間だという事を。本来ならば自分とこうして出会う事も不可能なのだという事もだ。

「その……良太郎。アンタには色々世話になったね」

「アルフさん、あまりその姿でドッグフードは食べないでね」

「わかったよ。極力気をつけるよ」

アルフは良太郎の忠告に半分本気に半分軽く聞いて了承した。

良太郎はフェイトに顔を向ける。

フェイトは寂しげな表情をしている。

その表情をさせているのが自分だとわかっているので心が痛い。

何と声をかけたらいいかわからない。

「良太郎、俺達は先に乗ってるぜ」

「そうだね。良太郎、お先に」

「良太郎、言いたい事を言えばいいんや」

「頑張つて！、良太郎」

モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロスが良太郎にそれぞれ言葉を送ると、アースラの隣で待機しているデンライナーに乗り込んでいく。

クロノ、リンデイ、エイミイも気を利かせたのかその場には既に姿がなかった。

今、アースラの廊下にいるのは良太郎、フェイト、アルフしかない。

「その……元気だね。あと、僕が別世界

こつち

で買ったチェスと入門書あげるよ。暇つぶしに使って」

「……うん。良太郎も元気だね」

良太郎の言葉にフェイトは頷く。

「じゃ、僕行くね」

良太郎は背を向けて、デンライナーに乗り込もうとする。だが、

背後から引つ張られるような感じがした。

後ろを見ると、上着の裾をフェイトが摘んでいるのだ。

弱弱しいが、良太郎の動きを止めるには十分な力があつた。

「フェイトちゃん？」

良太郎は何故、フェイトがこんな行動を取るのかがわからない。

「……いやだ」

フェイトは俯いて、小さくくぐもつた声で言う。手は既に裾を離していた。

背を向けていた良太郎は正面を向き、フェイトと同じ目線になるようにしやがむ。

彼女は俯いていた顔を上げて良太郎に向けた。

「行っちゃいやだ！良太郎！」

両目に涙をためて、フェイトは叫んで良太郎に抱きついた。

「フェ、フェイト!？」

主の予想外の行動にアルフは目を丸くして驚く。

「行かないで良太郎！ずっと、私と一緒にいて！」

それがフェイトの本心なのだと思われている良太郎にはすぐにわかった。

「やつと、やつとワガママを言ったね。フェイトちゃん」

良太郎は抱きついてしているフェイトを離し、優しく彼女の頭を撫でる。

フェイトが積極的にワガママを言ったのは過去に一度しかない。

それは「一緒に寝てほしい」と言った時だ。

だが、良太郎にしてみればそれは実現可能範囲なので、彼の感覚でいえばワガママの中でも可愛いほうだと思っっている。

彼の考えているワガママとはもつと理不尽なものだからだ。

だから、良太郎にしてみればこれがフェイトの一番最初のワガママ

だと思っている。

「それでいいんだよ。フェイトちゃんはもつと、ワガママを言っていないんだよ」

良太郎も両目に涙を流しながら言う。

「じゃ……じゃあ、聞いてくれるの?」

フェイトのワガママに対して良太郎の答えはというと、

「……ごめん。僕は『時の運行』を守る人間だから……。その僕が手前勝手な理由でルール違反するわけにはいかないんだ」

良太郎は首を縦ではなく、横に振った。

「……ごめん、そうだよね。じゃあ……じゃあ、抱きしめてくれる? ギュっとしてほしいんだ」

実現不可能が棄却されると、実現可能範囲のワガママを言ってみる。

「え?う、うん。わかった」

良太郎は了承してからフェイトを抱きしめた。

「良太郎、温かい。良太郎のぬくもりを感じるよ」

フェイトは抱きしめられながら感想を漏らす。

「そ、そう?人をましてや、女の子を抱きしめたのは初めてだから

……。痛くない?」

「大丈夫だよ」

良太郎の胸に顔を埋めながらフェイトは言う。

時間にして十五秒ほど経過したときだ。

良太郎は抱きしめていたフェイトを離れた。

「わたし達、二度と会えないのかな?」

「そんなことはないよ。僕の世界の時間とフェイトちゃんの世界の時間を繋ぐ橋が架かったら必ず会いに行くよ」

「それっていつなのかな?」

フェイトは『時間』の事に関しては素人同然だから質問するかたちになってしまう。

「それはわからない。一週間後かも一カ月後かもしれないし、一年後かもしれない。でも未来で会うことだけは確かだよ」

それだけは自信を持って言える事だ。

「今度会うときは未来なんだね？」

「うん」

良太郎は立ち上がり、最後にフェイトの頭を撫でる。

「じゃ、行くね」

「うん」

良太郎は背を向けてデンライナーに乗り込んだ。

デンライナーのドアが閉まり、窓を見るとアースラのドアが閉まっていく中でフェイトが手を振っているのが見えた。

デンライナーのミュージックフォーンが流れ出し、線路を敷設しながら『時の空間』へと入っていった。

*

デンライナーは『時の空間』を走っていた。

デンライナーの食堂車は静かだった。

イマジン達もコハナもナオミも仮眠室で眠っているからだ。

食堂車には現在、オーナーと良太郎しかいなかった。

オーナーはシャンパングラスを手にしていた。

良太郎はミネラルウォーターが入っているグラスを手に、オーナーと向かい合うかたちで座っていた。

「今回もお疲れ様でした。良太郎君」

「いえ、そんな……。ありがとうございます」

オーナーの感謝の言葉に良太郎は戸惑いながらも受け止める。

「良太郎君、単刀直入に聞きます。プレシア・テスタロツさんは生きていますね？あと、君はあのターミナルにもいきましたね？」

「はい」

オーナーに嘘偽りは通じないので良太郎は素直に打ち明けた。

「そうですか。プレシアさんは生きていますといつても、あのターミナルにいる以上。世間からすれば死んでいるも同然ですから『時の運行』にも影響は及びませんからねえ。それに君がああターミナルの事を口外する気がない以上、なんら問題もありませんからねえ」

オーナーはそう言いながらシャンパンを口に含んでいた。

「良太郎君。今回の事はまだ始まりでしかありません。また近いうちにあちらに行く事でしょう。それを忘れないでくださいね」

「はい。わかりました」

デンライナーはまもなく、良太郎が住んでいる時間に到着しようとしていた。

*

空間が歪み、デンライナーが線路を敷設、撤去の工程を繰り返しながら『ミルクディッパー』へと向かっていた。

デンライナーは『ミルクディッパー』の前で停車すると、ドアが開く。

良太郎が降りると、デンライナーはまた走り出し、『時の空間』の中に入ってしまった。

良太郎は『ミルクディッパー』のドアを握って開けて入る。

「ただいま。姉さん」

良太郎はカウンターでコーヒーを淹れる事に専念している姉——
—野上愛理に挨拶をした。

「おかえりい、良ちゃん。今回は長かったのねえ」

笑顔で姉は出迎えてくれた。

「おかえりい、良太郎君!!」

愛理の取り巻き、もしくは追っかけでもある二人も出迎えてくれた。

一人は三流ゴシップ記者の尾崎正義、もう一人は自称スーパーカウンセラーの三浦イツセーだ。

「ただいま。尾崎さん、三浦さん」

良太郎は二人にも挨拶を交わす。

「姉さん。手伝おうか?」

良太郎は姉の手伝いをしようと申し出る。

「ああ、嬉しいけど良ちゃん。疲れてるんじゃない?だから無理しなくてもいいわよお」

愛理は笑顔で却下した。

「わかった。じゃあ、お言葉に甘えるよ」

良太郎は姉の厚意に甘える事にして階段に上ろうとする。

「それに良ちゃん。どこか男らしくなつてなあい？」

愛理の言葉に追っかけ二人が何かを主張したのが聞こえたが、良太郎は自室に向かうため、階段に上った。

夜となり、昼に仮眠のようなかたちで眠っていたため、良太郎は目が冴えて眠れなかった。

窓越しに満月が見えた。

フェイトと出会った時も満月が輝いている夜だった。

ベッドから起き上がり、月を見る。

「会う場所は決まってるんだ」

両腕にはフェイトを抱きしめた感覚が残っていた。

小さかったが、とても華奢で温かった。

「だから必ず会える」

月を見ながら良太郎は言う。

そのとき、何故かはわからないがアースラの中にいるフェイトも同じタイミングで言ったような気がした。

「いつか、未来で」と。

後日談 「進む者達」

野上良太郎が自分が生活している世界に戻ってから数日が経過した。

現在、良太郎は河原でモモタロスと睨みあっていた。喧嘩をしているわけではない。

その証拠に良太郎もモモタロスも手にはエアースソフト（プラスチック製）の長剣が握られていた。

良太郎は正眼に長剣を構えているのに対し、モモタロスはいつもの戦闘スタイルとして長剣を右肩にもたれさせており、一見隙だらけの構えだ。

「やああああー！」

良太郎が右足を踏み込んで、同時に正眼に構えていた長剣を上段に振りかぶって、モモタロスの頭部めがけて振り下ろそうとする。

パコオンという音が河原に鳴り響く。

「遅えよ」

モモタロスが良太郎よりも速く長剣を振り下ろして良太郎の頭部に当てていた。

「あいたあ。速く振ったはずなのになあ……」

良太郎が当てられた部分を左手で覆いながら、自身の何が悪かったのかを分析しようとする。

「人間が相手なら確実に当てていたよ」

二人の今までの経過を見ていたウラタロスが良太郎の長剣を振り下ろす速度をそう評価した。

「俺等イマジンは人間よりも遥かに身体能力が高いんや。俺等と日常生活しとるだけで良太郎にとっては修行になるんやで」

エアースソフトの斧を持っているキンタロスが良太郎に落ち込む必要はないように励ます。

「ねえねえ良太郎。次は僕とダンスしようよ。僕についてこれたらモモタロスなんて簡単にやつつけられちゃうよ。それ！」

リュウタロスが今度は自分と特訓するように勧めると同時に、所持

している水鉄砲の銃口をモモタロスに向けて引き金を絞った。

「小僧お、テメエから先にやつつけてやらあ！」

モモタロスは濡れた顔を左右に素早く振って、払ってから長剣を構える。

「やーいやーい、ここまでおいでえ」

リュウタロスはモモタロスを挑発し、悪ノリしているのか尻まで叩いて煽る始末だ。

「待ちやがれえー！このハナタレ小僧おおおお!!」

二体の追いかけてつこが始まり、残された良太郎、ウラタロス、キンタロスは今後の特訓の対策について話し合う。

「ウラタロス。僕から特訓したいとはいったけど、今回は随分と本格的だね？」

「良太郎、それじゃまるで今までは僕達がおふぎけで特訓相手になつてるみたいじゃない」

真顔でそんなことを言う良太郎にウラタロスは苦笑しながら返す。

良太郎がそのように思うのも当然だ。

少なくとも、先程自分の相手をしてくれたモモタロスは本気で相手をしていたのだ。

だから、良太郎はモモタロスの振り下ろすところを捉えることができなかつた。

いつもの軽く振り下ろす程度なら高確率で防ぐ事はできたからだ。

「今回からはな。俺等が本気で相手する事が良太郎が今までよりも強くなる判断したから実戦に近いかたちにしたんや」

キンタロスは腕組みをして言う。

「それにね。良太郎には自分の今の強さを自覚してもらいたって意味も含まれているんだよ」

ウラタロスが補足した。

「?どういふこと？」

「良太郎、僕達は誰の身体に憑いて戦ってる？」

「僕」

ウラタロスの今更な質問に良太郎は即答する。

「正解。つまり僕達が良太郎の身体を使って戦うって事はだよ。良太郎の身体には僕達の戦闘スタイルが染み込んでいるんだよ」

「みんなの戦い方が？」

「実感がないのは当然だよ。良太郎は今までそれを意識した事がないからね。だから、これからはそれを意識しながら戦う特訓ってワケさ」

「良太郎は身体には恵まれとるからな。上手くいけば俺等以上に強くなれるで」

キンタロスが良太郎の肩を軽く叩く。

「恵まれているって？」

良太郎にはキンタロスの言っている意味が今ひとつ理解できていなかった。

「俺等が変わることに戦い方は変わるやろ？普通なら身体にガタがきてもおかしいで。でも、良太郎は最近ではその辺が全くといっていいほどないやろ？だから恵まれてるって言うたんや」

「なるほどお」

キンタロスに言われるまで良太郎は気づかなかった。

確かに、電王で多様にフォームを変えるということはそれだけ肉体にも負担がかかるということだ。

良太郎は変身による負担で病院に世話になったことは一度もない。

それは戦う者にとって最高の財産といってもいいだろう。

良太郎はそれを持っているということだ。

良太郎は別世界でできた仲間達のことを思い出す。

そして、オーナーが言っていた事を思い出す。

別世界にまた行く機会があるということになる。

今以上に強くなる必要はあると改めて認識する。

「ウラタロス、キンタロス。もう少し付き合ってくれる？」

「いいよ。でも手加減はしないよ？」

「よっしゃー！」

良太郎の申し出にウラタロス、キンタロスは快諾した。

モモタロスとリュウタロスが一人と二体の特訓に乱入したのはそ

れから五分後の事だった。

*

海鳴市。

高町なのはとユーノ・スクライア（フェレット）が生活している別世界の日本の街のひとつだ。

現在、なのはとユーノは桜台で魔法の練習をしていた。

ユーノはなのはの指導者であり師でもあるため、無茶な事をしないか監督する立場だ。

現在は滞りなく、広域防御魔法の詠唱が進んでいる。

二時間ほど練習したら、朝食をとって登校。

この間、実を言うトレイジングハートから『魔導師養成ギブス』なる魔力負荷となるものを、なのはは身に着けて日常生活を送っている。

ちなみに並の魔導師ならば即リタイアするくらいの強烈な負荷がかかっている。

それを纏った状態で日常生活を送れるということはなのはが魔導師としての器が計り知れないという事は言わなくてもわかることだろう。

授業を受けている中でも魔導師としての訓練は欠かしていない。

マルチタスクというスキルを活用してイメージファイトを行っている。

複数の敵をディバインシューターで蹴散らしているというようなものだと思っしてほしい。

塾や家の手伝いが無い場合は魔法の訓練に集中する。

バリアジャケットを着用して上空で魔法の実践をする。

この際、ユーノは結界を張ることになっている。

結界を張らなかった場合、桜色の光が衆人環視に目撃されるだろう。

そうなれば様々な噂が飛び交う事は必至だ。

それを防ぐための結界でもある。

それが終わると、夕食をとって宿題をする。

魔導師といってもなのははまだ小学生。

魔法の練習にかまけて本業をおろそかにするほど高町なのはは愚か者ではないのだ。

そして、夜になると高速機動の訓練をへろへろになるまで行う。

それが終わって高町なのはの一日は終わる。

ちなみになのはが休憩を取っている合間は、ユーノ・スクライア個人も鍛錬に励んでいたりする。

また、この事をプロの魔導師ともいえるクロノ・ハラオウンからすると、

「いや……さすがにそれはやりすぎじゃないのか？」

という驚きと呆れの混じった感想が出てきていた。

そのコメントにユーノは否定できなく苦笑するしかなかったりする。

それでも、様々な事に備えて、高町なのはの魔法訓練は続くのである。

*

場所は変わる。

バリアジャケット姿のフェイト・テストロツサは使い魔のアルフ（人型）とともにとある試験を受けようとしていた。

嘱託魔導師認定試験。

これに合格すると、様々な行動制限が少なくなるという。

「受験番号一番の方。氏名と出身世界をどうぞ」

アナウンサーはエイミー・リミエツタだ。

「ミッドチルダ出身。フェイト・テストロツサです！」

フェイトは出身世界及び氏名を高らかに叫んだ。

「こちらが私の使い魔のアルフです」

「よろしくー」

フェイトの紹介でアルフは敬礼をしながら自己紹介した。

その状況をモニターで女性二人が見ていた。

一人は先程アナウンスをしたエイミー・リミエツタ。

もう一人はリンディ・ハラオウンの友人であり、本試験の採点官で

あり、時空管理局提督であるレティ・ロウランだ。

「使い魔持ちのAAAクラスの魔導師か……。でも、随分とおとなしそうな子ね」

それがレティのフェイトを見た第一印象だ。

「でも、いい子ですよ。素直で真っ直ぐで」

エイミーが付け足す。

「ま、リンディの推薦ならハズレはないわね。実力の程、拝見しましょう」

レティの眼鏡がきらりと光った。

「さて、ぼちぼち始めよつか。心の準備はOK？」

「はいー」

エイミーのアナウンスにフェイトは強く返事をした。

バルディツシュをデバイスフォームにしていた。

海鳴公園で発動させていたサンダーフォールを展開していた。

それを見ているレティはというと、

「筆記試験はほぼ満点。魔法知識も戦闘関連に関しては修士生クラス。儀式魔法も天候操作に長距離転送フィールド形成と……」

フェイトのこれまでの成績と今行っている儀式魔法について採点を下していた。

「貴女が推薦するのも納得できるわね」

隣で座っているリンディに笑みを浮かべて答える。

「でしょう」

と言いながらリンディ・ハラオウンは先程から様々なスプーンを見比べていた。

「貴女、さつきから何してるの？」

レティはリンディの奇行を訊ねる。

「来るべき時に備えているのよ。今度こそは勝つわ」

リンディの台詞にレティは目を丸くした。

「貴女にもとうとう好敵手ができたのね」

「さあ、今までだっただけだと思っただけよ」

リンディはこの手のことには疎い事をレティは知っている。

「でも貴女が誰かに対してライバル意識を燃やしたのを見たのは初めてよ」

「そう?」

「ええ」

レティは友人の奇行を黙認して、自信の仕事に取り掛かることにした。

フェイトは現在、一時間の休憩を取っていた。

目の前には用意された弁当があり、対面のアルフはガツガツと食べていた。

「アルフ、そういえば最近はその姿でドッグフード食べなくなったね」「ん?まあね。良太郎にさ、口うるさく言われたからね」

アルフはそう言いながら、マンガ肉（肉に骨が突き刺さっているやつ）を頬張っている。

「良太郎。元気してるかな」

「アイツの事だからさ、仲間のイメージと一緒に『時の運行』つてのを守ってるんじゃないのかい?」

「そうだね」

フェイトは良太郎のことを思い出しながら笑みを浮かべる。

「ところで、試験を受けることにしたのはさ、なのはや良太郎の影響?」

「うん。なのははビデオレターで送られるたびに頑張っているって言ってるから、わたしも負けられないようにと思ってるね」

「なるほどねえ」

アルフはなのはがフェイトにとってよい刺激を与えてくれる相手だとして、感謝していた。

フェイトは立ち上がる。

「それに、次に良太郎に会うまでにさ。色々と挑戦してみたいんだ」フェイトは内に秘めた事を口に出した。

「OK。なら、アタシはとことんそれに付き合うさ」

アルフも立ち上がり、フェイトの右肩に手を置いた。

休憩が終わり、レティ・ロウランは業務に取り掛かることにした。

次は実戦訓練である。

「それじゃ、頼むわね」

「了解」

レテイの指示で試験管であるクロノ・ハラオウンはフェイト達のいる場に転送された。

クロノを見送った後、レテイはリンディと先程の話を続きをする。

話の内容はフェイトの身の上とアースラが関わった別世界の住人についてだ。

「ああ……、この子が『P・T事件』の重要参考人であり、『電王』の最初の遭遇者なのね」

モニターではフェイトとクロノが試験を始めていた。

「そう、色々あつてね」

「裁判中の嘱託試験は異例なんだけど、嘱託資格があると本局での行動制限が今までよりはるかにすくなくなるしね。それに本人達も局の業務には前向きだしね」

「なるほどね。まあ優秀な人材なら過去や出自に文句はないわ。大切なのは現在の意志と能力だもの。それで『電王』は貴女からしてどうなの?」

レテイは電王に関する情報は口コミ程度にしか伝わっていない。情報となるデータは全て抹消されているからだ。

「この『時間』の住人なら、スカウトしたでしょうね」

「貴女の言い方だとまるで別の『時間』から来た存在みたいじゃない」「そうね。私達がいるこの『時間』の十年後、しかも別世界から来ているのよ」

モニターにはクロノがスティングァースナイプを放つと、フェイトがフォトンランサーで迎撃しているところが映っていた。

「スカウトのしようがないわね。それじゃ。それにしても『時の列車』か。ロストロギア相当ね」

「使い手の人格は保証できるわ」

「貴女が言うのだから間違いはないのでしょうけど、それで納得しない連中はいるわよ」

レテイが言うのも尤もだ。

時空管理局はリンデイのような融通の利くような輩ばかりではない。

どちらかというと、頭の固い連中も多いくらいだろう。

フェイトがサンダースマツシャーを放つと、クロノがブレイズキャノンで迎撃し、打ち消しあうと同時に爆煙が立つ。

煙が晴れると、フェイトがクロノの死角に回り込んでバルディッシュをサイズフォームにして斬りかかろうとしているところが映っていた。

「勝負ありね」

レテイは勝者が誰なのかわかった。

フェイトがバインドで縛られ、クロノがS2Uを突きつけていたのだ。

「クロノ君。ちょっと苦戦してたわね」

「本気モード入ってましたしね」

レテイにはクロノが本気を出していた事を見抜かれてしまい、エイミイは苦笑していた。

フェイトが座り込んで、落ち込んでいる所をアルフが励まそうとし、クロノが何かを言ったのが映っていた。

フェイトが立ち上がり、またやる気を出していた。

「なに……うっかり屋さん？」

「少しね」

微笑ましい光景なのかレテイは笑みを浮かべながらリンデイに訊ねると、リンデイも笑みを浮かべて答えた。

それから様々な項目があったが、嘱託魔導師試験は終了した。

合否の判定が後日ではなく、当日に行われるのは受験生としては嬉しいのか悲しいのかわからない。

違いとするならば真綿で首を絞められるか即座に首を切り落とされるかの違いだろう。

「魔法技術も使い魔との連携もほぼ完璧。戦闘も攻撃に傾倒しすぎだけど、まあ合格点。嘱託魔導師としては申し分ないかな。うっかり屋

さんは今後気をつけてもらうとして……」

採点官は受験生にこう下した。

「おめでどうフェイトさん。これをもってAAAランク嘱託魔導師認定されました。認定証の交付のときに面接があるから、それだけは忘れないように」

試験会場でフェイトアルフが手を取り合って小躍りしていた。

「はい！ありがとうございますー！」

フェイトはレテイから合格と認められ、喜びの感情を表に出していた。

アルフも我がごとのようにして喜んでいる。

（なのは、良太郎。わたし、やったよ！少しずつ本当の自分を始めているからね。今度会うときは二人に胸を張れるくらいに、これからも頑張るよ！）

フェイト・テストアロッサの未来はこれから始まるのだった。